

日本美術年鑑

昭和十九・二十・二十一年版

國立博物館

## 序

昭和十一年以來逐次編纂刊行せる日本美術年鑑は、茲に第九冊を世に公にする運びに至つた。日本美術年鑑は美術研究所が計画し又従事しつつある美術に関する諸般の調査研究事業の一部をなすものであつて、從來美術研究所が編纂、出版のすべてを行つて來たが、昭和二十二年國立博物館創立に際し美術研究所もその一翼を担うこととなり、その調査、編纂は美術研究所がこれに当り、出版については國立博物館事業課が担当することとなつた。年鑑の使命として毎歳一冊を刊行すべきであるが、戰中、戰後諸般の調査は困難を伴い、就中便覽に收載した美術家團體、人名簿に就ては根本的に改めざるを得ず、ために上梓の遅延を見、且つ此の間は本欄に記録すべき内容も尠きため、本冊に於ては昭和十八年、十九年、二十年の三年を合せ編輯して刊行する処置を採つたことを諒とせられたい。

本年鑑の編纂に當り、多数貴重なる資料、写真を寄贈或は貸與されて懇篤なる協力を與えられた文部省社会教育局其他の諸官廳、旧帝室及び公私の諸博物館、美術館、学校、公私の研究諸機關、團體、新聞社、雜誌社、學者及び美術家諸家等に対し、茲に深甚なる謝意を表する。

本年鑑の調査、編纂執筆に就ては、主として技官隈元謙次郎、同河北倫明、同岡畏三郎をしてこれに當らしめた。

終に臨み本年鑑中前述の便覽等のもとより、其他の記事に於ても、誤謬、不備等に就ては切に江湖諸彦の叱正と示教を惜まれざらんことを切に仰望し、次年度以後の改善を期する次第である。

昭和二十四年三月

國立博物館附屬美術研究所長代理

福 山 敏 男



# 凡 例

一、この年鑑は「本欄」「插图」および「附録」の三部に大別される。「本欄」は、わが國美術界の全般について、昭和十八年一月から昭和二十年十二月に至る三ヶ年間に現れた主な出来事、公開された展覧会、発表された文献等を記録し、「插图」はこれに添う注目すべき作品の写真を主として掲載した。「附録」は便覧として美術に關する主要な法規、官公私施設の重要なもの、美術家団体一覽、美術家及美術關係者名簿等を輯録した。

二、この年鑑で取りあつかう美術の範圍は、一般に行われる狹義の解釈にしたがい、繪画、彫刻、工藝、および建築に限つてゐる。繪画のうち日本画と洋画の区別は困難な場合もあるが、大体普通の慣習にしたがつた。建築の範圍については一そう問題が多いが、ここではわれわれの注意を惹く範圍にとどめた。

三、人名を記す場合にはすべて敬称を省いた。

四、明治以後に活躍した作家の遺作展や回顧展、および外國美術の展覧会は便宜上現代美術展覧会の項目中にふくめた。

五、展覧会の批評は、これも當時の一記録であるという観点から、主として諸新聞に

現れた記事を選択借用した。

六、美術教育の欄では、普通教育中の図画教育については特別の場合の他は扱わぬこととし、専門の美術教育だけに限つた。

七、國寶略説の欄では美術關係の國寶だけを對象とした。

八、附録は昭和二十年末の記録たることを原則とするが、使用の便をはかり、できるだけ新しい記録と消息に従うように努めた。

九、美術文献目録、および美術家及美術關係者名簿についてはそれぞれその項の初めに凡例を記した。

十、この年鑑の資料蒐集並に編纂は、國立博物館附屬美術研究所がこれに當つた。

# 目次

序	一
凡例	二
目次	三

## 本欄

美術界彙報	一
-------	---

昭和十八年度	一
昭和十九年度	三
昭和二十年度	四
現代美術展覽會	六

昭和十八年度	六
昭和十九年度	六〇
昭和二十年度	八〇
物故作家及美術關係者	八二

昭和十八年度	八二
昭和十九年度	九〇
昭和二十年度	九七
美術行政・教育	一〇五
美術講演・講義	一〇九

目次

古美術關係彙報	二五
---------	----

附 國寶及重要美術品等罹災品目錄	二八
------------------	----

古美術展覽會	二三
--------	----

博物館新收品	二七
--------	----

古美術保存	三二
-------	----

自 昭和十八年至昭和二十年指定國寶目錄	三二
---------------------	----

國寶建造物修理補助金交付額一覽	三八
-----------------	----

同 認定重要美術品等目錄	三九
--------------	----

同 指定國寶略說	四五
----------	----

國寶建造物指定棟數調	五七
------------	----

史蹟名勝天然紀念物指定件數調	五七
----------------	----

國寶指定種別件數表	五八
-----------	----

重要美術品等認定種別件數表	五九
---------------	----

美術文獻目錄	六一
--------	----

凡 例・目 次	六一
---------	----

定期刊行物所載文獻	六三
-----------	----

現代美術關係	六三
--------	----

古美術關係	七八
-------	----

目次

西洋美術關係	一八
單行圖書	一三
現代美術關係	一三
古美術關係	一四
西洋美術關係	一六

附錄

美術行政機關	一
--------	---

國寶保存會	一
重要美術品等調查委員會	四
史蹟名勝天然紀念物調查會	五
帝室技藝員	六
日本藝術院	七
文部省美術展覽會	八
國立博物館	九
文部省社會教育局文化課及藝術課	一三
美術研究施設	一三

國立博物館附屬美術研究所	一三
東洋文化研究所	一三
東方文化研究所	一三
工藝指導所	一三
陶磁器試驗所	一四
美術教育施設	一五

美術學校及研究所	一五
美術觀覽施設	一八
美術家團休一覽	二三
美術商一覽	三四
美術家及美術關係者名簿	四五
美術關係定期刊行物一覽	七四



昭和十八年度

一月

# 大日本工藝會創設

技術保存を要する工藝品の生産、販賣、輸出の時局に即した綜合指導を行ひ亦一般工藝の健全な發展を図るため、商工省の指示により大日本工藝會が創設された。役員は会長吉野信次、一般委員長椎名悦三郎、理事長長國井喜太郎、理事十名が決定した。

# 帝國藝術院會員獻納運動

二十六日帝國ホテルで清水院長始め、帝國藝術院美術部の横山大綱、川合玉堂等三十余名大政翼賛會から後藤事務總長、高橋文化部長出席、時局に関する意見を交換し、日本畫會員は三尺幅各自五點、他は點數隨意で年内に完成建體に獻納を決定。

# 日本畫家報國會の獻納運動

藝術院會員の獻納計画に歩調を合せ日本畫家報國會々員百九十名は各自一點宛を制作し、展覽會を開き賣上金全部を建體資金に當てる事になった。

# 朝日文化賞贈呈式舉行

二十九日朝日新聞東京本社賞賓室に於て十七年度朝日文化賞贈呈式が舉行された。美術部門は藤田嗣治「シシガポール最後の日」其他、中村研一「コタバル」の作戦記録画が選ばれた。尙同日午後六時より日比谷公會堂に於て記念講演會が催された。

二月

美術界彙報

# 獻納運動京都作家協力

一日京都ホテルに於て高橋翼賛會文化部長、菊池契月西山翠嶂、上村松園、清水六兵衛等出席して東京側の建體運動協議結果にもつきこれに協力する事に決定した。

# 早苗會解散

京都画壇の大塾早苗會は會長川村曼舟の逝去により存続如何を検討の處、創始者故山元春泰家より解散希望の申出があり師家の意見を重んじ五日同塾物故者追悼會を執行、故山元春泰の墓に詣で解散した。

# 畫家青年隊結成

陸軍美術協會では陸軍報道部と連絡を執り、中堅洋画家を以つて「畫家青年隊」を組織、平時から兵隊と同じ生活をして現地陸軍の活躍状況を描写する事となった。

# 水彩画推廣記録賞

藝術文化協會の甲斐推一は私財を投じて昨年度から水彩画の記録的優秀作に授賞し斯道の奨励に努めたが、その賞は飯島八郎、渡辺文雄、桂竜雄、石川菊壽、山本不二夫、石川新一、牛島弘、藤田薫、三橋兄弟治、長沢昇、山中仁太郎、小原博司、漆畑廣作、柏原文雄に授けられた。

# 昭和洋畫獎勵賞決定

昨年度昭和洋画奨励賞受賞者は田村一男、近岡善次郎に決定した。

# 女流美術家公隊結成

國画會、文展、二科會等各國体の會友以上の女流画家約五十名によつて女流美術家公隊が組織され、二十五日赤坂三會堂東洋軒で発會式を舉行した。理事長に長谷川春子、役員

に谷口仙花、藤川榮子、三岸節子が就任した。

三月

# 耕人社創立

早苗會解散後同會に代る新團體耕人社が結成され一日平安神宮で結成式が舉行された。役員は理事長に案本一洋、理事に武田鼓葉、中野草雲、三宅風白、參事に林文雄、玉合春輝が就任した。

# 國土會結成

健全な日本美術の創造を目指して國土會が結成され、その研究作品を以て今夏第一回同人會展を開催することになった。同人は川崎小虎、加藤栄三、山本丘人、山田申吾、小堀安雄、東山魁夷である。

# 浮世繪研究会結成

近時日本古美術の價值昂揚を乱すが如き美術品の横行を憂い島田筑波、吉田咲二、金子宇水等は「浮世繪研究会」を結成して正しい美術の研究、價值宣揚を図ることとなった。

# 美術團體一元化の進發

全日本彫塑家連盟では美術團體一元化を目指し、本郷新、藤野舜正、鈴木賢二の三名を連絡員として日本画、油繪、工藝の各團體と交渉中、日本画、油繪關係との諒解成り、二十日の彫塑家連盟委員會で美術報國會の成すべき仕事を討議、彫塑部の幹事六名を決定した。

# 藝・技に係る資格認定標準決定

大日本工藝會一般委員會では、我が國産業文化上傳統的な技術保存の必要あるものを厳選し、同會の許可を受けた作家のみ禁止資材の配給を受け「藝」又は「技」の証紙を印して製品を販賣することとし

四月

# 國畫院解散

國畫院は松岡映丘の逝去により同院同人は故映丘の遺作展、遺作回集刊行等、門弟として爲すべきことを一應終つたので此處に同院を解散した。

# 玄潮社結成

結城葉明を顧問におし小泉勝爾、井上白楊、岩田秀雄、石井了介等有志二十名は玄潮社を結成した。

# 芳崖作「悲母觀音」の模寫

狩野芳崖の名作「悲母觀音」の模寫が東京市記念事業部の手で行われることになり、芳崖門下の高島肯哲がこれに當ることとなった。

五月

# 日本美術報國會創立

大政翼賛會文化部では文部省と情報局との協力のもとに全日本美術作家を一元とする社團法人日本美術報國會を創立し、その創立總會を十八日發起人二百八十余名參集のもとに開いた。横山大綱會長に就任と共に各部の部會長、幹事長を次の如く決定した。第一部(日本画)野田九浦、山口蓬春、第二部(油繪)辻永、木村莊八、第三部(彫塑)石井鶴三、加藤顯清、第四部(工藝)高村豊周、山崎寛太郎。この部會長、幹事長は何れも理事となるが、このほか理事には藝術院會員の各部から一名づつが就任した。

# 日本美術及び工藝統制協會創立

日本美術報國會との表裏一体の關係に於て美術及び美術工藝の綜合的指導統制を企圖し、大日本工藝會を改組すると共に日本

画資材統制協会、美術家連盟、全日本彫塑家連盟及び工藝美術作家協会を統合し、社団法人日本美術及工藝統制協会が創立され、その創立総会が十八日挙行された。会長に吉野信次就任し、次の如く理事長以下が決定した。理事長兄玉希望、理事、第一部(日本画)山口蓬春、兄玉希望、第二部(油繪)辻永、木村莊八、第三部(彫塑)加藤顯清、石井鶴三、第四部(工藝美術)高村豊周、山崎覺太郎、第五部(産業工藝)日野厚、中村忠充、國井喜太郎。その主なる事業は、(一)保存すべき美術の製作者、技術者の資格認定、(二)繪具カンバスなど美術工藝品の材料の配給統制、(三)保存すべき工藝品の検査、格付及び販賣價格丸藝の決定、(四)生活必需品の美術的改善、規格の統一、選定等。

**日本版画公會結成** 日本版畫の傳統維持と版畫藝術を戦力化する爲全日本版畫家を結集する日本版畫公會が結成され、漫筆繪ととも日本美術報國會第五部を組織した。

**新油繪協會創立** 藝術上の立場を異にする爲縁甚会から會員五名会友三名退会し他の同志と共に新油繪協會を創立した。

**新興美術院の分裂** 新院派と称して日本美術院を脱退した院友等によつて作られた新興美術院は、思想的見解の不一致を見、茨木杢風、田中案山子、小林巢居は離脱するに至つた。

## 六月

漫画泰公會の發足 漫画家の一大集團

として「日本漫画泰公會」が成立し會長に北沢樂天が就任した。

**画・彫塑界二十五氏前線派遣** 海軍では今回、画壇及び彫塑界の二十五名を現地に派遣記録画及び彫塑の製作を依頼、十一月末迄に作品を完成することになった。

**佛印と美術交換** 日佛印間の文化提携が進められ、古美術の交換では我が國から鎌倉時代の「阿彌陀如来立像」等五十余点の日本美術に應え、佛印からはアンコールワットの粹といわれる「三佛像」外七十七点が我が國へ招來されることになった。又佛印現代作家の作品二十四点が日本橋三越で展覧された。

**神興會創立** 皇國の道に立脚し爽快なる美術を創意するを目的とし岡田華郷らにより「神興會」を創立した。

**藤島武二追悼會** 東京美術学校では故教授藤島武二の追悼會を二十六日開催し同時に二十六、八、九の三日間同校陳列館に於て遺作展を行った。

**皇太子殿下御誕生記念日本近代美術館敷地御貸下げ** 皇太子殿下御誕生記念日本近代美術館の敷地につき宮内省より赤坂離宮前記念公園として臨時に市で委託管理している約四千坪の地を貸下げの内意を拜した。同美術館は建坪二千坪地下二階を持つ近代日本式建築とする予定。

## 七月

**無所屬日本画家聯合結成** 各美術家團體の活躍しつつある時菅椿彦、尾竹國親、古城江綱、生田花朝等の無所屬作家が、國家有爲の企画に参劃し又各個の連絡統

一の機關とする爲無所屬日本画家連合を結成した。

**全日本彫塑家聯盟解散** 全日本彫塑家連盟は時局に鑑み發展の解散をなし、文化面は日本美術報國會、資材面は日本美術及工藝統制協會として再発足した。

**産業工藝懇話會創立** 大日本工藝會を發展解消して成つた日本美術及工藝統制協會では我が國産業工藝の技術傳承を目的として全國の産業工藝各分野の人々を集めて産業工藝懇話會を創立した。

## 八月

**特殊回收銅物件審査委員會設置** 戦争必需物資の金屬資源の動員の爲回收すべき物件を調査審議する爲商工省内に特殊回收銅物件審査委員會が設置された。

**日本風景画院創立** 近代の唯物無神の藝術思潮を排し、日本美術の振興を期する爲河口樂土を主宰に日本風景画院が創立された。

**竹内栖鳳一周忌法要** 故竹内栖鳳夫妻の一周忌法要が栖鳳の命日に當る廿三日黒谷本房に於て行われた。

**國民藝術研究所解散** 昭和十二年川路柳虹の創立した國民藝術研究所は此の程使命を達成し解散した。

**興國美術院結成** 彫刻並びに邦畫の研究を目的として赤堀信平、渡辺光徳等と同人とする興國美術院が結成された。

## 九月

**美術の文化使節泰國へ** 泰國では文化使節團を我が國に派遣することになったので我が國からは鷹司信輔を團長として

我が國藝術界の一流人で組織した使節を送らうと國際文化振興會が交渉中。又建築、美術方面の交換教授團の派遣も計画検討されている。

**新生美術協會結成** 欧米的技術法の輸入等により乱された美術に自己批判を加え美術精神、並びに技術の鍊磨を目的として西本白鳥により新生美術協會が結成された。

**長野縣工藝美術協會結成** 長野縣縣廳商工課内に同縣在住及び出身の工藝、美術、輸出向美術生産業各家により組織され工藝美術の進歩發達を図る「長野縣工藝美術協會」が結成した。

**會澤美術人會結成** 會津出身の美術人は此の度、郷土文化引いては日本文化に貢獻せんとの意氣で「會津美術人會」を結成した。

## 十月

**日本漆藝院解散** 昭和十一年に創立された日本漆藝院は今回美術及び工藝統制協會が設立され、漆藝部もその第四部に包括されることとなり総てその運営は同協會四部に於て実行されることになったので新時局に即應する爲解散した。

**佛教美術協會設立** 佛教美術の信仰的製作や佛師の指導共榮圖各地の佛画像復興につとめる目的で佛教美術協會が設立され、顧問に日本畫部安田毅彦、小林古徑、中村岳陵、荒井寛方、太田聰雨他二十余名委嘱した。

**美術雜誌の統合** 昭和十六年七月統制により第一次統合を遂げて発刊されつつあつた國画、新美術、生活美術、日本美



術、旬刊美術新報、美術文化新聞の八誌は情報局の指示により十月中発行にかかると雑誌を最後として廃刊することになり十九年一月号を創刊号として日本美術出版株式会社より専門、一般兩種の雑誌を発行することとなつた。

## 十二月

**海軍記録画天覽並びに台覽** 天皇、皇后陛下には五日宮中千種の間及び豊明殿に於て海軍記録画二十点（日本画八点油絵十一点）を親しく天覽並びに台覽あらせられた。

**第三回野間賞授賞式** 野間奉公会昭和十八年度野間賞授賞式は十七日小石川区番羽町大日本雄弁会講談社講堂に於て挙行された。（美術賞）竜村平蔵（美術奨励賞）曾宮一、沢宏嗣、建昌寛造（挿絵奨励賞）樺島勝一であつた。

## 昭和十九年度

戦局のすすむにつれて國內の戦時体制は次第にきびしくなり、美術界も殆ど戦争を中心として動いた観があつた。戦争の記録画や南方の風物画が展覧会の主流となり、工場や農村の写生画がこれにつき、その外では歴史画の傾向がいちじるしく目立つた。これとともに各種の献画運動、軍人や産業人に対する慰問援護運動が活潑であつた。恒例の秋の美術シーズンも本年は院展、二科、一水会と由緒ある展覧会がいづれも停止し、情報局から「美術展覧会取扱要綱」が発表されて、美術報国会主催共催以外の一般展覧会は

情報局の承認を要することとなり、二科会をはじめ解散する団体も多かつた。年末になると空襲も頻繁となつて自然美術界も不活動の状態に陥り、文展も本年は休止して「戦時特別展」がこれに代つて開催された。

**京都の美術家勸業隊結成** 京都日本画家連盟では一月七日平安神宮で勸業報國隊の結成式をあげ、つづいて陶藝、染織、漆藝、金工等の工藝作家百名も翌八日平安神宮に集つて美術作家勸業報國隊を結成した。

**朝日文化賞贈呈式** 昭和十八年度の朝日文化賞受賞者は一月十一日決定発表されたが、同賞贈呈式が二十五日朝日新聞東京本社貴賓室で行われた。美術部門では戦争記録画に優秀な技倆を発揮した二科会宮本三郎が賞をうけ、当日午後には兒島東大教授等の來賓から各受賞者の功績を讃える記念講演会がされた。

**有栖川宮記念學術獎勵金受領者決定** 有栖川宮の祭祀を継がせられる高松宮殿下には例年學術振興等の思召から有栖川宮記念學術獎勵金ならびに同厚生資金を下賜あらせられるが、一月十五日本年度一学期的受領者が発表された。學術奨励金を受けた一人として前年度から引つづきの立正大講師逸見梅榮がある。研究題目は「滿州國及び北支那における佛教禮拜像の圖像学的研究」。

**美統内に傳統工藝部設置** 日本美術及工藝統制会では工藝部の外に新に傳統工藝部を設置、美術工藝の國家公用性を強調し古代工藝の復原等を行うこととなり、学界美術界より代表的な權威四十七

名に委嘱して一月二十一日初の委員会を催した。

**美術資材供給者の査定** 日本美術及工藝統制会では美術各部門の資材配給に關し受給者の査定制を断行することになつてしたが、一月二十六日石農農商次官を委員長とする各部査定委員、および査定を要せずして甲種受給者の資材を與えられた作家一〇二〇名の氏名を発表した。その内訳は日本画二九五名、油絵四九四名、彫塑八九名、工藝一四二名で産業工藝だけは全部査定を経ることに決定した。但しこの決定は年々更新される。

**藝術院會員の献納作品展** 戦艦献納の運動は各界に拡がっていたが、帝國藝術院會員の献納作品展が二月一日から一ヶ月間帝國博物館美術館で催されることになり、横山大観の九点をはじめ各會員の力作が一堂に集つた。

**戦争画の天然色幻燈展** 美術報国会では三月十日の陸軍記念日の特別行事として、油絵の大家中堅十一名を煩わして特に制作した戦争画を光村天然色写真研究所において幻燈板に作成、これを関東関西の一流映画館で一齊に封切り上映した。

**軍需生産美術推進隊の結成** 軍需生産の増強を美術で推進させようと油絵画家二八名、日本画家二名、彫塑家一四名、漫画家三名計四七名が軍需生産美術推進隊をつくり、四月八日軍需省で結成式を行つた。

**林重義告別追悼會** 四月十六日國画会では去月十六日逝去した會員林重義の告別追悼會を都美術館の國画会展覧会場で

執行した。

**海軍記念日の幻燈展** 美術報国会では海軍記念日にも天然色幻燈で記録画展を催した。一流作家による海軍記録画を再び光村天然色写真研究所で幻燈板に掲げたもので、東寶系映画館で上映された。

**新京美術院の催** 新京美術院は日本美術文化の紹介のため昨年青電社員の日本画制作を満州に紹介したが、第二回として現代日本油絵技術の趨勢を紹介することになり、和田英作、藤田嗣治等二十數名に依頼した新作を送り、七月から新京哈爾濱で展示會を催した後、関東軍に納めることとなつた。なお同院は四月初旬第三回留日研究生の成績展示會を催し、それらの作品も満州に送つて七月から新京、哈爾濱、奉天、大連の諸都市を巡回展示することになった。

小室翠雲、金山平三、中沢弘光、梅原竜三郎、安井曾太郎、南薫造、朝倉文夫、平福田中。

**再び藝術院會員の献納展** さきに催された戦艦献納展に對して今度は陸軍献納美術展が、七月十五日から月末までやはり表慶館で開催され、再び會員の力作が顔を並べることになった。

**竹内栖鳳三周忌** 栖鳳逝いて三年竹内家では八月二十三日の命日に三周忌を執行、遺族をはじめ竹枝会の人など、門人知人が打ちそろつて法要が営まれ、巨匠の足跡を偲びあつた。

**美報の課題制作** 美術報国会では課題制作による展覧会の開催を議決していたが、その瀬踏みというべき十月同会主催の軍人援護美術展でこの方法を実行する

ことになった。課題は「軍人授護」で、一定数の美術家に出品を依頼する。

**各展覧會の中止** 「美術展覧會取扱要綱」に従つて一般公募展は開催されず、院展、二科展、一水會、新制作派など秋の定期的な展覧會はすべて中止されることとなった。

**二科會解消** 「美術展覧會取扱要綱」の決定発表によつて美報以外の在野美術團體は有名無実の状態となつたが、三十年の傳統をもつ二科會も十月六日幹部會を開いて、熊谷守一、正宗得三郎、宮本三郎、向井潤吉、東郷青児、田村孝之介、栗原信、渡辺義知等の評議員が集り、各團體に率先して解消することを決議、その旨を聲明書を発表した。

**旺玄社も解散** 二科會の解消聲明に引きつづき牧野虎雄の主宰する旺玄社も十二年の歴史を一擲し、十月七日解散の聲明書を発表した。

**彫塑四團體の解散** 彫塑界の中堅を網羅する日本彫刻家協會、日本木彫家協會、直土會、ならびに構造社の四團體も十月九日解散を聲明、雨田光平、沢田晴廣、安田周三郎、野村公雄の四名が各團體を代表して情報局に解散届を提出した。

**新構造社解散** 美術在野團體は二科をはじめ解散続出、解散せざるものも活動停止の状態となつたが、十一月六日には新構造社も解散、美報の一元化に協力することになった。

## 昭和二十年度

昭和二十年に入り空襲はいよいよ激化し戦争も最後の段階に至つて、美術界の動きは殆ど停止状態となつた。大部分の作家は勤勞動員により、また罹災、疎開などにより活動を妨げられ、資材不足も頂点に達してまゝつた制作等は全く不可能となつた。僅かに年頭、美術推進隊主催の軍需生産美術展の開催をみた位で、展覧會も殆ど開かれず、ことに工藝品等は有閑品として省みられなかつた。また資材の封鎖により彫刻、建築等の分野も何ら注目すべきものがなかつた。

八月十五日終戦以後事態は一変したが、一般に精神的な低迷はまぬがれず、本年中には徐々に活動の萌しが見えてきたにすぎない。連合軍の進駐後まもなく美術報國會が解散となつて統制から解放され、文部省による新しい官展の立案、旧二科會の復活、行動美術協會の結成などが見られたが、いずれも具体的活動は翌年廻しとなり、僅かに小規模の展覧會が二三開かれたばかりであつた。

**講書始の御儀に瀧博士御進講** 恒例の講書始の御儀は一月十八日午前十時から天皇、皇后兩陛下出御、御儀の間において行われられたが、國書進講者の一人として東大名譽教授文学博士瀧精一が奉げられ、「僧空海の國論と藝術」と、いう題目で三十分間御進講申しあげた。

**在版画家の義勇隊** 在版著名画家七十余名は二月大阪府男子勤勞義勇隊の画人分隊を結成したが、直に太陽製作所で勤

勞活動に入つた。

**戦争記録画天覽** 天皇、皇后兩陛下は四月八日宮中豊明殿並びに千種の間において、戦争記録画を御覽になつた。記録画は日本画三点、油絵二十点で、陸軍省の依頼をうけた陸軍美術協會の二十余名の作家が現地を調査、また提供された明確な資料に基いて作面したものである。なおこの記録画は十一日から四月一杯都美術館で展示された。

**海軍軍需美術研究所設置** 舞鶴海軍軍需部の指定によつて京都画壇の作家三十余名を動員、海軍軍需美術研究所が設置され、四月十日洛西の某國民学校で発会式が行われた。

**日伊協會懸賞論文當選決定** 日伊協會ではさきに設定されていたレオナルド・ダ・ヴィンチ賞懸賞論文のかわりとして「日伊協會懸賞論文」を募集したが、四月十日三論文を選定授賞することになつた。一等に選ばれたものに「伊太利の塔」佐原六郎（慶應義塾高等部主任）がある。

**ボツダム宣言受諾** 昭和十六年十二月八日開始された戦争は八月十五日戦争終結に関する詔書の玉音放送によつて終りを告げ、ボツダム宣言受諾による日本の無條件降伏は内外に開明された。

**降伏文書調印** 八月二十八日はじめて連合軍は神奈川縣厚木飛行場に空輸着陸これを皮きりに完全な無血占領が行われ、第一次進駐の完了をまつて、九月二日東京灣上のミゾリー号上でマッカーサー元帥以下連合國代表と帝國代表との間に降伏條件に対する正式調印が行われ

た。以後日本は正式に連合軍の占領管理下に入る事となつた。

**文部省美術展復活** 文部省では昭和十八年を最後として中止していた文展を復活、來春約一ヶ月の会期で開催することとなり、九月十七日文部省並びに帝國藝術院の懇談會が開かれた。満場一致開催の希望で、今秋開催の案も出たが、資材その他の都合で來春と決つた。

**民間の刀劍所持嚴禁** 民間で所持する刀劍類の処置について、内務省では連合國軍の一般武器引渡準備命令に基き、九月十九日民間所持の刀劍類はすべて個人所有を嚴禁し、最寄りの警察署に登録の上保管させることに決定、同日地方長官あてこの旨の通牒を出した。但し美術骨董品として價值ある刀劍は保管について常に入念の手入れを要し、少からざる手数がかるため、警察署で保管するのは各種の支障があり、一應所持者に嚴重保管させることとなつた。

**美術改組** 戦争中美術工藝の保存と工藝家への資材配給に活躍した日本美術及工藝統制協會は、今までの統制的な性格を一擲して社團法人美術振興會と改称、國內的な振興をはかるとともに、對外的な輸出振興にのりだすことになつた。

**帝室博物館接收の噂** ニューヨーク・タイムス九月二十八日によれば、重慶の支那文化資産保護委員會は滿洲事變以來日本側に掠奪破壊された中國の貴重な美術品を追究し、かつ賠償を求めめるために、代表團の東京派遣を準備中であり、また同委員會はマックアースー元帥に対

して帝室博物館の接收を要請した、と報ぜられた。

**日本アメリカ文化協會創立** 全國大學教授連盟ではかつてアメリカに在留したことのある全國大學教授によびかけ「日本アメリカ文化協會」(J・A・C・A)を設立、九月三十日日本大學本部で創立總會を開いた。

**美報解散** 大日本美術報國會では十月四日理事會を開催、會長横山大綱をはじめ石井柏亭、同鶴三、高村豊周、加藤顯清、辻永、野田九浦、齋藤素殿、平櫛田中、兒玉希望等の各理事、文部省大丸文化課長、下田情報局第二部第三課長等の関係者が出席、美術界の官製團體としての性格を取りはらい、自主的活動に入るため、昭和十八年以來の報國會を解散することに決定した。

**新日本美術會發會** 國際的に平和日本を顯揚しようと十月二十八日市川市の中村勝五郎邸で新日本美術會が発會式を挙げた。會員は帝室技藝員や藝術院會員や一般の新人三十数名を平等の資格でふくみ、すべて合議制の運営でゆくという。

**二科會再出發** 戦時中解散した二科の在京旧會員東郷青兒、渡辺義知、高岡徳太郎等が中心となり、疎開中の會員とも連絡して、ふたたび二科會が結成された。今までのような會員中の段階制を止めて、審査には全員があたることとし、工藝部等を新設、面目を一新することになった。

**行動美術協會結成** 旧二科系の向井潤吉、小出卓二、伊谷賢藏、柏原寛太郎、榎倉省吾、田中忠雄、高井貞二などを同

人とし、農山村や工場における活動を目ざして十一月行動美術協會が結成された。

**京都工藝指導所生る** 上京区元誓願寺智恩院の社團法人日本美術及工藝會京都支部に工藝指導所京都支部を設置、十二月七日開所式が行われた。

**米國へ渡る戦争畫** 戦時中戦線へ動員された美術家によつて多くの戦争畫の力作が作られたが、これらの記録畫は陸海軍あわせて百余点に及び、美術的にも價値高いものがあるので、連合軍總司令部ではこの種の作品を上野美術館にあつめ、優秀作品のみをアメリカに運び、各地で展覧する計画が立てられ、藤田嗣治がその説明のため正式の囑託をうけた。



現代美術展覽會

昭和十八年度

一月

文展油繪特選級新進作家展 (洋) 一

日一十日 丸の内・帝國画廊

橋本平八遺作鑑賞展 (彫) 四日一八

日大阪・天賞堂

第一回旺玄會展 (洋) 八日一十二日

銀座・青樹社

現代美術名作展 (綜合) 十日一二十

五日 大札記念京都美術館

大朝一出版は日本画で関雪の「長恨歌」

曼舟の「霧水」春華の「山上樂園」など

九十点、洋画で鹿子木孟郎の「新夫人」

中村研一の「瀬戸内海」など五十四点、

彫刻で石本義廣の「默雷禪師」など二十

三点、工藝では清水六兵衛の花瓶など三

十五点、合計二百二点である。

獨立美術協會小品展 (洋) 十二日一

十四日 岡山・金剛社

第一回斗南會洋画展 (洋) 十二日一

十七日 上野・松坂屋

第九回野末真次油繪展 (洋) 十三日

一十八日 銀座・菊屋

十宜會日本畫鑑賞會 (日) 十四日一

十五日 大阪・三越

第一回本和村創郎個展 (日) 十四

日一十七日 日本橋・白木屋

山口敏男遺作展 (洋) 十四日一十八

日 銀座・青樹社

足立源一近作油繪展 (洋) 十七日

一二十三日 大阪・三越

塩崎邊隆個展 (日) 十九日一二十一

日 富山市・大丸

三輪義勢南方スケッチ展 (日) 十九

日一二十四日 大阪・大丸

石井彌一、佛、伊、滿、素描展

(洋) 十九日一二十三日 銀座・菊屋

橋徹新作南画展 (日) 十九日一二十

十四日 京都・大丸

全日本畫家献納画展 (日) 二十日一

二十四日 上野・東京府美術館

片岡銀造個展 (洋) 二十日一二十四

日 名古屋・青樹社

石山太柏日本画展 (日) 二十一日一

二十四日 名古屋・松坂屋

第三回管能由爲子個展 (日) 二十一

日一二十四日 銀座・資生堂

竹内栖鳳遺作展 (日) 二十四日一二十

十九日 日本橋・三越

東京一淡交會第一回の「斑猫」以下二

十七点の作品と、同第九回の「支那風光

図繪」十二点と併せて三十九点、他に竹

内家出品の参考品とがある。

全体を通過して、既に世間が熟知せる

ところの栖鳳の巧妙さと、更にその偉大

さとを、力強く再認識させて余りあるも

のと云つていい。寔に此の画家程の天成

の画人は百年に一人生れるか二百年に一

人か判らないそれ位の恵まれた天分を持

つた画家であることが背かれる。併し天

分とか技術とかいうことも、單に筆先の

仕事ではなく、結局は頭腦の問題だ。

栖鳳の頭腦は古來の画人の中で最も秀

れた大頭腦の一人であつた。此の人の明

哲な頭腦に會つては、いかなる自然の神

秘も手易く觀取されずには置かなかつ

た。そう云う氣持が起る。動物、静物

風景と三種の画題の中で何れが一番傑れ

ているかというようことは、此の様な

大作家の場合になると容易に斷言出來

ず、結局好き好きということになるが、

私の趣味をもつて云えば、風景画を第一

に推し度い。「支那風光図繪」十二点な

どは、世界第一級の絵であると斷言した

い。

あなると日本画とか洋画とかいう区

別がなくなる。只傑れた絵である。其の

他では「海」「しづ柿」「白鷺」等は今更

の如く栖鳳の風懷と大手腕を認めて叩頭

せざるを得なかつた。

出陳目錄

一、斑猫 絹本 大正十三年

一、鳶 絹本 大正十四年

一、海 絹本 同

一、宿鴨宿鴨 紙本 大正十五年

一、秋興 絹本 和和二年

一、水郷 絹本 同

一、蜆籠 絹本 昭和四年

一、潮來小暑 絹本 昭和五年

一、炎暑 絹本 同

一、惜春 絹本 昭和八年

一、晚鶉 紙本 同

一、村居 絹本 同

一、松上白鷺 屏風 昭和九年

一、家兔 絹本 同

一、花に藏 絹本 同

一、支那風光圖繪 絹本 昭和十年

一、上海小艇

二、江南電華寺

三、西湖断桥

四、蘇州雙塔寺

五、長江一望

六、蘇州街頭

一、爐辺 絹本 同

一、松魚 紙本 昭和十二年

一、憩える車 絹本 昭和十三年

一、城外霞色 紙本 昭和十五年

一、田植時 絹本 昭和十六年

一、堂満利水 絹本 昭和十年

一、しづ柿 紙本 昭和十一年

一、草相撲 紙本 同

一、長江盛夏 紙本 昭和十二年

一、池畔 絹本 昭和十四年

一、しづる池 紙本 昭和十六年

一、海幸 絹本 昭和十七年

竹内家出品

一、天女舞樂 明治四十三年

一、水墨山水 明治二十二年頃

一、筆と墨 大正十一年頃

一、栖鳳(寧一山筆)

一、主基齋田風俗繪御屏風小下繪 大正三年

一、山水長卷(雪舟筆模寫)

宮本三郎個展 (洋) 明治二十三年頃

九日 名古屋・青樹社

第十八回女流畫家作品展 (日、洋)

二十六日一三十一日 京都・大丸

香田勝太油繪展 (洋) 二十六日一三

十一日 大阪・大丸

白日會第二十周年記念展 (洋、彫)

二十六日一二十七日 上野・東京府美術

讀報—この会も今年で二十年という歴史を重ねたが依然として水準低く展示の中心となつてゐる第一室を除けば、素人養成所の如く寥々たる感がある。中で佳作を拾えば川村精一郎の「夏日」山道栄助の「瀧」小堀進の達者な「練習機飛ぶ」松平齊光の厚味ある「蜜柑の取れる山」位いなもの、相田直彦の特別陳列には見るべきものなし。

川西英創作版画第十回回顧新作展(版)  
二十七日—三十日  
春台美術展 (洋) 二十七日—二月五日  
上野・東京府美術館  
東海—この会の特陳「南方共榮園スケッチ」は一應面白く高光一也「ビルマの女」有岡一郎「マレーの子供」「マドレーヌ」の二点が佳品。新人では岡田賞の柳瀬彌生が古風な技法だが注目すべく、大倉克次の都会風景三点も悪くない。

第十五回新美術家協会展 (洋) 二十七日—二月七日  
上野・東京府美術館  
読報—近藤光紀の着実な「裏通り」田崎廣助の粗つばい「武蔵野」服部正一郎の童画風な「桃浦の筑波」等の佳品なしとせざるも、賞ての中堅作家らしい氣鋭さが見られぬのは遺憾。先進前會員たる内田巖 田村孝之介、宮本三郎等の出品が目だつようではいささか心細い。

下沢木鈴郎「雲の景」鑑賞會(洋、版)  
二十八日—四十日  
銀座・勘兵衛酒屋階上  
第四回名取明徳油繪展 (洋) 二十八日—三十一日  
日本橋・高島屋  
新選洋画展 (洋、彫、工) 二十九日—三十一日  
日本橋・高島屋

現代美術展覧會 (昭和十八年度)

二月二十一日 大祝記念京都美術館  
一月陳列に並川義隆氏の藏品を新に追加陳列した。

二月

第二回家永三郎油繪展 (洋) 一日—八日  
大阪・天賞堂

第二回撥草會日本画展 (日) 二日—三日  
銀座・資生堂

加藤靜児遺作展 (洋) 二日—七日  
日本橋・三越

読報—昨年十一月物故したこの画人の遺作八十余点の展示。適度の写実的印象派風を加味した廿年一日の如き迂余曲折の少い画境にはのどかな安らぎがあり、晩年の代表作に乏しい展示とはいへ、若年期から外遊時代にかけての「綱干せる朝」「晩夏」「静物」等の諸作にかへつて作者の厚厚雅雅な資質を窺ひ得る。

池上秀敏奉戴日作品展 (日) 二日—七日  
日本橋・三越

姉崎鶴油繪小品展 (洋) 二日—七日  
大阪・大丸

尾沢辰夫遺作展 (洋) 三日—六日  
名古屋・松坂屋

水彩画推賞記録展 (洋) 三日—七日  
銀座・青樹社

橋本獨山禪師南宗画遺作展 (日) 三日—七日  
日本橋・高島屋

二科西人社展 (洋) 三日—七日  
岡・岩田屋

日本油繪會小品展 (洋) 五日—七日  
銀座・資生堂

菊山堂年男天籟伊賀煥展 (工) 九日—十三日  
日本橋・高島屋

東西諸大家日本画横観展 (日) 九日—十三日  
日本橋・白木屋  
觀人社日本画展 (日) 九日—十四日  
京都・大丸

上野忠雅芝居繪展 (日) 九日—十四日  
上野・松坂屋

梅原龍三郎個展 (洋) 十日—十六日  
銀座・兜屋

東海—梅原龍三郎の滯欧作一点を含む旧作六点を選んで展示した新設画廊最初の鑑賞會。秀作は四、五年前國展に出陳された霧島風景及び唐三彩の壺を描いたもので、近作紙本「琵琶」はあまり感心出来ない。

富永勝重謝恩展 (洋) 十日—二十四日  
銀座・日本樂器店

皇太子殿下御覽展記念日本近代美術館建設明治美術名作大展示會 十日—二十八日  
主催 東京市・朝日新聞社、後援 情報局・文部省・東京府・東京商工会議所・大政翼賛會

東朝—出陳画中具體的にその感想をたどれば、まず第一指に数えられるものとして芳崖の作なる「大鷲圖」の大作、あるいは「悲母觀音」の如き、けだし時代を凌格せし責任の傑作である。また芳崖の意志を繼承していよいよ藝術の向上發展を示したる橋本雅邦の意氣を見るべきものとしては、セビヤ彩色の範をたれたる「白雲紅樹圖」の大作がある。「魔圓の春色」には若かりし日の竹内栖鳳を偲ばしめ横山大綱の「無我」西郷孤月の「春暖」等は各々その美術学校在職時の性格を發露して余りあるものである。

川合玉堂の「波に千鳥圖」は西にその

技を完修し東にその想を加え得たる当時の鍊成作として首肯するべく、鎗木清方の「一葉女子の墓」は流石に水野年方門下の一人者として能く図題の困難を制しこの美妙なる靈域を表現せしめたる手腕の慧敏は敬服の外なく一葉女子以て地下に瞑すべきである。下村鋼山の「蒙古襲來」は學校教室においての作品にして師雅邦に代りて修養の余裕を發揮せるものである。

また天草神來の「羽衣」に至つては當時最も奇抜なる作品の一にして裸体繪面をなしたる日本画の先驅者たりし記念である。その他菱田春草が弱冠よく「水鏡」の大作を無造作に描きたる態度の堂堂たりしことなどを思い來たれば、その興味津々盡るところなし。

岸竹堂「月下猫兒」渡辺省亭の「雪中鷄」いずれも輕快至極の作格を示せるものにして、殊に竹堂が筆技の微妙たる態度に至つては唯啞然として言葉なし。瀧和亭と荒木寛畝の着実なる古態の繼承者として共に孔雀の傑作を見るは欣快禁じ難く、斯様の勃興と相俟つて時代代表の精華である。

また川上冬崖があゝ温雅なる素質の南画者にして同時に洋風画指導の任をも兼ね成せるなどはいささか意外の感を深からしめる。

最後に尙一言加えたきものは浅井忠の門下にして和洋画の融合折衷を念願し惜しくもその中途に病死せし小坂象堂の作品は大に同情すべき資料として見逃し難きものである。

以上鑑賞の証左は皆以て今この展示



会において安んじて解決の針路を指示されたものにして、この好機会を逸してはけだし容易に再会し得難きものである。

明治時代の油彩画は大凡三つの潮流に分つことが出来るようだ。第一は来聘した伊人フオンタネジ、サン・ジョヴァンニ等に指導された人々、なかんづくフオンタネジ門の浅井、小山、松岡、山本等の描く薄暗い油ぎつた克明な描写が特色となつてゐるもので第二は黒田、中村等フランスから直輸入の、そして前者よりも色彩の明るい筆も、男性的肉太の画風であつて、和田三造、白瀧幾之助の作品がこれに属してゐる。第三は藤島武二を始め兒島、山下、山脇等当時最新傾向の印象派を学んだ画風である。

フオンタネジはクールベ、ミレ、コロ等の影響を受けた風景画を数多く描いてゐるが、それは浅井忠の「露台」印藤真橋の「寺院内部」石川寅治の「農家の内部」のごとき、ややロマンチックな作となつて現れる。中で石川の作は大正期に入つて眩しいような海洋画に変化してゆく。

高橋由一の「鮭」はシャルダンの静物にも比すべき素晴らしい写真画で高橋の弟子原田直二郎は後にドイツに学び「靴屋のおやじ」を描いたし、五姓田義松はフランスに遊学して「操り人形」を残した、共に立派な作品である。「山尾忠次郎肖像」を描いたジョヴァンニに薫陶を受けた曾山幸彦作「辻講釈」は「操り人形」を凌ぐ見事な作。

その曾山門に学んだ和田英作の調いの

ある「渡頭の夕暮」と「射夕」の色彩の相違は第一回の洋行が大轉機をなしてゐるが、これは岡田三郎助の「矢調べ」と「大隈伯夫人像」の画風の相違にも当嵌めることが出来る。水彩画の三宅克己も曾山門である。

第二の黒田一派に追隨する一番の作は和田三造の「南風」であろう。明治四十年の文展で絶讃を博したが今日尙その好評を新にするものがある。

白馬会を率ゐる黒田の「朝粧」は二十八年の内國博に出品して物議を醸したが裸体画に対する理解を深めるに貢献した。歴史的作品「湖畔」はいつ見ても美しい。中沢弘光の「おもいで」は場中唯一の宗教画で金色に光る佛と敬虔に充ちた尼僧とに尊い明暗の対照がある。

白馬会に對立する太平洋画会の重鎮中村不折の「建國勲業」が焼失したのは惜しい。ここに在る「老人肖像」はデッサンをやがましき言ひ彼が滞欧中デッサンで苦しめられた頃の作。満谷國四郎の「戦語り」は、あまりにも暗い色彩と盛上りなき平面描写が欠点だが日露役直後の作である。この作者は和田、岡田以上に洋行によつて画風に大轉換をした。

満谷と同門の青木繁の天折は洋画界にとつて非常な損失だ。「海の幸」は二十三才ごろの作である。小山正太郎の門より出た小杉放庵の「水郷」は早くも壁画家としての天分を示した作だが、彼は遂にこの方面に大なる進展をなさず現在日本画に没頭してゐる。

藤島武二の「草の香」はシスレーやピサロの影響が多分にある。ここに云う第

三の印象派傾向の作中最たるのみならず、おそらく場内を通じて第一の名作であらう。

坂本繁二郎の「はり物」はドガの「洗濯女」を思わせるもので近時の「老婦」「牧馬」の如き作品はここに胚胎してゐる。ルノアールより出た梅原竜三郎の「モレー風景」には後年伊豆の海を描いた幾多の作品の要素が見える。

以上の管見により我國の油彩画は明治初年來朝の外國画家に導かれた主題の國粹的なもの、幾らかロマンチックの匂いを持つものから出発し、次いで外遊の画家によつて写真派印象派風に轉じ次の時代に入つて多分に洋風化するものであつて、徳川後期に発生した司馬江漢、亞欧堂など初期洋風画との関連は極めて薄いもののように考えられる。

画壇の趨勢と同じく明治彫刻界も江戸時代の延長から一轉欧化主義に移り、最末期にはロダンの輸入さえあつて、古典的な欧風が極端な写実主義にまで進んだと思ふべき。今度の陳列は高村光雲の木彫「聖徳太子像」を中心に三十余点を数えるが、佛師、宮彫師から一躍美術学校教授となつた高村や竹内久一等の得意さはさこそと想像され、竹内が奈良の古彫刻を研究した泰句の一作「技藝天」の瑰麗を見るにつけても、彼等の精進振が偲ばれる。

岡倉天心の妹婿山田鬼齋の浮彫「平治物語」宮城前楠公銅像の馬を作つて馬後藤と呼ばれた後藤貞行の「馬」等木彫界のために氣を吐くものであるが、高村の高足米原雲海は「大葉子」の山崎朝雲、

「維摩」の平櫛田中に比して岡倉の息吹がかかつてゐるだけに詩の世界に突入した。楚々たる「仙丹」は小粒ながら彼の藝術の精進を示すもので、一人人をして羽化登仙の思あらしめる。國粹派の木彫にたいする欧風彫刻の入つたころの情勢こそ面白いもので、工部大学の構内彫刻室から流れ出る白い水を眺めて、あれが石膏というものだそなたと珍らしがつたそなただ。

当時の御屋教師ラギーザ(イタリア人)の「お玉」身自らヴェニスに学んだ長沼守敬の「老夫」ラギーザの弟子で九段の大村益次郎銅像の作者として知らる大熊氏廣の「大久保利通像」等ほゝ笑ましいものばかりだ。

洋画の黒田等がフランスに遊んだのと前後してドイツに赴いた新海竹太郎はヒルテルに就いただけに彫塑の大作にも長じたが、好箇の木彫小品「斥候」は騎兵軍曹でもあつた彼の自像とも見える。後進朝倉はそのころからグンゲン技を現わして「猫」は機智さえ窺はる渾然たる佳品。建昌大夢の「ながれ」藤井清祐の「髪洗ひ」等いづれも当時に謳われたものだが、早死した萩原守衛の「女」こそげに洋画の青木繁と共に天才の閃きを示すものである。

彫刻が傳統の木彫と新興の彫塑と相争つてゐる間に、桃源の夢なお濃かなのは工藝界であつた。しかしそれは貿易向きの牙彫や陶磁等以外には新時代に相應しい新様式が現れなかつたという意味で、漆工も陶磁も機械も多士落々。單に御物室に特別陳列さるる片切調の

加納夏雄の「銀製千羽鶴彫花瓶」、鐫金の海野勝現の「金屬製蘭陵王置物」、旭王山の大作「官女置物」を拜観しただけでも、如何に彼等が帝室技藝員の肩書に感奮、彫心鑠骨の精技を盡したか思うに余りある。

「機文模様四方皿」の永樂和金の色絵、諏訪菊山の青磁、清風興平の白磁、伊東陶山の錦彩、三浦竹泉の染付あり。三浦乾也の「雪松茶碗」白井半七の「紙手茶入」を見て誰か東京に陶磁なしと云うや。

帝國藝術院會員作品展 (第二部) 十一日—十三日 銀座・資生堂

第二回石川滋彦展 (洋) 十一日—十四日 銀座・日動画廊

東京—昨年の南方派遣の土産作廿一点、ジャワのものが大部分を占め、南の烈しい光線に魅せられた風景画が多い、第一回個展の諸作に比して幾らかづつ柔かき、温かきが滲み出て来たのは一進境、ジャカルタ博物館の「廻廊」や「ホテル・デス・インデス」「スラバヤ・シンパン街」など纏まつた佳品。

大阪日本画家報國會献納画展 十一日—十八日 大阪・松坂屋

第三十回光風會展 (洋) 十四日—二十七日 上野・東京府美術館

東朝—創設三十年を記念しての回顧特別陳列には小林万吾「門づけ」をはじめ辻永が好んで描いた山羊、南薫造「六月の日」「葡萄棚」中沢弘光「まひる」等の外故山本森之助「汀つたい」に接してのしい。

一般出品では肖像に取材したものの多

く、寺内万治郎、米本一郎、伊藤悌三、笹井忠郎、西尾喜徳、耳野卯三郎、江藤純平等がそれであるが寺内、伊藤がやや救われるくらいで大部分が平板であるのは距離感表現の不足による。

風景では小森源太郎「山村春閑」が群を抜き温かきも感受出来るがあまり機械的に走り過ぎた確直さへの危険を持つ。

その他川合修二、白石隆一の自然観照の素直さを取る。

受賞(岡田賞) 田中実一(光風賞) 西尾善積(F氏賞) 櫻田精一(K夫人賞)

大原省三(加藤賞) 里見明正(L氏賞) 三上義人(レイトン賞) 朝日奈文雄(三星賞) 新延輝男(光風工藝賞) 佐藤正巳(工藝賞) 小林清(新会員) 妹尾善信 神保和幸、山中清一郎、田中義夫

第三回岡田會展 (日) 十六日—十九日 日本橋・三越

文楽人形展 (工) 十六日—二十一日 上野・松坂屋

明治大正肉筆表紙繪展 (洋) 十七日—二十日 神戸・神戸画廊

健民美術展 (綜合) 十七日—二十一日 神戸・三越

尚綱會日本画鑑賞會 尙美堂主催 十八日—十九日 銀座・資生堂

第二回洋画十作家展 十八日—二十日 大阪・高島屋

第三回疊土會繪画展 (日、洋) 十八日—二十三日 大分市・一九百貨店

鹿兒島美術展 (洋) 十八日—二十八日 鹿兒島・高島屋

赤松俊子個展 (洋) 十九日—二十三日 銀座・青樹社

白鳳會人形彫刻展 二十日—二十四日 銀座・資生堂

彩交會展 (日) 二十一日—二十四日 銀座・菊屋

第二回團樂社童宝美術展 (工) 二十一日—三月三日 日本美術協会

現代美術人形名作展 (工) 二十三日—二十七日 上野・松坂屋

第二回日本俳画協會作品展 (日) 二十三日—二十七日 大阪・三越

東郷青児日本画油繪新作展 二十三日—二十七日 大阪・朝日ビル

第四回三宅會繪画展 (日) 二十三日—二十八日 大阪・大丸

林文塘富士二十題展 (日) 二十三日—二十八日 大阪・阪急百貨店

日本歴史画展 (日) 二十四日—二十七日 銀座・朝日ビル

東朝—安田毅彦をはじめ現代の歴史画家中の主流十六氏を集めての内容は十分觀賞に値する。殊に北野恒富の「茶々」に示した顔貌、中村貞以の「袈裟御前」が漆髪に香を炊く様相、新井勝利の「尾張連浜主」が舞う姿における姿態など上出来であり、太田聰南「蓮月尼」中村岳陵「相模太郎」もまた貫祿を示し、毅彦の「北畠親房卿」の線描、菊池梨月の「正成」においての心根をついたあたり、表面的に流れざるはよし、ただこれら歴史画を対象とする作家が、資料の備わる現代に取材して次代に傳える作品をつくることも望ましい。

萩須高徳佛印熱河展 (洋) 二十四日—二十八日 銀座・青樹社

読報—昨年恒長部より佛印風物紹介に

派遣されて得た收穫を主とする展示、粗剛な筆触はややうるおいを欠く憾みとなつてゐるが「丘上の村」「サンゴ河」「アソコルワット」等平明的確なる画境を得ている。素描では「昭南市街」がよい。

第四回黒門會展 (洋) 二十五日—二十八日 銀座・日動画廊

東京—有島生馬を中心の会、二科、独立、一水会と顔触れの賑やかな所が夫々個性のはつきりした画境を相集めた樂しさが身上。

最も苦勞しているのが島崎鶴二の富士を描いた四点で観る方までつらくなりそうだが、中川紀元の毛筆「老猫」などでぐつと樂になれもする、野口彌太郎の「市場」兒島善三郎の「朝鮮の都」吉井淳二の「花」が佳い。

第二回東海林廣油彩個展 二十五日—二十八日 銀座・資生堂

第二回古屋正壽日本画展 二十六日—二十八日 銀座・銀座書店

創人社洋画小品展 二十七日—三月四日 大分市・トキハ百貨店

梅原龍三郎作品展 (洋) 二十七日—三十日 大分市・大分記念京都美術館

京都—今回関西に所蔵されている作品五十余点を一堂に観ることの出来たことは美術愛好家にとつて、まことに有難いことである。赤、青、黄の原色を縦横に画布に躍らせる筆致は竜三郎常ならずとも画中へ引き入れられるようである、今回の出品作品は主として風景、探赜、薔薇、壹等で陳列も、それぞれ同じ題材のものを並列したとは鑑賞する者にとつて





性に乏しいのは決して慶ばしい傾向ではない。期待するところ多い後進のために、この際とくに新たな進展を望んでおきたい。

「授賞」(新会友) 山田栄二、坪内節太郎、小原雄二、岡部文之助、齋藤求、松島正人(独立賞)足立襄、矢崎牧廣、吉岡憲、斑目秀雄、堀内一誠、松崎眞一、高橋忠彌(岡田賞)鳥居敏(新会員)鳥海青兒、富樫寅平、菅野圭介

出品目録

農夫 足立 襄

收穫 同 熊谷登久平

卓上 木村 孝三

室内 同 空(舊雲)

三階 永井 宏

波 坂本 善三

千曲川 沼の辺 石綿 唯四

麦 齋藤 長三

川添いの家 花 久保 一雄

森生像 同 家族の旅 鳥居 敏

同 路傍 同 鳥居 敏

南方地下資源 同 小猫 青柳 暢夫

清水 登之 花の実 同

人柱 同 雪の街 田島 正人

秋 大垣 泰治

夕 斑目 秀雄

婦路 同 暮の街 同

空(夕雲) 同 同

熊谷登久平 同 同

空(ちぎれ雲) 同 同

同 同 同

空(早雲) 同 同

同 同 同

同 同 同

風景 上野 衛  
家と樹木 松原 久明  
上海風景(1) 同  
静物 白淵 彌彦  
燕子花 山道 栄助  
溪流 同  
静物 志村 計介  
牛小屋 同  
静物 同  
風景 鈴木 昌枝  
鳥籠(2) 同  
近藤 幸  
笛を吹く少年 大竹 久一  
巖 岡 周未  
黄昏の村 山田 栄二  
山門 同  
大地に生く 兵藤 和男  
霧 豊田 逸二  
あまりりす 木島 眞二  
風景 氏橋 静一  
静物 小野 富衛  
砂上(3) 同  
普陀院乗廟(熱河) 中島 穰  
山城 竹次  
川原 宮崎 精一  
川原 同

アイヌの娘 アイヌの娘  
菊地 精二  
造材 同  
軌馬 同  
上海風景 長谷川三蔵  
上海バンド 同  
街 小笠原久松  
森 義原 康秀  
緑の高原 同  
母子 西田藤次郎  
裏街(魚屋) 同  
嵐山の僧 高橋 弘二  
妓生肖像 小島善太郎  
田園小春 同  
田園の春 同  
朝鮮扶余山 同  
朝鮮扶余落花巖 同  
いてふ 友田 利夫  
読書 兄玉 範子  
梅 川口 軌外  
ヒマワリ 同  
菊 同  
漁夫 同

静物 川口 軌外  
壺 森永 一堀  
環山風景(海南島) 齋藤 求  
市の女達(海南島) 同  
女人群(ベリ島) 中山 巍  
坐婦(ジャワ) 同  
黄葉 平田 市郎  
秋色 小川 信一  
四つ辻 許武 勇  
母子 吉岡 憲  
自画像 山本 正  
冬 同  
二人の海女 吉岡 憲  
雪 山田 伸吉  
熱戦 島村三七雄  
敢闘 同  
猛攻 同  
早春の畑 水原房二郎  
室内 吉野 廣行  
森(初秋) 齋藤 雪枝  
網 居串 佳一  
出発 同  
午睡 同  
対話 同  
高原の春(二) 熊代 駿

馬と海 富田 惣七  
收穫 青木喜太郎  
温室 渡辺 洋一  
暮れ行く海 川上 厨平  
ヒマワリ 佐藤 公一  
子供 四十塚 勤  
夕暮の村 小出 三郎  
水辺 同  
石だたみの道 小柳 篤好  
花と少女達 遠藤 満  
冬の街 青木 正春  
梅雨を聴く 山内 善藏  
人物 水島 圭一  
校倉(甲) 須田國太郎  
校倉(乙) 同  
早春の畑 同  
つば(三) 同  
菊地 文男  
冬の大和村 守屋 清邦  
崖邊望 奥田 仁  
窓外の春色 山崎 美幸  
海辺のアラブ 小野 忠弘

北越漁村 野口彌太郎  
S氏肖像 同  
山村雪景 同  
街道雪景 同  
キリン山雪景 同  
みのり 町田 京子  
肖像 林 武  
静物 同  
バラ 同  
小菊 同  
カーネーション 同  
静波 兒島善三郎  
あねもね 同  
嚴冬 同  
ダリヤ 同  
岬 同  
砂丘 芥川 義基  
三河カザツクイ 同  
ツマエロフ・ボリスの像 同  
鈴木 亞夫  
三河カザツクの 同  
厨房 同  
弓を射る蒙古人 同  
雪の日 同

野田武太郎 野田武太郎  
吉浦 鈴子  
風景 小田 豊  
いこい 藤崎 眞  
岩と水 同  
榎倉 省吾  
瀟峽 同  
收穫 直村のぶ子  
花と女 同  
北方の港 同  
狭間 二郎  
國境 同  
森の八仙花 桑原 清  
富士と農家 同  
静物 同  
富士 同  
農家 同  
家 谷川 歳男  
花 舞田 文雄  
松原 須永 正道  
野菜と鶏 同  
森沖右衛門 同  
馬櫓の群 同  
牡丹 織田 彩子  
收穫 高島達四郎 同  
富士 同  
熱海 同  
静物 同  
雪の教会堂 同  
亀谷 彰

早春 齋藤 博之	生駒の坂道	アトリエ	豊藤 勇	童女 佐藤 英男	風景 同	吉田 公	南の露店商人
鎌馬 門脇 耕	小鳥三郎一	金田 寛	朝霧 同	牛 同	庭の男	防空のあと	伊藤 彪
寺院（一）	室内 原田 正喜	玉葱 龜山 倫	富岳 同	黄金の竹	吉野 公脩	休息のとき	戦線余情（ヘル
寺院（二）	梅 開間 久	焙岩地帯の冬	鳩 長島 常吉	秋 坂巻 俊一	多田 栄二	同	サスの夜）
同	南より白鷺城	梅津 泰助	待機 渡嘉敷唯信	上海徐家匯路	池野 清	果樹の岡	田中佐一郎
河畔冬日	内藤 秀碩	冬日展望	風 神津 隆一	立 民	雪景 遠藤 正三	中川 光延	同（ナチブ山中の
矢沢 義竜	吹春十二郎	高原秋色	静物 佐々木 毅	踊るアイヌ	朝焼 吉田 務	壁 楠本 俊治	朝）同
保安禪寺（奉天省）	流水 宮 芳平	公園附近（上野風	紅蓮白蓮	磯 遠藤 智	堅穴 寺島 春雄	蓮驚 同	コレヒドールの
谿谷 根守 悦夫	東大寺の遠望	景）高橋 忠彌	労働者達	甲州の秋	朝の山	農村 堀ノ内一誠	一夜 同
ランブと釣具等	田中安太郎	碼頭（上海風景）	谷上風景	大塚三七雄	夕の山	雪晴れ	ナチブ山（バル
山本 正道	森 服部 勳	同	西條 茂	沃土 渡辺伊八郎	同	同	タ島）同
風景 木村 武男	天壇 藤岡 一	山 島海 青兒	戦時下の遊園地	山 小島 直	水田 岩岡 貞美	冬枯れの舞台	海女 久保田久一
ライ社の朝	観音洞（錦州）	山 鳥海 青兒	壺田たけを	風景 河津 六郎	山 井黒 四郎	今井 憲一	砂上 同
ライ社の女	同	山 鳥海 青兒	ジャカルタ（其一）	風景 岡部 繁夫	風景 田中 英夫	遺構 同	收穫 島田 穂美
同	大私門（紫禁城）	男像 同	山本 祐明	田園晩秋	花 森 兵五	上の太子	雪 古川 盛雄
ライ社の一隅	同	瀬戸風景	東満 池田金之助	富樫 寅平	観音堂	渡辺 脩	土房 林 完圭
同	同	同	野鳥 同	農家 同	岩瀨 憲一	土房 林 完圭	風景 中原 清隆
收穫 岡部文之助	茶の湯	同	人体習作	風景（一）	雪山 中村 節也	十六羅漢	空野洲絵人
同	大庭志津夫	同	上原 二郎	風景（一）	山崎英太郎	同	老婆 森崎 幸
峠 同	河原 橋本 春光	台所 中川規矩磨	南方植物	山崎英太郎	山崎英太郎	同	張り物する女達
山 橋 喜久雄	白い橋	鶏舎の午後	大谷 幸一	子供三人	山崎英太郎	同	片山 公一
家 木村 初男	川上善四郎	川口美喜夫	牛舎 寺林 金次	辻 正人	山崎英太郎	同	村 中尾 彰
北題（交易場）	スナガリ	同	春時雨	鳩 小林 和作	山崎英太郎	同	野良 同
池畔 大山 静清	アネモネの花	同	山歸來の更	海 同	雪山 古田 茂正	同	鯉 竹花 忍
漁村のA	矢田 千秋	同	遠藤佐和子	路上 松尾 一枝	陣中清閑	同	門 島津 冬樹
只穀 松崎 七資	無題 野沢 秀雄	同	貝塚の女	都市風景	村島 鉄雄	同	雪の出発
静物 金 海	漁船 望月 鏡一	同	伊藤きさぶ	静物	放牧 赤堀 佐兵	同	坂本 正直
丘 佐川 敏子	泉水 浜野 全平	同	龍登の港	家 佐々木眞佐子	山湖 同	同	泰山木のある丘陵
森の下草	樹々は実る	同	閑庭 久保田明文	赤い子	風景 関 竜夫	同	古婦 聰美
同	常安 静人	同	果樹園ニテ	野道 宇根 元誓	秋色池畔	同	漁 米永 胤生
浜辺 中村 辰巳	原 國井 澄	同	てん草採り	農人 同	大野 五郎	同	漁 米永 胤生

黒い服の女  
磯松 小雪



少年 櫻井 浜江 秋伊豆 若林 和夫 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 曉の構内 高畑 正明 松島 山岸富五郎

働く女達(市場へ) 森 島田 忠 室内 同 石佛 小原 雄二 山貌 鉄指 公藏

働く女達(薪を 運ぶ)同 成田 勇吉 医務室の午後 ハノイ風景 渡辺 保 さざ 鳩川 誠一 夕暮 勝俣 泰蔵 妻の郷 中材 善種

荒苑 狩野 正治 土と闘う 池島勘治郎 夏の子供 岡本 治男 馬(頭部) 大泉いから 少女 松隈 竜介 射的と木馬 古田 義一

寶泉寺風景 山村 猛猪 土と闘う 魚之図 河畔 寺坂 正信 松樹 妹尾 正雄 母性 三好 正雄 農家 河村はる子 夜の卓子 友近 琢男

職跡 浦上 正則 同 魚之図 松樹 妹尾 正雄 母性 三好 正雄 農家 河村はる子 夜の卓子 友近 琢男

西亞 河野 通秀 冬の上山 野村 正二 飯田 実雄 古い寺院の見 える裏通り 北島 吉光 夕日 仲村 一男 樹間眺望 神谷 嘉和

花 辻 潔 冬の上山 野村 正二 飯田 実雄 古い寺院の見 える裏通り 北島 吉光 夕日 仲村 一男 樹間眺望 神谷 嘉和

農家 同 冬の上山 野村 正二 飯田 実雄 古い寺院の見 える裏通り 北島 吉光 夕日 仲村 一男 樹間眺望 神谷 嘉和

秀鷹の一族 松崎 眞一 立葵 郡山 三郎 秋 太田 芳朗 果物店 小川マリ子 七夕祭 同 冬の下曲川畔 大島 正

秀鷹 同 松崎 眞一 立葵 郡山 三郎 秋 太田 芳朗 果物店 小川マリ子 七夕祭 同 冬の下曲川畔 大島 正

城外 加藤 陽 雪晴 和田傳太郎 小川マリ子 七夕祭 同 冬の下曲川畔 大島 正

村巷 同 雪晴 和田傳太郎 小川マリ子 七夕祭 同 冬の下曲川畔 大島 正

河原 緑川廣太郎 杜(三) 山内 邦義 神代郷之冬 青木 捷美 働く人々 中津瀬忠彦 美くしき峰々

蕃社の人 同 冬 江川 平三 神代郷之冬 青木 捷美 働く人々 中津瀬忠彦 美くしき峰々

地底二題(勸勞) 木村 忠太 樹々 同 大内のぶ子 休み時間 飛岡 文一 晩秋(カンナ)A 村田 藤作

地底二題(休息) 同 樹々 同 大内のぶ子 休み時間 飛岡 文一 晩秋(カンナ)A 村田 藤作

石見風景 山中 徳次 道具 大久保 泰 農村初雪 錦織 恭一 海 夫人像 所 輝夫

雪の辻 矢野 徳一 豆の花 岡村 芳男 窓外荷池 佐藤九二男 支那の町 秋野 健夫

床屋と子供 藤城 清治 畑の人々 同 解休 田村 清一 残雪 吉田 宗一 土窯の缸人 加納 莞雷

漁村 山中 徳次 畑の人々 同 解休 田村 清一 残雪 吉田 宗一 土窯の缸人 加納 莞雷

夏 菅野 圭介 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

伊豆風景 同 朝もや 樋口 勝三 午後 同 ハルビン風景(一) 矢崎 牧廣 雨の日 高畑 正明

第四回泥谷文景近作画展 (日) 三日

七日 日本橋・高島屋

読報一実のところ泥谷文景の名をきくのは初めてだが、この度その第四回個展を見てその達腕なのに驚いた。海軍省に献納した「制海」を始めとして、覇氣の強い活潑な筆墨の揮灑は、元來この人の現代画壇から遠い破格的な面目で、その中にはどことなく吳昌石、鉄齋などの影響らしいものや、甚しきは関雪などを思い出させるような半面もあるようだが、この度陳列された三十余点をよく見てゆくと、なかなか新鮮で独特の風格の窺われるものも少くない。記憶にあるものでは爽涼、聴泉、獨釣霜朝等々、品格も見るべきものである。ただ望むところはこの冴えた筆墨に、更に落ちついた深味のある境地がおのづからに渾成されることである。

第三十九回太平洋画會展 三日―十四日

東京府美術館

東京―教はあつても、概して平板なものが多く、注目を惹く作は乏しい、鶴田吾郎の「神代の森」には写実か象徵かの戸惑いがあり、もつと突っ込んだ解釈の欲しいところ、斎藤信太郎の「春」三部作は破綻が少いが甘過ぎ、戸津文雄の「巖と樹の根」は力一杯で一應狙いの効果を挙げている。今少しく賦彩の工夫に依り深さが出して欲しい。古いところでは中村不折、石川寅治、三上知治らいずれも低調の中に石井柏亭の「鳥海晴雪」のみみづみづしい、奥瀬英三の南方收穫からは「デンバザル風景」の比較的無難なのを取る。

〔授賞〕(太平洋画會賞) 中田信(葵賞)  
青木純子(耕賞) 岸本廣義(奨励賞) 野  
呂正夫(會員賞) 戸津文雄(褒賞) 吉田  
陽悦、佐藤辰治、奈良岡正夫、伊藤源右  
衛門

塚本茂個展(洋) 四日—七日 銀座・  
青樹社

東海—山の風景を主とした近作十余点  
に滯歐旧作を加えて展示したもの、官展  
作家としてアカデミックな腕は確かだ  
が、富士や日の出を描いた作品にはこの  
作家の本領が出ていない、佳品は小品  
「鯉」「妙義山初秋」「滯歐作では水彩「ナ  
ポリ」を探る。

松本 宏洞遺墨展(日) 五日—九日  
上野・日本美術協会

陸軍美術展(日、洋) 五日—十四日、  
日本橋・三越

東海—戦争画展として本格的にはなつ  
てきたが、建設戦の記録画としては悲愴  
味が勝っている。油彩での佳作は田中佐  
一郎の「コレヒドール夜景」、向井潤吉「肉  
薄攻撃」、中村研一、「シンガポールへの  
道」だが、特に一見の価値あるものは藤  
島武二の未完成作品「蘇州河激戦の跡」  
で、空の美しさは推賞に値する。日本画  
はいつたに不振で、竜子の「戦果の図」  
蓬春の「香港スケッチ」いずれも生温  
い、むしろ岩田専太郎の真正直な「通信  
隊」に好意がもてる。

邦彩會展(洋) 五日—十四日 丸の内  
帝劇画廊

第四回催育會繪畫彫塑展 七日—九日  
銀座・資生堂

ウ・ゲ・ガイン作ビルマ紹介風物画展

(洋) 九日—十四日 上野・松坂屋  
落合朗風遺作展(日) 十日—十四日  
日本橋・高島屋

全女流美術家献納画展(洋) 十日—十  
九日 銀座・日本樂器店

第二回東山魁夷氏の寫生個展(日)  
十一日—十四日 銀座・菊屋

鈴木千久馬油繪個展 十一日—十四日  
銀座・日動画廊

第一回雲會油繪・水彩展 十一日—  
十六日 大阪・三越

第五回縁藝會展(洋) 十一日—二十一  
日 東京府美術館

第三回松本會展(円尾華甫塾) 十三日  
—十九日 大阪・松坂屋

第五回京都染織繪畫協會展 十四日  
—十五日 岡崎公園美術館

第一回和繪會陶藝展 十四日—十六日  
京都・大祀記念京都美術館

第五回維新會展(洋) 十五日—十九日  
銀座・青樹社

永井武夫遺作展(童画) 十五日—二十  
一日 丸の内・帝劇画廊

第十一回旺玄社展(洋) 十五日—二十  
八日 東京府美術館

東朝—會を結成する以上は、はつきり  
した主張をもたなければならぬ。その  
点、この会は焦点をどこに置いているの  
か、あまり明瞭でない。せめて第一室に  
列んでいる程度の作品が、もう二、三室  
あれば引立つて見えるだろう。

主宰者の牧野虎雄と他の同人達の力働  
の間に差があり過ぎることも、それはや  
むを得ないかも知れないが、何となく引  
緊まらない感じを興える。牧野の四点の

うち「水仙」は少し冷たいが、得意の赤  
と黄を利かした「静物」と「初冬の庭」  
は好ましいものである。

この他やや目ぼしいものを拾うと岩井  
彌一郎の「海」、橋作治郎の「松花江の風  
景」、阪井谷松太郎の「手術の図」、水戸  
範雄の「曠野の街」などが取りあげられ  
る。

獨立美術會員春季小品展(洋) 十六日  
—二十日 銀座・日動画廊

東京—上野と並行しての恒例街頭展  
は、十号前後の小品に上野と共通の画因  
も多く交つて新旧夫々見耐えもある。清  
水登之の「ジャワの廃屋」など南方派遣  
に依るこの人としての先ず新しい画境  
か、兒島善三郎の特色の一つを「古池」  
の中央へ突き出した一本の枝の奇骨が端的  
に物語っているのも面白い。

須田國太郎の「鷺」は逆光の中に不思  
議な魅力を湛え、高昌達四郎の「農家」  
も温か、若い所では齋藤長三の二点が光  
に対する試作として目を引く。

故長谷川利行小品展(洋) 十六日—二  
十日 大阪・天賞堂

第二回翠香展(工) 十六日—二十一日  
京都・大丸

天龍寺寶主職翁題久保田金徳画合作展  
(日) 十六日—二十一日 上野・松坂屋

第三回斗牛會展(日) 十六日—二十一  
日 大阪・大丸

京都染織美術展(工) 十七日—二十一  
日 銀座・松屋

有島生馬近作画鑑賞展(洋) 十八日—  
二十四日 名古屋・美交社

新橋社美術展(洋) 十九日—二十三日

大阪市立美術館

第十一回宅野田夫個展(洋) 十九日—  
二十四日 新宿・三越

萩野康兒水彩画展 十九日—二十四日  
大阪・三越

第十二回染織展(工) 二十日—二十一  
日 京都市・染織試験所

田村孝之介南方風物展(洋) 二十日—  
二十四日 大阪・兜屋

大山魯牛個展(日) 二十一日—二十三  
日 銀座・資生堂

陸海軍南方派遣画家作品展(洋) 二十  
一日—二十五日 銀座・日動画廊

読報—小品ながら各自手練をみせてい  
るのが存外に嬉しい。中山鏡の「バリ島  
市場への道」は明哲に割切れた技法で、  
中村研一の「ラジャーの妃」の練達と共  
にみるべき作。向井潤吉の「バランガ突  
入の朝」は親照に日本画風の嚆向を示  
し、猪熊弦一郎の「南方の娘」は抒情的  
才筆、その他清水登之の「昭南島展望」  
石川滋彦の「ジャバ街景」鈴木栄二郎の  
「米人俘虜」等が挙げられる。

第六回連袖會展(洋) 二十一日—二十  
五日 銀座・青樹社

東朝—指導者安井倉太郎の出品はない  
が、この第六回展はいつもより成績がよ  
い。技術がだいたい平均して来たよう  
で、しつかりして来たことも認められ  
る。ただこのうちは画品ばかりでなし  
に、さらに厳しい追求がのぞましい。

中村琢二の北京風景は影の説明が利き  
すぎて生氣に乏しいが、和服の肖像は相  
当の出来栄である。高田誠の点描も要領  
よくなつて遠近に注意が拂われている

し、金子博信の信州風景もやや硬い感じだが、学童を好んで扱うこの作者としてはちよつと珍らしい。

なおこの他ドラソ風の静物を描いた片田三吉、初冬の山を写した小野末、高見耿太郎、本郷博、菅野矢一、三浦理邦等の諸君が注目される。

如水画談會展(日) 二十二日—二十六日  
丸の内・帝劇画廊

第一回文化泰公會美術展(綜) 二十三日—二十八日 京都・大丸

洋画では野間仁根「樹叢進撃」宮田重雄「小休止」笹岡了一「軍旗進」等、日本画では曲光男「彈」小島武「バタン戦線」奈良東明「大休止」細木成実「戦う戦車」そして戦争画ではないが梶喜一「早春好日」等が目立つ、また比島に武勳をたてた佐藤感太郎の西垣藩一中尉「さくら高地を望む」それから戦友の遺骸をやくの宗教的な崇高さにモチーフを得たという工藤の北村久造「火船獅子詩絵手箱」等が異彩を放っている。

第二回春星會日本画展 二十三日—二十八日 上野・松坂屋

漆文化展 二十三日—二十八日 日本橋・高島屋

第十三回素顔社洋画展 二十四日—二十七日 銀座・資生堂

第十一回東光會展(洋) 二十四日—四月四日 東京府美術館

新燈社春の美術展(日、洋) 二十五日—三十日 大阪・三越

粟田九品庵新作画展(日) 二十五日—二十七日 銀座・千代田画廊

現代美術展覧會(昭和十八年度)

大阪女流画家展 二十五日—二十九日 大阪市立美術館

第七回美術創作協同會展(洋、版) 二十五日—四月二日 上野・日本美術協會

読報「節約すれば沈静な裝飾性」といえるこの會の作風は漸く固定した感があるが、安住を戒心すべきで、また一般作品以外にも描写力の不足が見受けられる点も注意を要する。中では荒井竜男の「五月」李太郷の「女人」が佳品、矢橋六郎の「承德ラマ廟冬」はいささか弱く、山口薫の「銃」と森芳雄の「父と子」は共に素材に比して画面が大き過ぎる。その他今井繁三郎の「武蔵野」村井正誠の「花」が挙げられる。

「搬入」六二三点「入選」七十点「新入選」十一名

第七回巴會展(日) 二十六日—三十日 銀座・菊屋

第一回日本画試作展 二十六日—三十一日 新宿・三越

青木大乗日本画展(日) 一日—二十六日 大阪・朝日ビル

大毎「力作」観音二点をはじめとする近作十六点の展覧、いづれも氏独自の精神美を追求した作品だが「池畔桃隠」ほか数点の風景は美しい、ここでは比較的にこめる精神性の強調が迎えられ、その代り氏の作品としては從來にみられない明るさを持つている。

岡田七藏遺作展(洋) 二十七日—三十一日 銀座・青樹社

第六回長流園藝藝壇顧問試納作品展示會(日) 二十八日—四月一日 日本橋・三越

平岡權八郎遺作展(洋) 二十八日—四月一日 日本橋・三越

徳力富吉郎版画東京・京都・大和路 三十日—四月四日 大阪・大丸

現代新進木彫家作品展 三十日—四月四日 上野・松坂屋

青甲社産業戦士臨画展(日) 三十日—四月四日 京都・大丸

小柳創生臨畫會展(日) 三十一日—四月四日 銀座・村松時計店

四月 月

古川北華個展(日) 一日—四日 銀座・資生堂

第二回河口樂土展(日) 一日—四日 銀座・菊屋

興亞南画院展(日) 一日—七日 京都・市美術館

青桃會展(日) 一日—八日 大阪・松坂屋

白日會會員展(洋・彫) 一日—十日 銀座・日本樂器店

第五回日本画院展(日) 一日—十一日 東京府美術館

読報「新人で目を惹くのは長谷川義治の達者な「澄花粧父娘」と田中千恵子の温和な「好日」で、共に人物画としてツツなく描けてをり、その他望月定夫の鶴を様式化した「花かげ」佐藤正衛の素直な「大谷村所見」太田歳夫の「仔牛」深尾廣造の「早春」等よき收穫を見せている。新人の勉強に反し同人の大半は不出品、中では松本泰水の「黄骨」望月春江の「冬果」が當面的だがよく纏り、穴山勝堂の「暮雨」は構図悪く、東山魁夷の

「南風」は力弱い。

第十七回全關西美術展(洋) 一日—十一日 大阪市美術館

大朝「一般に表面甚だ平靜である。過去を反省して疎かにされ勝ちであつた技術の修練に向つてゐるのは好いが清新の意氣には欠けてゐる。照山四雄「冬に求む」は内容に技巧が伴い、貞永直義「秋苑」の筆には情趣がある。高須國三「かへりみち」は人物画の基礎が築かれてをり、清水茂郎「運河」も技術的に進歩してゐる。長谷川傳「石佛」の表現法は部分的によく、長谷川初女「神戸の街」「漁村」の明快な觀照や筆法には望みがある。先輩では田村孝之介の「印度の娘」「印度の少年」が特に注意され、藤井二郎「伐材」はよくまとまつた佳作、小野藤一郎「湖風」には風の趣あつてよく、古家新は色調が明るくなつた。伊川寛の「娘」の觀照河野通「ねむり」の写実も看却し得ないし、米良道博「娘」の試みもうなづけるが、氣まぐれで終らないことを望む。山本直治「山麓」は成功とはいえないが狙いはよく、模範省吾の満洲風物数点は氏の健在を示す。

尾關聖丹齋個展(日) 三日—四日 名古屋・美術會館

第二回新京美術院成績品展 三日—十四日 大森・新京美術院東京分室

第十一回「春の青龍展」 三日—六日 日本橋・三越

東毎「注目すべきは竜子の二曲屏風片雙「牡丹獅子」である。いつもに似ず筆の走り過ぎたところがなく、絢爛豪華



に押し切つて描いてあるところはいい。  
坂口一草の雪國に取材した二点では「雪  
廊」を採る、構圖もよく情感も捉えられ  
ている。加納三樂は二点とも筆触粗く、  
山崎豊は達者過ぎて軽調、会場効果は弱  
いが木村鹿之介「雨煙」、少し堅いが市  
野亨「鷺」など佳品といえる。

安部治郎吉個展 (洋) 三日—七日 銀  
座・青樹社

第二回福島省三個展 (洋) 三日—十日  
銀座・養生堂

日本寫眞會展 三日—十一日 東京府  
美術館

造型版画協會展 三日—十一日 東京  
府美術館

戦艦献納彫塑展 三日—十一日 銀座・  
松屋

佐伯祐三遺作展 (洋) 三日—二十日  
岡崎・京都美術館

在瀟現地作家展 五日—八日 銀座・  
村松画廊

東海—多年満州にあつて精進する日本  
画の伊東顯、岡田鍊石、栗山博の三人が  
最初の東京進出、いづれも満州風物を描  
いたもので、岡田は「普寧寺の大佛」「瑠  
璃塔の碧佛」に手堅さを見せながらやや  
固定し、栗山の風景は特異な対象をとら  
えてまだ味に食ひ足りぬがハルピンの  
「教会」「街角」が佳い。伊東が中で一  
番動きがあるが器用にまかせぬ苦勞がほ  
しい。「閑談」一冊をとる。年一回東京  
進出を試みるとか、小展ながらその意義  
は深い。

松島「郎近作展 (洋) 五日—九日 大  
阪・美交社

第三回忠愛美術院展 (日・洋・彫) 五  
日—十八日 上野・日本美術協会

陶藝四大匠作品鑑賞會 (工) 六日—十  
一日 上野・松坂屋

第二十一回春陽會展 (洋) 六日—十八  
日 東京府美術館

東朝—金体によく粒がそろつてい  
る。とくに際立つた作品もないが、そうひと  
い層がなく、各室とも力が平均してい  
る。第一室にばかり重点を置かないで、  
主要な作品を散在させて会場の空気を引  
緊めようとした配列法も一應成功してい  
るようである。この会の仕事も作家各自  
の教養、趣味、年齢に應じて、世代がは  
つきりして来た。小杉放庵、石井鶴三、  
中川一政、木村莊八あたりを中心とする  
老成した趣味性の顯著なもの、水谷清、  
加山四郎、岡鹿之助、高田力蔵などを中  
軸とする活潑な造形面への研究、これら  
の人達よりもさらに若い層に属する中谷  
泰、吉田達磨等から一般出品者にわたる  
勉強の道程がそれである。小杉、石井、  
中川、木村の諸家はすでに、ある程度完  
成した人だから別に新しい問題があるわ  
けではないが、小杉の「金太郎」は久し  
振りの力作だし、石井と中川の小品紙  
本、木村の油彩「東京風景」四点も快適  
なものである。今のところこれ以上を望  
むのは一寸無理である。会の興味はや  
はり水谷、加山、岡、高田の四人に集中  
される。水谷の「帰郷」は群衆を扱つて  
相当の効果を収めているが、「はざまの  
秋」や「收穫童女」の方が特色がよく出  
ている。加山の四点中では小品の「初  
秋」と「麥秋」が面白く、「農家」は努力

の割合に繪圖的效果があがつていない。  
この点は高田の「鹿島神社祭礼」も同様  
で、その意圖は高く買入るが、作り物め  
いて平板になつてしまつた憾みがある。  
岡の三点は昨年のより遙によい。「村莊」  
「街道」「雪」いづれも滋味があり、し  
つとりとした古典的な味をたたえてい  
る。若い人のうちでは中谷の「農家の人  
人」、吉田の「孔雀」も注目すべきもの  
だが、入選作では兒玉彦三、豊泉恵三、  
金敏亀等のものが取上げられてよいだろ  
う。

〔入選数〕二一〇六〔入選数〕一六六  
〔陳列数〕二七二〔授賞〕豊泉恵三、角  
南松生、原田武男、兒玉彦三、伊川磨治  
目録 (〇印会員 △印会友)

窓辺南風 田家 秀雄 孔雀 吉田 達磨  
風景 三原 繁 耶馬の秋 達磨  
犬山祭り 寺沢 正畝 生花の時間 山田睦三郎  
カンナ同 風景 原田 武男 花と貝殻 同  
静物同 柳林同 鬼剣舞 (二) 山田 和樹  
水辺の遠乗 兒玉 彦三 網縹い 豊泉 恵三  
ロジヤ屋 同 多摩の奥 同  
ティツカル 同 牛 同  
出番を待つビエロ 同 春禽〇南城 一夫  
秋 富 同 花 同  
△吉田 達磨 夏の森 東 晴司

草履寺 稻熊 賢一 残照△本莊 起  
深田の石佛 三繩 文雄 諏訪湖畔の雪山  
卓上早茶 岩崎又二郎 伊藤 敏博  
信濃の雪 同 竹藪 中田 政夫  
厨房 山田 昇次 勢子 吉田貫三郎  
貨車 同 唱太鼓 徳田 宗忠  
思案 野村 千春 花 〇倉田 三郎  
少女 同 水際戦闘 (未完)  
秋景 森 松治 走る 同  
静物 同 祭礼 (鹿島神  
サーカス 同 宮御船祭)  
梅雪 伊藤 祝三 〇高田 力蔵  
植木棚 石田 正典 海岸〇栗田 雄  
家族△木下 公男 旧い屋敷 (未完)  
女と少年 同 花しようぶ 笠松 春彦  
女 同 あさがほ 同  
女 同 風景 松本 秀夫  
ぼけの花 〇新沼 杏一 山裾△小栗 哲郎  
△新沼 杏一 養魚場 同  
チューリップ 同 遊ぶ子供達 松村 禎夫  
豆腐屋 同 農家 関四郎五郎  
静物 同 須藤千穂子 伊豆風景  
鶏 同 鈴木 和子 池畔風景  
風景 竹崎重三郎 松尾醇一郎  
村山 密 白壁の駅 藤城 清治  
竹林 同  
室内 矢田 桂一

婦人像

野崎新右衛門

少女(1)

客席同

二人像同

熱河行宮同

○横堀角次郎

ハルビンの寺院同

熱河普樂寺同

ソフィスキー寺同

中央寺院同

晚春風景同

○中川 一政

枯枝に鶯同

○小穴 隆一

石に鶯同

鶯一羽同

粉雪降る丸池同

○足立源一郎

賀む集仙峯同

志賀高原笠ヶ嶽同

銀座なにわば同

し(夜東京風景ノ八)

○木村 莊八

花と果物同

大鷲神社祭礼

(同九)

○木村 莊八

浅草オペラ館夜

景(同十)

二人像同

優人樂屋(同十)

一)同

初夏の海

○小林徳三郎

盆の果物同

残照同

夕富士同

舞妓 旭 泰宏

靜物 山林 文子

會爾秋色

○前田藤四郎

東福寺の庭

龍安寺の庭

靜物同

高原 深沢 索一

庭先 片倉 健藏

春に向う景(伊賀古光山)

△田川 勸次

西芳寺枯山水

石組同

春に向う景(大阪股ヶ池)

同

花と果物同

大久保圭子

牧舎の前

佐藤 昌胤

アイヌ(出産)

同

燒岳同

深緑湖畔

能戸 幸

胡坐△遠藤 典太

田舎の家

同

村の露地

人物イ

長岡 一敏

夜 大久保一郎

農村風景

大中 芳正

關雞 古淵 正信

老人像

○北野 万平

少女同

むらさきの女

同

初秋△加山 四郎

薄 同

農家同

麦秋同

合歡咲く庭園

小泉倫之助

早春 曾根 徹

夏庭 宮田 武彦

漁村同

アトリエの片隅

(未完成)

金 敏 龜

朝鮮の家

同

三佛岩

同

靜物 佐藤 篤郎

庭 同

貝殼 A

川隅路之助

祇園祭

○川端彌之助

山餘巡行

同

つばき

藤野 竜

香落溪

同

山 同

收穫童女

○水谷 清

万壽山霞橋

同

燐郷

同

はざまの秋

同

牛 同

げんげ野

○國盛 義篤

新緑の山

同

街角寸景

秋口 保波

水芋の葉のある

靜物 中村 巽

柿 △岩田榮之助

花 同

相撲稽古

○石井 鶴三

初夏婦人像

江崎 元

少女と母

宮脇 晴

あららぎの村

川島昇太郎

水さし

山下 邦雄

家族 荒井竜太郎

網乾す人々

大森 滋

船と倉庫

田辺 謙輔

山湖

同

黒い豚

北 富三郎

室内 角南 松生

花 同

台所 同

熱河遺蹟(ボタラ遺望)

△高木 勇次

熱河遺蹟(大紅台)

同

屋上風景

袋口初太郎

花 △鬼塚 金華

樂馬△若山 爲三

騎手 同

古北口薄暮

○伊藤慶之助

鳥 同

万里長城

○伊藤慶之助

熱河承德

同

髮を梳く

△大沢鉦一郎

白壺 堀 千枝子

山へ行く道

有賀 紀典

南國の樹

飯田 衛

晩秋 宮下貞之介

ガラスと果実

酒井 昭子

眠る兒

猪瀬 正

村莊△岡 鹿之助

積雪 同

街道 同

花 山崎利津子

支那寺

小川 緑

窓 同

童女習作

河村 寅明

憩い△中谷 泰

山ざと 同

農家の人々

同

樂人 同

柘榴 上原 欽二

早春ノ畑

同

白馬△田中壽太郎

冬の群像

同

風景 福井 太郎

五月雨(日比谷公園) 西川 勝藏

鶯頭山を望む

三吉 亮久

夢殿 三吉 守

靜物 山本 朝子

牡丹小品

○今関 啓司

浅春山路

同

春來山田

同

秋果園

同

塀のある風景

△大嶺 政寛

裏庭 同

壺屋風景

同

雪 石井 光楓

花 伊川 鷹治

文樂の人形

同

魚 同

枯きび畑

増永 直樹

靜物 金 興 洙

蓮池 河野 重軌

婦人像

三雲祥之助

窓辺の靜物

同

童女の像

同

ばら 三雲祥之助

トランクなど

葉室三千子

土塀 木下 克巳

並木 中川 三郎

赤い縞

大谷 俊治

朝の窓

敷村 竜雄

枯無花果と池

原田平三郎

花と軍鶏

土屋 実

熱河のほとり

石黒平三郎

八ヶ岳

△土屋 義郎

枇杷 同

柘榴 同

霜枯の頃

同

秋山 尙雄

花 志村 一男

蘇州 松本 昇

漁村の少女

同

天津特一街頭

富重 親

(水墨)

雪晩△中川 一政

同

川蟹 同

山櫻類白

同

菜畑 同

万葉屏風



- |          |        |          |        |       |         |
|----------|--------|----------|--------|-------|---------|
| 菊        | ○中川 一政 | 庭樹       | 同      | 加賀孝一郎 | 遠足の日    |
| 獅々舞      | ○木村 莊八 | 池        | 松村 積夫  | 今竹 七郎 | 蔬菜 同    |
| 牧童       | 同      | 古堂 寺山 勇作 | 孔雀と子供  | 石井彌一郎 | 自画像     |
| 秋山       | 同      | 銀鷄春光     | ○小杉 放庵 | 金原 昌平 | 夏 靜花    |
| 金太郎      | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 舞踊諸姿     | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 風景       | 三雲祥之助  | 鶏小屋の中    | 福士幸二郎  | 中村桂太郎 | 雪の日     |
| 朝顔       | 矢野 眞胤  | 廣瀬 進     | 中條 顯   | 野見山曉治 | 静物      |
| からす      | 伊藤 善   | 板橋風景     | 泰山 人也  | 越智 雄二 | 岩 富成 忠夫 |
| カジャと貝殻   | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 北京風景     | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 江 河 廣    | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 草庵胡同     | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| ○上野 春香   | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 北京風景(前門) | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 北京風景(喜雀) | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 胡同(同)    | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 北京風景(總布) | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 胡同(同)    | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 水辺 加賀孝一郎 | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |
| 白衣の勇士    | 同      | 同        | 同      | 同     | 同       |

窓辺の金魚鉢 木のある庭 永露 勝 岡田 清  
小鳥小屋 藤雄 奥平 貞記  
田上 藤雄 奥平 貞記  
第四回青杉會展(日) 七日—九日 日  
本橋・三越  
就報「伊東深水の『白梅』は顔に氣品が足りないが身体の曲線に帶、梅の直線に配して佳調、山川秀峰の『静』は近時得意の舞姿だが、今少し色彩に強さが欲しい。小早川清の『田植時』は筆触やうるさく、田中針水の『春告魚』はまずまずといふところ。その他道具立てが多すぎたが遠藤藤可の『壺のある部屋』陳進の『燕』池田輝治の『春日』があげられるが總体に焦点のはつきりせぬ人物画が多いのを一考すべきである。  
第三回現代陶藝美術展(工) 七日—十日 日本橋・高島屋  
鈴木榮二郎比島スケツチ展 八日—十日 敬寄屋橋・日動画廊  
東海一ベタアン攻略戦に従軍したこの作家が、軍務の暇々に描いた著彩スケッチ四十余点が出陳されている。戦跡画につきものの暗い感じがなく、飽くまで明るく南国風物を愛情こめて描いている点はい。佳作は「廢墟と白い塔」「コレヒドールの宿宮」などペンを併用したものの。  
第四回國外美術院展(日) 九日—十八日 東京府美術館  
第三回新樹社展 十日—十二日 京都美術館  
第七回兒玉畫塾展(日) 十日—十三日 日本橋・三越

就報「海野旭世の朝鮮風俗『刺繡』は部分の難はあるが場中では出色、奥田元宋の『母子』は洋面臭が強い。受賞作品では藤原茂富の『秋雨』の狙いをよしとするも水面の樹影が重た過ぎ、多田瓊林の『冬の土』は地面の凹凸が甚だしい。その他森正元の『晴雪』三上巴峯の『月夜』米重忠夫の『宿雪』が挙げられるが、例年より活氣の乏しい展示である。希望の賛助出品では『清夜』がよいが多きれいすぎた感。  
藤島、梅原、安井作品鑑賞會(洋) 十日—十九日 丸の内・帝國画廊  
東朝一藤島武二は最近故人となつたが、これに現存の梅原竜三郎、安井曾太郎の二人を加えて洋面境の最高典型とすることは今日の常識である。大衆に良い作品をみせるといふ意味で、画商の催しとしてはまことに當を得たものである。  
藤島にはもつと俤れた作品があるはずだが、屋島を遠望した『朝霧』はその傑作というべきもの、梅原の『紅樓』や櫻島を描いた『朝輝』安井の『鶴原』や『三寶柑』等もかつて公開されたものではあるがいづれもみな代表作といえるであろう。  
第十二回塊人社展(彫) 十日—二十日 東京府美術館  
東朝一彫刻家の集團としては、みるべきものの一つである。ねらう世界は、あまりひろいとはいえないが勿体ぶつたポーズがなく、しづかに造形性を追求しようとする態度は眞面目である。だいたい小品の類や習作が主で、素朴な表現のうちには内面的な深さをあらわそうとしてい

る。安藤照、小室達、長谷川塊記、松田尙之、安藤士などの作品は動性や力感に乏しいが、質実なものである。  
現代日本画特別展(日) 十日—三十日 東京帝室博物館  
三巴會展(綜合) 十一日—十三日 銀座・資生堂  
開設三周年菊屋画廊記念展(日・洋) 十一日—十五日 銀座・菊屋  
第二回桂ユキ子個展(洋) 十二日—十五日 敬寄屋橋・日動画廊  
第八回煙土社展(日) 十二日—十六日 銀座・松坂屋  
柳聖會作品鑑賞展(日) 十三日—十五日 日本橋・高島屋  
〔會員〕鈴木清方、伊東深水、菊地契月上村松園、北野恒富、中村貞以  
第二回淡心會琵琶湖縮巻展(日) 十三日—十八日 大阪・大丸  
菅橋彦、北野恒富、矢野橋村建鑑獻金展(日) 十三日—十八日 大阪・松坂屋  
陶藝四大匠作品鑑賞會 十三日—十八日 上野・松坂屋  
第六回新美術院展(日、彫) 十三日—二十五日 東京府美術館  
東海一小林集居の絵巻撤回問題など起きたが、前年にくらべると点数多々変化もある。同人の連作中最も無難なのは田中樂山子の『日本名橋七題』だが、面白味は少く、鬼原素俊『軍神の母三姿』は力み過ぎて柔か味が足りない。いささか構圖散漫の憾みはあるが、茨木杉風『近江八景』及び民藝的な臭味はあるが、岡田魚隆森『山旅帳』など一應注目すべきだろう。新設の彫刻部は低調。

(日本画)「新興美術院第三賞」樋口英雄「同第三賞」三好光志「平野賞」山下日出子「奨励賞」中村盛芳、牧野雅彦、村山三魁、吉田欽之助、重松謙吉、岸本聖史郎

(彫刻)「奨励賞」宮島資雄、細谷好衛「新準同人」(絵画)三好光志、吉田欽之助、重松謙吉、村山三魁、樋口英雄

(新同人)岸本聖史郎、前田寛三、宮坂千蒼、中村盛芳、武田信義、牧野雅彦、瀬戸阿以二、松岡三慶、高村草樹、藤本顯見(彫刻)中川久三、細谷好衛、油井外熊、兒玉守弘

奈良縣美術協會展(綜)十四日—十八日 縣商工館

三十周年記念日本水彩展 十四日—二十五日 東京府美術館

東每—大正二年の創立から満三十周年になるといので、今年は會員、会友の作品を入会順に陳列している。古参では小品ながら中沢弘光「鏡」、八木岐羊「引野の池」など老巧であり石井柏亭の「崔承喜長鼓」の踊下図も面白い。中堅では荒谷直之介の「鐵山に働く」の堅実さがよく、古川弘「少女」の抒情調も悪くない。受賞作品では日本水彩賞高木重雄の早春と初夏の田園風景が種々な佳品であり、坪豊二「村童」、海老原省象「森」も新人として注目される。

李青萍個展(洋)十五日—十九日 銀座・青樹社

東每—中華に数少い女流画家の日本での第一回個展。油彩としては色感淡く物足りないが、それだけに女性らしい柔かさはある。「遠望」「芙蓉風景」など中で

は好小品というべく、大きいものでは「上海呂班路」が比較的難が少い。

泉峯洞會員近作工藝展 十五日—二十日 日本橋・三越

前田竹房蘭花龍展 十五日—二十日 日本橋・三越

熊谷守一、岸田劉生、武者小路實篤三人展(日、洋)十五日—三十日 名古屋後藤坂画店

第二回創作會新作油繪展 十六日—十八日 岡山・金剛莊

富岡鉄齋遺墨展(日)十六日—十八日 京都美術會館

第川回大阪市展(日、洋、彫)十七日—二十九日 大阪市立美術館

小林柯白新作画展(日)十八日—二十三日 大阪・大丸

小山敬三近作油繪展 二十日—二十三日 銀座・日動画廊

東每—晩秋から初冬、残雪にいたる上越から信州にかけての山々を描いているが、前回の海景を主体にした作品にくらべると、ねつとりした癖のある筆触が無くなつて氣持がよく、佳作は岩原の雪景及び「湖畔秋色」。特に前者の鳥獸的構図は注目に値する。

山本直治油繪展 二十日—二十五日 大阪・大丸

第二回岩手美術聯盟展 二十日—二十七日 銀座・松屋

金山平三作品觀覽展(洋)二十一日—二十四日 神戸画廊

第二回精華社日本画展 二十一日—二十四日 銀座・資生堂

第一回新人画會會員油繪展 二十一日

—三十一日 銀座・日本樂器画廊

東丘社「敵國降伏」繪卷展 二十一日—五月二日 大阪・大丸

第十八回燦本社展(日)二十二日—二十五日 銀座・菊屋

正統木彫家協會展 二十二日—三十日 東京府美術館

東京—眞面目に造型の本道を求める氣組みがあり、若い層の回を追うての向上も窺われてよいがともすれば核心を掴まないで、手先の技に溺れやすい木彫だけに容易ならぬ精進が望まれる。

沢田晴廣の「南方女人柱像」には、材質を生かした素朴で力強い美しさがある、手先の器用で刻み上げ磨き上げることに盲いた人達は、この種の美しさを学ぶべきである。

第十八回國畫會展(洋、工、写)二十二日—五月二日 東京府美術館

覽報—「絵画」國畫會には主觀的な色彩家が多く、會場の作品は豊饒な色彩情緒を競い、ここでは色彩が身振りになり化粧になつてゐるようなものだが、どこか人工的な色感に溺れて表面的な氣分だけを楽しんでゐるところがある。主觀の自由が謳われていた時代にはそれでもよかつたが、現実を強く直視しなければならぬ時代には、辻愛造、香月泰男、熊谷九善等のように、色彩の氣分だけで現実をいい加減に処理することは許されない。才筆の幾田つや子さえもこの慣習に染つてゐるのは惜しい。

土田文雄の「杏花」もいい加減な妥協。大森啓助の「荷役」はいい構図を掴みながらこれも表面的な氣分に終つて画

因の現実感を逸している。藤田太郎の「蘭」と「黄骨」は情熱あれど色彩計画への妙な関心のために凝つては思案に及ばぬものとなつた。宮坂勝の主觀的な色調には未だ身につかないものがある。青山義雄あたりになると色彩の念佛でもその練達の技巧で人を納得せしめるものがあるが、それでもそのトナリチの陶酔には「骨」がなくて有閑的に感ぜられるほど今の我々は強い現実感を意識してゐる。

情緒的な色調を求めながら相当現実を掴んでいる点で宮田重雄や杉本健吉はいい。また村上嚴の情熱には内面的なものがある。新同人の伊藤隆と林重義は技巧的な色彩遊戯に凝んだ空氣に一塵新らしい空氣を注入した調がある。庫田毅は一寸足踏みか。最後に梅原竜三郎は流石に氣宇が大きく、「骨」もあつて、氣分に溺れない知性の高さを示しているが、用紙と岩絵具とは画品を浅くしているように思われる。(森口多里)

東每—「工藝」北出塔次郎の山海文飾大鉢の眞摯な試作と鈴木清の秋稻草花文大鉢と扁壺の如きは本展觀の誇とすべき、山田詰の虎杖扁壺も健全な存在だと思ふ。綴小品では松井よし子の梅図をとりたい。素材の選擇と駆使に凡ならざるところを見るが、よし子の落款はなくなつたと思ふ。矢部連兆は例によつて臘染草花文の二曲屏風で溢く落著いた調子はうれしい。

林二郎の手元筆箱、ところどころに媒貝が効果的にはたらいて氣品を一層あげてゐる。平沼淨の懷石膳、盤胎の研ぎ出

しに味があり、吉本壽の紫檀材小卓は技術的に成功したものだといえよう。

(大隅爲三)

〔搬入〕絵画一三六二点、工藝四二〇点  
写真一九二点、版画二三〇点〔入選〕絵  
画一六七点(一八名)工藝七三三(五  
八名)写真三五五(二八名)版画四二二  
(三二名)〔陳列数〕絵画二二七点、工  
藝一〇八点、写真四三三、版画五四点、

〔新会員〕(絵画) 沢野岩太郎、(工藝)  
増田三男、(新会友) (絵画) 松本満史、  
中村茂好、澁川駿二、上田清一、宇治山  
哲平、久本弘一、山田千秋、橋本三郎、  
合田好道、鈴木正二、宗像逸郎、松田正  
平、福井敬一、南風原朝光、尾川尙達、  
内堀勉、東克己、(版画) 畦地梅太郎、  
下沢木鉢郎、前田政雄、関野準一郎、(工  
藝) 山田茜、森一正、古山英司、(國画獎  
勵賞) (絵画) 宗像逸郎、合田好道、南  
風原朝光、(版画) 加藤安、(工藝) 山田  
結、(写真) 故光村利弘、(F夫人賞) (絵  
画) 宗像逸郎、(褒状) (絵画) 川村滋、  
福留章太、(工藝) 森一正、富岡伸吉、  
古山英司、林二郎、吉本壽

出品目録 (〇同人)  
森 合田 好道 菊 山田 千秋  
丘の部落 同 秋の葉 同  
朝鮮の家 同 夏の花 同  
子供 中村 好宏 かぼちゃ  
街 同 〇大川 武司  
風景 福留 章太 焔 同  
蓮 同 白い壺 同

魚 南風原朝光  
緒方 掃庵  
伊豆山深秋  
無題 同  
福田昭太郎  
泰山と民衆  
無題 同  
藍那 細谷 重雄  
雪景 上田 清一  
砂山 同

沢野岩太郎

静物 同

稲畑 同

河ぞいの工場

鈴木 正二

崖下の工場

同

すすき野原

三木喜久子

壺・すすき・など

同

森と水

橋本 三郎

土器 同

タンデム

松木 満史

マントメリー

同

葦原 (夕)

川村 浩章

デッサン (油絵  
による)

東 克己

桐の実

〇庫田 登

松林 同

深秋 中尾 義隆

紅梅村

竜沼 青

泰山と民衆

無題 同

伊豆山深秋

緒方 掃庵

魚 南風原朝光

静物 南風原朝光

蓮 (紅蓮)

宗像 逸郎

蓮 (白蓮)

同

ぼんたん

和田 忠志

無題

〇喜多村 知

庭 同

塀と樹

同

梅園 日下 泰輔

剝庭 同

意 同

田園 金原 昌平

ガルド下の家

藤城 清治

鶏頭 花

相田 黄平

驟雨 海原 茂

鶏の原

山本 正男

裸木 遠藤 満男

窓 松田 正年

家 同

牡丹〇大谷 房吉

山麓秋色

同

黄壁の家

小泉 富司

藍那 細谷 重雄

雪景 上田 清一

稻波 三橋 健

小諸の町

白田輝四郎

冬・沼田

鈴木 清

並木 松

同

奥香落

〇辻 愛造

坊勢 同

無題 久本 弘一

姉弟 金子 三藏

腕つる少年

同

バラ〇仰木 茂

ヒヤシンス

同

花 田中 道久

ほうづき

同

バラ 服部 邦行

寺院 尾田 竜

畑 同

鶏と日蝕

〇國松 登

金環蝕

同

溪谷 日向 裕

子供 同

風景 加藤 祭一

山野万里

宇治山哲平

玖珠の景

窓辺

同

室内 阪野 博

竹 中村 忠二

寺 〇村上 巖

習作 同

男の像

同

静物 同

花と裸婦

福井 敬一

海女母子

同

ハルツバタ街景

大部 大藏

浅間雨後

〇土田 文雄

杏花 同

庭の小女

〇中村 鉄

紅葉の山

多田 信正

赤い帽子

森 菊男

吉則 同

ミシンの上の静

物 岡田 節子

春日 菅部 幸司

姑娘〇梅原竜三郎

北京秋天

同

理髪 同

花 柿野 平太

曇り日

月草 道子

橋畔 富田 民治

三聖寺池

〇小林 邦報

岩 (ロ) 同

岩 (イ) 同

農村の一部

〇柏木 俊一

金堂内陣

〇宮田 重雄

春陰 同

林檎〇久保 守

花 同

凌霄花 同

風景 大池 宗作

古赤絵

吉田 博一

初夏〇馬越舛太郎

牡丹 同

土佐の「さあち料

理」〇山脇 信徳

羅漢〇杉本 健吉

平等院 同

羅漢堂 同

沙千狩

松永 市雄

妹達 葉 國禎

秋相 同

橋原 康道

冬瓜 同

〇椿 貞雄

牡丹花 同

二〇

尾花 佐伯、信夫

桐の実

東 政雄

坊勢 浜野 信平

こども

大内田茂士

厨房の一隅

同

かご 島内 キミ

北京の秋

〇大淵 武夫

太白樓 (済寧)

同

蘭 〇藤田 太郎

黄昏 同

朱盆の海魚

棟方 志功

紅盆の鯉魚

同

駿河の春

伊藤 彌太

馬市 木下 勘二

雪の鍛錬

同

雪木 立

石川 藤助

ポップラー並樹

鳥雄 健

枯コスモスの静

物 〇山崎 隆夫

花瓶 同

白布の静物

同

風景 〇大森 啓助

荷役 同



朝輝(其一)山	朝輝(其二)海	智頭雪景	風景 小林 丘	チヌーリツア	室谷 早子	静物 原 信重	巖山〇熊谷 九壽	瀧 同	花(赤)	園 勇二	ナナの肖像	石丸 寛	谷上村 山本 万司	船 吉田 勇	ぼけ〇益田 義信	室生寺金堂内	虹 原田 成大	秋の静物	落葉 同	すすきと果実	梅花と壺	赤のセーター	万年 青	壺と貝殻
〇眞垣 武勝	同	松原 武雄	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
小倉山春景	土井 六郎	唐獅子	石井 照	静物〇青山 義雄	風景 沢田 直記	草籠 森國 昔彦	雄の剥製	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
花を賣る店(巴里にて)	奈知安太郎	習作 同	裸婦 同	雪の夜	風雪 同	窓 西村 麻	木 金子 幸正	雪 同	下宿の少年	波切風景	〇宮坂 勝	北京風景(1)	北京風景(2)	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
露店 加納 敬次	肖像 大田 壽	燕温泉遠望	六月の頃	茫秋 同	風景 鈴木陽之助	大壺のある静物	春信 二重作庵夫	春色 同	妙義山	〇河野 通勢	室内静物	〇養田つや子	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
妙義山	前田 政雄	溪流 同	無花果	耶馬溪 同	室内静物	〇川西 英	雪庭 同	峭壁 伊東健乃典	雁來紅	石崎 重利	雪(山村風俗)	萩原 吉二	網棚 山口 源	庭の静物	手賀沼	若山八十氏	雪積 川西祐三郎	山湖 畦地梅太郎	雪嶺 同	二つの追想像(A)	トンボの眼玉の著	者〇恩地孝四郎	同(B)氷島の著	仕立屋
黒木 貞雄	さばてん	同	万葉四季	年頭譚記「神祭」	板画卷屏風	〇棟方 志功	黄金堂和讃	山の仕事場	中川雄太郎	雪の岡	角野 誠治	伊豆宇久須の富士	〇平塚 運一	芦の湖畔	同	時雨 根市 良三	竹 同	畫(劍、立山連峰)	橋本 興家	黒布貝	関野準一郎	猫とらし	ま草 同	支那風景
下沢木鉢郎	炭焼 上阪 雅人	働く農婦	上野 誠	噴煙(一)	北沢 收治	同(二)	黒牛盤踞	下沢木鉢郎	岩窓 同	素玄版画老樹	上阪 雅人	落穂 川島 信生	夏日 佐藤米太郎	扶余落花岩	小野 忠明	那智瀧	岩島 勉	神苑の朝	棟方 末華	竜壺富貴之図	松永 茂	写 眞	草千里(阿蘇)	湯の谷(阿蘇)
〇長浜 慶三	紫陽花 同	竜(北京)	伊藤 憲治	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
林間〇福原 信三	野菜〇野島 康三	雪 同	或夜ノ印象	小林 淳	ボブラ樹	雲井 信男	静物 福田 勝治	梅花静物	同	芍薬 根本 元春	雙馬 小野 由行	日ざし	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
獨樂のある静物	ハナヤ勘兵衛	憩い 平井 康雄	海 錦古里孝治	杉本清四郎	魚骨 名倉 英二	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

- |          |           |             |            |        |          |         |       |          |        |          |         |          |         |          |          |         |          |          |        |         |           |            |          |        |         |          |       |        |        |          |         |           |        |
|----------|-----------|-------------|------------|--------|----------|---------|-------|----------|--------|----------|---------|----------|---------|----------|----------|---------|----------|----------|--------|---------|-----------|------------|----------|--------|---------|----------|-------|--------|--------|----------|---------|-----------|--------|
| 無題 西條 美樹 | 花 藤井 辰三   | 網 ○北角 玄三    | 花 齋木 幸子    | 花 同    | 支那服の女    | ○中山 岩太  | 主題肖像  | 同        | 尾根の印象  | 朽木 光綱    | 信州峠 同   | アルミニウム   | 中居 正躬   | 陳樹 三村 幸一 | 池畔 竹見 義雄 | 遺作ラタダ   | 遺作シマウマ   | 同        | 工 藝    | 菊文様陶額   | 浅蔵五十吉     | ハンドバック(茄子) | ○稻垣稔次郎   | ハンドバック | (燕) 同   | 開春十二題(染) | 同     | 扇面飾小屏風 | 井上 秀雄  | 食籠 犬飼 島子 | 菜の花蒔絵小笠 | 練上手壺      | 上村 占魚  |
| 彩色百日草角宮  | 新開邦太郎     | 彩色どくだみ六角宮 同 | 印花陶枕       | 新垣 榮盛  | 香合○鈴木 青々 | 萩の図火鉢   | 鈴木 清  | 草花図角瓶    | 同      | 草花図角壺    | 同       | 盒象嵌梅之図   | 杉浦 芳樹   | 香爐 関谷 志郎 | 葱 高梨徳三郎  | 葡萄帶留    | 高木 進     | 香爐 田中 芳郎 | 椿の図大皿  | 高田傳一郎   | えんどう文染小屏風 | 談議所榮二      | 組鷲の香筒    | 寺 利郎   | 農試壺前の富有 | リウカリ水瓶   | 帖佐 美行 | 陶 壺    | 天坊 武彦  | 白磁花器     | ○富本 憲吉  | 色絵六角飾箱(赤) |        |
| ○富本 憲吉   | 色絵六角飾箱(紫) | 茶入(袋付)      | 白磁瓢形花器     | 同      | 柿之図大皿    | ○徳力孫三郎  | 柿之図飾箱 | 同        | 柿之図飾箱  | 同        | 菜之花図大壺  | 同        | 絵奏り湯吞三箇 | 中川 泰藏    | 花文茶碗     | 同       | 香爐○内藤 四郎 | 椿飾皿 同    | 蔬菜文角鉢  | 中島 源雄   | 手元簞笥      | 林 二郎       | 盛籃 林 尙月齋 | 乾漆飾盆   | 浜口 廣氏   | 魚文盛器     | 畑谷 関山 | 十字華文小面 | 長谷川 昇  | 花子帶上金具   | 浜 達也    | 竹研出し懷石膳   |        |
| 五客 平沼 淳  | 竹研出し丸卓    | 同           | 鑄造アルミニウム水瓶 | 平館 大英  | 香合○平野利太郎 | 刺繡名古屋帶三 | 点 同   | 型染小屏風(一) | ○廣本 長子 | 型染草花二曲屏風 | 同       | 型染小屏風(二) | 同       | 型染小屏風(一) | 同        | 葎硯箱     | 古山 英司    | 花の図壺     | ○福田力三郎 | 橙果の図鉢   | 同         | 橙果の図陶宮     | 同        | きびノ図蓋物 | 同       | 初霜刺繡小屏風  | 富岡 仲吉 | 籃胎飾小箱  | 古川 潤二  | チーブルセンタ  | 1梅 古戸 忠 | 茶箱ぼけの花垣   | 増田 三男  |
| 香爐山菜羹    | 増田 三男     | 鉄香爐 同       | 田舎家大壺の     | ための三連作 | その三水指    | 水野 脩吉   | 白菜図陶額 | 森 一正     | 蔬菜文陶額  | 同        | 茶箱絵タリヤ局 | 山田 結     | 黒釉象嵌虎杖局 | 白化粧搔取タリ  | ヤ局壺 同    | 黒割防人宇多方 | 壺 同      | 雲華象嵌水指   | 山崎 宗元  | 雲華四時蘭象嵌 | 同         | 名古屋帶       | ○矢部 連光   | 座ぶとん五帖 | 同       | 二曲屏風     | 同     | 彩漆香合三種 | ○山永 光甫 | 彩漆梳十客    | 同       | 万字透文桐六方   | 卓 柳原 肇 |

堆漆華文硯箱 梅 松井よし子  
山田 豊 水指 水野 修吉  
畫額 横尾 彰 乾漆落葉絵茶壺  
象嵌茶盆 吉本 壽 染色小屏風あぶ  
象嵌紫檀卓 らはむの物語風  
同 景園 渡辺 禎雄  
第九回朔日會展(洋) 二十三日—二十  
七日 銀座・村松時計店  
第七回 第二回中部彫刻聯盟會員作品展 二十  
四日—二十九日 名古屋・松坂屋  
月明會日本画展 二十五日—二十七日  
銀座・資生堂  
第一回扶桑會春季展(洋、工、書) 二  
十六日—二十九日 銀座・菊屋  
大東南宗院展(日) 二十七日—五月十  
一日 東京府美術館  
東朝—南宗画を何ういう風な形式で現  
代に生かしてゆくか、これはなかなか難  
かしい問題だが、ここに統帥小室翠雲の  
苦勞があるわけだろう。  
組織は日滿支三國の同志を結合し、若  
千の洋画家も参加してその量の多いこと  
と、会場の華かなことでは大展覽会の威  
容を示しているが、傾向があまりにまち  
まちで、どこに重点があるのか主眼がは  
つきりしない憾みがある。  
青年作家層が不振なので、結局やはり  
翠雲や既成作家の矢野橋村、水田竹園、  
小川千鶴、水田硯山等の出品が際立つて  
見える。  
第二回九曜會陶藝美術展 二十七日—  
五月二日 京都・大丸

本間國生水墨画個展(日) 一日—六日  
日本橋・高島屋

第二十九回廣島縣美術展(日、洋、工)  
一日—十日 廣島縣・産業奨励館

第八回京都市展(綜合) 一日—二十日  
京都美術館

大毎—第一部日本画、京都派というよりは少くもその形式においてはわが現代日本画の縮図といふべき多様性をもつてきたといつていい。薄弱な稀薄な無用に引き伸ばした退屈なものが段々に追放されてきたがまだ日本画のあらわさと思うものとの様式との調節が問題となつてゐるものが大部分のような氣もするのである、安心して自己の画風にまかせきつてゐるといふのがない、神泉の「西瓜」平八郎の「柿紅葉」などその大胆な新様式は自他ともに許されてゐることが却つて焦燥がなく幸福な地位を與へられてゐる、そこへゆくと第二部洋画は反対に氣なものでもかつての新様式輸入に迎接の暇もないくらいであつたのが時局柄その途が絶えたのか、そういうものを追つかけては悪いのか、ただ自己の途を内省しつつあるのであらうか至極無事平穩である。

本年の第三部彫塑は珍らしくその入選数を増した、これまで一番手薄であつたこの部に春が訪れた氣がしたがどれと取出すほどの作にもあつた、第四部美術工藝が大いに奮発して審査員総会出品などの特別室をしつらえたりなどした、結局総合的な融和は少しもないものに終つたがこれも止むを得ないこと、時節柄資材制限が最も直接に響くこの部門

が却つて活氣を呈しそれを克服してゐる、辰秋の「溜漆の飾棚」などみるからに頼もしさを感ぜしめた。

〔授賞〕(日本画)「くぬぎ林」小野路青

「春近し」加瀬桃徳「母と娘」河瀬恭之

「飛捷便り」田代 正子「丘」中田 晃陽

「鶏」猪原大華「晴日」鄭末朝

〔洋画〕「湖畔早春」伊藤泰造「燈火管制」服部喜三「風景」西田靜子「人形」西村五郎「少女」豊浦良子「二の瀬の家」奥田仁「鈴蘭燈」田村清一「大文字山」安阿且「春の山路」柴原富造「残雪」嶋戸繁

〔彫塑〕「猷矢」野呂天潤「首」沢野基良

〔工藝〕「梅」稻垣稔次郎「大根之図」大壺 徳力孫三郎「乾漆豹ノ箱」奥村究果「庭の一隅・染屏風」楠田撫泉「盒」八木純文「麥秋節棚」山田豊「茄子文角壺」鈴木清

三井コレクシヨン展覧(陳列がえ)

一日ヨリ毎土曜 平河町・同邸

第一回佐那具陶磁器研究所陶磁器試作品展(工) 二日—十日 大阪市立美術館

第十一回寶林社繪画彫刻展(洋、彫) 二日—十二日 東京府美術館

第三回今村實士水彩画個展(洋) 三日—五日 銀座・村松時計店

第十六回構造社展(彫) 三日—十五日 東京府美術館

東朝—この会は従來会員の共同制作を得意としてゐるが、ことに今年あたりはそれが必要であるのに、習作めいたもので会場を埋めてゐるのはさびしい。

齋藤素庵は薄肉を二点と「轉出」と題

した小品を出してゐるが、それはいづれも癖のない穩健なものである。中野五一の井上正夫の肖像は、これも無難な作である。なお目にとまつた作品を拾うと、

佐野信雄の裸婦立像小口節三の胸像などがあり、齋藤吉郎の諸作がある。

〔搬入〕一三七点〔新会員〕小口節三、佐野信雄、森本清水、瀬戸圓治〔新会友〕齋藤吉郎、谷口百馬、樗造賞、小口節三、佐野信雄、森本清水〔研究賞〕齋藤吉郎、谷口百馬、林勘五郎

新古典美術協會展(洋、彫、工) 三日—十五日 東京府美術館

第十五回第一美術協會展(洋) 四日—十六日 東京府美術館

生産擴充現地報國美術展(日、洋) 六日—十一日 京城・三越

第八回東北美術展(日、洋) 六日—十日 仙台・齋藤報恩會博物館

東谷桃園日本画個展(日) 七日—九日 銀座・村松時計店

中川紀元・佐野繁次郎二人展(洋) 七日—十日 銀座・資生堂

青年美術集團展 七日—十一日 銀座・銀座書店

橋・高島屋

東朝—頭で描く人や塗る人は多いが、

栖鳳の如く天賦の才をもつて自然の核心を的確につかんだ者は古來稀である。故人は実に輕妙洒脱に風景を、鳥獸を、魚介を、蔬菜を、描いた。今回の展覧は十七、八才頃の初期の作から晩年の作にいたるまで各年代のものをよく蒐め、小品漫筆の他に「あれ夕立に」、「河口」、「職

合」等の代表作までがよくそろえてある。宮家御貸下の三作も、至妙の藝を至す名品である。

目録

三笠宮家御貸下 海幸 絹本横額

久邇宮家御貸下 緑池 絹本横額

李王家御貸下 水墨金山寺 紙本横額

芙蓉 紙本水墨 明治十三年

魚村晚晴 紙本屏風 明治二十二年

春郊歸牧 絹本立水墨 明治二十六年

觀 花 絹本著色 明治二十九年

秋山暮靄 絹 本 明治二十九年

掃去來 絹 本 明治三十年

磨園春色 絹 本 明治三十二年

楊柳觀音 紙 本 明治三十六年

猿橋秋露 紙 本 明治三十七年

アレク立に 絹 本 明治四十二年

櫻 雲 紙 本 大正三年

天女(舞樂) 扇 面 大正三年

祇園會山鉾 紙 本 大正四年

東山晚霞 絹本水墨 大正六年

惜 春 絹 本 大正七年

河 口 絹 本 大正七年

歌かるた 紙 本 大正十年

祇園會神輿 絹 本 大正十年

柳蔭暑氣薄 絹本水墨 大正十一年

金色界 絹本著色 大正十三年

魚肥山果熟 絹本著色 大正十五年

林塘飛雪 絹本著色 大正十五年

矢の根 絹 本 大正十五年

三保春晴 絹本著色 大正十五年

小 春 絹 本 大正十五年

石 佛 紙 本 昭和二年

柳 鷺 紙本水墨 昭和二年



楊州登夏	紙本著色	昭和三年
臘月	紙本	昭和三年
燒鯛	紙本	昭和三年
瀝園扇	絹本	昭和三年
泰郊	絹本	昭和三年
千代田城	絹本水墨	昭和三年
潮來風色	絹本著色	昭和五年
冰中魚躍	絹本	昭和七年
漫筆二十作		
一、潮來出島	十一、偶作「煙草	
二、偶作「月見草	十二、著聞集一話	
三、芋の子	十三、同	
四、偶作「鉄鉢	十四、同	
五、惜春—小石	十五、智度論	
六、馬に乗る狐	十六、偶作「鯛	
七、金色界	十七、偶作「木佛	
八、湯原漫筆—柳	十八、猫と鼠	
九、湯原漫筆—蛙	十九、銷夏逸興	
十、秋	二十、閑窓漫戲—	
觀世音	錦	
寒雀	短冊	昭和八年
海日	絹本	昭和八年
蕉風	紙本著色	昭和九年
柳鷺	絹本	昭和九年
燕に風	絹本	昭和十年
酒匂川の富士	絹本	昭和十年
満林秋色	紙本	昭和十一年
祝皇軍南京	絹本	昭和十二年
入城	絹本	昭和十二年
春日野	絹本	昭和十二年
水墨山水	絹本	昭和十二年
秋の一日	絹本	昭和十二年
柳蔭雜居	絹本	昭和十三年
雀のお宿	絹本	昭和十三年
兎	絹本	昭和十四年
野月	絹本著色	昭和十四年

海の幸	絹本著色	昭和十四年
雨後	絹本	昭和十五年
二竜争球	紙本	昭和十五年
白梅	絹本著色	昭和十五年
艶陽	絹本著色	昭和十五年
孟宗山見送り	絹本著色	昭和十五年
家鴨	紙本著色	昭和十五年
水墨山水	紙本	昭和十六年
潮來	紙本水墨	昭和十六年
梅花小禽	紙本	昭和十六年
慈母	紙本	昭和十六年
鼠	紙本	昭和十六年
海の幸山の幸	著本著色	昭和十七年
春雪	紙本	昭和十七年
第三回尚美堂獻納画展 (日)	十日—十一	
二日 丸ノ内・帝劇画廊		
第二回兜屋鑑賞會 (藤田嗣治近作六		
点) 十日—十五日 銀座・兜屋		
第一百二十一回美術協會展 (普及彫刻)		
十日—十六日 日本美術協會		
第四回風土會展 十日—十九日 銀座・		
日本樂器店		
第二回青鸞社展 (日)	十一—十三日	
銀座・養生堂		
御眉會日本画展 (日)	十一—十四日	
銀座・菊屋		
日本漆藝院展 (工)	十一—十五日	
日本橋・三越		
稻垣勇次郎魚の繪画展 (日)	十一—	
十六日 大阪・大丸		
第六回翔鳥會展 (日)	十二—十六日	
上野・松坂屋		
第七回學月社展 (日)	十二—十六日	
日本橋・白木屋		
第八回燧土社展 (日)	十二—十六日	

銀座・松坂屋		
第四回廣展會工藝美術展 (工)	十二日	
十六日 銀座・松屋		
第十四回造型藝展	十三日—十六日	
京城・三越		
三宅克己五十年懷古水彩画展 (洋)	十	
四日—十八日 数寄屋橋・日動画廊		
一水會小品展 (洋)	十四日—十八日	
銀座・青樹社		
第三回双台社展 (洋、版)	十四日—二	
十五日 東京府美術館		
東海—この第三回展は生産拡充と増産		
に関する課題画を二室に特陳とし、會の		
中心である石井柏亭の「肥料夙荷造」を		
はじめ同人それぞれ工場に、炭坑に増産		
めざして働く人々の姿を描いている。瀧		
川太朗「長野縣種畜場」はちよつと苦し		
いが、描写の面白さはあり、須山計一		
「鍛工作業」も表現は弱いが、工場作業		
を描いた中では注目される。		
第六回大日美術院展 (日)	十四日—二	
十六日 東京府美術館		
東海—青木は、今度「神國日本」とい		
う題で、「天地の初発」「大光明神」「大		
和島根」「木花佐久夜昆貴」「靈劍」と題		
する五部作を出している。これは「古事		
記」を元とした一種の空想画で、いつも		
のとおり、いや、いつも以上の、力作で		
あり苦心の作であり綺麗に出来てはいる		
が、惜しい事に写實的なところが却つて		
失敗になり、肝心の神秘感が出ていない		
ところが失敗である。惜しいことであ		
る。さて結城素明の「牧獲」も、川崎小		
虎の「砂丘」も、さすがに貫禄はある		
が、もう少し力が入った作を見せてほし		

い、と望まれる。殊に川崎のは物足りな		
い。それから、伊藤神章の「救護班」は		
技術に効いところがあり、綺麗事すぎる		
が、一通り出来てゐる。また清水保二		
の「戦機熟す」も、肝心の迫力がないけ		
れど、幼稚ながらも、眞面目なところがよ		
い。また、「山樹」の作者、五十嵐撥一		
には、もう少し覇氣がほしい。さて紙数		
の都合で、他は略して、山田皓齋の「日		
本の國」(この題は少し大袈裟である)		
と沖中陽明の「丘の家」は、申し合せた		
ように、鳥獸風で、おとなしすぎるが、		
山田のは大きさが出てゐるところが、沖		
中のは構図がまとまつてゐるところが、		
取り得である。つまり結局、たとえ失敗		
しても、いつも力作を出している、青木		
が、青木の絵が、いつも、今度も、大日		
美術院をひとりて背負つてゐる綱がある		
所以である。そうしてこの青木の地まな		
い熱心のために、少しづつではあるが、		
大日美術院展覧會の一般の絵が、年ごと		
に、よくなつて行くのはわれ人ともに喜		
ばしい事である。(宇野浩二)		
〔撥入〕二四五点〔入選〕七七点〔大日		
賞〕清水保二、五十嵐撥一「毎日賞」伊		
藤神章「奨励賞」北村泰山、岡部敏也、		
田中千恵子、岡崎朋園		
辻利平油繪展 (洋)	十五日—二十日	
大阪・天賞堂		
第二回勤勞人繪画展	十五日—二十四	
日 京都・産報會館		
第二回長原坦個展 (洋)	十六日—十九	
日 銀座・菊屋		
清風會竹器展 (工)	十八日—二十二日	
日本橋・三越		

第一回明顔美術人展(日) 十八日—二十三日 銀座・銀座ギャラリー

第二回工藝模範會作品展(工) 十八日—二十三日 上野・松坂屋

福陽美術會展(日) 十八日—二十三日 銀座・松坂屋

第二回畫業戰士繪畫展(日、洋) 十八日—二十三日 京都・大丸

第七回海洋美術展(洋、日) 十八日—六月二日 東京府美術館

現代工藝美術名作鑑賞展(工) 十九日—二十三日 日本橋・高島屋

青丘會新作畫展(日) 十九日—二十三日 日本橋・高島屋

浜田庄司近作陶器展(工) 十九日—二十三日 京城・三越

第一回富山文協公慕展 十九日—二十三日 富市・大丸富山店

勳王烈士顯彰展(形) 十九日—二十日 東京府美術館

東海—出陳百点あまりのうち小品が多いたため予想より落着きのある展観ではあるが、吉田松陰七点というような企画性のなさは一考を要する。石井鶴三の試作浮彫の如く松陰と其門下というのであるがまた創意を感じず、同一人物を全く異つた風采で表現するといふのはどうかと思う。佳作は安藤照の隆盛、喜多武四郎の華山。  
林鶴雄油繪發表會 二十日—二十三日 岡山・金剛莊  
新制作派協會會員春季展(洋、形) 二十日—二十四日 数寄屋橋・日動画廊  
読報—絵画部各会員はそれぞれ廿号の力作を出品して元氣さを示している。

現代美術展覧會 (昭和十八年度)

ずれも相当に見應えのすることは欣ばしい。猪熊弦一郎の「カイユの花」は色彩の新鮮を構成に一段の進境を示し、小磯良平の「母子像」は地味な色彩の階調の中に技法の余裕を示すものである。佐藤敬の「少年航空兵」は戦争下に相應わしい取材であり人目を惹いている。内田巖の「春芳」は従来光を追求めてきたこの作家の一つの轉機として注目すべき作品である。彫刻部は技術を内面的に昨年より掘り下げようとする傾向が著しく現われ、今年の精進振りは非常に好感が持てる。本郷新の「婦人像」は堅実な造形の追求の中に典雅な香りを見せていて場内の佳品である。舟越保武の「胸像」は更に精巧を加えてしかも氣品を持ち、吉田芳夫の「習作」は写實的な追求としてこの作家の持味を生かしている。佐藤忠良の「子供」は神経の整頓した細かさを感ぜさせる。

第七回日本壁畫會(洋) 二十日—二十四日 銀座・青樹社  
森寛齋遺作特別展(日) 二十日—六月五日 恩賜京都博物館

寛齋五十年忌を記念して開催。今回の展観では寛齋作品百余点に併せて、森派の祖仙、徹微、一鳳等の作品をも陳列した。主要なるものは次の如くである。

画題 所蔵者  
松間瀑布図 京都 飯田 新七  
青砥藤綱、西行図 同 市田彌吉郎  
夏冬山水図 大阪 泉 吉次郎  
業平八ッ橋図 同 同  
群仙図 京都 采野 爲吉  
草花水禽図 同 大橋 四戒

藤房・楠公図 同 河原林栄三郎  
富岳図 同 紀 藤兵衛  
足柄山図 荻市 菊屋 孫輔  
嵐峽図 大津市 木村 栄蔵  
婦去來、赤壁図 大阪 住田 正雄  
高山彦九郎追賊図 京都 瀬川 次郎  
人体的異人図 京都帝大内 尊 攘 堂  
嵐峽明洞、苑 大阪 田中 太介  
中観音左右瀧図 京都 寺村助右衛門  
深谷松林瀑布図 大阪 豊島 久七  
周防國白糸瀧図 京都 中川 伊作  
竜 同 西尾 得賢  
都名所図 同 西村 專助  
應神天皇神功皇 京都 野村権右衛門  
后武内宿禰御像

中観音左右釈迦達磨図 同 野村 徳七  
菊花鶴図 同 同  
養老孝子図 同 藤田惣太郎  
敬養群馬図 同 堀 健之助  
春草犬図 荻市 八木 馬太  
京人形図 京都 山口 玄洞  
天狗園茶図 同 同  
第五回綏尚會展(日) 二十一日—二十三日 丸の内・帝國画廊  
橋田庫次近作展(洋) 二十一日—二十三日 銀座・養生堂  
土橋醇一佛印スケツチ展 二十一日—二十五日 銀座・菊屋  
現代大家新作日本画展(日) 二十一日—二十五日 日本橋・三越  
仲田菊代個人展(洋) 二十四日—二十日 東海—前年の個展からみて進歩は認められるが、婦人像は二点とも余り感心できない。風景では海辺を描いた二点より

「冬のゴルフ場」が生新でよく、最早この作家と切り離すことの出来ない花と果実では、小品「白薔薇」に新味があり、「戸外静物」も清楚な美しさをもつ佳品。

第三回九室會展(洋) 二十四日—三十一日 銀座・日本樂器店  
日本美術協會展(形、工) 二十四日—六月二日 日本美術協會  
玉村万久斗個展(日) 二十五日—三十日 上野・松坂屋

東海—曾て雨月物語を絵巻に描いたこの作家が、久しぶりで武者絵を手がけている点は注目される。「爲朝の郎党主人の弓の弦を張る」の飄逸、「砂浜散兵」の輕妙な筆致もさることながら、佳作は比較的地球に描き込んだ「乱戦」「赤装隊」「戦いのひま」の二点も悪くない。

第一回有人會展(日) 二十五日—三十日 銀座・松坂屋  
會宮一念鑑賞展(洋) 二十五日—三十一日 丸の内・帝國画廊  
福田憲一新作繪畫鑑賞會 二十六日—三十日 日本橋・高島屋  
第三回邦画一如會展(日) 二十六日—三十日 日本橋・三越  
田中實三「海と船」展(洋) 二十七日—三十一日 大阪・天賞堂  
美術文化展(綜合) 二十七日—六月六日 東京府美術館

東朝—過去の概念や形式を清算して、新たな態勢をととのえようとしている。まだ統一的方向は明示されていないが、再生復興の意図はうかがわれる。神話その他の古典思慕、あるいは開拓とい

つたような題目が扱われているのも、その一つのあらわれであらう。福沢一郎の「國引き」は少し沈鬱だが相当の力作であり、山の断層や地層を描いた素描も面白い研究である。古沢岩美の諸作は逞しい仕事にはちがいないが何か原色版をみるような感じである。なお目についた作品を拾うと、杉全直の連作「森」、小川原脩の北海道屯田兵を主題としたもの、寺田政明、吉井忠、堀内規次、米倉壽仁等の作がある。

〔入選〕一二九点・六八名〔授賞〕堀内規次、白井千秋、大塚隆、田中義凡、野田恵惟、手沢熊一、幸壽、吉田泰雄(會員推薦)杉原正巳、内藤健一、金河健、原田隆、

須田國太郎、小林和作二人展(洋)二十八日—三十日 岡山・金剛莊 讀畫會(日)二十八日—六月七日 東京府美術館

東朝一画因や着想に新味があるわけではなく、大部分は普通の花鳥画であるにすぎないが、態度もおだやかだし、技術も平均してそろっているから、靜かに鑑賞ができる。荒木十畝の「けし」はさすがに画品があり、西沢笛畝の「七面鳥」朝井觀波の「園棲」田口黄葵の「落花」木本大果の「櫻」等ともかくもみるべきものである。一般出品では須田春浦の「菊」や松井黎光の「双鸞」が克明な写生の技巧を示している。

第二十二回朝鮮美術展(綜合)三十日—六月二十日 朝鮮總督府美術館  
「審査員」飛田周山、石井柏亭、羽下修三、松田権六〔參與〕李象範、堅山坦、

加藤俊吉、金段錦、山田新一、遠田運雄、日吉守、三木弘、浅川伯敬、戸張幸男、

第一 一〇三 二五 七六 七  
第二 四九 八六 二九 二八  
第三(彫) 二六 四〇 一六 九  
第三(工) 一七 三七 七九 五

〔無鑑査〕(第一部)五、(第二部)八、(第三部)彫塑一、(第三部工藝)六、

## 六月

第二回山の繪展(洋)一日—五日 銀座・日本樂器店

池田遙邨個展(日)一日—六日 日本橋・三越

兵庫縣新美術聯盟會員作品展(綜合)一日—六日 神戸・大丸

勝田哲南方寫生展(日)一日—十日—京都市美術館

ウキリー・ザイラー近作繪画展(洋)一日—十五日 赤坂・ドイツ美術アトリ

現代佛印美術展(洋)二日—六日 日本橋・三越

東朝一佛印美術の最初の紹介として、小規模ながら、繪画、彫刻、工業の各部門が一通りそろっているから、これでだいたいその全貌はうかがい知ることができる。すでに一家をなしている作家ならびに美術学校生徒の作品を選抜して招來したといふことであるが、先ず画の方で油絵、水彩、日本画、版画等があり、工藝に漆の屏風や陶器、彫刻に石や木もあつて、かなり多方面にわたつてゐる。画と彫刻は中に未熟なものがあるけれど、

も、工藝ことにフランスのデュナンあたりの指導をうけたと思われる漆藝は特殊な発色と感覺の美しさを有ち、図柄にも民族的な趣味が面白く出ている。図画は普通の写生と挿絵の原画らしいものがあり、とくに細本の風俗や風景に地方色がうまうま表出されている。彫刻は量は極めて少いが、ジョンシエールという作家の如きはバリ美術学校の出身で、油絵のアンゲンベルティとともに、いわばフランス植民地美術界の指導者格である。前者の青銅小品や後者の田園風景などは場中

第四回龜陶會展(工)二日—六日 日本橋・三越

浜田庄司、河井寛次郎新作陶器展 二日—六日 日本橋・高島屋

東海一浜田庄司が盆子に窯を築いてから相当になるが、その豪放大胆なる諸作は胸のすくような快感を與え、單純な文様は釉藥に調和し、寛次郎のものにみるような典雅さはかくが、はきれそうなる力と健康が浜田の身上、河井は京都の感覺、庄司は東京のさつぱりしたところにあると思ふ。

第二回京都市立美術校研究科作品展 二日—六日 日本橋・高島屋

長谷川春子作品展(洋)三日—十五日 丸の内・帝國劇場

熊岡義彦近作個展(洋)三日—六日 岡山・金剛莊

第十四回舊義會展(日)四日—六日 銀座・菊屋

第二回平工藝展(工)四日—十五日 東京府美術館

辻工務工藝展 六日—九日 銀座・資生堂

第五回現代美術展(日、洋)六日—十日 東京府美術館

正泉得三郎近作油繪展(洋)八日—十二日 日本橋・三越

東朝一手頃の小品三十二点、旅の風景や花の靜物があつてある。あたりまへの写生で、いわゆる巧緻な画ではないが、楽しんで描いているのと、日本的な情趣のあるところがいい。風景、靜物ともにもう少し構圖の變化を考えて欲しい。殿島の大鳥居や、宇治川、阿蘇、太宰府などの景観を描いたものが面白く、その他極く小品に好ましいものがある。

望月雪三個人展(洋)八日—十二日 銀座・青樹社

山口玲潔新作繪画展(日)八日—十三日 大阪・大丸

堀忠義油繪個展 九日—十三日 日本橋・高島屋

日本画小品展 九日—十五日 日本橋・三越

第三回日本女子美術院展(日、洋)九日—十八日 東京府美術館

神保俊子個人展(洋)十日—十二日 銀座・資生堂

第十回創造美術協會展(洋)十一日—十五日 銀座・村松時計店

皇道美術文化展(綜合)十一日—二十日 東京府美術館

東海一勸皇烈士彫塑に對して、これは日本画による一種の歴史画を主体にした展覧であるが、第一回展のためか作品未著が多くその点興を殺ぐ。見るべきもの

二六



は太田臨雨「雲浜の妻」、江崎孝坪「麻須良男」など。歴史画以外では桂月の山水、竜子の花がやや形をなしている程度。油彩では須田國太郎の海辺風景がちょっと面白い。

第二回火曜會油繪展 十二日—十六日  
丸の内・帝國劇場  
第八回渡邊大虛水墨個展(日) 十三日—十五日 銀座・養生堂

白鳳會油繪展 十三日—十七日 銀座・青樹社

第七回日本彫刻家協會展 十三日—二十日 東京府美術館

東朝一別に大した力作があるわけではなく、いわば習作展にすぎないが、仕事は眞面目である。裸婦より小品の首に佳作が多く、たとえば林是の首、片山義郎の女の首など、その他川上金次や笠原恒彦のものもがみられてゐる。なお沢村吉光の裸婦立像がちょっと目立ち、雨田光平の作がとくに個性的で、ラオコーンの苦澁を思わせる。

十九世紀佛蘭西六匠小品展 十五日—十九日 銀座・兜屋

東朝一近來めづらしい快適な鑑賞展である。点数はわずかに六点点だが、いづれも巨匠の片鱗を示す、良質の小品で、印象派のルノアール、ピサロ、後期印象派のセザンヌ、ゴッゲン、新印象派のムーラがそろい、なおアンリ・ルツソオが一枚加わつてゐる。作家と鑑賞家にとつては、本格的な絵の研究として、参考になるところが少くない。これに一つでもゴッホの作品が入つていれば、さらによかつたであらう。

第三回瀟瀟社小品展(日) 十五日—十九日 上野・松坂屋  
富田家男刺繍展(工) 十五日—十九日 日本橋・三越  
第一回六藝社油繪展 十六日—十八日 銀座・村松時計店

赤城泰舒水彩画展(洋) 十六日—十九日 銀座・養生堂

毎日一承德の風景を中心とした近作十一点の展覧。水彩画壇の長老だけに堂々たる仕事ぶり、喇嘛廟の雄大な景観はじめ、承德離宮の城壁、普陀宗乘廟大紅台など、大陸の澄明な空の下に美しく描き出されてゐる。内地風景では那須山麓を描いた「高原深春」が佳作。

第八回日本山岳協會展(洋) 十六日—二十日 日本橋・高島屋

柏原覺太郎、榎倉省吾、高井貞三三人展(洋) 十六日—二十日 銀座・日本樂器店

毎日二科の中堅柏原、榎倉、高井の三作家による第一回展。いづれも内地風景より同時に旅行したらしいハルビン風景が面白く、柏原覺太郎「ハルビンの冬」高井貞二「ハルビンの街」などまず佳作といえる。榎倉省吾では新美術家協會出品画の再陳と記憶する「冬ざれ」がいが、「竹林」も清新な好小品。

戦時下風俗画展 十六日—二十日 銀座・松屋

毎日一挿絵画家協會の主催で、戦時下に激変しつつある風俗を主題にした展覧、簡素美の表現といふところまではゆかないが、風俗変遷の記録にはなる。岩田孝太郎の戦時下女性風俗三題は、い

さきか綺麗事にすぎたが、田代光の素描淡彩は中々の勉強ぶり。石井鶴三「應召」木村莊八「防空演習」は流石に達者なものである。

武者小路實篤日本画展 十六日—二十日 日本橋・白木屋

第三回田村一男個展(洋) 十九日—二十三日 銀座・青樹社

毎日一地球な画風であるために、官展では目立たないが、個展でまともてみるといかにも誠実な自然観察である。前回個展に比して今回は色感が一層豊かになつており「二月の夢科高原」はじめ「初夏の横岳」「新緑の頃」などの佳品を示している。

第六回大輪画院春季展(日) 二十日—二十七日 新宿・三越

読報一画壇の一方に堅実な歩みをつづけている大輪画院の第五回春季展では、時局材料の關係もあるが、二尺の横物に全部が凝つてゐるのは、見る者に非常に氣持よく感じられる。主宰小林彦三郎の「櫻花」と「山楓」は、おそろかな味にこの人らしい重みがあり、構図に於て「山楓」の方を取り、色調に於ては「櫻花」を取る。立脇泰山の「女小出夫」は時局を取材したものであるが、表現に新鮮さが乏しく、楠泰白光の「聖城」は四味ままだはまだの感。佐々木順の「首夏」は構図にもう一考を要す。こうして同人の作品をみると、年々進歩の跡はみられるが、尙一層の研究を切望する。西之坊水勢の「八重椿」は重く花輪玉甫の「出漁」は暗い。宮本薫華の「筑波を望む」はこの調子で進んで欲しい。

宮岸長司の「椿」黒沢春穂の「春日」はともに出品中の佳作であらう。

第十二回版画協會展 二十日—二十九日 東京府美術館

第三回創元會展(洋) 二十日—三十日 東京府美術館

毎日一前二回の展覽会にくらべて、若干会員が会の主流になつたためか、穩健な官展的作風の中に一脈の清新きが出てきている。中でも第一室榎戸庄衛は勉強で、「無題」「投影卓上」の二点はいい。大貫松三は達者だが、少し画面が薄手の難があり、須田壽も「室内裸女」は兎も角「門前」は色感鈍く感心できない。元老の方では鈴木千久馬、中野和高が注目される。前者の「黎明」は通俗に陥りやすい富士を眞正面から描いて或程度成功して居り、後者の「少女座像」も伸び伸びとした筆触で悪くない。会友では倉橋英男「首夏山村」が大きい画面をよく処理した佳品であり、川口四郎の室内から窓外を描いた二点もしつとり落着いた画調。岡田一馬は大陸風景三点より「野尻湖畔」がよく、一般出品では藤橋正枝の「画室の窓」を佳作として挙げる。野口良一呂造作では白日会出品の「きじ」二点が注目される。

「搬入数」一二五七「入選数」一二九「授賞」西村保史郎、田辺門樹、古川昌一、石塚三郎、恩田孝徳、

菊地友一屏風繪展(日) 二十一日—二十四日 銀座・菊屋  
小川マリ個展(洋) 二十一日—二十五日 銀座・日本樂器店  
第九回新東亞美術展(洋、彫、骨) 二

十五年

夢  
十昭  
四  
年利

第三回文展出品

山形駒太郎展（工、染）二十三日—二

十七日 日本橋・高島屋

第三回有秋會日本画展 二十三日—二

十九日 大阪市立美術館

角谷紫紅新作日本画展 二十五日—二

十七日 岡山・金剛社

昭華會日本画展 二十五日—二十七日

丸ノ内・帝劇画廊

沢田宗山作陶展 二十五日—三十日

日本橋・三越

藤島武二遺傳展(洋) 二十六日—七月

一日 美校陣列館

遺族の手にある風景スケッチ十點、デ

ッサン十九點、未完成油絵五點等に美術

学校蔵の初期の作品四點を加えて展覧さ

れた。第一級の作はないが油絵やスケッ

チには創作過程を思わせる面白さがあり

絶筆となつた「巫女」はことに注目すべ

き作であつた。

西本白鳥個展(日、洋) 二十六日—三

十日 銀座・日本樂器店

石井鶴三繪画彫刻作品展 二十七日—

三十日 銀座・養生堂

六耀會新作工藝展 二十九日—七月四

日 大阪・大丸

第三回直土會展(彫) 三十日—七月五

日 東京府美術館

朝日—會の支柱であつた建昌大夢を喪

つた後ではあるが、みな力を落さずに元

氣である。大体において、やはり師の系

統をひいて、すなおなものが多く、若い

人のうちでは曹圭泰の「裸婦立像」小松

彌六の「坐せる裸婦」北地莞爾の「男の

立像」などが無理のない佳作。中堅どこ

ろではやや固いが安田周三郎や建昌寛造

がよい方である。三木凱歌、大須賀力あ

たり上部の人は小品でなしに、もつとま

とまつた力作を出品すべきであらう。

〔授賞〕北地莞爾、曹圭泰、小松彌六、

藤庭賢一。

## 七月

第一回松尾醇一郎個展(版) 一日—四

日 銀座・菊屋

東海—春陽會の異色ある版画家が近作

二十餘点による最初の個展。注目すべき

は都會風景で、物淋しく交又する鉄路を

前景にした「都會風景」及び「停車場」

は墨一色で鋭く深みのある画面をつくつ

てゐる。淡彩を賦したものは「葡萄棚

のある家」が雅趣あつてよく、「ブレス

のある静物」の滄い調子も悪くない。

第十回清光會展(日、洋、彫) 一日—

四日 銀座・養生堂

東朝—選りすぐつた一流作家の近作が

出品されてゐるわけですが、特に画格の高

いものがそろつてゐるが、特に飛び抜け

た作はない。八點のうちでは安田寛彦の

「行基菩薩」安井會太郎の「ばら」梅原

竜三郎の「姑娘」がそれぞれ個性の豊か

なものだが、中でも寛彦が殊にすぐれて

ゐる。坂本繁二郎の二點は小品ながら盛

味がある。小林古徑は目録には記されて

ゐるけれども不出品。

第一回青雲會展(日) 二日—四日 銀

座・村松時計店

中森兄妹「地上一展(洋、彫) 五日—

八日 銀座・菊屋

山下新太郎近作發表會(洋) 五日—十

一日 銀座・美交社

關向美堂主催小品展(日) 六日—八日

丸の内・帝劇画廊

岩下三四繪個展 六日—八日 銀座

養生堂

山下竹齋新作日本画展 六日—十一日

大阪・大丸

長谷川利行遺作油繪展 七日—十一日

日本橋・高島屋

第九回九元社彫塑展 七日—十四日

東京都美術館

東海—前回の試作「綠地と造型」に次

いで、今回は井の頭公園の綠地を想定し

ての課題作品をその配置図(著彩スケッ

チ)とともに示してゐるが面白い。佳

作は村井辰夫の「道祖神」奥山泰堂の「神

農」の二作。その他の作品では森大造の

セメント製造「大地の恵み」、長沼孝三

のレリーフが注目される。

第二十回愛知社展(綜合) 八日—十日

名古屋・朝日會館

五姓田芳柳遺作展(洋) 八日—十一日

芝・日赤博物館

東京—会場にも目録にも單に五姓田芳

柳筆「明治年代史画」としか誌されてい

ないが、芳柳には一世と二世とがあつ

て、ここに展覧されてゐる史画の作者は

明かに二世である(森口多里)

松下民紀、西田藤次郎二人展(洋) 九

日—十一日 銀座・養生堂

東朝—うまく調子の合つた二人展であ

る。兩人ともなかなか技巧家で、感覚も

清新である。松下の力はやや小磯良平を

思わせる要領の良さが、西田の方は

厚塗りが内容的な美しさをみせてい

る。

松下の作では「雨が来る」「黄衣」「画

室にて」などがよく西田のものでは「水

蓮二点と「栗」「雪山」「白日葵」などが

注目される。

第四回園展(日) 九日—十八日 大阪

大阪美術館

耕人社展(日) 十日—十二日 京都美

術館

京都—旧早苗會を解散して、有志によ

つて組織された耕人社の第一回展を見

る。

出品作品四十點。

案本一洋の「出汐」は、磯岩に碎くる

夕潮に新月を配した、いつもの人物と

違つた豪宕な取材と放胆な構図である

が、潮に濡れた岩の描写に、今一步の迫

真が欲しい。三宅風白の「南進」は、驟

雨の中を南へ船出す御朱印船と、帆

をひきしぼる舟を描いたもの、形式的な

中に余韻もあり一つの躍動美を捉えてい

る。

中野草雲の「残雪」は破綻はないがや

やまとまり過ぎてゐる。高木富三の「麦

秋」は取材、努力は多とするが、いくら

か色彩に負けてゐる。

若い人々の作では齋藤和秀の「志摩夕

至」大谷喜興子の「浴後」三木文夫の

「春声」齋田一秀の「山村」などそれぞ

れの努力の跡がうかがわれ印象に残つ

た。第一回展としては、調子もよく揃つ

てをり纏まりを見せた穩やかな作品が多

いが、それだけに今一步格を破つた若々

しい迫力を今後へ要求したい。

第一回日本陶磁器工藝技術協會試作品

展 十日—十六日 日本橋・三越

森川杜國遺作展(彫、工) 十日—二



現代美術展覽會（昭和十八年度）

三〇

十五日 奈良・帝室博物館

三創會染織工藝品展示會 十一日—十八日

六日 日本橋・三越

福田眉仙水墨畫展 十二日—十五日

名古屋・朝日會館

東西名家扇面日本畫展 十四日—十七日

銀座・朝日ビル

東朝—總數十五点ばかり、東西の大家と中堅どころがそろつてゐる。小さい扇面だから、もちろん金力量は出ていないが、いずれも丹念に描いてある。裝飾面として好ましいものが少くない。

南画系統のうちでは小室翠雲の夏と秋、矢野知道人の山水があり、人物では中村大三郎と伊藤小波、草花では森田沙夷、田中咄哉州、宇田萩邨、森白甫、金嶋桂華、吉岡堅二等季節の花を可憐に扱つたものが多い。なおこの他には西山翠嶂の茄子、案本一洋の大和絵風の湖水風景がある。

坂田虎一、櫻田精二二人近作展 十四日—十八日 銀座・青樹社

毎日—文展系の若手坂田虎一、櫻田精一の近作各六点による展覧、前者は旺玄社時代からみると技術的に進歩しているが、睡蓮を描いた作品いずれも画面に密度が足りず、比較的成功したのは「睡蓮と子供」。後者は全体に色感の鈍いのが難だが、中で「禽舎」は佳作といえる。

吉川晴二遺作素描展（日）十四日—十八日 日本橋・高島屋

第一回廣島美術協会展（洋、彫）十六日—十九日 銀座・資生堂

林悽南・野間仁根・能谷守一日本畫展（日）十六日—二十日 銀座・日動画廊

須田國太郎油畫展 十九日—二十三日

大阪・美術新論社

きつつき會展（版）二十日—二十四日

銀座・青樹社

第二回浪速畫人展（日）二十日—二十五日 大阪・大丸

第一回岡技保存資格者作品展 二十日—二十五日 京都・大丸

聖戰下日本畫展 二十日—二十八日

上野・松坂屋

海洋繪畫寫真展 二十日—二十九日

新宿・三越

東朝—「海の記念日」に因んだ展覧會である。写真の方は別として、繪画の部ではやはり油絵が量質ともにいい。力作というほどのものは見当らないが、黒田頼綱、石川滋彦、田辺穰、高橋亮、内堀勉、渡辺武夫、宮川仁、それに水彩の中西利雄など、いずれも海や海洋生活を相当よく觀察している。

日本画はいつたい版画めいて平板だが、村松乙彦、酒井亜人あたり先ずみるべきものである。

山本蘭村南方個人展（洋）二十一日—二十五日 銀座・菊屋

東海—二科所屬のこの作家旧姓山本直武が應召して南方に従軍中、その寸暇に描いた佛印、ジャワ、スマトラなどの風物スケッチを中心にして展覧、油絵は帰還後に描かれたためか感銘うすいが、水彩及び鉛筆に淡彩を賦したものは「ふたり」「白衣」等二、三面白い作品がある。

船越好文山岳展（写）二十一日—二十五日 日本橋・高島屋

現代大家水彩畫展 二十一日—八月二十日

銀座・日本樂器店

第七回律動展油繪發表展 二十二日—二十五日 銀座・資生堂

石川欽一郎個展（洋）二十六日—二十九日 銀座・日動画廊

木下孝則人物畫展（洋）二十六日—八月一日 銀座・美交社

加納三樂個展（日）二十七日—二十九日 大阪・高島屋

京都當代陶藝巨匠名作展 二十七日—八月一日 大阪・大丸

西村卓三新作畫展（日）二十七日—八月一日 大阪・大丸

第四回秋田美術同人展（綜合）三十日—八月一日 秋田・魁新報社

八月

紀元素型グループ展（洋）二日—六日 銀座・青樹社

東海—新制作派所屬の作家による「紀元」から会場その他の關係で派生したグループの第一回展。全体に素描は氣の利いたものが多いが、油彩は猪熊の模倣が多く余り感心できない。中では小田晴子の風景が調子が弱いが清楚でよく、津田出之「姥子小春」は色感鈍いがまずまず取上げられる。

産業戰士慰問新作日本畫展 三日—七日 日本橋・高島屋

上田尚雲齋新作竹藍展（工）三日—八日 大阪・大丸

第二回信濃美術協會展（綜合）五日—十日 上野・日本美術協會  
毎日—彫塑に清水多嘉示、日本画に秀

畝、曲江などがおり、工藝まであるが、縣人会的な附き合い出品の域を出ず、四部の中では洋画がやや形をなしている。

村上誠「雪景色」瀧川太朗「花」宮坂勝「波切風景」など調子を落していない点はいいい。不折と晚霞の遺作では前者の素描、後者の「信濃の春」が注目される。

新構造小品展（洋、彫、工）八日—十二日 銀座・青樹社

第二回新樹社展（日）十日—十五日 大阪・大丸

中島美沙緒新作洋畫展 十日—十五日 大阪・大丸

關西バステル同好會展（洋）十一日—十七日 大阪・三越

王様生産美術展（洋）十五日—十九日 銀座・青樹社

毎日—クレヨンで知られている王様、商會従業員による作品（水彩及び油彩）を展示している。さすがに身近な作品が比較的多いが、中では古橋文武の水彩「朝の閉扉」及び佐藤辰治の油彩「クレヨン研究」が素人の域を脱している。職場以外の取材では名取満四郎「人物」が出色。

第五回乾坤社展（日）十六日—二十四日 上野・東京都美術館

東京—矢野知道人（橋村）の「或日の太乙」はさすがに主宰者たる貫祿を示して居る。太乙が柿盛人の村童に草を取らせてその行を戒める所を画くもので、技法にも人物描写にも柔軟な弾力がある。柿の大枝の下に童兒を一人づつ前後して蹲居させて居る所に空間の前後上下のひろがりもある。併しこの面の景物や構図



III

(富永惣一)

彫塑「二科」の彫刻は、今年は主な人達  
が「若鷺讀伊」の主題をもつて造つてい  
て、元氣一ぱいである。だがまだ彫刻的  
内容が平行しないので荒れてざわざわし  
ている。永い間、美術は「如何に」が中  
心の問題であつた。そして今日此頃は  
「何が」問題になつてゐる。院展は「如  
何に」に重点を置き、二科は「何が」に  
関心を寄せてゐる。まだ「何が、如何  
に」という点に、ぎりぎりの精進をあま  
り見受けないのは淋しいが、二科では、  
渡辺義知氏の「征くぞワシントン」が  
一番問題にまともなぶつかつてゐると  
思つた。衣襲の処理に難點はあつたが、  
総体に強く剛直な感じは、なかなかいい  
と思つた。笠置季男氏の「若人よ空へ征  
け」、八柳恭二氏の「空の神兵」は、今一  
押苦しみか欲しいし、大西金次郎氏の  
「空の守護神」には、様式の決断を求め  
たい。

(本郷 新)

〔搬入数〕(絵画)二〇一(彫塑)一五  
二〔入選数〕(絵画)一八五(彫塑)二〇〇  
〔授賞〕(絵画)伊庭傳治郎、劉啓祥(彫  
塑)大橋浩吉

夏 同

伽藍

▲向井潤吉

愛蓮亭

○錦  
妻一郎

同利

陶工の家

鈴木 幸雄

頁三

アネモネ

簑掛島

四万風景

リモーシュの朝

海岸の夕暮

室内

有島氏藏

横ヶ嶽の雪

家  
細川氏

回顧陳列終り

襖せゆく人形共

予海図松田

▲鳥崎 鶏

櫻花園

同

細をすく村  
荒木  
道

農家

大場



草上鼓手	瀧本 正男	雨来る海岸	飛火野の森	少年航空兵の頭	農婦 道下 長七	丘 秋永 洋一	夏の武蔵野	北京什刹海印象
蓮綴る乙女	青木 治平	◎鍋井 克之	◎浜田 葆光	△中堀 正孝	野砲挽馬 木下 正彦	犬に親しむ人々	大越 正美	秋山良太郎
厨房にて	▲吉井 淳二	奈良の秋	溪の藤	我等が母校の空	農婦 廣瀬 不可止	水泳録成	家庭菜園	農村の少年
妻の頃	同	春寒箱根の富士	浅茅ヶ原より三笠山を望む	△大橋 浩吉	決戦服 松本 章	紅 葉	小川庄之助	△内海 九郎
枇杷の頃	同	狩野溪流	絵を描く女	ッドB24六機撃墜報告終り	勤勞奉仕 東村 正久	△御供 長夫	黒川 健二	あかつき
蓮田の自画像	平 勇雄	河畔 同	山 門	征くぞワシント	手旗 長谷川雅司	牧場 細田 浩	船 長谷川三千春	母 子
室内 高橋 進	鶴岡 義雄	溪流 同	○酒井 亮吉	航空有功章	救護班 妹尾健太郎	屋上菜園	△高山 道雄	△浪江勘次郎
高原の娘	同	梨咲く村	村の小川	集立つ若鷹	絵画 山口 南草	△加藤 荷義	村の大詔奉戴日	征衣万里
早春暖日	▲遠山 陽子	湖雨欲晴	牡丹(黄の背景)	空の神兵	港 山口 南草	水蜜桃	△飯藤 静尾	鈴木 三郎
白雲と馬	瀧川 武雄	壁面下図	◎坂本繁二郎	豊穰を祈る	地圖を背す	△伊藤 潤尾	△飯藤 静尾	紙 花の翼
馬と草	▲高岡徳太郎	花の香	▲東郷 青兒	若鷺来る(郷土訪問飛行を迎ふ)	待機 森 由太郎	△水清 公子	△飯藤 静尾	△新井ふみ子
水と馬	同	たかめの草花	◎横井 礼市	増産への進軍	防空服の婦人	かすみ網	芝野 武男	△野村 守夫
救護班	河野 通紀	河原の湯(葛温泉)	同	汗 ▲上田 曉	らんとせるの少女達 平井 康正	無題 戸川 串田	水浴 小林 良曹	△井上 覚造
縁雨 藤井 傳	耕 子	庭 家永勝之亮	◎福島金一郎	戦友の顔	棒の村 加藤 雪子	おやつのひとつ	近藤長三郎	△藤田金之助
新生ビルマ	▲田村孝之介	淡路島	同	△野水 信吉	群集習作	立像 齊藤 愛子	相馬の護國觀音	△阿部 金剛
街景 讃木 右祐	波山 夢丘	空の守護神	△柳田 昌	造船工 藤島 茂	石切場への途	薄暮急襲	△吉田 一雄	防番面のある風
M嬢 松本 正子	○服部正一郎	大空の決戦へ	▲松村外次郎	應徴士ノ像	水郷黄昏 朴 成煥	かまど	△中島 寛二	林 同
國上山(秋)	▲正宗得三郎	山門の朝	▲十亀廣太郎	憧憬の空	早春 福井 勇	ヒマのある風景	日高 健泰	ソロモン回廊よ
金時山 同	同	同	同	同	同	同	同	リ 山路 眞護
同	同	同	同	同	同	同	同	△坂 宗一
同	同	同	同	同	同	同	同	スマトラにて

山本 蘭村	休暇 伊勢田良作	手洗場	△坂本 益夫	藤井 八郎	夏の庭にて	田代 泰三	△柏原寛太郎
物	蓮子の肖像	杉浦嘉太郎	自衛團	十輪院石佛	△佐々木宗一郎	自轉車屋	忠靈塔建設
ハーバート	△藤川 榮子	蓮花図	大鹿 秋夫	岡田 岡因	街頭 大矢 悦子	同	△清水 刀根
ワグナー	温室の一隅	尾崎悌之助	テシ草探り	朝の牡丹	原田 筑紫	雨の農家	芭蕉 村尾 克巳
南の田園	△加藤タキノ	敵前渡河	相馬 清	就合 出口 実	宮内 秀雄	進藤 清	窓 横田 之子
△村田實史雄	北支の子供と老	森 英	山村の早春	果樹園	市場 伊東市太郎	雲のある風景	緋隊行く
空 ○吉原 治良	人 瀬川美津子	奥入瀬溪流	アバイ	果樹園	たそがれ	飯島 八郎	有田 徳一
火山 同	少女像	鍛冶屋の町	小谷野半二	晩 内田 吉郎	岩むら	静かなる湖畔	○松井 正
祈の曲	原 勝四郎	△田川 寛一	働く女(果物撰り)	室内(七蕙庵)	窯場にて	△山本不二夫	ヒマを作る
残雪	花谷 時子	湖畔 筒井辰之助	△有隅善郎	岡本 耕介	柴垣 俊義	初秋の古利根	△高須 國之
△桂 ユキ子	野外鍊成会風景	岡ふ少國民	眞夏の花	静物 曾我 芳子	防空 近藤 歌子	泊り 長谷川初女	山 郷
物語 赤松 俊子	服部 弘	西出 外吉	梅原 英子	菜園小景	古川 誠逸	林間耕作	△石丸 一
二人	芍 藥	農家の一隅	北市場の老人	半夏生	△津田 周平	秋 清水 茂郎	夏 △大沢 昌助
△伊川 寛	獻納の山	川田 茂	柳沢 松一	姉 妹	△西阪 修	小屋と柿の木	秋 同
山門小雨	○榎倉 省吾	怒 濤	田植 葛西 康	造船の話	海の見える梅林	△川有智良三	食べて居る
浦富の海	結氷の黒竜江	同	△西村千太郎	△西村千太郎	上野山 充	石切場	雨の京町
△加藤 敏子	母 平野 尙	桃 同	初秋の卓	田植 小川 勝藏	ひるさがり	玉蜀黍	風景 新木正之介
春雪 鳥取 敏	岩のある風景	女と静物	平野 弘	炭 礦(B)	山 蘆の村	久保 進	微風 横地 直子
けし 畑	欽山戦士	△熊野 俊市	炭 礦(B)	白銀 功	冬 森	間瀬 謙平	千里眼佛像
朝 井上 孝治	志 摩	△土岐 國彦	山 蘆の村	久保 進	池 畔	△中野安治郎	今村 春吉
蝶 森 繁	湖岸のまひる	岩田 道雄	△下高原龍巳	犬市場(比島)	△小林 武夫	池 伊庭傳治郎	漁村の人々
作品 1	△下高原龍巳	犬市場(比島)	△小林 武夫	池 伊庭傳治郎	鐵鋼二部作(一)	出銑	△市野長之介
静 物	△椎塚猪知雄	伐 材	梅 丘	△山本 秀臣	鐵鋼二部作(二)	造塊 同	藪かき
天守灯影	多木 透哉	鍛冶屋サン	暮色の沼	伊勢雄次郎	硝子洗ひ	宮永 岳彦	花 △鈴木 國威
庭園 西山 閣二	ウンベ・ウレ	長 草	北京の胡同	伊勢雄次郎	硝子洗ひ	宮永 岳彦	花 △鈴木 國威
頃 兒玉 勝次	△長 草	柴田又太郎	北京の胡同	伊勢雄次郎	硝子洗ひ	宮永 岳彦	花 △鈴木 國威

写生する少年

花賣り

原田 直康

田中 嘉三

立姿 増永 壽美

騎馬 戦

整 備

八重垣逸郎

△寺田 栄枝

田の草取り

スラバ市街の

常田 健

屋台店

野外保育班(二)

征海 稻垣 志行

高根沢政子

第三十回院展(日、彫) 一日—二十日

東京都美術館

朝日—書けば小言の方が多くなるが今年も絵画部の同人二十六名中十名の不参加者を出したのはよくない。文展は悪く

いえば鳥合の衆、よく見ても社会的集團

で、誰が出そうと出すまいと今では問題

にする程の氣持も起らぬが、院展となる

と岡倉傳統の旗幟の下に相寄る一族だ

けにそうしてまたその傳統の意義が大

るだけに、それだけ口惜しい。靱彦、青

邨の不參加も相當の空虚さを感じさせる

が、昨年の「女客」の翌年だけに吾々が

如何に期待したか、遊亀女史は知つて居

るだろうか。古徑は出た。しかし近年の

古徑の画想はやゝ潤渇を思わせる。様式

のきうは東、きうは西式なるも氣に

なる。今度の「牛」は院体風のかたい画

で、無論試みの一作に相違あるまいが第

一にいのちの線が死んでいる。序にいう

が南宋院体などというものは國家崩潰前

夜のスタイルであつたので、あんな細

いスタイルをとすると連中が狙う氣が

知れない。それから今の画壇は新味とい

うことをひどく大事が、新味は想念

にせよ、技巧にせよ、永遠に生きる新味

現代美術展覧会 (昭和十八年度)

であつてこそ本統の新味であるので、その新味はまた無初以來の古いもの、丁度

眞理のやうなものであることも忘れて

いる。岳峻君は「展覧会の作品は常に問

題でありたい」という論者で、身を以て

信條を実行するそうだが、出して来る作

品は丁度こしの「まひる」の蜻蛉のよ

うに、ぬきさしならぬ大石の上に膠着し

ている。土牛の「鷹」千毅の「五月雨」

みないけない。そのいけない同人達の作

品の中に思はず眼を見張るのが青坪の

「竹筍」である。今應挙、まづ取敢ず此

の名を呈上することにした。内面的な

のは何もない、しかし如何にも物がよく

観てある、平八郎のような作爲もない、

正直一逼、それで青竹と丈高く伸びた竹

の子との諸相を、葉一つ交えずガツチリ

と捕えている。万斛の涼味、臭味のない

手法にも勉強家でなくては得られぬ誇え

が見える。三良も一寸ほほえましい図を

作っている。いつもの田圃はやめて、ポ

カリと老瘦と二人の娘とが横物の中央に

腰を下ろして居る。三人の間にうまさう

な山葡萄とあけびの「山の夢」。竹田に賛

でもさせたらと思われる構図で、果物に

かつている現下のわれわれには何より

の贈物だ。画家達よ、時には少し我々を

喜ばせて呉れ、戦争画や歴史画を以て遮

二無二士氣を鼓舞するだけの力がないと

すればせめて錯覚的に口腹の満足感でも

與えて呉れ。恥かしいではないか、諸君

は余りに腹の減つたやうな絵を見せ過ぎ

るではないか。

大観の「中秋無月」は難解の絵であ

間、觀衆等しく紛糾の世の中との全交渉

を絶たれて、耳も聾となつて釘附けにな

るのは大観の名に捕われたのではない。

例の墨の地隈に操られる面期的不可思議

の色調によつて一酌の冷水を頭から浴せ

かけられるからである。「沈々地露淋沈

地露淋、沈々淋々沈地露淋、月なき秋の

遣る瀟々や」偉大なる予言者天心がこの

歌を作つた時の心境は大観ひとり知る。

今この詩を絵に翻訳するに當つては、宿

世誤つて画家となつた英雄大観の胸中に

何物かが無くてはならぬ。

離々と形容するには余りに疎かな各一

莖の女郎花とかやつり草。大観うねりに

うねる杉葉にかえて、欄の落葉さえ散り

交る明々暗々の不思議の夜の世界に身を

投げる松虫一匹の大芝居。画中に声を描

く事の得意な大観の絵にして、淋との音

も聞えぬは松虫あれとすねたか、それと

も絶え入つたか。松虫は屈原の魂には

よもあらじ。ただ謎は難解なる程面白い

と、幾返りまた画前にたたずむ。

大家中家の業績を点検する半面小家中

の天才の卵を拾うのも展覧会の使命であ

る。昨年拾つた卵の安谷茂彦は今年まん

まど孵化して稚雞の「淵黙」に片言交り

の新古典主義を世に問うている。靱彦こ

こにおいてか後勁あり。とはいつても茂

彦さう早く天狗になるなよ。第一額がま

ずい。人物画の中心は顔、中にも眼とい

うことをわすれるなよ。植草実の「吉田

松陰」は千篇一律だが、青邨張の齋藤達

雄の「蠶」はこしもよくて、桑の葉を

奉納図、眞野満の「みほとけ供養」、四

夷星乃の「見」、石本光朗の「殿戸峠」、森

田曠平の「廣沢の冬」、四田綱水の「山ノ

湯」、守屋多々志の「陸奥の宿(順序不同)」

もう一つお負けに木村道治の「雨声」飯

島柳三郎の「苗代」のたどたどしいものま

でも挙げて、來年を待つとしようか。

くれぐれも諸君、荒鷲のつもりで倒立

になれ、古い本も読め、大観先生の画境

の高きをも汲め。彫刻部の新人辻晉堂の

アトリエには「俺がやらなきや誰がや

る、今やらなきや何時出来る」という壁

書自説の貼りつけてあることも、受賣な

がら傳えておく。

終に一言すると、現代は何としても画

家志望者が多すぎる。二三年もすれば素

質の良否は明確に分るから、先生達は門

下の繁榮のみ計らずに、不向なのは他の

方面へ轉出させるのが國家への忠であ

る。この意味で奨励機關の文展などもし

ばらく休んだ方がいい。(臨本樂之軒)

彫刻—二科に比べれば、院展の彫刻の

方が遙かに落着いて慎重である。技術に

も小業ながら鍛えた跡が見える。石井鶴

三「藤村先生像」は小さい坐像であるが

行届いた觀察と細心な仕上げに清新な形

像を感じられる。中村直人「独逸兵の

首」にも、落着いた実感の追求があり、

山本豊市「作品二十番」には丹念な技術の

手練が克明に示され、矢形勇「腰かけた

男」村上丙「少年像」菅原安男「子供頭

像」にも作者の意志が形体に何かの特徴

を孕ませている。しかし一般作品中彫像

には石膏の肉付けが徒らに技巧的で不愉

快なもの少くない。その点木彫の入念



な仕上げは総じて織りがよく氣品も数等優つてゐる、たゞ木彫に限らず院展の作品には小さく纏まる傾向がないでもない。型を破つて広がる勢のよい余力を望みたいものである。(富永惣一)

【搬入数】(絵画)七三六(彫塑)一〇一

【入選数】(絵画)一一六(彫塑)三八

【明年度本院展覧会出品無鑑査】(絵画)

片岡球子、小松均、羽石光志、高橋万平

安谷茂彦、直野満、齋藤達雄、小谷津任牛

(彫塑)入江美法、小松章、相木康兵、

古藤正雄、(新院友)(絵画)赤井伸生、

朝長久美子、田中嘉三、濱孤嘯、四夷星

乃、松本英峰、齋藤達雄、野村榮韻、植

草実、吉岡美枝子、安谷茂彦、中村春泥

羽石光志、村田瑞枝、村田閑、高山公子

守屋多々志(彫塑)田中太郎、笹村草家

人、莊田一男

出品目録(○同人)

絵画

鮎 井川 惠義 鯉 中山 咄月

猷甲 近藤 千尋 菱秋 池田 洋三

朝顔 高野 秀雄 茄子 小野 静以

八風不動 大原義義

片岡 球子 野村 榮韻

そら豆 七月の頃

相馬 千里 社本 我泉

田草 取 少女 友田 芳房

高橋 万年 初冬 小島 丹彦

牡丹 小松 均 白日 鷹尾 兵衛

牡丹 小松 均 盛秋 松井 牧牛

麗日 南 春章 夏衣 加藤 晨明

花叢 川島余音子 薊 ○北野 恒富

文樂吉田栄三 うたけ

高橋 周桑 (倭建命の尾)

張の美愛比

賣

○眞道 黎明

朝 ○橋本 永邦

立秋 山本 大慈

鹿島 祭

栗 中村 良作

鼠 小山 大月

端 鈴木 鳥心

端 鈴木 鳥心

羣芳 鈴木 主子

おさな子を抱い

て

廣沢ノ冬

森田 曠平

みほとけ供養

眞野 満

少女 銅島 古舟

木瓜 宮本 青架

夏池 上垣 候鳥

静韻 吉岡美枝子

まひる

○中村 岳陵

牛 ○小林 古徑

礼樂 図

五月雨

○郷倉 千毅

中秋無月(天心)

先生歌意

○横山 大観

写経 堀出 英雄

新秋 古川 朝衣

秋野 松宮 光村

白眉 高橋 米子

隨興ノ宿

守屋多々志

椿 河村 良孝

山湖 ハツ井舜圭

必勝祈願梵天奉

納図 花岡 朝生

吉田松陰

植草 実

春日 山

鷹 ○奥村 土牛

菜園 倉光 和子

少姐 関口 正男

葡萄 松本 英峰

國華 中村 春泥

遊牧民ノ母子

田代 寛哉

初夏 金田 豊

瀧 坊坂 倭明

青田 大西 郷鳥

炭焼 中島 菜刀

柚人 中島 菜刀

雨声 木村 道治

平城宮の或日

中島 清

竹 笏

○田中 青坪

救 難

○筆谷 等観

鳥籠 相原万里子

船橋 河内 舟人

暮秋 山田 廣吉

山 幸

○酒井 三良

大野の彌勒

吉田 善彦

藤 高山 公子

西郷先生(習作)

○太田 聴麗

秋ノ草

○富取 風堂

義明出陣

羽石 光志

水辺 岡田 重雄

竹 皆川 方逸

新 果

○北沢 映月

苗代 飯島柳三郎

彩鱗 窪田 玉穂

朝庭 中沢 一僑

淵默 安谷 茂彦

花 朝長 久美

長十郎焼

片岡 球子

殿戸 峠

石本 光朗

緑庭に遊ぶ

加藤 彩華

雲地 村田 閑

家 七里 敏夫

竹林 亀井 明治

蚕 齋藤 達雄

秋輝 藤原 芳春

遠山風景

加藤 洵綾

晴晨 藤井 綱文

靜閑 森 綠翠

上水端風景

九 儀太郎

奥飛驒

小島 一谿

水辺 野島 青枝

乘 鞍

○大智 勝観

穂 高

河骨に杜若

島田 訥郎

もちかゆノ日

(枕ノ草紙)

木下 春

山ゆたかに

我妻 碧宇

兒 四夷 星乃

西里の早春

盛秋 浜 孤嘯

漁樵の湯

長谷川朝風

大風 川

佐藤 耕寛

灌漑 南摩 朱鳥

微雨 杉山 哲郎

遺構 岩橋 英遠

哈爾賓街所見

清河 草林

塘秋 佐野 光穂

紹刺 村田 瑞枝

鳩合 赤井 伸生

手術 池田 榮廣

十和田ノ祭

館岡 栗山

花 沢田 以久

浴陽 川手 青郷

放牧 金井 敬陽

あぢさい

津田 時子

芝野 川

庭園ノ初夏

中村 進一

田ノ草取

森崎 伯靈

さいかちの虫

常盤 大空

秋彩 伊藤 清示

義軍ノ出立

栗田 騎歌

花 鶏飼 節夫

神苑薄暮

三石 紅樹

洛南初夏

佐原修一郎

土用芽古莊 肇成

彫塑

少年坐像

宮本理三郎

袖を持てる少女

小林 章

誕生 同

媼(習作)

河内 滋子

八幡船の男

裸婦立像

土井 要輔

森蔵昶氏像

○関谷 充

虎 同

田 同

同

坐女 笹村草家人

腰かけた男

矢形 勇

作品二十番

○山本 豊市

独逸兵の首

○中村 直人

ラバウルの女

同

ラバウルの子

同

坐像(男)

藤本 美弘

首 河野 正造

釣狐 入江 美法

菊子 像

櫻井 祐一

浜の女

櫻井 祐一

題未定

古藤 正雄

幼年の廣瀬中佐

中村 浜雄

こども

中 平四郎

男 鷹野 忠一

中崎氏像

関 長造

若き漁夫

柏木 康兵

直木氏像

○村田徳次郎

姉の像

同

静 思

同

勝登夫人

○大内 青圃

十三佛塔(原型)

同

少女 市川 二男

野良の父と子

○辻 晋堂

鶏と女

同

看護婦ヌルの像

矢崎 虎夫

マンデー(イン

ドネシアの水浴)

矢崎 虎夫

善財童子

山口眞一郎

兵(炊事勤務)

大島住之助

若鷺頭部

○新海 竹藏

女 長野 英夫

母子 花田 一男

老僧 三島 富丸

迦樓羅(試作)

長谷川豊雄

松村秀太郎

更衣 同

藤村先生像(試

作)○石井 鶴三

少國民

同

少年像

同

村 上 丙

婦人像

高橋 友武

仔らくだ

山本 力吉

母 田中 太郎

は、せを

○宮本 重良

青年 千野 茂

女ノ首(一)

同

女ノ首(二)

千野 茂

軍鶏 岡村 進

青年の首

○喜多武四郎

女 性

同

裸婦(試作)

同

坐る 婦

小柳津三郎

俯向く少女

小柳津三郎

俯向く少女

同

故青木利恒大尉像

子供頭像

菅原 安男

同

長谷川利行展(洋)

二日一五日 銀座

菊屋

本年度文展審査員小品展(総合)三日

七日 銀座・青樹社

桑重儀一遺作展

四日一五日 中里・

桑重方アトリエ

石川滋彦淡彩南方風物画展(洋)六日

十日 銀座・美交社

毎日一海軍報道班員として南方に従軍

したこの作家の帰還後二度目の風物展。

今回はペン描きの水彩でいづれも小品、

しかも少々奇麗に整理され過ぎた嫌いは

あるが、ジャワの風景「パニユワソキの

廣場」「ジャカルタ博物館」など清楚な

美しさはある。

第二回三三美術園展(日、洋)六日一

十三日 日本美術協会

東海一この二回展でやや見應えするの

は曾て麥僊門にいた日本画陣で、中でも

新見盧舟の北鮮風物六点が注目される。

伊藤仁三郎「戸隠快晴」林司馬の絵巻風

の四連作「七夕図絵」も悪くない。油彩

では宮川仁が勉強だが、佳作としては

「機雷を拾う」一点を挙げうるのみ。成

井弘文の「害虫駆除作業」は人物が挿絵

画であまい。

戦艦敵納工藝品展示会(工)七日一十

二日 日本橋・高島屋

東京都美術館

「搬入敷」一六〇(陳列敷)五二(同人

出品)小林彦三郎「増産譜」以下四点

徳力孫三郎福田力三郎作陶展(工)八

日一十二日 日本橋・三越

第二回難波田龍起個展(洋)九日一十

三日 銀座・青樹社

東朝一美術創作家協会注目すべき作

家の一人である。黙つてコッソツと古典

研究を深めようとしている態度は悪くな

い。今までは主としてギリシャ古典に心

を向けていたようだが、次第に東洋古典

えの思慕と変りつつある。思索や表現が

一層ふかく内に徹するよう希みたい。花

の静物は概して常識的だが、百済観音や

夢殿観音は相当よく描き込んである。

伊藤久三郎油繪展(洋)十一日一十四

日 銀座・資生堂

朝日一最初の個展である。狙いが趣味

的で、写実性と強靱性に乏しいが、二科

の九室会系では真面目な画の描ける一人

であろう。成功しているか否かは別とし

て、油彩を以て水墨の味を出さうとし

る意図は一應理解出来る。山を主題とし

た小品に二、三みるべきものがあり、

「鳥」「蕨」などやはり比較的小さいもの

の方が無難なようである。

三井洋画コレクション歐洲繪画特別展

(洋)十一日一二十六日 麹町・同所

陳列目録

二人の女(バス

ベン卿の令嬢

テル)

アマンジャン

コッテ

マチス

水辺の牛(水彩)

マリ

女の顔

ライリー

草上の女

コラン

闘牛士(水彩)

ギューイス

市場へ行く(水

彩) モーヴ

第一回彩女舎展(洋)十四日一十八日

丸の内・帝劇画廊

東海一長谷川春子の肝入りで各団体か

ら新鋭の女流洋画家八人が集まつてい

だけに、色々な傾向が入り交つて中々変

化のある展観だ。今回は若手で直村のぶ

子、桂ユキ子が努力している。前者には

暢達なよさがあり、後者は仕事に幾分厚

味がでてきた。櫻井悦は女性にめづらし

い確実な筆描力だが、色感に潤いが欠け

ており、中谷ミユキには情感はあるが、

「竹林」は画面の大きさを引締める力が

足りない。

板倉星光新作画展(日)十四日一十九

日 大阪・大丸

和田東岳達磨筆園展(日)十五日一十

九日 日本橋・三越

東條鉦太郎遺作水彩画展(洋)十五日

一二十日 大阪・天賞堂

第二回日本劇画院展(日)十五日一十二

十日 日本美術協会

「空の精兵を描く」展 十五日一二十

断崖

少女の顔

キヤリエル

樹蔭の道

コロー

肖像

ヴァンダイク

冬ブリュゲル

林中の小徑

ヒュースタ

シヤガール

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

顔

東海一前衛絵画から脱却した美術文化協会が、会員の夏期錬成として企画した各地飛行場見学の報告的作品を展示したもの。福沢一郎の「曉に飛ぶ」、米倉壽仁「空へ行く学徒」などの油彩大作もあるが、佳作は現地スケッチ風のものに多く、寺田政明の連作「整備学校」、鷹山宇一「通信兵」及び金子英雄の素描淡彩などにむしろ生彩がある。彫刻は少いが、中では井手則雄「招魂雲上」が好小品。同じ作者の航空兵デッサン二点も特色があつていい。

田中鶴子個展 (洋) 十六日—十八日 銀座・養生堂  
第五回乾坤社展 (日) 十六日—二十一日 大阪市立美術館  
第三回航空美術展 (日、洋、彫) 十七日—二十一日 日本橋・高島屋  
前線慰問画内示展 十八日—二十七日 上野・松坂屋  
第一回義士會油繪展 二十一日—二十五日 銀座・日本楽器店  
第十五回朝倉彫塑展 二十一日—三十日 東京都美術館  
東京美術學校卒業制作展 (綜合) 二十二日—二十四日 日本美術協会  
春台洋画小品展 二十二日—二十九日 日本橋・三越  
第三回中川一政水墨展 (日) 二十三日—二十五日 銀座・養生堂  
第三回現代大家油繪鑑賞會 (洋) 二十三日—二十六日 岡山・金剛莊  
新關西美術展 (洋) 二十三日—二十九日 大阪市立美術館  
吉田久繼彫塑展 二十三日—三十日

銀座・美交社  
第七回一水會展 (洋) 二十三日—十月四日 東京都美術館  
毎日—去年の平板な展覽會面にくらべれば、今年はまだ変化に富んでおり、活氣もいくらか出てきている。しかし、会の主流は長老層から漸く中堅層に移つて、今年には有島、石井、山下、安井などいずれも低調だ。中で安井曾太郎の仕事には流石に若い情熱があるが、「玉笛」と題する崔承喜の舞姿は、爲に一年の日子を費した力作とは受取れぬ。会員で注目すべきは裕三彩亭 (伊之助) と木下義謙のふたりだ。前者の「ひまわり」は濃厚、後者の葎原風景二点には誠実な描写がある。田崎廣助の「初秋松林」は色感鈍いが努力は買える。高野三三男は紅毛赤島などにもちよびり時局的神経を働かしただが、中で「雪のマルヌ河」は悪くない。出品作では近岡善次郎、富樫正雄のふたりが今年も比較的好い。中華、満洲から將來された作品二十点の特陳は、格別参考とすべき内容のものではないが、先年來朝した北京在住作家蔣兆和の狼芝居を描いた水墨淡彩の大幅及び新京の李平和の油彩「古物屋店頭」などちよつと面白い。(尾川多計)

陳列目録 (〇印会員)  
海の朝 山と薄  
〇有島 生馬 〇安宅 虎雄  
湖の朝 無題  
庭の朝 同 甲州の春 同  
雪と子供 朝倉 力男  
薄日雪景 同  
或る男の像 荒谷直之介  
婦人像 同  
朝鮮服の女 同  
診察日 新井 邦雄  
赤津 実  
春の松川浦 阿部 七郎  
什刹海 〇石井 柏亭  
園中対像 同  
北京の一隅 同  
海 〇池部 鈞  
池 〇同 鈞  
湖畔の初夏 池谷 寅一  
湖畔の秋 同  
雪解け風景 一本万壽三  
早春のりんご園 同  
ねむるにはとり 同  
二 井上 正子  
春の強羅 同  
秋の櫛林 同

石川眞五郎  
幽居梅花 同  
ガ―ベラ 同  
石塚二味子  
読書 井上 貞子  
五月の庭 伊藤 立己  
雨後の河原 板倉 國臣  
海草採り 猪俣 克史  
北陸の村 岩崎 愛治  
水蜜桃 (2) 泉 治作  
早春 小野 末  
如 同  
阿彌陀岳 小野 末  
築池 小野藤一郎  
湖畔 同  
初秋 奥田郁太郎  
鐘ヶ岳 同  
父の像 同  
朱塗の絵筆 岡田 行一  
防護部員 同  
子供 岡見 第三  
伊那風景 同  
三吹の初秋 同

尾沢 勝朗  
信濃路の乙女 同  
三河の農夫ボノ マリヨフ像 同  
大月 源二  
薪運び 同  
麻穀を干す 同  
刑部 人  
夏 海 同  
白壁 岡崎 祇容  
書齋の人 同  
大館 健三  
夏服の男 同  
小原 博司  
冬枯 小栗 精  
森のはづれ 同  
岡野 計子  
鶏舎 金丸 直衛  
台所の乾練 同  
子供プール 金子 博信  
名かくる松 同  
海辺ノ松 同  
狩野 壽一  
庭ノ松 同  
淡流 勝間田武夫  
世古の湯附近 同  
木造船 同  
甲斐 仁代  
夕やけ 同  
國米 熊藏  
葛浦 同  
藤 金子 富藏  
ぬいもの 同  
春の穂高岳 同  
加藤 一豊  
裏庭 加藤 清江  
はす 河本 嘉男  
豊なる秋 同  
金沢 信夫  
婦人像 同  
〇木下 孝則  
葎原出口 同  
要龍風景 同  
〇木下 義謙  
葎原 同  
蕨 同  
木下壽々子 同  
木下壽々子 同  
川添ひの家 同  
冬山 木村 辰彦  
菊花 同  
白樺 北野 孝一  
静夜読書 同  
北尾 修一  
高原 菊地 秀一  
農家 黒田外喜男  
水郷の秋 同  
畔柳 與二  
オリブのある風景 同  
國米 熊藏



現代美術展覽會（昭和十八年度）

## 四〇

て、この画家の常に若々しく、男性的な作風を小品の中にも遺憾なく、示してい

る。(今泉篤男)  
〔授賞〕(絵画) 竹谷富士雄、井上孝、

小管徳二、瀬島好正、松田穰（彫刻）井上常雄、芥川永、（新会員）（絵画）竹谷

富士雄  
出品目錄（○印會員）

少女像 松田 稔 群像習作 同

少義の見える文	同	六月	清原 昭	藤尾龍四郎
---------	---	----	------	-------

桑	場	姉妹の具本物
井上	田辺	雪景
幸	和満	大日
妹	山村	忠
西	同	
常雄		

秋	春來	多
島	同	夫
田		一
潮		三
男	父	娘
の		
首	同	面
		骨
		丸

冬 同 王 春 和  
兵と行く報道班 青年 像

○三田 康  
○吉田 芳夫

中支前線の街1  
○今村 俊夫  
小北 鱧  
○佐藤 忠良

同 2	同 3
同	同
○船越	少年航空兵
保武	

少年 倉品 廣  
三人の女  
男の首  
○明田川 孝

朝の配給

○伊藤	繼郎
裸婦	吉崎 靜江
中沢	暹

高台の家 同  
H氏像  
片岡 進

若松光一郎  
種蒔く人  
○山内 壯夫  
霊山の春

男の首  
山本 常一





女立像

寒川 典美

釣場附近

丸山 正三

泣いて居た子

同

赤い事務所

同

手(故能勢亀太郎先生に献ぐ)

齋藤 正夫

砂浜

高橋 航夫

姑娘座像

村尾 絢子

赤い支那服

同

炭俵を運ぶ子

國友俊太郎

曇日工場街

上野 省策

働く男

竹谷富士雄

花咲く街

津田 出之

研究

伊川 藤義

支度

上野 卓郎

秋

森脇 榮子

鷺

梶村 正義

日本作家協會展(日、洋、工)二十三日

日一十月四日 東京都美術館

説書一新協、歴程、朗風と三團體合同

風景 大石 毅典

炭坑の朝

工藤 正義

古城跡にて(二)

本松霞ヶ城

安齋 正壽

風景 中井惣之助

樹 老川ユリコ

倉庫のある風景

開瀬 正也

洋治 君

長沢 昇

山村 小関 利雄

麥秋 同

明々庵待合

田淵 巖

父 桑田 道夫

羅漢 寺

風間 完

室内 横山 泰三

彫刻

女立像

吉武 正幸

首習 作

山本 格二

男の首

王 春和

老人 初馬 正治

老人 小森田泰雄

立像 田畑 一作

日本作家協會展(日、洋、工)二十三日

日一十月四日 東京都美術館

説書一新協、歴程、朗風と三團體合同

後の第一回展として出品も宣傳美術、舞台裝置等に亘る多様な陣立である。加之

幹部の五六点以上出品という異常な労作ぶりであるが、全会場に流れる寂寥感は何か。協作、古事記は終じて画面の調いに乏しく作品相互連繫にも一工夫を要しよう。玉村方久斗の健筆「静物曼陀羅」。

村上桂夫の「ながめ」の素直さ、土味川

獨爾の「開拓地」の手堅い描写、北村一

郎、荒井草雨彫塑の高橋大雲等の力作をあげて次回展にまつ。

「新会員」(油) 石井玲一、(彫) 高橋大

雲、「新会友」(油) 川村秀治、佐野武雄

廣野白陵、石川清、(彫) 田中郭堂、細

野好衛

「戦ふ少年兵」 (綜合) 二十四

日一三十日 新宿・三越

長谷川耕南個展(日) 二十日一二十四

日 銀座・菊屋

東海一近作二十三点、不絶の精進を続

ける氏の風格と氣魄を窺うに足るものが

多い、就中「拂塵」の脱俗「念心」の粘

りともに面白く「絶境夜座」「天下太平」

は円熟ぶりに遺憾なく、南画では青墨の

竹がよく、老松は固くなつた氣味がある、

支那の狼毫による鋭い筆致はいずれ

も佳品、鶴毫を用いた「和風」津田助廣

の丸銘にヒントを得たという「秋林」は

いずれも研究ものである、余白を大半残

した「明月」は氏自身のものとしては勿

論、画壇にも恐らく前例なかるべく、一

つの示唆を授けるものである、なお墨

色について作品ごとに周到な研究が拂わ

れていることに敬意を表する。

岸田劉生茶掛展(日) 二十五日一二十

九日 銀座・美穂堂

第二次回均光會展(洋) 二十六日一三十

日 銀座・青樹社

福岡青嵐・加納三樂兩氏展(日) 二十

七日一二十九日 大阪・高島屋

山田結園藝展(工) 二十七日一三十日

銀座・資生堂

日 銀座・青樹社

福岡青嵐・加納三樂兩氏展(日) 二十

七日一二十九日 大阪・高島屋

山田結園藝展(工) 二十七日一三十日

銀座・資生堂

鈴木雲哉作面展(日) 三十日一十月四

日 日本美術協會

十月

第四次回糖谷九壽個展(洋) 一日一五日

銀座・資生堂

産業職士慰問激勵巡回展(日) 一日一

五日 日本橋・高島屋

松井大浩個展(日) 一日一六日 名古屋

屋・松坂屋

伊東深水南方風俗スケッチ展(日) 一

日一八日 日本橋・三越

東朝、海軍報道班員として南方に使し

た伊東深水のスケッチ二百点ばかり、い

ずれも巧妙を極めたものである、美人面

や花鳥にばかり馴染んでいた日本画家が

時代の要請に應えて、南方への関心を

一般的にたかめようとする仕事を買って

出たのはよい。深水は橋本関雪や川端龍

子と俱に日本画家中では動的な素描力に

すぐれた人。とくに風俗画は得意とする

ところだから筈にうつてつけの役割であ

る、筆勢のびのびとして題材にも変化あ

り美人画の場合のように卑俗性が少い点

もよい、大部分は鉛筆に色彩をほどこ

し、昭和南島、セレス、ボルネオ、バリ

島等現地の達者な写生である。

女流油繪美術展 一日一九日 銀座・

日本樂器画廊

山道樂助個展(洋) 二日一六日 銀座

美穂堂

美穂堂

第十回三井洋画コレクション陳列掛

二日一十二月二十五日毎土曜日 麹町・

同所

松平康南個展(洋) 三日一七日 銀座

青樹社

オアアガゲル女史水彩画展(洋) 五

日一十日 大阪・大丸

高橋鏡子作人形展(工) 五日一十日

上野・松坂屋

高島野十郎個展(洋) 六日一九日 銀

座・菊屋

朝日一写真のように細密な描写であ

る。感覚的な美しさには乏しいが、自然

の変化や、これに伴う明暗にはよく注意

が行届いている。全体の調子を考えてあ

るので、こういう細密画にあり勝ちの卑

俗性は少ない。とにかく、季節の感じと氣

分は相當うまく表出されている。静物は

あまり克明にすぎて面白くないが、風

景では「残雪」、「早春」、「海涯てなし」、

「高原夕色」など注目すべきものであ

る。

泥谷文景「月十五題」展覧(日) 六日

一十日 日本橋・高島屋

月明會日本画展(日) 七日一九日 銀

座・資生堂

犀影舎第三回展(洋) 七日一十日 日

本橋・高島屋

藤原平石線繪展(工) 九日一十五日

日本橋・三越

第百二十三回日本美術協會展(繪) 十

日一二十四日 日本美術協會

同時に戦争画を主とする古名画の展覧

を行った。

慶島武二道作展(洋) 十日—二十四日

大阪市立美術館

大毎—光明遍照の大家この画人はこ  
う呼んでいいかも知れぬ。ローマにあつ  
ては眩きばかりの噴泉を、ヴェニスにあ  
つてはゆめめく灯を、そしてまた故國に  
帰るや残雪の明るき、瀬戸内海の陽光を  
限りなく追求して止まぬ「幸ある朝」の  
パリ女から「暮女」に至るまでであるいは  
「巴里寓居記念」から「蒙古高原」に至  
るまで終生精進の結果、独自の單純化を  
達生して、老熟、洒脱の妙を極め得て、  
しかも天眞の流露はこの人を浮薄の輩と  
は呼び得ないほど、重厚の底力をもつて  
追つて来る、七十年毅然として己れを持  
して日本印象派中の巨匠たる地位を確立  
したのも故ある哉である。

黒田頼綱南方作品展(洋) 十一日—十

三日 銀座・資生堂

泉川白水水墨画展(日) 十一日—十四

日 教寄屋橋・日動画廊

小川千鶴新作展(日) 十二日—十七日

日本橋・高島屋

東朝—國土礼讃と先哲景仰に因んだ作  
品二十点の展覧である。時節が南画人  
としては面白い思付である。深きに聊  
か欠けるところはあつたが、この画家特有  
の抒情味と神経があり、ことに國土礼讃  
の方にみるべきものがある。「芳野山華」  
「東山春色」「養老深山」「水郷行」など  
感興の深い佳作。先哲景仰の方では「山  
上億良」「明恵喫茶」「菊池武房」「弔古  
戰場」の数点をとる。  
龍駿介富士油繪展 十三日—十七日  
日本橋・白木屋

渡邊幸恵個展(洋) 十三日—十七日

丸の内・帝劇画廊

鱧利彦油繪小品展 十三日—十七日

日本橋・高島屋

石井柏亭與の細道展(洋) 十三日—二

十日 日本橋・三越

東毎—蕉翁二百五十年忌に因んで「奥  
の細道」の今の景色を絵にした水彩小品  
を展示したもの、柏亭の淡々たる筆は初  
夏の東北の自然を写すのによく、那須か  
ら鼠カ関にいたる廿一景、いずれも清澄  
な画面、中でも「平泉」「山宇」「松島」  
など注目すべき佳品といえる。

大阪新美術家同盟展 九日—十三日

大阪市立美術館

獨立美術秋季展(洋) 九日—十三日

銀座・青樹社

日本水墨會試作展(日) 十四日—十六

日 銀座・資生堂

扶桑會秋季小品展(綜合) 十五日—十

九日 銀座・青樹社

遠水御舟展(日) 十五日—二十四日

大札記念京都美術館

京都—十七歳の作品「小春」から逝去  
せる年の四十二歳の作品「新月」まで九  
十七点が年代順に展覧されて居り鬼才御  
舟の初期から晩年へかけての画風の進境  
振りが明確に見られて興味深い。特に院  
展同人として推薦された廿四歳頃から  
卅歳位に至る間の画風の著しい変化と進  
境は瞭然と見える、これら作品の他に十  
九日から写生画三百余点が併陳されてい  
るが小紙幅の写生にも全力を打込んで描  
いた御舟の絵画即生活の眞面目が覗われ  
る。

第六回文部省美術展(綜合) 十六日—

十一月二十日 東京都美術館

「第一部」東京—ここの第一部はほん  
たうに面白くない。作品が小さく制限さ  
れたからだろうか。院展の例で見てもこ  
れは余り理由にならない。それでは小  
さい作品に沢山盛り込もうとするからか。  
これは多少理由になりそうだが。文部省が  
一つの文展に日本の画壇の大部分をつめ  
込もうとするからといつて小さい画面に  
余り詰めすぎるのはよくない、かつて大  
作品に容れるものがなくて引伸しをやつ  
たが、今度はその反対をやつた。どちらも  
無理でどちらも同じ人がやるのかもしれ  
ない。どちらにしても人間が物にしはら  
れるのは藝術家らしくない。併し考えて  
見るとここの日本画が面白くない一番  
の理由は、作品に対する作者の氣持が  
不徹底なことではないかと思う。私は技  
法を尊重する。それは専門作家の地位を  
擁護するものだ。しかし作家にとつて制  
作に一切を賭けることは技法の錬磨上以  
に根本的な要件である。制作に没入する  
ことは一方に謙虚な態度となり、他方こ  
れを天職とさえ自ら信ずる熱情となる。  
技法の錬磨もこの方向に従つてこそ價値  
があると思う。ところが今年の文展の絵  
を見ると、観照や技法が制作という嚴肅  
な具体的事実から遊離しているのが多  
い。制作と遊離する以上、作家の魂と堅  
く結びついて居ないこと必然である。廣  
い壁面を飾る多くの絵からひそやかに  
か熱とかが感じられない。言葉換えると自  
信とは似て非なる自惚れか、謙虚とは反  
対の怯懦かの亡霊にとり囲まれた感じ

で、実に素莫たるさびしさを覚える。こ  
の決戦の時局に於てはいけないう。こ  
私は会場に立つてこの凡夫を撃つ不退轉  
の画家魂を求め。大観の「雨收」の前  
に立つて、ここのは何と稚拙でもあ  
り、細かになりすぎたことだろうと、少  
しおかしくなつたけれども、後で最も追  
感の多いのはこれであつた。あれは藝術  
的效果についてはとやかく言い得よう  
が、立派な藝術家が生きている点に於て  
最も瞭らかなものであつた。私は少し安  
心した。

第一室。ここの特選は七点で、何れ  
も別によい所も見当らない。その中で第  
一室の沢宏毅の「夕映」は同情してみれ  
ば素直で丁寧なよきがある。しかしもつ  
と夕映の現実に喰入つたら、せつかくの  
色感も生きたであらうし、あのように技  
法だけが目立ちしなかつたらう。牛が  
窮屈そうな構図も稍々策がない。梶喜  
一、堤利彦注目。

第二室。伊東深水の「南方收穫圖」は  
あざやかな仕上げにも拘らず、南方人物  
を機械的に嵌め込んだよう物足らず、  
深水には類型の美を期待したい。空間計  
画も落付かない。鄭末朝の「爪染め」は  
線も絵具も呼吸があり、哀愁の氣分生き  
る好画。土肥寛樹「夏」と萩原義通「土  
ぬくむ」は一は強烈、他は柔軟である  
が、自然を見つめる若々しい純粹な態度  
がこの上なく嬉しい。技巧も硬いがよく  
工夫されて居る。

第三室は例によつて藝術院会員を擁し  
て觀衆を集めて居る。玉堂の「山雨一  
過」は大観の「雨收」が夕の立昇る霧な

のに対して畫の微風である。繪の一角に白雲が快よく動くのはこの生命。身邊の平凡な自然をありのまま楽しみ、印象的に描く玉堂の風景は兎に角日本的風景画の典型で、蕪村の俳句の様に、どの日本人にも和やかな共感を喚起さう。しかも老來却て印象明晰となつて画趣亦横溢これも快作の一である。関雪「霧」は自家薬籠中の枯枝に親子猿で健筆に驚嘆するが、画外の意味は案外少い。十畝、松園、翠雲、桂月ほど例の如くであるが、松園の若々しさには嫌味がない。堂本印象「北條時宗」は平浅。寒本「洋の朝風」

は蒔絵風の興味を汲めよう。ことしの文展では第四室は第三室以上に注目されてよい。大日の化身たる下町女を描く清方の「竹女大日如來」は佛画と風俗画との結合を企て、しかも東大寺法華堂の吉祥天像のような面影があるのを見ると恐らく彫像の繪画化もあるわけで、これを純粹の風俗画家で繪画的傾向の清方がしようとする處に一層興味は多い。もつと風俗画になり、もつと冒險的になつて欲しい。かつとも思ふが、これでも結局清方の調子でととのえられているのは流石である。一般に問題提出を差控えた本年の文展で此作などまず第一の問題作であらう。徳岡神泉「芋圖」も問題にしてよい。かつての「菖蒲」は写生的描写で驚かせたが、これは色面の構成的興味が強いの。背景の灰色が実行乏しく見えるのは惜しいが、冴えた技法が十分に生きて美しい画面である。それでいて里芋の葉の滑らかな質をよく描いている。

小野竹喬の画は私にとつて文展のたのしさの一つであるが、「冬」はやはりいい所がある。暖い詩と理智的な構成とが背馳しないのは作家の素質の幅である。中央の立木が平板な画面を深める。鳥が早春の歌を歌つて霧の中に消える。野田九浦「鍛刀」は例年の型式化を破つて緊張した情緒がある。秋野不矩「童女」の單純化は乏しきとなつた嫌いがあつたが、連年一貫した心境を靜かに追求しているのはいい。杉山寧「大同靈巖」は写生に見せた精力的な熱が全然出ていない。

第五室では向井久万「紙漉き」（特選）よりも河瀬恭之「初孫を待つ」の誠実を買いたい。第六室の小川翠村「残月」は場中目に残る一つである。技法に溺れないでその柔かな細味を以てよく空想的情緒を描出している。特選の松下休光の「孔雀」は例年より品格がない。第八室の福田恵一の杉山大將を描いたらしい「御植」は放言な試みが相当成功しているが作画の成心が見え過ぎる。第九室の久保多彌「精勵」は画面が熟し切らないが誠実で鋭さが閃いている。第十一室では川崎小虎、常岡文亀、橋田永芳、山本丘人等振わない中で、山崎忠明「唐招提寺」が注目され、特選二作別に感興なし。第十二室の浜田台見「水車をふむ」は昨年感心出来なかつた泥々と塗つた画から素描の生きたザツクリした作風に一轉した。更に次を期待したい。（大口理夫）

（第二部）東京・前略、十九世紀の初頭以來（日本では明治維新以來）、美術は

他の權力からも、他の文化分野からも開放されて独自の道を進んで來た。自己の眼に美しく感じたものを自己に忠実に描く事によつて純粹なる美術品を創作しそれによつて文化に寄與したのである、而し、今は再び、その昔さうであつたように造型を通じて社會に國家に奉公せねばならぬ時代になつた。この観点から眺めたら今年の文展は勿論つまらない。而し昔のような観点から眺めてもやはりつまらない。第一に無鑑査や招待出品者が多くて、彼らがお座なりの作を出しているからである。日本の油絵は明治以來随分水準が上つてゐるから、現代の規準で云うと元來が拙い人が無鑑査にはいるのであるが、それでも眞剣になればもつとよい作品が出品される筈のことは、松田政組當時の第二部会の成績が物語つてゐる。第二には新進に傑出した人がいない。前述の様に時代が變つて來てゐるから、昔のような考えで藝術に精進しても好いものが出來ないような時代になつてゐる故かも知れない。どんぐりの背比べの故か、特選は昨年でも多過ぎたのに今年には更に増加して水彩一点を入れて十四点の盛況（？）である。大月源二を除いては、成程何れも他の一般入選者よりも幾分しつかりした技巧を示してはいるが、特に推賞したいものはない、大部分は第一室にあるが、そのうち、鈴木満の「武人古老」の人は好いが頑固そう、そして風雪に鍛われたらしい顔の性格描写が一寸見られるだけである。渡辺武夫は技巧はかなりしつかりしているが面白くない。昨年の特選作の方をとる。第

二室では山本鼎「紅富士」が秀でていた。油彩でこれだけ清楚なかんじを出したのは流石であるが、そのかわり油彩独特の写実感に弱味が生じて前方の木は雪の中のか水の中なのかと考えさせられる。山本鼎の隣の中村善策の「晩夏」は此の文展では佳作に属するが、一水会の出品作の方が好い。審査員ではあり、むしろ文展の方に力作を出して貰いたかつた。文展は藝國一致の美術展に育てるべきで、所屬團體よりは文展に第一の力作を出して貰いたい。これは他の招待出品者にも云い度い。朝井閑右衛門の「春」は氣が利いてゐるが非本格的である。こんなならいでもうして行こうとする態度はよくない。それこそ時局意識が乏しいと云わねばならぬ。十一年度に彼に大臣賞を與えた文展当局にも罪はある。第三室で見るべきものは高田誠の「八ヶ岳山麓の村」のみ。第四室は老大家の並んだ室であるが、故藤島武二の如き文字通りの老大家は此處には見当らぬ。独り、油彩技術の完成では日本一とも云うべき藤田嗣治がいるが、彼は未だに血氣旺盛で老成と云ふ所はない。長所でもあり欠点でもある。今度の「嵐」はその欠点が出て了つた。和蘭まがいの風景画を描いて、その筆技を昔の大家と競つてゐる所は壯とすべきも、こんな事も出來るぞと頑張つて見せた様な作であり、又、嵐の表現に力を入れ過ぎて不自然に曲つた樹木は反つて画面の力を弱めている。日本画ならこれ位の誇張は表現を強めるのだが、斯る丹念な油彩の写実画では、大地に根を下してゐない木は表現を弱める。

（第二部）東京・前略、十九世紀の初頭以來（日本では明治維新以來）、美術は

他の權力からも、他の文化分野からも開放されて独自の道を進んで來た。自己の眼に美しく感じたものを自己に忠実に描く事によつて純粹なる美術品を創作しそれによつて文化に寄與したのである、而し、今は再び、その昔さうであつたように造型を通じて社會に國家に奉公せねばならぬ時代になつた。この観点から眺めたら今年の文展は勿論つまらない。而し昔のような観点から眺めてもやはりつまらない。第一に無鑑査や招待出品者が多くて、彼らがお座なりの作を出しているからである。日本の油絵は明治以來随分水準が上つてゐるから、現代の規準で云うと元來が拙い人が無鑑査にはいるのであるが、それでも眞剣になればもつとよい作品が出品される筈のことは、松田政組當時の第二部会の成績が物語つてゐる。第二には新進に傑出した人がいない。前述の様に時代が變つて來てゐるから、昔のような考えで藝術に精進しても好いものが出來ないような時代になつてゐる故かも知れない。どんぐりの背比べの故か、特選は昨年でも多過ぎたのに今年には更に増加して水彩一点を入れて十四点の盛況（？）である。大月源二を除いては、成程何れも他の一般入選者よりも幾分しつかりした技巧を示してはいるが、特に推賞したいものはない、大部分は第一室にあるが、そのうち、鈴木満の「武人古老」の人は好いが頑固そう、そして風雪に鍛われたらしい顔の性格描写が一寸見られるだけである。渡辺武夫は技巧はかなりしつかりしているが面白くない。昨年の特選作の方をとる。第

（第二部）東京・前略、十九世紀の初頭以來（日本では明治維新以來）、美術は



弱いが美しい山下新太郎の「奈良公園の新緑」を除いて、此の室で見應えのあるのは壯年の中村研一、阿以田治修、伊原宇三郎の作品である。中村は、然し、達者過ぎて細い喉を見通す欠点が此の「雪嶺先生」にも見える。伊原のパーモウ氏の肖像はアカデミックな力作であるが、表面を撫で廻わし過ぎて、内なるものの表出を忘れた憾みあり。

第五室には中堅作家が多いが、そのうち感心させられるのは宮本三郎の「マライの少女」で、ヴェラスケスを思わせる達者な画技である。但、これはその腕を示して見せたという以上を出ぬ。モニユメンタルな仕事への精進が期待される。岡鹿之助の「農家」は客観的支持となるべきしつかりした主観がないので絵がつまらぬものになつた。かかる新古典主義とも云うべき行き方は主観と客観の金き調和が必要である。鬼頭鍋三郎の「縫物」は審査員たる資格にふさわしい少数の作品の一。油彩に日本画風な筆勢を應用して主観的表現に失敗しているが兒島善三郎の「上げ汐」である。日本人の主観的表現には日本画と云う好適の画法があるのだからそれを用いるがよい。油彩の特長は現実感に富んだ点であるから、それを生かす目的に用いるべきである。これは外の多くの画家にも云い度い事であるが、日本画の筆勢を油絵に應用するには余程注意せぬとすさんで了う。第七室の野口謙蔵はそれを屢々成功した人であるが、今度の「朝」はひどく荒れてゐる。この第七室からはつまらぬ作品が殆ど全部である。

唯終りに近い第十九室に小さい乍ら燦然と光つてゐる版画がある。前田藤四郎の「南國勤勞」である。色彩も好し、前方に大きく人物を配した構圖も好し、版画の弱点を克服して非常に動きのある表現である。その外、平塚運一を始めとして、版画には比較的好い作品が多い。

#### (山田智三郎)

「第三部」大朝一戦争に関する多くの作品の中で、石橋古鈴氏「再起」には胸をうたれた。眼に傷を受けた白衣の勇士が犬をつれてゐる群像としてよく調い、さびしい中に再起の熱意を潜めたい心持の表現は忘れ難いものである。吉田三郎氏「羊を飼う老人」は同じような組成で、老人は元來得意なり、何度か試みられた群像のうちで出来のいい方である。

硬派の作品のうち大学生の蹶起を現わした北村西望氏「夕焼け」は流石に重きをなし、伊藤五百亀氏「鉄の戦士」や松本庄吉氏の「逆風」などの特選級も、ワザとらしい誇張に陥らずして力を現わす術は認めていい。村井辰夫氏「闘魂」の荒々しい造形も先ず見られる。防人は流汗の主題になつてゐるが、山脇敏男氏「醜の御桶」は安定した強さがあり、杉本宗一氏「防人」は唐俑風な狙いに面白さがある。清水多嘉示氏「植樹」は縦の直線に統一して、表面の技法なり、心持の現わし方なり一段とすぐれてゐる。木彫の佐藤助雄氏「従軍看護婦」長谷川昂氏「巢立ちのちかい」も腕は相当出来てゐる。

軟派の佳作は北村正信氏「腰かけた女」(大理石)で冴え切つた美しさがあ

り、安藤照氏「二六〇三年作」や松田尙之氏「娘時代」も各人相應として、北村治禧氏「髪」の肌合は特選中目立つてゐる。

朝倉文夫氏「翼に続け」はしぐさばかり大袈裟で実は纖弱、柄に合ふぬと思われる。軟派ではないが横江嘉純氏「倅を慕いて」という大理石の胸像は、或は戦没の記念ではないかと思うが、力の籠つた、心惹かれる作であつた。

木彫で強いもの、佐々木大樹氏「雲上一角」は雷神で悪くなく、大島駒藏氏「牡牛」も挙げらる。

異風では井口喜夫氏「運慶」、小品では森山朝光氏「正志齋先生」動物では柳沼勝蔵氏「若葉の頃」小椋山忠氏「当年仔」など。

#### (泰山武松)

「第四部」東朝一工藝部には著しい発展はみられない。資材不足の割合に、どうにか形をつけているところが見所であらう。硝子工藝が影をひそめ、染色と漆藝が中心になり、これに陶器と金属の置物、極くわずかな竹工がある。

染色では廣川松五郎の詩華集と題した三曲屏風や、木村和一の松竹梅を描いた屏風がよい方で、特選の山岸堅二作、防空人物譜が風変わり面白。漆工蔦絵では松田権六の鳴鶴図飾棚、吉田源十郎の漆屏風茄子、山崎寛太郎の馬の図手箱等がすぐれ、何点かある小屏風のうちでは図案、技巧ともに六角顯雄の特選が秀でてゐる。

陶器はいささか貧弱である。河村靖山の品のよい赤絵花瓶と、その他に一、二みるべきものがあるにすぎない。竹工に

至つてはさらに貧弱だが、飯塚琅玕齋の花籠は流石に巧妙な力作であり、新味はなけれど田辺竹雲齋や生野祥雲齋のものがこれに次ぐ。金工はだいたい動物の置物類が多いようだが、格別際立つた作品は見当らない。

人形類も凡庸、昨年比較的成果のよかつた木工はほとんど出品がない。戦時に用のない料亭の裝飾品以外に、美術工藝の出でゆくべき途はないものである。

#### (荒城 季夫)

##### 搬入

入選 無鑑査 陳列数

一部 一四二 二六一 七八 三三九

二部 二〇七 九二六 〇二五 四六五

三部 三六七 一五九 九一 二五〇

四部 五五〇 二五四 六四 三一八

合計 四四一 八九三 四三八 一三七二

「特選」(第一部) 我妻碧子、岩淵芳華、

沢宏毅、須田洪中、松久休光、向井久万

森綠翠(第二部) 西村計雄、大嶋士一、

大月源二、小田忠、渡辺武夫、河井達海

村上巖、宗像逸郎、泰畑廣作、藪野正雄

櫻井悦、緑川廣太郎、宮脇晴、鈴木満、

岡田賞二、小川博史、吉原義彦、高井貞二

上原欽二、(第三部) 伊藤五百亀、古橋

吉鈴、長谷川昂、松本庄吉、藏本美弘、

佐藤助雄、北村治禪、森本清水、(第四

部) 稻垣稔次郎、生野祥雲齋、六角顯雄

八田辰之助、岡本爲治、大谷泰彦、梶田

恵、田中芳郎、多畑宗哉、山岸堅二、佐

藤武雄、佐治正一、北田塔次郎、須賀松園

「政府買上」(第一部) 「南方收穫圖」伊

東深水「山麓」山本丘人(第二部) 「高

原の雪解くる」辻永「あふぎ」長谷川昇

(第三部) 「荷」星野健一「従軍看護婦」

舞	鄭末朝	▲寒本	一洋	高根	宏清	富山	誠一	残	月	▲小川	翠村	溪潤	高木	富		
雪	▲矢野	北條時宗	堂本	晴日	川本	参江	浜の	畫	辻	字佐雄	翠繡	松久	休光	急湍	有元	一雄
華北の秋	鉄山	茶の花	印象	童	女	△秋野	不矩	ビルマの少女	樋口富麻呂	題答	秋葉	長生	志慶ノ村	上田	道三	
△矢沢	弦月	△吉田	秋光	吉野治遺					鳶	崎山	木芳					

必勝訓練

甲州小景

三輪 毎夫

寒頭 米田 亨爾

商國陸仁  
△平牛  
某山

映える戦車

竹内 一起

震  
柳川  
一鷗

喇嘛僧

東山魁夷

潤声 森本 修古

## 奈良の森

佐藤 信一

実  
る  
頃

渡辺 安友

小やすみ

松本 進

于等 杉山 三鬼

三  
、  
公  
司  
、  
公  
司

慈母觀音

△大河内夜江

新秋  
吉井  
嘉光

鴨街夏日

宮尾 光峯

僧 鈴木 憲治

早苗晴 野菜當春 梅岡 玉葩 片岡 中郷 秋 草 丘人 箱根用水 静日 高橋 祐輔

鹿 西浦甲史郎 秋晴 山科 杏享 三宅 秀雄 潮騒 桑野 博利 佛像 樋口 暢 春光 阿部 六陽 老母ト孫 太田 那美

國民合唱歌 戸島 光雄 秋茄子 紅雲 山かげ 福島 敏之 返照射山 橋田 永芳 矢部 榮男 朝 新井 守 雁 山田 耕雲 和増産譜ノ一 徳田 隣齋 秋ノ日 佐藤 晴行 勤勞 辻 量子 山陰の港 天野 大虹 秋ノ野ノ草々 中田 草春 千潮 信太 金昌 澄心 横尾 芳月 地底敢闘 山田 申吾 戦果を開く 伊藤悠紀子 松の澗 齋藤 亮一 勅使門(醍醐) 加藤 重壽 勝沼風景 大田大仙子 第二部

不動明王 山櫻 松井 大浩 好日 米陀 寛 赤沢 山 加藤美代三 唐招提寺 山崎 忠明 磐梯入冬 磐田 耕雲 秋ノ日 佐藤 晴行 勤勞 辻 量子 山陰の港 天野 大虹 秋ノ野ノ草々 中田 草春 千潮 信太 金昌 澄心 横尾 芳月 地底敢闘 山田 申吾 戦果を開く 伊藤悠紀子 松の澗 齋藤 亮一 勅使門(醍醐) 加藤 重壽 勝沼風景 大田大仙子 第二部

生産 希代 稔 破 邪 秋晴 黒光 茂樹 爽秋 井上 通世 炭焼小屋 三井惣太郎 母子 冬木 清 白毫寺村 小川 立夫 ぬひとり 海野 旭世 山裾に注ぐ雨 横山 蒔生 残身 蓮尾 辰雄 造船 伊坂 公瑞 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

門 畑 晃 春 精励 久保 多爾 炭焼小屋 三井惣太郎 母子 冬木 清 白毫寺村 小川 立夫 ぬひとり 海野 旭世 山裾に注ぐ雨 横山 蒔生 残身 蓮尾 辰雄 造船 伊坂 公瑞 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

阿新丸 高山 辰雄 決 関 憲邦 炭焼小屋 三井惣太郎 母子 冬木 清 白毫寺村 小川 立夫 ぬひとり 海野 旭世 山裾に注ぐ雨 横山 蒔生 残身 蓮尾 辰雄 造船 伊坂 公瑞 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

曉 雨 北村 明道 決 関 憲邦 炭焼小屋 三井惣太郎 母子 冬木 清 白毫寺村 小川 立夫 ぬひとり 海野 旭世 山裾に注ぐ雨 横山 蒔生 残身 蓮尾 辰雄 造船 伊坂 公瑞 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

白牡丹 荒木 天立 朝市 森 正元 ぬひとり 海野 旭世 山裾に注ぐ雨 横山 蒔生 残身 蓮尾 辰雄 造船 伊坂 公瑞 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

湖畔新秋 安島 雨晶 鶏 匠 △小早川 清 造船 伊坂 公瑞 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

眞鶴 阿部 能人 山村 横江 正義 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

魚群來たる 笠松 紫浪 山村 横江 正義 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

牧 笠松 紫浪 山村 横江 正義 翠蔭 鍛冶 照應 童女清掃 小坂 勝人 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

御 楯 拙以 △鴨下 晃湖 田舎ノ客 前原豊三郎 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

金鱗争覇 △福田 惠一 朝 顔 △町田 曲江 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

六郷夕照 △水上 泰生 朝 顔 △町田 曲江 春の上高地 櫻井 鴻有 蛾 △三輪 晃勢 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

△穴山 勝堂 菜園 奥村 采非 秋晴 田岡 春徑 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

新秋 岡田 重雄 立夏 岡田 麗水 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

皇軍征服山関 青鱗 富永 幸男 慈 光 △三宅 風白 新念 月居 偉光 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

河野 秋郎 水郷の春 洛北の女 山 籠 笠 下川 千秋 竹 高田 清 佐藤金一郎 残雪の高原 河合 健二 蘇峰先生像 小林 亮三 微薰 大日三世子 早秋 池田 輝治 野良 杉山 一正

現代美術展覧会 (昭和十八年度)

四七

第二部

砂丘 薄江 勘二 頼る少年 金子 三藏 野良 杉山 一正

静日 高橋 祐輔 老母ト孫 太田 那美 仙峽 峰村 北山 語部の唄 福田 久也 生家 白鳥九壽男 神路山早奉 角谷 海方 紙漉 高浪 勢以 爽秋 富山 御雲 松韻 白井 炯品 朝 平田 菊栄 秋の大和路 西岡都久路 御楯 大宮 俊興 半島の秋 池田 勝山 遠つ神祖 横山 孝行 残照 吉田眞砂人 山頂 中田 晃陽 九十九里 久間 光一 勅使門(醍醐) 加藤 重壽 勝沼風景 大田大仙子

静日 高橋 祐輔 老母ト孫 太田 那美 仙峽 峰村 北山 語部の唄 福田 久也 生家 白鳥九壽男 神路山早奉 角谷 海方 紙漉 高浪 勢以 爽秋 富山 御雲 松韻 白井 炯品 朝 平田 菊栄 秋の大和路 西岡都久路 御楯 大宮 俊興 半島の秋 池田 勝山 遠つ神祖 横山 孝行 残照 吉田眞砂人 山頂 中田 晃陽 九十九里 久間 光一 勅使門(醍醐) 加藤 重壽 勝沼風景 大田大仙子

静日 高橋 祐輔 老母ト孫 太田 那美 仙峽 峰村 北山 語部の唄 福田 久也 生家 白鳥九壽男 神路山早奉 角谷 海方 紙漉 高浪 勢以 爽秋 富山 御雲 松韻 白井 炯品 朝 平田 菊栄 秋の大和路 西岡都久路 御楯 大宮 俊興 半島の秋 池田 勝山 遠つ神祖 横山 孝行 残照 吉田眞砂人 山頂 中田 晃陽 九十九里 久間 光一 勅使門(醍醐) 加藤 重壽 勝沼風景 大田大仙子

静日 高橋 祐輔 老母ト孫 太田 那美 仙峽 峰村 北山 語部の唄 福田 久也 生家 白鳥九壽男 神路山早奉 角谷 海方 紙漉 高浪 勢以 爽秋 富山 御雲 松韻 白井 炯品 朝 平田 菊栄 秋の大和路 西岡都久路 御楯 大宮 俊興 半島の秋 池田 勝山 遠つ神祖 横山 孝行 残照 吉田眞砂人 山頂 中田 晃陽 九十九里 久間 光一 勅使門(醍醐) 加藤 重壽 勝沼風景 大田大仙子

静日 高橋 祐輔 老母ト孫 太田 那美 仙峽 峰村 北山 語部の唄 福田 久也 生家 白鳥九壽男 神路山早奉 角谷 海方 紙漉 高浪 勢以 爽秋 富山 御雲 松韻 白井 炯品 朝 平田 菊栄 秋の大和路 西岡都久路 御楯 大宮 俊興 半島の秋 池田 勝山 遠つ神祖 横山 孝行 残照 吉田眞砂人 山頂 中田 晃陽 九十九里 久間 光一 勅使門(醍醐) 加藤 重壽 勝沼風景 大田大仙子

静日 高橋 祐輔 老母ト孫 太田 那美 仙峽 峰村 北山 語部の唄 福田 久也 生家 白鳥九壽男 神路山早奉 角谷 海方 紙漉 高浪 勢以 爽秋 富山 御雲 松韻 白井 炯品 朝 平田 菊栄 秋の大和路 西岡都久路 御楯 大宮 俊興 半島の秋 池田 勝山 遠つ神祖 横山 孝行 残照 吉田眞砂人 山頂 中田 晃陽 九十九里 久間 光一 勅使門(醍醐) 加藤 重壽 勝沼風景 大田大仙子



- ひな  
大島 士一  
庭 足代 義郎  
武人古老  
鈴木 満  
三河の草丘と仔  
牛達 大月 源二  
診察室の宮崎先  
生 渡辺 武夫  
梅と海  
平 勇雄  
朝 緑川廣太郎  
南ノ衣裳  
△黒田 頼綱  
北辺盛夏  
岡村 芳男  
冬の嵐山  
河井 達海  
蓮沼 今井 憲一  
洋燈の前  
△森田 元子  
草笛 藪野 正雄  
童子 西村 計雄  
海南島料亭  
齋藤 求  
浜 小川 博史  
草上 松岡 正  
江上の船付場  
△青山 竜永  
鉄を持つ少女  
小田 忠  
中国五道街  
松島 正人  
当麻寺西塔  
渡辺 修
- 春氣生動  
山内 善三  
雪降る日  
中野安次郎  
大原 女  
徳永富士子  
繕ふ 女  
田中 義夫  
少年立像  
村上 巖  
石群 山野 正  
六甲山  
上田 清一  
窓外 繪 竜之助  
初秋の日  
黒田久美子  
早春 高木春太郎  
田畔 岩瀬富士雄  
春  
△朝井閑右衛門  
白骨林紅葉図  
△山脇 信徳  
造船場  
△石川 寅治  
疏菜園  
△島崎 鷗二  
富 嶽  
△高岡徳太郎  
三つの林檎  
△久保 守  
晩 夏  
△申村 善策  
△富士 紅富士  
△山本 鼎  
秋の山路
- 秋 萩  
△横堀角次郎  
清流残響  
△水谷 清  
ハルビンの裏町  
△野口彌太郎  
印度少年  
△田村孝之介  
赤道直下  
△鶴田 吾郎  
利 録  
△太田喜二郎  
風 影  
△岡田 謙三  
農家 大瀧斗良樹  
野風 呂  
△高宮 一栄  
戦跡鎮海  
△國盛 義篤  
婦人像  
△土佐林豊夫  
サト・ボロの浅  
春 能勢 眞実  
婦校 安藤 幹衛  
波子の浜  
△森脇 忠  
雪の街  
△中谷 泰  
雪ふる山河  
△眞下 慶治  
庭の一隅  
酒井 英安  
野菜 星野篤之助  
野山 渡辺 裕
- 金 魚  
△大森 啓助  
水辺新緑  
中川 三郎  
晩秋の森  
△浜田 穂光  
聖林寺ノ観音  
白川 一郎  
ヘルマン屋敷近  
郊（六甲）  
天王寺谷卓三  
北國窺春  
三浦 寛三  
凌霄花咲く頃  
△大沢 海蔵  
ハケ岳山麓の村  
△高田 誠  
扇を持てる女  
△水上 信雄  
六月の畑  
田辺 門樹  
紅うつぎ  
△高橋 庸男  
マラツカ海  
△山崎 省三  
鐘裏形影  
△五味 清吉  
石 △浅井 眞  
大洋ニ沿フ  
△松山 省三  
△奥瀬 英三  
志摩半島的一端  
▲正宗得三郎  
バーモウビルマ  
國家代表像
- ▲伊原宇三郎  
▲青山 義雄  
秋草に赤蜻蛉  
▲横井 礼市  
宵 像  
▲田辺 至  
高原の雪解くる  
永  
▲辻  
南方の蘭花  
▲川島理一郎  
波切り  
▲○中沢 弘光  
奈良公園新緑  
▲○山下新太郎  
▲○藤田 嗣治  
あふぎ  
▲○長谷川 昇  
尾瀬沼  
▲白瀧幾之助  
ブリテマ高地を  
望む  
▲○和田 三造  
五十嵐先生像  
▲○石井 柏亭  
菜園春酣  
▲○南 薫造  
雪嶺先生  
▲中村 研一  
田園五月  
▲中川 一政  
少 女  
▲阿以田治修  
夏の小川  
▲齋藤 興里
- 湖畔の小屋  
▲○有島 生馬  
島上の春  
▲○小林 万吾  
嶺巖霧湧  
▲足立源一郎  
農 家  
▲岡 鹿之助  
マライの少女  
▲官本 三郎  
香 妃  
▲東郷 青兒  
春日神苑の朝  
▲鍋井 克之  
田園眺望  
▲野間 仁根  
縫 物  
▲鬼頭鍋三郎  
上げ 汐  
▲兒島善三郎  
山峽の春  
▲鈴木千久馬  
家 路  
▲吉村 芳松  
津 雪  
▲柚木 久太  
平沼さん健在  
▲小糸源太郎  
セイロン島の少  
女  
▲大久保作次郎  
夢 殿  
▲中川 紀元  
初夏の海  
▲小林徳三郎
- 黒部猿飛  
▲佐竹徳次郎  
鶴壽千歳  
▲木村 莊八  
阿密哩多軍茶利  
▲宮田 重雄  
緑蔭裸身  
▲石井 鶴三  
芍 薬  
▲清水 良雄  
ともだち  
▲中野 和高  
朝 ▲小林 邦報  
少 女  
▲近藤 光紀  
阿蘇山晩秋  
▲田崎 廣助  
待 機  
▲池部 釣  
菜園の隅  
▲陥 三彩亭  
木曾谷  
▲木下 義謙  
黄いろちは持つ  
婦人像  
▲中村 琢二  
古風な人形  
▲鈴木信太郎  
もれ日  
▲安宅安五郎  
八坂神社西門  
▲須田國太郎  
山湖初秋  
▲宮坂 勝  
南の鳥
- △高間 惣七  
富士見高原初冬  
▲黒田重太郎  
南方の女達  
▲中山 巍  
坐 像  
△吉井 淳二  
夕映えの海  
△別府貫一郎  
香港上陸画稿  
△太田 三郎  
風 景  
▲高野三三男  
朝 ▲野口 謙蔵  
月夜の胡同（北  
京）△石川 滋彦  
波 紋  
△香月 泰男  
或在郷軍人  
△山下大五郎  
△小林 和作  
△金沢 重治  
群緑春装  
▲熊岡 美彦  
男 ▲中間 冊夫  
晩夏静物  
△渡辺 浩三  
懸崖秋色  
△戸津 文雄  
農 家  
△加山 四郎  
漁夫とその妻  
△近岡善次郎  
古光山  
△辻 愛造

牡丹園 △池田金之助

少 年 △椿 貞雄 七面鳥

鉄 兜 △小穴 隆一 奈良の秋

藤島先生をしの びて △南 政善 △松島 一郎

野 川 △藤岡 一 夕 月 △川合 修二

籠の葡萄 △牛鳥 憲之 紹 刺 △和田 香苗

多聞天の像 △田中 繁吉 窓 辺 △山喜多二郎太

軍 鶏 △関口 隆嗣 ロッペン鳥 △市ノ木慶治

雪 國 △山下 繁雄 面 室 △寺門 幸藏

赤 衣 △納富 進 △飯島 一次

煙製など △園部 晉生 ジヤワ踊 △井手 宣通

白磁と枯花 △上野山清實 秋の農園 △北川 民次

コブラの踊(昭和 南にて) △山崎 隆夫 空に備ふ △家永驥三郎

水 禽 △鈴木 亞夫 九竜壁(北京) △榎戸 庄衛

車 山 △胡桃沢源人 ノモンハン草原 △菊地 精二

平壤の娘 △田村 一男 壁 際 △遠山 清

雪 水 △佐々貴義雄 赤柴部隊縣外 城東門攻略之図

刀 匠 △片岡 銀藏

△中村 節也 日の丸仰ぐ

△池田永一治 子供と栗

△須田 壽 炭焼の老翁

△小川 智 初 秋 △伊藤 應九

霧雨けふる日 △梶原 貫五

△鈴木栄二郎 山 峽

△鈴木栄二郎 工 場

△清水 刀根 子等遊ぶ谿

宮脇 晴 神洲第一山

△倉田 三郎 群峯露雨

△古家 新 高 原

赤堀 佐兵 ヒマ稔る

中條 茂 姉 妹

△深沢 紅子 中秋 祇園

隆 和尙台 清水敦次郎

希 望 三宅 輝夫

けしぼうず 山下 忠平

△川村精一郎 磯 一 到

△光安 浩行 萩咲く庭

大河内信敬 或る日の家族

桑原 福保 海 辺

△田城寺 昇 牧草刈り

△福田 新生 舟上にて

△中尾 達 二人の名騎手

△宮本 恒平 樹下遊猫

△喜多村 知 母と子

谷沢 一郎 残 雪

△北島 浅一 船匠 藤本東一良

鶏ト南瓜 木村 豊市

靖國の社頭 靖國の社頭

△平沢 定治 朝 櫻井 悦

北京慶日 坂本 益夫

秋 晴 小林 易夫

秋風來 藤岡俊一郎

造船(甲飯作業) 紅 蓮

△岩下 三四 雨の池

西村喜久子 水 高沢 圭一

達陀の行法 千人針を縫ふ

△高田 力蔵 千人針を縫ふ

△塚本 茂 芙蓉

△土屋 義郎 農家の一隅

西沢 栄一 鏡 熊沢 欽三

或る提督 北海道の或部落

池谷 寅一 訓練の後

相沢 武男 種 葱

伊藤 鎗一 少女 笠井 忠郎

食卓器ト野菜類 吉原 義彦

深田石佛 仲町 謙吉

花 村山 密 残暑の丘

高橋 北修 隅 大内田茂士

木工(旋盤作業) 熊野 礼夫

馬 戸田 定 漁港草堤(播州 二見)

三崎 六郎 漁港草堤(播州 二見)

三崎 六郎 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

白衣服 北村 綱義

室内閑靜 朴 泳 善

夏日 橋詰英一郎 竹 園 勇二

上海黃浦江 近藤 五郎

出撃の前に 佐々木福基

新涼 坂田 虎一

母の像 林 綾子

午後 川口 四郎

庭 大河内信秀

河原 橋本 泰光

納屋の前にて 納屋の前にて

砂丘 佐藤 辰治

壺屋町風景 内田 実男

木造 船 藤原 昇一

老人と釣具 西尾 善積

農家 阪野 博

休 操 △南城 一夫

皇后 嶋 皇太后

△寺松國太郎 祖父と孫

河原 修平 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

漁港草堤(播州 二見) 漁港草堤(播州 二見)

高原牧場 柴田 恕夫

海と子供達 筒井 廣道

点呼記念 稻森 麗治

鋼板船建造 △笹鹿 彪

林 間 水野 一好

鯨と人達(樺太) 木村 捷司

牡丹 鈴木 清

見玉の瀑 佐藤 克三

親子馬 小川 勝藏

巖 倉橋 英男

初秋 南 寛

風景 吉田 宗一

溪流 三田村 築

湖畔の村 安西 恒男

水田の牛 保田 善作

漁船 浪江勘次郎

磯 戸田 郁郎

決戦下ノ勤勞奉 磯 戸田 郁郎

いもん 宮永 岳彦

焚火する海女 佐藤 昌胤

綱物 小貫 綾子

沢野井信夫 神鷲海軍中佐牧

野三郎像 △河野 通勢

△河野 通勢 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

記念艦三笠艦橋 塙 忠

花 山崎利津子 首里風景

大嶺 政寛 厨 白井きよ子

鳥の井戸 細谷 重雄

△安宅 虎雄 回教徒の礼拝

△橋本 徹郎 山 春園

△佐藤 一章 北京風景

△上野 春香 ジヤワの市場

平通 武男 閑庭 山田 千秋

聖戦に祈る(十 一面觀音像)

△布施信太郎 猶大逕走

△矢島 堅土

△河井 清一 夏 衣

△河井 清一 馬 競

△細井 繁誠 作業服の女

△江藤 純平 孔 雀

△伊藤 四郎 神鷲海軍中佐牧

野三郎像 △河野 通勢

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

野三郎像 野三郎像

秋の静物

△木村 辰彦  
静物 中出 三也  
かがしとすずめ  
小出 卓二

焙鎖爐 深山 力  
漁村の午後  
大桃 寛

山家秋 兒玉 勝次  
新雪 川島 実  
山陰風景  
松田 晃八

自画像 大原 省三  
入梅 木村 定男  
午下り  
星島 沢子

母 熊谷 公  
甲州の春  
松平 齊光  
東北の婦  
小泉 富司

北京朝陽門外 鈴木 隆  
ひまはり  
澁川 駿二  
夏 童

△三宅 克己  
山村渡頭（水彩）  
▲赤城 泰舒  
梓川平野（水彩）  
△石川欽一郎

北満の都  
△三雲祥之助  
蔵 王  
△菅野 圭介

椅子上の静物  
遠山 義春  
草はら  
坂本 幹男

穂拾ふ 清水 茂郎  
早春のリンゴ園  
一木万壽三  
繁ミ 川原 章二

工場ノ一隅 竹岡良太郎  
大和の山（古光  
山） 佐藤 篤郎  
國境の少年達  
高井 貞二

磁鉄 田辺 穠  
回教寺院の内苑  
田中 忠雄  
山の男  
伊藤 清永

文樂人形 森田 茂  
母子像  
中村新次郎  
墳輪 橋本 三郎

養魚場（水彩） 上田 素由  
大崎 善生  
初秋風景（水彩）  
内田 豊

庭の初雪（水彩）  
渡辺 義一  
靴（水彩）  
山本 彪一

花の実  
△奥田郁太郎  
緑蔭 御供 長夫  
新羅 佛  
日下 泰輔

雀飛ぶ田園 君家 三郎  
窓辺に立つ女  
津田 弘次  
空 桑原 実

湖畔煙雨 岡田 一馬  
菜園ノ子供  
大沼 靜蔵  
隣組菜園  
友田 利夫

母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄  
新聞を読む少女  
野村 千春

博物館の想像 布施 浩  
收穫 坂本 大一  
星まつり  
西原比呂志

老舗店頭 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

△安田 稔  
燒 田川 勤次  
竹内 梶夫  
お雛様 平田 康

夏の午後 西山 眞一  
静物 吉岡 佑晴  
奈良の森  
△小野藤一郎

荒 地 山本日子士良  
庭 津田 周平  
冬の湖 井上 武  
若い工員 浜田 隆介

初秋 小竹 義夫  
花 井上 賢三  
弓の女学生  
川辺 外治

積込 高谷 重夫  
冬日 青地秀太郎  
杉並風景  
原本 虎雄

蘇州城（水彩）  
△板倉 賛治  
古城（松山）  
△恩地孝四郎

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）

△奥田郁太郎  
佐々木英夫  
農繁期  
鈴木三五郎

市場 山本 信親  
信濃の秋  
関四郎五郎  
勤勞作業  
鈴木 正二

多摩野 松村 昌訓  
母の像 古城 宏一  
農村風景  
亀井 貞雄

新聞を読む少女  
野村 千春  
夏 下郷 羊雄  
たけやぶ  
内山 又輔

鉢 島田 四郎  
若鷄 斧山万次郎  
江津ノ初夏  
田代 順七

水に咲く（水彩）  
篠原 新三  
静かなる夕（水  
彩）△長坂 春雄  
夕支度（水彩）

愛染経・涙殿降  
魔大不動明王板  
画（版画）  
△棟方 志功

氣球をもつ空  
（版画）  
△恩地孝四郎  
古城（松山）



(版画)

橋本 興家  
南國勤勞(版画)

草(エッチング)  
高羽 敏

江南風景(エッ  
チング)

武蔵 完一

北洋を征く  
△花里 金央

想 △小室 達

大道宣明  
△橋本 高昇

母の護り  
石井 滋

決心 松田喜三郎

裸婦立像  
杉田 春夫

実盛 向 正三郎

記念碑的試作  
森本 清水

必勝荷揚  
小金丸幾久

裸婦 稻垣 勝美

珊瑚海の鎮め  
米林菊彫人

日本語  
△三木 凱歌

女立像  
南 庄作

肇國の理想  
△上田 直次

景 清  
△畑 正吉

神ニ捧グ南方ノ

果実 清田 清也

いそ 森本 眞造

裸女像  
明石 順吉

牛 福井 庸賢

熱風に挑む  
遠藤 松吉

立女像  
福崎 日秀

兵士像  
本田 明二

青年の像  
△片山 義郎

光り東方ヨリ  
今城 國忠

新生 小松 彌六

御橋 山宮 只司

圓魂 村井 辰夫

青年 岸本 廣義

山を征く  
坂上 政克

牛 岸本 傳紀

男 △渡辺 弘行

学徒 坂東 文夫

瞑想 西山 如拙

髪 北村 治禧

△平沢 信勇

逆風 松本 庄吉

防人 △杉本 宗一

婦人立像  
大津留依子

装 芦田 岳堂

水平線  
△田村 勝二

横臥 △村田勝四郎

蹲女 △中川 清

待避壕  
△寺畑助之丞

女立像  
木村 八郎

南欧の闘争  
△河村 竜興

九歳にて大利根  
を泳ぎ切りたる

御魂まつりて  
△小笠原貞弘

植樹  
清水多嘉示

伴を慕ひて  
△横江 嘉純

光有  
△羽下 修三

簡素  
△雨宮 治郎

若葉の頃  
柳沼 曹雲

翼に続け  
○朝倉 文夫

まりとり

木村 惠保

当才仔  
小樽山 忠

漁老  
△木村 桂二

大陸  
△堀 進二

若き彫刻家の像  
脇山 雅

軍神岩瀬勝輔大  
尉 △小倉右一郎

風 新田 実

静観 齋藤 向明

豊穰 尾形喜代治

振起 高藤 鎮夫

浄土 坂 青嵐

古川氏之像  
△小川 大系

希望 本莊 正雄

攻防  
△野々村一男

突撃 山口伊之助

力士試作  
△長谷川義起

沃野捧身  
吉川不二雄

一と休み  
山崎 秀雄

夜討會我  
横山 正三

勤勞報國  
北地 莞爾

沃土 毛利武士郎

鉄兜 羽田 千年

潮に銀ふ  
緒方 敏雄

鍊成 中垣 秀吉

献光 佐藤 勝輔

誓 亀貝 晴光

龍馬 大野 信藏

建設 鈴木 基弘

御旗の下に  
霜田大次郎

青年 川瀬 勝藏

坐像  
故山本 淳一

勝利 浅井 行雄

農村託児行  
上條 俊介

脇構え  
須崎 秀一

勤ク人  
梅田 修

欽山の男  
台澤 吉光

女人坐像  
門傳 正衛

台湾の女  
青空 松野 伍秀

裸婦立像  
佐野 信雄

新生 水島 弘一

立女 寺田 吉松

若い男  
谷口 百馬

吹雪 古川 武治

戦士明王  
△奥山 泰堂

髪 來家 虛醉

海に銀へる  
△森 大造

南方詩情  
△伊藤 鉦次

從軍看護婦  
佐藤 助雄

女の顔  
△山本 豊市

觀世音菩薩  
△後藤 清一

正志齋先生  
△森山 朝光

石橋博士像  
▲加藤 顯清

吾も又防人也  
△須藤力次郎

大山津見神の二  
人女

▲橋本 朝秀

母子  
△國方 林三

裸婦 曹圭 泰

老母試作  
△赤堀 信平

母を待つタベ  
中地 甲陽

造船職士  
中西 弘運

温陽  
△毛利 敦武

つはものを主題  
とせる浮彫

△藤沢 古実

大空に誓ふ  
△安 一

護り 山脇 正邦

鉄の戦士  
伊藤五百亀

十二聖賢ノ内菅原  
道真公

△山根 八春

火 牛

△岩田 千虎

あゆみ  
朝倉 鈴子

鉄と女性  
△田村 春火

断片 澁川 木童

古稀の人  
△鮫島 台器

神意  
△津上 昌平

銃後の決意  
安藤 士

天意  
△三國 慶一

野口兼資師能姿  
卷絹

△後藤 良

ますらを  
▲○内藤 伸

運慶  
△井口 喜夫

進撃 寺村精十郎

▲齋藤 素巖

大氣津比賣神  
△大内 青圃

醜の御盾  
△山脇 敏男

弓 △翁 朝盛

國引キ  
杉本幸一郎

清新 日下 寛治

一億一心  
△山内 倉藏

小休止  
岩川 義雄

烈日譜  
△中島 東洋

麻須良乎  
△熊谷幸太郎

老骨挺身  
富永 良雄

女の首  
日原 晃

建國体操に於け  
る 石田 清

立女 星野 直弘

裸婦  
△陳 夏雨

巢立ち  
△宮地 寅彦

朝 △進藤 武松

若人は征く

かむ

從軍 後藤 光行

さわやか

女立像

蝶文香盆

△井上 良齋

秋草文縹影金色

立像 乗松 巖

安藤 達孝

再起 石橋 古鈴

左 欣司

西尾 忠次

△大須賀 喬

芋ノ蔓紋花瓶

紙管 後藤 学一

万葉時代

少女立像

頼る可き人

男 宮本 光庸

女 鷹集 照久

芝山象嵌線香簍

△河合榮之助

氷華磁珍果文花瓶

女習作

黒川 泰

男 服部不二之

裸婦立像

朝風 本田 徳義

小河源千波

黄銅象嵌文壺

寺本 美茂

晴爽 岡田 晃

密林に挑む

戦野を偲びて

起ち上る学徒

藤庭 賢一

皇恩に報いん

片岡 静観

鑄造鉄絵紙箱

佛頭試作第一

杉村 尙

出陣

立像

ある日の白隠

△長沢 幸夫

秋ノ作

詩華集

水汲む女

印度よ起て

出免前

汗 小笠原安兵衛

汗 小笠原安兵衛

詩華集

△廣川松五郎

△磯井 如眞

想菱 平野 敬吉

強弓

渉 建昌 寛造

有地 滋迪

△磯井 如眞

彫漆老松手篋

△佐藤 陽雲

花瓶赤絵

坐女 西 俊夫

△佐伯 量良

立像

正鶴 太田 良平

若櫻 小林 南竜

牡丹彫文磁花瓶

△宮之原 謙

四分一製彫金鶏

少女 小島 克也

決戦 百瀬三喜雄

女性像

△荒居 徳亮

希望 宮本 隆

男 遠山 静夫

荷揚げ

△河内山賢祐

鎮成（陸上戦技）

皇土ヲ護ル

池田 秀雄

若き防人

△西田 明史

羊を飼ふ老人

△吉田 三郎

二六〇三年作

臨風氏之像

△尾崎 一草

立像 阿部 正基

大氣 中島 快彦

海兵 仲 眞弘

磯に立つ

渡部 星村

空の御盾

男 原田新八郎

夕焼け

△北村 西望

機 影

△倉沢 興世

少年 鶴田 壽孝

くしけづる

鈴木 三郎

裸婦立像

鞍馬の牛若

△太田 重範

金谷與三郎

△太田 重範

金谷與三郎

△太田 重範

金谷與三郎

△太田 重範

金谷與三郎

△太田 重範

金谷與三郎

△太田 重範

宮代 健三	本間 琢齋	黒砂磁花瓶	煉込鉢	南方草花文花瓶	染色二枚折屏風	七宝文焼口釜	瀧川 七郎
鍍金雜置物	棚 多畑 宗哉	萬蒲飾箱	福井 樂印	梅柳文線り口釜	帖佐 美行	唐草文螺鈿卓	栗ノ花文平蜘蛛
八田 竜昭	鉄釉鉢	井田 宣秋	八木 純夫	手箱 猫	後藤 九吉	板倉 末到	釜唐銅蓋添
黄銅細口花瓶	八影地文釜	柏ノ図彫漆手箱	芋の図文庫	保谷 美成	陶花器	流象嵌鉄花器	立松 山城
金森 光雄	大國 柏庭	小口 正二	古山 英司	隅切りかぶせぶ	吉賀 壽男	鴉飼 康次	高橋 節郎
玉蜀黍彫漆手箱	黒釉布目釉彩文	日本五景花瓶	木製松竹梅紋宮	た游心蒔絵手箱	牡丹模様木象嵌	磁製象嵌一輪生	蓮之図染屏風
植田 如僊	水盤 杉浦 芳樹	△桂 光春	梶田 惠	川合 麦郎	影之手箱	得地 斧山	般若 信弘
鉄釉透紋筒形花器	磯谷丹桐春	柏文鏡銀刀子	面取瓶掛	結界 中山 憲一	十字文香爐	鉄線之図文庫	矢車草の図花瓶
泥釉蓬草文花	榎本 薩雄	夏に咲く手織綴	長谷川白峰	堆朱花文手箱	小鳥のさきやき	三井安蘇夫	中島 清
瓶 太田良治郎	布目花鳥文香箱	小屏風	寛麻染色二曲屏	花文手許棚	高橋 静堂	置物	漆器実手箱
黄銅打出し網目花	白井 陽谷	松井よし子	エゾニウ紋染二	磯矢阿伎良	△山室 百世	△中野 三郎	合田 平吉
瓶 平田 重光	土屋 宗益	成竹登茂男	坂本 芙蓉	黎明(單峰院)	船津 英治	鑄銅銀置物	白磁水指
南の蔓草連環文	皿 松本 佩山	漆器彫彩月かげ	山浦 等	翼形銀付筋釜	角谷與兵衛	鑄銅銀置物	加藤 鏡一
花瓶 勝尾青竜洞	銅壺 松原 春男	風爐先屏風	漆ダリヤ四棚	玉蜀黍手匣	天野 文堂	白砂釉四方形壺	防空人物譜染屏
四分一色紙宮	漁籠ノ図手箱	秋の水木彫衣裝	黄銅星座文手箱	角谷與兵衛	春日譜二枚折屏	鑄銅四方形壺	風 山岸 堅二
松原 南海	平野 直行	像 平田 郷陽	杉野 一彦	翼形銀付筋釜	暮田 延美	鑄銅獸耳花壺	圓圈紙染屏風
漆器手箱	椿文六弁形盛器	軍鼓を打つ少年	眞紙彫像	庭前小景染屏風	花 笠尾 清	釉象嵌ダリヤ花	蔓草文花瓶
佐藤 閑哉	鳴鶴之図飾棚	△松田 権六	夏衣人形	五味 文郎	後藤三樹亭	△飯塚琅玕齋	金工花文宮
刻茄子文壺	桑匣 卓	油滴流雲花器	草花ノ図手箱	草花紋碧泐皿	内田 邦夫	清 水 祥次	草花ノ図手箱
たまひだ宮	月尾 慶水	大鳥 五雲	川口 盧舟	牡丹唐草平脱螺	銅箱 羽野 禎三	堆漆色紙箱	鈴木 秋湖
飛鶴文庫	竹内 泉石	蠟抜いたとり之	大壺	鈴木 清	鍾置物	鍾置物	鍾置物



- 風 高久 空白  
竹染屏風 岸田宗三郎  
鯉小屏風 喜八  
節句二曲屏風 喜八  
橫山 一夢  
牡丹之図和紙糊 繪屏風  
象嵌胡桃棚 吉本 壽  
染二曲屏風木蓮 異 勇  
みのり染屏風  
△喜多村榮太郎  
麥秋藏金風爐先 屏風 齋田 梅亭  
潛望彫刻三曲屏 風 橫山 白汀  
乾漆線紋花瓶 田中 健智  
金魚紋盛器 北出塔次郎  
鑄銅花器 蓮見 秀  
鸞鴛伏香爐 久保駒太郎  
象嵌具文龍銀壺 大谷 春彦  
鳳紐香爐 渡辺 顯子  
廣口丸形銀瓶入 黃銅朝顔文壺  
海老沢三一  
谷口 幸珉
- 模文庫 近江 晃  
秋苑時絵文庫 △三田村自芳  
鑄銅雙口花器 清水 辰雄  
蛇目文花生 松田 正柏  
鑄銅花瓶 酒井 靜女  
山婦來文花壺 栗木俊茶夫  
竹花 籃 田辺竹雲齋  
「望月」黃銅花瓶 後藤 年彦  
獅子散開 △西村 敏彦  
銀打込象嵌紋壺 小川 正波  
皿 △つく文綴飾 皿 佐藤 貞一  
螢光研硯石 雨宮 靜軒  
秋色硯箱 小森 光堂  
鏡中象文角飾鉢 佐野 栄山  
湖麁文宮 △島野 三秋  
竹編干菓子器 林 尙月齋  
彫金燕子花手宮 彫金燕子花手宮  
谷口 幸珉
- 雲井竜胆文透皿 西村 英夫  
彩色蒔繪小鱗図 色紙箱 森 象堂  
彫金手宮 栗田 雪雄  
鐵銀布目象嵌蝶 文宮 淺井德太郎  
鶉絵八角皿 大江 文象  
銀四分一切小宮 小川 友衛  
野馬図長形小宮 矢島 光波  
華形鑄銅花器 米田 博俊  
八角形菊ノ手宮 吉田 模堂  
南瓜之図大壺 德力孫三郎  
金工葛葉文花瓶 齊藤 桂一  
青華霜林八稜花 瓶 河本 礫亭  
漆柘榴宮 德山 嘉明  
乾漆彫鏤鷄置物 橫山 玉抱  
金工梅花文花瓶 豊川 光次  
漆飾経宮 入山 白翁  
銅獵豹置物 田中 芳郎
- 金屬柳水文水指 牧田 久義  
穀稼成熟鳳志野 四方平水指 水野 愚陶  
瓜文色紙短冊筐 堂本 漆軒  
青絵車前草ノ図陶 宮 福田力三郎  
榕文手箱 △音九 耕堂  
彫漆小屏風 増田 敬象  
遊鯉二枚折小屏 崎山 閑齋  
染織劬く母の小 屏風 竹田 十路  
田植音頭二枚折 屏風 青戸 久壽  
百日草小屏風 小森 克己  
寛麻実る鵲繡染 二枚折 服部 好雅  
漆ひるがほ小屏 風 佐治 正  
小川風物型染屏 風 小島惠次郎  
漆水小屏風 川瀬 芳秋  
英靈回向鏡錦曼 茶羅一部不動明 王壁掛  
△遠藤 虚績  
蕎麥ノ図彫漆二曲 田中 芳郎
- 小屏風 谷沢不二松  
和染屏風大陸の 実リ 川崎 武雄  
蓮と鴨之図蒔絵 小屏風 山内 清司  
鑄黃銅瑞象置物 辻 正雄  
三生果平脱手箱 伊藤 隆光  
臨銀華文壺 △岡部 達男  
鳳雛薰爐 △香取 正彦  
黃銅忍冬之図壺 鴨 政雄  
辰砂菱花食籠 ▲河井寛次郎  
輪花乾漆喰籠 △中川 哲哉  
眞鍮南裝紋様花 瓶 渡辺 義胤  
長方形鶏頭文庫 島田 春光  
渦紋様花瓶 米田 鳩秀  
磁製桃花花瓶 加賀 月華  
模漆手宮 森 三樹  
八仙花黒味銅鉢 飯田喜代鏡  
型染の帯(紙漉) △芹沢 銑介
- 魚紋花瓶 中村 秋塘  
銀メ加賀象嵌香 爐 ▲高橋 勇  
鑄銅八腹壺 木村庄太郎  
遊鯉文花瓶 藤村 豊秋  
花 器 ▲岩田 藤七  
水際之図手宮 津田 祐作  
波ニ鶴硯箱 原山辰之助  
乾漆夫婦石 木村 天紅  
草華文象嵌手匣 服部 春輝  
古矢竹小箱 阪口宗雲齋  
牡丹紋様八角宮 三浦 榮舟  
豊熟硯宮 ▲小松 芳光  
銀彩銀銅花瓶 ▲寺田 竜雄  
聖果模漆木地時 繪乱箱 ▲高野 松山  
鑄銅花瓶 山本 達次  
あざみ平脱手宮 小田原俊雄  
漆器陽光飾箱 村田 義忠
- 鑄銅花器 木村 近江  
水禽陶額 加藤 六郎  
蔞絵重硯宮 藤岡 研齋  
盛皿セツト大皿 一枚 小皿 六枚  
新井 子鮮  
東方黎明文重硯 宮 ▲梅沢 隆眞  
陶器鶏頭紋皿 (象嵌) 淺見 隆三  
鑄銅駝鳥置物 嶺 晴雄  
彫漆夾竹桃図手 箱 池内 荷芳  
水引草花器 小林 親光  
子香爐 ▲○香取秀眞 隨喜糊染衝立 松島 杜美  
「独立」四分一 硯屏  
旺玄社秋期展(洋) 十七日—二十四日  
新宿・三越  
東丘社「敵國降伏」連作展(日) 十七日—二十四日 新宿・三越  
山本不二夫水彩個展(洋) 十九日—二十一日 丸の内・帝國画廊  
第二回高橋白日子邦画展(日) 十九日—二十四日 上野・松坂屋  
第四回斗牛會展(日) 十九日—二十四日 大阪・大丸  
夢二追悼展 十五日—十九日 銀座・

菊屋

北大路魯山人新作陶磁展(工) 二十日

二十四日 日本橋・高島屋

第二回小柳創生個展 二十日—二十四日

銀座・村松画廊

荒井龍男個展(洋) 二十一日—二十三日

銀座・養生堂

第二回桃源會美術展(日、洋) 二十一日—二十四日

岡山・金剛莊

第一回福岡市展(綜) 二十一日—三十日

福岡・玉屋

第四回山南會展(日) 二十二日—二十四日

大札記念京都美術館

京都—表僊の写実主義をうけついで、それに眞の日本精神を盛り込めんと努力している同人の氣魄は各作品に表現されているが今一段の精進が望ましい。稲田麦風氏鶏連作十点は力作でありその努力を多とし、泉波千鶴氏の版面は秋果、くんせいがよく、徳力富吉郎氏の文殊、葡萄二作は葡萄をとる、小松均氏山水画卷、水墨の味深く、吹田草牧氏は柿が佳作である、その他丸岡比呂史、松井牧牛高橋太三郎、品角一郎の諸氏の作品が眼に止つた。

西窓社洋画展(洋) 二十二日—二十四日

京都・岡崎美術館

京都十同人の作品の眼ざしとこころを拾つてみると、戸島宇雄氏「兄鷺空より来る」は構成がよく、西田静子氏、横地直子氏との二人は共に「風景」に女らしい繊細な味を見せ柴原富造氏は「紅蓮」関川政雄氏は「面河風景」に精進の跡をみせている。中野泰之氏は花に苦勞しているが「山吹」に今一步突込んで描いて

ほしく、長谷真次郎氏「起重機」は眞面目な努力を買ひ、贊助出品の黒田重太郎氏「湖雨秋晴」は同熟せる面風に觀者を画面の中へ没入させる、錦義一郎氏「秋果」伊谷賢藏氏「八ヶ嶽」伊庭傳治郎氏飯田清義氏の「風景」はそれぞれの持ち味を生かし、水清公子氏はお得意の果物に牙をみせている。

高橋仰八油繪展 二十二日—二十五日

丸の内・帝國画廊

藤野龍個展(洋) 二十二日—二十八日

京都・回天堂画廊

第二回日産從業員繪画展 二十三日—二十五日

芝・日産會館

關西邦画展(日) 二十三日—二十九日

日本橋・三越

東朝—戦時文化発揚のために、関西画壇の一流どころを総動員しての展覧である。閉会後は全作品を大阪府美術館に獻納するというところであるが、これだけ大画面の力作が揃えば先ず文句はないであろう。磯原紫峰、福田平八郎、山口華楊が間に合わず、菅橋彦も未着とは聊かさびしいが、いずれも各作家精一杯の仕事

をみせているのはよい。本年度の日本画展としては各展覧會を通じて最も内容の充実したものというべく、いま美術館で開催中の文展よりも見應えがあるのは少

少皮肉である。十六点の出品のなかで、第一にあげたいのは菊池契月の「北政所」第二には上村松園の「晩秋」である。これに次ぐ佳作としては金島桂華の「野鶴」、中村大三郎の「山本元帥」、宇田萩郎の「松」をとる。契月の作は、秀吉の近側にあつて、常に忍苦を俱にした賢夫

人高台院を写した肖像、描写技術もすぐれ、画面も高い。容姿秀麗、端然と坐したこの典型的な日本女性を巧に描いた優秀作である。松園は例によつて回顧的な風俗面で、題材は別にめづらしくないが、技巧はさすがに牙を切つてゐる。桂華は銀灰色の鶴を三羽描けるもの、写真のうちに品位あり近來の快作である。大

三郎の元帥像は、少しく心理表現に欠けるところはあれど、苦心の作たることはその手堅い描法にあらわれている。萩郎は色彩にほのぼのとした明るさがあつて、線に独自の妙味がある。中村貞以の「藝能譜」は、これも前の諸作に劣らぬ佳作、色感の鋭さとやや冷たい知性を見せている。また橋本関雪の「讀光」は戦友の遺骨を有つた南方の勇士を描き、文展の出品とは全く異つた多才ぶりを示している。以上の他に小野竹喬、徳岡神泉、柴本一洋、堂本印象、西山翠峰、石崎光瑤、北野恒富の作があり、南画系のものに水田竹園、矢野知道人の二作が出陳されているから近來の觀物である。

東郷善兒小品展(洋) 二十四日—二十九日

名古屋・松坂屋

第十回關西水彩画協會記念展(洋) 二十四日—三十一日

大阪・大丸

安宅安五郎個展(洋) 二十五日—二十七日

銀座・養生堂

第三回漆繪展覽會(工) 二十六日—三十一日

上野・松坂屋

東毎—松岡大和の月下の白鷺城は漆藝の良所と欠点をもち作品であり、太齋春夫の藏王雪景は油絵よりいくらかくらくい感じだが、かなり成功したものといふべ

く、三木義榮の富士、小品ながら裝飾画風にかたづけられているところに面白味があり、木下きぬ子の山部風味は嘗ての川村清雄の仕事の思い起した。佐藤武造の諸作は塗料にラツカーを用いたため明るい調子は出ているけれども描いた静物が画面から飛び出ない用意が肝心だと思ふ。

美術創作家協會秋季展(洋) 二十六日—三十一日

銀座・日本樂器店

和道會新作陶藝展(工) 二十六日—三十一日

大阪・大丸

陸海軍慰問獻納裝飾画展 二十六日—三十一日

京都・大丸

第六回台灣總督府美術展 二十六日—三十一日

台北市公會堂

搬入 入選

一部 五(四四名) 三(二八名)

二部 二五七(一六九名) 七二(七二名)

無鑑査第一部九(八名) 第二部 一六

(一五名) 査査員第一部四(二名) 第二部二(一名)

〔授賞〕(特選) 石原紫山、伊藤稻雄、

林林之助、陳永堯、余德煌、黃水文、水

谷宗弘、飯田実雄、高田馨、根津静子、

桑田喜好、鮫島梓、佐伯久、宮坂良輔、

廣瀬賢二、(總督賞) 林林之助、石原紫

山、

宇田川種治遺作展(紙芝居繪) 二十七日—三十日

銀座・銀座ギャラリー

鈴木信太郎油繪個展(洋) 二十七日—三十一日

日本橋・高島屋

東毎—二科の出品画に同じ奈良の風景と桃の静物を中心とした近作展観で、格別目新しい感じはないが、小品に見るべきものあり、「初夏の池」「春日野」す

現代美術展覽會 (昭和十八年度)

劇  
画  
廊

である。

馬銀鞍  
柏谷健一郎

石田芳美



定朝の獅子狛犬 柏谷健一郎  
日本武尊 田口銀藏  
義経ひより越 鈴木松子  
石山參籠 鈴木松子  
楠公訣別 近藤新一郎  
上古婦人 栗田忠四郎  
舞人 川崎彌惣治  
舞樂童舞 伊藤兼一  
各種写生 小堀家  
紫式部石山參籠 鈴木松子  
嵯峨野の秋 寺岡誠一郎  
鉢木 須賀惣吉  
皇軍征守屋 中川清壽  
童舞(還城樂) 戸村榮三郎  
豊太 田中銀荻  
凱旋 池沢定吉  
忠臣捕鳥部万 染谷義章  
録足 影沢銀七  
狸々 須賀惣吉  
第二回岡美美術展(日、洋、工)五  
日—二十一日 岡山・金剛莊  
佐伯米子洋画展 六日—九日 銀座・  
資生堂  
大村繁峰富士山漆繪額展(工) 六日—  
十一日 日本橋・三越  
新油繪協会展 六日—十七日 東京都  
美術館  
美術文化協会展(洋) 四日—七日 銀  
座・日本樂器店  
荒谷直之介水彩人物画展 八日—十二  
日 大阪・美交社  
第三回水彩聯盟展 九日—十三日 日  
本橋・三越  
東每一場中出色は荒谷直之介であろ  
う。得意とする人物画の中では「をさな

ご」を生新たな点で注目すべく、朝の漁村  
を描いた一点の風景も中々努力してい  
る。荒谷に次いで春日部たすくの北京  
天壇を描いた二作がよく、蒼野康児では  
「造船」がこの作家のどちらかといえ  
ば荒い筆触を生かした佳作といえる。  
高須芝山南画個展 九日—十四日 新  
宿・伊勢丹

上野玉舟小島の本彫發表展 九日—十  
四日 大阪・大丸  
第四回以心社展 十日—十四日 日本  
橋・高島屋

第三回人形美術院展(工) 十一日—十  
七日 上野・日本美術協会  
第一回七是會作品發表展(洋) 十二日  
—十六日 丸の内・帝國劇場  
紅繪會染色工藝品展 十二日—十七日  
日本橋・三越

第五回銀鑄社水彩画小品展(洋) 十二  
日—十八日 銀座・銀座ギヤラリ  
日本南泉會近作展 十四日 京都・  
美術會館

尚美展(日) 十五日—十七日 銀座・  
資生堂  
橋本はな子南方從軍画展(洋) 十六日  
—二十一日 上野・松坂屋

東朝—出品三十余点。男性の間に伍し  
てこれだけの成果を収めれば先ず上出来  
の方であろう。ジャワ、ボルネオ、バリ  
島などの景観や風俗が描かれているが、  
情趣もあり技術もかなりしつかりしてい  
る。「ジャカルタの盛り場」「ジョクジャ  
の街」「村の娘達」「勇士の墓」「バリ島の  
踊子」等が注目される。  
錦義一郎油繪展 十六日—二十一日

京都・大丸  
京都—恬淡明朗な風格がそのまま画面  
に現れて油彩画でありながら日本的な情  
趣を漂わしており、この特色は関西面境  
の一異彩である。洋画の日本化が云々さ  
れている現下好ましいものがあり、出品  
作十四点何れも落着いた筆触で淡々と描  
かれているが、秋果、志賀高原、鯉、海  
等豊かな詩趣を漂わしている。  
第三回青々會展(日) 十七日 二十一  
日 日本橋・三越

東朝—青竜社の中核をなす社人の試作  
展、出品は十数点にすぎないが、川端竜  
子が鯉の図を三点も出しているの、な  
かなか見栄えがある。鯉の三態を描いた  
童子の作では、宵の灯に鯉が黒く浮出た  
「宵鯉圖」を第一に推したい。坂口一草  
の「残照」、福岡青嵐の「湊川」加納三樂  
の「秋野」山崎豊の「宮崎の宮」安西啓  
明の「遮光」市野享の「鷺」等も見るべ  
きものであるが、木村鹿之助の二点は少  
し落ちる。  
國畫會工藝部會員展 十七日—二十一  
日 日本橋・三越

日本民藝特別展(工) 十八日—十二月  
二十五日 駒場・日本民藝館  
第二回永井久晴作品展 十五日—十八  
日 銀座・田屋画廊

東每一近作のつづきだけにどの作品  
にも墨色の妙味と巧さが氣品よく画かれ  
ている。特に雪(屏風)の線の苦心を推  
賞したい。「朝霧」の濃みも一層画品を  
高くし、小品では金魚、南風などよい。  
「紫香」の花は色彩感で作者の苦心を認  
めるも同意しがたい作。

第五回一至會展(洋) 十九日—二十一  
日 銀座・日動画廊  
第二回新人画會展(洋) 十九日—二十  
四日 銀座・日本樂器店  
読報—八人八様、手法に於て、絵画の  
性格に於て、各自自らの立場を明確に握  
っている。しかもこの春の第一回展と今  
度の二回展の間に既に変化を見せてい  
る。二科の松本竣介、独立の大野五郎、  
美文の井上長三郎、麗光、糸園和三郎、  
寺田政明、麻生三郎、そして十年前前の  
若い時代を作つていたノバ展の鶴岡政男  
の八人、よく癖の強い連中がこもも集つ  
たものだ。  
第三回國土會展(洋、彫) 二十日—二  
十三日 銀座・村松時計店  
第二回扶桑會展(綜) 二十日—二十八  
日 上野・日本美術協会  
第二回名古屋綜合藝術展(綜合) 二十  
日—二十八日 名古屋・松坂屋  
第一回會津美術人會展 二十一日—二  
十四日 銀座・菊屋  
第四回福岡縣美術展 二十一日—二十  
八日 福岡市・岩田屋  
京都繪寫、美工校出身勇士遺作展  
(日) 二十二日 京都・同校  
久米嘉祿洋画展 二十二日—二十五日  
銀座・資生堂  
藤島武二遺作展(洋) 二十三日—十二  
月二日 東京都美術館  
東朝—藤島は巨人型の作家であつた。  
面格の堂々として威容のあるところは、  
ちよつと他に類をみない。  
藤島の作画態度は最初の新鮮な自然の  
印象が消え去らないうちに感興に乗つて

仕上げてしまふという風であつた。それは何日も考え抜いたり、後になつて作つたりしたようなものではない。

扱う題材によつて、或る時は豪放となり、繊細となり、また或る時は重厚になつたが、写実に徹したその作品がいつも生々として強い印象を與えるのはこのためである。

大画集の刊行に因んで開かれたこの遺作展には、約百三十点ばかりの主要作品が列べられてゐる。時節がら輸送の関係で地方にある代表作は若干欠けてゐるけれども浪漫的な初期の作、油が乗り始めた滞欧時代の人物や風景、旭光の海洋や山嶽を描き出した晩年の作にいたるまで、いわゆる名作、優作に属するものが年代順にそろつてゐるから、これで全貌はだいたいわかる筈であると思ふ。

たとえば明治時代の「天平の面影」「ヨット」「ヴェルサイユの秋」「黒肩」「幸ある朝」「チョチャラ」「浴室の女」大正時代の「大川端残雪」「朝鮮風景」昭和時代の「鉸剪屑」「麻姑献壽」「東海旭光」「蒙古の日の出」「上海黄浦江」など中でも特に注意すべき秀作であるがこれらの他にも画面の大小に拘わらず、一代の佳作が少くない。

(荒城季夫)

第十七回新構造社展 (洋、彫、工) 二月十三日—二十五日 東京都美術館

第八回大潮會繪画展 (日、洋、版) 二月十三日—二十七日 東京都美術館

第四回赤堀信平彫刻展 二十四日—二十八日 日本橋・三越

新作日本画展 二十四日—二十八日 日本橋・三越

河井寛次郎近作陶器展 二十五日—三十日 大阪・高島屋  
植木力彫塑展 二十六日—二十九日 銀座・資生堂  
原在中画蹟特別展 (日) 二十六日—三十一日 恩賜京都博物館  
第二十一回新燈社美術展 (日、洋) 二月十七日—二十二日 大阪市立美術館  
大毎—日本画では山田皓齋、寺田六華、萬浦大悦、岡尾華甫氏等幹部級がそれぞれ各自の持味を生かし例年よりいい仕事をみせてゐる、中堅の伊藤神章氏「空の話し」は一應清新だが大日展の作に及ばぬ、その他では荒木賢治氏の作、一般作では上西清琳氏「泰山木」の着実な仕事、丸山石根氏「朝風の森」の才能に注目する。

洋画では北村種三氏の三作による地味だが誠実な仕事、西田敦雄氏「山路草」の特殊な才質等、山田皓齋氏「六甲秋色」は色あやうず「菊」の方がいいが、氏の作では日本画の「はれゆく潮」が美しい。中堅級では鹿野伊調子氏「籠中果実」「松茸」の二作に正面から組んだ眞面目な仕事をみる、殊に「松茸」の落着いた画調は美しい、木曾英太郎氏の二作では「たそがれ」をとる、一般作では毛利忠正の三作が目立ち、殊に「小休止」の構図、色調共にいい  
なお以上のほか同人、幹部が「日本精神昂揚」の課題作品を出品、また古事記による連作も並んでゐるが、顧問格の青木大乗氏「中心婦一」は雲中の日輪を描いて神秘感をよく表現してゐる、なお同氏の賛助出品たる「奔流」は水の動きを

描いて氏の作としても注目すべき佳作。  
第三回日東美術院展 (日) 二十七日—十二月七日 東京都美術館  
第十三回岡常次個展 (洋) 二十八日—三十日 銀座・銀座書店  
第一回東坊城養長小品展 (日) 二十八日—十二月二日 銀座・銀座ギャラー  
現代名家新作繪画展 (日) 三十日—十一月二日 大阪・大丸  
寧楽遠個人形展 (工) 三十日—十二月四日 銀座・朝日ビル  
瀬戸名工並先考遺作展 (工) 三十日—十二月五日 京都・大丸  
十二月  
橙黄會日本画展 一日—三日 銀座・資生堂  
五姓田芳柳遺作展 (洋) 一日—四日 銀座・青樹社  
井上幸、松田道、小菅徳三三人展 (洋) 一日—五日 銀座・美穂堂  
第一回現代作家本彫展 一日—五日 日本橋・高島屋  
中沢弘光古稀記念回顧作品展 (洋) 一日—七日 日本橋・三越  
東朝—洋面壇の元老も現存する人が大分少くなつたが、中沢はなお健在で折々良い仕事をみせてゐる。人柄も立派だし、その作品もいささか氣魄に乏しい憾みはあるけれども、独自の愛情がある。明治、大正、昭和、の三代を通じて、日本洋面の傳統を築いた功勞者として敬意を表すべきであらう。明治と大正初期の表紙や挿絵の面稿も興味深い、油画では「露」「きつぱた」「浴槽」「湯沢の雪」など好ましいものがそろつてゐる。

雪など好ましいものがそろつてゐる。  
浜田庄司作陶展 (工) 一日—七日 日本橋・三越  
現代名家新作日本画展 一日—八日 日本橋・高島屋  
第二回藤岡俊一郎個展 (洋) 二日—六日 銀座・青樹社  
向井久万、廣田多津新作繪画展 (日) 三日—五日 大阪・大丸  
第二回岡田撫泉染色工藝小品展 三日—五日 岡山・金剛莊  
池部鈞小品展 (洋) 三日—七日 銀座・美交社  
第十二回新興美術協會展 (洋) 三日—十二日 大阪市立美術館  
新作日本画展 六日—八日 銀座・資生堂  
第一回新油繪協會展 六日—十七日 東京都美術館  
東朝—第一回の旗上げ展である。公募展としては規模は小さいが、中堅になる若い八人の会員と十一人の会友が同志的に結びつき、同じ時代の感覚のうちに、清朗活潑な油絵の途を極めようとする態度はいい。大作はないが、会員では鳥羽宗雄の「化学工場」や「老工」本間勘式の「ランブのある静物」や「花」廣田剛郎の「母子像」や「老牧師像」小林三郎の「收穫の庭」等がすぐれ、会友では江波戸一郎、小島謙、小柳俊郎、長谷川友賢あたりが最も個性的である。  
朱陽會南面繪畫會展 七日—十二日 上野・松坂屋  
太田古朴佛彫發表會 七日—十二日 大阪・大丸

從軍作家淡彩素描展 七日—十二日

銀座・銀座ギャラリー

第四回陶華會作品展 七日—十二日

京都・大丸

木村井南水墨画個展 八日—十一日

銀座・日本樂器店

第十回岡田行一人物画展(洋) 八日—十二日

銀座・青樹社

九谷燒九藝作家展 八日—十二日

古屋・松坂屋

第二回戰爭美術展 八日—九月九日

東京都美術館 主催 朝日新聞社、後援 陸軍省、海軍省、情報局

東朝—今度の展覧の中心は、藤田嗣治

小磯良平、宮本三郎の三人が身を潜めて

謹写した特別出品「天皇陛下伊勢の神宮

に御親拜」「大本營御親臨の大元帥陛下」

「皇后陛下陸軍病院行啓」の三図と、長

くも天覧をたまはつた廿点の海軍作戦記

録画である。

殊に最初の三点は各作家が精魂を傾け

た力作であり、勝手に変化をゆるさな

い一定の構図のもとで、むずかしい画面

をこれほど立派に描き上げた手腕は相当

なものである。藤田と宮本の精細を極め

た描写、抑揚のある小磯の筆致は、いず

れも後世に傳うべき記録画として、かな

り高度の技能を発揮したものといえるで

あろう。

天覧の光榮に浴した海軍作戦記録画

は、油絵十二点と日本画八点である。こ

れらはいずれも資材を惜しみなく豊富に

使つた雄大な作品であるが、こでも第

立体的で動性に富む近代戦の表現は、

どうしても油彩の逞しい写真には及ばな

いらしい。これは必ずしも作家の素質や

技術の差ではないのであつて、日本画家

には不向な、同情すべき点が少ない。

日本画の方はむしろ逆に、淡く裝飾的に

なり勝ちな多彩主義を避けて、もつと日

本画独自の微妙な墨の効果を生かし、象

徴的な空間表現や線の妙味を出すべきで

はないかと思う。日本画には油彩画と異

なつた写真の方法があるはずである。そ

うすれば、油絵と同列に置いて劣るよう

なことはあるまい。

日本画出品の大部分のものが、あまり

成功していない中で、ひとり橋本関雪の

三部作「十二月八日の黄浦江上」が光つ

てみえるのはその良い例である。

油絵では藤田嗣治の「ソロモンの海域

に於ける米兵の末路」中村研一の「珊瑚

海々戦」宮本三郎の「海軍落下傘部隊メ

ナド奇襲」、佐藤敬の「ニューギニア密

林の死闘」藤本東一良の「駆潜艇の活躍」

などを推したい。(荒城季夫)

平井武雄遺作展(童画) 九日—十一日

銀座・資生堂

芝清福ニニユブリテン島報告油繪展

九日—十二日 丸の内・帝劇面廊

河合卯之助陶器展 九日—十四日 日

本橋・三越

華洛會作品展(工) 九日—十四日・日

本橋・三越

日本竹藝會作品展 九日—十四日 日

第九回無雙會同人作画展 十日—十二

日 上野・日本美術協会

佐藤篤郎油繪展 十日—十五日 大阪

関西面廊

工和會染華工藝展 十日—十六日 銀

座・松屋

木下義謙個展(洋) 十二日—十六日

銀座・三光面廊

東海—水彩、素描を含む木曾路の風景

十五点による個展。一水会出品の佳作

「敦原出口」に比すると平板な画面が多

いが、「宮の越風景」及び小品「鹽辺」の

二作は注目に値する。水彩はいずれも平

凡。

和風會美術展 十三日—十五日 銀座

資生堂

大月源二「北滿の高原を描く」個展

(洋) 十三日—十七日 丸の内・帝劇面

廊

宮坂勝個展(洋) 十三日—十七日 銀

座・青樹社

東海—湖畔、海辺、富士などを描いた

近作二十六点による東京での第一回個

展、筆触やや青山義雄に近づいて前景の

処理など簡略化が過ぎる難もあるが、色

感はやや悪くない。佳作は海辺に取材

したもので「大王岬」「志摩の海」、湖畔

風景では大作「山湖の秋」がよく、山で

は富士二作より北アルプスを描いた「残

雪」を佳作に挙げる。

青山義雄近作展(洋) 十三日—二十日

銀座・美交社

大阪・大丸

大阪技術保存資格作家工藝品展 十四

日—十九日 大阪・大丸

菅橋彦小品展(日) 十四日—十九日

大阪・大丸

河合寛治郎新作陶器展 十五日—十九

日 日本橋・高島屋

棟方志功新作日本画展 十五日—十九

日 日本橋・高島屋

第三回濃農會展(洋) 十五日—十九日

日本橋・高島屋

西陣綜合作品展示會(工) 十一日—十

五日 日本橋・三越

東海—今回の千有余年続いた織の見

本を後世に残したいとの意味から既製新

作をとり合せて卓布や屏風にまとめ、こ

れを首相官邸に贈るといふ企てはまこと

に精確なことである。しかし、いやしく

も西陣織物研究會の作品という以上は今

少し創作的なものを発表してもらいたか

つた。貼り交ぜ継ぎ合せは会名の如く綜

合作品とはなるように思う。竜村平蔵の

ぬところもあるように思う。竜村平蔵の

狩獵文壁掛は世間周知のものであり、國

華と題せる卓子掛は純日本の意匠による

織を中心として波斯、印度、カシミ

ール、アラブ、タイ、ジャワ等の織文をつ

ぎ合せたもの、東海燦六曲屏風一双は色

感の好調をとりた。

第四回克堂川崎克伊賀燒展 十六日—

二十二日 日本橋・三越

東亞神話傳説美術展 十六日—二十九



現代美術展覽會 (昭和十九年度)

從軍画家小品展 (洋) 十八日—二十三

日 銀座・銀座ギャラリー

沢田泉山新作陶藝展 二十一日—二十

六日 大阪・大丸

第一回國土會展 (日) 二十二日—二十

六日 日本橋・高島屋

東海—日本面境の中堅六人を同人として結成された会の第一回展。山本丘人、加藤榮三、小堀安雄の半数の作家がどうした訳か未出品のため、長老格の川崎小虎がひとり五五とて孤軍奮闘ぶり、中では「早春」が詩情のある佳作。その他東山魁夷の大陸に取材した「家路」、山田中吾の「荒磯」の二点が幸じて取上げられる。

柳女人形藝展 (工) 二十二日—二十六日 日本橋・高島屋

生産美術展 (洋) 二十三日—一月九日 東京都美術館 主催 大平洋面会、読賣新聞社

東海—産業部門別にいえば、成功してゐるのは造船と採炭、製鉄で、前者では石川寅治「木造船」吉田博「油槽船建造」などがすぐれており、後者では光安浩行「石炭に挑む」、吉田達志「酷熱と闘ふ」に動きがあつてよい。それに次いで輸送、航空機を扱つたもので、鈴木貫司「波荒き北海輸送」、堀澤「荒鷲を造る」など一應注目される。

輕工業では玉井力三の「被服工場」と高村眞夫の「工員」が、描写は平凡だが、老巧であり、素描では鶴田吾郎が光彩を放つてゐる。遺憾なのは農林の國でありながら、林業、農、牧に取材した作品に秀作を見出し得なかつたことで、そ

の方面に今後の精進が望ましい。

野添平米近作日本画展 二十四日—二十六日 岡山・金剛莊

日本版圖協會員獻納画展 二十四日—三十日 日本橋・三越

横井弘三個展 (洋) 二十六日—二十九日 銀座・菊屋

昭和十九年度

一月

和禮會新春小品陶藝展 (陶) 四日—十六日 京都・大丸

池田實人新生昭南風俗画展 五日—十三日 新宿・三越

岡田紅陽新作富士富真展 五日—十九日 日本橋・三越

三井洋画コレクション陳列替 九日—麴町・同邸

陶藝會新作陶藝展 (陶) 十一日—十六日 大阪・大丸

松尾醇一郎版画個展 十三日—十八日 銀座・菊屋

東海—近作二十点による第二回個展。前回の「停車場」のような鋭い作品はないが、殆んど墨一色にも拘らず濃やかな情趣に統一された好展覧である。佳作は二点の「塔のある風景」及び小品「竜安寺の庭」で特に後者の築地だけで庭の趣を捉えた聰明さは注目される。文展出品画の再陳「玉蜀」も悪くない。

現代名匠新作刀展 (刀) 十三日—二十日 上野・松坂屋

第十二回宅野田夫個展 (日) 十五日—二十二日 新宿・三越

尾崎三郎油彩小品展 十七日—十九日 銀座・養生堂

田畑秋濤新作日本画鑑賞會 (日) 十八日—二十日 日本橋・高島屋

大國拍庭登陳列會 (工) 十八日—二十三日 大阪・大丸

三木辰夫銅版画展 十九日—二十二日 丸ノ内・帝國画廊

東朝—本格的なエッチャーが寥々たる版面界では、めずらしく手堅い技法をもつ作家といえる。佳作は人物及び馬で、前者では船員に取材した「碇泊燈」及び肖像「老人像」、後者では「農馬」を探る。博物館に収められた作品と同一のものでは「春の隅田川」がいい。

西村喜久子油繪個展 十九日—二十三日 銀座・三兆画廊

川村曼舟遺作展 (日) 十九日—二十三日 日本橋・三越

東海—京都面境の長老の遺作展観としては淋しいが、二曲一雙「風神雷神」ほか二十余点は曾て春紅会及び日本画綜合展に出陳されたものに、東都の個人的所藏画を加えたものと聞けば合点が行く。終生愛した嵐山の作は案外少いが、「嵐山春曉」は流石手に入つており、「蓬萊山」「溪山夏晨」などにも曼舟独自の靜穩な面境がよく出ている。

耕人展 (日) 十九日—二十三日 日本橋・三越

波多野一岳個展 (日) 十九日—二十三日 名古屋・松坂屋

聖地史蹟名勝版画展 二十日—三十日 日本橋・三越

坪内節太郎文樂人形水墨展 二十一日

六〇

—二十三日 銀座・田屋

第一回山本隆亮油繪展 二十一日—二十四日 銀座・菊屋

新生美術家協會小品展 二十一日—二十五日 銀座・日本樂器

崔承喜舞踊画鑑賞會 (洋) 二十五日—二月三日 東京・帝國画廊

第十九回女流画展 (綜) 二十五日—京都・大丸

第四回日本油繪會展 (洋) 二十六日—三十日 銀座・青樹社

東海—新會員に須山、勝間田、三角の三人を加えて展覽會面には変化が出て來た。佳作は雪景色を描いた二作(能勢、矢野)及び林鶴雄の「秋の苔庭」で特に能勢眞美の札幌風景はいい。新會員はいずれも感心出來ない成績。

十九年會日本画展 二十八日—三十一日 銀座・菊屋

二月

第十一回朔日會展 一日—五日 銀座・日本樂器画廊

斤土會繪画展 一日—五日 銀座・青樹社

池上秀敏獻納画展 (日) 一日—五日 日本橋・三越

原田直康個人展 一日—五日 朝日ビル五階画廊

世界名画複製展 一日—五日 銀座・千代田

梶喜一兵隊画展 一日—六日 大阪・大丸

戰艦獻納帝國藝術院會員美術展 一日—二十九日 帝國博物館表慶館

毎日一油絵の假寐に比べると日本画は中々努力している。比較的短時日の間に運筆才筆に閑りなく、一律に五点を作家に課したため、古徑、軼彦などは氣の毒だが、後者の二作「保食神」「登太閤」は藝術的香氣を失わずしかも時局を身につけた佳品といえる。大観の南海に想いを馳せた「南溟の夜」には表えを知らぬ若さを認めるべく、玉堂の「海風」、青邨の「牡丹」、素明の「斜照」などは場中注目すべき逸品であらう。南画系統では翠雲、十畝格別のことなく、桂月では濃墨一色の「閑居」がこの作家らしい一作。清方の時代風俗はどこか清新さに欠ける。京都側は松園、翠嶂、契月がそろつて未着で、関雪ひとり代表しているが、三作中では「牛」がまず観るべきもの。一方油絵で生彩を放っているのは、和田英作の富士を描いた「山麓の春」だ。いわゆるアカデミックな年期技法が安井藤田などの作品を圧して光つて見えるのも恐らく競争の現実が「写真」を絵面に要求したからであらう。その他美しいという点では梅原の「姑娘図」が今までの同巧作を抜いてよく、放庵の奉祝展以来の油絵「坂田の金時」も微笑ましい力作。彫塑は木形で山崎朝雲「厭折かむ」平櫛田中「永壽清頌」の二作が注目され、塑像では藤井浩祐の崔承喜をモデルにした「崔氏菩薩」(一)が小品ながら面白い。佐藤朝山の「弟橋媛入水図」はまだ下絵が完成されただけで、浮彫として鑑賞し得ない。

第四回北光會展 四日—八日 銀座・菊屋画廊

菅野由爲子個展 五日—八日 数寄屋橋日動画廊

文展郷土作家展 五日—十一日 名古屋・松坂屋

第四十回太平洋洋画會展(洋) 五日—二十日 都美術館

東朝—太平洋は戦力増強と生産拡充の記録画、室数はわずかに五室だが課題藝術で統一したのはよい。飛び抜けた作は見当らないけれども、主として工場内の勤勞を描写したものが比較的にみるべきで、大沼靜庵、鈴木貫司、奈良岡正夫など技巧はいい方である。その他注目されるものには石川寅治と吉田達志の船を描いた作がある。

第十九回春台美術展 五日—二十日 都美術館

【出陳点数】九一点

東海—四室に縮小されたのは時局にふさわしい行き方だが、内容まで貧弱になつたのはどうかと思う。勤勞を扱った課題制作に一室を割いているが、僅かに鬼頭錦三郎「ボーリング」笹鹿鹿「鉦石を擡ぶ」が注目される程度で、その他にも森田元子「描更紗の前」田村一男「二月の蓼科高原」を除いては特筆すべき作が見当らない。

【出陳点数】一〇七点【岡田實】木村八郎【春台賞】西村喜久子、熊沢欽三、柳瀬俊雄

第廿一回白日會展(洋) 六日—十九日 都美術館

東朝—大した力作があるわけではないが今年に割合にいい。第一室では岩月光金の「葉鶏頭」島村三七雄の海波等が佳

作の部で、長老の出品中では中沢弘光の点描風な海岸風景や、調子は弱いが富田温一郎の小品風景が、とにかく一應見られる。その他出来のよいものは山道榮助の「あやめ」川島実の山岳、福田義之助の南方風物二十数点がある。

【出陳点数】一八七点【会友奨励賞】内山又輔、東理仁朗、大嶺政敏、坂本良武【佳作賞】水野富美夫、宇野千里、鈴木高

關西文展新無鑑査演繹展 八日—十三日 大阪・大丸

新日本美術協會展(洋) 九日—十二日 銀座・日本樂器

七五八會展 九日—十三日 名古屋・松坂屋

松竹梅展 十日—十二日 銀座・資生堂

安藤幹術個人展 十一日—十三日 名古屋・青樹社

牙光社展(日) 十一日—十五日 銀座・菊屋

読賣—磯部草丘の「曉色」は富士を扱つて平凡にならず巧緻の作、田中針水は「ミシン」をかける少女をものしているが、この人の作として潤いに乏しい憾。玉村吉典の「鏝」は視角を変えての鏝の線に苦心の跡が見える。島村亮の「小春風」も独自のもので、研究作品発表とあるだけに総じて各人の眞摯な制作態度に好感が持てる。

表装技藝品獻納展示會 十二日—十六日 都美術館

白鳳會展 十四日—十六日 銀座・資生堂

マテス素描複製展 十四日—十七日 銀座・三笠画廊

寶土會陶藝展 十六日—二十日 日本橋・三越

山本丘人個展(日) 十七日—十九日 銀座・資生堂

第十回十宜會油繪展(洋) 十九日—二十三日 銀座・青樹社

細井善三郎油繪個展 十九日—二十九日 銀座・三笠画廊

第一回同舟會展(洋) 二十日—三月六日 都美術館

野口夏一呂作品展 二十一日—二十三日 銀座・資生堂

山本蘭村個展(日) 二十一日—二十四日 銀座・菊屋

第十六回新美術協會展(洋) 二十一日—三月二日 都美術館

【出陳点数】一四一点【新会員】高井貞二、田中修、青木壽

白日莊現代大家新作日本画展 二十二日—二十七日 日本橋・三越

六合會繪圖展(日) 二十二日—二十七日 大阪・大丸

現代大家新作日本画展(日) 二十二日—二十七日 日本橋・三越

第十二回東光會展(洋) 二十二日—三月六日 都美術館

【出陳点数】一五四点【新会員】熊岡正夫、松岡正、松居均、福井芳郎、八藤勲人、大寄兼久、廣本森雄、桑原福保、関眞、西川高次、塩津誠一

第十二回旺安社展(洋) 二十三日—三月六日 都美術館

【出陳点数】一二二点

口加六

同 支那

同  
(2)



山村

馬頭觀世音



吉川 清	龍馬 赤堀 佐兵	高千穂 一郎	北 田中 秋男	瀧 小出 三郎	萩原 隼兒	(獻納機命名 式軍隊行進)	池島勘次郎
慰問協力	驢馬と小孩	庭 島津 冬樹	〇菊地 精二	水辺 同	残雪暮色	華の風景	山雪 岡村 芳男
郷愁 菊地 又男	加藤 陽	庭 島津 冬樹	兵と鷹(北満に て) 同	蘇生租界	高木 四郎	仲村 一男	陸軍記念在郷軍 人の行進
赤いマント	岡北風景	庭 島津 冬樹	熱河 同	待避所のある家	樋口 勝三	薄暮有韻	野田武太郎
〇富樫 寅平	古川 盛雄	庭 島津 冬樹	豊秋 辻 芳雄	銃剣術のあと	土に生く	寺坂 正信	北の海
雪國の人々(1)	高砂族の母子	庭 島津 冬樹	城外朝陽	花と少年	北白川風景	学徒銀成相模園	平山恵多路
雪國の人々(2)	吉浦 鈴子	庭 島津 冬樹	氏原 忠夫	療養所風景	初夏の風景	開間 久	はぐくみ
同	棒の花	庭 島津 冬樹	雪の帰路	小川 信一	渡洋 一	林 勝侯 泰藏	木島 眞二
アネモネ	△志村 計介	庭 島津 冬樹	成田 勇吉	流木風景	一月風景	委昌 守屋 清邦	富士 八木 昌一
〇林 武	舟 同	庭 島津 冬樹	農家 浅田 欣三	庭田 定男	風景 菊池 文男	炭焼く人	田園暮色
ラングレンの骨	炭を焼く	庭 島津 冬樹	山麓部落	斗ふ女学生	家根と鳩	近藤 幸子	古蹟 矢崎 牧廣
董店	石綿 唯四	庭 島津 冬樹	同	松尾 一枝	ひも 賣	内海 柳子	山麓 同
ラングレンのパ	芍薬 和田傳太郎	庭 島津 冬樹	結構 古田 茂正	大草原を征く	江口 美春	鼓笛隊	残雪農村
ゴダ	高原 宮 芳平	庭 島津 冬樹	溪流 小田 豊	斗ふ女学生	松尾 一枝	勤勞(舟銀治屋)	木村 忠太
同	勤勞作業	庭 島津 冬樹	山陰豊村	江口 美春	江口 美春	鼓笛隊	末水 胤生
ラングレンの僧	庄内の町	庭 島津 冬樹	網を繕う漁夫	王道榮土	山田 貞実	耕丘 岩岡 貞美	等 同
りんご收穫	〇野口彌太郎	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
小川 マリ	働く人々	庭 島津 冬樹	雪の石狩牧場	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
松原 吉田 務	海辺の神社	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
小憩 佐藤 洋	同	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
郷土礼讃	岩波	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
中島 穰	〇鈴木 保徳	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
南國の青年	花 同	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
〇清水 登之	庭 島津 冬樹	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
ゴム林と肉	庭 島津 冬樹	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
同	湯ヶ島風景	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
耕地 浦上 正則	森 兵五	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
田植 織田 彩子	山峽 森沖右衛門	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
肖像 佐藤 武雄	富 士	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
仔 馬	〇松島 一郎	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船
△赤堀 佐兵	卓上静物	庭 島津 冬樹	義江 清司	久保 一雄	花 服部 勳	樹陰 門脇 耕	木造 船

現代美術展覽會 (昭和十九年度)

沙千狩

所 輝夫

監視哨のある風

景 小倉 宝海

桃 △佐川 敏子

森の下草

同

鉢盛遠望

小野 富衛

仁王像 (藤井寺)

中川 光延

須彌福壽廟 (熱)

河) 山城 竹次

土 小野 忠弘

木立 木村 初男

北海道風景

○鳥海 青兒

船 井黒 四郎

開魂 豊田伊津二

増産の秋

三好 正雄

働く女

井上 孟

清水敦次郎油繪個展

六日 銀座・資生堂

久米福蘭繪畫展

二十五日—二十九日

銀座・青樹社

ミケランヂエロ研究展 (洋)

二十九日 銀座・千代田

第四回一玄會展

二十六日—二十九日

銀座・菊屋

第四回日本油繪會展

二十六日—二十

九日 銀座・青樹社

三月

故園 大垣 泰治

待機 寺口 重美

風 景

△佐藤 英男

花 同

庭

○小島善太郎

朝鮮扶余 (部落

風景) 同

藤 同

静物 兒玉 範子

作業前

川戸 二郎

搏ち合ひ

長尾 匡

鋼材運搬

神津 隆一

紅富士

△豊藤 勇

富士嶽 (河口湖

より) 同

休息 森永 一握

井上 孟

清水敦次郎油繪個展

二十四日—二十

六日 銀座・資生堂

久米福蘭繪畫展

二十五日—二十九日

銀座・青樹社

ミケランヂエロ研究展 (洋)

二十九日 銀座・千代田

第四回一玄會展

二十六日—二十九日

銀座・菊屋

第四回日本油繪會展

二十六日—二十

九日 銀座・青樹社

三月

新作日本畫展 (日) 一日—三日 銀座

資生堂

玉置知恵子呂刺展 (工) 一日—三日

銀座・田屋

内田巖近作油繪展 (洋) 一日—七日

銀座・美穂堂

ルネッサンス名画複製展 二日—八日

銀座・千代田画廊

第三回正宗得三郎新作個展 (洋) 三日

—五日 岡山・金剛莊

乾元社同人展 三日—五日 銀座・菊

屋

大阪府中等學校報國園繪畫部圖画作品

展 三日—七日 大阪市立美術館

塚本茂個展 三日—七日 銀座・青樹

社

東北生活美術研究展 六日—八日 銀

座・資生堂

第八回七鳳會油繪展 (洋) 六日—九日

銀座・菊屋

橋本邦助油繪展 (洋) 七日—十二日

大阪・大丸

士氣昂揚日本畫展 (日) 七日—十二日

京都・丸物

第二回芳彩會小品展 (洋) 八日—十二

日 名古屋・松坂屋

日本画と油繪展 八日—十三日 銀座

青樹社

上杜會展 (洋) 八日—十九日 都美術

館

陸軍美術展 (綜) 八日—四月五日 都

美術館

東朝—全体として見た場合は、まだ核

心に触れていないものが多過ぎる。特に

前作く思われるのは、対象の表皮を撫で

ているだけで、一般に感情の投入が足り

ないことだ。戦争画は風景画ではないか

ら絵画以前の問題を、もつと掘り下げる

ことが必要であり、色と形だけの仕事で

ないことを自覚しなければならぬ。藤田

〔出陳点数〕二八〇点

撥軍會日本畫展 九日—十一日 銀座

資生堂

中村雪策個人展 (洋) 九日—十三日

銀座・青樹社

第四回現代大家油繪鑑賞會 (洋) 十日

—十二日 岡山・金剛莊

福田新生個展 (カザツクと蒙古人のス

ケツチ) 十日—十七日 銀座・三兆画廊

必勝美術展覧會 (綜) 十日—十九日

福岡市・西日本新聞社

〔出陳点数〕日本画七点、洋画七九点

彫刻九点

内山雨海個展 十二日—十四日 銀座・

菊屋

大河内北露油繪個展 (洋) 十三日—十

五日 銀座・鳩居堂

第五回催寄會展 十三日—十五日 銀

座・資生堂

廣瀬嘉六日本畫展 十三日—十五日

銀座・資生堂

第二回日本画家常會展 十四日—十八

日 銀座・村松

第一回四明會展 十四日—十九日 大

阪・大丸

藤山嘉造第三回個展 十四日—十九日

丸の内・帝國画廊

第七回連綿會油彩展 (洋) 十五日—十

九日 銀座・青樹社

第三回火曜會油繪展 十五日—十九日

銀座・青樹社

東山魁夷個展 (日) 十五日—十九日

銀座・菊屋

關西邦國展 十五日—二十八日 大阪

市立美術館

彫刻には特に秀逸は見当らない。

本画ではやや説明不足だが吉岡堅二の

「小田軍曹機」が無難であり、

その他、有岡一郎、川端実、伊勢正義、

高野三三男、高井貞二、柏原覚太郎、小

群山三郎油繪個展 十七日—十九日

銀座・田屋

日月画廊開設記念展 十七日—二十一

銀座・日月画廊

第三十一回光風會展(洋) 十七日—三

十日 都美術館

〔田陳点数〕洋画、一八七点、工藝、二

八点〔岡田賞〕高宮一榮〔光風特賞〕岡

田又三郎〔光風賞〕板倉宣揚〔加藤賞〕

杉山一正〔工氏賞〕杉浦朝雄、本居宣親

〔光風工藝賞〕藤本能道〔工藝賞〕中村

俊介

日本画家聯盟街頭展 十九日—二十六

日 京都四條通、河原町通、三條通

初山滋創作版画と描画小品個展 二十

日—二十三日 銀座・田屋

佐田勝油繪個展 二十日—二十四日

銀座・日本樂器

瀧川太郎個展(洋) 二十日—二十五日

銀座・青樹社

第二回有人會展 二十一日—二十四日

銀座・菊屋

志村立美南方風俗スケッチ展(日) 二

十一日—二十四日 銀座・松坂屋

大塚巧藝社複製書画即賣會 二十一日

—二十六日 大阪・阪急

決戦應勢美術展 二十一日—二十六日

京都・大丸

第四回双台展(洋) 二十一日—三十日

都美術館

〔田陳点数〕一一八点

日本劇画院同人作品展 二十二日—三

十日 大阪・三越

新燈社春の展覧會 二十三日—二十九

日 大阪・三越

稻垣勇次郎水墨画展(日) 二十四日—

二十八日 銀座・資生堂

青鷺社同人小品展(日) 二十五日—二

十七日 銀座・田屋

朱陽會南画鑑賞會(日) 二十五日—三

十日 名古屋・松坂屋

根市長三創作版画個展 二十六日—三

十日 銀座ギヤラー

巴會日本画展 二十六日—三十日 菊

屋

青丹會主催納富進個展(洋) 二十七日

—三十一日 銀座・青樹社

東亞美術展 二十七日—三十一日 銀

座・日本樂器

丸本位里、赤松俊子素描展(洋) 銀座

青樹社

第二回日本歴史會 二十八日—四月

一日 大阪・朝日ビル美術部

中島清作陶展(工) 二十八日—四月一

日 大阪・朝日ビル美術部

増産激闘日本画展 二十八日—四月二

日 京都・大丸

長流画塾皇軍慰問獻納作品展示展

(日) 二十九日—三十日 日本橋・三越

〔田陳点数〕二尺横物七点

伊川藤義、西沢富義素描淡彩展 二十

九日—五月五日 大阪・大丸

#### 四月

川島甚兵衛織物展(工) 一日—三日

永田町・星ヶ岡茶寮

四平遊作展 一日—三日 銀座 村松

時計店

佐伯米子展(洋) 一日—四日 銀座・

資生堂

第十二回「春の青龍展」一日—五日

日本橋・三越

青年美術家集團展(國土防衛を描く

展) 一日—五日 銀座・青樹社

高橋嘉從軍作品展 一日—五日 銀座

画廊

造形版画展 一日—十日 都美術館

全關西洋画展 一日—十日 大阪市立

美術館

陸軍作戦記録画草稿展 二日—五日

銀座・菊屋

九垓會展(洋) 二日—六日 銀座・青

樹社

齋藤愛子個展(洋) 二日—六日 銀座

青樹社

第三回新京美術院成績品展示會 三日

—四日 新京美術院東京分室

第六回日本國展 三日—十六日 都

美術館

〔田陳点数〕九五点

近作伊賀嶺展(工) 四日—九日 大

阪・高島屋

福田翠光、榎崎朱富新作繪画展(日)

四日—九日 大阪・大丸

近作小品展(洋) 四日—十六日 大阪

阪急百貨店

黑潮會郷土風景画展 五日—九日 大

阪・丸正百貨店

第十二回朝日會展(洋) 五日—十日

銀座・日本樂器

第三回伊川篤治個展(洋) 六日—八日

銀座・資生堂

陸軍第三回水壘個展(日) 六日—八日

銀座・鳩居堂

日 日本橋・三越

關峰園藝生作品展( ) 六日—八日

日本橋・三越

田内駿士日本画展 六日—九日 銀座

菊屋

國画會展(洋) 六日—十九日 都美術

館

東京一國画會では梅原竜三郎「蕃薇と蜜柑」が美しいが、伊藤康「柘榴静物図」林重義の遺作、宮田重雄、宮坂勝の諸作が美しい事だけを狙つていず、西洋画の写実に基礎を置いている所が、梅原と全く違つた仕事になつてゐる事は、年代の相違などもあわせ考えられて興味深かつた。中では伊藤の画面に張りがあつて僕は好きだつた。庫田毅は、二三年來仕事で難しい所に來てゐるらしく、毎年苦しい描きつづりを續けてゐるが、今年の「蓮」も未だそこから抜けではない。色々の要素を含んでゐる絵画の世界の中で「美」といふものを殊更に取上げてひたむきに追求してゐる態度が良く解るし、それを趣味で軽く解決しないで堂々と押している点がいいと思う。その点、養田、沢野、上田、三崎、宗像の諸氏の仕事は一應出來上つてゐる点、反つて絵を浅いものにしてゐるのではなからうか。杉本健吉「壇輪」喜多村知「花」は愛らしい絵で楽しく見られた。版画の棟方志功の作品は僕には面白さやうまさとは解るけれど、何かそれ以上に解らないという氣がしたが、アブノワの石版にはちゃんと格にはまつたものがあつて感心した。

〔新會員〕(絵画)宇治山哲平、中村好宏



(版画) 前田政雄、畦地梅太郎、下沢木鉢郎

出品目録(○会員、△会友)

紅蓮一 錦鷄 尼川 尙達

同 二 同 錦鷄 元田 乾行

白 磁 討夷 日下 泰輔

森 同 廟 大部 六藏

森 同 廟 大部 六藏

雪の晩 田中 祥三

慈光 橋原 康道

冬木 立 遠藤 満男

皿 △久本 弘一

黒猫 同 丘の部落(一)

富士春雪 同 鈴木 正二

甲斐駒 同 (二)

壺 など 大内田茂士

花 ○山田 正

街頭風景(一) 同 婦人像

同 △中村 好宏

同 (2) 古城址

同 同 古木 俊一

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

同 同 風 景

柘榴静物図 ○伊藤 廉

早 春 ○益田 義信

同 同 梅原竜三郎

同 同 神將 同

同 同 習作(一)

同 同 習作(二)

同 同 少女の顔

同 同 牡丹 金 晩 炯

同 同 山頂の朝

同 同 白磁と葡萄

同 同 花 亀井 貞雄

同 同 桐の花 東 政男

同 同 富士雲影

同 同 幼き子 日向 裕

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

同 同 早 春

○熊谷 九壽

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

同 同 巖山(素描)

手塚 益雄

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

同 同 蓮

△前田 政雄  
双 蝶 (同)  
根市 良三  
砂上静物 (同)  
石崎 重利  
山 沼 (同)  
塚本 哲  
寛城子の子供達  
(銅版)  
高羽 敏  
お客様 (石版)  
〇アノワ  
老人 (同)  
寤 墟 (木版)  
△睡地梅太郎  
南櫻園人物  
図繪 (同)  
〇川上 澄生  
たばこ渡來記 (同)  
同

層 崖 (同)  
伊藤健之典  
医王山最勝院七  
重塔 (同)  
棟方 末華  
南北嶺・万榮溪  
華板面構 (南嶺)  
(同)  
〇棟方 志功  
同 (北嶺) (同)  
馬市所見 (同)  
萩原 吉二  
羅漢堂 (孔版)  
若山八十氏  
奥村五百子刀自  
像 (木版)  
「傳説の平壤」  
さとうよねじろう  
挿繪 (同)  
小野 忠明  
無花果 (同)  
武田 由平  
童心版画 (同)  
上坂 雅人  
あさみ (同)  
川島 信生  
伊勢の蒼瀧 (同)  
岩島 勉  
藥師寺東塔 (同)  
加藤 安  
景 (同)  
黒木 貞雄  
魚 (同)

△関野準一郎 地下道入口  
群 鹿 (同) (銅版) 武藤 完一  
第二十二回春陽會展 (洋) 七日—十八  
日 都美術館  
東京—春陽會では先ず、中川一政氏油  
絵「雪景」は景色と云ふよりも「雪國の  
生活」とでも題したい様な小品で、氏の  
作品としてはまともの悪い絵だけれど  
その点反つて、対象にじかに迫ろうとす  
る何か激しいものが感じられて妙に後ま  
で心に残るものがあつた。往年の「監國  
の道」の作者が生得の素養を未だに無  
くしないでいることは並々でない精進が  
あるのだからと思う。小杉放庵氏を始め  
石井、中川氏等の水墨画は油絵とは又違  
つたものだから、一寸した面白さ程度し  
か解らないので、未だ僕には何とも言え  
ない。小林徳三郎氏「雨後の海」もサラ  
リとした素直な好感の持てる絵だ。石井  
鶴三氏「雪山寒水」はきちんと坐つた人  
に向き合つてゐる様な良さと物足らなさ  
を感じた。これ等の人は、言わば素手  
で対象に対してゐるのだが、これは珍し  
い事だと思ふ。例えば三雲祥之助氏の作  
品は、一見サラリと描いた様に見える、ス  
ツキリした絵だけれど一つ一つのタツ  
チを見れば解る通り仲々苦心して描かれ  
てあり、その苦心と言うのが、西洋画の  
傳統から離れていない苦心なのである。  
大ざつぱに言えばこちらは構図だとか調  
子だとか塗り方だとかに特別の配慮があ  
る点に大きな違いがあるのだ。岡鹿之助  
氏になれば、もつとはつきり解る事だ。  
岡氏の今年の作は淡過ぎて弱い。僕はこ

の人の絵がいつも大好きだ。しかしこの  
点描の点々が、頭と手から出て來るの  
なく、身体全体から出て來るような温か  
味とふくらみが出來て來たら、どんなに  
すばらしいだろうと思ふ。加山四郎氏の  
「武蔵野の風景」はいつもの仕事の続き  
だが今年は特に美しい。その他上野春  
香、伊藤慶之助、高田力蔵、中谷泰諸氏  
の作品が目立つた。  
〔新會友〕青木達彌、徳原稔〔研究賞〕  
藤野竜、曾根徹、青木達彌  
出品目録 (〇會員、△會友)  
山貌 藤野 竜 春の武蔵野  
壺 同 佐藤 篤郎  
山 同 籠  
樹間 山田 義夫 栗  
花 △田中壽太郎 花 鳥  
盛夏の井戸辺 小泉倫之助 湖畔 (北京)  
樹 曾根 徹 童 女  
早 春 △中谷 泰 入 江  
秋果 同 江 田 謙輔  
綠蔭 河村 寅明 文樂の樂屋  
高麗風景 伊川 鷹治  
〇加山 四郎 母子の食事  
秋庭 同 宮脇 晴  
南紀の海 笠松 春彦 秋草 大久保圭子  
柳の森 原田 武男 武蔵野 豊泉 惠三  
習 作 △新沼 谷一 薪 △庭雪 同  
△木下 公男 庭雪 同 夕暮遠望  
早春賦 青木 達彌 餌をやる  
〇南城 一夫 赤土の庭

風景 賀茂牛之輔  
画室 角南 松生  
少年 吉田貫三郎  
雪 (一)  
〇中川 一政  
雪 (二)  
同  
寒椿 同  
閑庭春禽  
〇小杉 放庵  
かまくら  
同 石井 鶴三  
鶏 同 冬  
晩 同 英示  
△兼平  
ひびん花 山崎利津子  
溪 山下 克己  
菊 中田 政夫  
湖 畔 同  
〇倉田 三郎  
唐もろこし 島崎 春吉  
野 川 典太  
△遠藤 典太  
唐招提寺 入江 令一  
風景 三原 繁  
山村秋色 関四郎五郎  
夜の自画像 関四郎五郎  
浅 春 〇横堀角次郎  
山麓の村 同  
未 定  
〇三雲祥之助  
渡し 同

△大嶺 政寛  
壹屋風景 同  
承徳郊外  
△藤堂奎三郎  
雪の池  
石井彌一郎  
竹折村風景 (早  
春) 伊藤 敏博  
樹間 能戸 幸  
芋 如  
△岩田榮之助  
柘榴 同  
箱根山麓  
〇上野 春香  
早春 同  
蛙 (旧名金敏亀)  
風景 (高麗) 同  
藤 花  
△土屋 義郎  
共同作業の人達  
佐藤 昌胤  
秋 上原 欽二  
風景 高橋 辰雄  
山門 石田 正典  
壺 中村 巽  
貝殻 川隅路之助  
〇横堀角次郎  
山麓の村 同  
未 定  
〇三雲祥之助  
渡し 同

現代美術展覽會 (昭和十九年度)

六七

菊 ○田中善之助 野崎新右衛門  
雪景 ○中川 一政 石佛 深沢 素一  
散調 花 野村 俊彦  
○石井 鶴三 兎 寺沢 正敏  
雪山寒水 卓上野菜 牛田 喬彦  
同 自画像 日下昌三郎  
三色 蕪 山中菊三郎  
○岡 鹿之助 海の見える風景 井上 重生  
対岸の農家 ○今関 啓司 梳髮 山川 清  
窓 酒井 昭子 女児等 松村 頑夫  
山 椿 枯れ蓮 北富 三郎  
○小穴 隆一 黄色い服の少女 輪島 清隆  
磐梯山 ○山本 鼎 秋の金時山 △鬼塚 金華  
あかときの富士 ○小林徳三郎 祭礼(玉垂神社 鬼会祭)  
急須と果物 △鬼塚 金華  
雨後の海 同 鬼会祭)  
急須とみかん ○高田 力蔵  
(版画) 其の他 柑花と青の敷物 稲熊 賢一  
柿とガラス器 椿咲く丘 荒井竜太郎  
同 山池早春 初夏 石井 光楓  
△小栗 哲郎 持國天像(築紫 観世音寺)  
時計のある街景 松尾醇一郎 江崎 元  
子供 矢田 桂一 S子像 故中村 万平  
金玉満堂 菜の花 須藤千穂子  
○前田藤四郎 風 景

サーカス 北岡 文雄 男 野村 千春  
花と乙女 児玉 彦三 △本莊 起  
静物 森 松治 冬山の畑 東 晴司  
母の像 熱河行宮寺紅台 を望む  
日下昌三郎 石黒平三郎  
南國池畔 小川 緑 松並木(旧東海 道) 秋口 保波  
ゲートルを巻く 上野忠種日本画展 八日―十日 銀座  
田屋 第一回黄嘴會 八日―十二日 銀座  
青樹社 近岡喜次郎個展(洋) 八日―十二日 銀座  
銀座・青樹社 渡邊大蔵水墨展(日) 十日―十三日 銀座・資生堂  
近藤光紀油繪小品展(洋) 十日―十四日 銀座・兜屋  
扶桑會春季展 十一日―十四日 銀座・菊屋画廊  
河口樂土日本画展 十二日―十五日 銀座・田屋  
新興美術院展(綜) 十二日―二十四日 都美術館  
〔田陳点綴〕絵画六二点、彫刻一〇点 工藝六二点  
日本歴史画展 十三日―十五日 銀座 朝日ビル  
東朝一歴史画の行き方はさきの安田製 彦拙く「黄瀬川の陣」を第一に取るが、 前田青邨の「戦い捷てり」に示した梅の 小枝を背に敵方の敗残ぶりにたいし武者 振立立つ一武士の姿態描法もまた観者を

打つ力強いものがある。しかるにただ綺 麗ごとく走るものの多い中に、太田聰雨 が「橋囃子」を岩田正己が「五郎正宗」 の人柄を内容的に追求するはよい。しか し岩田は顔が軽く太田は刀を持つあたり に難多く、菊池契月「大楠公」錦木清方 「小野お通」はともに品格あれども追真 力足りず、安田製彦の「相模太郎」は構 図と賦彩の周到さに注意すべき作。  
中村一男個展(洋) 十三日―十七日 大阪・朝日ビル  
東亞美術院展 十四日―十八日 銀座・青樹社  
第四回一采會日本画展 十四日―十八 日 銀座・資生堂  
渡邊虎次郎個展(洋) 十四日―十八日 銀座・青樹社  
青室會日本画展 十五日―十八日 銀 座・菊屋  
小川幸錢墨展(日) 十六日 高岡 市清順寺書院  
松宮左京「龍烟鉄鉞展」 十七日―十 九日 銀座・鳩居堂  
青木六乘日本画鑑賞會 十八日―二十 二日 大阪・朝日ビル  
奈良五條山赤膚蟻陳列(工) 十八日― 二十三日 大阪・大丸  
新美術家協會日本画展 十九日―二十 一日 銀座・資生堂  
第二回岩崎鑄作品展(洋) 十九日―二十 一日 銀座・資生堂  
大東南泉院展(日) 十九日―三十日 都美術館  
踏土社展(洋) 二十日―二十二日 銀 座・田屋

國土會展(洋) 二十日―二十四日 銀 座・青樹社  
新油繪協會春季展 二十日―二十四日 銀座・青樹社  
菊池契月作品特別展(日) 二十日― 五月三日 大札記念京都美術館  
文、帝展等の官展出品の大作は比較的 出されてないが、帝展、塾展、珊々會、 七絃會、春虹會、建經獻納、イタリー展 等を始め個人所蔵を併せて四十八点の作 品が一堂に集められた事は一つの偉観で ある。大正から昭和へかけての氏の精進 の跡を語つて、出品作は殆んど人物画 で、それだけに観者に統一された印象を 第一に與えるのはこの作者の一特質であ る。うかつかり大ざつばに見れば画材の 変化に乏しいように思えるが仔細に觀察 すると狭い画材の中に眞摯に内へ内へと 変化と深さを求めて止まない作者の眞実 な作風のよさが判る。勿論捉えられた素 材も時代、現代女性、武人、佛面等時代 感覺を獨り鋭敏さが無いでもないが、そ れよりも氏の作品の中に見られる特質は 一描線もいやしくしない氣品と簡淨さで あり同一素材と雖も次々と進展を求むる 執拗な迫眞力であろう。某氏蔵の「聖德 太子」と、イタリー展の「聖德太子」珊 珊會の「少年家庭」と七絃會の「吉法師 竹千代」を見てもこのことばうかがわれ る。勿論作者の本領は人物画にあるが 素材を人物画以外にとつたイタリー展の 「菊」第五回展の「櫻」など違つた意 味で、一つの注目を惹くものである。  
工藝會展(工) 二十日―五日三日 大 札記念京都美術館



第一回甲申會展 二十一日—二十三日

銀座・村松画廊

都筑眞琴内子展 二十一日—二十三日

銀座・渡辺版画店

山本新蔵個展(洋) 二十一日—二十四日

銀座・日本樂器

第十回川端龍子新作畫鑑賞會(日) 二十一日—二十六日 大阪・高島屋

第十九回燦木社日本畫展覽會 二十二日—二十五日 銀座・菊屋

第十六回第一美術協會展 二十二日—五月三日 都美術館

「出陳点数」——一四點

「譽れの家」美術展 二十三日—三十日 日本橋・高島屋

第四回創元會展(洋) 二十三日—五月三日 都美術館

東朝—須田壽の「白容」に示した孔雀と、それに配する色調、榎戸庄衛の「天下の魁」と題しての水戸の梅は力のこもつたものである。牛島憲之「春温」樋口一郎「桃咲く頃」はなごやかな春の感じをよくつかみ一應まとめ上げたといふべきである。ただこの会の多くは一應まとめることは出来るが、それ以上の迫真力を出すのに足らざるもの多く鈴木千久馬の「梅咲く」の描法がある程度までの量への追求を試みている。その他飯島一「櫻梅を更む」坂本幹男「子供」大山麟太郎「幼児」を取上ぐ。

瀧川太郎俳句展覽會(日) 二十四日—二十八日 銀座・兜屋画廊

石井滋個展(洋) 二十五日—二十九日 銀座・田屋

新銳油彩三人展 二十五日—三十日

大阪・阪急

光宣會國史畫展 二十五日—三十日 大阪・高島屋

林俊衛・萩谷巖・木下夢則第二回三人展 二十五日—三十日 銀座・日月画廊

興國美術研究所展 二十六日—二十九日 日本橋・三越

青稻會展(洋) 二十六日—三十日 銀座・青樹社

一水會主催春季小品展(洋) 二十六日—三十日 銀座・青樹社

日本画と繪油展 二十六日—三十日 銀座・青樹社

繪伊之助油繪展 二十七日—二十九日 銀座・資生堂

第三回新緑會展 二十七日—二十九日 銀座・資生堂

榮利會油繪展 二十七日—三十日 銀座・菊屋

第六回綠卷會展(洋) 二十七日—五月十日 都美術館

「出陳点数」——一六點

日本画巡回展 二十八日—五月四日 日本橋・三越

東朝—堂本印象の椿、森守明の島原風景、福田惠一の楠公、上村松篁の晩秋、廣田多津の花など佳作の部であり、筆力は弱いが西山翠嶂の二点もわるくない。全面的にもう少し表現の鋭い画が欲しい。

第五回美術文化展 二十八日—五月九日 都美術館

「出陳点数」繪画一二〇点、彫刻一二点 伊川藤義・西沢富義描淺彩展 二十九日—五月五日 大阪・大丸

五月

丹牛社油繪展 一日—十五日 銀座・日本樂器

聯立春季彫塑展 一日—十九日 都美術館

岩田藤七新作硝子器展(工) 二日—六日 日本橋・高島屋

一三會五月展 二日—六日 銀座・青樹社

第四回今村寅七小彩画個展 二日—六日 銀座・青樹社

日本水彩展 二日—十五日 都美術館

東邦画研究會展 三日—五日 銀座・菊屋

五周年記念「國院獻納画展」三日—六日 都美術館 大阪護國神社振武殿

第六回大輪画院春季展(日) 三日—十二日 新宿・三越

櫻井政雄油繪展 五日—七日 天津日本公會堂

ゲルト・ラマルティーン個展(洋) 五日—十二日 麹町・日独文化會館

東朝—アカデミックに叩き込んだ技術も相当しつかりしているが、清楚輕快で滋味のある画風である。穩健なうちにもどこかドイツ人らしい冴えた感覚がみられるのも面白い。百点といえは個展としては数の多い方だが、肖像、静物、風景など、なかなか多才で、いずれも現代ドイツの中堅作家として恥しくないものである。

新美術人協會展 五日—十五日 都美術館

讀画會展(日) 五日—十五日 都美術館

館

第三回御盾會日本画展 六日—八日 銀座・菊屋

第五回青杉會展(日) 六日—十日 日本橋・三越

読賣報知—深水の力作「セレベス所見」は婦女増産協力圖と註したセレベス婦女稻刈の圖で熱國の婦女の敢闘が鮮やかに描出され、はち切れそうな情熱が漲つてゐる。山川秀峰の「女子作業員」は機械をかげにして息詰る緊張作業の雰囲気よく表現している。小早川清の「少年航空兵と親」は筆者自身をモデルとした微笑ましい件、いつもの癖がなく素直に描かれたのがよい。その他の佳作に岩田専太郎の「輕機関銃」岩淵芳華の「戦果」朝倉攝の「雪の徑」陳進の「挺身隊」天満都子の「白衣」立石春美の「勤勞奉仕」等あり、前原豊三郎の「学徒給食」白鳥九壽男の「女子鉄道青年隊」等は新しい題材として興味深かつた。

薔々會油繪展 六日—十日 銀座・日本樂器

國樂社童宝美術展(工) 七日—十一日 新宿・伊勢丹

中川紀元・佐野鑑次郎二人展(洋) 八日—十一日 銀座・資生堂

第一回富士展示會(洋) 八日—十二日 銀座・青樹社

第二回素型展 八日—十二日 銀座・青樹社

高橋康男小品展(洋) 八日—十二日 銀座・兜屋

香取秀眞日本画展(工) 九日—十三日 京都・朝日ビル

六九

山本敬輔個展 (洋) 九日—十四日 大坂・阪急

工藝煥匠會作品鑑賞會 (工) 九日—十四日 上野・松坂屋

興國美術院展 十日—十四日 大坂・阪急

「夏十題」新作画展 十日—十七日 大坂・大丸

第四回青龍社日本画展 (日) 十一日—十四日 銀座・菊屋

庚辰會工藝美術展 (工) 十一日—十七日 銀座・村松

高木背水遺作展 (洋) 十二日—十四日 銀座・日月画廊

第三回「山の繪の會」展 十二日—十六日 銀座・日本樂器

橋田庫次油繪展 十二日—十七日 銀座・養生堂

泰西名畫模寫展 十二日—二十一日 銀座・日本樂器

日本美術及工藝統制協會交易展示會 十二日—二十一日 日本橋・三越・高島屋

「田陳点教」日本画七九点、洋画二六五点、彫刻一〇二点、工藝九四点、産業工藝三八〇点

現代美術展 十二日—二十五日 都美術館

童林社展 (洋、彫) 十二日—二十五日 都美術館

玉村方久斗個人展 (日) 十四日—十八日 銀座・青樹社

五月展 十五日—十八日 銀座・菊屋

新制作派會員春季展 (洋) 十五日—二十

十一日 銀座・八咫屋画廊

東朝—みな十号前後の小品ながら会場会場の螢光燈の設備がもの柔く小品展としての樂しさがある。水彩精進の中西利雄「佐原新緑」を先ず挙げたい、清澄で温さを失わぬ佳作、内田巖の「雪景」に力の籠った粘りがあり、小磯良平「婦人像」の運筆の余裕は常の特色を失わず、危げがない。病床の作という猪熊弦一郎「ビルマの子供」は暗い色でいて埴輪めいた明るい微笑まじきに富み、荻須高德の大膽風景は伸びやかな大きさを持つ。彫刻もみな小さいが、小さく置物細工の末梢に耽らず、深く高いものを索める態度に好感を寄せ得、菊池一雄「首」や佐藤忠良「オリエ像」など対象への純粹な傾倒を覚えさせ、本郷新一「子馬」も一見裝飾的な作意を見せつつも低俗を却けてきつと緊めている。

日本劇画同人小品芝居繪展 十六日—十八日 銀座・田屋

童画研究會展 (洋) 十六日—十八日 銀座・菊屋

杉本富太郎作自由印度政府後援資金献納画展 十六日—十九日 銀座・交詢社

辻幾造「上方懷古風景」油繪展 十六日—二十一日 大坂・高島屋

桃香會油繪展 (洋) 十六日—二十一日 大坂・大丸

第七回大日美術院展 (日) 十七日—三十日 都美術館

東海—公募取止めで作品は例年より少いが、作者を選定した結果引緊つた内容を示しているのは欣ばしい、大日賞第一

席月岡榮吉の「小田村の人々」は逞しい筆力に量感もよく出ているが、背景に一考ありたく、毎日賞望月定夫の「錦鶏」は色感布置もそつなく温雅な面品。他の授賞作では加倉井和夫の「山」と中川一郎の「蟹問」に新銳の感覚と技法の確さを見、院僚の作品では平口勝雄の「熱國鳥戯」加藤英純の「巖打波」伊藤神章の「飛行機を持つ子供」に夫々独自の精進と発展が窺われる、主宰青木大乗の「潤ふ春」はしつとりとした情感の中に風景面と花鳥面の融合を示す努力作、結城素明の「葱」はやや月並だが、手馴れた写真である。

第八回海洋美術展 (綜) 十七日—六月九日 都美術館

東朝—今回の出品も技術の面では相当の水準に達しているものがあるけれども作者の熱意を傳える作品はあまり多くない。橋本関雪の「波浪」横山大観の「海上日出」などは先ず無難な方で、少し甘いが上村松篁、内田巖あたりもいくらか浪漫的要素がある。なお題材それ自体でおのずから海の護りを感じさせるのは中山正実の古典的構図や、中沢弘光の「山本元帥」石川寅治の「長野元帥」村上鉄太郎の「古賀元帥」加藤義雄の「末次大將」などの肖像である。良い意味での写真に徹した作品中では中村研一、朝井閑右衛門、川端実、藤本東一良等が挙げらるべきであり、素直な写生としては窪田照三や橋原健三、荻太郎、酒井亞人の如きがある。また公募の中では秋保正三、新井廣治、小川勝蔵、五味悌四郎、伊藤清永、小野貞定が注目される。

第三回青龍社展 十八日—二十二日 銀座・養生堂

木俣高峰繪展 十八日—二十四日 大坂・三越

興亞南画院舞鶴鎮守府献納画展 (日) 十九日—二十一日 京都美術館

第五回早芹社展 二十日—二十二日 銀座・村松時計店

高畑正明個展 (洋) 二十日—二十三日 銀座・田屋

桂ユキ子近作油繪展 二十日—二十五日 銀座・美穂堂

連袖會・増友會合同囃鳴會第一回展 (洋) 銀座・青樹社

高橋亮南方戦線從軍展 二十二日—二十八日 名古屋美交社

神坂雪佳遺作展 (日) 二十二日—六月六日 京都大祀記念京都美術館

金沢三匠會新作工藝展 (工) 二十三日—二十八日 大坂・大丸

第三回工藝煥匠會作品展 (工) 二十三日—三十一日 上野・松坂屋

瀧野川美術協會献金展 二十四日—二十五日 瀧野川区役所

能美會彫刻展 二十四日—二十八日 日本橋・白木屋

第三回現代工藝名作鑑賞展 二十四日—二十八日 日本橋・高島屋

海軍必勝繪馬展 二十四日—三十一日 新宿・三越

齋藤清版画展 二十五日—二十七日 銀座・鳩居堂

眞垣武勝個展 二十五日—二十九日 大坂・朝日ビル

彩雲會油繪、水繪展 二十五日—三十

一日 大阪・三越  
第四回大阪市民展 二十五日—六月十一日

日 大阪市立美術館  
〔搬入〕日本画一六五点、洋画五二五点

影塑九七点〔入選〕日本画六二点、洋画一三二点、影塑三二点

黒田久美子個展〔洋〕二十六日—二十九日 銀座ギヤラリ

九藝九技作家工藝展 二十七日—三十日 岡山・金剛莊

赤城泰舒水彩画近作展 二十七日—三十日 銀座・資生堂

原鼎油繪個展〔洋〕二十七日—三十一日 銀座・田屋

東山紗智子個展〔洋〕二十七日—三十一日 銀座・菊屋

〔出品点数〕二〇点  
白魚會油繪展 二十七日—三十一日 銀座・日本樂器

國展工藝部作品展〔工〕三十日—六月三日 日本橋・高島屋

現代名匠竹藍展〔工〕三十日—六月四日 大阪・大丸

第八回美術創作家協會展 三十日—六月八日 美術協會

六月

第二十六回榮華會女子洋画展 一日—二十日 都美術館

山城呂城日本画展 二日—四日 銀座・田屋

日向裕油繪個展 二日—四日 銀座・菊屋

第六回朱苑繪画展 二日—四日 銀座・サザレ画廊

山本敬輔個展〔洋〕二日—六日 銀座・青樹社

第十三回日本版画協會展 二日—十一日 都美術館

三宅克己新作水彩画展 三日—十一日 銀座・日月画廊

聯立春季彫刻展 三日—十八日 都美術館

東海—在野彫刻五團體による春季合同展でこの会場分割の展覧形式は曾て洋画会で試みられたことがあるが、彫刻としては最初の企てだ。全体の印象からいって、もう一歩進めて團體名に執着した様な室分けの障壁を取除いたらもつとさつぱりしたらうと思われが、ひとつの過程としてこれも止むを得まい。作品を團體別に見ると、日本彫刻家協會に粒がそろつてゐる。野々村一男の牛、加藤顯清の馬をはじめ林是、川上金次、吉野康彦など仕事として手堅い、直土会では冨圭奉「苦悶」大須賀力「戦列に」など比較的よく、宮本光庸の兵士習作も小品だが悪くない。正統木彫では沢田晴廣の大作「聖觀音」がひとり氣を吐いているが、著彩の關係もあるのか氣品に欠ける。その他構造社の原田新八郎、塊人社の村田勝四郎が注目される。

第二回手工藝展 四日—十五日 都美術館

第五回馬鈴社展 五日—九日 銀座・菊屋

戰爭画研究展 五日—十日 銀座・兜屋

第六回西本白鳥個展 六日—八日 銀座・田屋

獨立美術協會會員展〔洋〕六日—十日 日本橋・高島屋

東京—高島屋四郎「ピルマ娘・印度人牛」と小林和作「聖邦一峰」が從來の面境を一進歩めたものとして注目され殊に前者など独自の潤が加つて佳い。野口彌太郎「海辺の喜び」は潤達な明るさに満ち、富樫實平「大豆集荷」も人馬の密集處理に無理なく、よく空氣を捉え得た。

菊池精二、居串佳一の北方もの、齋藤長三の「日本の農家」など特記するほどのものはなくとも從來の系列を力一杯追つてゐる点快い。

竹園画塾舊藏會「海の蒼鷺に贈る」展 六日—十一日 大阪・大丸

楠公繪卷展 六日—十一日 大阪・大丸

宮脇公實個展 七日—十一日 銀座・青樹社

浜本武一個展 七日—十一日 大阪・アサヒビル

マチステツサン複製展 八日—十日 銀座・聚書房

第四回邦画一如會展 八日—十五日 日本橋・三越

第三回桃瀬會油繪展 九日—十一日 岡山・金剛莊

第一回朱竹會日本画展 九日—十一日 岐阜・都瀬丸物

第二回辻克己油彩展 九日—十二日 銀座・資生堂

第六回丹辰社展 十日—十三日 銀座・田屋

第二回塔和會展 十一日—十三日 銀座・菊屋

渡邊壽美子近作展 十一日—十三日 上目黒・黒田邸

第二回新油繪協會展 十一日—二十日 銀座・資生堂

東朝—出品数はそう多くないが、第一回展よりもはるかに良くなった。同じ世代に生きている少壯の入達が呼吸を合はしめて、何か生み出そうとする意欲も感じられる。會員のうちでは鳥羽宗雄の「送る子供たち」、小林三郎の「農家」、淵上巍の建物や小林剛の航海が注目され、廣田剛郎の幼女座像、本間勘次郎の風景も研究過程として興味がある。

光土會俳画展 十二日—十三日 水道橋・理研工業

第二回國土會日本画展 十三日—十六日 日本橋・高島屋

白鳳會展 十三日—十七日 銀座・青樹社

洛西日本画家聯組展 十三日—十八日 大阪・大丸

新東亞美術協會展覽會 十三日—十九日 都美術館

第九回日本山岳画協會展 十四日—十八日 銀座・青樹社

川瀬竹春近作陶器發表會 十四日—十八日 大阪・阪急

第三回白魚會展 十四日—十九日 銀座・菊屋

第六回二六〇〇年會展 十四日—二十日 都美術館

彫刻三人展 十五日—十七日 銀座・田屋

第六回高松たくみ會工藝展 十六日—十九日 岡山・金剛莊



新構造社小品展 (洋) 十六日—十九日

銀座・資生堂

日本画小品展覽會 十六日—二十二日

日本橋・三越

現代工藝新作品鑑賞會 十七日—二十日

四日 日本橋・高島屋

坂本正春油繪個展 十九日—二十三日

銀座・青樹社

本間勳式油繪個展 十九日—二十三日

銀座・田屋

前田正雄木版個展 二十日—二十二日

銀座・資生堂

三水公平個展 二十日—二十四日

銀座・青樹社

大矢實鶴個展 二十日—二十五日

橋・白木屋

竹内無憂樹新作畫發表 二十日—二十五日

大屋・大丸

東京美術學校學徒作品展 (日、洋) 二十一日—二十五日

新宿・三越

第一回征美展 二十一日—二十五日

名古屋・青樹社

第五回關外美術展 二十一日—三十日

名古屋・青樹社

山下昌胤個展 二十四日—二十六日

銀座・田屋

田村一男個展 (洋) 二十五日—二十九日

銀座・青樹社

巴里風景エツチンク展 二十五日—三十日

銀座・聚書房

水彩聯盟會員山と水郷に取材せる水彩画小品展 二十六日—七月五日

銀座・キヤラリ

堀忠義富士油繪展 二十七日—三十日

日本橋・高島屋

石井鶴三個展 二十八日—三十日

銀座・資生堂

内山雨海花卉素描展 二十八日—七月二日

銀座・田屋

七月

長谷川善四郎油繪個展 一日—三日

銀座・美穂堂

第二回玄湖社日本画展 一日—四日

銀座・資生堂

添壽小品發表會 一日—五日

銀座・鳩居堂

大日美術日本画展 一日—十日

市立美術館

平安神宮御鎮座五十年平安遷都千五十年奉祝京都市美術展 (綜) 一日—二十三日

京都岡崎・大札記念京都美術館

〔出陳点数〕日本画一七二点、洋画二六二点、彫刻三〇点、工藝一〇五五点

〔審査員〕〔第一〕石崎光瑤、橋本閑雪、西山翠峰、堂本印象、中村大三郎、宇田

荻郎、上村松園、徳岡神泉、山口華楊、

察本一洋、福田平八郎、小野竹喬、金島

桂華、橋原紫峰、菊池契月、水田竹園、

〔第二〕太田喜二郎、大橋孝吉、田中善

之助、黒田重太郎、須田國太郎

〔第三〕矢野判三、松田尙之

〔第四〕堂本漆軒、小合友之助、楠部彌

式、山鹿清華、清水六兵衛、清水正太郎

岸本景春〔招待者〕第一部六〇名、第二

部二〇名、第三部七名、第四部二一名

現代工藝巨匠作品鑑賞會 四日—八日

上野・松坂屋

雪華保護院獻納藝術人形の會 四日—九日

日本橋・三越

瑞兆石新興工藝品陳列 四日—九日

大阪・大丸

巡回慰問美術展 四日—十日

銀座・美交社

海洋美術展 五日—十六日

京都・大丸

遠藤櫻可墨西個展 (風景篇) 六日—八日

銀座・田屋

西郊水彩画協會第一回展 六日—九日

銀座・菊屋

瀧州國風物繪画展 六日—十日

銀座・つばき画廊

第二回隨會會展 八日—十一日

名古屋・松坂屋

萩森久郎油繪個展 八日—十四日

銀座・銀座ギヤラリ

美術創作小品展 十日—十二日

銀座・資生堂

伊東瀧習作展 十一日—十三日

銀座・つばき画廊

新作日本画鑑賞展 十一日—十九日

日本橋・高島屋

第二回彩人會展 十二日—十六日

銀座・田屋

第四回清流會展 (日) 十三日—十五日

銀座・資生堂

第四回有終會日本画展 十四日—二十三日

大阪市立美術館

巡回慰問美術展 十五日—二十一日

名古屋・美交社

藝術院會員陸軍獻納展 十五日—三十日

一日 帝室博物館

東毎—二月の戦艦献納画展に次ぐ藝術院全會員二度目の奉仕で、前回に同じく各五点を出版している。まことに御苦労

七二

といふ度い。殊に大観、玉堂の二元老の

努力は多とするに足り。前者の五点の

中では「雨白し」がいつもの変な氣張りの

ない習作であり、「晨征」も征途につく

防人を描きながら、水墨の山景を主体

にして点景人物を極めて小さくしたた

め嫌味のない佳品となつた。玉堂の場合

も同じで「神富士」などより、何気ない

「煙雨」「雨霧」などに爽やかな情風を感

ずる。歴史画では青邨の「景清」が悪く

ない。一方洋画は不振で、安井の静物一

点及び中沢弘光の「よせくる波」、それ

に洋面というより日本面の領域に入りそ

うな小杉放庵の古事記手材の三点以外、

これといつて取上げるべき佳作はない。

放庵のものでは油彩の「綱女の舞」より

むしろ淡彩素描風の「猿田彦」「稗田

阿礼」の飄逸素朴な味が面白い。彫塑で

は平櫛田中、山崎朝雲ふたりの木彫を注

目すべく、特に後者の「佐豆人」の刀法

には逞しさがあつていい。工藝は全般的

に低調。

芝清福油繪作品展 十七日—十九日

銀座・田屋

松下・西田二人展 十七日—十九日

銀座・資生堂

中川一政新作展 十八日—二十日

郷・大勝画廊

金沢工藝六龍會展 十八日—二十三日

大阪・大丸

小柳創生水墨小品展 二十日—二十三日

銀座・田屋

藤代清治個展 二十一日—二十五日

銀座・菊屋画廊

第十回滄人會油繪展 (洋) 二十五日—

三十日 大阪・大丸

日本藝術文化展 二十五日—三十一日  
銀座・田屋

岡村夫二新草画鑑賞會 二十五日—二

十九日 銀座・鳩居堂

征々會展 二十八日—三十日 銀座・  
村松

伊部燒、山本陶秀作陶展 二十八日—  
三十日 岡山・金剛莊

大楠公精神顯揚「義忠」美術展 二十  
九日—八月八日 日本橋・三越

岩壁富士夫・兒島輝郎・宝田巖三人展  
二十九日—三十日 銀座・菊屋

飯島一次個展(洋) 二十九日—三十一  
日 銀座・資生堂

東朝—新作画と参考出品の二本建であ  
るが、参考品の方には吉川靈華の「吉野  
遷幸」小堀朝音の対幅「大楠公」、「小楠  
公」、富岡鉄齋の「笠置山」、川崎千虎及  
び安田叔彦の「小楠公」等があり、新作  
の方では小品ながら小山榮達、山川永  
雅、荻生天泉、案本一洋、福田恵一、服  
部友恒、鈴木米雀、江崎孝坪、北田明道  
など、また見るべきものであろう。なお  
洋画畑で正宗得三郎、太田三郎、岸岸義  
一の日本画がある。

## 八月

第二回野友會展 一日—三日 銀座・  
資生堂

浜狐嶺新作画展 一日—六日 大阪・  
大丸

中部二科展(洋) 一日—六日 名古屋

松坂屋

丹司桂秋個展 三日—五日 銀座・田

現代美術展覽會(昭和十九年度)

屋

本縣出身名士及画家選展(日) 三日  
—六日 岡山・金剛莊

正型繪画展 四日—九日 銀座・資生  
堂

井手剛健彫塑個展 十日—十四日 銀  
座ギヤラリー

第二回遠達画人展 十五日—二十日  
大阪・大丸

田沢八甲油彩「こども」展 十六日—二  
十二日 銀座面廊

巡回慰問美術展 十八日—二十三日  
大阪・美交社

「戦ふ境を描く」繪画展 十九日—二  
十六日 日本橋・三越

読賣—今回の展覽會は從來の如く展覽  
會のために各自が同じ題材を選んで作品  
を製作これを展示したものではなく、現  
場での慰問制作の中の六十余点をここに  
新たに持寄つたもので、対象の重点はあ  
くまで現場にある、従つて会場には繪画  
展特有の華やかさはなく、作品にも謂うと  
ころの新機軸も見られぬが、これは寧ろ  
全隊員の本懐とするところであらう、鶴  
田、柏原、板倉、高井、田中、福田の生  
産増強への挺身の歡喜と自信の裡に持味  
を生かした作品と場内ただ一人日本画三  
点を掲げている中村直人の新鮮勁拔さは  
注目を惹く

現代名家日本画小品展(日) 二十二日  
—二十七日 大阪・大丸

柳瀬正夢小品展(洋) 二十四日—二十  
六日 満洲・中銀クラブ

日本藝術文化展 二十五日—三十一日  
銀座・田屋

第十六回青龍展(日) 三十日—九月十  
七日 日本橋・三越

東海—二科延期、院展中止、文展は未  
定という中で、秋の展覽會の先陣を例年  
通りに切つた青龍社の自信—というより  
竜子の自信は、近頃沈滞の美術界にとつ  
てよき刺戟だ。

社人の作では、坂口一草の大作「潮を  
待つ」が悪くない、時局的な寓意ありと  
すれば弱過ぎ、海岸を描けぬ苦肉の策と  
みれば氣の毒だが、どちらにせよ地味な  
努力は買う、福岡青嵐はさきの明恵上人  
繪傳の続きとして孤兒藥師丸の修道時代  
を三節にわけて描いているが、繪傳とし  
ての新味は前作に劣る、山崎豊の「將軍  
塚」は甲冑をつけた田村麻呂の遺骸とい  
う主題の捉え方が不明瞭で幻想画になつ  
てしまつた、竜子の南方篇第三作「水雷  
神」は前作「眞如親王」にまさること数  
段だが、肝心の魚雷の表現に近代兵器と  
しての速度感が欠けたため、まだ整備中  
の水雷神のようにみえる、また、もう一  
点の「怒る富士」は連作「國に寄する」  
の駿河の巻としてよき着想だが、筆使い  
の粗さが氣になる。

## 九月

玉村方久斗個展(日) 一日—六日 銀  
座・資生堂

丸本・赤松二人案描展 二日—四日  
銀座・菊屋

第一回同潮會展 六日—九日 銀座・  
菊屋

海軍省賦納色紙画展 七日—八日 銀  
座・田屋

第二回新日本美術協會展 八日—十一  
日 銀座・資生堂

水野愚陶・近作茶陶展(工) 九日—十  
一日 岡山・金剛莊

亞士會油繪展 十日—十四日 銀座・  
田屋

第三回新人画會展( ) 十二日—十四  
日 銀座・資生堂

第八回六聖會油繪展 十二日—十七日  
大阪・大丸

東邦研究會地方慰問展 十二日—十  
八日 松江・公會堂

傷病兵士慰問色紙展 十二日—十八日  
松江・公會堂

明石眞三産業戰士慰問移個展 十五日  
—十八日 銀座・資生堂

第三回日本劇画院展(日) 十六日—二  
十日 第一会場 銀座・田屋 第二会場  
銀座・渡辺版画舖

布施信太郎・石井彌二郎二人展(洋)  
十七日—二十一日 銀座ギヤラリー

深沢作一水墨小品展 十九日—二十二  
日 銀座・資生堂

兒島善三郎小品展(洋) 二十日—二十  
四日 銀座・美交社

新院展同人小品展示(日) 二十一日—  
二十三日 銀座・田屋

日本水墨會賦納展(日) 二十一日—二  
十四日 銀座・田屋

東西大家日本画展 二十三日—三十日  
銀座ギヤラリー

東氏社画展 二十四日—二十九日京都・  
大丸

藤嶺染工藝作品展 二十六日—十月一  
日 大阪 阪急百貨店

美術文化協會彫刻秋季展 二十八日

一三十日 銀座・資生堂

本島柳鶴齋皇画像展 (日) 二十八日

十月二日 銀座・田屋

慶大亞細亞研究所文化展 三十日—十

月一日 三田・慶大

十月

滿洲國敬贈美術展 (日) 一日—五日

大阪・大丸

第五回國外美術院展 (日、彪) 一日—

十日 大阪市立美術館

第六回青々會繪畫展 二日—四日 銀

座・菊屋

岡崎桃乞油繪展 三日—十五日 京都

大丸

第一回軍事援護美術展 (綜) 三日—二

十二日 日本橋・三越

読賣—大觀、玉堂以下大家連の出品は

別として、受賞の立石春美は傷病兵をス

ケッチする少女の「慰問」を描いて先づ

ソツのない程度、総じて慰問か療養所々

見か傷病兵の姿などを描いているのが課

題の内容にびつたりする方であるが、中

で田中針水の「恩賜の時計」窪田照三の

「燦々前途」安田豊の「傷痍軍人の生産

敢闘」などは好個の画材ではあるが、今

一步といふところ却つて画材は平凡なが

ら青木大乗の「父の武運を祈る」白瀧幾

之助の「祈願」に敬虔な祈の氣持が沁々

と窺われているのがよかつたと思う。な

お彫刻、工藝は課題制作という條件にも

よるが、先づ評なしといった方が適當で

もある。

西本白鳥海軍省納入画發表展 四日—

六日 銀座・田屋

大山魯牛第三回作品展 五日—七日

銀座・資生堂

軍事援護強化ボスター原画展 五日—

十一日 日本橋・高島屋

兒島善三郎油繪展 九日—十三日 銀

座・美交社

村山知義人物画個人展 (洋) 十日—十

四日 銀座ギャラリー

松本弘二個展 (洋) 十日—十四日 銀

座・資生堂ギャラリー

第一回日月會展 十一日—十五日 銀

座・菊屋

武者小路實篤個展 十二日—十四日

銀座・鳩居堂

土佐將監光起筆大江山酒類童子繪卷

十四日—十七日 鶴岡・國宝館

巡回慰問美術展 十四日—二十日 銀

座・美交社

大沼抱林氏水墨展 (日) 十六日—十八

日 銀座・鳩居堂

第九回大虛水墨展 (日) 十六日—十八

日 銀座・資生堂

第二回還元社素描水墨展 十六日—十

九日 銀座・菊屋

高山道雄個展 十九日—二十一日 銀

座・資生堂

青丹會會員展 (洋) 二十一日—二十五

日 銀座・菊屋

小柳創生個展 二十二日—二十六日

銀座・田屋

模崎朱蒼新作画展 (日) 二十四日—二

十九日 大阪・大丸

廣野日陵油繪展 二十四日—二十九

日 大阪・松坂屋

明彩會展 二十四日—三十日 銀座・

日月画廊

第七回丹阿陀作畫發表 二十四日—二

十八日 銀座・鳩居堂

安藤軍治個展 二十六日—三十一日

銀座・菊屋

美術創作家協會展 二十八日—三十一

日 銀座・資生堂

安孫子眞也展 三十日—十一月一日

銀座・鳩居堂

十一月

國畫會版畫部秋季展 一日—四日 銀

座・資生堂

巡回慰問美術展一般展示 一日—五日

大阪・美交社

吉田石堂新作繪畫展覽展 (日) 一日—

五日 日本橋・高島屋

國枝金三遺作展 (洋) 一日—七日 大

阪市美術館

富岡鉄齋作品展 (日) 一日—九日 日

本橋・三越

染織工藝品展 (工) 一日—十日 大阪

三越

第一回武蔵野會展 (洋) 二日—五日

銀座・菊屋

吉田十郎比島風景展 二日—六日 銀

座・資生堂

陶磁木工技術成績品展示會 三日—四

日 東京美術學校

仙兵衛間繪畫書原画展 四日—六日

岐阜・商工經濟會議室

第三回七曜會展 六日—八日 銀座・

田屋

第二回一窓會油繪展 (洋) 七日—十二

日 大阪・大丸

滿洲國敬贈美術展 (日) 七日—十二日

神戸・大丸

淡水會日本画展 九日—十一日 銀座

田屋

水彩画二人展 (瀧沢・互井) (洋) 九

日—十三日 銀座ギャラリー

阿部六陽山水画展 十日—十四日 銀

座・資生堂

石井柏亭近作小品展 十日—十五日

銀座・美交社

扶桑會洋画部展 十一日—十四日 銀

座・菊屋

新關西美術協會洋画展 十一日—二十

一日 大阪市立美術館

第十回内山雨海個人展 十二日—十六日

銀座・田屋

第四回新關西美術展 十二日—十六日

大阪市立美術館

大政翼賛漫画展 十二日—十九日 日

本橋・三越

東西大家日本画展 (日) 十四日—十九

日 大阪・大丸

中川一政水墨展 (日) 十五日—十七日

銀座・資生堂

一水會小品展 (洋) 十八日—二十一日

銀座・資生堂

青鷺社同人小品展 (日) 十八日—二十

三日 日本橋・三越

新燈社軍人援護美術展 十九日—二十

六日

野口彌太郎個人展 (洋) 二十日—二十

六日 銀座・美交社



第七回風土會油繪素描展 二十一日—

二十四日 銀座・菊屋

藤田太郎遺作展(洋) 二十一日—二十

六日 大阪・大丸

井上・伊藤・桂・山本近作展 二十一

日—二十六日 大阪・阪急

第十三回朔日會展(洋) 二十二日—二

十六日 銀座書店

第四回青々會展(日) 二十二日—二十

九日 日本橋・三越

第五回赤堀信平彫刻展 二十二日—二

十九日 日本橋・三越

第四回日本人形美術院展(工) 二十二

日—二十九日 日本橋・三越

第三回道存社展 二十三日 京都金閣

寺

内藤健一油繪個展 二十三日—二十九

日 銀座・田屋

水産日本第四回岩瀬百舛居個展(日)

二十四日—二十九日 日本橋・三越

桑重清新作日本画展 二十五日—二十

七日 岡山・金剛莊

第五回水彩聯盟展(洋) 二十五日—二

十九日 銀座・美交社

ハンス・ザツクス生誕四百五十年記念

版画展 二十五日—十二月一日 日独會

館

戰時特別文展(綜) 二十五日—十一月

二十五日 都美術館

東朝一作戰記録画二四点を合せて日本

面、油絵、彫刻、工藝等六七点その中

の圧巻は安田毅彦「十二月八日の山本元

帥」である、海軍よりの依囑作品で二年

間の苦心作、鑑上の元帥像は巧に表現さ

れている。すなわち顔貌となだらかな冬

軍装の技法が元帥の外柔を傳え、強く張

つた厚味のある胸は内剛を現わし、双眼

鏡を持つ手がやや堅い感じを抱かしむ

るだけで一点の非を打つところはな

に多くの人物面をこなした毅彦にとつて

かくまで書きこなすことは出来ようが、

最も懸念されたのは艦の表現である、近

代兵器を日本画的技法を以て現わすこと

はこれまで殆んど失敗に終つていたが毅

彦は見事それを打開している、この作品

一点だけでも今回の展覧会は誠に意義深

いものであり、後進の作家たちはこの作

品に対して一点一線をおろそかにせず鑑

賞研究すべきである。

かかる時代には藝術院会員は老練なり

と雖も大いに力を出すべきなのに出品者

は極めて少く、大綱、玉堂、毅彦のほ

かには日本面が橋本関雪「香妃戎装」松

林桂月「威武八荒」錦木清方「稚児櫻」

油絵で中沢弘光「浦潮の春色」石井柏亭

「最上川」有島生馬「無花果の收穫」彫

刻で山崎朝雲「聖観音」内藤伸「防人」

朝倉文夫「うぎはやしうましまけのみこ

と」と、工藝の藝術院会員のみであるの

は淋しい、大綱の「神路山を拜し奉り

て」は全く理想画、杉木立奥深くの宮居

は自然に觀者をして頭を垂れしむる思い

にいたらしむるが大綱のものとしては決

して上乘のものとはいえない、しかし何

を描いても胸打たれた作品たり得るは、

この作家の性格がかくせしめてい

るであろう、玉堂の「荒海」は大海に打つて

はくたく波を描いたもので近景の波の形

は誠に妙技というべく、量感に遠く水平

線へとつづくうちにかもし出されて、こ

のたくまざるものの中うま味こそ作家

の学ぶべき点である。

今回の課題に應じて日本面には自然歴

史画が多く登場したがこれぞと取立てる

ものは余りないのは遺憾である、堂本印

象は馬上の「楠公父子」を描いている

が、正行の身体の割に顔小さく従つて青

年正行となつてゐる点などは部分的な批

評ではあるものの、兎に角美しく、敬服

のほかに、ただ心打つもの少きは内容

への追求少き才人の癖であらうか。

その他この種人物を対象にしたもので

は伊東深水「薙刀」森守明「本居宣長」

を除いては余りに現代離れした明治の歴

史画的なものの多いのは一驚した、ま

た殊更に新奇を考えたと思はれる太田

蘭雨「弟橋姫」の如きは色彩は下品であ

つて顔は固く遂に蘭雨に見ざる駄作とな

つてゐる、中村貞以「大空へ」のごとく

宗教的な雰囲気を出さんとするは現代の

要望であり、この作品に盛られた鳩をは

なたとする少女の顔、髪を通してよく

その点がうかがわれるが、色彩への研究

を要する。

東京・彫塑には時局的感情を象徴的に

表現しようとしたものが、目につくが、

想念が浅いので独りよがりになつてしま

つたものが多い。分部順治の「皇土ヲ護

ル人々」(サイパン)などはその最もひ

どい例で、殊に男も女も裸体や半裸体に

なつてゐるのは品が悪い。水船六洲の

「学徒挺身」古賀忠雄の「團魂沸る」藤

野舜正の「一撃必殺」等いずれも夫々の

人物によつて時局的感情を象徴させその

意味もよく分るが、いずれにも共通した

形態感の一種の誇張があるので内面的な

鼓吹を與えてくれない。生活の眞実性か

ら離れて一飛びに興奮した感情に走つた

たからであらう。

これらに較べると壯大なニヤマン性は

欠くが、照田畔道の「没我挺身」や久原

濤子の「検査工」は單純な生活に触れて

いるだけに眞實を感じさせる。木彫では

田鍔勝二の「抗道」がいやな誇張に陥ら

ないのいい。文展作家には昔から一種

の誇張癖があつたがそれが、上滑りした

時局的興奮と一緒になつては益々惡どい

ものになる。そこからは決して美は生れ

ない。時局的課題も美にまで高められな

ければ藝術として展観するに値しないの

である。

東京・工藝美術工藝には裝飾文様の作

因を國土の豊饒に求めたものが目につく

が廣川松五郎の「四季礼讃二曲昇風」に

しる、作因が上滑りしてゐる落つかな

い。高村豊周の「青銅八稜花瓶」はその

上古的な八稜形に國民的な情操を託した

ものが矢張り落つかない。根來実三の

「八稜釜」の方が安定している。飛行機

の「の」の字を描かせた山本安曇の「反

撃図花瓶」に至つては少し無邪氣過ぎ

る。永い國民的傳統を持つ工藝技術を如

何にして時局的課題に適應せしめるかと

いう苦心はどの作品にも認められるが、

課題の表出も結局美にまで高められけな

れば有難いものにはならないこれは日本

面でも同じことである。

〔陳列〕第一部一二二点、第二部三〇一

点、第三部一〇六六、第四部一二四二点

〔政府買上〕第一部「信濃の山」奥村土

牛 第二部「焙飲鑑」吉田博「わが菜園」清水良雄、第三部「破邪」和田金剛「毘沙門天王」関野聖雲、第四部「國體之靈」香取正彦「蠅蠅紋様八角飾」佐治正「花紋録」岩田藤七

出品目録

第一部

明治天皇御製社頭紅葉 森 綠翠  
富嶽 神原 若山 淡墨櫻  
神苑 山本 紅雲 小山 大月  
霜晨 田中咄哉州 國花 廣島 晃甫  
上古 森田 沙伊 弟橋 姫  
彩なす秋 吉田 秋光 太田 聰雨  
麦打ち 沢 宏毅 望月 春江  
櫻 木本 大果 深山の秋  
海犬養阿磨 江崎 孝坪 月に祈る  
朝みどり 橋田 永芳 春日野  
雄姿 田之口青晁 永田 春水  
煙村雨掉 横尾深林子 皇土豊秋  
関魂 我妻 碧宇 矢野 橋村  
富士の峰「花名」 奥田 元宋 富取 風堂  
豆の花 奥田 元宋 向井 久万  
小楠公 三谷十子子 國華凌霜  
山川 永雅 神兵 水上 泰生  
大戦果に國華黨 山田 耕雲 協和 岩淵 芳華  
大村 廣陽 山田 耕雲 準 山田 耕雲  
分析挺身

榎本千花俊 純後の村 野添 平米 訓吉士伊金鑑 野田 九浦 成張八荒 松林 桂月 稚兒 櫻 錦木 清方 荒海 川合 玉堂 御塩殿 宇田 荻郎 若櫻 福田平八郎 神路山を拜し奉りて 横山 大綱 香妃戎装 橋本 関雪 瀬戸喧春 大智 勝観 花園春秋 白倉 嘉入 本居宣長 森 守明 制空 山口 華楊 秣 松本 委水 石清水八幡宮 中野 草雲 大和牛 竹原 嘲風 懸崖ニ倚ル木炭 増産 庄田 鶴友 大空へ 中村 貞以 太平洋 小野 竹喬 信濃の山 奥村 土牛 薙刀 伊東 深水 騎馬戦 秋野 不矩 信長上洛 福田 惠一 將軍閣下 堀井 香坡 山林收穫 伐木、空山 八田 高容 堀川夜襲 植中 直齋 鳴梅 松元 道夫 和 小早川 清 秋山図(洛北) 株崎 朱雀 海女 勝田 哲 帶雨插秧 水田 硯山 祝勝利 堅山 南風 楠公父子 堂本 印象 高千穂峽 水田 竹園 吉田松陰 岩田 正巳 國風を讀するも の 古代鑑飾圖 宮川上流 西沢 笛畝 雄翔 小川 翠村 栗みのる

山口 玲照 三輪 晃勢 南方に咲く花 阿部 春峰 窺機心 上田 万輝 採集 保間 素堂 堀川の静 川船 水棹 雲海朝陽 荻田 蕉琴 敢闘(ヤッパ島) 益田 玉城 必勝 東原 方徳 征で立つ朝 菊沢 武江 峰 藥師 村島 西一 岳麓伐採演習 三宅 風白 醜虜の面 小早川盈磨 伏兵潰ゆ 小山 栄達 佐久良 今中 素友 皇太神宮 赤松 雲嶺 建津之身命 町田ノ曲江 供出米 太田 秋民 大阪城本丸旧觀 國 太田 天津 朝 大木 豊平 日本 山下 竹齋 竜田の神風 五月晴 安田 半圓 聖火祭 穴山 勝堂 菊 畠山 錦成 宮川上流 西沢 笛畝 雄翔 小川 翠村 栗みのる

第二部

晚秋の十和田湖 河井 清一 出動 高光 一也 山峽の譜 覆戸 庄衛 必勝の意氣 池上 浩 春耕 大月 源二 海運報國 石橋 武助 國土を護る山々 田村 一男 病院のひと時 鈴木 良三 連峰悠久 中村 善策 少年通信兵 刑部 人 最上川浅春 眞下 慶治 挺身 南 政善 國威 寺門 幸藏 軍鶏 平城 繁雄 働く姿の少女 寺内万治郎 冬の科野路 小山 敬三 訓練の朝のひと き 浅井 政勝 秋山 小林 邦報 山村の婦人 矢崎 重信 神鹿 須田 壽 女子報國隊 山尾 薰明 石炭荷揚 川端 実 御料林伊勢山を 望む 高橋 庸男 家庭勤勞作業 江藤 純平 兵を構ふ佐渡の 女等 中尾 達 万桑 遠山 清 豊收(馨ノ家族) 朝井閑右衛門 六義園の秋 金子 博信 曉 雲 小早川篤四郎 勝岡 里見 明正 高原の秋 安達眞太郎 國の花 松 郷 巽 白川 一郎 秋 富嶽 樋口 一郎 印度・爪哇静物 上野 春香 大和三山 辻 愛造 遷炭 婦 福田 新生 農兵隊の開墾 高橋虎之助 待機 佐藤 三郎 山の春 山尾 薰明

征くぞ南の空へ

有島 生馬

黒髪献納

木下 克己

石炭を掘る女

伊庭傳治郎

決戦下の工場

八月の海

能見 三次

朝映える芙蓉湖

清水 刀根

神社と老樹

大沢 海蔵

佛頭 杉本 健吉

藤川 榮子

奥濱 英三

富岳 伊藤 四郎

田辺 至

海霧 居串 佳一

松島 一郎

ふるさと

湖畔に実る

豊の秋

海軍特務少尉木村弘君像

母の武裝

保育 飯島 一次

見返物資に喜ぶ農民(中支樂業地区)井平 宜通

磐梯山

河上一也

加藤 敏子

高岡徳太郎

村弘君像

水上 信雄

上嵯峨の秋

大橋 孝吉

実る秋

五月農村

三ツ峠富士

路傍 浜田 羊

格 貞雄

或る防空指導係

わが菜園

内藤 圭

田園小憩

野口彌太郎

戦勝奉納獅子

鈴木 満

野菊 香田 勝太

秋色 宮坂 勝

清水 良雄

瑞穂 北島 浅一

海辺の松

田崎 廣助

神武天皇御東征作戦基地備中高島 片岡 銀藏

柿実る山本元帥

娘 土田 文雄

軍靴ヲ縫フ

神州秋燈燭矣

女子報國隊

河内金剛山

花 小島善太郎

信州の秋

男沼之秋

門田の神酒(看護婦出征)

科学に生ける

休息(蒙疆前線)

北洋の輸送船

小憩 吉井 淳二

熱風渦まき

激怒冤魂(南海を脱む)

伊谷 賢藏

松並木

悠久 鈴木 淳

マニラ少女

留守をまもる

高宮 一榮

雨後 曾宮 一念

化学陣

万里長城

初夏の山道

神洲備アリ

敢闘する学徒

田辺三重松

小憩 益谷 暢登

遠望(男休山)

伊谷 賢藏

マラッカ風景

服部正一郎

菊花 耳野卯三郎

大鶴 士一

清流 長屋 勇

信濃晚春

裾野 小林 和作

湖國豊穰

冬山寒村

平沢 定人

山上朝拜

緒方 亮平

富士 檜原 江北

高田 力藏

潮風 戸津 文雄

亡き妻の靈に捧ぐ水指持てる女

憤怒 川島理一郎

瑞穂穂る

驟雨 倉員 辰雄

高島達四郎

國民酒場

近藤 光紀

砂鉄製鍊

鍋井 克之

二月堂卓上

西湖北石山

金剛力伝

細作老勇士

服部亮山人

銃後の戦線

農家 加山 四郎

花苑 富田温一郎

史蹟擁護

三雲祥之助

古都の朝

小田 三郎

武蔵野

窓 雄 雉

前線ヲ想フ

紅梅白梅

史蹟擁護

宮本 恒平

浦邊の春色

森田 元子

農婦 木村 八郎

菊の花

空ノ 瞳

鋼鉄開魂

信濃尻の秋

富士と少年

菊の花

大久保作次郎

森に働らく

菊花 岩下 三四

炭坑の少女

百済觀音

安宅安五郎

稲の色

最上 川

石井 柏亭

選炭 婦

甲斐路の秋

市野木慶治

故藤田 太郎

麦秋 池部 鈞

川合改次郎

淺草寺祈願

櫻井 悦

母子像

少國民

中村 琢二

学徒挺身

岩田榮之助

白瀧幾之助

浸流 勝間田武夫

敢闘 星野 正三

兵器を作る学徒

國土安泰

根來寺の秋

根來寺の庭

西芳寺の庭

一点七斑打

現代美術展覧會 (昭和十九年度)

七七



黒田 頼綱	大野 隆徳	中間 冊夫	土 青山 竜水	河井 達海	南京中華門の衛	石原 昂	矢野 判三
稻田に満つる	蘆山 清水多嘉示	療癘の地を行く	八幡宮 小田 忠	沃土 牛島 憲之	兵 太田喜二郎	日交の心	矢野 秀徳
山本 直治	必中 鳥居 敏文	伊藤 悌三	耕田富岳 伊藤 應久	かぼちゃ 南城 一夫	稔の秋、奥武蔵	吉田 三郎	安田周三郎
朗澄 阿以田治修	馬を養ふ	遠田 運雄	森田 茂	瑞穂の國 山喜多二郎太	ソ満國境守備	山崎 朝雲	母性愛
海の幸	跡見 泰	海空戦	車掌をする学徒	〇〇兵舎 細井 繁誠	長坂 春雄	炭山の朝	上田 直次
夜 杉村 惇	中村 節也	時宗公廟	宮脇 晴	菊花 土屋 義郎	神苑正氣	中村 直人	サイパンに殉ず
最上川の雪景	井上 よし	鉄鉦と戦ふ盛岡	金子 保	大東亞迎春	水野 以文	防人 内藤 伸	宮田 重良
伊勢の清流	納富 進	鉄鉦と戦ふ盛岡	物音 竹中 参生	塚本 茂	高千穂秋の秋	玉 後藤 清一	曉の整列
鎔鉦 鎔	小林天徳堂	中学報國隊(於て松尾鉦山)	孫 山道 栄助	愛染明王 前田藤四郎	稻刈 望月 省三	皇土 長谷川 昂	河村目呂二
吉四 博	橋本八百二	又五郎爺	又五郎爺	喜多村 知	作業日誌 小山 周次	出撃 熊谷幸太郎	關魂 木村 威夫
麦の丘	靈峯御岳	川村精一郎	喜多村 知	平塚 運一	學徒勤勞図	金剛巖師能安銀	フンダンの華葛
齊藤 長三	小野田黃山	海峽を渡る	喜多村 知	乾坤頌・灼飛神	國土放牧	治 後藤 良	尾中尉
とりいれ	彼女等もかく戦ふ	飯田 清毅	古家 新	炎「心経」板 勲	初節句 早川 國彦	毘沙門天王	安達 貫一
大久保百合子	雪國の人々	ハンマーと取組む学徒	小林喜一郎	國花馥郁 棟方 志功	靈峰の威力に撃たれてB29反	関野 聖雲	朝草 刈
鎔物工場	富樫 寅平	木村 義男	鈴木 保徳	川西 英	轉遁走す	狛犬 津上 昌平	山内 倉藏
十亀廣太郎	軍神を偲びて	新雪 奥田都太郎	激流とブナの木	國花馥郁 棟方 志功	靈峰の威力に撃たれてB29反	雄魂 三國 慶一	天つ 怒
高原 廣本 了	(佐久間義長生家)	鐵鉦に挑む(蒙古竜煙鉄鉦)	櫻 廣井 礼市	戦勝不動 旭 泰宏	轉遁走す	遊弋(航空母艦に捧ぐ)	上條 俊介
竹林 金沢 重治	炭を焼く	古竜煙鉄鉦	リンゴ 牧野 牛歩	疎開學園ひろと	平沢 大暲	火燭となりて	照田 畔道
ふね 有馬さとえ	橋本 花子	深沢 省三	宵月 矢野 雄藏	訓練 前川 千帆	神鷲 宮地 寅彦	木村 桂二	猛進 白井 保春
原木(満洲浅春)	海の女	勤勞奉仕 中尾 彰	我が庭の收穫	國柱不二	皇土ヲ護ル人々(サイパン)	大楠公 小倉右一郎	國土防衛(故野辺准尉)
漁夫 緑川廣太郎	雨後の行進 大森 啓助	別府貫一郎	森 芳雄	とり入れ 相田 直彦	勝岡 中野 桂樹	「誓ひ」の歌の作者を偲びて	安 一
製鉦所に働く人	母子待機 箭原重以知	戦前の那覇 川端彌之助	蓮 庫田 發	増産の秋 板倉 賛治	神苑 柴田 佳石	花里 連城	清水多嘉示
疎開勤勞 藤 彦衛門	社頭清旦 小野藤一郎	戦時下婦人像 田中 繁吉	潮來朝霧 熊谷登久平	竹林山村 赤城 泰舒	神苑 大島 駒藏	兵士頭像 森本 清水	学徒挺身
午後の山 山下 品藏	荒れ来る太平洋 川合 修二	戦時下婦人像 田中 繁吉	天 雲 須田 烈太	靖國の御靈に捧ぐ 眞野紀太郎	聖戦 雨宮 治郎	坑内敢闘 中川 爲延	水船 六洲
出撃 鈴木 亞夫	川合 修二	戦時下婦人像 田中 繁吉	收獲 岩井燭一郎	鹿島香取神社への道 三宅 克己	小楠公 森野 田象	馬 綿引 司郎	久原 濤子
苦むす巖 山口 薫	防空服の子供	戦時下婦人像 田中 繁吉	子供 佐藤 一章	鹿島香取神社への道 三宅 克己	毅然として敵陣に對す	風貌 都賀田勇馬	古賀 忠雄
稔りの秋の農村	防空服の子供	戦時下婦人像 田中 繁吉	吉野山の初夏	鹿島香取神社への道 三宅 克己	毅然として敵陣に對す	神鷲 杉浦藤太郎	軍旗を捧持して
						棒倒し	関頭に立つ
							矩 幸成

出陣 笹野・惠三	ヤア 杉本 宗一	樞 木内 克	風 廣川松五郎	吉田源十郎	反撃図花瓶	対空 稻垣稔次郎	六角 顯雄
聖徳太子像	砂鉄を運ぶ	銃後漁村の指導	海洋飾盤	桑扇面硯画	山本 安曇	薫爐 須賀 松園	染色 楠
河内山賢祐	工藤 敬三	者 富田 匠美	丸谷 端堂	稻木春千里	盆 板谷 梅樹	唐草紋懸鏡	小合友之助
鷲 平沢 信勇	挺身女群(硬度試験)	制空 田村 審火	寄國、花孔雀緑	瑞穂之國水指	惠沢洽花十枚	碓田 惠	陶製色絵波瀾文
入営前の石井君	セメント工場ノ	破邪 和田 金剛	大皿文日重陽万	米沢 蘇峯	河村 靖山	献身之秋手織錦	飾盤 北出塔次郎
三木 凱歌	女 榎谷清太郎	北條時宗像	里 加藤土師萌	菊華安粹屏風	荒魂譜染屏風	壁掛 中村 鶴生	彫金香爐
護國觀世音菩薩	關魂 橋本 高昇	我等の銃	東海旭日文香爐	張間 禧一	大坪 重周	菊華赫く御所人	小川 英風
山本 豊市	さきもり	北村 治禧	清水 南山	豊稷香爐盆	鑄銅花瓶	形 野口 光彦	乾漆飾盤
或る日の汪先生	新田藤太郎	贖世の偉人	辰砂吳洲菱花宮	保谷 美成	中島 保美	飾額國土を護る	中川 哲哉
大國 貞藏	大地を征く	吉開伊喜藏	河井寛次郎	隼刺繡手宮	皆川 月華	田村 五郎	菊形櫻文釜
東方ノ扉ノ内神	池田 勇八	作業を終へて	花菖蒲文庫	平野利太郎	旭光寒梅文花生	ひな鶯地藏	嚴湖に煙く飾箱
遊 大内 青圃	大伴家持卿	寺畑助之丞	結城 哲雄	霹靂置物	鳥野 三秋	柳文彫蹴盤	大下 雪香
たかひの華	佐々木大樹	神威発動	香取 正彦	中野 三朗	萬國國花四枚折	内藤 四郎	蝙蝠紋襷八角飾
天彦 沢田 晴廣	南方の樹果は誘	北村 西望	菊模様手箱	輝嶋 山本 自燼	屏風 熊谷重太郎	新シキ兵器	菅 佐治 正
救世觀世音	ふ 毛利 教武	大日如來	高井 白陽	神兵阿修羅國花 </td <td>生野祥雲齋</td> <td>根箭 忠縁</td> <td>素銅菊文壺</td>	生野祥雲齋	根箭 忠縁	素銅菊文壺
中野 蘇昂	結城上野入道	赤堀 信平	大須賀 喬	神兵阿修羅國花	朝陽慶之置物	二橋 美衡	信田 洋
ビルマの女	阿井 瑞岑	田道間守	躍動大皿	蘇鉄二枚折	刺繡春土垂惠ノ	魚香 爐	本間 蕨華
中野 四郎	曉天 横江 嘉純	相川善一郎	清水正太郎	越村 計三	國壁掛	岸本 景春	減敵共榮鑄銅香
黎明 竹内 不忘	サイパン護る南	神風 小川 大系	一撃必殺	萬象共榮時給飾	花瓶 鴨 幸太郎	忠烈燦たり	染色軍裝具壁掛
日章旗「二十年	雲中將	長沼 孝三	藤野 舜正	箱 山崎寛太郎	鑑銅鑲銅花器	原 直樹	喜多村栄太郎
後ノ戦勝記念塔」	女子挺身隊	吉田 久繼	神鹿 大西三四郎	瑞松時給硯箱	三田村自芳	旭光に映ゆ	瑞鳥置物香爐
紫雲 開発 芳光	通年動員	尾崎 一草	大西郷之片影	國華花瓶	清水六兵衛	戦時と葡萄酒宮	前 大峰
老母像	文寛 井口 喜夫	試作神風	翁 朝盛	水華磁葡萄酒	板谷 波山	松田 権六	花籃 飯塚琅玕齋
共栄園の獸	國土を護る(部分草稿)サイパ	ンの大和撫子	渡辺 義知	女性進軍	伊藤 鉦次	四季礼讃二曲屏	菊紋地之棚
老婦立つ	山根 八春	救世觀世菩薩像	喜多 寒泉	坑道 田鈴 勝二	現代美術展覽會(昭和十九年度)		

現代美術展覽會 (昭和二十年度)

八〇

鉄釉紋打壺

浜田 庄司

黃銅雲雀文壺

増田 三男

紅梅白櫻漆手筥

高橋 節郎

飛躍詩文庫

森川 紫山

馬鐙 壺

西村 敏彦

太平洋砂眼平水指

高橋 勇

花紋 針

岩田 藤七

大東亞の魚譜其

一、二曲屏風

鹿島 英二

傳書鳩軍犬紋鑄

銅花瓶

山本 純民

菊衝 立

高久 空木

黃銅秋瓶

宮坂 房衛

風呂先屏風

福沢 健一

前線往來鑄銅水

盤 立川 立政

短刀 山脇 洋二

大空小屏風

木村 雨山

白銅普天之御桶

杉田 禾堂

彫漆勝獅子

佐藤 陽雲

鑄銅母と子獅子

香爐 香取 秀真

御本神力水指

伊東 翠壺

黒味銅花器

三井 義文

月象手箱

岡部 達男

松鶴文飾皿

介川 芳松

塩菰菊花瓶

森野 嘉光

青銅八棱花瓶

高村 豊周

金地毛彫皇土讃

仰文 北原 千鹿

神國花瓶

楠部 彌次

春曉陶呂

伊東 陶山

雲鶴紋青銀小壺

海野 清

彫木研屏替むす

巖 堆朱 楊成

菊水意水指

井上 良齋

不動魂手箱

魚野 自醒

南方ニ咲ク大和

撫子 富樫 光成

和染小屏風野菜

白磁 壺

岡本 爲治

陸軍省特別出品陳列目錄

海軍省特別出品陳列目錄

陸軍省特別出品

輸送船團海南島

出発 川端 竜子

コタ・バルB

中村 研一

ジツトラ敵陣突

破 鶴田 吾郎

アロルスター橋

突破 田村孝之介

カンバル攻略

(倉田中尉の奮

戦) 小磯 良平

ジヨホール水道

渡過 中山 鏡

ブリキマの夜戦

藤田 嗣治

大柿部隊の奮戦

同

工兵隊架橋作業

清水 登之

シンガポール陥

落 宮本 三郎

バツアナムの彈

藥集積

田中佐一郎

島田戰車部隊ス

リムの敵陣突破

伊原宇三郎

プリンス・オブ・

ウエルズの轟沈

中村 研一

海軍部隊セクタ

神保俊子個展(洋) 一日—四日 銀座

養生堂

第五回上野忠雅劇画展 一日—五日

銀座・田屋

鶴田吾郎淡彩素描活動推進展(洋) 一

日—八日 銀座ギャラリ

山本紅雲新作画展(日) 五日—十日

大阪・大丸

新制作派戦時美術展(日) 八日—二十

四日 日本橋・三越

川口軌外・中川紀元・野口彌太郎・兒

島善三郎・佐野繁次郎・菅野圭介六氏近

作展(洋) 九日—十三日 銀座・養生堂

山田正平水墨篆刻個展 十一日—十三

日 銀座・鳩

石井不老氏備前焼近作展(工) 十二日

—十四日 岡山・金剛莊

林茶碗陳列(工) 十二日—十七日 大

阪・大丸

現代大家日本画墨蹟展 十二日—

大阪・朝日ビル

第二回金沢會染織工藝品展 十二日—

二十二日 大阪・三越

日本画新作展覽會 十三日—十七日

日本橋・三越

浜田庄司作陶展(工) 十三日—十七日

日本橋・三越

眞垣武勝個展 十六日—十九日 銀

座・菊屋

正田飛行機製作所繪画展 十六日—十

九日 同製作所

第七回高松たぐみ會工藝展 十六日—

十九日 岡山・金剛莊

赤城泰舒水彩画近作展觀(洋) 十八日

—二十一日 銀座・天賞堂

宅野田夫個展 十九日—二十三日 日

本橋・高島屋

沢田泉山新作陶藝展 十九日—二十四

日 大阪・大丸

第九回大潮會美術展覽會(綜) 二十日

—一月七日 都美術館

亞土會冬期油繪展(洋) 二十一日—二

十七日 アザレ画廊

河上一也新作油画鑑賞會 二十二日—

二十四日 岡山・金剛莊

昭和二十年度

一月

神宮官幣社奉獻日本画展 四日—十四

日 京都・大丸

白櫻會画展 十一日—十四日 銀座・

菊屋

軍需生産美術展(洋) 十四日—二十五

日 日本橋・三越

境野冬柏・島春潮聯立小品展覽會

(日) 二十二日—二十六日 銀座・田屋

画廊

二月

石川滋彦チャワ風物漆彩素描展(洋)

六日—十二日 銀座画廊

遠藤國上佛画小品展 十一日—十五日

銀座・菊屋

富士山油繪展 十四日—十八日 日本

橋・高島屋

軍人援護記録画展示會(日、洋) 十六

日—二十二日 日本橋・三越



愛國百人一首展(日、書) 十七日—三月四日 日本橋・三越

第十回六聖會油繪展 二十日—二十五日 大阪・大丸

吉原甲藏金剛山油繪作品展 二十二日—二十六日 京城・三越

四 月

戦争記録画展(日、洋) 十一日—三十日 都美術館

六 月

小絲源太郎画室展(洋) 二十三日—二十五日 同氏画室

青龍社自宅展(日) 七日—十一日

七 月

女流美術家繪画展 十四日—十五日 浅草本願寺

九 月

現代美術展(綜) 十五日—二十八日 京都市美術館

三峯節子個展(洋) 二十五日—十月四日 日動画廊

十 月

在京美術家油繪彫刻展 五日—十八日 日本橋・三越

青龍社第十七回展(日) 二十日—三十一日 日本橋・三越

読賣—終戦後展覧会のトップを切ったキビキビしたやり方と明快で屈託のない壁面の筆色は突如舞いこんだ「文化の解放」の前に戸惑いのいじけた氣持が微塵

も見られず先ず胸の透くものがある。主宰者川端竜子は「臥竜図」「牡丹獅子」「爆弾散華」の三作に達筆の限りであるが、その意図するスケールの大きさに床の間藝術への挑戦が如実に語られ、この点外來の新觀衆へ日本畫の認識は正を追っている。福岡青嵐の「絵師良秀」は瀾達な佳作であり、坂口一草、加納三樂、山崎豊、安西啓明等の諸作も自由に元氣である。

特に今度の会場で考えられたのはこの壁面の調子が新たな事態によつて装われたそれではなく戦時中より一貫した主張の継続であり、そこにこの会の主張が内面的に神經の鍊磨であるよりも藝術意欲の肉体的健康に専らであつたことの結果である。(三輪鄰)

十一月

日本美術工藝展 一日—五日 日本橋三越

美術文化自由新作展(洋) 一日—五日 日動画廊

毎日—美術文化協会は戦時中最も彈圧を受けただけあつて今回の小品展も立派に榮養失調をみせて居り、甚だ淋しい、福沢の「秋」や小川原の「小兒」など佳品の方だが、要するに今後の發展に期待する外ない。

頗る品も悪く感銘も薄い。

文化祭美術展(綜) 三日—新潟市

福沢一郎個展(洋) 十四日—十八日 日動画廊

岡山聖畫畫伯個展 十七日—十二月七日 京都回天堂會場

京都市美術展覽會 二十一日—十二月十日 京都市美術館

現代名家新作洋画展 二十一日—三十日 主婦之友

丹阿彌岩吉日本画小品展 二十一日—二十五日 日動画廊

十二月

武蔵野會 一日—五日 日動画廊

青々會展 三日—二十七日 日本橋・三越

第一回女流美術家協會展(綜) 三日—十二日 日本橋・三越

西部美術協會第一回會員展(綜) 十三日—十七日 西日本新聞社講堂

春日部たずく水彩展 十五日—二十一日 日本橋・三越

日本美術院小品展(日) 三日—十日 毎日—進駐米軍慰問のため院展同人が、積極的に催したもの、いずれも小品で会の趣旨に副い米人好みの華美で巧緻な作品を出しているが玉石混淆であり、大綱、靱彦、青邨その他二三を除いては

現代美術展覽會(昭和二十年度)

「物故作家及美術関係者」 ページ (82～104 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the Articles of the Deceased (pp.82-104)

Cut for protection of the personal information

# 美術行政・教育

昭和十八年度

## 行政

第二回帝國藝術院賞決定 第二回（昭和十七年度）帝國藝術院賞は受賞者六名が決定四月九日文部省から発表された。第一部（美術）に於ては日本画「山鹿素行先生」島田墨仙、油絵「山下・パル」兩司令官会见」宮本三郎、彫塑「建つ大東亞」古賀忠雄、工藝「梅時絵飾棚」吉田源十郎、第二部（文藝）野口米次郎、第三部（音楽）井口基成であつた。

文化勳章授與 長き辺りでは藝術及び科学の各分野に於てわが文化の創造的發展に功績のあつた七氏に対し四月二十九日文化勳章授與の御沙汰あらせられた。造形關係では建築の伊東忠太、油絵の和田英作が恩命を拜した。

第六回文部省美術展覧會委員並びに審査員發表 昭和十八年度文部省美術展覧會委員は、六月二十一日文部省に於ける帝國藝術院美術關係委員會に於て、委員外の各部委員總計九十四名を詮衡し、六月二十五日帝國學士院に於て右文展委員會を開催審査員、出品規格の制限、移動鑑査等を決定し、同二十六日發表した。

（委員長）文部次官菊池豊三郎、（委員）第一部（日本画）橋本関雪、西山翠峰、川合玉堂、鍋本清方、横山大綱、上村松園、安田叔彦、松林桂月、前田青邨、小

美術行政・教育（昭和十八年度）

林古徑、小室翠雲、荒木十畝、菊池契月、結城素明、伊東深水、堂本印象、徳岡神泉、大智勝麟、奥村土牛、金島桂華、中村大三郎、中村岳陵、宇田萩郎、上村松篁、野田九浦、山口蓬春、山口華楊、矢野鉄山、塚本一洋、福田平八郎、島田墨仙、森白甫、第二部（洋画）石井柏享、和田英作、和田三造、中沢弘光、梅原竜三郎、山下新太郎、安井曾太郎、藤田嗣治、小林万吾、小杉放庵、有島生馬、南薰造、稻伊之助、長谷川昇、東郷青児、奥瀬英三、吉村芳松、田辺至、高野三三男、辻永、中野和高、中山巖、内田巖、野口彌太郎、黒田重太郎、熊岡美彦、青山義雄、足立源一郎、赤城泰舒、木村莊八、清水良雄、第三部（彫塑）内藤伸、山崎朝雲、藤井浩祐、朝倉文夫、佐藤清藏、齋藤素巖、北村西望、平櫛田中、石井鶴三、橋本朝秀、渡辺義知、加藤顯清、吉田三郎、杉田尚之、雨宮治郎、佐々木大樹、清水多嘉示、第四部（美術工藝）板谷波山、六角紫水、富本憲吉、香取秀真、津田信夫、沢田宗山、清水六兵衛、清水龜藏、河合寛次郎、吉田源十郎、高村豊周、山鹿清華、山崎覺太郎、北原千鹿、杉田禾堂、（審査員）第一部、上村松園、前田青邨、荒木十畝、菊池契月、伊東深水、奥村土牛、宮島桂華、中村大三郎、中村岳陵、宇田萩郎、野田九浦、山口蓬春、矢野鉄山、福田平八郎、森白甫、第二部、伊原宇三郎、長谷川昇、林重義、東郷青児、奥瀬英三、岡鹿之助、萩須高

徳、川島理一郎、吉村芳松、鶴田吾郎、辻永、中村研一、中村善策、中川一政、中山巖、鍋井克之、内田巖、野口謙藏、野口彌太郎、黒田重太郎、正宗得三郎、小磯良平、兒島善三郎、高野三三男、寺内万治郎、阿以田治修、赤城泰舒、青山義雄、足立源一郎、齋藤里里、鬼頭鍋三郎、木下義謙、須田國太郎、鈴木千久馬、第三部、内藤伸、山崎朝雲、藤井浩祐、朝倉文夫、齋藤素巖、佐藤清藏、北村西望、平櫛田中、石井鶴三、橋本朝秀、渡辺義知、加藤顯清、吉田三郎、松田尚之、雨宮治郎、佐々木大樹、清水多嘉示、第四部、板谷波山、六角紫水、清水龜藏、岡部達雄、河村喜太郎、河合寛次郎、吉田源十郎、高村豊周、山鹿清華、山崎覺太郎、北原千鹿、皆川月華、杉田禾堂。

第六回文展招待出品制 文部省では文展委員會を開いて新無鑑査者第一部三名、第二部百四十九名、第三部十五名、第四部十三名を決定したほか次の諸項を決定八月九日發表した。（招待出品制）日本美術の奨励振興を期するため無鑑査者中より毎年度文展委員會で推薦して決定するが、招待作家は特に作品技術が優秀で、不斷の精進をつづけている者を選抜する。本年は第一部八名、第二部九十四名、第三部十五名、第四部なし計百十七名の招待者が推薦された。（無鑑査新出品制）從來無鑑査出品は隔年制であつたが、今年からは三年交代として壁面の緩和をはかる。但し第一部は無鑑査者が少いたため從來通り。（移動鑑査）本年は第一部と第四部のみ移動鑑査を行うが、第一部で

は九月二十九、三十の兩日京都市で予選を行い、京都、大阪府下の出品者は必ずこれを受けねばならぬ。直接東京会場宛送つても受理されない。

藝術學會開催 日本諸學振興委員會では、六月九日より三日間文部省第一會議室で昭和十八年度藝術學會を開催した。（美術講演、講義の項参照）

文部省教學局設置 十一月一日文部省の機構改革に伴い、教化局は廃止され、新に教學局を設け文化課を置いて、美術行政をも取扱わしむることとなつた。課長には教化局文化施設課長小山隆が任命された。

## 教育

美術關係諸學校入學及卒業 本年度における美術關係諸學校の入學及卒業者の人員其他は左の通りである。（學校別五十番順）

京都市立繪畫專門學校 九月二十三日第三十四回卒業式挙行。

日本画科	志願者	入學者	卒業者
計	六五	三二	三〇
工筆科	五三	二六	二三
計	一一八	五八	五三

京都市立美術工藝學校	志願者	入學者	卒業者
工筆科	四四	二七	二七
繪畫科	二八	二四	二四
計	七二	五一	五一

京都高等工藝學校	志願者	入學者	卒業者
漆工	七九	六二	四四
計	七九	六二	四四



九月二十二日第四十回卒業式挙行。

色染科	志願者	七六	入學者	二九	卒業者	二八
機織科	八〇	二九	二九	二七		
図案科	八五	三九	三九	三四		
窯業科	一二三	三二	三二	二三		
機械科	二〇七	四〇	四〇	二九		
精密機械科	四五五	七一	七一	六九		
人造纖維科	八八	三〇	三〇	二四		
精密機械科	二九五	五〇	五〇	二五		

女子美術専門學校

三月二十三日第四十八回卒業式挙行。  
九月二十八日第四十九回卒業式挙行。

高等科	志願者	五五五	入学者	一九〇	卒業者	二〇
師範科	五四五	一九〇	一九〇	一五三		

多摩帝國美術學校

九月二十四日第九回卒業式挙行。

日本面科	志願者	一二	入學者	一〇	卒業者	二
西洋面科	六八	五〇		八		
彫刻科	九	七		一		
図案科	一八	一五		一一		

東京高等工藝學校

九月二十二日第二十回卒業式挙行。

工藝圖案科	志願者	入學者	卒業者
造型工藝科	七八	二四	一七
機械工學科	四六	一〇	六
精密機械科	二六三	四〇	二九
木材工藝科	五五一	七五	七八
印刷工藝科	九三	二五	二三
	六二	二四	一九

行政

写真部	五三	一五	一一
第二部	六一九	五〇	
精密機械科	三四	一四	一三
工藝別科	一七九九	二七七	一九六

東京美術學校

九月二十三日第五十三回卒業式挙行、  
なお同二十二、四日の両日卒業製作展覧  
を行った。

日本面科	志願者	五八	入學者	二〇	卒業者	一七
油面科	一六八	三二	三二	二九		
彫刻科	四五	二一	二一	二二		
塑造部	一六	二一	二一	二二		
木彫部						

日本美術學校

三月二十三日（速修科）、九月四日（本  
科）、十二月五日（選科）卒業式挙行。

本	選	速	研	志願者	入學者	卒業者
科	科	科	科	一〇五	五八	三
修	科	科	科	三〇	一七	四
科	科	科	科	三五	一八	一九
二	二	二	二	二	二	二

昭和十九年度

催ス（ロ）公募美術展覧会ハ日本美術  
報國會ノ主催（共同主催ヲ含ム）スル  
モノノ外ハ当分ノ間之ヲ行ハザルモノ  
トス

（二）各種公私團體、会社ニテ公募ニ依  
ラザル美術展覧会ヲ開催セントスルト  
キハ情報局ノ承認ヲ經シム。  
（三）陸海軍病院、療養所、工場、事業  
場等ヘノ移動美術展覧会ハ日本美術報  
國會ヲシテ之ヲ行ハシム。  
（四）個人美術展覧会ハ其ノ内容ノ改善  
向上ヲ期シ日本美術報國會ヲシテ適宜  
之ヲ指導セシム

これによつて美術報國會の一元的な統制  
が強化されることになり、一般の公募展  
は事実上姿を消すこととなつた。

戦時特別美術展覧會の開催 文展に代  
る「戦時特別美術展覧會」はやはり九月  
二十八日次官會議で文部次官から報告さ  
れ、同日公表されたが、その要領は次の  
ようなもので、一切の運営には帝國藝術  
院が當ることとなつた。

△主催 文部省 協賛・情報局  
△会期 十一月二十五日から十二月十  
五日まで

△会場 東京都美術館  
△課題 （一）國体の精華、國土、國風  
を讃えるもの （二）戦争を主題とする  
もの （三）戦時國民の敢闘生活を描く  
もの （四）その他國民生活を明朗調達  
ならしめ戦意の昂揚に資するもの

△種目 第一部絵画（日本画）、第二  
部絵画（油絵、水彩画、パステル画、  
素描、創作版画）、第三部彫塑、第四  
部美術工藝

△出品資格 (一)帝國藝術院会員 (四〇名)、(二)帝國美術院展覧会、紀元二千六百年奉祝美術展覧会及び文部省美術展覧会に於いて委員又は審査員たりしもの (一八三名)、(三)右各條該当以外の無鑑査者 (七二七名) 及び昭和十二年以降の特選受賞者 (七四名)、合計一〇二四名、出品は一人一点

△特別出品 一般から廣く出品を認め陸海軍の作戦記録画及びその他の記録画の特別陳列をなす

以上のように公募によらぬ無鑑査展となつたが、課題が與えられ、この四目標に不適当と認められる作品は除外される。作品の大きさは従來の文展の規定に準ずるが、絵画では額縁共横五尺縦七尺と大きくなり、搬入は十一月十六日から十八日までと決定された。(展覧会の項参照)

# 教育

東京美術學校教授陣更迭 懸案となつていた東京美術學校の刷新は沢田源一校長が今般東亞同文会初代教育部長に就任のため、五月二十日附で退官したのを機に、永井清文部省専門教育局長が校長事務取扱となつて着手され、新校長として大阪市立美術館長上野直昭 (工藝技術講習所長兼務)、新教授として日本美術院の平櫛田中、小林古徑、安田靉彦、石井鶴三、一水会の安井曾太郎が六月一日附で発令され、同時に緒城素明、森井健介、多賀谷健吉、六角紫水、小林万香朝倉文夫、北村西望、和田三造、津田信夫が勇退した。更に六月五日附を以て富本憲吉、佐藤得三 (兼任)、二十三日附

梅原竜三郎、二十二日、二十七日附を以て助教山本丘人、田中青坪、講師奥村土牛、羽田弘志、村田泥牛、稻伊之助、久保守、助教菅原安男、笹村良紀が発令された。

高等工藝學校改稱 四月一日附を以て全國の高等工業學校は、工業專門學校と改稱することとなつた。東京・京都の兩高等工藝學校も工業專門學校と改稱、工業に關する學術を専らとする事になり、図案科その他の美術工藝關係方面の科の他科に轉換せられたものが多い。

美術關係諸學校入學及卒業 本年度における美術關係諸學校の入學及卒業者の人員其他は左の通りである。(學校別五十音順)

京都市立繪畫專門學校	九月二十五日第三十五回卒業式舉行。
日本面科	志願者 入學者 卒業者
圖案科	八四 四六 三七 二八
計	一三〇 四六 三七 二八
京都市立美術工藝學校	志願者 入學者 卒業者
工藝科	一三 一一 一一
繪畫科	五九 五九 五九
彫刻科	二五 二五 二五
漆工	二五 二五 二五
建築科	二九 五〇 七七 七三
計	二九 五〇 七七 七三
京都市工業專門學校	九月二十二日第四十一回卒業式舉行。
色染科	志願者 入學者 卒業者
	一一〇 三一 二六

紡織科	一一〇 三二 二四
建築科	二五七 三四 三二
窯業科	一七六 三二 三一
機械科	一〇七八 一五一 一〇七
化學工業科	二五六 三六 三〇
機械科	三一八 七九 三〇
計	二二〇五 三九五 二五〇

女子美術專門學校	九月二十八日第五十回卒業式舉行。
繪畫科	志願者 入學者 卒業者
	二二六 九〇 六七
計	二二六 九〇 六七

多摩帝國美術學校	九月二十四日第十回卒業式舉行。卒業者は七〇名、本年度入學志願者一二〇名、入學者は一〇〇名であつた。
東京工業專門學校	九月二十二日第二十一回卒業式舉行。
建築科	志願者 入學者 卒業者
	一二五 三三 二七
機械工業科	四〇五 五五 三〇
精密機械科	六七九 七九 七八
木材工業科	一四四 三三 二一
印刷工務科	五六 二二 二一
写真部	八九 一六 一六
第二工務部	五六三 一〇〇 一六
精密機械科	三三 一七 一三
木材工業科	二〇九四 三五六 二〇六
計	二〇九四 三五六 二〇六

東京美術學校	九月二十二日第五十四回卒業式舉行、同日卒業制作展覧会を非公開の裡に行つた。
日本面科	志願者 入學者 卒業者
	五三 二〇 一八
油面科	一六六 三〇 二七
彫刻科	二二 二〇 一二
塑造部	一四 二〇 一〇
木彫部	一四 二〇 一〇
工藝科	四〇 一三 一八
圖案部	四四 四五 五五
鍍金部	一一 四六 三五
鍍金部	九 七 六
漆工部	九 七 六
建築科	四七五 一四四 一二七
師範科	四七五 一四四 一二七
計	四七五 一四四 一二七

日本美術學校	一月二十九日 (速修科、九月九日) (本科) 卒業式舉行。
速修科	志願者 入學者 卒業者
	一四 八 一五
本科	一四 八 一五
選修科	一九 一一 二三
計	一九 一一 二三

昭和二十年年度 文展復活 終戦後の文化復興機運に應じて文部省でも昭和十八年以來休止してゐる文展復活の議が起り、九月十七日文部省で帝國藝術院会員の會議が開かれた。文部省側から前田文相、大村次官、朝比奈教學局長、大丸敦化課長など關係官が出席、藝術院側からは清水院長をはじめ、横山大観、和田英作、朝倉文夫、

板谷波山等約二十名が出席、昭和二十年度の終りまでに公募展を開催することに決した。会期を一ヶ月、應募点数は一人一点。名称を日本美術展覧会とするかどうかは未定であつた。

**文部省教員局教化課の設廢** 教員局文化課は七月十一日新に設けられた同局教化課に引継がれることとなり、大丸秀雄が教化課長に就任したが、終戦後の事態に應じて、九月五日教員局は廢せられ、再び社会教育局が設けられ、同局内に文化課を設けて引継ぐこととなつた。

**文化課長更迭** 教化課長から留任した大丸秀雄は十月十五日轉出、代つて寺中作雄が任命されたが、十一月二十六日再び更迭、新に今日出海が任命された。

**藝術課設置** 従來文展、藝術院、美術研究所等の事業は文化課の所管であつたが、これらの現代美術行政を純化するため、十二月三十一日新に社会教育局内に藝術課が設置された。初代の課長には前文化課長の今日出海が就き、古美術保存行政を主体とする文化課長には小林行雄が挙げられた。

## 教育

**京都市立繪圖專門學校校名變更** 京都市立繪圖專門學校は今回京都市立美術專門學校と校名を變更した。

**美術關係諸學校入學及卒業** 本年度における美術關係諸學校の入學及卒業者の人員その他は左の通りである。（學校別五十音順）

**京都市立美術專門學校**  
九月二十三日第三十六回卒業式舉行。

日本面科 志願者 入學者 卒業者  
圖案科 一三三 四一 二三  
計 一〇二 四一 一六  
二三五 八二 三九

### 京都市立美術工藝學校

志願者 入學者 卒業者

工 藝 科 二五 二〇  
繪 面 科 二二 二二  
圖 案 科 二二 二二  
彫 刻 科 五 五  
漆 工 科 三 三  
建築科 五五 一〇〇 四五

### 京都工業專門學校

九月二十二日第四十二回卒業式舉行。

志願組 入學者 卒業者

色 染 科 一五四 四二 二五  
紡 織 科 一一一 四二 二九  
建 築 科 一一二 四七 二六  
窯 業 科 一五二 四八 三一  
機 械 科 七四五 一六〇 一〇五  
化學工業科 二五五 四二 二七  
電 氣 科 一六二 四五 三一  
第二機械科 三一七 八六 三一  
第二工業科 一七八 四三 二七  
計 二二九六 五五五 二七四

**女子美術專門學校**  
三月十八日第五十一回卒業式舉行。九月二十日第五十二回卒業式舉行。なお九月二十日卒業製作展を開催した。

繪 面 科 志願者 入學者 卒業者  
計 三〇〇 一〇八 四〇  
三〇〇 一〇八 四〇

**多摩造形美術學校**

卒業者は八〇名、志願者一一〇名、入學者一〇〇名であつた。

### 東京工業專門學校

九月二十二日第二十二回卒業式舉行。

志願者 入學者 卒業者

建 築 科 一三一 四二 二五  
機 械 科 四九九 一五〇 一〇〇  
木材工業科 八五 四〇 一五  
印刷工業科 八〇 三〇 一六  
写真部 九二 四五 一三  
電氣通信科 一七〇 四八 一三  
第二機械科 五三六 一一〇 四七  
機 械 科 一五 一四 一七  
計 一六〇八 四七九 二二三

### 東京美術學校

三月二十三日第五十五回卒業式舉行。九月二十四日第五十六回卒業式舉行。

志願者 入學者 卒業者

日本面科 三七 二〇 九  
洋 面 科 一二六 三四 九  
彫 刻 科 一八 四 五  
塑 造 科 九 七 五  
木 彫 科 九 七 五  
工 藝 科 一五 一〇 二  
圖 案 科 六 四 二  
彫 金 部 六 四 二  
鍍 金 部 一五 九 二  
鑄 金 部 五 四 三  
漆 工 部 四二 一六 二  
建 築 科 三八 一九 二  
計 三〇七 一三一 三四



美術講演・講義

講演

昭和十八年度

三月

西洋美術史講座 毎土曜日 於學士會館  
外山卯三郎

一月

燧土社三月例會 三月五日 於野田九浦會堂

美術總話會例會 一月十九日、於日本工業俱樂部  
「室町時代に於ける支那關係の蒔絵」  
吉野 富男

二月

燧土社二月例會 二月十五日 於野田九浦會堂  
「日本上代藝術の基調」 田中 一松

美術總話會例會 二月十六日 於日本工業俱樂部  
「山東省曲阜縣魯城の考古學調査」  
原田 淑人

日本考古學會例會 二月二十日 於帝室博物館  
「山西省夏縣禹王城の遺蹟に就いて」  
和島 誠一

奈良博物館列品講座 二月二十日 於同館  
「日本繪畫の特徴」 小林太市郎  
「東印度文化の史的考察」  
板沢 武雄

慈惠臨大講演 二月二十六日 於同校  
「ゴッホの生涯」  
式場隆三郎

美術講演・講義 (昭和十八年度)

日本人類學會三月例會 三月二十日 矢嶋 恭介  
於東大理學部人類學教室  
「佛印の自然文化所見」 梅原 末治  
龍池會例會講演 三月二十七日 於根津美術館

「神僧墨蹟の鑑賞に就いて」 脇本樂之軒  
「飛鳥藝術の諸問題」 田中 一松  
古萩研究會 三月六日 於根津美術館  
日佛會館講座 三月九日 於同館  
「佛蘭西近代建築」 フロラン・ギラン  
大東亞學術協會第四回談話會 三月十三日 於東方文化研究所  
「佛印の考古學界と古蹟保存事業」  
梅原 末治

四月

東方文化學院第十六回講演會 四月十六日 於東大文學部第三十六番教室  
「漢鏡の銘文と図案」 駒井・和愛  
美術總話會例會 四月二十一日 於日本工業俱樂部  
「茶道工藝」 千 宗守  
第四十八回日本考古學會總會公開講演會 四月二十四日 於帝室博物館  
「北宋勝果寺の遺蹟について」  
原田 淑人

「法隆寺再建非再建の問題」 石田 茂作  
日本浮世繪協會第一回講演會 五月一日 於經濟俱樂部  
藤原 靜也  
樋口 弘  
建築學會大會學術講演 五月一日 於帝國鐵道協會  
「秀吉に依る伏見城造築に就いて」  
「伏見城に關する研究其の二」  
城戸 久  
「秀吉歿後に於ける伏見城改修破却に就いて」(伏見城に關する研究其の三)

五月

「日本住宅様式の基礎問題」 野間 清六  
「墳墓の造型美に就いて」 田山 信郎  
「御歴代宸翰の精華」 梅原 末治  
昭和十八年度日本諸學振興委員會學術學會研究發表 六月九、十、十一日 於文部省  
昭和三十八年度日本諸學振興委員會學術學會研究發表 六月九、十、十一日 於文部省

六月

東洋文庫春季東洋學講座 六月三、四、五日 於同文庫  
「考古學上より見たる北部佛印の古代文」 梅原 末治  
日本考古學會六月例會 六月五日 於帝室博物館  
「古墳に關する二、三の所見」  
梅原 末治

「遼代佛塔概説」 城戸 久  
「第百二十四回啓明會講演會」 五月一日 於日本工業俱樂部  
「印度支那文化の歴史的概観」 山本 達郎  
十市石谷園展觀講演 五月九日 於大東亞會館  
「石谷の面蹟に就いて」 脇本樂之軒  
大東亞學術協會印度研究會例會 五月六日 於東方文化研究所  
「モヘンジョ・ダロの古代文化」 竜山 章眞

「日本庭園鑑賞論斷想」 永見 健一  
「ハイデルリッヒ・シェリーマンの日本

來遊について

富永 惣一

「ミケルアンジェロのサン・ピエトロ寺に関する設計、そのプラマンテとの相違について」

相内武千雄

「歐洲中世藝術にあらわれたる『最後の審判』の図像」

吉川 逸治

「本邦絵巻物の起源に関する一考察」

米沢 嘉圃

「詩面軸に就て」

島田修二郎

「陶器の技術的研究試論」

鷹巢 豊治

「朝鮮塔婆の様式変遷に就いて」

高 裕 變

「日支兩國に於ける洋面の発達について」

岡村 千曳

「慶長以前琉球貿易船により支那及び南海諸島に齎らされたる日本美術に就いて」

鎌倉芳太郎

「大和絵と唐絵」

田中 一松

「仁王経曼荼羅に於ける不動明王」

佐和 隆研

藝術學會公開講演 六月十日 於共立講堂

「東亞共榮圈の藝術」 田中 豐藏

史迹と美術百五十號記念講演會 六月十三日 於宇治平等院淨土院

「鳳凰堂と藤原時代阿彌陀堂」

川勝政太郎

「定朝の造佛」 米山 徳馬

「淨土教の壁画」 下店 靜市

美術懇話會例會 六月十五日 日本工業俱樂部

「琉球の話」 柳 宗悅

慶大講演 六月二十四日 於 同校

「信仰と美」 柳 宗悅

第二百二十五回啓明會講演會 六月二十六日 於日本工業俱樂部

「遺跡より見たる緬甸安南の文化」

伊東 忠太

伊本利文化會館講演 六月三十日 於同館

「イタリヤ・ルネッサンスの彫刻に就いて」

富永 惣一

七月

日佛印文化交流會 七月三日 於日佛會館

「日佛文化交流について」

横山 正幸

黎明會美術研究會連續講座「構圖學要諦」内 七月四十八日 於久我山塾

「モチーフの変遷」 柳 亮

黎明會美術研究會講話 七月十一日 於久我山塾

「材料の美学」 岡 鹿之助

八月 黎明會八月講演會 八月第一、第三日 於久我山塾

「構圖學要諦」 柳 亮

「純日本美術地理」 田中 一松

九月 奈良帝國博物館列品講座 九月四日 於同館

「天平古写經と微定上人」

史學會講演 九月十八日 於東法文經一號館一番室

「鎌倉武士とその古文書」 相田 二郎

黎明會美術研究會講演 九月十九、二十日 於同會井ノ頭講堂

「近代モチーフと構圖理念の変遷」

柳 亮

東方文化學院第二十八回談話會 九月二十日 東方文化學院

「本邦絵巻物の起源に関する考察」

藤田 嗣治

美術懇話會例會 九月二十一日 於日本工業俱樂部

「東大寺佛部連弁に就いて」

米沢 嘉圃

東大寺千二百年記念講演會 十月一日 於羣衆會館

「萬葉集に現れたる天平文化」

武田 祐吉

「三國」の大伽藍創建に就いて

伊東 忠太

「東大寺と美術」 瀧 精一

黎明會十月講演會 十月第一、第三日 於久我山塾

「古典構圖の研究」 柳 亮

「北齊版畫及粉本の鑑賞と解説」

小石川松治

「純日本美術地理」 田中 一松

大阪市立美術館第四十回定例美術講演會 十月二十日 於清涼寺

「清涼寺の釈迦如來像及大覺寺模繪について」

望月 信成

日本考古學會十月例會 十月二十一日 於帝國博物館

「台灣出土の彩文土器について」

金岡 丈夫

日本人類學會十月例會 十月二十三日 於東大人類學教室

「我國上代に於ける銅及鉄文化の接點」

後藤 守一

美術懇話會例會 十月二十三日 於美術研究所

「截金に就いて」 田中 喜作

東方文化學院秋季講演會 十月二十、二十七、二十八日 於東大文学部三十六番教室

「日本建築に現れた支那建築裝飾手法」

飯田須賀斯

「滿洲文化の源流」 三上 次男

「南画と文人画」 吉沢 忠

十一月 國華社秋季展覽會講演會 十一月六日 於國華社

「快慶の作風に就いて」 田沢 坦

東方文化學院講演會 十一月十三日 於東方文化學院

「支那古代の錢鑑について」

加藤 繁

第二百二十六回啓明會講演會 十一月三十日 於日本工業俱樂部

「日本建築の新義と新分野」

伊東 忠太

日本人形作家聯盟第三回講演會 於松ヶ枝館

「和紙の使い方に就いて」

鹿兒島壽藏

「彫刻と人形に就いて」 石川 確治

黎明會十一月講演 十一月十四、二十

一、二十八日 於東京都美術館

「文展臨地講評」 柳 亮

「続ルネッサンス構図法」 柳 亮

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「続日本美術地理（中部日本）」 田中 一松

「日本の肖像画」 小林源太郎

日本考古學會二月例會 二月十一日

於帝室博物館

「木器を出土せる静岡市登呂の彌生式

遺蹟に就いて」 安本 博

美術懇話會例會 二月十五日 於日本

工業俱樂部

「能面の創作意図」 野上豊一郎

日本人類學會二月例會 二月二十六日

於東大理教人類學教室

「蒙古和林の遺跡」 駒井 和愛

三 月

美術懇話會例會 三月二十五日 於朝

倉形塾塾

「彫塑の技法に就いて」 朝倉 文夫

五 月

東方文化講座 五月十四、二十八日

於京都東方文化研究所

「支那藝術」 水野 清一

「支那文化の特質」 松本文三郎

六 月

奈良帝國博物館列品講座 六月十七日

於同館

「平城京の市——知恩院藏写経生日記

の紙背図について」 田村 吉永

七 月

京都林泉協會講演 七月二日 於京都

都ホテル

中尾篤太郎

重森 三玲

美術講演・講義（昭和十九年度）

美術講演・講義（昭和十九年度）

美術講演・講義（昭和十九年度）

美術講演・講義（昭和十九年度）

美術講演・講義（昭和十九年度）

美術講演・講義（昭和十九年度）

美術講演・講義（昭和十九年度）

美術講演・講義（昭和十九年度）

八 月

毎日新聞社主催、昭和十九年「夏奉宗

教講座」日本佛教美術史 八月一、五、

八、十二、十五、二十二、二十六日 於

大阪岡島會館

「總論」 源 豊宗

「飛鳥時代」 大口 理夫

「奈良時代」 望月 信成

「弘仁時代」 龜田 孜

「平安後期」 田中 一松

「鎌倉時代」 小林 剛

「室町時代」 土居 次義

「寺院建築」 岸 熊吉

根津美術館展覧講演 八月四日 於根

津美術館

「羅漢面に就いて」 大口 理夫

九 月

根津美術館講演會 九月三十日 於同

館

「信貴山縁起に就いて」 福井利吉郎

十一月

國華社講演會 十一月五日 於同社

「漢代の画進」 駒井 和愛

「日本画の歐洲進出と印象派」 小林太市郎

根津美術館講演會 十一月十八日 於

同館

「満蒙の遺蹟発見の陶片」 小山富士夫

十二月

根津美術館講演會 十二月二日 於根

津美術館

「垂迹面に就いて」 田中 一松

昭和二十年

美術懇話會例會 一月二十六日 於学

士會館

「法隆寺修理工事中に発見せられたる

新事実」 大岡 実

四 月

美術懇話會例會 四月二十四日 於團  
男爵邸  
「春日曼陀羅、特に鹿曼陀羅について」  
宮地 直一  
各大学美学美術史講座  
昭和十八年度  
〔官立〕  
東京帝國大學文學部  
美学概論 教授 大西 克礼  
藝術精神ノ研究 同 同  
美学演習 同 同  
近代音楽ノ主潮 講師 遠藤 宏  
文藝學ノ基本問題 同 竹内 敏雄  
美術史 教授 兒島喜久雄  
美術史研究法 同 同  
伊太利亞文藝復興期 同 同  
美術史演習 同 同  
日本美術史概説 助教 松本 栄一  
東洋美術史特殊研究 同 同





藝術精神ノ比較研究 同 同 講義 歐洲考古學書 講師 村田敦之亮

美學演習 同 同 講師 遠藤 宏

近代音樂ノ主潮 同 同 講師 竹内 敏雄

文藝學序說 同 同 講師 兒島喜久雄

美術史 同 同 講師 伊太利文藝復興期

西洋美術史概説 同 同 講師 同

美術史研究法演習 同 同 講師 同

日本美術史概説 同 同 講師 同

鎌倉美術ノ研究 同 同 講師 同

日本工藝史 同 同 講師 同

考古學 同 同 講師 同

宋元時代ノ文化 同 同 講師 同

考古學演習 同 同 講師 同

東亞金屬文化トソノ 同 同 講師 同

系統 同 同 講師 同

京都帝國大學文學部 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

普通講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

特殊講義 同 同 講師 同

（義） 坂崎 坦

工・藝史 今和次郎

美術史 森口 多里

美術史 川津 孝四

東京美術學校

東洋彫刻史 同 同 講師 同

東洋繪圖史 同 同 講師 同

東洋美術史 同 同 講師 同

美術解剖學 同 同 講師 同

東洋彫刻史 同 同 講師 同

西洋彫刻史 同 同 講師 同

西洋繪圖史 同 同 講師 同

日本美術史 同 同 講師 同

美術解剖學 同 同 講師 同

東洋彫刻史 同 同 講師 同

西洋彫刻史 同 同 講師 同

日本文藝史 同 同 講師 同

西洋工藝史 同 同 講師 同

日本美術史 同 同 講師 同

京都市立繪圖專門學校

文化史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

日本繪圖史 同 同 講師 同

文藝史 同 同 講師 同

美術解剖學 同 同 講師 同

昭和二十年度

（官立）

東京帝國大學文學部

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術史 同 同 講師 同

美術講演・講義（昭和二十年度）

西洋美術史

教授 兒島喜久雄

考古学概説

講師 鏡山 猛

日本美術史概説

講師 田沢 坦

考古学

〔私立〕

考古学概説

助教授 駒井 知愛

支那考古学

同 同

西南亞細亞考古学

講師 杉 勇

京都帝國大學文學部

美学美術史

同 同

普通講義 美学序論

教授 植田 壽藏

特殊講義 美学ノ諸問題

同 同

演習 藝術ノ諸問題

同 同

特殊講義 美学ノ諸問題

同 同

問題 彫像論

講師 上野 照夫

特殊講義 美学ノ諸問題

同 同

問題 彫像論

講師 上野 照夫

普通講義 考古学概説

教授 梅原 末治

特殊講義 東亞古墳

同 同

墓ノ研究

同 同

実習 考古学実習

教授 梅原 末治

特殊講義 エーゲ文

同 同

明ヨリギリシヤ文

同 同

明

講師 村田 敬之亮

東北帝國大學法文學部

同 同

記録焼失ノタメ不明

同 同

九州帝國大學法文學部

同 同

美学美術史

同 同

日本美術史ノ諸問題

同 同

東洋美術史

同 同

西洋美術史

同 同

考古学

同 同

教授 矢崎 美盛

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

講師 鏡山 猛

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同



昭和十八年度

奈良朝時代の園池發見 奈良縣生駒郡

大池は旧臘京都林泉協會の調査の結果、部族舟速額田部氏の園池遺構と判つた。

址で明治四十三年五月岐阜市保勝會が建設した模擬城である。

史蹟名勝天然紀念物調査會開催 二月二十三日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、「明治天皇及沼御小休所」「智積院庭園」はじめ史蹟九件、名勝三件、天然紀念物二十一件の指定を審議可決した。

重要美術品等調査委員會開催

一のものであり、我が國歴史のみならず奈良朝研究にとつても一つの基礎的資料を提供するものである。

國家保存會開催 一月十九日文部省に

天守」外十三件の建造物、岩崎男爵家藏周文筆「四季山水図」等十七件の絵画、陽明文庫藏「花面天皇宸翰御消息」等四十二件の文書典籍書蹟の合計七十二件の國宝指定を議決した。

羅漢寺炎上 大分縣耶馬溪羅漢寺は一

月三十日夜炎上した。寺宝燄浮壇金銀器像その他約十点は辛うじて搬出したが、山陽や月華和尚筆の書画骨董什器は悉く烏有に帰した。

二月

岐阜城全焼　岐阜市金華山頂の岐阜城は二月十七日同城より発火天守閣を全焼し、徳川時代の刀剣・兜・参考品等約百点を焼失した。尙この城は織田信長の城

古美術関係彙報（昭和十八年度）

山法華經寺は四月十一日夜出火、國宝である本堂・庫裡を焼失した。

月二十日附近の山林より出火全焼した。

白水堂の佛像盜難 福島縣白水堂の國

九日朝にかけて盗難にあつた。

五  
月

祝部土器を發掘 さきに古墳の発見さ  
れた奈良縣北葛城郡新庄町ではこのほど  
祝部土器數個を發掘したが、これは古墳  
の副葬品が移動して埋没していたものと  
しう。

六  
月

根津美術館の献納 東京青山の根津美  
術館では六月三日、佛像十六体、佛塔一  
基、燈籠一基を海軍省に、大梵鑑を陸軍  
省に献納した。佛像はいずれも青銅製五  
尺乃至七尺の大きさで、明末文化の粹を誇  
るものであり、鑑は直径一丈、一万二千  
貫という杉大なるものである。

吉野宮瀧で縄文土器發見 吉野川畔宮

土器・石器の類が発見された。土器は縄文式と彌生式であるが特に縄文土器の絞縁は榎原出土のものと酷似しており、奈良縣下に於ける宮瀧・榎原・唐古の三つの大きな縄文時代遺跡の一つの点として重視されるものである。

白山神社の國宝十一面觀音歸る 昭和

十一年二月盜難にかかつた京都宇治の白山神社國宝藤原末期の木彫十一面觀音立像はこのほど東京青山のさる古物商に買

いとられているのを発見、八年目に同神社に帰ることになった。

國宝保存會開催 六月二十二日文部省

に於て國宝保存會を開催、東京芝高輪の「旧備前池田侯江戸上屋敷表門」等二十二件の建造物、京都大徳寺藏「狩野探幽の筆模繪」八十四面の繪画一件、宮崎縣瓜生野村王樂寺藏「藥師如來及び両脇侍」等十五件の彫刻、日光輪王寺藏「金字阿彌陀經、法華經化城喻品」等四十九件の文書、典籍書蹟、東大寺藏「銅鉢、金銅鉢」等四件の工藝、合計九十一件を審議可決した。

與蹤名臨天然新急物訪交會開信 六月

天然紀念物八件の指定を審議可決した。

八月

藤原宮朝堂址發掘終了 藤原宮朝堂院址の発掘調査はこのほど十年継続工事という学界未曾有の事業に終止符を打ち、八月二十二日鴨公國民学校に於て終了報告祭を執行了。当日は十年間の出土品や写真の一部が陳列され貴重な資料となつた。

樂浪文化の發掘 朝鮮平壤府の行つた

樂浪郡址一帶に跨る樂浪遺跡公園建設事は多大の收穫を収めて八月二十六日一段落をつげた。出土瓦の中には樂浪時代特有的の模様のものが多く、「大晋元康、千秋万歳」の文字の瓦等があり從來不明であつたこの種の瓦の出所が明かにされ又建物の規模の宏壯な事等も判明した。更に樂浪祀官の文字入り瓦が出現した。

が、これは從來謎とされていた樂浪礼官の役所の位置を明示するものである。

**第一回宝來賞決定** 宝來市松により設定された東洋美術論文奨励賞の第一回は今回同論文審査委員会に於て詮衡の結果「國華」第六二一、六二三、六一五、六一七号に亘り掲載された小林太市郎の「平家納経考証」に決定した。

## 九月

**日佛印古美術品交換** 我が國と佛印との間に古美術交換の事が決定、日本より屏風・兜・鎧など二十三種(約四噸)がサイゴンに送られ、九月九日サイゴン博物館で芳沢大使、エツフェル交趾支那知事等関係官列席引渡式が行われた。

**三月堂本尊宝冠化佛遷る** 昭和十二年二月十二日盜難にあつた東大寺法華堂本尊不空羼索觀音像宝冠の化佛阿闍陀銀像は九月十五日宝冠の鑿玉と共に大阪方面に於て発見せられ盜難後七年にして還つた。

### 關西和林盛樂城址の發掘調査

東亞考古学会は蒙古自治政府と共同のもとに駒井和愛、和島誠一、島田正郎、三木文雄、小林知生に依り、關西和林盛樂城外土城址に於ける北魏盛樂城址の發掘調査を行つた。盛樂城は北魏が大同城に遷都以前蒙古の遊牧生活から始めて都制を敷き國家的体制を備えた始め四十年許りの都城の地で附近には漢代或は遼金時代の城址も重なつて遺存しその城址よりも各々貴重な発掘物を得るところがあり東亞考古学上に重要な調査を果した。

**重要美術品等調査委員會開催** 九月三

## 十月

十日文部省に於て重要美術品等調査委員會を開催、建造物九件、絵画二十六件、彫刻十八件、文書典籍書牘九十二件、刀劍二十一件、工芸及考古学資料四十八件合計二百十四件の重要美術品等認定の件を審議可決した。

**東大寺千二百年記念行事行わる** 天平十五年聖武天皇が奈良東大寺建立御発願になつてより本年は千二百年に當るので記念聖武天皇法諡法要が十月五日同寺大佛殿前に於て庭儀による舞樂法要を以つて嚴修され、又奈良博物館における寺宝陳列、記念講演会等が行われた。

**曲島舊城の再調査** 魯城は昨十七年秋東亞考古学会の手に依つて發掘調査され、本年も駒井和愛、和島誠一、島田正郎、三木文雄と北京大学助教姚曉臨に依頼して行われ一行は十月中旬曲島に入り昨年の發掘調査の成績を整理する一方、これに劣らぬ多大の收穫を得て完了した。

**法隆寺金堂保存に合成樹脂使用** 法隆寺金堂壁面の剝落止めと壁の硬化法中の剝落止めにつき、同寺國宝宝保存工事業部山本益芳は東京帝大助教櫻井高景指導の下に法隆寺金堂内一部壁、及び奈良縣生駒郡靈山寺の國宝五重塔内扇柱などの壁面について合成樹脂を用い実験の結果好成績を挙げた。

**三井寺前法院全焼** 大津市別所三井寺山内前法院は十月三十日夜出火全焼した。

## 十一月

**雲崗調査** 京都帝大考古学教室講師水野清一行の雲崗調査隊は昨年初夏以來雲崗石佛の調査に當り、各種の発見と精密な調査を遂げて完了十一月初旬帰任した。本調査は岡氏を首班とする調査隊に依る本年で六回目の調査である。

## 十二月

**法隆寺五重塔に新壁面発見** 目下解体修理工事中の法隆寺五重塔に於て新壁面が発見された。第一層内陣壁を剝落中に西側南隅長押上部の小壁の内部に金堂大壁面上部の小壁に見る山や松等と図柄の似た壁面が現われ更に下方の大壁の一部にも同様の痕跡が認められる。金堂壁面と同様の銅年間作と見られるもので、鎌倉時代や元祿時代の大修理の際内外より内塗りした爲今まで見られなかつたが幸にして密著不十分であつたので剝落出現することとなつたものと云われている。

**四天王寺式救世觀音発見** 四天王寺の救世觀音像は半伽思惟像として著名であるが今は失われて京都臨山寺の巨大な模像が知られていたが、今回赤松俊秀によつて貴重な模像が洛北三津院で発見された。高さ二尺二寸九分の小像で厨子に納められ型の如き半伽にして右手をあげ思惟の相を示している。寺傳では御所より下賜されたものと云われている。殊に注目すべきは胎内に鎌倉中期寛元四年十月二十日の紀年のある願文が納入されていることであり四天王寺研究に關する珍しい発見である。

**史蹟名勝天然紀念物調査會開催** 十二月十三日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、史蹟十四件、名勝三件天然紀念物十二件の指定を決定、天然紀念物一件の指定解除を可決した。

**聖德太子の番匠經印刻本の発見** 聖德太子が建築界に與えられた宝典「番匠經」の印刻写本が京都市文化課員朝田牧吉によつて京都府大原野村三鈴寺から発見された。同書は明和七年刻、日本建築の様式を始め間取、通風、採光、寒暖の工夫、耐震耐火などに関する我が國古代建築の秘法が詳かに説かれている。

## 昭和十九年度

### 一月

**古代民族の土器石器の発見** 一宮市長良町の佐藤宗男は一昨年十月勤勞奉仕で一宮市と愛知縣丹羽郡千秋村佐野の境界にある用水の掘鑿作業に出勤した折、地下四尺のところから先住民族が使用した縄文土器石器石斧等を発見、同君はその後約一カ年にわたつて同地附近を探究した結果、一月二日石斧三個、矢鏃四個、縄文式土器、彌生式土器数千個を発見、さらに附近の川底から親指大の沼鉄鏃多数を発見した。これは一名「高師小僧」ともいわれ、多量の鉄分を含有するもので葭や草の根本などに附近の鉄が付着し歲月を経るにしたがつて一個の鉄塊と化したものである。

**毘沙門天像二体新発見** 藤原期、鎌倉期の各一体の毘沙門天木像が鎌倉市外今

泉の部落鎮守社に於て、彫塑家齋田秀晃によつて発見された。一体は高さ六尺一寸、藤原時代の作で相模風土記に掲載されているものと見られ他の一体は高さ五尺三寸、鎌倉後期の作、写実的な名作で吉祥天女、禪貳子童子の脇侍まで完存しているものである。

## 二月

**国宝保存會開催** 二月二十八日国宝保存會では審議會を開き、東京都芝区白金今里町藤山愛一郎所有の「表門」「高松城」を始め、建造物十件を新たに国宝に指定した。

## 四月

**天平朝藥師如來石像発見** 四月二十四日長浜市八幡東町の天満宮境内にある藥師堂から天平時代と推定される高さ三尺、巾一尺八寸、厚さ一尺の角閃安山岩に筋彫りされた藥師如來像が西崎辰之助によつて発見された。さきに奈良地獄谷で筋彫の代表的石佛を発見したが滋賀縣で発見されたのは之が初めてである。

**遼陽漢墓の發掘調査** 満洲國政府の依頼により南滿洲遼陽に存する漢代壁画石室古墳の調査は原田淑人博士が主任となり昭和十六・十七の兩年度に亘つて發掘調査が行われたが本年度は三回目の調査の爲東大考古學教室講師駒井和愛、東方文化研究員島田正郎、人類學教室囑託和島誠一の三氏は、四月下旬東京を出発、現地に赴き多數の参加を得て發掘調査を行つた。

## 五月

**旅順山城の調査** 満日文化協會の依頼を受けて滿洲撫順の高勾麗城址の調査は既に昭和十五年來一部着手されていたところであるが本年五月上旬三次男等調査隊一行は、再度調査のため撫順に赴き調査を続行した。

**第二回宝來賞決定** 第二回宝來賞は今回銓衡委員會により「國華」誌上に掲載された小林太市郎の「山水屏風の研究」に決定した。

## 七月

**法輪寺の國宝三重塔に落雷** 七月二十一日奈良縣生駒郡富郷村大字三井眞言宗法輪寺境内の國宝三重塔に落雷があり、塔は焼失した。宝物は全部搬出した。同塔は法隆寺につぐ古塔で現存する最古の三重塔の遺構として珍重すべきものであった。

**國宝保存會開催** 七月十九日文部省に於て國宝保存會常務委員會を開催「國宝建造物及び宝物維持修理ノタメ國庫補助金交付ニ関スル件」及び「國宝建造物ノ現狀變更許可ニ関スル件」を審議可決した。

## 九月

**史蹟名勝天然紀念物調査會開催** 九月二十日文部省に於て史蹟名勝天然紀念物調査會を開催、「藤原宮址」「高山城址」等史蹟十九件を指定した。

**東照宮の國宝遷る** 去る昭和十六年五月盜難にあつた日光東照宮宝物館の刀劍

その他の國宝重要美術品等十余点は今回犯人の逮捕によりもとに還つた。

## 十一月

**國宝保存會開催** 十一月六日文部省に於て國宝保存會常務委員會を開催、「國宝建造物及び宝物維持修理ノタメ國庫補助金交付ニ関スル件」及び「國宝建造物ノ現狀變更許可ニ関スル件」を審議可決した。

## 昭和二十年

## 二月

**國宝保存會開催** 二月二十八日文部省に於て國宝保存會常務委員會を開催、「國宝建造物維持修理ノタメ國庫補助金交付ニ関スル件」及び「防空施設實施上國宝建造物法隆寺金堂ノ上層解体ニ関スル件」を審議可決した。

## 五月

**國宝保存會開催** 五月二十八日國宝保存會常務委員會開催予定であつたが開催不能のため書面により「法隆寺金堂下層解体に關する件」を審議した。

## 十一月

**桂離宮京都府へ下賜** 十一月十四日陛下には大宮御所において桂離宮を京都府へ下賜あらせられる旨御沙汰あらせられた。同離宮は世傳御料で宮中同様の特に大切な離宮である。

**國宝保存會開催** 十一月十五日文部省に於て國宝保存會常務委員會を開催、「國

宝建造物及び宝物維持修理のため國庫補助金交付に關する件」を審議した。

**國宝其の他美術品等のリスト提出指令** 十一月十七日連合軍總司令部は日本政府に対し、日本國民所有の美術品及び宗教記念物の完全なリストを提出するように指令した。これは日本の文化的、歴史的及び宗教的意義を有する総ての記念物を保護せんとするもので、國宝及びこれに準ずるもの、神社佛閣、國立公園、史蹟、天然紀念物、宮内省關係の施設、博物館などをはじめ、文書、圖書、標本、美術品のごときものすべてを含むものである。

## 十二月

**神宮造營中止** 陛下には十二月十二日幣原首相をお召しになり、伊勢神宮の御遷宮を延期し、目下施行中の御造營を中止するようにとの御言葉を賜わつた。



附國寶及重要美術品等罹災品目錄

國寶

繪畫之部

品目

所有者

被害程度

紙本墨面蓮花水禽圖(野々村宗達筆)

東京都

馬越恭一

燒失

絹本着色鸚鵡圖(雜華室印)ノ印アリ

同

同

同

絹本着色桃鳩圖(徽宗筆、大觀元年ノ年記アリ)

同

井上三郎

小破

紙本墨面葡萄圖(日觀筆、辛卯ノ自賛アリ)

同

同

同

絹本着色漁釣圖(徐祚筆)

同

同

中破

絹本着色阿陀彌三尊像

同

同

同

絹本着色孔雀明王像

同

同

同

絹本着色不動明王二童子像

同

同

小破

絹本着色在原業平像

同

同

同

紙本淡彩琴棋書圖

模貼付

八

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

山水圖

同

同

同

木造持國天立像

愛知縣

七

燒失

毘沙門天立像

同

同

同

木造舞樂面

同

同

同

木造毘沙門天立像

同

同

同

木造藥師如來立像

同

同

同

十二神將立像

同

同

同

遠玉神木造著色坐像

同

同

同

夫須美神木造著色坐像

同

同

同

奇御食神木造坐像

同

同

同

木造阿彌陀如來坐像

同

同

同

木造阿彌陀如來坐像

同

同

同

木造阿彌陀如來坐像

同

同

同

文書典籍之部

大分縣

富貴寺

大破

紙本墨書華嚴文義要決(卷第一)(紙背ニ東大寺諷誦文草本アリ)

東京都

佐藤達次郎

燒失

紙本墨書延喜式(卷第一、第二、第三、第四、第五、五卷)

同

同

同

紙本墨書大鏡殘卷

同

同

同

紙本墨書光明院宸翰

同

同

同

紙本墨書仁孝天皇宸翰

同

同

同

紙本墨書平家物語(長門本)(自一至廿)廿冊

同

同

同

紙本墨書懷古詩歌帖(短籍八十八葉內四枚補写)

同

同

同

刀劍之部

山口縣

赤間宮

同

薙刀直シ刀(銘來國次)

同

同

同

太刀(銘光世、拵糸卷太刀、徳川吉宗寄進)

同

同

同

附寄進目錄一通及太刀箱一箇

同

同

同

毛拔形太刀(山内一豊所用)

同

同

同

毛拔形太刀(山内忠義所用)

同

同

同

太刀(銘助一字不明、傳助平、拵糸卷太刀)

同

同

同

建造物之部

福岡縣

光雲神社

大破

名

同

同

同

仙

同

同

同

伊達

同

同

同

伊達

同

同

同

伊達

同

同

同

伊達

同

同

同

伊達

同

同

同

伊達

同

同

同

伊達

同

同

同

伊達

同

同

同

伊達

同

同

同

西宮神社	兵庫縣西宮市社家町	西宮神社	全燒	一部燒損
(本殿・大練堀)				
和歌山	和歌山市一番町和歌山公園地	和歌山市	全燒	
歌生院	和歌山市片岡町一丁目	松生院	同	
蓮昌院	岡山市東田町	蓮昌寺	同	
岡山城(天守・石山門)	岡山市山下一番地内	池田宜政	同	
廣島	廣島市基町一番地内	國	全壞	
福山城(天守・御湯殿)	廣島縣福山市三ノ丸町	國	全壞	
不動院	廣島市牛田町	不動院	中破	
永福寺	山口縣下関市觀音崎町	永福寺	全燒	
松山城	愛媛縣松山市堀ノ内町丸ノ内	松山市	全燒並に一部燒破	
(天神櫓他十棟、天守他四棟)				
東禪寺	愛媛縣今治市藏敷町	東禪寺	全燒	
宇和島城(追手門)	愛媛縣宇和島市丸ノ内	伊達宗彰	全燒	
高知城(追手門他八棟)	高知市丸ノ内	高知縣	中破	
岡崎	福岡市天神町	平岡浩	全燒	
福濟寺	長崎市下築後町	福濟寺	同	
崇福寺(大殿他二棟)	長崎市今籠町	崇福寺	中破	
大浦天主堂	長崎市南山手町	日本天主教	中破	
		長崎教區教師社團		
興福寺	長崎市寺町	興福寺	大破	
富貴寺	大分縣西國東郡田染大字路	富貴寺	大破	

品目	所	有者	被害程度
紙本墨書虎溪三笑圖(昭乘筆)	東京都	馬越恭一	燒失
絹本着色紫式部圖(尾形光琳筆)	同	同	同
紙本着色八橋圖(尾形乾山筆)	同	同	同
絹本着色鍾馗圖	同	井上三郎	小破
絹本着色釋迦文殊普賢圖(傳白思恭筆)三幅	同	同	大破
絹本着色雲門禪師圖(傳顏輝筆、雲庵ノ賛アリ)	同	同	中破
紙本着色遊魚圖(傳景初筆)	同	同	同
絹本着色源賴政像	同	同	小破
紙本着色蠶織圖(傳狩野元信筆)六曲屏	同	同	燒失

額面著色猿若狂言図(狩野宗信筆、寛文六

年八月ノ年記アリ)

東京都 森村市左衛門 焼失

紙本著色雪嶺齋図(還可筆)(足利晴氏ノ題字、

天文七年祖祥、昌忠、僧菊ノ賛アリ)

同 稻沢清起智 行方不明

絹本著色西湖図(池大雅筆)

同 同 同

紙本著色過去現在因果経(卷二)(建長六年ノ

本奥書及大正十三年智祥書寫ノ奥書アリ)

東京都 中沢 義一 焼失

絹本著色婦去來図(谷文晁筆)

同 室町 公藤 同

紙本墨面布袋図(仲安眞康筆)

神奈川縣 義 進 同

紙本著色三十六歌仙図(宗祐筆、歌元龜二年薨

雅筆)六曲屏

同 室 政次郎 同

紙本著色春秋遊樂図(菱川師宣筆)六曲屏

同 竹内 金平 同

筆山手録「客坐掌記」(天保三年ノ年記アリ)

福岡縣 高林 泰虎 同

筆山手録「壬午面稿」

同 同 同

紙本墨面山水図(岡田半江筆)(自賛及享和三

年ノ岡田米山人賛アリ)

同 同 同

絹本著色阿彌陀三尊來迎図

新潟縣 大原 藤松 同

紙本著色官女図(岩佐又兵衛筆)

同 同 同

板繪著色町家図(絵馬)(信武筆)(寛文二年

ノ年記アリ)

福井縣 氣比神宮 同

紙本墨面東雲飾雪図(浦上玉堂筆)

滋賀縣 紫田誓之助 同

紙本著色秋草図(松村景文筆)二幅

京都府 清海復三郎 同

絹本著色阿彌陀三尊來迎図

長崎縣 橋本辰二郎 同

絹本著色牡丹群鳥菊花群鳥図(岡山應泰筆)二幅

同 同 同

紙本著色山水花瓣扇面帖(惲南田筆、面六十四

葉、書四葉)六十八葉

同 同 同

絹本著色白雲泉図(沈周筆、成化辛丑九月ノ

年記アリ)

同 同 同

紙本墨面山水図(吳振筆、壬申秋月ノ年記アリ)

同 同 同

紙本墨面山水図(楊文聰筆、壬申九月ノ年記ア

リ)

同 同 同

絹本著色茶庭酒宴図(與謝蕪村筆、明和丙戌春

三月ノ年記アリ)六曲屏

同 同 同

紙本著色融通念佛緣起斷簡 六幀

同 同 同

アリ) 紙本著色兎道朝暾図(青木木米筆、甲申仲秋ノ

年記アリ)

長崎縣 橋本辰二郎 焼失

彫刻之部

木造四臂十一面觀音立像(厨子入)

同 橋本 行正 同

木造能面翁(白色)(裏ニ「正中二乙丑作之」

東京都 井上 三郎 同

「佐衛門尉」大和久氏ノ刻銘アリ)

木造能面三番聖

廣島縣 饒津神社 同

木造能面瘦女

同 同 同

文書典籍書蹟之部

紙本墨書家集斷簡(針切)(わすれしや)

東京都 馬越 恭一 同

紺紙金字大般若経卷四百三十

同 住友 寛一 同

紙本墨書明月記(嘉祿二年七月)

同 佐藤達次郎 同

紙本墨書伊勢物語(奥ニ應安四年三月二日ノ記

アリ)

同 同 同

紙本墨書麗花集斷簡(香紙切)(夏のひに)

同 同 同

紺紙銀字華嚴経断簡(二月堂焼經)

同 同 同

紙本墨書後柏原天皇宸翰御色紙(今ははや御名

アリ)

同 伊達 定宗 同

紙本墨書後陽成天皇宸翰御懷紙(詠月照菊花和

歌)

同 同 同

紙本墨書後水尾天皇宸翰御色紙(ゆめかさは)

同 同 同

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙(咲にけり)

同 同 同

紙本墨書延喜式卷第十残卷

同 武田 祐吉 同

紙本墨書後撰和譜集 二帖

同 同 同

紙本墨書万葉集抄出類聚 二冊

同 同 同

紙本墨書伊勢物語(泉州本)

同 同 同

紙本墨書古今集卷上(清輔本)

同 同 同

鐵牋墨書明成祖勅書(永樂六年十二月二十六日)

紙本墨書愚中周及法語

神奈川縣 浅野 長武 同

紙本墨書後撰集卷第七断簡(白河切)(あかか

らは)

同 同 同

紙本墨書本院侍從集、允乳母集、四條中納言集

紙本墨書老母経(天平十二年五月一日光明皇后

御歌経)

新潟縣 大原 藤松 同



紙本墨書金剛流誦本（天正三年九月宗所ノ奥書アリ）十六冊

紙本墨書伊勢集斷簡（石山切）（くもをを）

紙本墨書和漢朗詠集卷上斷簡（戊辰切）（秋興）

紙本墨書古今集卷第九斷簡（昭和切）（ふたみのうら）

紙本墨書伊勢集斷簡（石山切）（いさかたの）

紙本墨書安南國書（弘定拾貳年五月初臨日）

色紙墨書經色紙（しらなみの）

紙本墨書後選集卷第八斷簡（烏丸切）（てまかりかよふ）

伏見天皇宸翰御歌集斷簡（廣沢切）（嘉元二年秋のくれに）

紙本墨書後西天皇宸翰御懷紙（かた枝さす）

色紙墨書貫之集下斷簡（石山切）（はるあきに）

紙本墨書藤原俊成筆千載集卷第十六斷簡（日野切）（法性寺入道）

色紙墨書和漢朗詠集卷下斷簡（法輪寺切）（同李陵）

後西天皇宸翰御懷紙（詠名落葉和歌）

織田信長消息（八月十七日、村井長門守宛）

紙本墨書シーボルト処方箋（一千八百六十七年十月廿四日江戸赤羽トアリ）附同訳文

紙本墨書王義之尺牘（游目帖）

工藝之部

宮城縣牡鹿郡沼津貝塚並附近貝塚出土品

計三百九十箇ノ内四十四箇焼失

石器時代土偶（千葉縣印旛郡白井町大字江原出土）

石川縣 鎌道 文藝 焼失

岐阜縣 林 春吉 同

愛知縣 横井清三郎 同

同 同

三重縣 横山 守雄 同

桑名神社 同

中臣神社 同

伊藤 傳七 同

同 同

京都府 北村謹次郎 紛失

兵庫縣 牛尾 健治 焼失

同 牛尾 吉朗 同

同 同

岡山縣 牛尾 治朗 同

同 飯島 昇 同

同 飯島 幡司 同

同 北川 淺吉 同

岡山縣 赤沢 乾一 同

廣島縣 安達 政子 同

宮城縣 毛利総七郎 同

遠藤 源七 同

土 人面把手附土偶（長野縣上伊那郡宮田村宮田出土）

土 金銅製冠金具殘闕（傳群馬高崎市大字乗附出土）

土 銅製三神三獸鏡（傳群馬縣多野郡藤岡町附近出土）

銅製銀アィメ銀先（北海道後志國美國郡美國町大字小泊村出土）

綠釉巴瓦（平安京大内裏趾出土）

陶製瀬戸線彫蓮花文瓶子

樂燒赤茶碗（銘熟柿、道入作）

井戸茶碗（銘宗及）

銅鐘（享保十七歲十一月吉日鑄物師太田駿河守藤原正義ノ銘アリ）

岡山縣苦田郡鄉村大字下原觀音山古墳出土品ノ内、銅製四神四獸々帶鏡（天王日月）ノ銘アリ）銅製半円方形帶神獸鏡（吾作明寛云々ノ銘アリ）二面

土偶（神奈川縣横浜市神奈川区三ツ沢出土）

銅製鱗文鋪

磁製素三彩竜文花瓶（「大明万曆年製」ノ銘アリ）

蒔繪野辺孔雀圖黒棚

銅製海獸葡萄鏡

銅製雙鸞花枝入花鏡

銅製仙岳花枝入花鏡

銅製忍冬華文六獸鏡

銅製龜鈕孔雀雙鳳十二支鏡

陶製瀬戸印花水注

鐵造地藏菩薩立像（天文二十四乙卯年拾月八日ノ銘アリ）

東京府 杉山壽榮男 小破

同 同 中破

同 同 同

同 同 同

同 同 大破

同 同 小破

埼玉縣 同 同

同 同 同

東京府 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

新潟縣 同 同

同 同 同

石川縣 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

陶製燈籠(万延年射和万古窯製ノ銘アリ)

三重縣 川村 又助 大破

銅製神樂釜(天照皇大神宮天正九年五月吉日ノ刻銘アリ)

同 慶光院利彰 焼失

金銅製瑞花文磐

同 鈴木 敏雄 同

埴佛殘片(三重縣一志郡中川村天花寺趾出土)

同 同 同

三 面

同 同 同

紫漆繪竹枇杷文瓶子

同 同 同

硬玉 勾玉入、十字形玉 九箇

兵庫縣 塚本 新吉 同

鳥取縣東伯郡下北條村古墳出土品 二箇

鳥取縣 寧樂美術館 同

銅製神人画像鏡(岡山縣赤磐郡高月村米千駄古墳出土品)

岡山縣 鳥取縣 中破

備前燒甕(元龜四年二石入ノ銘アリ)

岡山縣 小野 馬吉 焼失

銅製獸帶磐竜鏡(傳岡山縣都窪郡三須村大字法蓮出土)

岡山縣 岡山縣 同

刀 劍 之 部

太刀(銘助眞)

同 國井伊三郎 同

刀(無銘、名物式部正宗)

青森縣 澁谷 文男 焼失

太刀(銘成高、附黑漆太刀持)

群馬縣 松平 直富 大破

太刀(銘國行)

青森縣 那須 資豊 焼失

太刀(銘成宗)

東京都 伊達 定宗 同

太刀(額銘、長義作「力股切」、莖先ニ備ノ字残ル)

同 同 同

刀(無銘、傳長光)

神奈川縣 大久保忠言 同

脇差(無銘、傳義弘)

同 淺野 長武 同

刀(無銘、傳志津、莖ニ靈刀不放身云々ト切付アリ)

同 同 同

太刀(銘備前國左兵衛尉□□「則次」曆應□年七月 日)

同 渡辺 三郎 同

小太刀(銘則房)

同 同 同

太刀(銘定利)

同 同 同

太刀(銘守弘)

同 同 同

太刀(銘包次)

同 同 同

太刀(銘行秀)

同 同 同

太刀(銘吉元)

同 同 同

太刀(來國光)

兵庫縣 中村 準策 同

短刀(銘信國、延文三年十二月 日)

岡山縣 小林 種次 焼失

刀(無銘、傳吉岡一文字)

同 杉野 市太 同

名稱 建造物之部

所有者

團伊能邸 東京都澁谷区原宿三丁目三四四

法泉寺 被害程度

生駒家廟 香川県高松市三番町

被害程度

史蹟名勝天然紀念物戰災一覽

名稱 所在地

被害程度

常磐公園 茨城縣水戸市上市

同 被害程度

向島百花園 東京都墨田区寺島町

同 被害程度

小石川後樂園 文京区小石川町

同 被害程度

六義園 文京区駒込上富士前町

同 被害程度

後樂園 岡山縣岡山市

同 被害程度

縮景園 廣島縣廣島市上流川町

同 被害程度

旧徳島城表御殿庭園 徳島縣徳島市

一部損傷

# 古美術展覽會

昭和十八年度

一月

れた御消息の如きは時局柄注目を惹く。  
東京美術研究所圖譜類展覧 三十一日  
大東亞會館  
名古屋・德川美術館陳列 一月—二月中  
名古屋・德川美術館

日本浮世繪代表名作展 七日—十五日  
名古屋・後藤版画店  
新國宝予定品展 二十七日—三十一日  
東京帝室博物館

東京—繪面では宋元の名画が多い。石野家の牧齋筆平沙落雁圖は足利將軍義満が愛玩していたもので、豊臣秀吉、上杉景勝、徳川秀忠等に傳えられた由緒がある。

又黒田侯爵家の維摩居士像は李竜珉筆と傳え世に有名なもの殊に鑑賞者の渴仰を匿やすものは浅野侯爵家の逸品が揃つて出ていることで、夏珪筆の竹林山水圖や小品ながら林檎花圖や雛雀圖が、如何にも大藩の什物らしい貫録を示している。

併し日本の繪の方でも亦劣らざ尤品が揃つていて、佛面では根津美術館の大威徳明王、岩崎男爵家の榮賀筆の不動明王があり、漢面系では松永家の宗湛筆と傳える山水圖、浅野侯爵家の良全筆白鷺図、梵芳筆蘭惠同芳圖があり、又雪舟が夏珪や李唐を模し然も雪舟の筆意を示している團扇形の夏冬山水牧牛圖等がある。

なお繪面の他文書典籍の類や建造物の写真の陳列もあり、中でも細川侯爵家の後深草天皇が蒙古の來襲を御宸念遊ばさ

古美術展覽會 (昭和十八年度)

二月

國威宣揚元寇展 十一日 大阪美術會館  
主催—大阪美術報國會 後援—大政翼賛會大阪支部  
長寛上人晚年名蹟展 十七日—二十日  
日本橋・高島屋  
古代染織工藝品展 二十三日—二十八日  
日本橋・高島屋

三月

恩賜京都博物館陳列 一日—三十一日  
同館  
恩賜京都博物館三月陳列の主なるものは左の通りであつた。  
繪面日本の部—四十九化佛彌陀來迎圖 (光明寺藏) 釋迦三尊十六羅漢像 (斑鳩寺藏) 二十五菩薩像 (禪林寺藏) 不動明王二童子像 (大林院藏) 六地藏菩薩像 (上品蓮台寺藏) 明惠上人念珠像 (高山寺藏) 眞濟僧正像 (神護寺藏) 遊行緣起 (眞光寺藏) —以上何れも國寶  
繪面支那の部—瀑布圖 (智積院藏、國寶) 律宗三祖像 (泉涌寺藏) 玄徳三願孔明乘車圖 (東海庵藏) 桃花孔雀楊柳白鶴圖 (高台寺藏)

常設古美術展覧 一日—三月中 大阪

市立美術館

時代古美術品陳列 五日—十日 日本橋・高島屋

佛印—贈る日本古美術内示展 十七日 東京帝室博物館

友邦佛印—贈るわが古美術約五十点の内示會は十七日帝室博物館に於て開催。主なものは同館秘藏の鎌倉時代の逸品阿彌陀如來像をはじめ、屏風、能面、太刀、振袖等である。

カトリック美術資料展 二十日 麹町上智大學  
龍池會展覧 二十七日 青山・根津美術館  
日本文化史料展 (第一回古建築) 二十八日 東京・日比谷圖書館

四月

恩賜京都博物館四月陳列 一日—三十日  
同館  
陳列の主なるものは牧溪筆大徳寺藏「觀音猿鶴圖」上品蓮台寺藏「因果經」四天王寺、西教寺藏「扇面寫經」觀喜光寺藏「一遍上人繪卷」神護寺藏「山水屏風」等、なお特別出陳の三井寺塔頭法明院の大雅、應舉の模繪は初めての公開、歴史部の主なるものは大福寺藏「方丈記」であつた。

第四回池長美術館展覧 四月—五月中  
神戶・同館  
陳列品は昔の國防、上方繪、長崎系洋風画。

印度古美術工藝陳列 一日—六日 日本橋・高島屋  
東洋名圖複製會 二日—六日 日本橋

高島屋

出品複製画は大塚巧藝社が製作したもので主な作品は左の通りであつた。

高野の赤不動 (高野山明王院藏) 徽宗の鶴 (浅野侯藏) 同桃鳩 (井上侯藏) 長谷雄草紙繪卷物一部 (細川侯藏) 夏冬山水 (帝室博物館藏) 菱田春草 落葉 古備前茶器鑑賞會 五日—七日 銀座資生堂  
瀬戸石皿特別展覧 十五日—三十日 大阪市立美術館  
大坂市立美術館  
日本考古學會展覧 二十五日 東京・内田孝藏邸  
内田孝藏氏所藏考古學資料四十余点を同氏邸に於て展覧した。

五月

第五回甲冑武具小展覧 一日—四日 東京・山上八郎邸  
白鶴美術館陳列 一日—二十日 倉敷同館  
陳列品は青磁、三島、唐津等の酒器類及び吳須赤絵の針類等であつた。

支那名圖展覧會 一日—二十日 大阪市立美術館  
今回阿部孝次郎氏より故阿部房次郎氏遺愛の支那面寛集全部の寄贈を受けたので、約六十点を記念展覧した。

池長美術館陳列 五月中 神戶・同館  
第五回陽明文庫春季展覧 二日—三日 虎ノ門・霞山會館  
十市石谷園展覧 九日 東京・大東亞會館 主催—東京美術學校  
瀬田神宮古繪圖其他資料展 十五日—二十四日 名古屋・德川美術館

一二三



美術類會春季特別展 二十二日

東京・反町茂作邸

反町茂作氏蒐集にかかる支那陶磁器並に現代洋画等の展覧をした。

古美術類展 二十九日—三十一日

虎ノ門・華族會館

日本世界文化復興會が南方文化建設の第一事業として古美術の複製を贈ることになった、その展示会で、正倉院御物、法隆寺壁面、二條城障壁面等が陳列された。

第四回根津美術館展 二十九日—六月一日 青山・同館

東京—まず絵画は九点で、鎌倉時代の大威徳明王（國宝）、普賢十羅刹女（重美）、熊野墨茶羅（重美）の如き佛画を始め、室町時代の水墨画として著名な而して骨董界の一大話題を生んだ蘇阿彌筆澁山水図が初めて公開され、江戸時代のものでは久閑守景筆舞樂図屏風が珍蹟である。

筆蹟類では元僧の竜巖徳眞がわが東福寺の僧一清に與えた墨蹟があり、恐らく斯界を驚嘆せしむる稀品であろう。

根津美術館の経巻と支那古銅器と茶器とは質量共に優れた世界的蒐集であるから毎回名品が出るが、今回も経巻四卷、周から戦國時代の銅器六點、名物の六祖茶入、井戸茶盤、中尾唐津、黄瀬戸獅子香爐、南蠻繩水指などがある。

其他、慶長裂と呼ばれて著名な桃山時幅が併せ陳列されているのは、彼我の關係の深いことを知らせる。

第十二室は室町時代の絵画であつて、雪舟、鑑貞、心叟、賢正、僊可、宋休、

代の染織品五点を始め蒔絵類、鏡、或は考古學的資料など何れも未発表のものばかりである。

六月

勸皇烈士遺芳展 二日—五日 大祀記

念京都美術館

勸皇烈士顯彰展 十七日—二十三日

日本橋・高島屋

滿洲國國寶再展 十五日—

東京帝室博物館

昨秋の展覽會に出陳された國宝のうち染織品の剝糸、刺繍等四十余點はその後損傷の箇所があるのをわが美術界の權威によつて修理を加えていたが、返送の運びとなつたので再び公開することになつたものである。

國宝特別展 二十七日—二十八日

東京帝室博物館

六月二十二日議決された新國宝予定品の一部四十五點を展覧した。主なものは金字阿彌陀經一卷（輪王寺藏）、伏見天皇宸翰御文一卷（黒川礼三郎氏藏）、鍍金錫杖一枝木瓜形四銀付（池田庄太郎氏藏）等であつた。

七月

東京帝室博物館陳列 七・八月中 同館

東京—緊迫する戦局に到頭博物館の陳列からも國宝や重要美術品が除かれるようになつた。

以前の豪華陳列を思うと寂寥を感じるが今は贅沢を望む時ではない。味わえば今の陳列でも味いは頗る深い。

絵画の初室は全部模本であるがその中には平素容易に拜観の出来ない御物の聖德太子像（奈良時代）や絵巻の藥師草紙、春日權現顯記（鎌倉）を初め、藥師寺の吉祥天、法隆寺の壁面、高野の來迎圖、益田の十一面觀音、禪林寺の山越阿彌陀、朝護孫子寺の信貴山緣起等実物ならは平時でも容易に一堂に揃えられない名画揃いである。

これらの模写は岡倉天心の唱道以來博物館が積年準備して置いたもので、觀山や大觀等若かりし日の作品も混じている。

次室からは眞蹟ばかりで室町時代は周文や雪舟等を中心とした漢画發展の迹が迎れる陳列であり、第三室目は江戸時代各派を示す陳列で一般人士に親し味のある作家のものが多く、中でも應譽吳春の山水屏風は日本情趣の深い代表的作品である。版画室は廣重の江戸名所百景の陳列で、僅か百年の間の江戸から東京への激しい変化が知られて興味を惹くことが深く、このように自分の住む土地の美しさをよく擲んだ廣重は又愛國の士であるといえる。最後は武者絵とか牧馬圖、鷹図等を集めている。（野間清六）

印度波斯細密圖展 十二日—十五日

銀座・資生堂

毎日—この展覧中には細密面の黄金時代の作品を見ることが出来なければならぬ。むしろメソポタミヤ十四世紀の作の如き稚拙なものに却つて上品なところがあり、好感がもてた。波斯十七世紀の『若人』と『相思の図』は共に佳品ではあるが、モゴール朝のミニアチュールの

ような莊重な趣を欠いている。これに反し墨絵『獅子図』（十五世紀）は密達な筆。大作はいづれもよい出来とはいへぬ。後期の印度作品は上手の部ではないが、唯二三枚印度手法独自の面白味をもつものがあつた。

八月

第三回朝鮮古陶展 四日—八日 岡山金剛莊

陶工米爾遺作展 三十一日—九月五日 京都・大丸

九月

東京帝室博物館陳列 九、十、十一月 同館

東京—空襲に對して文化財保護の立場から、國宝や重要美術品は今では姿を消したが、秋に入つて新に替えられた陳列には又仲々に貴重なものが多い。戦いつつも祖國の文化を回想するゆとりはあつてほしく、少しく陳列の目ぼしいものを紹介する。

絵画の第十一室は奈良から鎌倉への時代で全部模本であるが、今回ここに名のみは夙に高いが拜した人の渺い正倉院御物の鳥毛立女屏風がある。これはもと美しい鳥の毛を貼つたものの下図で、樹下に美人が或は立ち或は腰を下したもので、容姿豊麗、描技また流麗である。又平安時代の佛面としては長法寺の金棺出現圖の大作や醍醐寺の不動三尊、降三世明王像があり顯著二教の面趣を知らしめる。これらの日本のものに対し西域佛面七

周林、崇竺等の諸家の作がある。第十三室は江戸時代各派の狩野派、土佐派、南宗派、岡山四條派、琳派、初期洋風面派の諸作があり、就中狩野尚信、柴田義董の二屏風は近時入手のもので又代表的作品である。

尙注意すべきは第十八室の大嘗会屏風で、これは江戸時代のものであるが、永い襲続の形式を襲う宮廷絵画として注目すべきものであり、これ又世に初めて公開されるものである。(野間清六)

執金剛神像特別開扉 二十日 奈良東大寺法華堂

## 十月

佛教美術寫真展 五日—十五日 大阪阪急百貨店

大倉集古館秋季特別陳列 十日—二十日 赤坂・同館

主要陳列品は左の通りであつた。

國宝—古今集序一卷、隨身庭騎図巻一卷、廿六歌仙切(朝忠) 佐竹家傳來一幅、一字金輪像一幅

重要美術—五節句図(抱一筆)、貫之集下断簡(石山切)三葉、伊勢集断簡(石山切)六葉、徑山真景圖(雪舟筆)

鶴圖(光琳圖)六曲一雙、秋草詩餘香合一合、扇面散繪懸子一箇

山城物刀剣展 十五日—三十一日 恩賜京都博物館

龍村平藏織物美術研究展 二十五日—二十六日 虎ノ門・華族会館

東每一京の名工竜村平藏が約五十年にわたつて我が織物美術を研究し正倉院の御物は勿論、東大寺、法隆寺所傳の古代

古美術展覽會(昭和十九年度)

裂よりいやしくも名物裂として世に喧傳せらるるところのものは悉くとして、原品の色糸染法、織法をそのまま踏襲し、巧みな複製を試みているが、原色版などの複製により辛うじて御物その他の結構を学ぶに過ぎない大衆は氏の努力に接し初めてその眞價を知ることが出来た。しかし名品の現態複製するのよいが、同時に原作品の織られた時の複製も望ましくと思う。

共榮國染織工藝品展 二十日—二十四日 日本橋・高島屋

獨逸版圖展 二十一日—二十四日 九段・日独文化協會

渡邊華山・田中訥言遺作展 二十四日—三十日 名古屋・徳川美術館

勤王諸家墨蹟展 二十七日—三十日 日本橋・高島屋

## 十一月

恩賜京都博物館陳列 十一月中 同館

主なる陳列品は左の通りであつた。

國寶—大燈師墨蹟(大仙院藏)、火天像(西大寺藏) 俱含曼茶羅(東大寺) 黃不動尊像(曼殊院藏)、元信筆山水圖(金地院藏)、内膳筆豊國祭圖(豊國社神藏)

靈元天皇御宸翰(円通寺藏)、岡屋関白肖像下絵(高山寺藏)

重要美術—鹿調馬図(多賀神社藏) 白鶴美術館陳列 一日—二十日 倉敷同館

樂茶碗と形物香合、其他茶碗十九、香合十八が陳列された。

國華社展覧 六日 麻布・同社

主なる陳列品は左の通りであつた。

宋画四時山水面卷(守屋孝藏氏藏) 麓芳竹林図、勝以歌仙二図、竹翁觀馬図屏風(以上武内金平氏藏) 矢野吉重枯木鳩図(佐々木昌興氏藏) 李上佐雨中猛虎図(小倉武之助氏藏)

大藏會展覧 七日 澁谷・清和会館

東京大藏會は五島慶太氏所藏の經卷圖像六十余点を展覧した。

李王家美術館十周年記念特別展覧 七日—十六日 京城・同館

陳列品は京城府内在住名士所藏の「朝鮮茶碗」六十有余点であつた。朝鮮茶碗は茶道を通じて内鮮關係を物語る特異な存在であり當時から今日まで尊重愛好され、殊に茶道隆盛の現今であれば一般の見逃し難いものであつた。

東方文化學院展覧 十三日 大塚・同院

渡邊華山遺墨展 十四日 京都・梅谷文庫

山陽・竹田遺墨展 十七日—二十一日 日本橋・高島屋

第五回根津美術館展 二十四日—二十七日 青山・同館

東京—重要美術品を含めて五十二点、江戸時代の詩絵の精華、遠州所持の名物、明治時代の香合、殷墓から出土した器の類、漢代の漆器、その他墨書の貴重品も多い。その内重要美術品の主なるものを紹介する。

藤原定家家集抄(拾遺愚草を抄録せるものの一十一首を収む、前半六首は建保四年の百首和歌の中に、後半五首は貞永元年四月の関白左大臣家歌合に収めらる。)

一休宗順墨蹟(一休六十四歳の筆、大德寺を重寶せざる以前のもの)。

金剛界曼茶羅圖(金剛界曼茶羅九会の内中央の成身会のみを圖繪した大幅、鎌倉時代両界曼茶羅の中での秀逸作)。

羅漢圖(五代南唐の面僧禪月大師の筆と傳稱、宋末乃至元代の作)。

瓜虫図(呂敬甫の筆、明代初葉を下らざる頃の作と見らる。)

山水人物図屏風(長沢蘆雪筆、蘇東坡の赤壁の前後兩遊を図す。)

## 十二月

明時代支那磁器展 一日—五日 大阪阪急百貨店

維新勳皇短冊遺墨展 五日 京都・金閣寺

中華民國清近世書畫展 七日—十二日 日本橋・白木屋

## 昭和十九年度

## 一月

擇草舎第四回展(工) 二十三日 青山・同舍

湖南庵又平大津繪普及展 二十三日 京都・大丸

瀬戸名陶展 二十五日—三十日 大阪大丸

歌聲伎芝居繪展 二十六日 銀座・田屋

繪卷物展覧 二十六日 九大圖書館

帝大—九州帝大に於ては一通聖人繪卷をはじめ西行記、式部日記、源氏物語等の巻物の展覧を行つた。

古美術展覽會（昭和十九年度）

蒙古和林、大同出土遺物展 二十九日  
東大文学部

四月

甲斐南部氏勤皇史料展 九日—十一日  
横浜・大倉精神文化研究所

陽明文庫展示會 十日 同文庫

近衛家傳世襲藏の御歴代宸翰を展覧した。

癡草會展 十五日—十六日 京都・無鄰庵

各時代の版面展 二十五日—三十日  
大阪・大丸

古筆及裝飾經類參考資料展 三十日  
仙台・國際文化協會

五月

愚庵遺懷道品遺墨展 十八日—十九日  
京都・金閣寺方丈

近代皇親御短冊拜展 十八日—十九日  
京都・金閣寺書院

藥師寺・唐招提寺寫真展 二十二日—二十六日  
銀座・菊屋

六月

根津美術館日鮮支古窯陶磁展 三日  
青山・同館

菅公資料展 十七日 恩賜京都博物館  
天神画像展 二十五日 青山・根津美術館

七月

祇園會特別陳列 七月中 恩賜京都博物館  
七月十七日から行われる祇園會に因ん

で恩賜京都博物館では特別陳列として、

國宝祇園社古図一幅（八坂神社藏）國宝

祇園社務日記七冊（同前）祇園祭礼山鉾

巡行図三卷（吉田肇藏）祇園社大政所図

二曲半双（大和実藏）祇園会屏風（伊藤貞一藏）

祇園会屏風（京都山幡山町藏）

など祇園祭礼関係史料を展覧した。

葉隠繙巻展 十一日—十四日 銀座・菊屋

久米田寺藏佛画特別陳列 二十一日—八月二十日 恩賜京都博物館

八月

羅漢圖小展觀 四日 青山・根津美術館

九月

名僧遺墨展 二十日 京都・陽明文庫

朝鮮古陶展 二十二日—二十四日 岡山・金剛莊

十月

古備前焼展 三日—五日 岡山・金剛莊  
土佐將監光起筆大江山酒顯童子繪卷展  
鎌倉・國宝館



昭和十八年

繪圖

愛染明王像 同

狩野 尙

風 柴田 義

池  
中村  
不

二幅  
明  
時代

書 藏

熾仁親王筆短冊

二基

八枚

博物

瓷

圖  
皿

一四七点

一  
寸

五彩法花洗

三采陶硯  
青花盤

青瓷象嵌文扁

色繪椿文角瓶

香合

蓋 置  
染 寸  
寸 七  
七 瓦  
瓦 置

磁製置物

漆

ミヤンカバウ

紅繻子地扇面

茨城縣眞壁郡

玉 二九個及一括同

土器 一個 杉

知縣東春日井郡高藏寺町

アチエ小刀

野國分寺出土

二個	二個
同	同

鍍瓦一個同

野藥師寺出土

文字瓦 三個 同 同

文字瓦 七個 同

木縣下都賀郡岩船疊岡出

文字瓦 一個 同

一二七

一二七

[illegible]

東京帝國博物館

繪 画

複製不動明王二童子像 平安時代  
聖德太子繪傳

兩界曼荼羅圖 二幅  
鎌倉時代 川合 玉堂寄贈

釋迦三尊十羅刹女圖  
鎌倉時代 遠藤 久雄寄贈

愛染明王像 鎌倉時代 遠藤 久雄寄贈  
樓閣山水図屏風 池大雅 同

和歌三神図 三幅 住吉廣行 伊能寄贈  
樹下美人図 島田墨仙 同

島田墨仙下絵 同 節衣寄贈  
山鹿素行像 二枚

出山釋迦図 二枚  
世界三聖図 三枚

キリスト及弟子像 三枚  
孔子及弟子像 六枚

塙保己一像 二枚  
王政復古小御所會議之図

致城精途図大石良雄像  
大石主税刺鼠図 二枚

焦遂雄辨図  
吉祥天像

熊谷直実吉水の禪室に参す  
諸葛孔明

彫 刻  
ナীগ上の佛坐像 アンコール  
ナীগ上の佛坐像 アンコール・トム

佛 坐 像 同  
三 尊 佛 像 同

男 神 立 像 タケオ

博物館新収品 (昭和十九年度)

ヴィシヌ立像

ブラサット・オロク

造東寺司華嚴經写經料紙文書

白色小壺 佛印遠東学院交換品

觀音頭部

クム・クム・リエム

九條隆教自筆書狀

支那模樣付綠色小型土器 同

茶釉クルーク型土器 同

女身立像

ダムデック・ベン・

三條西実隆筆消息

茶釉小型土器 同

頸付茶色土器 同

佛像頭部

ヴィアン

銀製金工

頸付茶色土器 同

茶釉平型土器 同

ラクシャサ頭部

チャオ・スレー・ヴ

銀製煙草入

頸付茶色土器 同

茶色小型壺 同

獅子頭部

アンコール

ナীগ二個 佛印遠東学院交換品

頸付茶色土器 同

茶色小型壺 同

唐草模樣長押

ブラサット・ベンコ

カ 一 輪 同

色絵山水図棧花形台皿 山田 節子寄贈

青瓷黑花文瓶 同

八角柱

シエム・レアブ・ク

指 輪 同

白釉黑花文瓶 同

青花三彩水禽図缸 同

女像半身像

バケ・アンカン

腕 輪 同

白釉黑花文瓶 同

青花三彩水禽図缸 同

シヴァ半身像

ダムデック・ベン・

脚 付 壺 同

白釉黑花文瓶 同

青花三彩水禽図缸 同

棒トブサニ 二点

ヴィアン

石 灰 容 器 三個 同

菊唐草時絵香合 同

梅櫻時絵短冊箱 同

北第一塔上梓 二点

ブラバリレー

小 形 鐘 同

山鳥彫木合子 同

柳に水鳥螺鈿合子 同

九神像

ネアク・タ・コンス

色絵松竹梅文針

梨地桃に尾長鳥高時絵鞍並に鏡 八雲 琴

トルコ刺繍裂 同

上 梓

スラ・ラ・オ

茶褐色文様付土器

佛印遠東学院交換品

パールシヤ絹更紗裂 同

上 梓

アンコール・ワット

口付茶釉土器

同

カシミヤ織裂 同

佛坐像

バイ・ヨン

濃茶釉土器

同

バリイ島裂 同

女身立像

アンコール・ワット

茶釉土器

同

スマトラ・サロ裂 同

アプサラ浮彫断片

バイ・ヨン

蓋付黄釉土器

同

ジャバ更紗 同

獅子

テラス・プディタ

蓋付白色土器

同

オーベルカム更紗 同

ナীগ上ノガルグ

ス・エレファン

陶製棟瓦

同

印度縹緗裂 同

人物浮彫断片

バイ・ヨン

種形素焼棟瓦飾

同

白繻子地扇形模樣絞縫小袖 同

人物浮彫断片

バイ・メア・ナカス

三重型棟飾

同

納戸綸子地菊花紋斗模樣絞縫小袖 同

觀音立像

アンコール・トム

頸付茶釉土器

同

綸子地梅花龜丸模樣鹿子絞小袖 同

以上は佛印、遠東学院より交換品として受領したものである。

象首型土器断片

同

白釉小壺

同

書 蹟

同

同

同

同



考古

千葉縣姥山貝塚出土

甕形土器 一個 河原 経雄寄贈

千葉縣板倉沼出土

土器 五個 同

三重縣鈴鹿郡椿村大字一ノ宮字主原出土

石鏃 七個 大塚 要人寄贈

藤原京 鍍瓦 二二個 黒板 勝美寄贈

字瓦 一九同 同

面戸瓦 一同 同

甕斗瓦 二同 同

出所不明 甕鏡文鏡 團 伊能寄贈

銅鐸

昭和二十年度

東京帝國博物館

書蹟

教習勅語刻石

尺 壁 帖 森田 常作寄贈

陶 瓷 池田 成彬寄贈

鐵 釉 水 瓶 奥田 誠一寄贈

安南青瓷 孟 同

鐵繪花瓶 浜田庄司作 浜田 庄司寄贈

鐵釉浮文瓶 宮之原謙作

# 古美術保存

## 自昭和十八年度—至二十年度指定國寶(寶物類)目錄

### 栃木縣

文(一九、九、五) 金字阿彌陀經(料紙ニ金銀箔散シ及假名散シアリ)一卷

輪王寺

同( ) 法華經化城喻品(料紙ニ金銀箔散シ及草花文様アリ)一卷

同 寺

### 東京都

繪(一八、六、九) 紙本墨面平沙落雁圖(傳牧谿筆「道有」ノ印アリ)一幅

石野 力藏

同( ) 紙本淡彩四季山水圖六曲屏風(「越溪周文」ノ印アリ)一雙

男爵 岩崎小彌太

同( ) 絹本着色不動明王二童子像(詮磨榮賀筆)一幅

同 人

同( ) 絹本墨面維摩居士像 一幅

侯爵 黒田 長礼

同( ) 紙本墨面竹雀圖(「雜華室印」及「善阿」ノ印アリ)一幅

財團法人 根津美術館

同( ) 紙本淡彩山水圖(傳周文筆大岳周崇等十二僧ノ賛アリ)一幅

同 館

同( ) 絹本着色大威德明王像 一幅

同 館

同( ) 紙本淡彩山水圖(默雲滝沢ノ賛アリ)一幅

同 館

同( ) 紙本墨面竹林山水圖(「雜華室印」ノ印アリ)一幅

松永安左衛門

同( ) 絹本着色林檎花圖 一幅

侯爵 浅野 長武

古美術保存(昭和十八—二十年度)

文(一八、六、九) 一幅

財團法人 陽明文庫

紙本墨書知足院開白記(殷曆)(内二帖ニ文永四年近衛基平抄出ノ奥書アリ)二十二帖

同( )

同 庫

紙本墨書阿闍梨白記 七卷

同( )

同 庫

紙本墨書宮城圖(元應元年八月三日書写ノ奥書アリ)一卷

同( )

同 庫

紙本墨書尾張國解文(弘安四年八月五日書写ノ奥書アリ)一卷

同( )

井上 恒一

紙本墨書(井中辺論卷第一、第二將門記殘卷)(紙背)二卷

同( )

男爵 七條 憲三

紙本墨書是則集 一帖

同( )

男爵 岩崎小彌太

紙本墨書古今集藤原爲氏筆(文應元年七月五日藤原爲家ノ奥書アリ)一帖

同( )

財團法人 根津美術館

紙本墨書帝範上下 二卷

同( )

梅沢彦太郎

紙本墨書古今集 二條爲明筆(元享四年九月書写ノ奥書及二條爲世、同爲定、淨弁、慶運等傳授ノ奥書アリ)一帖

同( )

同 人

附 永正十六年牡丹花宵柏筆傳授 一通

文龜三年牡丹花宵柏筆覺書 一通

寬文四年鳥丸資慶筆上包紙 一枚

紙本墨書後深草天皇宸翰御消息(十二月十日)一幅

同( )

侯爵 細川 護立

紙本墨書周礼疏(單疏本)十五册

同( )

子爵 舟橋 清賢

紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集(五十六首)一卷

同( )

長尾 欽彌

紙本墨書三百六十番歌合(目錄ニ建永元年九月十三日書写ノ奥書アリ)六帖

同( )

同 人

紙本墨書元庵普寧墨蹟(與東麓慧安語)一帖

同( )

同 人

紙本墨書大休正念墨蹟(文永甲戌初夏)一幅

同( )

五島 慶太

紙本墨書新撰類林抄卷第四殘卷 一卷

同( )

中村登代子

紙本墨書花園天皇宸翰御消息(十二月二日)伯爵

同( )

松平 頼壽

紙本墨書藤原佐理筆詩懷紙 一幅

同( )

同 人

紙本墨書清拙正澄墨蹟 平心字号(嘉曆戊辰之秋)一幅

同( )

同 人

紙本墨書月江正印墨蹟 印可狀(泰定戊辰

同( )

同 人

仲春) 一幅

文(一九、九、五) 面因讀文 卷第廿六 一卷

同( ) 同 大般若經卷第二百六十七(神龜五年五月十五日長王願經) 一卷

同( ) 同 大般若經卷第五十七殘卷(天平十九年十一月八日唐僧善意願經) 一卷

同( ) 同 紺紙銀字華嚴經第廿六(二月堂燒經) 一卷

同( ) 同 順正理論第六殘卷(大同元年五月中旬書寫ノ奥書アリ「中臣之寺」ノ朱印アリ

同( ) 同 大乗掌珍論卷上殘卷(承和元年讀了、嘉祥二年勘了ノ白書アリ) 一卷

同( ) 同 日本書紀神代卷上下(嘉曆三年劍阿ノ奥書アリ) 四帖

同( ) 同 法華經卷第五(藤南家經) 一卷

同( ) 同 紺紙金銀交書法華經第二(中院通村ノ跋アリ) 一卷

同( ) 同 光嚴院宸翰御奉納心經(各卷ニ延元元年三月ノ御奥書アリ) 三卷

同( ) 同 法華經(各卷見返ニ繪アリ) 八卷

同( ) 同 伏見天皇宸翰御消息(九月廿六日) 一幅

同( ) 同 大般若經卷第二百五十七(池上内親王御願經) 一卷

同( ) 同 注大般若經卷第八一卷

同( ) 同 紙本墨書正親町天皇宸翰女房奉書(元龜二年十月) 一幅

同( ) 同 紙本墨書伏見天皇宸翰御消息 一幅

同( ) 同 紙本墨書後深草天皇宸翰御消息 一幅

同( ) 同 紙本墨書後小松天皇宸翰御消息 二幅

同( ) 同 紙本墨書宗峰妙超墨蹟 関山字号 一幅

同( ) 同 大德寺方丈障壁画 狩野探幽筆 八十四面

同( ) 同 (禪会圖ニ寛永十八年宗玩ノ記アリ)

伯爵 松平 頼壽  
侯爵 井上 三郎

根津美術館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

同 館

紙本墨面山水圖 四十八(裏門庵前室換貼付八、室中換貼付十六、上間二之之間換貼付十二、下間二之之間換貼付十二)  
紙本墨面禪會圖 六(雲門庵塔所壁貼付六、雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二)  
紙本墨面梅柳禽鳥圖 八(雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二、雲門庵內陣壁貼付二)  
紙本墨面猿虎圖 四(上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四)  
紙本墨面鷹圖 四(上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四)  
紙本墨面雁圖 四(上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四、上間一之之間換貼付四)  
紙本墨面山水圖 八面(知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四)  
紙本墨面鳳凰圖 一面(知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四)  
紙本墨面山水圖 一面(知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四)  
紙本墨面山水圖 一面(知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四)

附 紙本墨面山水圖 八面(知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四)  
紙本墨面山水圖 八面(知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四)  
紙本墨面山水圖 八面(知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四)  
紙本墨面山水圖 八面(知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四、知客寮換貼付四)

宗峰妙超墨蹟(投機偈 南浦紹明加印証話) 一幅

宗峰妙超墨蹟(遺偈 建武丁丑臘月日) 一幅

繞高僧傳卷第廿八(天平十二年五月一日光明皇后御願經「東大寺印」ノ朱印アリ)

華嚴經卷第八 一卷

大毗盧遮那成佛經卷第六 一卷

法華經(朱書ノ註記アリ) 八卷

金光明最勝王經註釋(明一撰) 十卷

紺紙金字後奈良天皇宸翰阿彌陀經 一卷

法華經玄贊卷第三(天平三年八月八日書寫の奥書アリ) 一卷

法華經玄贊卷第二、第七、第十三卷

大通方廣經卷下(天平三年十一月十六日ノ奥書アリ) 一卷

超日明三昧經卷上(天平十五年五月十一日光明皇后御願經 一卷)

中阿鉢經卷第廿九(天平宝字三年十月二日書寫ノ奥書アリ「善光」ノ朱印アリ) 一卷

菩薩地持論(各帖ニ延暦十六年六月十一日藤原經總誓願ノ記アリ)

海竜王經 四帖

註楞伽經卷第五 一卷

十地論歡喜地 卷三(奥ニ「支昨敬造」ト

同 院

同 院

同 院

同 院

同 院

大德寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺



アリ一帖

同(一九、九、五) 花園天皇宸翰御置文(貞和三年七月廿二日 関山上人宛)一幅

同( ) 花園天皇御証狀(玉鳳院事貞和三年七月廿九日)一幅

同( ) 花園天皇宸翰御消息(三月廿二日)一幅

同( ) 後奈良天皇宸翰御置文(弘治三年三月十二日)一幅

同( ) 後奈良天皇宸翰御置文(弘治三年八月九日 妙心寺方丈宛)一幅

同( ) 後西天皇宸翰御置文(萬治元年十二月十二日)一幅

同( ) 東山天皇宸翰御置文(寶永三年八月十二日)一幅

同( ) 光格天皇宸翰御置文(文化二年三月十二日)一幅

同( ) 孝明天皇宸翰御置文(安政二年三月十二日)一幅

同( ) 宗峰妙超墨蹟(授慧玄証狀元德二年仲夏上澄) 関山慧玄墨蹟(授宗弼証狀延文元年仲春日) 花園天皇宸翰御消息(此様申入院御方云云) 一幅

同( ) 後奈良天皇宸翰御消息(天文廿四年四月一日)一幅

同( ) 後奈良天皇宸翰御消息(四辻大納言宛)一幅

同( ) 孝明天皇宸翰御置文(嘉永元年七月三日)一幅

同( ) 法華經(色紙經)八卷

同( ) 文(一八、六、九) 紙本墨書漢書楊雄傳第五十七(天曆二年五月廿一日点了ノ奥書アリ)一卷

同( ) 紙本墨書文選集注(卷第四十八殘卷)一卷

同( ) 紙本墨書古文孝經殘卷一卷

同( ) 紙本墨書古文孝經殘卷一卷

同( ) 紙本墨書毛詩小雅殘卷一卷

同( ) 紙本墨書注千字文(弘安十年十二月書寫ノ奥書アリ)一卷

同(一八、六、九) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

同( ) 紙本墨書古今集 卷下(寂惠本)一卷

智恩院

妙心寺

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

同( )

紙本墨書和歌色葉集殘卷(卷子本ニ嘉禎四年九月七日書寫ノ奥書アリ)一帖一卷

紙本墨書伏見天皇宸翰御歌集(冬百首)一卷

木像藥師如來坐像 一軀

鉾金錫杖(木瓜形四鎖付)一技

伏見天皇宸翰御願文(正和五年十一月廿五日)

(料紙ニ金銀泥藤花文様アリ)一卷

紫紙金字金光明最勝王經分別三身品第三殘卷(永仁二年十一月十五日後宇多天皇宸翰御願經)一卷

五重塔北面安置)一軀

紙本墨書光嚴院宸翰御消息(一通)一卷

紙本墨書後村上天皇宸翰御消息(三通)一卷

紙本墨書孤峰覺明墨蹟(正平辛丑仲春日)一幅

木造十一面觀音立像(觀音堂安置)一軀

木造聖觀音立像(觀音堂安置)一軀

木造持國天立像 一軀

木造大日如來坐像 一軀

木造日光菩薩立像(所在本堂)二軀

木造月光菩薩立像(所在本堂)二軀

木造四天王立像(所在本堂)四軀

木造阿彌陀如來坐像 一軀

木造阿彌陀如來立像(本堂安置)二軀

木造阿彌陀如來坐像(護摩堂安置)一軀

銅鐘 一口

木造藥師如來及阿脇侍像(本堂安置)三軀

木造騎獅文殊菩薩及脇侍像(自國寶殿安置)

(文殊菩薩像ニ貞和四年八月日法眼康俊ノ

上野 精一

関口神社

池田庄太郎

同 人

黒川福三郎

山本免次郎

法隆寺

雲樹寺

同 寺

文載寺

同 寺

金本 耕三

竜藏寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 寺

同 ( ) 同

銘アリ) 五軀  
附木造天蓋一面

( ) 木造阿彌陀如來及兩脇侍像 (阿彌陀像内ニ  
寛喜四年二月 日大佛師僧聖賢ノ銘アリ)  
三軀

大光寺

万福寺

國寶(建造物)指定目錄

栃木縣

二荒山神社

(一九、九、五) 唐門 一間一戸平唐門、銅瓦葺

( ) 唐門及透塀 披門、棟門、銅瓦葺

( ) 鳥居 銅製明神鳥居 (柱ニ「寛政十一年」ノ刻  
銘アリ)

( ) 神橋 木造反橋、勾欄附 附下乘石

( ) 別宮瀧尾神社 三間社流造、銅瓦葺

附棟札 三枚「正徳三年九月吉日修營」ノ  
記アルモノ一、「元文五年五月十二日修營」ノ  
記アルモノ一、「安永八年十一月十四日修營」ノ  
記アルモノ一

( ) 別宮瀧尾神社唐門 一間一戸平唐門、銅瓦葺

( ) 附石玉垣、周長百九十五尺三寸

( ) 別宮瀧尾神社拜殿 桁行三間、梁間三間、單層、  
入母屋造、銅瓦葺

( ) 別宮瀧尾神社樓門 三間、一戸樓門、銅瓦葺

( ) 別宮瀧尾神社鳥居 各石造明神鳥居 三基  
附參道樓門ヨリ三本杉前ニ至ル

( ) 石橋及石柵、石柵折曲延長百十尺八寸、石橋ニ  
「奉寄進当上人教院院天祐延宝五丁己年八月吉  
日」刻名アリ

( ) 石燈籠 五基 各竿ニ「寛文四甲辰五月吉祥  
日」ノ刻名アルモノ二、竿ニ「享保十六年辛  
亥年十月」ノ刻名アルモノ一、竿ニ「宝曆癸  
酉年五月 日」ノ刻銘アルモノ一、無銘一

( ) 別宮本宮神社本殿 三間社流造、銅瓦葺

( ) 別宮本宮神社唐門及透塀

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

二荒山神社

( ) 中宮祠本殿 三間社流造、銅瓦葺

( ) 中宮祠拜殿 桁行五間、梁間四間、單層、入母  
屋造、銅瓦葺

( ) 中宮祠中門 一間一戸、切妻造、銅板葺

( ) 中宮祠披門 透塀

( ) 披門 一門一戸及妻造、猿頭附銅板葺

( ) 透塀 周長三十四間、猿頭附銅板葺

( ) 中宮祠鳥居 銅製明神鳥居 (柱ニ「寛政十一年  
己未九月」ノ刻銘アルモノ一、無銘一、  
附銅燈籠 二基 各竿ニ「元祿十二年七月四日」  
ノ刻銘アリ)

( ) 東照宮

(一九、九、五) 唐門 (背面) 一間一戸平唐門、銅瓦葺

( ) 透塀 一周延長八十七間、銅瓦葺、北面桁行十  
九間、梁間一間、土庇附屬ス

( ) 陽明門左右袖塀 各長二間、兩下造、銅瓦葺

( ) 御供廊 桁行八間、梁間一間、唐破風造、銅瓦葺

( ) 奧社石玉垣 周長百九十三尺

( ) 奧社銅神庫 桁行三間、梁間二間、單層、寄棟  
造、銅瓦葺

( ) 奧社鳥居 銅製明神鳥居

( ) 奧社石柵 宝塔、拜殿周圍、前壇三方

( ) 附石狛犬「秋元但馬守藤原泰朝朝臣」ノ刻銘ア  
ルモノ一、「松平右衛門大夫源正綱朝臣」ノ刻  
銘アルモノ一

( ) 假殿本殿 桁行三間、梁間三間、單層、入母屋  
造、銅瓦葺

( ) 假殿相之間 桁行二間、梁間一間、單層、兩下  
造、銅瓦葺

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

( ) 同

(同) 假殿拜殿 桁行五間、梁間二間、單層、入母屋

(同) 造、銅瓦葺、正面向拜三間

(同) 本殿、相之間、拜殿ヲ以テ權現造ヲナス

(同) 假殿唐門 四脚平唐門、銅瓦葺

(同) 假殿掖門及透塀 掖門 一間一戸平唐門、銅瓦

(同) 葺、透塀 一間延長四十九間、銅瓦葺

(同) 假殿鳥居 銅製明神鳥居

(同) 假殿鐘樓 桁行一間、梁間一間、單層、切妻造、

(同) 柿葺

(同) 附石燈籠 二基

(同) 御旅所本殿 桁行三間、梁間三間、單層、入母

(同) 屋造、正面、唐破風

(同) 附銅瓦葺、附石舞台、石敷幅十九尺五寸、長サ

(同) 二十一尺九寸 東遊再興記石碑 一基

(同) (宝永五年四月藤原保孝撰ノ刻銘アリ)

(同) 御旅所拜殿 桁行三間、左側一間通庇附梁間三

(同) 間、單層、入母屋造、庇繩破風附、銅瓦葺

(同) 御旅所神饌所 桁行七間、梁間三間、單層、入

(同) 母屋造、銅瓦葺

輪王寺

常行燈ニ接続、他端切妻造前後軒唐破風附、

銅瓦葺

(同) 慈眼堂廟塔石造五輪塔

附石櫓 二重、一重周長百九十四尺八寸、一

重折曲延長百七十九尺七寸 石像六天像 六

軀、石几 一具 (明曆二年十月二日)ノ刻

銘アリ) 石華瓶 一雙 (慶安元年孟夏二日)

ノ刻銘アリ)

(同) 慈眼堂拜殿 桁行五間、梁間三間、單層、入母

屋造、前後千鳥破風附、銅瓦葺、正面向拜一

間、唐破風造

(同) 附棟札 一枚 (慶安二年造替)ノ記アリ)

(同) 慈眼堂經藏 桁行三間、梁間二間、單層、寄棟

造、銅瓦葺、正面向拜一間

(同) 慈眼堂 鐘樓桁行一間、梁間一間、單層、切妻

造、銅瓦葺

(同) 附銅鐘 一口 (慶安元年戊子卯月二日)ノ刻

銘アリ)

(同) 慈眼堂阿彌陀堂 桁行一間、梁間一間、單層、

宝形造、銅瓦葺 (後壁ニ「正保、三年十月二

輪王寺

日晃海)ノ刻銘アリ

附石燈籠 十五基

各竿ニ「正保元年十月二日」ノ刻銘アルモノ

六

各竿ニ「正保二年十月二日」ノ刻銘アルモノ

五

各竿ニ「慶安元年卯月二日」ノ刻銘アルモノ

二 無銘

石造多宝塔 一基 (塔身ニ「僧大僧正晃海塔」

「慈眼大師一足金剛壽院」ノ刻銘アリ)

(同) 兒玉堂 一間社流造、銅板葺

附石燈籠 一基 (竿ニ「元和三年卯月十七日」

ノ刻銘アリ)

(同) 輪王寺大猷院靈廟

(同) 掖門 一間一戸平唐門、銅板葺

(同) 古美術保存 (昭和十八—二十年度)

一三五

輪王寺

輪王寺



(同) 御供所 桁行五間、梁間三間、入母屋造、銅瓦葺

(同) 御供所渡廊 折曲桁行八間、梁間一間、一端唐破風造、他端切妻造、桁行三間、梁間一間、兩下造、各銅瓦葺

(同) 西澤 桁行五間、梁間二間、單層、切妻造、妻入、銅瓦葺

群馬縣

(一八、六、九) 石塔婆 石造三重塔、延暦廿年七月十七日ノ刻銘

新里村

東京都

(一九、九、五) 表門 (旧備前池田侯江戸上屋敷表門) 兩階附長屋門、兩離香所附、入母屋造、本瓦葺、番所唐破風附

株式會社 三菱本社

神奈川縣

(一九、九、五) 書院 桁行南二十九尺六寸五分、北三十三尺一寸、梁間二十九尺四寸、單層、入母屋造、棧瓦葺、主室七疊床ノ間附、次室六疊、他六疊三室ヨリナル

男爵 三井 高公

滋賀縣

(一八、六、九) 大行事神社本殿 一間社流造、檜皮葺  
(一九、九、五) 日吉神社旧本殿 一間社流造、檜皮葺

大行事神社

京都府

二條城

(一九、九、五) 御殿玄關 西面九十尺二寸三分、南面四十五尺六寸、入母屋造、棧瓦葺、御車寄唐破風造、銅瓦葺、玄關之間、取次詰所、取次之間、竹之間二室、殿上之間、公卿之間、使者之間、御車寄、廊下縁等ヨリ成ル

京都市

(一九、九、五) 御殿御書院 南面六十一尺三寸五分、東面八十三尺八寸七分、入母屋造、棧瓦葺、御書院一之間、二之間、三之間、四季ノ間、(春之間、夏之間、秋之間、冬之間)、表御座所、雲鶴一之間、二之間、三之間、及縁座敷、廊下縁等ヨリ成ル

(一九、九、五) 御殿御常御殿西面四十五尺八寸八分、南面百四尺七寸八分、二階建、西面入母屋造、東面寄棟造、二階寄棟造、棧瓦葺、一階奥御座所(松鶴之間、四季花草之間、御寢之間(雉子之間、萩之間、御納戸、他三堂、縁座敷、縁等ヨリナル、中二階三室、二階三室、縁等ヨリナル

(同)

御殿台所及雁之間 南面六十八尺六寸九分、東面三十一尺八寸二分、切妻造、棧瓦葺、雁之間二室、台所、廊下等ヨリナル

(一九、九、五) 住宅

小川平太郎

主屋 二階建、總棧瓦葺、階下主室十五疊、八疊間之ニ附屬ス、北座敷六疊、二疊茶屋之ニ附屬ス、其他九室及玄關、佛間、浴室、台所、勝手等ヨリナル、階上八疊、六疊以下十三室ヨリナル  
土藏 桁行四十五尺四寸、梁間二十一尺六寸、二階建、切妻造、棧瓦葺  
土藏 桁行二十七尺、梁間十五尺、二階建、入母屋造、棧瓦葺

奈良縣

(一九、九、五) 東大寺二月堂 桁行十間、梁間七間、單層、寄棟造、本瓦葺

東大寺

(一八、六、九) 法隆寺西院大垣

法隆寺

南面 東大門東方長サ六百八十九尺五寸、西方長サ三百四十二尺六寸、築地塀、本瓦面  
東面 東大門南方長サ二百八十五尺、北方折曲延長二百九尺六寸、築地塀、本瓦面  
西面 西大門南方折曲延長二百三十五尺五寸、北方長サ二十尺九寸、築地塀、本瓦葺

(一八、六、九) 法隆寺東南隅子院築垣

西面 長サ二百七十一尺六寸、築地塀、本瓦葺、門二棟ヲ含ム  
北面 長サ六百七十一尺一寸、築地塀、本瓦葺、門五棟ヲ含ム

(一八、六、九) 法隆寺西院西南隅子院築壇  
(宝光院、彌勒院、実相院、普門院ニ亙ル)  
東面 上土門南方長サ百七尺三寸、門一棟ヲ  
舍ム、上土門唐門間長サ二十二尺一寸、唐  
門北方百二十三尺二寸、築地塀、本瓦葺  
北面 大湯屋表門東方長サ百七十三尺一寸、  
西方長サ百二十三尺二寸、築地塀、本瓦葺  
(地藏院、西園院ニ亙ル)

(一八、六、八) 法隆寺東院大垣

南面 南門東方長サ八十八尺四寸、西方長サ  
九十七尺九寸、築地塀、本瓦葺  
東面 長サ二百十八尺四寸、築地塀、穴門二  
ヶ所

(一八、六、九)

法隆寺藥師坊庫裡 母屋桁行五十九尺五寸、梁  
門二十六尺、八疊四室、六疊一室、四疊二室、  
緣、土間、勝手等ヨリ成ル、單層、東面切妻  
造、西面寄棟造、棧瓦葺

(一八、六、八)

法隆寺西園院唐門 一間一戸平唐門、檜皮葺  
法隆寺北室院大子殿 母屋桁行三十八尺三寸、  
梁間三十六尺六寸、中門廊長サ十六尺五寸、  
廣サ九尺八寸、單層、入母屋造、棧瓦葺、東  
面軒唐破風、檜皮葺

(同)

靈山寺鐘樓  
桁行一間、梁間一間母屋造、袴腰附、檜皮葺  
附銅鐘 一口

(一九、九、五)

五輪塔覆堂 方一間、宝形造、本瓦葺  
附 五輪塔「順慶陽舜房法師三十六歲千時入滅  
天正十二季甲申八月十一日」ノ刻銘アリ  
石燈籠 竿ニ「天正十三年乙酉八月十一日」  
ノ刻銘アリ

(同)

慈光院茶室及書院  
茶室 二疊大目 二疊次ノ間附  
中敷居裏ニ「宗閔居士御好因中國也不可爲

古美術保存 (昭和十八—二十年度)

紛失堅禁他便者也」ノ墨書アリ  
附 蹲踞

書院 主室十三疊床ノ間附、八疊一室、六疊  
二室、三疊二室、三疊、茶屋、玄關二ヶ所  
勝手、縁等ヨリ成ル  
附 手水鉢 三箇

(一八、六、八) 正蓮寺大日堂

桁行三間、梁間三間、單層、寄棟造、本瓦葺  
附 棟札 一枚 上棟小綱普賢 文明十年  
戌六月十二日ノ記アリ

正蓮寺

(一八、六、九)

明治三九、四、一四) 金峯山寺樓門 三間一戸樓門、入母屋造  
本瓦葺  
附 銅製風鐸 一箇 乳間ニ「金峯山二玉堂  
康正二丙子九月 日大勸進定善」舌ニ金峯  
山二玉堂大勸進定善大工下田住助次郎康正  
二年丙子九月廿日」ノ刻銘アリ

金峯山寺

### 和歌山縣

(一八、六、九)

宝來山神社本殿 四殿、各一間社、春日造、檜  
皮葺  
附 棟札 四枚 各慶長十九年申寅三月二十  
七日ノ記アリ

宝來山神社

(一九、九、五)

八幡神社本殿、三間社造、檜皮葺  
附 箱入棟札「元龜三壬申五月十二日二品親王  
任助」ノ記アリ

八幡神社

(同)

八幡神社拜殿 桁行五間、梁間四間、單層、入  
母屋造、本瓦葺

### 靈山寺

(同)

八幡神社攝社武内神社々殿 一間社流造、檜皮  
葺  
附 箱入棟札 一枚「元龜三壬申五月十二日二  
品親王任助」ノ記アリ

### 慈光院

(同)

八幡神社攝社王垂社々殿 一間社流造、檜皮葺  
(同) 八幡神社本殿、三間社流造、檜皮葺  
附 棟札 一枚 表ニ「永祿貳季戊戌未六月吉

日」ノ記、裏ニ「締始六月十一日假殿御立六月七日外遷宮六月九日柱立六月廿七日」ノ記アリ

( 同 ) 藥王寺本堂

桁行五間、單層、寄棟造、本瓦葺

附 文政修理棟札 二枚

一、「藥王寺觀音堂上棟具和三十亥正月六日

次修理寛政二年己年二月廿九日申酉廻入佛」

ノ記アルモノ

一、「次修理文政十丁亥三月吉良日」

ノ記アルモノ

香川縣

(一八、六、九) 丸龜城天守 三層天守、本瓦葺

丸龜市

昭和十八年度國寶建造物修理補助金交付額一覽

國寶保存法第十四條ニ依リ國寶建造物ノ維持修理ニ対シ補助金ヲ交付シタルモノハ左ノ通りデアル (◎印ハ從前ヨリノ継続工事デアルコトヲ示ス)

府縣名

建造物名

修理予算額

補助金額

備考

山形 立石寺中堂

八二、八八一

四、五〇〇

前年度着手

長野 新海三社神社本殿

一二、八六〇

六、五〇〇

前年度着手

岐阜 日吉神社塔婆

三二、二三三

一一、一〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 日吉神社塔婆

四七、八三〇

六、五六二

工事完了

滋賀 長壽寺本堂

一七、二〇〇

一、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 吉御子神社本殿

六、二〇〇

四、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

京都 竜光院本堂

二九、五九一

五、六〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 宇治上神社本殿他二

二一、九五四

四、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 金剛院塔婆

五五、六二四

二一、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 岩船寺三重塔

四八、九九二

四、五〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

奈良 四福寺本堂

三三、八六八

五、四二四

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 金峯山寺樓門

一五〇、〇〇〇

二〇、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 極樂院禪室

一八八、〇〇〇

一〇、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

藥王寺

同

法隆寺

一四〇、〇〇〇

一三〇、〇〇〇

宇源寺四脚門工事完了

五重塔、宗源寺四脚門、聖靈院伽藍保存施設金堂壁面保存

大阪

泉井上神社境内社五社總社本殿

一七、二七一

八、二〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

和歌山

八幡神社本殿(額淵)

二一、九一七

一五、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

昭和十八年度補助金計

計

二八四、八八六

昭和十九年度國寶建造物修理補助金交付額一覽

國寶保存法第十四條ニ依リ國寶建造物ノ維持修理ニ対シ補助金ヲ交付シタルモノハ左ノ通りデアル (◎印ハ從前ヨリノ継続工事デアルコトヲ示ス)

山形 立石寺中堂

八二、八八一

九、二七六

十七年度着手  
前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

京都 竜光院本堂

二九、五九一

一四、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 金剛院塔婆

五五、六二四

二一、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

奈良 極樂院禪室

一八八、〇〇〇

一〇、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 法隆寺

一三五、〇〇〇

一二五、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 金峯山寺樓内

一五〇、〇〇〇

二〇、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

石川 那谷寺本堂大悲閣他三棟

一一、三八七九

五、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

長野 淨光寺藥師堂

三一、八八四

二〇、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

滋賀 妙源寺柳堂

七、六六五

三、八〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

同 善水寺本堂

三〇、二六一

二〇、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

奈良 長谷寺本堂

一五〇、〇〇〇

五、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

三重 庫藏寺本堂

四七、七〇四

一四、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

滋賀 吉御子神社本殿

七、七〇〇

一、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

京都 竜光院書院及兜門

三四、五一四

七、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

大阪 交野天神社本殿及末社八幡社々殿

三〇、〇六〇

一四、〇〇〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

長野 新海三社神社東本殿

一五、三六〇

一、二五〇

前年度着手  
設計變更ニヨリ増額補助

昭和十九年度補助金計

計

二八八、三二六

昭和十九年度補助金計

計

二八八、三二六

昭和十九年度補助金計

計

二八八、三二六

昭和十九年度補助金計

計

二八八、三二六

昭和十九年度補助金計

計

二八八、三二六

昭和十九年度補助金計

計

二八八、三二六

昭和十九年度補助金計

計

二八八、三二六



# 昭和二十年度國寶建造物修理補助金交付額一覽

國寶保存法第十四條ニ依リ國寶建造物ノ維持修理ニ對シ補助金ヲ交付シタルモノハ左ノ通りデアル(◎印ハ從前ヨリ繼續補助ノモノデアルコトヲ示ス)

府縣名	建造物名	修理予算額	補助金額	備考
石川	那谷寺本堂大慈閣他	一一三、八九七◎	五、〇〇〇	前年度着手 十七年度着手設計 變更ニヨリ増額補助
岐阜	日吉神社塔婆	七七、五二六◎	二、三、九二四	前年度着手
三重	庫藏寺本堂	四七、七〇四◎	一六、〇〇〇	前年度着手
滋賀	善水寺本堂	三七、七六一◎	六、〇〇〇	前年度着手設計變更 ニヨリ増額補助
京都	竜光院書院及兜門	三四、五一四◎	一七、〇〇〇	前年度着手
奈良	極樂院禪室	一八八、〇〇〇◎	一五、〇〇〇	十八年度着手
同	金峯山寺樓門	一五〇、〇〇〇◎	一八、〇〇〇	十八年度着手
同	長谷寺本堂	一五〇、〇〇〇◎	五、〇〇〇	前年度着手
大阪	交野天神社本殿他	三〇、〇六〇◎	一〇、〇〇〇	前年度着手
奈良	法隆寺 五重塔、 聖靈院他	一三五、〇〇〇	一二五、〇〇〇	
滋賀	延曆寺 根本中堂、 延慶寺、 大講堂、 釈迦堂	一三六、八〇〇◎	一〇、〇〇〇	
奈良	法起寺三重塔	二、五〇〇	一、三〇〇	工事完了
和歌山	八幡神社本殿(新洲)	三二、一〇二	八、〇〇〇	十八年度着手 設計變更ニヨル増額補助
滋賀	白髮神社本殿	二〇、五六〇	七、〇〇〇	工事完了
同	日吉神社旧本殿(野洲)	七、八二九	五、八〇〇	工事完了
長野	淨光寺藥師堂	五五、二六一	一二、〇〇〇	前年度着手 設計變更ニヨル増額補助
奈良	極樂院 禪室	一八八、〇〇〇	一四、七八六	十八年度着手 本年度第二回補助

昭和二十年度補助金計三〇〇、五一〇

## 自昭和十八年度至二十年年度 認定重要美術品等目錄

文部省告示第七百五十四号 昭和十八年十月一日

古美術保存(昭和十八—二十年度)

昭和八年法律第四十三号(重要美術品等ノ保存ニ関スル件) 第二條ニ依リ左ノ物件ヲ認定ス

### 繪画之部

品目	所	所有者
紙本墨山水図(高先ノ賛アリ)	東京都	根津美術館
紙本著色物語図(岩佐勝以筆)	同	鎮目泰甫
紙本著色魔佛一如繪卷	同	内藤政光
紙本墨面商山探芝図(一菴ノ賛アリ)	同	小林茂
紙本探幽縮図(首ニ釈迦三尊図アリ)	同	八木岡茂
紙本墨面虎溪三笑図(仲安眞康筆)	同	高橋文太郎
紙本著色物語図(岩佐勝以筆)	同	神奈川縣 下村英時
紙本著色肖像面稿(渡辺華山筆、天保八年ノ年記アリ)	同	同
絹本著色愛染明王像(軸心木ニ嘉曆二年奉写云々ノ墨書アリ)	京都府	愛染院
紙本著色泉涌律寺図	同	泉涌寺
紙本墨面北野本地繪卷	大阪府	木村貞道
絹本著色熊野曼荼羅図	同	相馬伊右衛門
紙本著色東大寺大佛緣起繪卷(芝琳賢筆、天文五年ノ奥書アリ、同後奈良天皇宸翰外二筆) 三卷	奈良縣	東大寺
紙本著色當麻寺緣起繪卷(土佐光茂筆、享祿四年ノ奥書アリ、同後奈良天皇宸翰外八筆) 三卷	同	同
紙本著色豊干寒山拾得図(岩佐勝以筆)	鳥取縣	伊谷芳藏
彫刻之部	京都府	寶積寺
銅造菩薩立像	同	同
文書典籍書蹟之部	同	同
伏見天皇宸翰御歌集斷簡(廣沢切八首)(春川)	青森縣	石崎久治
後水尾天皇宸翰御消息(二月廿一日八條との宛)	秋田縣	大慈悲寺
後陽成天皇宸翰天神号(料紙ニ金泥繪アリ)	山形縣	大川学而
後柏原天皇宸翰詠助詠歌(朝陽不到)(料紙ニ金泥繪アリ)	群馬縣	妙安寺
後陽成天皇宸翰古歌御色紙(よのつねの)	同	同
靈元天皇宸翰御懷紙(詠松間紅葉和歌)	同	同
法華經卷第三(料紙ニ銀泥繪アリ)	東京都	松田福一郎
古今集(四季部並序ニ殘卷、料紙ニ下繪アリ)	同	住友寛一
拾遺抄殘卷(自卷第二至卷第六)	同	同
後水尾天皇宸翰古歌御色紙(ほしあへぬ)	同	味沢貞次郎

後西天皇宸翰古歌御懷紙 (橋立や)  
手鑑「筆陣」(四十四葉)

東京都 味沢貞次郎  
毛利元雄

中ニ後光嚴院宸翰(當事云々)後柏原天皇宸翰女房奉書(金銀泥料紙)、後水尾天皇宸翰御消息(六月廿四日)、傳公任筆中務集切(返、行返)、定家筆記錄切等アリ

同 細川護立

武家文書手鑑(建長四年七月十二日鎌倉幕府御教書以下七十四点)

同 同

後西天皇宸翰(香爐之銘)(かりにとて)  
靈元天皇宸翰御懷紙(詠寄民祝國和歌)

同 同

大休正念墨蹟(十二月九日、「普門院」ノ朱印アリ)  
無夢一清墨蹟(五絶)

同 同

愚極龍才墨蹟(總川新右衛門親當道号説)  
手鑑「筆陣」(第一帖九十六点、第二帥百二十三帖)二帖

同 同

著到御懷紙(四日 山路秋過)中ニ後柏原天皇宸翰アリ  
阿毗達磨俱舍論卷第三

同 同

大般若經卷第九十四(藥師寺經)  
阿毗達磨俱舍論卷第十(白点アリ)

同 同

華嚴經卷第五十四  
伊勢集斷簡(石切山)(なつむしの)(料紙ニ破継アリ)

同 同

伏見天皇宸翰拾遺集卷第二十殘卷  
万葉集卷第四斷簡(梅尾切)(湯原王亦贈歌一首波之家也思)

同 同

古今集卷十五斷簡(通切)(あまのかる)  
古今集卷十九斷簡(通切)(紀淑人)

同 同

三宝絵断簡(東大寺切)(いしも女人を)  
古今集卷第十七斷簡(民部切)(きよたきの)

同 同

万葉集卷第十二斷簡(尼崎切)(たひころも)  
後光嚴院宸翰御消息(首闕)(六月九日御名アリ)

同 同

古本説話集  
後陽成天皇宸翰「竜虎」

同 同

後水尾天皇宸翰古歌御色紙(かせ吹は)  
明正天皇宸翰古歌御懷紙(袖ふれは)

同 同

後西天皇宸翰古歌御色紙(天原)  
靈元天皇宸翰御消息(十九日御花押一乘院宮宛)

同 同

著到御懷紙(養、八日、中ニ御柏原天皇宸翰アリ)  
後陽成天皇宸翰御消息(三級宛御花押)

東京都 松平頼壽

後水尾天皇宸翰女房奉書(青山前中納言宛)  
後水尾天皇宸翰御加筆(松平頼重筆、竜雲山居偈)

同 同

後水尾天皇宸翰古歌御色紙(荒玉の)  
後西天皇宸翰御懷紙(詠新樹坊月和歌)

同 同

靈元天皇宸翰古歌御懷紙(みやまぢや)  
東山天皇宸翰御懷紙(詠鶴有遊和歌)

同 同

後陽成天皇宸翰赤人像御贊(林中花錦)  
手鑑「兎玉集」

同 同

中ニ法輪寺切(行宮)、梅尾切(同大鑊)、藍紙本万葉集切(渡守)、尼崎切(たちいする)、多賀切(不改)、天治本万葉切(波奈礼)等アリ

同 同

古今集卷第五斷簡(昭和切)(ふく風の)  
後西天皇宸翰道見親王御筆佐野渡國御贊(駒とめて)

同 同

道濟集斷簡(紙極切)(あきののを)  
正親町天皇宸翰御詠草(櫻花契久御名アリ)

同 同

伏見天皇宸翰御歌集斷簡(廣沢切)(嘉元二年秋のくれに)  
後水尾天皇宸翰古歌御懷紙(散花のわすれかたみの)

同 同

一休宗純墨蹟(絶詮字偈、康正元年小春日)  
南江宗侃墨蹟(康正二年丙子夏)

同 同

竜湫周沢墨蹟(至徳乙丑八月日定書)  
春屋妙葩墨蹟(嘉慶二年戊辰初夏五日讓狀)

同 同

後西天皇宸翰御消息(霜月廿日青門主宛)  
後土御門天皇宸翰御懷紙(詠庭上竹和歌)

同 同

後柏原天皇宸翰三十首和歌  
後柏原天皇宸翰繞三十首和歌(三條西実隆ノ合点アリ)

同 同

後柏原天皇宸翰御懷紙(朝雲雀、河苗代、嶺眺望、御名アリ)  
後奈良天皇宸翰御消息(正月廿六日御花押、本願寺僧

同 同

正御房宛)  
後奈良天皇宸翰御消息(わか上らふ宛御名アリ)

同 同

後奈良天皇宸翰御消息(今朝の雪云々青蓮院宛)  
後奈良天皇宸翰御消息(昨日は御物語云々青蓮院宛)

同 同

同 同

同 同





紺紙銀字華嚴經卷第三十二殘卷(二月堂焼經)	大阪府	湯淺守平	後柏原天皇宸翰御懷紙(春日詠庭上竹和歌、御名アリ)	大阪府	山本清雄
大般若經卷第一百七十七(藥師寺經)	同	同	後柏原天皇宸翰御集殘簡(夏十首、秋四首、各十一首)	同	同
後水尾天皇宸翰古歌御色紙(をのつから)	同	久保惣太郎	後柏原天皇宸翰御詠草(なかもれは)	同	同
大般若經卷第一百七十九(藥師寺經)	同	同	後柏原天皇宸翰御詠斷簡(花月一窓)(料紙ニ金銀泥繪アリ)	同	同
正親町天皇宸翰古歌御懷紙(よし野山)(料紙ニ金泥繪アリ)	同	弘川寺	後柏原天皇宸翰御詠斷簡(華陽洞裏)(料紙ニ金銀泥繪アリ)	同	同
後光嚴院宸翰御消息(先日面謁云々)	同	譽田神社	後奈良天皇宸翰御懷紙(秋日詠三首和歌、御名アリ)	同	同
紺紙金字法華經八卷(序品及方便品ノ首ニ補写アリ)	同	竹田儀一	(料紙ニ金泥繪アリ)	同	同
後奈良天皇宸翰御詠草(籬菊)	同	同	後奈良天皇宸翰御詩懷紙(春日賦鶯歌入芳春詩、御名アリ)	同	同
明惠上人筆護身法事殘卷(方便智院本)(紙背ニ嘉禎二年具注曆殘卷及樂抄アリ)	同	同	後奈良天皇宸翰御詩懷紙(九日賦簪頭菊花詩、御名アリ)	同	同
悉曇略記(中ニ永曆元年ノ記アリ)	同	同	後奈良天皇宸翰御詠草(霧中草花)(天文二十年霜月)	同	同
梵漢普賢菩薩行願讚	同	同	後奈良天皇宸翰御詠草(山霞)	同	同
後柏原天皇宸翰御歌卷斷簡(なかのみ)(料紙ニ金銀泥繪アリ)	同	柏原仁兵衛	後奈良天皇宸翰古歌御色紙(しろたへに)	同	同
和漢朗詠集卷上斷簡(伊予切)(落花)	同	田中太一	後奈良天皇宸翰御色紙(立かへり)(料紙ニ金銀泥繪アリ)	同	同
古今集卷第四斷簡(昭和切)(首ニ古今和歌集卷第四トアリ)	同	同	後奈良天皇宸翰詩歌御色紙(林間蹤有残花在、花にたに)	同	同
古今集卷第四斷簡(昭和切)(ともにまかりてよめるきのつらゆき)	同	同	二枚	同	同
古今集卷第四斷簡(昭和切)(いろとるきらも)	同	南良三	後奈良天皇宸翰詩歌殘簡(平原露重)	同	同
櫻町天皇宸翰御短冊(かへりきて)三種	同	松下幸之助	正親町天皇宸翰御懷紙(詠竹不改色和歌)	同	同
飛鳥井雅重詠草御加筆(色もなき)	同	同	正親町天皇宸翰御懷紙(詠菊伴仙齡和歌)	同	同
古今集卷第二斷簡(昭和切)(のはなのちるをよめる)	同	丹羽昇	正親町天皇宸翰御詠草(梅か香や)	同	同
後西天皇宸翰御懷紙(詠夕落葉和歌)	同	同	名院合点)	同	同
根本説一切有部毗奈耶雜事卷第廿(天平十二年五月一日光明皇后御願經「東大寺印」ノ朱印アリ)	同	吉井良尚	正親町天皇宸翰御日課御詠草(五月廿四日後車懸)	同	同
伏見天皇宸翰御歌集斷簡(廣沢切三首)(秋袖)	同	山本清雄	後陽成天皇宸翰御消息(三月十四日御名聖護院宛)	同	同
伏見天皇宸翰拾遺倭歌集卷第十二斷簡(巻頭)	同	同	後陽成天皇宸翰御消息(即廻、御花押)	同	同
伏見天皇宸翰歌合御判詞	同	同	後陽成天皇宸翰御消息(神無月十日)	同	同
後光嚴院宸翰御消息(八月十日)	同	同	後陽成天皇宸翰御色紙(翠のねも)(料紙ニ金銀泥繪アリ)	同	同
後花園天皇宸翰御賀札(尾闕)(まことに青春の吉兆)	同	同	後陽成天皇宸翰御色紙(秋の夜の)(料紙ニ金銀泥繪アリ)	同	同
後花園天皇宸翰女房奉書(たかむくの事)	同	同	御陽成天皇宸翰古歌御色紙(ふるさとの)(料紙ニ金銀泥繪アリ)	同	同
後土御門天皇宸翰御詠草(更衣以下三首)	同	同	後陽成天皇宸翰古歌御色紙(諸共に)	同	同
後土御門天皇宸翰御詠草(須磨の海士の)	同	同	後陽成天皇宸翰詩歌御色紙(砂頭雨草、かの岡に)二幅	同	同



アリ)

後水尾天皇宸翰御懷紙(幡枝といふことを)

紺紙金字陀羅尼門諸部要目(神護寺経)

柿本社御法樂御短冊 六綴

一 享保八年三月十八日御法樂 五十葉(中ニ靈元

上皇宸翰一葉アリ)

一 延享元年八月廿八日御法樂 五十葉(中ニ櫻町

天皇宸翰一葉アリ)

一 宝曆十年五月十八日御法樂 五十葉(中ニ桃園

天皇宸翰三葉アリ)

一 明和四年五月十八日御法樂 五十葉(中ニ後櫻

町天皇宸翰五葉アリ)

一 寛政十年三月三十日御法樂 五十葉(中ニ光格

天皇宸翰三葉、後櫻町上皇宸翰三葉アリ)

一 天保十四年六月十一日御法樂 五十葉(中ニ仁

孝天皇宸翰三葉アリ)

後西天皇宸翰御懷紙(詠春動物和歌)

大般若経卷第四十二(藥師寺経)

刀 劍 之 部

刀(銘井上真改、延宝四年二月 日)

太刀(銘吉家作)

刀(貼銘國俊)

太刀(銘備州長船元重 元應二年 月 日)

工藝品及考古學資料之部

銅鐘(寛延四年五月十七日 銘並ニ文化丙寅臘月十三

日ノ銘アリ)

銅鐘(大檀那藤原朝臣信照正保四年三月二十七日鑄師

早山豊後守ノ銘アリ)

銅鐘(大檀那源忠弘元祿四歲四月十九日治工太田権兵

衛重久ノ銘アリ)

銅鐘(興仁寺鐘大檀越前中村城主平昌胤治工大和田直

左衛門高重ノ銘アリ)

蒔絵物かは歌繪伽羅宮

陶製黒花牡丹文梅鉢

青白磁透蓋蓋爐(加彩「壽福山海」ノ文字アリ)

同

同

和歌山縣 田 原 穰

同 桑 原 ツ ネ

島根縣 柿 本 神 社

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

建禮 天目茶碗

金銅五銖鈴

磁製青華花弁圖大皿

黃瀬戸猿鉗蓋付香爐

蒔絵菊圖硯宮

銅鐘(元祿庚辰年三月五日及寛保二年七月吉日ノ旧銘

並ニ明和四年十一月十二日武州府中谷保住治工関孫

兵衛藤原種久ノ銘アリ)附鐘賣渡証文(昭和四年十

一月鑄物師孫兵衛)一通

雙鸞宝相華八花鏡

鸚鵡宝相華八花鏡

狻猊十二支鏡

銅鐘(天保十歲季夏摩訶吉祥日鑄師西村和泉守藤原政

時ノ銘アリ)

銅鐘(應安三季六月初一鑄成大工御釜屋堀山城守藤原

清光ノ銘アリ)

銅鐘(明曆三年九月十八日治工京三條大西五郎左衛門

尉藤原村長ノ銘アリ)

磁製金欄手牡丹文仙蓋瓶

銅鐘(元祿九年四月穀旦鉄牛誌旧銘並ニ安永三年六月

吉辰御鑄物師田中丹波守藤原重行ノ銘アリ)

銅鐘(寛永二十歲九月十三日大工山城住飯田善兵衛宗

次ノ銘アリ)

銅鐘(延宝九天霜月吉日鑄物御大工椎名伊予守良寛ノ

銘アリ)

銅鐘(延宝七年七月八日治工近江大掾藤原正次ノ銘アリ)

蒔絵桐竹鳳凰圖文台及硯宮

銅鐘(寛延二年六月吉日御鑄物師西村和泉守藤原政時

ノ銘アリ)

銅鐘(元祿二年十月二十八日淨嚴書ノ旧銘並ニ享和二

幕秋廿七日粉川市正藤原國信ノ銘アリ)

銅鐘(元祿二曆十二月十二日御鑄物師長谷川伊勢大掾

藤原國永ノ銘アリ)

銅鐘(文政九年季秋源定信書天保九年九月廿五日功畢

勅許御鑄師大久保住歌代佐兵衛藤原金繁小態

同

同

東京都 井上 恒一

同 松田 福一郎

同 根津 美術館

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



武左衛門藤原宗苗歌代喜右衛門藤原法好原孫左衛門藤原包近ノ銘アリ

金銅聖觀音像御正鉢(裏板ニ文永六年七月二十三日ノ墨書アリ)

銅鐘(寛永九年十月十五日ノ旧銘並ニ寛文七年九月十一日大工伊藤又兵衛金正ノ銘アリ)

金銅五鈎杵(信濃國善光寺境内出土)

龍口釜(環付猿)

松梅文龍口釜(環付遠山)

菊花文平釜(鑿取手)

蒔繪鹿秋草図硯箱

銅製水盤(文久元年十一月水舟水吐大工岡崎住廿五代安藤金右衛門宗賢ノ銘アリ)

鳥形鈕蓋付高脚罌(名古屋市昭和区師長町出土)

香爐釜(環付鈕鼓耳)(伊勢山田常明寺香爐永正三年八月日大工葦屋行信ノ銘アリ)

蒔繪螺鈿桃花図面盆

金銅獨鈎杵

金銅三鈎鈴

金銅香水杓

刺繡阿彌陀三尊種子懸幅

銅鐘(應永二曆八月十二日大工伴左衛門正光ノ銘並ニ口興梵光寺永享七年六月廿九日大工左衛門藤吉ノ追銘アリ)

内行花文鏡(伊勢國飯南郡神戸村出土)

螺鈿平文葡萄栗鼠文鞍

新湯縣 開光寺

福井縣 窪田喜三郎

長野縣 善光寺大勸進

岐阜縣 岡本壽太郎

同 同

同 永田 尙

愛知縣 福生院

同 小栗鉄次郎

滋賀縣 渡辺栄一

京都府 中川伊作

大阪府 池田庄太郎

同 同

同 田万清臣

同 細見亮市

同 同

兵庫縣 吉井良尙

同 伊藤藤三

同 伊藤藤三

同 藤木正一

刺繡阿彌陀三尊種子懸幅

石造六地藏殿(曆應五年壬午二月十八日ノ刻銘アリ)

石造塔婆(延文元年丙申十一月廿七日ノ刻銘アリ)

石造寶篋印塔(觀應二年三月十三日沙彌光專敬白ノ刻銘アリ)

鐵製燈籠(奉納燈籠東照大権現御靈前 秋元越中守藤原長朝元和ノ六戊午歲七月吉日大工中林油次ノ鑄銘アリ)

石造經幢(弘安第九天歲次丙戌五月日ノ刻銘アリ)

石造經幢(弘安六年歲次癸未十月日ノ刻銘アリ)

石造寶篋印塔(建武五年六月十八日ノ刻銘アリ)

石造五輪塔

文部省告示第千二十二号 昭和十九年七月六日 昭和八年法律第四十三号(重要美術品等ノ保存ニ関スル件) 第二條ニ依リ左ノ物件ヲ認定ス

品目

絹本着色金剛界曼荼羅成身會圖(文明九年ノ裏書押紙ニ建武五年修補ノ旧記ヲ錄ス)

紙本着色融通念佛緣起(下卷)(永德三年左衛門尉家高ノ奥書アリ)

紙本金地著色蹴鞠圖

紙本淡彩山水人物圖(長沢蘆雪筆)

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

熊本縣 中原貞壽

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

同 同 同

紙本著色 四季花鳥図 (松村景文筆) 九  
草花図 (山口素絢筆、癸酉ノ年記アリ) 四

十三面 (模貼付)

絹本著色錢塘觀潮図 (装幀紙ニ周鏡等七僧ノ賛アリ)  
紙本著色瓜虫図 (呂敬甫筆)  
紙本著色春秋白鷺図 (雲谷等益筆)  
紙本淡彩渡唐天神像 (永享戊午ノ承朝ノ賛ヲ書ス)  
紙本著色渡唐天神像 (庚午墨極ノ賛アリ)  
絹本著色渡唐天神像 (如寄筆、策彦ノ賛アリ)  
絹本著色觀音図 (圖中ニ普門品ノ偈アリ)  
紙本墨面釈迦成道図 (赤脚子筆、古心ノ賛アリ)  
紙本墨面三酸図 (雲彩筆、野雲ノ賛アリ)  
紙本墨面對月図 (啓孫筆)  
絹本淡彩四時山水図 (晞古李唐ノ欸アリ)  
紙本淡彩山水図 (雲谷等益筆)  
紙本淡彩琴棋書画図 (雲谷等與筆)  
紙本著色四季花鳥図 (傳雪舟筆)  
紙本著色西湖図 (狩野山樂筆)  
紙本金地著色竹垣花鳥図  
紙本金地著色雛菊図 (宗雪筆)  
紙本金地著色柳鷺秋月図 (雲谷等哲筆)  
紙本金地墨面山水図 (吳春筆)  
絹本著色雪舟等楊像 (雲谷等益筆、玉舟ノ賛アリ)  
絹本著色毛利元就像 (永祿五年集堯ノ賛アリ)

彫刻之部

銅造誕生釈迦佛立像  
銅造觀音立像  
銅造觀音立像  
銅造觀音立像  
銅造菩薩立像  
銀造釈迦如來立像  
銅造藏王権現立像  
銅造阿彌陀如來立像 (背部ニ文永三年九月十五日奉鑄ノ銘アリ)  
銅造藥師如來立像 (背部ニ延慶四年二月日ノ銘アリ)

東京都	根津美術館	木造地藏菩薩坐像 (像内ニ貞和六年二月十五日ノ銘アリ)	山口縣	蓮華寺
同	同	木造釈迦如來立像 (釈迦堂安置)	福島縣	太用寺
岐阜縣	北村房吉	木造十一面觀音立像 (台座ニ天福二年七月十九日造立ノ銘アリ)	同	都々古別神社
京都府	守屋孝藏	木造阿彌陀如來立像 (本堂安置) (像内ニ弘安三年五月十四日ノ銘アリ)	同	光岩寺
同	同	木造藥師如來坐像 (本堂安置) (像内ニ文永三年丙寅月廿八日ノ銘アリ)	同	保福寺
同	同	木造阿彌陀如來立像 (像内ニ文永元年八月十五日來迎ノ銘アリ)	同	惠日寺
同	同	木造獅子頭 (内部ニ元享二年八月日施入ノ銘アリ)	石川縣	波波倉神社
同	同	木造獅子頭 (内部ニ應安五年五月日作者鬼大夫ノ銘アリ)	同	白山神社
同	同	銅造阿彌陀如來及兩脇侍立像 三軀	神奈川縣	宝生寺
大阪府	田万清臣	名 稱	所 有 者	所 在 地
同	同	木造厨子 (藥師堂所在)	青森縣	同 覺 寺
同	武田憲治郎	木造三重小塔 (標ニ永正十六年己卯六月吉日、羽瀧立石)	山形縣	立 石 寺
同	同	寺岩屋云々ノ刻銘アリ)	同	山形縣東村山郡山寺村華嚴院境内
兵庫縣	布施亮延	石造三重塔 (傳聖應大師塔)	京都府	來 迎 院
同	同	木造多宝小塔	和歌山縣	安 東 寺
山口縣	豐榮神社	石造十三重塔 (弘安元年口寅)	香川縣	白 峯 寺
奈良縣	中宮寺	石造十三重塔 (大願主)	同	同
東京都	根津美術館	元享四ノ刻銘アリ)	福岡縣	内 本 浩 亮
岩手縣	源勝寺	石造宝塔	福岡市御所ヶ谷二九番地	
大分縣	羅漢寺	品 目	所 有 者	
富山縣	本覺寺	大般若經卷第一百二十三 (和銅經補写本)	秋田縣	辻 兵 吉
大阪府	前岡英明	論語抄 (羅山ノ朱印アリ)	山形縣	本 間 眞 子
同	細見亮市	後水尾天皇宸翰古歌御切紙 (うき身には)	同	白 崎 良 彌
神奈川縣	千手院	伏見天皇宸翰御歌集断簡 (廣沢切三首) (このへや)	同	風 間 幸 右 衛 門
山口縣	藥師教会所			

文書典籍書蹟之部

駿河版銅活字(大字八百六十一箇、小字三万一千二百六十二)二十三箱

附木活字五千六百八箇、銅野線八十八箇、銅廓線十八箇、摺板二箇

往生要集(永元版寫本)六帖

後柏原天皇宸翰八景和歌(明應十年二月中旬ノ御奥書アリ)

千載集卷第十四斷簡(日野切)(うつりに)

藤原雅經筆懷紙(詠曉紅葉和歌)

明惠上人筆消息(六月よりの云々)

藤原定家集抄(十一首)

百首和歌(傳藤原爲家筆)

宗峰妙超筆消息(惠知客下向云々)

月洞文明墨蹟(彌天和尙大祥忌拈香語)

居澤和尙墨蹟(弔白雲惠曉偈)

竜巖德眞墨蹟(至順二年辛未重陽後十日)

月江正印墨蹟(至正三年癸未奉天十有八日)

月江正印墨蹟(玉泉字号、至正八年仲冬)

竺仙梵僊墨蹟(拙偶一首代簡、先覺居士、己卯新正)

用章廷俊墨蹟(至正廿四年二月十九日)

清遠懷渭墨蹟(桂隱歌、洪武二年九月)

石室善玖墨蹟(寒山詞)

一休宗願墨蹟(七言、康正三載孟夏日)

摩訶般若波羅蜜多心經(十四卷)

瑜伽師地論卷第十五、第四十五(「内家私印」ノ朱印アリ)

方廣大莊嚴經卷第三

解深密經卷第五(「東大寺印」ノ朱印アリ)

宝星陀羅尼經卷第四(五輪塔ノ朱印アリ)

養福齋經(「中臣寺印」ノ朱印アリ)

根本說一切有部毗奈耶雜事卷第三十九(首次)

弘道廣顯三昧經卷第三(「塔院傳法」ノ朱印アリ)

阿闍達磨集異門足論卷第八(「東大寺印」ノ朱印アリ)

大般若經卷第一百一十四(藥師寺經)

四分尼戒本

東京都 凸版印刷株式會社

同 内田孝藏

同 根津美術館

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

瑜伽師地論卷第十三

報恩經卷第七殘卷(天平勝宝四年正月上旬、長門國司日置山守家刀自三首那願經)

諸寺緣起集

光格天皇宸翰御懷紙(詠聲春秋琴和歌)

靈元天皇宸翰御短冊(二十七葉)

靈元天皇宸翰古歌御懷紙(心たに)

後奈良天皇宸翰古歌御色紙(君か代は)(料紙ニ金銀泥繪アリ)

神皇正統記(享祿二年仲春十五日書寫ノ奥書アリ)三冊

田分律藏初分卷第廿七

大般若經卷第一百一十(貞觀十三年三月三日安倍小水磨願經)

大嘗會清暑堂御遊所作例(後崇光院御筆、紙背ニ消息アリ)

德馬樂譜(綾小路信俊筆)

梁塵秘抄口傳集卷第十一

德馬樂抄(天治本)

今樣四首(紙背ニ禪門語彙アリ)

光嚴院宸翰御消息(葩西堂云々)

拾遺集(御願阿筆)

手鑑(中ニ伏見天皇宸翰唯識三十頌切、正親町天皇宸翰御詠草切(萩露)、後陽成天皇宸翰御色紙(志賀の浦や)、元曆校本万葉集切(君之行、多賀切(琴詩酒)、傳俊賴筆古今集切(通照か)等アリ)

後陽成天皇宸翰古歌御色紙(思ひねの)(料紙ニ金泥繪アリ)

古今集卷一斷簡(龜山切)(口きはる)

万葉集卷第四斷簡(梅尾切)(衣手乃)

後西天皇宸翰古歌御懷紙(すすしさは)

後奈良天皇宸翰御詠草(初春霞)

後陽成天皇宸翰御消息(寒蘆)

後陽成天皇宸翰御消息(千鳥)

後水尾天皇宸翰古歌御色紙(月見はと)

後西天皇宸翰後水尾天皇御製(高砂の)

東京都 根津美術館

同 千葉胤明

同 岡部耕平

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同



後櫻町天皇宸翰御懷紙(君かうふる)

千載集卷第十八斷簡(日野切)(もあるましき)

往昔抄(天文十六年十一月廿三日神戶直滋ノ奥書アリ)

後柏原天皇宸翰御詠草(梅、鹿、寄松戀)

香藥抄

悉曇字記

佛地經論疏卷第三

後土後門天皇宸翰御詠草(心をは)

後櫻町天皇宸翰御短冊

靈元天皇御宸翰消息(彌生念五、醍醐の宮宛)

伏見天皇宸翰御歌集斷簡(廣沢切八首)(戀なれし世の)

後水尾天皇宸翰古歌御色紙(世とともに)(附正月廿三日野宮定矩筆添狀)

古今集卷第十七斷簡(月おもしろしとて)(料紙ニ金銀泥繪飛雲アリ)

後撰集卷第三斷簡(白河切)(おもひける人に)

落御懷紙(二日貴賤夏秋)(中ニ後柏原天皇宸翰並ニ後奈良天皇宸翰アリ)

後陽成天皇宸翰御消息(五月九日、御名竹門宛)

後陽成天皇宸翰天神々号

後西天皇宸翰御消息(十二月十六日、御花押、集慶軒宛)

伊勢集

後奈良天皇宸翰御賀札(万國慶壽の春)

後西天皇宸翰古歌御色紙(月きよみ)

延宝二年三月廿九日御当座御短冊(二十葉)(中ニ靈元天皇宸翰二葉アリ)

後水尾天皇宸翰御懷紙(山里に)

後西天皇宸翰御色紙(年をへて)

後櫻町天皇宸翰御短冊(十二葉)

神護寺領紀伊國梓田庄絵図(附延徳三年三月梓田庄文書)

後陽成天皇宸翰御賀札(寔に年改まり候祥瑞は)

花鳥余情(明應五年四條隆量書写ノ奥書アリ)

聖福寺古図(永祿午春耳峯玄熊ノ修理記アリ)

後西天皇宸翰古歌御色紙(染てけり)

刀剣之部

刀(無銘、傳三原)

短刀(銘備前國雲次)

刀(金象嵌銘貞次摩上云々)

太刀(銘長光、附糸卷太刀拵)

太刀(銘備前國住雲次)

刀(銘政)

刀(無銘傳眞守)

刀(無銘傳眞守)

刀(無銘廣光)

太刀(銘恒清)

刀(無銘傳長重)

刀(銘筑州住左行秀、嘉永三年八月日)

刀(折返銘國行)

太刀(銘長光)

太刀(銘備州長船住景光、正中二年七月日)

太刀(銘國行)

刀(無銘傳長光)

太刀(銘備州長船景光、本多忠爲ノ所持銘アリ)

短刀(銘來國光、元徳二年)

附腰刀拵(三所、栗形、折金、金家彫獅子図)

刀(折返銘吉綱)

刀(無銘傳長光)

刀(無銘傳長義)

刀(國銘安)

工藝品及考古學資料之部

鉄鉢(三足付)(立石寺山王権現鉢永享七年四月十七日ノ銘アリ)

銅鐘(高泉書田銘及八丁目之内治工太田市郎左右衛正近、半田五兵衛重元元祿十四月十三日ノ銘アリ)

銅鐘(昔寛文四歳十月十八日、大禮那本多忠平御大工武州江戸住権名兵庫守吉綱弟子権名半右衛門尉

福岡縣 聖福寺

熊本縣 森秀

山形縣 石川秀助

新潟縣 西脇濟三郎

東京都 根津美術館

同 一木徳郎

同 吉川元光

同 齊藤茂一郎

同 高垣五一

同 山階芳磨

同 榊原政春

同 松平頼庸

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同



古美術保存 (昭和十八—二十年度)

銅鐘 (予州和氣郡西方寺撞鐘豊後州丹生莊大工正悅  
造永徳三年卯月三日ノ銘アリ)

愛媛縣 太山寺

銅鐘 (冶工藤屋固長戊寅五月吉日温泉郡於唐山下鑄  
之ノ銘アリ)

同 大福寺

銅鐘 (東山守禪菴鐘明曆元歳正月日ノ銘アリ)

同 長福寺

鐵蛭卷薙刀

同 大福寺

文部省告示第九十四号 昭和二十年八月四日

四日昭和八年法律第四十三号 (重要美術品等ノ保存ニ関スル件) 第二條ニ依リ左ノ物件ヲ認定ス

繪画之部

品目

絹本着色金剛薩埵像

東京都 根津美術館

絹本着色佛涅槃圖 (軸木ニ康永四年乙酉南部繪所行  
有等因繪ノ記アリ)

東京都 根津美術館

絹本着色法相曼荼羅圖

同 同

絹本着色阿彌陀如來像 (大徳十年製作ノ記アリ)

同 同

紙本墨画大道和尚圖 (明徳甲戌性海靈見ノ賛アリ)

京都府 守屋孝藏

紙本墨画王羲之圖 (傳如拙筆、圖中ニ全愚周崇ノ賛、  
地紙ニ更戌惟肖得巖ノ題アリ)

同 同

紙本淡彩黄山谷圖 (雪樵景菴ノ賛アリ)

同 同

紙本着色靈昭女圖 (策彦周良ノ賛アリ)

同 同

紙本墨画西湖圖 (六曲屏風、「陽春書之ノ款アリ)

東京都 小林中

紙本着色白衣觀音圖 (赤脚子筆)

同 同

紙本墨画蘆雁圖 (長吉筆)

同 同

絹本着色南聖慧居士壽像 (元徳二年庚午明極楚俊ノ  
賛アリ)

大阪府 木村貞造

紙本淡彩琴棋圖 (雲沢等悦筆、六曲屏風)

同 同

紙本淡彩山水詩面帖 (田能村竹田筆、画ニ庚寅ノ年  
記、詩ニ甲戌ノ年記アリ)

兵庫縣 橋本喜造

絹本着色唐子遊圖 (長沢蘆雪筆)

東京都 佐々木昌興

紙本着色菅公圖 (立林何昂筆、延宝乙丑ノ年記アリ)

同 同

赫色勒壁画面片 二十面

同 同

絹本着色歡喜天曼荼羅圖

同 同

彫刻之部

木造不動明王立像 (所在本堂) (左足柄ニ應安二年九  
月十八日法印康俊作ノ朱書銘アリ)

兵庫縣 福祥寺

木造阿彌陀如來立像 (像内ニ建治四年二月日造立ノ  
銘アリ)

同 光徳寺

木造聖觀音立像

同 大福寺

菩薩形立像

同 大福寺

十一面觀音立像

同 大福寺

地藏菩薩立像

同 大福寺

天部形立像

同 大福寺

四天王立像

同 大福寺

金剛力士立像

同 大福寺

黑色尉 (願欠)

同 大福寺

阿古父尉

同 大福寺

尉 (應永口年十二月二十八日施入ノ  
銘アリ) 十一面

同 大福寺

木造能樂面

同 大福寺

飛田三

同 大福寺

女子 (文明二年十二月吉日施入ノ銘アリ)

同 大福寺

文書典籍書讀之部

同 大福寺

後土御門天皇宸翰御歌卷断簡 (露のまに)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰御賀札 (誠金雞曉を)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰御賀札 (まことにあらたまり候)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰後御消息 (文のやう)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰御懷紙 (詠雪庭樹花和歌)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰御懷紙 (詠二月余寒和歌)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰御懷紙 (詠寄月旅泊和歌)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰古歌御懷紙 (ゆふは河)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰古歌御懷紙 (不逢戀)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰古歌御色紙 (哀しる)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰古歌御色紙 (を山田の)

同 大福寺

後水尾天皇宸翰古歌御色紙 (右崇徳院)

同 大福寺





大般若經卷第三百一十六 (貞觀十三年三月三日安倍

小水磨願經)

經無量壽經 (明通筆) 建久三年三月廿二日書寫ノ奥

書アリ)

華嚴經合論卷第二十七 (明惠上人筆)

明惠上人筆夢記 (十二月十五日)

狹衣下紐 (紀巴自筆本) (首二天正十八年初冬終功ノ

記アリ) 二帖

德川家康筆日課念佛 (三十枚) (卷末ニ手印アリ)

三寶繪斷簡 (東大寺切) (子しひて)

宋版佛國禪師文殊指南圖讚

後陽成天皇宸翰御消息 (端念二、御花押、集雲宛)

後西天皇宸翰御懷紙 (詠月前述懷和歌)

孝明天皇宸翰 (忠誠)

觀世流諸本 (寛永四年、同十二年石田友雪ノ章句附

アリ) 九十九帖

後奈良天皇宸翰御懷紙 (詠霞添山色和歌)

後奈良天皇宸翰朗詠詩歌 (新齊夜話) (料紙ニ金泥繪

アリ)

後陽成天皇宸翰古歌御色紙 (垣竈の) (料紙ニ金泥繪

アリ)

後水尾天皇宸翰御色紙 (閑掃衣)

後水尾天皇宸翰御色紙 (雲より)

色紙金字阿彌奈經

明正天皇宸翰御消息 (よへしや云々、かるきよく宛)

明正天皇宸翰御消息 (多とより)

伏見天皇宸翰御消息 (十一月廿五日、御花押)

後陽成天皇宸翰古歌御色紙 (竜田山) (料紙ニ金泥繪

アリ)

後水尾天皇宸翰古歌御小色紙 (をなし野に)

松浦物語

大般若經第四十八 (藥師寺經)

紺紙金字不必定入印經 (神護寺經)

大毗盧舍那成佛經卷第一

伊勢集斷簡 (石山切) (きく人も) (料紙ニ破紙アリ)

東京都 五島慶太

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

後陽成天皇宸翰御消息殘簡 (さんもし宛、御名アリ)

後西天皇宸翰御消息 (十一月八日、青門主宛、御花押)

靈元天皇宸翰御消息 (六月十一日、右大臣宛、御花押)

大毗盧遮那成佛經卷第六

紺紙金字興起行卷上 (神護寺經)

古今集卷第十五斷簡 (大江切) (ゆふされば)

土御門天皇御歌集

刀 劍之部

刀 (無銘傳國行)

刀 (無銘傳三池)

刀 (銘慶長八年八月日國廣林傳、右衛門時之所持之)

工藝品及考古學資料之部

陶製井戸茶碗 (銘浪花江)

磁製青花花鳥圖八角盒子

陶製丹波燒壺 (康永三甲申七月日)ノ銘アリ)

陶製瀬戸割花雙魚文盤

磁製錦手皿

陶製瀬戸印牡丹唐草文百合口瓶

金銅宝塔 (附銅造如來立像二軀)

高彩色繪赤銅魚子地睡布袋圖小柄 (銘宗現)

容彩色繪睡布袋圖目貫

雙鶴九紋鏡

埴輪盾 (群馬縣新田郡島之鄉村大字長手出土)

木印 印文「禪」(大見禪庵禪師所用)

備前燒壺 (元龜四年ニ石入ノ銘アリ)

金銅押出

金銅金剛盤

乾漆華籠

根來塗茶桶 (蓋欠) (口華寺常住德治二年銘及招提寺

天文三年三月十六日ノ後銘アリ)

蓬萊園時繪面箱

蓮華散時繪箱 (寛永口年ノ銘アリ)

金銅五銖鈴

金銅五銖鈴

靜岡縣 内田勇次

長野縣 片倉兼太郎

同 同

同 同

同 同

同 同

山形縣 本間敬治

東京都 高垣五一

同 丹羽長德

埼玉縣 林 織

新潟縣 中野重孝

兵庫縣 山本發次郎

大阪府 野村光太郎

神奈川縣 高梨仁三郎

福岡縣 麻生多賀吉

東京都 三井高昶

同 小倉安之

同 林 田

群馬縣 茂 林

埼玉縣 橋本錄郎

栃木縣 長 林

岡山縣 岡 山

東京都 原 本

同 大 倉

愛知縣 高橋彦二郎

東京都 安井曾太郎

同 片 倉

大阪府 中 島

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同





金銅透彫釣燈籠 (天正拾六年九月吉日ノ銘アリ)	奈良縣	長谷寺	卯月日造之ノ刻銘アリ)	滋賀縣	長壽寺	中二千五百八十二番地
鯛口 (楊本天満宮明應三年十二月吉日ノ銘アリ)	同	大藏寺	長壽寺并天堂	同	長壽寺	滋賀縣甲賀郡石部町
銅造彌勒菩薩坐像 (天和二年解凍下旬大宮大佛師法橋院達作佛具師宜德鑄之ノ銘アリ)	同	宝山寺	木造棟門	同	春日神社	同野洲郡篠原村
銅錄 (元祿十二歲正月十五日大聖無動寺治工攝州大坂岸本七右衛門尉藤原政長ノ銘アリ)	同	同	金剛輪寺三重塔 (第三層ヲ欠ク) 附櫓金物一〇、宝珠一、竜車一、請花一、露盤一	滋賀縣	金剛輪寺	滋賀縣愛知郡秦川村
銅造地藏菩薩坐像 (享保七壬寅年四月吉日御鑄物師河合兵部藤原周徳大佛師高橋大學ノ銘アリ)	長野縣	善光寺	同寺八脚門	同	同	同大上郡東甲良村
青銅擬宝珠 (中津川上ノ橋所在)	十八箇	同	石造宝塔	同	西明寺	同大上郡東甲良村
(内八箇ニ慶長十四己酉年十月吉日中津川上之橋源朝臣利直、十箇ニ慶長十六年辛亥八月吉日中津川中之橋源蟹臣利直ノ銘アリ)	岩手縣	盛岡市	石造燈籠	同	大橋理祐	京都府京都市上京区室町通今出川上ル
蘆蟹図瓢形釜 (環付蟹)	長野縣	片倉兼太郎	石造燈籠 二基	同	和岐座天乃	同相樂郡棚倉村
柳水流図銀象嵌青銅水瓶	東京縣	島田佳矣	石造燈籠	同	夫支賣神社	乃夫支賣神社境内
金銅版法華經譬喻品	同	五島慶太	石造燈籠	同	平等院	同久世郡宇治町
諏訪神社上社五重塔鉄鑄盤殘片 (延慶元年十一月大工 甲斐國志太郷住 入道ノ鑄銘アリ)	長野縣	諏訪教育會	石造燈籠	同	一宮神社	同福知山市字堀
名 稱	所有者	所在地				
木造厨子及壇	青森縣	青森縣弘前市大字西茂森町	石造燈籠	同	同	同福知山市字堀
長勝寺 (境内銅製鳥居各柱)	栃木縣	栃木縣安蘇郡田沼町	木造住宅	大阪府	福田兵二	大阪府南河内郡川上村大字河合寺二百九十五番地
脚唐獅子三箇附 (續原安鑒)	神社境内	神社境内	銅製鳥居 (嘉永三庚戌三月吉日再建勅許御物鑄師俵野甚右衛門藤原爲久ノ銘アリ)	兵庫縣	波々伯部神社	兵庫縣多紀郡日置村
守延享三九月吉日治工天明町住丸山善太郎每昭同姓源政重ノ銘アリ)	附文書二通	延享三年三月十一日丸山善太郎注文延享三年九月二十七日丸山善太郎覺書	木造厨子及佛壇	同	福祥寺	同神戸市須磨區須磨寺町
藥王院飯綱權現堂 (本殿、幣殿、拜殿、透櫓)	東京縣	東京縣南多摩郡浅川町	安樂寺塔 (三層以上ヲ欠ク)	奈良縣	安樂寺	奈良縣南磯城郡葛村安樂寺境内
附棟札二枚 享保十四年宝曆三年ノ記アルモノ各一	王院境内	王院境内	石造宝篋印塔	和歌山縣	長樂寺	和歌山縣有田郡藤並村大字植野三百四十八番地
石造五輪塔 (大永四天天甲申)	三重縣	三重縣上野市大字法花字田	石造宝塔	岡山縣	五流尊瀧院	岡山縣兒島郡郷内村大字林字市場六百八十六番地
棟札 十枚	三重縣	三重縣種生神社				

應永廿六年、長享二年、  
永正二年、大永元年、享  
祿二年、永祿七年、天正  
二年、天正十八年、慶長  
十五年、元和三年ノ紀ア  
ルモノ各一

法泉寺生駒家廟  
附石造五輪塔二基

香川縣 法 泉 寺  
香川縣高松市三番  
町 法泉寺境内

# 昭和十八年度指定國寶略説

## 繪画之部

平沙落雁圖(傳牧谿筆)一幅 石野  
力藏 豎一尺九分 横三尺六寸二分

豎四尺八寸一分 横一尺八寸八分  
圖中明王脚下之岩石に「榮賀筆」と金  
泥の款識がある。榮賀は鎌倉時代末葉の  
院派の画人である。

先に推定せられた傳牧谿筆の遠浦帰帆  
煙寺晚鐘、漁村夕照等と一連を爲す大幅  
蕭湘八景中の一図であつて、他幅と同じ  
く圖中に足利義満の鑑藏印「道有」一顆  
を捺している。同じ八景中の江天暮雪に  
作者のものと覺しき二印記があるが字劃  
不明で画者名を確認し難い。併し筆墨秀  
潤、宋代水墨山水圖中卓出した作であ  
る。因に本圖は足利將軍家より豊臣秀吉  
上杉景勝、徳川秀忠を経て越前の松平忠  
直に轉じ近年まで同家に傳えられたもの  
である。

豎二尺九寸六分 横一尺七寸  
李竜珉筆と傳える白描風のもので東福  
寺の維摩像と同種の作、筆致極めて流麗  
で宋末乃至元初の制作と思われる。

竹雀圖 一幅 根津美術館  
豎二尺七寸九分 横一尺二分  
俗に濡れ雀の圖と呼ばれ、牧谿の筆と  
傳えられるもので、吹墨を以て雨趣を表  
わしている。圖の一隅に室町時代の鑑藏  
印と思われる「雜華室印」及び「善阿」  
の二印がある。

山水圖(傳周文筆)一幅 根津美術館  
豎三尺八寸三分 横一尺九分  
周文の筆と傳えられ、圖上に大岳周崇  
西胤俊承、玉崎梵芳、大周周裔、嚴中周  
靈、慶仲周賀、古嶺周勝、惟思通恕、誠  
中中款、惟肖得慶、一関周玄、成元梵鼎  
以上十二僧の賛詩があるが、皆著賛の年  
記なく本圖の由緒も知り得ない。併し周

裔の飯年は應永廿六年であるから、晩く  
も以前前の制作で室町初葉の詩画軸とし  
て珍重すべき一作である。

大威德明王像 一幅 根津美術館  
豎四尺二寸一分 横二尺二寸六分  
牛背上に火焰を負う通途の形相である  
が、金泥及び截金を以つて華麗な彩色を  
施している。鎌倉中期頃の佛画中優秀の  
一作例である。

山水圖 一幅 松永安左衛門  
豎二尺七寸六分 横一尺六分  
宗湛筆と傳えられる淡彩で圖上に默雲  
竜沢の賛詩がある。竜沢は建仁南禪兩寺  
を董した詩僧で明應九年に寂しているか  
ら本圖の制作も其以前で画風も之に一致  
する。図様は明兆の破草鞋印ある原家の  
山水圖(國宝)に酷似しており、或は彼  
圖に拠つたものかも知れない。

竹林山水圖 一幅 侯爵 淺野 長武  
豎二尺九寸一分 横一尺一寸四分  
圖の一隅に夏珪と傳うる款記があり、  
今は半ば闕失して詳かでないが、正しく  
斯派の画風を見るべき一作である。圖上  
に室町時代の舶載面に往々見られる「雜  
華室印」の鑑藏印がある。

林檎花圖 一幅 侯爵 淺野 長武  
豎七寸八分 横八寸三分  
周密な写実的手法を以てした清婉の著  
色画で、北宋の花鳥画家趙昌の筆と傳え  
られるが、恐らくは稍降つて南宋末の作  
であらう。当代院体花鳥圖中の優品であ  
る。

雜畫圖 一幅 侯爵 淺野 長武  
豎七寸二分 横七寸四分  
親を待つ雛雀の狀を活写したもので、

宋末の院体花鳥画の一優作である。理宗  
朝の待詔宋汝志の筆と傳えているが、確  
証はない。

白鷺圖(良全筆)一幅 侯爵 淺野 長武  
圖中に「良全作」の一印がある。恐ら  
く作者は山本男爵家藏觀骨像の筆者海西  
人良全と同人で、其経歴等は詳かでない  
が吉野朝頃に在世した我國墨畫の先達と  
思われる。

蘭蕙同芳圖(梵芳筆)一幅 侯爵 淺野 長武  
豎三尺五寸二分 横一尺一寸四分  
玉崎梵芳は室町初葉南禪寺第八十一世  
と爲つた禪僧であるが又圖技に秀で特に  
蘭蕙圖は世に聞えていた。本圖また遺作  
中の一佳作で圖上に自賛がある。

冬景山水圖(仿夏珪)一幅  
牧牛圖(仿李唐)一幅  
雪舟筆 侯爵 淺野 長武  
各圖豎一尺一分 横一尺三分  
四圖いずれも團扇形の紙本淡彩で、皆  
「雪舟」の款識の他に紙端に夫々山水圖  
に「夏珪」牧牛圖に「李唐」と記入して  
いる。即ち雪舟が此等宋代画人の作風を  
学んだ好資料であると共に、其間雪舟獨  
自の特色も自ずから發揮せられてゐる点  
でもまた珍重すべき作である。

不動明王二童子像(龍慶榮賀筆)一幅  
男爵 岩崎小彌太

昭和十八年度指定國寶略説

# 昭和十九年度指定國寶略説

## 繪画之部

### 大徳寺方丈障壁面(探幽筆)

附 山水図襖付貼 八面  
鳳凰図衝立 一基

大徳寺方丈は寛永十三年の建立であるが、同方丈内開山塔の雲門庵三室及び函文六室の襖及び壁貼付には山水人物竜虎花鳥等の水墨画があり、其内塔所の後壁禪会図の一隅に左の墨画がある。

「雲門庵并函文面図」狩野法眼探幽筆也」佐久間將監寄附焉」寛永十八年辛巳七月「廿二日」住山宗玩書

宗玩、江月和尚は当寺の住持であり、佐久間將監眞勝は当代の茶人として聞えた江月和尚の茶友で、和尚の住居竜光院内に寸松庵を建てて之に住した人である。

寛永十八年は此等障壁面完成の年であるが、當時將監七十二歳、江月六十八歳、探幽は四十歳で、法眼に敍せられてより三年の後に當つてゐる。先年國宝に指定せられた(壁貼付は損失)名古屋城上洛殿の障壁面より数年後に作られた探幽壯年時の大作で、就中雲門庵前室の襖貼付山水四十八面は探幽の優作と爲すべく、其余の人物花鳥図も諸種の題材に亘つて探幽画の特色を發揮したものである。

雲門庵前室及び室中の境の襖は今取脱されているが、附とした知客寮及び副司寮の襖貼付山水圖は恐らくも其一部

をなしてゐたものであらう。

## 彫刻之部

藥師如來坐像 一軀 池田庄太郎  
像高四尺一寸五分

もと奈良縣磯城郡城島村赤尾の一佛堂に傳へられていたもので一木造漆箔、今多く剝落しているが相貌端麗、衣文には平安朝初期の特色を示す雄渾な刀法を見せてゐる。

侍者坐像 一軀 法隆寺  
像高六寸九分

本寺五重塔初層塑像中の一軀で北面佛涅槃像に侍坐する開口慟哭の比丘形像である。夙く本寺の外に出たが明治廿二年四月東京美術学校之を購入し、昭和十七年十月本寺に還つた。

十一面觀音立像 一軀 文裁寺  
像高四尺五寸八分

聖觀音立像 一軀 文裁寺  
像高四尺五寸七分

共に本寺所属の旧法音寺佛堂(觀音堂)に本尊として安置されている。十一面觀音は両手蓮肉とも胴体と一木造で、太造りの佛身も、襷波式衣文の彫法も皆平安朝初期の重厚な様式を示している。彩色は悉く剝落している。聖觀音像は寄木造で此亦彩色は全く剝落し、兩手はともにすべて中世の補作。藤原末期の制作であらう。

持國天像 一軀 金本 耕三  
像高五尺四寸五分

寄木造、彩色文様もよく遺つてゐる。興福寺傳來の四天王像中の一軀で、同寺の廣目天、池田成彬氏の増長天、安川雄之助氏の多聞天(孰れも國寶)と一具を爲し、藤原後期の四天王像中の優作である。

大日如來像 一軀 竜藏寺  
像高三尺二寸八分

寄木造漆箔、宝冠を刻出し体相豊かで平安朝中期以前の作であらう。光背台座は鎌倉時代の後補。

日光菩薩立像 二軀 國分寺  
像高五尺九寸及五尺九寸八分

四天王立像 四軀 國分寺  
像高六尺七寸乃至六尺八寸八分

周防國分寺本尊丈六藥師如來像(室町期の作)の兩脇侍及守護四天王像で孰れも一木造、脇侍像は漆箔(後補)、四天王像は彩色(後補)で凡て手法堅実、形式も整い、平安朝初期、少くも藤原初頭を降らぬ作で、國分寺の遺像としては年代の古い貴重な遺品である。但し光背、台座は後補である。

阿彌陀如來坐像 一軀 國分寺  
像高三尺七寸五分

一木造漆箔、上品下生の印をなす。相貌衣文ともに手法堅実で宋だ纖弱の風を見ない、藤原中期の作とすべきである。光背及び台座は近世の後補。

觀音如來立像 二軀 二尊院  
像高觀音三三寸四分

阿彌陀如來立像 二軀 二尊院  
像高觀音三三寸四分

兩尊並びに名高い二尊院の本尊であ

る。ともに寄木造、玉眼嵌入、釈迦像は朱衣に金の蓮花丸紋を置いた、嵯峨清涼寺釈迦像の写しであり、阿彌陀像は上品下生の印をなし、西方院の快慶作阿彌陀像によく似てゐる。光背台座も完備しており共に鎌倉期の作である。類の妙い二尊並置像としても珍重すべきものである。

阿彌陀如來坐像 一軀 西長寺  
像高九尺三寸

寄木造漆箔の丈六像で上品下生の印を結ぶ。相好よく整い衣文も流麗で藤原末期の作。二重日光も八角形台座の懸裳も像と同時の作である。

藥師如來及兩脇侍像 三軀 王樂寺  
像高中尊二尺八寸二分

脇侍各三尺三寸五分

寄木造、漆箔(後補)、彫法堅実、形態手法に藤原期の余風を存する鎌倉初頭の作である。光背台座は後補。

騎獅文殊菩薩及脇侍像 五軀 大光寺

附 木造天蓋 一面  
像高文殊一尺七寸八分 王闍王二尺二寸 波藍山二尺一寸二分 佛陀波利一尺八寸九分 善財童子一尺七寸

各軀寄木造、彩色(後補)、獅子に騎り四侍者を従えた所謂渡海文殊像で、文殊像の底板に「運慶五代之孫法眼康俊之作貞和四年八月日」の朱書銘がある。康俊の作としてはこの他にも大分縣日田郡日田町永興寺に「元亨元年十月十七日興福寺大佛師康俊」の銘のある四天王像(國寶)があり、奈良興福寺に學んで九州の



地で造像に従つていたことが知られる。  
永興寺の四天王像は興福寺の國宝四天王像を模しているが、本像も興福寺大乘院傳來の康因作騎獅文殊群像（國宝、中野氏藏）を範として造顯したものかと思われる。永興寺四天王像より二十七年後に作られた本群像は恐らく其晩年の作と推せられる。天蓋は円形で中央に蓮花を置き、これに飛天を配し、周圍に八葉の吹返しを附けている。像と同時に作と思われる。

阿彌陀如來及兩脇侍像 三軀  
像高中尊二尺六寸 脇侍二尺九寸八分  
萬福寺

### 國寶（建造物）指定棟數調

（昭和二二、一〇、一現在）

都道府縣	神社所有	寺院所有	國有	公共有	私有	小計
北海道	四	三	三	八	一	四
青森	一	一	一	一	一	五
岩手	一	一	一	一	一	五
宮城	一	一	一	一	一	五
秋田	一	一	一	一	一	五
山形	一	一	一	一	一	五
福島	一	一	一	一	一	五
茨城	一	一	一	一	一	五
栃木	一	一	一	一	一	五
群馬	一	一	一	一	一	五
千葉	一	一	一	一	一	五
東京	一	一	一	一	一	五
神奈川	一	一	一	一	一	五
新潟	一	一	一	一	一	五
富山	一	一	一	一	一	五
計	六二	一〇	一〇	一〇	一〇	九七

國寶（建造物）指定棟數調

寄木造、彩色は全く剥落し、中尊の手指に闕失あり、兩脇侍は兩肘より先を失つてゐる。中品下生の印を結ぶ中尊の像内腹部に「大勸進 僧澄田大德 大佛師 僧聖賢大德 寛喜二年癸巳二月日」右忌者 爲偏出離生死往生口口証大菩提造立如件」の墨書銘がある。寛喜四年（四月改元貞和）は歳次壬辰であり癸巳は翌年であるから銘文中の歳次癸巳は誤記であらう。作風の地方的なることは争われないが、衣文の刀技には見るべきものあり、且銘文あつて地方造像史上注目せらるべき作である。光背台座等は失われている。

都道府縣	神社所有	寺院所有	國有	公共有	私有	小計
石川	九	一五	七	一	一	三二
福井	三	五	一	一	一	九
山梨	八	五	一	一	一	一六
長野	一	一	一	一	一	五
岐阜	一	一	一	一	一	五
静岡	一	一	一	一	一	五
愛知	一	一	一	一	一	五
三重	一	一	一	一	一	五
滋賀	一	一	一	一	一	五
京都	一	一	一	一	一	五
大阪	一	一	一	一	一	五
兵庫	一	一	一	一	一	五
奈良	一	一	一	一	一	五
和歌山	一	一	一	一	一	五
鳥取	一	一	一	一	一	五
島根	一	一	一	一	一	五
岡山	一	一	一	一	一	五
広島	一	一	一	一	一	五
山口	一	一	一	一	一	五
徳島	一	一	一	一	一	五
香川	一	一	一	一	一	五
愛媛	一	一	一	一	一	五
高知	一	一	一	一	一	五
福岡	一	一	一	一	一	五
佐賀	一	一	一	一	一	五
長崎	一	一	一	一	一	五
熊本	一	一	一	一	一	五
大分	一	一	一	一	一	五
宮崎	一	一	一	一	一	五
鹿児島	一	一	一	一	一	五
計	六四〇	七四一	一二五	一八	二〇六	一、八三〇

本表指定棟數中ニハ附ケ足リヲ含マズ

史蹟名勝天然紀念物指定件數調

(昭和二、一〇、一現在)

史蹟

名勝

天然紀念物

小

和奈兵大京滋三變靜岐長山福石富新神東千壻群枋茨福山秋宮岩青北都  
歌奈海府  
山良庫阪都賀重知岡阜野梨井川山湯川京葉玉馬木城島形田城手森道縣

一四三 | 一七三三四七三三三九四 | 五三五 | 二四一一三三一四六三一  
一四五六 一二四一五二二五三三三九五 一一一五八 二一三八 二一三〇六一七五 二四四〇七一三〇五 二四

小計 四三一九四七三六二二三二一五九二八四一五〇五〇二七三〇六七三五八一二七二九四六四七五六五九四七四四一四一六〇七九二七四二四三六三二八

天然紀念物

都道府縣	鳥取	島根	岡山	広島	山口	島	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿兒	沖縄	計
都道府縣	鳥取	島根	岡山	広島	山口	島	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿兒	沖縄	計
史蹟	一〇	三一	二八	一一	三一	一一	一一	八	三	三	三	三	六	七	一五	一九	一一	一一	九四九
名勝	六	四	一〇	四	八	二	四	八	五	二	一	一	一	一	一五	七	一	一	二〇三
天然紀念物	一四	三一	一一	九	四	八	七	八	九	一四	一七	一	一四	一七	一二	一九	一九	二九	七七四
小計	三〇	七六	四九	二四	八七	一〇	二〇	二〇	二四	五二	一八	二二	三七	三七	三五	二	二	二九	一九二六

國寶（寶物類）指定種別件數表

(明治三十年十二月至昭和二十一年十月)

小計

一五九



都道府縣	絵画彫刻	文書	工芸	刀剣	建造物	小計
京都府	六八	一六	四七九	一八〇	六五	八二六
大阪府	六〇	一二	一八二	一三〇	一八	五九五
兵庫県	一七二	一八	一九五	二一八	一〇	六八五
奈良県	一四	三	五〇	七四	二一	一五七
和歌山県	一三	三六	一〇	一	三	五八
鳥取県	一	二	一	一	一	二
島根県	二〇	四	八	一	一	二二
岡山県	三三	二	九	二	一	六四
広島県	四	二	七	一	一	六七
山口県	一	一	一	一	一	一〇
徳島県	一	一	一	一	一	一〇
香川県	一	一	一	一	一	一〇
愛媛県	八	一	一	一	一	一一
高知県	一	一	一	一	一	一
福岡県	六	一	一	一	一	一〇
佐賀県	一	一	一	一	一	一〇
長崎県	一	一	一	一	一	一〇
熊本県	一	一	一	一	一	一〇
大分県	一	一	一	一	一	一〇
宮崎県	一	一	一	一	一	一〇
鹿児島県	一	一	一	一	一	一〇
計	一、三九六	四〇九三、六二六	一、〇八四	一、七七九	二四〇八、五三四	五二

# 美術文獻目錄（自昭和十八年）

## 凡例

- 一、ここに採録した文獻はわが國で昭和十八年から昭和二十年までに發行された單行本、定期刊行物、及び諸新聞所載のものである。
- 二、現代美術文獻目錄は明治大正以後の美術に關するものを集めた。
- 三、東洋古美術文獻目錄の採録範圍は原則として美術關係のものに限つたが、考古學、歴史地理その他のものについても美術と關係あるものは適宜採録した。
- 四、西洋美術に關する文獻は別に一括してまとめた。
- 五、建築の範圍は本文最初の凡例に記した範圍にとどめた。
- 六、物故作家及び美術關係者の項は昭和十八年から昭和二十年までの間に歿した人々の記事に限つた。
- 七、現代美術文獻目錄において各項目内の配列は、單行本では書名による五十音順、定期刊行物所載文獻では所載雜誌名による五十音順とした。同一雜誌の配列はその發行順である。
- 但し展覽會批評及び物故作家の項は雜誌別によらず題目別にまとめた。
- 八、古美術文獻における各項内の配列は雜誌別五十音によらず、類似の項目をなるべく同一箇所にあつめた。
- 九、この目錄をつくるため採録した定期刊行物及び新聞はつぎのとおりである。

大阪朝日新聞	國際文化	中外	日本美術
大阪毎日新聞	國寶	帝大新聞	美術
改造	國民美術	陶磁	美術研究
畫論	古美術	東京朝日新聞	美術工藝
季刊美術	史觀	東京新聞	美術史學
京都新聞	史學	東京毎日新聞	美術新報
京城日報	史學雜誌	東方學報(京都)	文化
建築雜誌	史蹟名勝天然紀念物	同(東京)	文藝
建築史	新建築	東洋學報	文藝春秋
建築世界	新美術	南畫鑑賞	寶雲
工藝ニユース	新美術	西日本新聞	讀賣報知
考古學雜誌	生活美術	日伊文化研究	密教研究
國華	清閑	日本畫及工藝	やきもの趣味
國畫	制作	日本建築	歷史地理
國學院雜誌	造型教育	日本建築士	以上六二種
國學院雜誌	中央公論	日本諸學研究報告	

目次

〔定期刊行物所載文獻〕

現代美術關係文獻

論文及隨筆

總說	雜誌別五十音順	一六三
日本畫	雜誌別五十音順	一六三
洋畫	雜誌別五十音順	一六四
彫刻	雜誌別五十音順	一六四
建築	雜誌別五十音順	一六五
作家論	人名別五十音順	一六六
物語作家及美術關係者	雜誌別五十音順	一六七
時評	雜誌別五十音順	一六九
身邊雜記	雜誌別五十音順	一七〇
明治大正以降美術	雜誌別五十音順	一七一
滿支南方諸國	雜誌別五十音順	一七一
行政・教育	雜誌別五十音順	一七二
展覽會記事及批評	雜誌別五十音順	一七二
綜合展覽會	題目別五十音順	一七二
日本畫展覽會	題目別五十音順	一七四
洋畫展覽會	題目別五十音順	一七六
彫刻展覽會	題目別五十音順	一七七
版畫展覽會	題目別五十音順	一七七
工藝展覽會	題目別五十音順	一七七
其他展覽會	題目別五十音順	一七八

古美術關係文獻

總說	一六二
日本	一六二
アジア各地	一六二
繪畫	一六二
總說	一六二
日本	一六二
中國・滿鮮・西域	一六二
書蹟	一六二
彫刻	一六二
日本	一六二
中國・朝鮮・西域	一六二
建築・庭園	一六二
日本	一六二
アジア各地	一六二
庭園	一六二
工藝	一六二
總說	一六二
陶磁	一六二
金工	一六二
木漆工	一六二
染織工	一六二
其他	一六二
考古學關係	一六二
日本	一六二
アジア各地	一六二
歷史關係・雜	一六二
日本	一六二
アジア各地	一六二

西洋美術關係文獻

總說	雜誌別五十音順	一八九
繪畫	雜誌別五十音順	一八九
彫刻	雜誌別五十音順	一九〇
建築	雜誌別五十音順	一九一

〔單行圖書〕

現代美術關係單行圖書

總說	書名五十音順	一九三
畫集及評傳	書名五十音順	一九三
版畫	書名五十音順	一九三
工藝及圖案	書名五十音順	一九三
建築	書名五十音順	一九三
教育	書名五十音順	一九三
雜誌	書名五十音順	一九三

古美術關係單行圖書

總說	書名五十音順	一九四
繪畫	書名五十音順	一九五
書蹟	書名五十音順	一九五
彫刻	書名五十音順	一九六
工藝	書名五十音順	一九六
建築・庭園	書名五十音順	一九六
考古學	書名五十音順	一九七
歷史・風俗・地誌・紀行其他	書名五十音順	一九七
西洋美術關係單行圖書	書名五十音順	一九八
總說	書名五十音順	一九八
繪畫	書名五十音順	一九九
彫刻	書名五十音順	一九九
其他	書名五十音順	一九九



# 現代美術關係文獻 (定期刊行物所載)

採録した新聞文獻中年記を缺いたものはすべて十八年の記事である。(例)大は二・二五。東毎三・九一。一。等

## 論文及隨筆

### 總說

日本美術の哲理	山口 諭助	改造	二五ノ三
日本美術に於ける民族的性格について	北野 政義	畫論	一七
素材と作品	澁谷 修	同	同
畫家の環境と集團に就て	佐藤 敬	同	一九
新日本美術の方向	難波田龍起	同	同
日本美術の特質について	北川 桃雄	同	二一
作家精神の昂揚と新しき價値の創造	加藤 顯清	同	二三
勤勞の表現	森口 多里	同	二七
日本美術の當爲	大口 理夫	季刊美術	二ノ一
「和」を懷ふころ	吳 茂一	國畫	三ノ一
寫生と配合—正岡子規の美術論	木村 重夫	同	三ノ二
繪畫と文學	池田 龜鑑	同	同
國畫の現代的課題	本莊 可宗	同	三ノ三
歴史畫の現代的意義	遠藤 元男	同	三ノ四
神社畫と敬神思想	佐波 市	同	同
日本藝術と悠久性	西堀 一三	同	三ノ五
繪畫と民族	中山 太郎	同	同
日本的意識と繪畫	山口 諭助	同	三ノ六
眞細の美	木村 重夫	同	三ノ八
藝術の民族的基礎と共榮圖の基礎	井島 勉	同	一ノ一〇
ロマンチズムの測定	柳 亮	新美術	二二、二四
海洋の美雄觀	宇田 道隆	同	二六
海洋美術論	柳 亮	同	同
藝術と主題	大久保 泰	同	同

### 藝術的許容

### 現代美術の標想

### 藝術に於ける亞細亞的性格の一考察

### 日本美術の反省

### 「生きた人間」としての藝術

### 寫實主義の人間精神

### 作家と環境

### 造型美術の精神性

### 自然觀照と人間

### 描寫主義について

### 國家と美

### 東洋畫に於ける山岳の意味

### 支那の山と山の繪

### 風景畫と山水

### 美と民族學

### 東亞造型の道

### 氣韻について

### 日本美術の非整頓性

### 對應者

### 對畫斷想

### 日本美術の特質

### 日支藝術の交流

### 新日本美術の展開

### 歴史畫題の發想

### 主題畫について

### 群像構圖論

### 群像小惑

### 群像の構成

### 群像の美的意義について

### 新美術 二六、二八

### 生活美術 一八

### 江川 和彦

### 田口 信行

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 美術に現れた力の表現

### 古代美術と近代美術

### 古典藝術に於ける記

### 録畫の問題

### 大東亞共同宣言と日本文化

### 古代美術と近代美術

### 新日本美術の確立

### 原作とコピー

### 繪畫におけるロマネスク

### 造型藝術における悲壯美

### 美術雜談

### 自然の作品と藝術の作品

### 美に於ける超自然に就いて

### 觀念と表出方式とに就いて

### 東洋畫の構造序説

### 近代繪畫に於ける異國趣味

### 基督教會と繪畫

### 樣式の一般概念

### 構圖の復活

### 藝術論争について

### 畫家と材料

### 戰爭と繪畫

### 美術の威儀

### 日本畫

### 日本畫に於ける勤勞

### 描寫

### 現代日本畫の危機

### 並にわが洋畫の將來

### 日本の花鳥畫

### 山際 靖

### 村田 潔

### 田中 一松

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

### 同

東洋の繪畫の精神と 戰争畫	橋本 關雪	國 畫	三ノ一	院展の作家群 青龍社の人々	廣瀬 嘉六	日本美術	二ノ一二	つある日本的性格 戰争畫のこと	田村孝之介	生活美術	二六
新作畫鑑賞界概観	神崎 憲一	同	三ノ二	文展系東京作家月旦	木村 重夫	同	同	二科の作家	石井 柏亭	同	二ノ五
現代日本畫家分布島 際記	大山 廣光	同	三ノ三	其他	芳川 起	同	同	鼎湖の畫	同	美術史學	七六
繪畫雙絶	秋山 光夫	同	同	日本繪畫の群像に就て	小林太市郎	美術	一	繪のリズム	内田 巖	美術新報	四八
國畫の道	木村 重夫	同	三ノ四	現代日本畫に缺けた もの	金原 省吾	美術新報	五二	二六〇三年の洋畫壇 に望む	江川 和彦	同	四九
歴史畫を描く	中村 岳陵	同	同	水に因む名作	金井 紫雲	同	六七	精神の現實を描く	内田 巖	同	五〇
魚と日本畫	田中 茂穂	同	三ノ七	南畫と北畫	北川 桃雄	同	七一	基礎訓練としての素描	同	同	七〇
現代日本畫家の生活 素描	平出 英夫	同	三ノ八	日本作家協會生る	狩野 晃行	同	七五	エッチングの描き方	西田 武雄	同	同
日本畫の美しさに ついて	添田 達嶺	同	同	日本畫家への希望	大口 理夫	美術と趣味	七九	一水會の仕事	石井 柏亭	同	七五
洋畫家の日本畫	江川 和彦	同	三ノ一〇	現代日本畫の方向	源 豊宗	京 都	九・三	油繪具の技法につ いて	獨ウキリ・同	同	七六
今後の日本畫の方向 に就いて	川路 柳虹	同	三ノ一一	前線と日本畫	三輪 晃勢	同	一九・二	藤島教室	内田 巖	東京	五・八・九
現代日本畫に於ける 明暗調	吉副 禎三	同	同	楠公遺蹟	齊藤 弔花	中 外	一六・二五 一七・二七	彫 刻	本郷 新	畫 論	一七
決戦日本畫論	鼓 常良	同	同	洋 畫	澤柳大五郎	季刊美術	二ノ三	古典逍遙	野間 清六	生活美術	二六
日本畫に於ける東洋 的なもの	山口 蓬春	同	同	獨立展に觀られる問題	江川和彦	畫 論	二〇	彫刻に於ける表情美	大藏 雄夫	日本美術	二ノ九
制作後記	川端 龍子	同	同	靜物畫について	同 鹿之助	新美術	一八	決戦下の中堅彫塑家	田近 憲三	美術	二ノ三
記録畫制作に關して	大口 理夫	生活美術	二六	戰爭の風景	栗原 信	同	一九	二六〇三年の彫刻界 に望む	本郷 新	美術新報	四八
日本畫に於ける表情	鷗飼壬子郎	南畫鑑賞	一二ノ六	戰爭畫に就いて	藤田 嗣治	同	同	怒髪の表現	西田 正秋	同	六五
破墨と潑墨再論—下 店靜氏説を駁す—	日本畫及 工藝	貳輯	同	記録畫制作について	寺内萬次郎	同	同	彫刻の感覺と技術	本郷 新	同	六九
帝國藝術院會員獻繼 作品の日本畫	日本美術	二ノ一	同	記録畫について	中山 巍	同	同	彫刻界の一課題—銅 像の代用品について—	小倉右一郎	東 朝	三・二一
現代日本畫點描	金井 紫雲	同	二ノ二	山下・パール兩 司令官會見圖	宮本 三郎	同	同	工 藝	清水六兵衛	改 造	二四・二
乾坤社と矢野知道人	高須芳次郎	同	二ノ三	ミリ油田地帶確保部隊	清水登之	同	同	洛東鑑談	坂野 清夫	畫 論	二四・二
勤皇精神と日本畫人	菊地芳一郎	同	二ノ六	私の記録畫に就いて	猪熊弦一郎	同	同	掌と工藝(民藝派作 品に就て)	碓 眞次郎	同	二四・二
美術報國と大東南宗院	河野 桐谷	同	二ノ八	春陽會と國展のこと	今泉 篤男	同	二四	生活の基調と工藝	碓 眞次郎	同	二四・二
南畫隨想	岸浪百舛居	同	同	日本の油繪	山岸 外史	生活美術	一七	家具・工藝品綜合展 觀をみる	碓 眞次郎	同	二四・二
現代の南畫について	安田 半圃	同	同	私の修業時代	ブルヂーラ・同	同	一八	工藝風土記・高知縣	碓 眞次郎	同	二四・二
さんしう魚と南畫	水越松南道人	同	同	油繪藝術に榮かれつ	江川 和彦	同	一九	鉄砲鑄造の意匠改善	商工省工藝 指導所研究	同	同
南畫隨筆	金原 省吾	同	同					工藝の心と建築の心	山脇 巖	同	同
南畫隨筆	石川幸三郎	同	同								

手と工具の問題	勝見 勝	工藝ニ	一二ノ二	漆繪の問題	森田龜之助	美術新報	四九	勞務報國會の發足	熊谷 兼雄	建築雜誌	七〇〇
第二回國民生活用品	中山・金子	同	一二ノ四	日本工藝的特質	渡邊 素舟	同	六九	防空恒久策として不	田邊 平學	同	同
展出品規格型について	服部 記	同	一二ノ五	資材の問題	〇 生	同	七二	燃都市の建設を斷行	すべし	同	同
台灣の工藝産業につ	顔 水 龍	同	一二ノ五	工藝と時代精神	河村喜太郎	京都新聞	一九・	建築行政部門への要望	龜井幸次郎	同	同
台灣の建築と工藝	藤島亥治郎	同	同	藝術の保存	山崎學太郎	東 京	一・二、	大東亞建築の構想	藤島亥治郎	同	同
台灣の生活工藝	小池岩太郎	同	同	時局と工藝	吉野 信次	讀賣報知	二・二、	大東亞地理建築學の	須田 敦夫	同	同
台灣工藝雜錄	豐口 克平	同	同	建 築	秋元 惇明	建築雜誌	六九四	兵庫縣下の建築事情	山内嘉兵衛	同	七〇二
東洋の陶磁工藝	小林太市郎	同	同	會場を一巡して—學	立花 次郎	同	同	農家住宅研究の諸相	竹内芳太郎	同	同
工藝の本質	植田 壽藏	同	一二ノ六	會展所見感想—	森 薊	同	同	決戰體制と建築	市浦 健	同	同
岩手の編組工藝を描く	吉川保正	同	一二ノ九	歐洲歸朝談	森 薊	同	同	熱帶住居の保健構造	伊藤 正文	同	同
ラフイー編組品に	安田 三良	同	同	井之頭自然文化園に	森 薊	同	同	要綱	小倉 強	同	同
就いて	寺坂 毅	同	同	ついで	藥師寺 厚	同	同	東北地方の住宅	笠原 利	同	七〇三
朝鮮の編組品	橋本 一夫	同	同	建築と庭園	島田 藤	同	同	北海道に於ける建築	櫻井良雄	同	七〇五
編組品の「編法」に	寺坂 毅	同	同	建築界の總力	森田 茂介	同	同	建設工業會社の新發足	十代田三郎	同	同
就いて	櫻井 繁香	同	同	國民庭園に就て	前田 松韻	同	六九五	戰時建築と創意	伊藤 滋	同	七〇八
編組材料	櫻井 繁香	同	同	宮崎縣推葉村の民家	井上一典	同	同	現場學	伊藤 滋	同	同
金網製造業から「あ	商工省工藝	新建築	一九ノ四	熱帶地の住居—國際	佐藤武夫	同	同	防火改修促進に關す	市防空に關	同	同
けび藝工藝」へ	指導所試作	新 美	一一一	住宅及都市計畫會議	早川 文夫	同	同	の方策	伊東 五郎	同	七〇九
現地向携帶家具	山崎 斌	生活美術	一一一	抄し	西山 卯三	同	同	建築指導要領に就て	鳥井 拾藏	同	同
草木染について	大口 理夫	生活美術	一一一	「住宅用語」の決定	今 和次郎	同	同	都市計畫法令の戰時	伊東 五郎	同	同
回收補助貨幣の回想	金子徳次郎	同	二一	住居習俗の指導方向	森田 茂介	同	六九六	特例と戰時都市計畫	甲野 繁夫	同	同
生活用具の規格原型	西川 友武	同	同	建築美の問題	中澤誠四郎	同	六九七	の運営に就て	牧野 邦雄	建築世界	三七ノ一
國民生活と規格用品	中井太一郎	同	同	生活様式に就て	市浦 健	同	同	日本醫療團の施設	阿藤一男	同	同
家具と作業環境	小池 新二	同	二七	建築研究評議會の發足	伊藤 滋	同	同	防空壕に就て	藏田 周忠	同	同
職ふ工藝	河合榮之助	日本美術	二ノ二	庶民住宅平面の分化	下元 連	同	同	爆彈の威力と待避施設	警視廳建築	同	三七ノ一
職輕紙帝國藝術院	大島 隆一	同	二ノ三	停車場の變遷	伊藤 滋	同	同	建築の性格	課 野 馨一	同	三七ノ一
會員展工藝について	楠部 彌式	同	二ノ四	建築技術者に課せら	伊藤 滋	同	同	田邊泰博士著「日本	小池 敏郎	同	三七ノ一
作陶の歡び	大島 隆一	同	二ノ八	れたる刻下の諸問題	伊藤 滋	同	同	建築行政展望	大河原春雄	同	三七ノ一
大日本工藝會小論	滿岡 忠成	美 術	三、四	工作物の築造統制に	井上 新二	同	同	民家（白川街道）	谷村 英史	同	三七ノ一
工房餘話	香取 秀眞	美術史學	七六	當面の難問題	中村 綱	同	七〇〇	讀書雜誌	同	同	三七ノ一
決戰生活と工藝	同	同	七九	住宅調査の結果に就て	同	同	同	防火改修と火災	同	同	三七ノ一
香爐釜	同	同	七九	台灣に於ける建築行	同	同	同	大東亞建築營團設立	同	同	三七ノ一
鐘の話	大島 隆一	美術新報	四九	政戰時體制「建築簡	同	同	同	の必然性	同	同	三七ノ一
二六〇三年の工藝界	同	同	四九	素化」に就て	同	同	同	の必然性	同	同	三七ノ一
に望む	同	同	四九	素化」に就て	同	同	同	の必然性	同	同	三七ノ一



新興都市建設の近隣 地構成に就て 南方未見記	龜井幸次郎	建築世界	三七ノ二	住宅の戦時規格に就 いて	市浦 健	同	一九ノ四	日本建築に於ける力 の美	黒田 鶴心	美術	二
建築と代用品 白川の民具	川本 鈞一 中野 敏郎 三宅 敏郎	同 同 同	同 三七ノ二 三七ノ二	空地地區概説 建築界の決戦態勢 建築工員養成への提言 住宅大量建設の前提 條件	楠瀬正太郎 櫻井 良雄 同 越智 隆晴	同 同 同 同	一九ノ六 一九ノ七 一九ノ七 一九ノ七	日本建築の傳統 日本美の確認	藤島亥治郎 堀口 捨己	大 東 京	七・二 一・一五
戦争と記念形象 千木のある家(民家)	今井 兼次 津田 正 山口 正 西川 曉 中野 馨一 小林 耕成 櫻井 良雄	同 同 同 同 同 同 同	同 同 同 三七ノ三 三七ノ四 同 同	戦者の覺悟 地方の建築と建築家 記念性について 日泰文化會館設立の 意義並に其の事業 日本國民建築様式の 問題	後藤米太郎 生田 勉 柳澤 健 濱口 隆一	同 同 同 同	一九ノ一 一九ノ一 二〇ノ一 二〇ノ一	伊藤節三 伊東忠太 猪熊弦一郎 内田祥三 梅原龍三郎 小川千麿	鎌田 隆男 小林 政一 内田 巖 大佛 次郎 岸田日出刀 柳 亮 田澤 田軒 金井 紫雲	建築雑誌 同 同 新美術 建築雑誌 同 同 同 同	七〇〇 同 二四 二五 七〇〇 二〇一 二〇一 二〇一
建築工事場の防空防 火対策 草屋根の寺・元政庵	高橋 實 同	同	三七ノ 五、六	日本文化會館懸賞設 計を審査して 一露農村ロマノフカ 村の建設施設 日本國民建築様式の 問題	岸田日出刀 小林 貞雄 濱口 隆一 同	同 同 同 同	同 同 同 同	川合玉堂 古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	一九 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一 二〇一
第三帝國の建築文化 Julius Schulte-Frohnde 室井 修譯	同	同	三七ノ六	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	二〇ノ二 二〇ノ四 二〇ノ四 同	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	二〇ノ二 二〇ノ四 二〇ノ四 同
戦争下の建築 大熊喜邦博士著「東 海道宿驛と其の本陣 の研究」	鈴木 一郎 同	同	同	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	二〇ノ 五・六	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	二〇ノ 五・六
群馬・澤渡の一民家 戦時下の新木構法研 究について	谷 悦子 片岡 靖忠	同 同	三七ノ七	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	同	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	同
豊後・英彦山麓の一 民家	蔵田 周忠	同	三七ノ八	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	二〇ノ八	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	同
北九州の一民家 建築技術の概念	同	同	三七ノ九	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	同	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	同
大和の高塀造	島田 正二 蔵田 周忠	同 同	同 三七ノ一	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	同	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	同
戦ふ農村建築界	小倉 強	同	三七ノ一	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	同	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	同
信州島々の家	西川 曉	同	三七ノ一	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	同	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	同
戦時下工場製組立家 屋の創意と發展を望む 新しい木構造に對す る考察	十代田三郎 竹山謙三郎	同 同	同 一九ノ二	建築的技術の決戦的 性格 米國の基地機械化工作 日本國民建築様式の 問題(II)	柳瀬 駿 同 同 同	同 同 同 同	同	古賀忠雄 小林古徑 小林徳三郎 坂本繁二郎 曾宮一念 中川一致	田澤 田軒 村雲大撰子 新田藤太郎 藤森 順三 木村 莊八 梅野 滿雄 泰 一郎 木村 太郎 武者小路實篤	同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同	同

作家論

伊藤節三	鎌田 隆男	建築雑誌	七〇〇
伊東忠太	小林 政一	同	同
猪熊弦一郎	内田 巖	同	二四
内田祥三	大佛 次郎	新美術	二五
梅原龍三郎	岸田日出刀	建築雑誌	七〇〇
小川千麿	柳 亮	同	二〇一
川合玉堂	田澤 田軒	同	二〇一
古賀忠雄	金井 紫雲	同	一九
小林古徑	田澤 田軒	同	一九
小林徳三郎	村雲大撰子	同	二〇一
坂本繁二郎	新田藤太郎	同	二〇一
曾宮一念	藤森 順三	同	二〇一
中川一致	木村 莊八	同	二〇一
武者小路實篤	梅野 滿雄	同	二〇一
佐藤 春夫	泰 一郎	同	二〇一
松島 生	木村 太郎	同	二〇一
佐藤 敬	武者小路實篤	同	二〇一
志麻 太郎	同	同	二〇一
成田 春人	同	同	二〇一
山口 玄珠	同	同	二〇一
大藏 雄夫	同	同	二〇一
豊田 豊	同	同	二〇一
福田眉仙	同	同	二〇一
福田平八郎	同	同	二〇一
藤田嗣治	同	同	二〇一
ブブノヴ	同	同	二〇一
本間國生	同	同	二〇一

宮本三郎	栗原 信	美術新報	五八	私の親た島田墨仙先生	添田達嶺	國 畫	三ノ九	美術家の韓國運動	高橋 健二	國 畫	三ノ三
安井曾太郎	山本 和夫	美術新報	二三	島田墨仙氏に就て	松林 桂月	美術新報	五八	藝術韓國の道	安藤紀三郎	同	三ノ五
山口蓬春	柳 亮	季刊美術	二ノ一	田口省吾君を悼む	中川 紀元	同	七二	表現の可能と限界	竹内 芳術	同	三ノ六
山下新太郎先生制作	佐波 甫	論	二二	島田墨仙の遺業	木村 重夫	日本美術	二ノ八	戦争美術の浪漫性と寫實性	柳 亮	新美術	一九
餘談	中村 善策	美術	三、四	友田薫君略歴及作品	日本建築士	三三ノ一	提案二三	美術界、美術家の方	岩佐 新	同	二六
同(二)	同	同	六	中島泉次郎先生を憶ふ	山田寅男	同	三三ノ二	向について	遠山 孝	同	同
福田平八郎論	加藤 一雄	同	九	林重義への弔詞	伊藤 廉	美術	六	批評所感	大口 理夫	生活美術	一七
横山大觀	中野 仙香	美術新報	六二	平岡權八郎畫伯を悼む	和田三造	古美術	一四五	美術雑誌のモラル	泰 一郎	同	二二
(特輯)	山口 玄珠	日本美術	二ノ七	藤島武二氏追悼	中村研一、伊原宇三郎、猪熊弦一郎、岩佐新	畫 論	二一	精神生活と展覽會	三雲祥之助	同	同
	石川 幸三郎	同	同	藤島武二氏の作畫過程	岩佐 新	同	二二	美術作戦の記録	大智 浩	同	二三
	廣瀬 熹六	同	同	藤島武二論	藤森 順三	新美術	一八	戦闘と造形技術	三浦 和美	同	同
	遠山 孝	同	同	藤島先生と新制作派	内田 巖	同	二二	美術作戦の回顧	石井 柏亭	同	同
	藤懸 柳虹	同	同	藤島先生を偲ぶ	伊原宇三郎	同	二二	戦略のための美術	森口 多里	同	同
	宇野浩二	同	同	藤島先生回想	曾宮 一念	同	二八	美術時論	石井 柏亭	造形教育	九ノ一
横山大觀寸描	金原 省吾等	同	同	藤島先生の繪について	中山 巖	同	同	文化人の報國精神	杉森孝次郎	日本美術	二ノ二
吉田源十郎	山崎覺太郎	美術新報	五八	藤島先生葬送雜記	内田 巖	同	同	二つの課題	難波田龍起	同	二ノ三
和田英作	岩佐 新	同	六一	藤島先生の御逝去	岩佐 新	日本美術	二ノ五	決戦下美術家の決意	中村 直人	同	二ノ九
牧野義雄	新居 格	東京	四二・二	若き日の藤島畫伯	内田 巖	同	同	決戦下大東亞美術樹立と日本畫洋畫の問題	黒田 鶴心	同	同
十一作家を評す	飯塚 米雨	日本美術	二ノ四	畫壇思ひ出の記	清見 陸郎	同	二ノ六	歌道と畫道	植村鷹千代	同	同
物故作家及美術關係者				藤島先生を憶ふ	南 薰造	美術新報	五六	在野團の人々	淺野 晃	同	同
國枝博略歴及作品		日本建築士	三三ノ四	歐洲畫壇への決別	藤田 嗣治	改造	二五ノ二	京都畫壇縱横	辻本和兵衛	同	同
小林謙三略歴及作品		同	三三ノ二	戦争と美術(座談會)	山内 一郎	畫 論	二三	戦時態勢と東京都美術館	原田 信造	同	同
墨仙畫伯の愛國精神	加茂川醉歩	國 畫	三ノ五	國家目的に即應する美術の體制	藤田 嗣治等	同	同	決戦と美術家の覺悟	遠山 孝	美術	二一
墨仙氏筆畫と四人の聖徒	木村 重夫	同	三ノ七	「美は世界を救ふ」の意氣と決意を望む	山崎覺太郎	同	同	座談會美術家と戰闘配置	福田豐四郎	同	同
墨仙自敘傳	島田 墨仙	同	三ノ八	「美は世界を救ふ」の意氣と決意を望む	植村鷹千代	同	同	新しき美術の樹立	宮本三郎	同	同
近ける島田墨仙翁	添田 達嶺	同	同	生產美術の態勢	鶴田 吾郎	同	二四	皇國美術確立の道	鈴木榮三郎	同	三、四
島田墨仙翁の藝術	飛田 周山	同	三ノ九	新美術建設の理念と技術(座談會)	佐藤 敬	同	二五	生產増強と美術指導	高村光太郎	同	同
島田墨仙氏傳記制作	川合 玉堂	同	同	決戦下における生産美術の使命について	嘉門 安雄等	同	二七	職力と美術	石井 柏亭	同	同
略年譜	添田達嶺編	同	同	心印の提唱	植村鷹千代	同	同	大いなる野心をもて	井上 司朗	同	同
畫題に現はれた墨仙先生	田中 良助	同	同		小室 翠雲	國 畫	三ノ三		山内 一郎	同	同
輕井澤に於ける島田墨仙先生	平井 恒子	同	同						柳 亮	同	五

記録畫と藝術性	植村鷹千代	美術	五	美術界一元化の問題	尾川 多計	美術新報	五五	人文爆撃	兒島喜久雄	同	一・二
作戦記録畫優秀作品評	今泉篤男他	同	同	美術機構と人	淺利 篤	同	五六	近代戦争畫の途	大久保 泰	同	七・一二
作戦記録畫の在り方	山内 一郎	同	同	抱負	同	同	六三	美術文化と空襲保護	田近 憲三	同	九・一七
戦争畫制作の要點	藤田 嗣治	同	同	擬装アメリカ文化の	古城 江觀	同	六六	決戦下の美術	石井 柏亭	同	一・一
本年度記録畫に就て	秋山 邦雄	同	同	美術建造物の空襲対策	小幡治和	同	七四	畫家も産業戰士も一つ	川端龍子	同	九・一二
軍需生産美術挺身隊の發足	中村 直人	同	六	空場より美術品を護れ	岡鹿三郎	同	同	美術館と防空	正宗得三郎	同	一・二
皇國美術の方向	兒島善三郎	同	同	新に國寶を造らう	藤田 嗣治	同	同	制作資材の供出	尾川 多計	同	二・二
海と空の課題	植村鷹千代	同	七	彼らに道義なし	川路 柳虹	同	同	郷土藝術と疎開	高橋 健二	同	三・二
大東亞建設と日本美術	秋山謙藏	同	同	童畫の使命	山本 蘭村	同	同	われらの大使命一戦	藤田 嗣治	東	一・八
軍需生産美術推進隊の初期行動	鶴田 吾郎	同	八	護る意志が第一	丸尾彰三郎	同	同	争畫への精進	岡本 一平	同	五・一五
戦力と美術(二)	山内 一郎	同	同	皇國日本の傳統を顯	横山 大觀	美術と趣味	七九	漫畫泰公會の仕事	横山 大觀	同	一・一
勤勞美術報告	神山 榮三	同	九	現せん	柳 宗悦	文藝春秋	二三〇	陣立て	高村 豊周	同	一・七
戦争畫と藝術性	秋山 邦雄他	同	同	時局と美の原理	池上 恒	大朝	二・七	こゝに勝利の道	高村 豊周	同	一・九
軍事美術研究會に就いて	同	同	一二	敵前行動は無限なり	高村 豊周	大朝	一九・八	美術も隣組の中へ	田中比左良	同	一・九
美術は戦力化されてゐる	同	同	一二・二	皇國美術觀確立—美術報國會への要望—	外山卯三郎	京城	五・一一	漫畫家も新装備	田中比左良	同	一・九
時評	同	同	二ノ二	大東亞戦争と繪畫	中井宗太郎	京城	二・三〇	「日本美報」の發足	高村 豊周	東	一・七
嚴肅な自己批判	尾川 多計	同	二ノ三	市展に求む	田之口青晃	同	二・三	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
戦争美術など	伊原宇三郎	同	同	美術鑑賞層の轉換	大庭 耀	同	二・四	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
美術再建の先決問題	植村鷹千代	同	同	記録畫と課題制作	同	同	同・二八	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
これまでの我美術界再建美術界に寄す	須田國太郎	同	二ノ六	途阻む團體意識	遠山 孝	帝大新聞	一九・二	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
「美術家」の節操について	伊原宇三郎	同	同	羈絆的繪畫の要請	谷 信一	同	七・二	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
戦争畫の理念と表現	宮田 重雄	同	同	日本美術報國會結成に際して	三浦 逸雄	東京	四・一九	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
美術近信	中井宗太郎	美術工藝	一二	漫畫界の新發足に寄す	加藤悦郎	同	四・二五	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
新しい繪畫運動への決意	春山 武松	同	二一	「美報」「美統」新發	木村 莊八	同	五・八	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
美術家報國會に就て	北村 西望	同	五四	足に當つて上、下	柳 亮	同	七・一〇	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
決戦態勢下の美術界	荒城 季夫	同	同	美術界の決戦段階	同	同	同	漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
報國會と戦争畫	鎗木 清方	同	同					漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七
美術界一元化の根本精神	川路 柳虹	同	五五					漫畫家も新装備	高村 豊周	同	一・七



身邊雜記

うち	中川 紀元	論	一七
昨日の晝家今日の晝家	栗原 信	同	二〇
身邊交友記	福田豊四郎	同	同
津輕	下澤木鉢郎	同	二三
心のふること	中村 善策	同	同
クラスの仲間	藤岡 一	同	二四
耳を切つた男	大森 啓助	同	二五
羽黒山	石井 柏亭	同	二六
凜然たる芭蕉	小杉 放庵	同	同
布袋とザイナーナス	長與 善郎	同	二〇二
滿洲國に於いて	松林 桂月	同	三〇一
杭州迎春行	宮崎 井南	同	三〇二
北の島南の島	内田清之助	同	三〇六
南の花北の花	松崎 直枝	同	同
美術雜感	武者小路實篤	同	同
鶏頭花と芥子花の屏風	田中一松	同	三〇八
二つの話	山口 青郎	同	三〇九
空・川・蟬・庭	恩地孝四郎	同	三〇一
若月の眉	風巻景次郎	同	同
從軍三百日	向井 潤吉	同	一九
經驗が生んだ私見	遠山 孝	同	二二
乳の泉	大久保 泰	同	二四
晝家の見た海洋	三雲祥之助	同	二六
海洋畫について	石川 滋彦	同	同
晝家の見た海洋	藤本東一良	同	同
越南晝家を迎ふるの記	關口俊吾	同	二七
香港行	伊原宇三郎	同	二八
或る手紙	山口 寅夫	同	一七
榕樹の蔭で	太原 久雄	同	同
日本季節の美	大島 博光	同	同
犬を連れた老婆	山口 寅夫	同	一八
冬・覺書	筒井 健三	同	同
馬槌	谷内 尚又	同	二〇
技術をおしつけられ	田原 忠助	同	同

た觀賞者のつづき	武蔵野春泥	上林 曉	生活美術	二〇	能と歌舞伎と繪	上野 忠能	美術新報	六五
斷章	出られぬ旅	三岸 節子	同	同	吞山樓紀聞	本山 荻舟	同	六六・一七
私の仕事場	ちりすび	有馬さとし	同	同	北の海幸	安田 豊	同	六七
中津川といふところ	夏山を描く	森田 元子	同	二一	山國の寫生地	中村 善策	同	同
富士山の繪	山居	野田 習之	同	同	街に壁畫を	春日部たすく	同	同
黒と緑	郷土の美術	福澤 一郎	同	二四	江戸趣味	田中咄哉州	同	六八
病後に描いてゐる	香港への旅	中村 善策	同	同	人物を描く	上野山清貢	同	七一
戦線より文展を想ふ	二首の連想	小杉 放庵	同	二六	香港と藝術	服部正一郎	同	同
畫神を祀る	鑑祭りの過去と未來	勝見 勝	同	二七	處女作の除幕式	伊原宇三郎	同	七五
些少話	南山西水記	上泉 秀信	同	同	東大寺の結解料理	朝倉 文夫	同	二一〇・七
浪速御民橋彦	大亦 觀風	伊藤 正義	同	九〇・二	國術館	堂本 印象	同	二一〇・六
小川 千麿	西澤 笛歌	伊勢 正義	同	一〇・二	雪香ともんべ	小杉 放庵	同	二二〇・一
小杉 放庵	日本美術	野口登美雄	同	一	ほんもの・にせもの	河井寛次郎	同	一九・二・
浅野 晃	同	小杉 放庵	同	二〇・二	もち	中川 紀元	同	二四
西澤 笛歌	同	小川 千麿	同	二〇・三	禮拜いろいろ(中)(下)	曾宮 一念	同	四・二・
大亦 觀風	同	小川 千麿	同	二〇・八	素裸の姿	中川 紀元	同	六・二・
かみや・せ	同	小川 千麿	同	三〇・九	心の歸農	猪熊弦一郎	同	一・一・
向井 潤吉	同	小川 千麿	同	六	ひとつの發見	朝倉 文夫	同	一・一・
曾宮 一念	同	小川 千麿	同	八	繪と門人の戦死	青野 季吉	同	九・二・
野間 仁根	同	小川 千麿	同	九	最小限の繪本	西澤 笛歌	同	同・三・
藤田 嗣治他	同	小川 千麿	同	一二	金太郎一正行	武井 武雄	同	同・四・
川端 龍子	同	小川 千麿	同	二〇・二	汪先生の彈痕	中川 紀元	同	同・一・
吉岡 堅二	同	小川 千麿	同	二〇・三	わが思ふ壺	朝井南右衛門	同	同
本郷 新	同	小川 千麿	同	二〇・五	祖國をみ射る瞳	高村光太郎	同	一九・七・
大久保 泰	同	小川 千麿	同	二〇・六	一變した我等の戦線	向井 潤吉	同	同・八・
本郷 新	同	小川 千麿	同	二〇・六	一變した我等の戦線	末友 喜	同	同・九・

湖南前線にて

栗原 信 東 毎 一九・一一〇・一一

雜

圖版について

大口 理夫 季刊美術 二ノ一

繪と歌

黒田 長禮 國 畫 三ノ一一

ミウゼオグラフィ

大森 啓助 新美術 二二・二

現代戦と印刷繪畫

須山 計一 同 二七

百歳の天才

菊岡 久利 生活美術 二二

山のボスター

高橋 錦吉 同 二四

宣傳資料の製作

大智 浩 同 二五

日本の美

中野 重治 同 二六

顔の美學

西田 正秋 日本美術 二ノ二

ゴア王

伊東 深水 美術 一

コバルト(1)油繪具の研究

稻村 耕雄 同 七

西部美術華國隊の結成

太虚 迂人 同 八

東京美術學校改組

安田 軼彦 國 畫 八

コバルト(2)

富本 憲吉 同 九

同(3)

稻村 耕雄 美術 一〇・一

油繪具

岡 鹿之助 同 二ノ二

色彩學概説

遠藤 教三 美術新報 六八

芝居一家言

錦木 清方 東 京 一・一二

和服の基本問題

谷 信一 同 一〇・一

本の戦ひ

恩地孝四郎 同 一・四

短袖の美

黒田 騰心 東 朝 一八・一七

明治大正以降美術

明治畫壇を憶ふ

清見 陸郎 畫 論 二〇

萩原守衛

中村 秋一 同 二三・二

柄風の藝術

藤森 順三 季刊美術 二ノ一

明治美術の回想

添田 達嶺 國 畫 三ノ四

柄風作風覺書

春山 武彦 同 三ノ七

大震火災に焼失せる先考雅邦翁の遺作

橋本 秀邦 同 三ノ一一

小田繪重論

鍋井 克之 新美術 二〇

黒田清輝と洋畫の身體化

久富 貢 同 二一

岡田七藏氏を憶ふ

別府貫一郎 同 二一

御舟の寫生

藤森 順三 同 二一

美術施設

黒田 騰心 同 二一

回想の美術

宇野 浩二 同 二二・二

草土社回顧

金井 紫雲 同 二三

草土社といふ名

木村 莊八 同 二三

中村蘇の手紙

中村 秋一 同 二二・二

青山熊治の生活を中心に

橋田 康次 同 二七

明治洋風畫の特質

森田龜之助 生活美術 二二

近代日本に於ける山岳畫

英木猪之吉 同 二四

三代繪本小親

菅 忠道 同 二五

富岡鐵齋傳新考

小高根太郎 清 同 一九

富岡鐵齋遺稿

同 同 一九

菱田春草論

小高根太郎 制作 二

明治時代の繪畫

黒田 騰心 南畫鑑賞 二ノ四

對畫斷想

塩田 力藏 同 二ノ八

明治と美術

鈴木 進 同 二ノ一

文帝展概観

田澤 田軒 日本畫及工藝 一〇・一二

明治初期の日本畫壇

石川幸三郎 日本美術 二ノ一

岡倉天心先生を憶ふ

清見 陸郎 同 二ノ一

木村武山畫伯を追想して

田澤 田軒 同 二ノ二

朋友たりし故川村曼舟君を偲びて

庄田 鶴友 同 二ノ二

熱情畫饌狩野芳崖

石川幸三郎 同 二ノ二

武内桂舟先生

鍋木 清方 同 二ノ二

柄風の畫

山口 玄珠 日本美術 二ノ三

柄風渾熟の藝術

石川 昂水 同 二ノ三

橋本雅邦の人と藝術

石川幸三郎 同 二ノ四

明治時代の名建築

伊東 忠太 同 二ノ四

工藝界の發展

渡邊 素舟 同 二ノ四

新代日本美術發祥の頃

石川幸三郎 同 二ノ四

明治彫塑を築ける人々

大藏雄夫 同 二ノ四

明治懷顧

上村 松園 同 二ノ四

傳統から創造へ

清水六兵衛 同 二ノ四

明治時代の作家

廣瀬 熹六 同 二ノ四

憶ひ出すまゝに

小絲源太郎 同 二ノ四

大幸館其他の思ひ出

中澤 弘光 同 二ノ四

明治の崇拜畫人

三宅 克己 同 二ノ四

明治晩年の京都畫壇

辻本和兵衛 同 二ノ四

再見の名品

黒田 騰心 同 二ノ四

畫人句佛

西山 翠璋 同 二ノ四

明治末より大正初期

森田龜之助 同 二ノ四

美術評論家

同 同 二ノ四

明治美術の搖籃

溝口積次郎 同 二ノ四

明治初期の美術界と

笹川 臨風 同 二ノ四

新美術の樹立

同 同 二ノ四

明治美術に於ける傳

野間 清六 同 二ノ四

統と進歩

同 同 二ノ四

明治に於ける美術と

本間 久雄 同 二ノ四

文學時代の油彩畫

坂崎 坦 同 二ノ四

明治時代の特質

川路 柳虹 同 二ノ四

明治繪畫の特質

清見 陸郎 同 二ノ四

岡倉天心と明治畫壇

荒井 寛方 同 二ノ四

明治日本畫壇追想

神崎 憲一 同 二ノ四

明治期の京都畫壇

荒城 季夫 同 二ノ四

明治洋畫界の元勳

高村 眞夫 同 二ノ四

太平洋畫會を中心とする明治畫壇の回想

同 同 二ノ四

大正時代の美術思潮

横川毅一郎 同 二ノ五

大正期の日本畫、洋

春山 武松 同 二ノ五

畫概観

同 同 二ノ五

大正時代の彫塑

大藏 雄夫 同 二ノ五

模範社の創立	熊岡 美彦	日本美術	二一五	菱田春草	河北 倫明	寶雲	三一	建島大夢、林町の思出	山根 八春	美術新報	六五
大正年間新聞美術記	田澤 田軒	同	同	回想の美術	宇野 浩二	美	八	二科三十年の回顧	正宗得三郎	同	七二
者活羅片鱗	黒田 鶴心	同	同	西南戦争圖の發見	小山 周次	同	一二	富岡鐵齋畫論	小根 太郎	文藝春秋	二一〇二
大正期の美術雜誌回顧	西田 武雄	同	同	矢田一嘯と西南戦争圖	今田哲夫	同	同	小川芋錢が事	齋藤 隆三	東京	九・一八
大正洋畫の珍珠	本田 藤軒	同	同	回想録(1)	高村光太郎	同	二ノ一	畫僧鐵翁	永見徳太郎	同	一一・三
鐵齋翁と讀書	金井 紫雲	同	同	同(2)	同	同	二ノ二	滿・支・南方諸國			
大正年間の日本畫壇	石川幸三郎	同	同	麥偃・御舟・その他	鈴木 治	同	二ノ五	フイリッピン隨想	笹岡 了一	畫論	二六
と主なる作家	木村 重夫	同	同	狩野芳崖論	久富 貢	同	二ノ六	引揚邦人の南方居住	佐藤 鑑	建築雜誌	六九四
大正時代の日本畫	川島理一郎	同	同	黒田清輝後期の業績	隈元謙次郎	美術研究	一三〇一	經驗調査	山田 秀藏	同	同
國展創立の頃	小野 竹喬	同	同	と作品上・中・下	青木繁の生涯上・中	同	一三三	ビルマの國情	勝田 高司譯	同	六九五
國展設立の前	辻 永	同	同	鐵齋翁の皇學	正宗得三郎	美術工藝	二一	南方建築	京都帝大工	同	同
光風會回顧	荒城 季夫	同	同	鐵齋翁略年表	森川杜園遺作	同	同	近代支那住宅散見	武藤 基雄	同	同
大正期在野展の勃興	飯塚 米雨	同	二ノ六	鐵齋の畫に就て	武者小路實篤	美術史學	四	滿洲佛寺史概説	村田 治郎	同	同
島崎柳塘翁を偲びて	石川幸三郎	同	同	若き日の岡倉天心	清見 陸郎	同	七三・八	引揚邦人の南方居住	佐藤 鑑	同	六九六
物故作家研究號に就て	山口 玄珠	同	同	鼎湖の畫	石井 柏亭	同	七六	熱帶地の住居	井上一郎譯	同	六九六
栖鳳通觀	下店 靜市	同	同	クメール建築に見る	藤岡 通夫	同	八二	印度建築文獻目錄	京都帝大工	同	同
富田溪仙論	川路 柳虹	同	同	三角破風	樋口 弘	同	八三	燕の北長城	村田 治郎	同	六九七
松岡映丘の藝術	高村 眞夫	同	同	明治の風景版畫家井	上安治の生涯	同	同	南京に於ける住宅の建築	高藤 武夫	同	六九九
滿谷國四郎の人と其	鈴木 進	同	同	總庵父子の故郷(座談)	藤本樂之軒	同	同	滿洲開拓地の建築	東 一秀	同	七〇一
作品	金井 紫雲	同	同	再渡來時代のフエノ	清見 陸郎	同	八六	マライより歸りて	清田 文夫	同	同
栖鳳回顧	結城 素明	同	同	同(その二)	同	同	八八	滿洲國住宅政策經過	笠原 敏郎	同	七〇二
森田恒友隨想	齋藤 隆三	同	同	同(三の上、下)	飯塚 米雨	美術新報	四九	滿洲に於ける住宅の	莊原 信一	同	同
島崎柳塘君の思ひ出	山口 華楊	同	同	坪の藝術	大東亞戦争と長井雲	同	五三	最近の趨向について	佐藤 武夫	同	七〇五
芋錢翁が事ども	石井 柏亭	同	同	再渡來時代のフエノ	同	同	同	南方各地に於ける風	森田 慶一	同	同
五雲先生追想	藤森 順三	同	同	再渡來時代のフエノ	同	同	同	南方に於ける從來の	同	同	同
柳塘君追憶	岸田 劉生	同	同	再渡來時代のフエノ	同	同	同	日本人の住む方及び	同	同	同
御舟回想	小室 翠雲	同	二ノ八	再渡來時代のフエノ	同	同	同	住宅の調査	同	同	同
鍾感(遺稿)	小杉 放庵	同	二ノ八	再渡來時代のフエノ	同	同	同	郭爾羅斯前旗の住居	大塚 正雄	建築世界	三七〇五
南畫界の諸先輩	同	同	二ノ八	再渡來時代のフエノ	同	同	同				
不同舎の人々	同	同	二ノ八	再渡來時代のフエノ	同	同	同				
三代之工藝美術	大島 隆一	同	二ノ一一	再渡來時代のフエノ	同	同	同				
文展の今昔	田澤 田軒	同	同	再渡來時代のフエノ	同	同	同				
畫家と決戦生活	金井 紫雲	同	同	再渡來時代のフエノ	同	同	同				
日本彫塑七十年の收穫	大藏雄夫	同	同	再渡來時代のフエノ	同	同	同				



佛領印度支那の漆工藝	谷内治楠	工藝ニ	一二ノ八	ジョゴス	伊東 深水	日本美術	二ノ九	單行本式繪本に就て	波多野完治	同
佛印の布帛工藝に就て	小川信治	同	一二ノ九	フィリップスの畫家	宮本 三郎	美術	一	童畫家教育の問題	三輪 和敏	同
南方漆液の利用研究	鈴鹿清之介	同	一二ノ一	マカッサルにて	山口 華陽	同	二	繪本の心理と社會性	牛島 義友	同
東印度の編細工	齋藤 正雄	同	一二ノ一	ビルマ勤勞奉仕隊の顔	猪熊弦一郎	同	同	繪本の教育性	依田 新	同
南洋群島の編組細工	染木 照	同	一二ノ一	佛印の美術界	關口 俊吾	同	三・四	造形美術による兒童教育の問題	青木誠四郎	同
支那の王城建築	木村 素衛	同	三ノ一	共榮團首腦者の印象	清水登之他	同	八	繪本參考文獻	松原 公平	同
南方に旅して	三輪 晃勢	同	同	共榮團の繪畫	江川 和彦	同	二ノ二	最初の繪本	ゾルフ・ドウリアン	同
南を掲げる人々	金井 紫雲	同	三ノ四	「袋形絶地」衡陽	小川原 脩	同	同	教科書の挿繪	柴田 隆二	同
佛印現代美術展と來朝した安南の美術家たち	江川 和彦	同	三ノ一〇	南方原始圖に土俗と藝術を採る	宮武 辰夫	美術工藝	一〇・一	繪本を育てる座談會	光吉 夏彌	同
ジョクジャとバリ島	伊東 深水	同	三ノ一	ビルマのやきものなど	辻 嘉一	同	一八	繪本をつくる人々	松葉 重庸	同
南方新建築の構想	藤島亥治郎	國際文化	二五	バイコールの建設年代と最近の南方畫	藤岡 通夫	美術史學	七五	地方文化政策の基礎	高森 榮次	同
佛印現代美術展の覺書	荻須高德	同	二六	比島の生活	佐藤 敬	美術新報	四七	科學・技術と藝術	杉 靖三郎	同
西貢雜記	清田 文永	新建築	一九ノ九	比島の住民	猪熊弦一郎	同	同	大東亞建設と國畫教育	團 伊能	同
中支那の民家	河村 五朗	同	一九ノ一	ビルマ人の協力	伊原宇三郎	同	同	國畫教育書遺逸記	大木澤 喬	同
陳中バガン紀行	小島 新吾	同	二〇ノ四	ニールソンの想出	宮本 三郎	同	同	鑑賞教育私論	湯川 尙文	同
パガンの遺蹟	同	同	同	南方從軍行に際して	鶴田 吾郎	同	六五	私の圖畫指導	村山 義雄	同
ラバウルの想ひ出	中村 直人	帝大新聞	一九・二・	上海雜記	橋本 關雪	大 朝	二一〇、	紙芝居に望む	服部 重博	同
新生比島の繪畫土下	淺見 淵	讀 賣	一九・八・	南方の色彩	大智 浩	同	二・一五、	機械と圖畫	豐田 芳郎	同
ビルマ人の協力について	伊原宇三郎	新美術	一九	共榮團の文化宣傳	泰山 行夫	京	八・八一			
コタバル行	中村 研一	同	同	カンボジア國立博物館	松本 信廣譯	同	五・一〇			
爪哇の古代藝術	太田 三郎	同	二〇・二	館グロリエ	橋本 關雪	東 朝	五・一八			
佛印の繪畫	佐波 甫	同	二三	上海雜記	同	朝	八・一五			
南より歸りて	三田 康	同	同	行政・教育	伊東 忠太	讀賣報知	八・一五			
現代佛印の漆藝	森口 多里	同	二五	台灣少年工育成への課題・雜感	柏崎 榮助	工藝ニ	一二ノ七			
オランパゲ	小林 米作	生活美術	一七	美術教育問題の検討	美術問題研 究會編	新美術	一八			
ニューブリテン島、パプア族の生態	金子 家基	同	同	美術の類型について	竹田 俊雄	生活美術	二五			
支那の青磁	小山富士夫	中央公論	五八ノ一	繪本とことば	與田 準一	同	同			
現代中國繪畫の印象	須田國太郎	南畫鑑賞	一二ノ七	繪本の材料と印刷技術	北川民次	同	同			
マニラの靴磨き	勝田 勝	日本美術	二ノ三	よい繪本と悪い繪本	松葉 重庸	同	同			

展覽會記事及批評

綜合展覽會

海洋美術展の日本畫	金井 紫雲	國 畫	三ノ九	單行本式繪本に就て	波多野完治	同
京都市第八回美術展	神崎 憲一	同	三ノ八	童畫家教育の問題	三輪 和敏	同
細 觀	日正 重亮	同	同	繪本の心理と社會性	牛島 義友	同
京都市展總觀	豐田 豊	美術新報	六五	繪本の教育性	依田 新	同
京都市展	辻本和兵衛	日本美術	二ノ六	繪本の教育性	青木誠四郎	同
軍事保護美術展	松村 徹三	美術と趣味	七九	造形美術による兒童教育の問題	松原 公平	同
賞式挨拶	横山 大觀	美術	二ノ一	繪本參考文獻	ゾルフ・ドウリアン	同
				最初の繪本	柴田 隆二	同
				教科書の挿繪	光吉 夏彌	同
				繪本を育てる座談會	松葉 重庸	同
				繪本をつくる人々	高森 榮次	同
				地方文化政策の基礎	杉 靖三郎	同
				科學・技術と藝術	團 伊能	同
				大東亞建設と國畫教育	大木澤 喬	同
				國畫教育書遺逸記	湯川 尙文	同
				鑑賞教育私論	村山 義雄	同
				私の圖畫指導	服部 重博	同
				紙芝居に望む	豐田 芳郎	同
				機械と圖畫		同

軍需援護美術展に 就て	高村 豊周	美術	二ノ一	大東亞戰爭美術展 と寫眞性	柳 亮	新美術	一九	文展の諸問題	鈴木 進	日本畫及 工藝	一
軍事援護美術展覽 會評	植村 鷹千代	同	同	思想戰線における 繪畫	木村 重夫	國畫	三ノ二	文展觀覽雜感 竹の台初冬	野間 清六	美術	二ノ二
群馬美術協會獻納作展		美術新報	六七	大東亞戰爭と藝術 の形塑	佐波 甫	同	同	第一部評	北川 桃雄	日本美術	二ノ一一
決戰美術展	田澤 田軒	美術新報	七三	作戰記錄畫に就て 中村研一 佐藤敬	伊原宇三郎	同	同	出品作の傾向——審 査員は語る——	小林源太郎	同	同
決戰美術展を見て	雨田 光平	畫論	二六	大東亞戰爭美術展 を觀て	今井繁三郎	同	同	第六回文展日本畫 所感	伊東 深水	同	同
決戰美術、二科、 日本美術院の彫刻	四宮 潤一	日本美術	二ノ九	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	第二部評	荒城 季夫	日本畫及 工藝	一
決戰美術展の評	柳 亮	畫論	二六	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	石井 柏亭	同	同
決戰美術展の日本畫	菊地芳一郎	日本美術	二ノ九	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	文展第二部と新 制作派の彫塑	幡谷 正義	美術新報	七六
決戰軍需生産美術 展覽會	木村重夫	國畫	三ノ一一	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	日本美術	二ノ一一
現代美術第五回展	吉原 義彦	美術	二ノ三	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	中川 一致	美術新報	七六
現代美術展評	木村 重夫	同	三ノ一〇	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	北村 西望外	美術新報	七六
航空美術第三回展	大山 廣光	國畫	三ノ一一	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
國畫會展を觀る	内海 文夫	美術新報	六〇	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
國展評	鈴木 進	畫論	二三	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
國展の工藝	大島 隆一	美術新報	六〇	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
三三美術第二回展	木村重夫	國畫	三ノ一一	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
三三美術第二回展評	杉 並人	日本美術	二ノ九	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
三三美術團展覽會展		美術新報	七三	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
春陽會展	荒城 季夫	日本美術	二ノ五	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
春陽會展評	内山 義郎	畫論	二二	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
春陽會に是正さる べきもの	江川 和彦	美術新報	五八	大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
兵庫縣新美術聯盟展	新 美	一一一		大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同
白井次郎遺作展覽會	美術新報	七四		大東亞戰爭美術展 を觀て	柳 亮	美術	二	出品作の傾向——審 査員は語る——	大藏 雄夫	同	同

第三部評

上野 照夫 大 毎 一二・一

大日 理夫 東 毎 一〇・二

第四部評

本郷 新 讀賣報知 一〇・二

森口 多里 東 京 一〇・二

春山 武松 大 朝 一〇・二

上野 照夫 大 毎 一二・一

明治美術名作大展示會

観て 鏑木 清方 日本美術 二ノ四

日本畫評

落葉のいのち 浅野 晃 同 二ノ三

洋畫評

岩佐 新 日本美術 二ノ三

陸軍美術展

江川 和彦 美術新報 五五

陸軍美術展の日本畫

鶴田 吾郎 同 七三

秋の美術

遠山 孝 帝大新聞 九・六

日本畫

秋田仙喬個展

日正 重亮 國 畫 三ノ四

華の芽會第二回展

竹久虹之助 同 三ノ四

池上秀畝奉獻日作品展

神崎 憲一 日本美術 二ノ三

池上秀畝大詔奉獻日

神崎 憲一 日本畫及 二

揮毫奉獻畫展示會

工藤 日本美術 二ノ七

池田遙村個展

大山 廣光 國 畫 三ノ九

板倉星光個展

神崎 憲一 同 三ノ九

一采社第三回展

日正 重亮 同 三ノ一

一采社展評

竹久虹之助 同 三ノ九

岩佐古香氏個展

日正 重亮 國 畫 三ノ五

岩崎鐸氏個展

同 國 畫 三ノ六

岩手美術聯盟第二回展

美術新報 五八

院展評

美術新報 二ノ六

上野忠雅限取十八番展

豐田 豐 美術新報 五四

大阪展評

日正 重亮 國 畫 三ノ三

大矢峻嶺個展

竹久虹之助 同 三ノ五

大山魯牛第二回個展

同 日本美術 二ノ四

小川千麿個展

同 國 畫 三ノ四

小川千麿個展評

添田 達嶺 同 三ノ一

落合朗風遺作展

素心庵生 畫 論 一七

鹿兒島二喬個展

金井 紫雲 國 畫 三ノ五

梶宗樹個展

竹久虹之助 同 三ノ八

加納三樂個展

日正 重亮 同 三ノ三

河口樂士氏個展

神崎 憲一 同 三ノ一

川村曼舟遺作展と第一回排入社展

大山 廣光 同 三ノ七

關西會第三回展

竹久虹之助 同 三ノ四

關西邦畫展

同 同 三ノ四

關西美堂展

竹久虹之助 同 九、一四

菊地友一屏風繪展

日本美術 二ノ一

北白川宮永久王殿下御戰蹟並に北支戰蹟展

神崎 憲一 國 畫 三ノ五

京都繪專研究科作品展

竹久虹之助 同 三ノ九

京都護國神社に奉納を觀る

豐田 豐 同 三ノ五

木下青陽個展

日正 重亮 國 畫 三ノ六

國外美術院第四回展

竹久虹之助 同 同

乾坤社第五回展

豐田 豐 美術新報 七四

乾坤社評

田澤 田軒 日本美術 二ノ九

耕人社展

鈴木 進 國 畫 三ノ一

耕人社展評

神崎 憲一 同 三ノ一〇

煌土社展

小笠原秀實 日本美術 二ノ八

煌土社展評

吉副 禎三 畫 論 二二

國土會展

金井 紫雲 國 畫 三ノ九

小堀靑翁遺墨展

美術新報 六二

中華民國巡迴展

日本美術 二ノ六

兒玉鑒第七回展

工藝 二

兒玉鑒展評

國際文化振興會 同

小林栞白作品展

日本美術 二ノ四

小柳創生個展

木村 重夫 同 二ノ五

彩交會第一回展

豐田 豐 國 畫 三ノ六

彩桂社獻納畫展

日正 重亮 美術新報 五八

佐々木永秀、森梅溪二人展

竹久虹之助 同 三ノ九

早芹社第四回展

竹久虹之助 同 三ノ六

樺木社第十八回展

美術新報 六三

七絃會第十三回展

竹久虹之助 同 三ノ四

七絃會評

同 同 三ノ一〇

佐波 市 同 三ノ八

藤田 健次 同 三ノ七



朱兆會第一回展	豐田 豐	美術新報 四八	青龍社第二回展	竹久虹之助	國 畫 三ノ八	短冊展示會	竹久虹之助	日本美術 二ノ七
春曉會第二回展	神崎 憲一	國 畫 三ノ二	青龍社展評	大日 理夫	美術新報 六三	渡邊水虛水墨畫展	竹久虹之助	日本美術 三ノ一
尙綱會第二回展	日正 重亮	同 三ノ四	青龍社第十五回展	田澤 田軒	日本美術 二ノ九	玉村方久斗個展	竹久虹之助	日本美術 二ノ七
松子社第二回展	佐波 甫	同 三ノ二	青龍展評	田口 信行	同 二ノ五	團樂社童寶展	同 同	同 三ノ四
松柏會第三回展	竹久虹之助	日本美術 二ノ二		四宮 潤一	美術新報 七一	忠愛美術院第三回展	同 同	同 三ノ六
新興美術院第六回展	日正 重亮	同 三ノ五		木村 重夫	美術新報 五七、七	大東南宗院二回展	同 同	同 三ノ四
新樹社第三回展	神崎 憲一	日本美術 二ノ五		同 同	同 三ノ一〇	大日美術院第六回展	金井 紫雲	美術と趣味 七九
晨人會第一回展	日正 重亮	國 畫 三ノ九		金井 紫雲	同 三ノ五	大日展評	木村 重夫	國 畫 三ノ八
新生支那と現代日本畫展	吉副 禎三	同 三ノ一〇		田澤 田軒	同 同		豐田 豐	美術新報 六二
新美術人展	佐波 甫	同 同		鈴木 進	同 二六		河野 桐谷	美術と趣味 七九
昭華會展	木村 重夫	美術新報 六六	青龍社、院展評	石川 宰三郎	日本美術 二ノ九	大輪畫院第六回展	松村 徹三	同 同
珊々會第九回展	竹久虹之助	日本美術 二ノ七	青龍展(十六回)	森口 多里	美術 一〇、一		木村 重夫	國 畫 三ノ一
青丘會展	金井 紫雲	日本美術 二ノ二	青龍社十七回展	宮川 謙一	同 二ノ六	大輪畫院と清瀧社	豐田 豐	同 三ノ一〇
青丘會と綵尙會	木村 重夫	日本美術 二ノ七		荒城 季夫	朝 日 八・二七	大輪畫院と劇畫院展	杉 並人	日本美術 二ノ九
青莪會第十四回展	豐田 豐	國 畫 三ノ一〇		大口 理夫	東京 八・三一	鳥澤會第一回展	豐田 豐	美術新報 七三
綵尙會第五回展	吉副 禎三	新 美 一一一	閑人社第五回展	竹久虹之助	國 畫 三ノ一〇	朝陽社第二回展	日正 重亮	國 畫 三ノ一〇
青々會第二回展	豐田 豐	美術新報 六六	全日本畫家報國獻納畫展	木村 重夫	同 三ノ三	長流畫塾第六回皇軍慰問獻畫展	豐田 豐	日本美術 二ノ五
青々會展	日正 重亮	美術と趣味 七九		豐田 豐	美術新報 五〇	東京會展	同 同	同 三ノ六
清光會第十回展	大山 廣光	國 畫 三ノ八	宅野田夫個展	竹久虹之助	美術新報 五九	東京會評	同 同	同 二ノ一
青衿會第四回展	同 同	日本畫及工藝 三ノ一	竹内栖鳳回顧展	田中 一松	同 三ノ三	東邦畫研究會	豐田 豐	日本美術 六二
清溪會第九回展	木村 重夫	國 畫 三ノ一	栖鳳の回顧展	木村 重夫	同 三ノ七	東邦畫會評	同 同	同 三ノ八
清緒社第三回展	神崎 憲一	美術新報 五八		上村 松園	美術と趣味 七九	東美會の産業戰士激勵展	竹久虹之助	同 三ノ二
	木村 重夫	日本美術 二ノ五		竹內 逸	美術新報 六一	同 同	同 同	同 三ノ一〇
	豐田 豐	日本美術 二ノ九		川島 義夫	同 同	同 同	同 同	同 三ノ一一
	豐田 豐	日本美術 三ノ一〇		田澤 田軒	同 同	同 同	同 同	同 三ノ一
	豐田 豐	國 畫 三ノ一〇		神崎 憲一	同 五二	同 同	同 同	同 三ノ八



旺文社展評

森田龜之助 新美術 二三

藤島武二遺作展 岩佐 新美術 一八・二

加藤靜見遺作展

畫 論 二一

中川紀元・佐野繁次郎 竹久虹之助 美術新報 七三

光風會廿回展

日本美術 二〇・三

邦畫一如第三回展 江川 和彦 新美術 八・二

謝日會九回展

美術新報 五三

三井コレクシヨン歐 洲繪畫特別展觀 江川 和彦 日本美術 三〇・八

謝日會評

山岸 外史 同 六二

同 五九

同 七四

朱葉會第二十五回展

同 七四

同 七二

同 七四

春台展評

尾川 多計 日本美術 二〇・三

同 二六

同 四八

新美術と春台展

美術新報 五二

同 二七

同 四八

新美術家協會展

日本美術 二〇・三

同 二七

同 二六

新制作派展評

佐藤 敬 美術新報 七五

同 七二

同 二六

新制作派及一水會評

輔谷 正義 同 二七

同 二七

同 二六

一水會と新制作派

今泉 篤男 東京 九・二七

同 二七

同 二六

一水會・新制作派

柳 亮 讀賣報知 一〇・二

同 二七

同 二六

千興會展

小堀 進 美術新報 七四

同 七四

同 二六

双台展

江川 和彦 同 六三

同 六三

同 二六

双台展の課題制作について

同 同

同 六三

同 二六

双台展の特陳畫

同 同

同 六三

同 二六

創元會評

中野 和高 日本美術 二〇・七

同 六六

同 二六

東光會展

佐藤 一章 美術新報 五七

同 五七

同 二六

東光會評

日本美術 二〇・五

同 五七

同 二六

工 藝

興亞造形文化展 大島 隆一 美術新報 六九

國民生活用品第二回 商工省主催 工藝ニム 一二・五

展概況 德力福田兩氏作陶展 大島 隆一 美術新報 七三

二つの工藝展―名作 鑑賞會、工藝展匠會― 同 六三

二つの世代―現代工 藝巨匠展、辻工房展― 同 六八



其の他

鑑賞三題	本間 久雄	日本美術	二ノ一
歳末市井展批評	豊田 豊	國畫	三ノ一
市井展記録	日本畫及工藝		一・二
展覽會月評	江川 和彦	美術	六・一一
展覽會短評課題制作の問題	同		三・四
展覽會日記	村川彌五郎	生活美術	一八

古美術關係文獻 (定期刊行物所載)

總說

藝術に於ける亞細亞的性	江川 和彦	生活美術	一九
古典道造	本郷 新	畫論	一七
藝術に現れた力の表現	山際 靖	美術	二
現はゆる永遠記念への道	熊代 莊達	美術史學	八一
美に於ける超自然に就いて	西田 正秋	日本美術	二ノ二
顔の美學	田口 信行	生活美術	二二
生きた人間としての藝術	井島 勉	國畫	三ノ一〇
美術の民族的基礎と共榮團的基礎	國寶雜誌	國寶	六ノ一〇
佛教に於ける自然美と光明	横越 慧日	國華	六三九
佛教藝術の起源	瀧 精一		六四二
大乘佛教の審美觀	瀧 精一		六四三
十一面觀音の表現に就いて	佐和 隆研	密教研究	六三四
			八四

看畫覺書

春の東都諸展觀	豐田 豊	美術新報	五七
二三の展覽會からの感想	江川 生	生活美術	一九
幻燈美術展	木村 莊八	美術	五
必勝繪馬獻納額末要録	山口蓬春	同	
大東亞神話傳說展	日本畫及工藝		二
工藝展記録	同		一、二

日本藝術の興隆

神道文化の淵源	村山 修一	史蹟名勝天然紀念物	一八ノ四
日本美術の觀念の發生	西田 正秋	南畫鑑賞	一二ノ六
日本美術の交流	金原 省吾	日本美術	二ノ三
日本美術の特質	中村 亮平	同	二ノ一
日本美術に於ける民族的性	北野 巧義	畫論	一七
日本美術の反省	田口 信行	生活美術	一九
日本藝術と悠久性	西堀 一三	國畫	三ノ五
日本思想史	中村 直勝	美術工藝	二二三〇
日本上代の工匠に就いて	野間 清六	國華	六三九
			六四〇

弘仁文化の反省

東山藝術とその生活	下店 靜市	美術史學	八五
日本美術史	魚澄惣五郎	國寶	六ノ九
			九

二、中古

三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

日本美術史

一、上古	熊谷 宜夫	美術史學	一〇・一
二、中古	大口 理夫	同	一〇・二
三、近古	白畑 よし	同	二ノ一
四、中世	谷 信一	同	二ノ二
五、近世	田中 一松	同	二ノ三

藤原時代の彩色繪具	下店 靜市	美術史學	七四
萬葉集と色彩	藤田 經世	同	八二
校註七代巡禮私記	一、二、三、四、五	建築史	五ノ二
護國寺本諸寺緣起集	藤田 經世	美術史學	八六
行林抄のこと(事相書目研究の一)	龜田 孜	國寶	六ノ六
東山新書畫展觀目錄(校刊)	同	美術史學	八八
寛政九年春の東山書畫展觀	脇本十九郎	同	同
栗山新書畫展觀目錄(校刊)	同	同	八五
正倉院御物を拜觀して	熊代信助	同	七三
無道遊歩記	井上 登	南畫鑑賞	一二ノ六
矢田寺所見	龜田 孜	美術史學	七九
安藝から備後へ下	丸尾彰三郎	美術史學	七九
近江、野州安樂寺と日光寺の靈寶	中野 楚溪	史迹と美術	一四九
岩手縣の古美術	森口 多里	畫論	二一
津輕郷土の藝術	下澤木鉢郎	同	二三
大東亞建設と日本美術	秋山謙三	美術	七
一法隆寺壁畫	同	美術工藝	一九
東大寺法華堂(三月堂)	岡田 章雄	美術史學	七三
モンタヌス日本誌の大佛の圖に觸れて	望月 信成	美術工藝	二三
當麻寺の遺薰	同	美術史學	一六
淨瑠璃寺	毛利 久	史迹と美術	一五九
四天王寺五重塔の佛像と壁畫	佐藤 賢順	國寶	六ノ九
黑地蔵と願行上人(鎌倉佛蹟の一)	同	畫論	二六
芭蕉の茶と書畫	菊山當年男	同	同

アジア各地

大陸藝術の春風和氣	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一二ノ五
元の紙幣の様式に就いて	前田 直典	考古學雜誌	三三ノ四
東壁抄	田中 喜作	清	一六
朝鮮行	同	同	同

アジャ各地

大陸藝術の春風和氣	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一二ノ五
元の紙幣の様式に就いて	前田 直典	考古學雜誌	三三ノ四
東壁抄	田中 喜作	清	一六
朝鮮行	同	同	同

アジャ各地

大陸藝術の春風和氣	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一二ノ五
元の紙幣の様式に就いて	前田 直典	考古學雜誌	三三ノ四
東壁抄	田中 喜作	清	一六
朝鮮行	同	同	同

アジャ各地

大陸藝術の春風和氣	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一二ノ五
元の紙幣の様式に就いて	前田 直典	考古學雜誌	三三ノ四
東壁抄	田中 喜作	清	一六
朝鮮行	同	同	同

アジャ各地

大陸藝術の春風和氣	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一二ノ五
元の紙幣の様式に就いて	前田 直典	考古學雜誌	三三ノ四
東壁抄	田中 喜作	清	一六
朝鮮行	同	同	同

爪哇の古代藝術 太田 三郎 新美術 二二

繪 畫

東洋畫に於ける山岳の意味 金原 省吾 生活美術 二四

東洋畫に於ける海洋の表現 北川 桃雄 新美術 二六

東洋の繪畫の精神と戦争畫 橋本 關雪 國 畫 三ノ一

繪畫と文學 池田 龜鑑 同 三ノ二

觀念と表出方式とに就いて——東洋畫の構造序説—— 熊代 信助 美術史學 九〇

群像構圖論 柳 亮 美術史學 七五

餘白洩説 上 脇本十九郎 美術史學 一二ノ六

破墨と澀墨再論 鶴岡壬子郎 南畫鑑賞 一二ノ六

日 本

日本畫に於ける東洋的もの 鼓 常良 國 畫 三ノ一

日本的美意識と繪畫 山口 諭助 同 三ノ六

日本畫に於ける表情 大口 理夫 生活美術 二六

古典藝術に於ける記號畫の問題 田中 一松 美術史學 三・四

日本繪畫の群像に就いて 小林太市郎 同 一

歴史畫の現代的意義 遠藤 元男 國 畫 三ノ四

截金文様の研究——平安朝佛畫を中心として—— 白畑 よし 美術研究 一三九

本朝畫史の主眼 田中 豐藏 美術史學 七三

畫本研究 一、二 相見 繁一 同 七・八

勤王志士と繪畫 佐波 市 國 畫 三ノ三

本居宣長の繪畫論 久松 潜一 同 三ノ一〇

金地彩色畫に就いて 山下新太郎 美術史學 七三

日本畫に於ける勳勞描寫 奥平 英雄 論 二七

日本の花鳥畫 大口 理夫 季刊美術 二ノ三

雪の繪 西堀 一三 國 畫 三ノ二

證印阿闍梨と證印本 土宜 成雄 美術史學 七七

釋迦涅槃圖 解説 根津美術館藏 國 華 六三九

阿彌陀如來圖 解説 木村貞造藏 同 六三七

阿彌陀三尊圖 解説 根津美術館藏 同 六二八

紅瓊梨色阿彌陀圖 解説 原良三郎藏 同 六四六

金棺出現圖 解説 長法寺藏 美術研究 一三四

金棺出現圖 解説 大日如來像 鈴木 進 生活美術 二〇

武藏金太藏 解説 阿彌陀二十五菩薩來迎圖 解説 美術研究 一三五

興福院藏 解説 阿彌陀二十五菩薩來迎圖 解説 美術研究 一三五

「藥師彌勒菩薩合一」 藤田 經世 美術史學 八〇

錦の圖 解説 峰寺の聖觀音像 解説 國 華 六二六

觀世音菩薩像 解説 武藏金太藏 同 六三一

船中通現觀音像をめぐりて 龜田 孜 密教研究 八四

如意輪觀音圖 解説 如意輪觀音圖 解説 國 華 六三四

金剛寺の如意輪觀音圖 解説 金剛寺の如意輪觀音圖 解説 同 六二七

愚極自畫文殊像 解説 守屋孝藏藏 同 六四四

渡海文殊像について 大串 純夫 美術研究 一三一

再び五台山文殊について 下店 靜市 美術史學 八八

地藏菩薩二童子圖 解説 地藏菩薩二童子圖 解説 國 華 六四二

愛染明王圖 解説 大倉集古館藏 同 六四九

愛染明王圖 解説 根津美術館藏 同 六三〇

無畏十力吼像 松下 隆章 生活美術 二七

不動明王二童子圖 解説 根津美術館藏 國 華 六三八

不動明王像に就いて 三才 笹吉 美術史學 八六

戰爭畫としての不動明王 佐和 隆研 美術史學 八六

曼荼羅講話 下店 靜市 美術新報 七〇

久米寺所藏の曼荼羅に就いて 森 暢 實 雲 三一

摩尼寶珠曼荼羅に就いて 松下 隆章 美術研究 一三一

久米寺所藏の仁王經曼荼羅に就いて 森 暢 實 雲 三三

童子經法及び童子經曼荼羅 小林太市郎 密教研究 八四

月摩尼と谷潜 渡部美津九 美術史學 七四

法隆寺壁畫の山中羅漢圖 松本 榮一 國 華 六四〇

法隆寺金堂壁畫 松下 隆章 生活美術 二四

常樂寺三重塔壁畫の研究 田中 重久 史迹と美術 一五六

神道の繪畫 二、三 下店 靜市 同 一四七

春日曼荼羅の發生とその流布 永島福太郎 美術研究 一三三

春日宮曼荼羅 解説 春日宮曼荼羅 解説 同 一二八

湯淺七左衛門藏 解説 山王曼荼羅圖 解説 國 華 六三五

小倉武之助藏 解説 法華經歌繪について 白畑 よし 美術史學 八八

扇面古寫經 解説 四天王寺藏 同 一五

松平伯爵家藏法華經見返に就いて 白畑 よし 美術研究 一三七

源氏一品經その他 藤田 經世 美術史學 八八

正倉院御物琵琶桿撥駒象奏樂圖 松下 隆章 生活美術 二五

大和繪 金原 省吾 造型教育 九ノ一

上代優繪景物畫の研究 家永 三郎 美術研究 一二八

日本の繪畫に於ける風景畫の成立 源 豊宗 日本美術 二ノ二

女繪考 白畑 よし 美術研究 一三二

山水屏風の研究 小林太市郎 國 華 六二六

莊嚴經のこと 伊丹孝三郎 古美術 一四六

那智瀧圖 解説 根津美術館藏 美術研究 一三八

鏡山圖 解説 國 華 六三六  
根津美術館藏

避邪繪卷に就いて 小林太市郎 同 六四一  
一六四七

一過上人繪傳殘缺 解説 同 六四〇  
過去現在因果經(東 鈴木 進 生活美術 一九

京美術學校藏) 繪因果經私考上、下 松本 榮一 國 華 六四八  
六四九

繪因果經の體裁に就 梶本 龜生 清 閑 一六  
一六

飲泉草子(名品小解) 美術史學 八一  
鑑真和尚東征繪傳清賞 新村 出 清 閑 一五

天神緣起繪卷殘欠 解説 美術研究 一二八  
帝室博物館藏

東大寺華嚴五十五箇 龜田 孜 清 閑 一八  
所繪小考

隆能源氏に係る二三 田中 喜作 美術研究 一三〇  
の問題

弘法大師行狀繪卷殘欠 解説 國 華 六四三  
福岡孝悌藏

高山寺畫卷中の「寫 渡部美津丸 美術史學 八四  
生」卷に就いて

信貴山緣起繪卷に於 谷口 鐵雄 清 閑 一九  
ける同一構圖の反復

信貴山緣起繪卷修理 龜田 孜 文 化 一一ノ八  
改裝の記

信貴山緣起の模本類 福井利吉郎 同 一一ノ八  
と二三の問題

一復原を中心として 梅津 次郎 美術研究 一一ノ八  
帝室博物館藏緣起

繪卷考 同 一一ノ八  
隨身庭騎繪卷雜記

年中行事繪卷の諸本 福山 敏男 文 化 一一ノ八  
に就いて

伴大納言繪詞小考 谷口 鐵雄 清 閑 一五  
平治合戰繪卷の群衆

類阿彌陀とその緣 佐藤 賢順 國 實 六ノ一一  
起繪卷 蒙古製來繪詞配列考 鈴木 敬三 文 化 一一ノ八  
承朝賢渡唐天神圖 解説 國 華 六三一  
守屋孝藏藏 似繪の性格に就いて 裏辻 憲道 美術史學 七三  
似繪の貴重資料 多賀 宗平 同 八四  
上巻歌仙教忠圖 解説 國 華 六四一  
栗栖仙藏藏 後宇多天皇御像 赤松 俊秀 寶 雲 三五  
古版法然上人影に就 裏辻 憲道 美術史學 七四  
いて 南叟慧居士像 解説 美術研究 一三七  
木村貞造藏 白樂天像 解説 同 一三八  
武藤金太藏 黃山谷像 解説 國 華 六四二  
雲谷派畫家資料 水墨畫の性格 北川 桃雄 南畫鑑賞 一二ノ八  
鎌倉繪僧贊春山水圖 解説 國 華 六二七  
根津美術館藏 周茂叔愛蓮圖 解説 同 六二九  
根津美術館藏 模繪の印象 北川 桃雄 日本美術 二ノ一  
京狩野三代記 相見 香雨 美術新報 四七  
大覺寺正寢殿の張付模 拙 庵 國 華 六四六  
大覺寺御冠之間の張 同 六二六  
付畫 名古屋城の障壁畫に 田中 一松 國 畫 三ノ五  
就いて 箱根早雲寺の模繪に 土居 次義 美術史學 七五  
就いて 箱根城大廣間繪圖に 小倉 強 建築史 五ノ一  
就いて 龜頭花と芥子花屏風 田中 一松 國 畫 三ノ八  
飾馬圖 解説 國 華 六三六

淺野侯爵家舊藏 「宇佐八幡放生會繪 景山附四郎 國學院雜 四八ノ七  
圖」に就いて 田中 喜作 美術研究 一三八  
南畫發祥期の數家子 近藤市太郎 南畫鑑賞 一二ノ二  
上巻 實主義に於ける寫 二 納崎 宗重 國 實 六ノ四  
日本版畫史論 下 織田 一磨 美術新報 六九  
浮世繪の話 歌舞伎屏風について 吉田 映二 國 畫 三ノ二  
新發見の歌舞伎屏風 富士山の繪 長崎の繪畫 永見德太郎 美術新報 五八  
長崎の沈南蘋派 一、二 同 五〇、六

高久齋屋雜組 人見 傳藏 南畫鑑賞 八ノ六一  
上ノ一、下ノ七 高久齋屋筆西國雅集圖 解説 國 華 六三四  
外山知三藏 亞歐堂田善 下 旭 泰宏 日本美術 二ノ二  
浮田一惠筆勿來圖 喜多川歌麿筆文殊圖 解説 同 六三九  
小倉武之助藏 南禪寺方丈永德筆の模繪に就いて 同 六三八  
永德と友松とを顧る 小林源太郎 美術新報 六六  
狩野永納筆蓮池鶴圖 解説 國 華 六四七  
武內金平藏 大乗寺應舉孔雀圖模(名品小解) 美術史學 七五  
華山とその弟子椿山 菅沼 貞三 清 閑 一六  
田原藩御日記抄 大須賀初夫 南畫鑑賞 五、三、一  
華山初期の作品 菅沼 貞三 美術研究 一二九  
華山中期的作品 同 一三二  
渡邊華山筆一掃百態 鈴木 進 生活美術 一八  
渡邊華山筆達磨圖 解説 國 華 六四五  
阪田八十郎藏



渡邊華山筆老馬圖	解説	國	六四三	狩野松榮の一畫蹟	土居 次義	史迹と美	一四八	中林竹溪筆木蘭詩圖	解説	國	六四二
渡邊華山筆梅花鴛鴦圖	解説	同	六三六	祥啓筆山水圖	解説	國	六四九	森徹山筆雙牛圖	解説	同	六二八
谷幹々筆山水圖	解説	同	六四四	紹仙筆山水圖	解説	同	六三〇	東京帝國博物館藏			
何昇筆天神圖	解説	美術研究	一三五	神毫筆蘆葉連唐圖	解説	同	六四二	雲谷等筆孔子像及人物山水屏風	解説	國	六四八
鑑貞筆山水圖	解説	國	六四七	齊夕筆蘆葉圖	解説	同	六三〇	雲谷等筆七福神圖	解説	同	六二八
東京帝國博物館藏				赤脚子筆成道圖	解説	同	六三三	雲谷等筆筆馬圖屏風	解説	同	六三一
支意阿闍梨に關する	土宜 成雄	寶	三〇	守屋孝藏藏		同	六二九	雲谷等筆四季耕作圖	解説	同	六四〇
二三の問題に就いて	暉峻 康雄	畫	三〇	雪江筆月下柳鷗圖	解説	同	六二九	雲谷等筆筆四季耕作圖	解説	同	六四〇
平賀源内の洋畫		國	三ノ一	雪舟の模寫	山岡千太郎	清 閑	一九	等伯猿猴圖 (名品小解)		美術史學	八五
興悅筆八仙圖	解説	同	六四五	雪舟筆仿古山水牧牛圖	解説	美術研究	一三五	土岐洞文筆管公像		國	六三九
武田憲治郎藏		同	六四一	小栗宗繼	芳賀幸四郎	美術史學	七二	雲谷等與筆棋書畫圖屏風	解説	同	六四八
立原杏所筆寒巖枯木圖	解説	同	六四一	宗達雜考 一三三	谷口 鐵雄	同	六四五	土方稻嶺筆孔雀圖屏風	解説	同	六四九
杏所筆夏天急雨圖	解説	同	六三〇	根津美術館藏	森 銑三	國	六三二	懷月堂畫秀筆遊女圖	解説	同	六二九
玉川筆山水圖	解説	美術研究	一二八	森根仙筆雜圖	解説	同	六三二	武內金平藏		同	六三三
和中金助藏		國	六四九	根津美術館藏	長澤伴雄の「都の日記」に見ゆる爲恭資料	森 銑三	三ノ七	小倉武之助藏		美術史學	七六
池玉瀾筆菊花圖	解説	國	六四九	冷泉爲恭の畫論	土居 次義	美術史學	七六	細川成之の畫事	勞賀幸四郎	美術史學	九〇
尾形光琳筆間垣夕顔葛圖	解説	同	六四一	大雅樓繪隨想	土居 次義	南畫鑑賞	一、一二	南海系譜(公刊)		美術研究	一三七
武田憲治郎藏		國	六〇三	池大雅洞庭赤壁圖	樂之軒	合冊	一、一二	梅邊筆東山眞景圖	解説	同	一三八
東福寺法堂の天井畫	土居 次義	國	六〇三	大雅筆樓閣山水圖	解説	美術史學	八六	廣重の藝術	檜崎 宗重	國	六〇一
と狩野山樂	土居 次義	美術工藝	二〇	園男爵家藏		美術研究	一三四	一立齋廣重筆洲崎朝景圖、高輪夜	景圖 小倉武之助藏、解説	國	六三六
四天王寺の聖德太子	土居 次義	美術工藝	二〇	池大雅筆山水畫卷	解説	國	六四六	一立齋廣重筆「六玉	川	國	三ノ四
御繪傳と狩野山樂	土居 次義	美術工藝	二〇	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六四〇	一立齋廣重筆「六玉	高橋誠一郎	國	三ノ四
傳周文筆山水圖	解説	國	六三二	大倉集古館藏		同	六四〇	川		國	三ノ四
根津美術館藏		國	六三二	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村への回想	鈴木 進	南畫鑑賞	一二ノ三
川崎・根津兩家の寒	谷 信一	美術史學	七四	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	廣 末保	同	一二ノ二
傳周文筆「普一國師	芳賀幸四郎	美術史學	七四	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	正木 瓜村	同	一二ノ五
像」について	田中 一松	美術史學	二	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	赤松 義磨	同	一二ノ四
信海の不動明王像	服部 如實	日本美術	二ノ二	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	鈴木 進	同	一二ノ四
巖佐又兵衛の歌仙畫	藤懸 靜也	國	六三一	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	鈴木 進	同	一二ノ四
に就いて	藤懸 靜也	國	六三一	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	鈴木 進	同	一二ノ四
岩佐勝以筆歌仙伊勢圖、赤人圖、		同	六四三	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	鈴木 進	同	一二ノ四
躬恒圖 武內金平藏	解説	同	六四三	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	鈴木 進	同	一二ノ四
證印阿闍梨と證印本	土宜 成雄	美術史學	七七	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	鈴木 進	同	一二ノ四
に就いて	土宜 成雄	美術史學	七七	田能村竹田筆觀世音菩薩圖	解説	同	六三七	蕪村の思慕	鈴木 進	同	一二ノ四

蕪村燕見	中川 紀元	南畫鑑賞	一二ノ三	大倉集古館藏	國	華	六三三	畫松論	小林太市郎	南畫鑑賞	一二ノ一
蕪村略年譜	編輯部	同	一二ノ四	狩野元秀筆扇面京名所圖	解說	國	華	宋元院體畫難考	谷 信一	美術	七
蕪村略年譜及印譜	同	同	一二ノ三	武內金平藏	同	國	華	日本と支那	同	同	同
蕪村の畫境の進展	望月 信成	同	同	久岡守景の障壁畫	土居 次義	史迹と美術	一五七	黃筌の北宋畫	永見徳太郎	美術新報	六五
寺村家の蕪村遺稿	額原 退藏	同	一二ノ四	久岡守景筆宇治橋賀茂鶴馬圖屏風	國	華	六三七	我國に於ける宋元畫	松下 隆章	美術	七
俳書の傳へる畫人蕪村	小川雪夫	同	一二ノ四	大倉集古館藏	解說	國	華	江北派の山水	原田 尾山	南畫鑑賞	一二ノ一
與謝蕪村筆山水圖	解說	國	華	根本蘭峨の畫に就いて	望月信成	同	六四七	支那の山と山の繪	奥村伊九良	生活美術	二四
阪田八十郎藏	同	同	六四九	永徳と友松とを顧る	小林源太郎	美術新報	六六	支那山水畫論講話	河野 桐谷	南畫鑑賞	一二ノ七
與謝蕪村筆郭子儀圖	解說	同	六二九	傳友松筆花鳥圖	解說	美術研究	一二八	南畫と北畫	北川 桃雄	美術新報	七一
橫江竹軒藏	同	同	一二ノ一	石原家の海北友松筆	土居 次義	寶 雲	三〇	南畫の聯	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一二ノ一
蕪村三十六俳仙に就いて	勝峯 晋風	南畫鑑賞	一二ノ二	屏風畫に就いて	建仁寺藏	同	六三九	南畫の境地	同	同	一二ノ一
蕪村の俳仙圖について	脇本樂之軒	同	一二ノ五	海北友松筆水墨雲龍圖	建仁寺藏	國	華	南畫と文人畫	吉澤 忠	國	華
蕪村の手束一つ	萩原井泉水	同	一二ノ三	土佐行廣考	下 谷 信一	美術研究	一二八	顧愷之の畫雲台山記	米澤 嘉圃	同	六二六
畫僧文筆傳拾遺	堀部 正二	美術史學	八八	矢野吉重の墨畫に就いて	拙庵	國	華	氣韻について	堂谷 憲男	南畫鑑賞	一二ノ一
谷文晁筆山水圖	解說	國	華	長谷川蘭溪山水冊	解說	美術史學	六三八	古畫品錄解題	川上 溼	美術研究	一三九
阪田八十郎藏	同	同	六四四	長谷川喜作藏	同	國	華	東洋美術思想史料研究	矢代幸雄	同	一三九
文晁筆石山寺緣起に寄せて	正木 篤三	清 閑	一六	寒葉齋涼俗の一面	杉浦正一郎	南畫鑑賞	一二ノ一	五星二十八宿神形圖卷	同	同	六四五
岡田米山人筆山水圖	解說	國	華	靈元天皇宸筆都鳥御繪	瀧 精一	國	華	秋江漁艇圖	解說	同	六三三
梵芳筆竹石圖	解說	同	六三四	長澤蘆雪筆赤駿圖	解說	同	六四一	大坂市立美術館藏	同	同	六三三
武内金平藏	同	同	六三四	根津美術館藏	同	同	六四一	宋畫四時山水畫卷	解說	同	六三三
菅江眞澄の繪について	太田桃介	南畫鑑賞	一二ノ六	長澤蘆雪筆唐兒琴棋書畫圖	解說	同	六三六	宋畫四時山水畫卷の秋冬二景	同	同	六三五
畫家の書狀(一)	谷 信一	新美術	二七	佐々木昌興藏	相見 香雨	南畫鑑賞	一二ノ八	淺野家の竹林梅花圖	田中倉根子	美術研究	一二八
土佐光起筆源氏物語權卷雪まろばし圖	根津美術館藏	國	華	立原朴二郎	同	同	一二ノ八	伊予九筆山水圖	解說	同	一三七
土佐光起筆秋草鶴圖	解說	同	六三二	中國・滿鮮・西域	同	同	一二ノ八	村井市平藏	同	同	一三七
帝室博物館藏	同	同	六三九	新東亞藝術の課題としての支那畫の問題	佐藤 良	美術新報	二四	花光仲仁の序 下	島田修二郎	寶 雲	三〇
狩野光信筆山水圖	解說	同	六四七	支那古代畫に於ける「遠近法」上、中、下	熊代 信助	美術史學	七五、七八	傳夏明遠筆錢塘高湖圖	解說	國	華
狩野光信筆春景秋景圖屏風	解說	同	六四三	東洋畫に於ける屋台	渡部美津丸	同	七六	徵宗皇帝竹禽圖卷	解說	同	六四四
武田憲治郎藏	同	同	六四三	の畫法に就いて	同	同	七六	守屋孝藏藏	同	同	六四四
武富圀南の書いた宮 森 銑三	美術史學	七四	七四	二種の漢代繪畫	梅原 末治	美術研究	一三三	仇英筆清明上河圖に就いて	加藤 肇	美術史學	九〇
青木木米筆江山眺望圖	解說	國	華	唐代繪畫の研究	下店 靜市	南畫鑑賞	一二ノ二				
守屋孝藏藏	同	同	六二八	一、二、三	同	同	六、七				
狩野元信筆琴棋書畫圖	解說	同	六四二								

觀賢筆山水圖	解說	國華	六三六	遼陽南林子の壁畫古墳	原田淑人	國華	六二九	小銀佛像	大口理夫	美術史學	八二	
小倉武之助藏	解說	同	六四四	陽の漢代壁畫古墳	駒井和愛	同	六四七	周防と長門探訪記	丸尾彰三郎	同	八四	
谷舜英筆山水圖	解說	同	六四四	西域式佛像佛畫と東方の工人	松本榮一	同	六三八	佛像の胎内と胎内奉	保坂三郎	史學	二二〇	
直翁六祖挾擔圖(名品小解)	美術史學	七七		龜茲古代壁畫	解說	同	六三二	佛像の一、二、三、四	米山徳馬	史迹と美術	一四七	
朱琛筆長松白雲圖	解說	國華	六三四	井上恒一藏	解說	同	六三三	日本彫刻史考	金森	國寶	一六二	
石格筆二祖調心圖	解說	美術研究	一三五	龜茲國壁畫	解說	同	六三五	八、九、十	金森	國寶	二八、九	
正法寺藏	解說	美術研究	一三五	井上恒一藏	解說	同	六三五	平安朝初期に於ける	田澤坦	美術研究	一二八	
石濤の黃山を訪ねて	後藤朝太郎	南畫鑑賞	一二〇二	ベゼクリク第四號窟	熊谷宜夫	美術研究	一三八	木造彫刻の興隆に關して(上、下)	太田古朴	美術研究	九	
雪窓筆蘭竹圖	解說	國華	六三〇	手將來の壁畫	熊谷宜夫	美術研究	一三八	普門寺の諸像附經簡	太田古朴	史迹と美術	一五六	
雪窓筆蘭竹圖	解說	國華	六三〇	手將來の壁畫	熊谷宜夫	美術研究	一三八	圓教寺の諸像(佛像の解體雜記三)	同	同	一五一	
雪窓の蘭蕙圖に就いて	田中一松	南畫鑑賞	一三〇一	經典と草假名	藤田經世	美術史學	七九	鑄像を以て休咎を卜す	藪田苞桑子	同	一四七	
趙子固筆「水仙圖卷」	熊谷宜夫	制作	二	伏見天皇宸翰御消息(久枝藏に就いて)	赤松俊秀	史蹟名勝天然紀念物	一八〇一	安祥寺と五智如來像	金森	同	一四七	
趙重默筆雨中樓閣圖	解說	國華	六三七	雲樹寺に於ける吉野村上	正志	同	一八〇四	東大寺大佛造立年表	香取秀眞	清閑	一八	
小倉武之助藏	解說	同	六四一	時代文書上、下	同	同	一八〇四	靈滿寺釋迦像應說	足立康	建築史	五〇三	
傳趙德麟山水圖	解說	同	六四一	特に後村上天皇光嚴院宸翰と三光國師法語畫像に就いて	赤松俊秀	清閑	一五	東大寺誕生釋迦像(名品小解)	金森	史迹と美術	一五二	
陳維寅兄弟の風流	堂谷憲男	南畫鑑賞	一二〇一	光嚴天皇宸翰に就いて	赤松俊秀	清閑	一五	淨瑠璃寺阿彌陀如來	金森	史迹と美術	一五二	
沈周筆江山秋色圖	解說	美術研究	一三六	後小松天皇とその聖德の御一端	香川縣多知文庫奉	寶雲	三四	永長元年在銘淨土院	赤松俊秀	美術史學	七六	
牧溪閑話	田中倉琅子	同	一三〇	藏の宸翰に關聯して	行尹卿七社切について	田中堯堂	美術工藝	一一	新藥師寺藥師如來坐像	金森	生活美術	二六
牧溪一滴上、下	福井利吉郎	同	一三六	金地院の惟康親王御願文について	赤松俊秀	寶雲	三〇	獅子窟寺興福寺、慈光院の如來像(佛像の解體雜記)	太田古朴	史迹と美術	一六三	
牧溪中觀音左右猿鶴圖	解說	同	一二九	北條時宗の筆蹟をめぐりて	荻野三七彦	美術史學	七四	木彫十一面觀音像	小泉經一藏	國寶	六二九	
傳牧溪遠寺晚鐘圖(名品小解)	美術史學	八二		古寫經切	田中堯堂	美術工藝	二七	思惟半伽像の名題再考	望月信成	國寶	六〇七	
藍瑛筆仿大癡富春山圖	解說	國華	六四〇	奈良時代寫經所論攷	松平年一	史學	二二〇一	中宮寺及廣隆寺の彌勒菩薩像	望月信成	同	六〇一	
武田靈治郎藏	解說	同	六三六	古梓堂文庫の古寫經と其の料紙	宮田三郎	清閑	一九	普光院の康永在銘地蔵立像	太田古朴	史迹と美術	一四六	
李希圖筆米法山水圖	解說	同	六三六	色々紙小考四種	藤田經世	美術史學	八一	金剛定寺・摩柯耶寺神咒寺の不動像(修理雜記二)	同	同	一五四	
李昭道の海圖について	長廣敏雄	東方學報(京都)	一四〇三	彫刻に於ける表情美	野間清六	生活美術	二六	不動明王像について	三才	美術史迹と美術	一五二	
李上佐筆雨中猛虎圖	解說	國華	六三四	日本	同	同	同	長岳寺奥院不動石佛	川勝政太郎	美術研究	一三一	
小倉武之助藏	解說	美術研究	一三四	彫刻に於ける表情美	野間清六	生活美術	二六	戒壇院四天王像につきて	田中喜作	美術研究	一三一	
梁楷筆出山釋迦圖	解說	同	同	彫刻に於ける表情美	野間清六	生活美術	二六	西大寺四天王の諸尊	松本榮一	國華	六三二	
酒井伯侍家藏	解說	同	同	彫刻に於ける表情美	野間清六	生活美術	二六					



大安寺多聞天像	金森 遼	生活美術	二五	如意輪觀音半伽像 (李王家博物館藏)	西田 正秋	生活美術	一九	岡寺の創立と其の八 角圓堂の研究	田中 重久	史迹と美 術	一五三
鶴岡八幡宮の辨才天像	福山敏男	美術史學	七六	釋迦如來坐像	同	同	二〇	藥師寺問題に關し	加藤 泰	建築世界	三七〇一
吉野金峰山寺金剛力士像 (佛像の解體雜記四)	太田 古朴	史迹と美 術	一五八	同 (慶州石窟庵内)	同	同	二〇	藥師寺東塔撥銘新考 下ノ下	藪田嘉一郎	史迹と美 術	一四六
方形三尊觀と千佛觀 の壁面構成	田中 重久	同	一六一	西域彫刻雜記	熊谷 宣夫	清 閑	一九	東大寺の建築に關して	加藤 泰	建築世界	三七〇五
頭塔の復原	田中 重久	同	一五一	燉煌出土製造牛肉佛像	矢代幸雄	美術研究	一三五	東大寺再建營と俊乘 重源上人	豊岡 益人	清 閑	一八
大谷の石佛	脇本十九郎	美術史學	七八	日本建築に於ける力 の美	黒田 鷗心	建築雜誌	六九四	東大寺轉害門私疑	黒田 昇義	國 寶	六〇五
山背國鹿背山の石佛	佐々木利三	史迹と美術	一六二	國寶建築造物府縣別一覽表	同	建築雜誌	六九四	東大寺法華堂復原考	淺野 清	建築史	五〇六
御幼少時を象る聖德 太子像	田中 重久	美術史學	七五	新指定國寶建造物	同	建築雜誌	六九六	東大寺法華堂の建築	同	同	一八
聖德太子御七才像の 研究	同	同	七七	日本地誌目錄(奥羽地方) 上、下	同	建築史	五〇一、 五〇三	東大寺法華堂北門と 大湯屋	大瀧 正雄	同	同
足利家歴代木像につ いて	谷 信一	國 寶	六〇一	落日の阿彌陀堂	渡部美津丸	美術史學	八五	治承兵火と尊勝院の 被害	中村 直勝	史迹と美 術	一六四
行道とその假面につ いて	野間 清六	同	六〇六	四天王寺の西門と鳥 居 一、二	川勝政太郎	史迹と美 術	一一四、 一一九	香山寺址について	千葉 眞幸	考古學雜 誌	三四〇一
小面能面(京都金剛 巖氏藏)	西田 正秋	生活美術	一八	法隆寺講堂平面的變 遷 上、下	淺野 清	建築史	五〇四、 五〇六	加守寺址	毛利 久	同	三四〇九
般若能面(同氏藏)	同	同	一八	法隆寺講堂の復原的 研究	同	史迹と美 術	一六三	唐招提寺金堂復原考	淺野 清	建築史	六〇四
河内作銘詠月の「曲 見」	入江 美江	美術史學	七五	法隆寺東大門の舊位 置と移建年代	太田博太郎	建築史	五〇三	醍醐寺一重塔、五重 塔に關する研究	田中 重久	美術史學	八五
神像彫刻の特質	村山 修一	國 寶	三五	藥師寺東塔撥銘新考 中、下	藪田嘉一郎	史迹と美 術	一一四、 一一五	洛北の靈巖寺	福山 敏男	史迹と美 術	一四九
松尾神社の神像	福山 敏男	建築史	五〇一	野中寺心礎舍利奉安 孔の發見	池田谷久吉	史蹟名勝 天然紀念物	一八〇、 一八二	近江滋賀里崇福寺の 塔址 上、下	梅原 末治	實 雲	三三、三
金銅像王權現像	細見 良藏	國 寶	六四〇	河内野中寺の古堂塔 址について	梅原 末治	同	一六四	攝津佛光寺三重塔婆	黒田 昇義	史迹と美 術	一五七
伊和の大神について	同	同	六〇五	塔址について(補正)	同	同	一六四	淨妙寺本堂及塔婆	大岡 實	建築史	五〇一
中國・朝鮮・西域	小野 勝年	考古學雜 誌	三三〇七	法隆寺再建非再建の 問題	石田 茂作	考古學雜 誌	三三〇六	沙門心靜と松生院本 堂	芝口 常楠	史迹と美 術	一六〇
神龜五年造象銘ある 一金銅佛	藪田嘉一郎	美術史學	八五	藥師寺東塔撥銘新考 中、下	藪田嘉一郎	史迹と美 術	一一四、 一一五	甲斐國分寺伽藍の研 究	太田 靜六	考古學雜 誌	三三〇八
唐銀佛	長廣 敏雄	國 寶	三三〇三	野中寺心礎舍利奉安 孔の發見	池田谷久吉	史蹟名勝 天然紀念物	一八〇、 一八二	福山市觀音寺本堂に ついて	織田三郎治	史迹と美 術	一四七
雲崗石窟に關する藝 術論	雲崗石窟調査記	東方學報 (京都)	一四〇四	河内野中寺の古堂塔 址について	梅原 末治	同	一六四	讚岐國分寺	飯塚五郎藏	考古學雜 誌	三四〇五
雲崗石窟調査記	雲崗石窟調査記	東方學報 (京都)	一四〇四	河内野中寺の古堂塔 址について	梅原 末治	同	一六四	下總國分寺本堂の礎 石について	藤井 正巳	建築史	五〇二
天心と龍門石佛	齋藤 隆三	美術史學	七八	河内野中寺の古堂塔 址について	梅原 末治	同	一六四	上野國分寺伽藍の諸 性質 上、下	塚本 文次	建築史	五〇二
如意輪觀音半伽像 (朝鮮總督府藏)	西田 正秋	生活美術	一九	河内野中寺の古堂塔 址について	梅原 末治	同	一六四	上野國分寺伽藍の諸 性質 上、下	太田 靜六	史蹟名勝 天然紀念物	一八〇八

上野國分寺文字瓦の相川 龍雄 考古學雜誌 三三ノ一  
考察 龍雄 乾 兼松 史蹟名勝物 一八ノ一  
豊樂寺の國寶樂師堂 乾 兼松 史蹟名勝物 一八ノ一  
法成寺承曆三重塔に就いて二 藪田嘉一郎 史迹と美 一五〇  
宇治平等院境内古圖に就いて 福山 敏男 同 一六二  
宇治平等院の小御所に就いて 同 考古學雜誌 三四ノ七  
鳥羽勝光明院に就いて 角田 文次 建築史 六ノ一  
淨瑠璃寺の建築と庭園 森 實 建築史 六ノ三  
三徳山三佛寺 大岡 實 美術史學 七三、七  
鶴林寺太子堂考 若井 富藏 同 一五八  
栖霞寺・清涼寺小考 同 同 一五四  
妙見寺と靈巖寺 藪田嘉一郎 同 一五一  
六勝寺の位置に就いて上、下 福山 敏男 同 八一  
續興福寺衆中について上、下 鈴木 正一 歴史地理 八二ノ二  
織田信長の鹿苑院敷地没收 野村 常重 同 八一ノ五  
新大佛寺記 村治丹次郎 史迹と美 一五八

平安時代の神社建築 講座 同 同  
伊勢の風日祈宮と風 佐藤 虎雄 同 一六一  
春日神社若宮細殿御廊神樂町の舊規 黒田 昇義 建築史 五ノ六  
村社志那神社本殿 天沼 俊一 史迹と美 一六四  
津山の八幡宮に見る地方色 藤岡 通夫 美術史學 七八  
元和創祀の日光山御宮造營に就いて 大熊 喜邦 建築史 五ノ五  
日光山御宮元祿大修復の實績 同 史蹟名勝物 一八ノ九  
天然紀念物 同 同

日光御宮御造營御上棟之記 (公刊) 建築史 六ノ一  
廣島東照宮鎮座記 田邊 泰 國寶 六ノ五  
近世初頭に於ける鹿島神社の造營 宮地 直一 建築史 六ノ一  
波々伯部神社銅鳥居 川勝政太郎 史迹と美 一六一  
平城京建部門の存在について 大井重二郎 同 同  
「建部門の存在について」補遺 同 同 一六四  
京城京、平安京と羅川勝政太郎 同 同 六六〇  
平安京十二門に關する問題 同 同 一六二  
平安京の外郭垣 同 同 一六三  
近世京都御所御造營略史稿 大熊 喜邦 建築史 六ノ二

武家造と書院造 藤原 義一 美術工藝 一五  
書院造について堀口 捨己 清 閑 一五  
洛中洛外屏風の建築的研究 同 畫 論 一八  
閑院第の研究 太田 靜六 建築史 五ノ二  
桂離宮とタウト 藏田 周忠 日本美術 二ノ一  
忘茶席と密庵 眞鍋 堅介 畫 論 二二  
仁和寺邊廓亭と露地 森 薊 同 一七  
國寶民家、河内吉村邸 藤原義一 美術工藝 一七  
民家(白川街道) 中野 馨一 建築世界 三七ノ一  
民家(千木のある家白川の民具) 三宅 敏郎 同 三七ノ二  
民家(伊那谷、撫平の民家) 西川 曉 同 三七ノ三  
民家(八四間の部落) 民家研究會 同 三七ノ四  
民家(東海道宿驛と民家研究會 同 三七ノ五  
民家(東海道宿驛と民家研究會 同 三七ノ六

其研究、草屋根の寺元放庵) 藏田 周忠 高橋 實 建築世界 三七ノ七  
民家(群馬澤渡の民家) 民家研究會 同 三七ノ八  
民家(豊後、英彦山麓の一民家) 藏田 周忠 同 三七ノ九  
民家(北九州の一民家) 同 同 三七ノ一  
民家(大和の高塀造り) 同 同 三七ノ一  
民家(大和の高塀造り、二) 同 同 三七ノ一  
民家 西川 曉 同 三七ノ一  
民家 VIII-1 民家研究會 同 三八ノ一  
民家(隱岐の民家) 高橋 實 同 三八ノ二  
民家(探訪餘録) 山口 正 同 三八ノ七  
民家(京都民家めぐり) 民家研究會 同 三八ノ八  
城の構成と美術 鳥羽 正雄 國寶 三ノ五  
桃山時代の精神と城郭の構成美 魚澄惣五郎 國寶 六ノ三  
櫓形を構成せる江戸門について 大熊 喜邦 史蹟名勝物 一八ノ一  
水戸城の三階櫓に就いて 藤岡 通夫 建築史 五ノ五  
岸和田城址 池田谷久吉 史蹟名勝物 一八ノ八  
高松城の天守 藤岡 通夫 美術史學 七四  
水軍城郭の遺構としてての能島城址 上田 三平 考古學雜誌 三三ノ九  
とらう名義考 藪田嘉一郎 史迹と美 一五四  
興融寺の文永五輪塔 黒田 昇義 同 一四九  
都介野と水分社石燈 川勝政太郎 同 一五六

昭和十八・十九・二十年度美術文獻目錄

一八五

吉野朝以前山城石造 川勝政太郎 史迹と美 一五五  
美術總説

宇治造橋碑考 藪田嘉一郎 考古學雜誌 三四ノ五

板持石塔と錦織神社 田岡 香逸 史迹と美 一五三

鏡山塔などに見る鼻 猪川 瑛 同 一六一

下野山金剛寺多寶塔 大脇 正一 同 一四七

武藏國分寺所藏の板 鎌谷木三次 名蹟名勝 一八ノ一

石塔婆とその出土地に就いて 天然紀念物 〇

上毛石造塔婆 尾崎喜佐雄 同 一八ノ六

勝互にあらはれたる 大脇 正一 史迹と美 一五六

同心圓の考察 毛利 久 同 一四六

山城國觀音寺新出土 梅原 末治 同 一六一

初代橘吉重所作瓦の 新例 同 一六一

アジヤ各地建築 藤澤 一夫 史迹と美 一五八

百濟石燈資料 東伏見邦英 寶 雲 三一

新羅の皇龍寺九層塔 高 裕 燮 清 閑 一五

佛國寺の舍利塔 齋藤 忠 史蹟名勝 一八ノ七

羅城考 齋藤 忠 天然紀念物 一八ノ七

宋代に於ける飛棋の 竹島 卓一 建築史 五ノ一、

宋代に於ける符頭の 同 同 五ノ五

宋代に於ける料の制度 同 同 五ノ六

河南省彰德府外候家 梅原 末治 寶 雲 三〇、三

莊古墓群の概観 中下 寶 雲 三〇、三

雲岡石窟調査記 雲岡石窟調査班 東方學報 (京都) 一三ノ四

應縣の遼金時代石經幢 村田治郎 國 寶 六ノ一二

定縣開元寺塔に就いて 木村美雄 建築世界 九三八ノ八

奉天の東陵と北陵 竹島 卓一 清 閑 一七

蒙古喇嘛廟調査記 長尾 雄一 東方學報 (京都) 一四ノ四

大定五年石碑 村田 治郎 同 六ノ三

元代の石幢群 榎 一雄 同 同

海青碑のアラビヤ文 榎 一雄 考古學雜誌 三三ノ一

郭爾羅斯前旗の住宅 大塚 正雄 建築世界 三七ノ五

遼代の瓦當文について 小林行雄 寶 雲 三〇

遼代の瓦當文について 渡邊 要 建築雜誌 六九七

印度建築文獻目錄 京都帝國大學 同 同

アンコール・トムの 藤岡 通夫 美術史學 七六

バイコンの建設年代と 最近の南方書 同 同

庭園 森 蘊 新美術 二六

海洋と日本庭園 藥師寺 厚 建築雜誌 六九四

庭園觀賞上の注意 吉永 義信 史蹟名勝 一八ノ三

庭のこゝろ 同 同 九ノ二

名園の保存に就いて 井下 清 國 寶 六ノ二

庭園觀賞上の注意 龍居松之助 史蹟名勝 一八ノ一

相阿彌の泉水圖 堀口 捨己 美術史學 八〇

日本庭園に於ける橋 森 蘊 建築史 五ノ五

室町時代に於ける庭 森 蘊 建築史 五ノ二

園美に關する一考察 近世に於ける皇室園 外山 英策 國 華 六三六

係の庭園一七 六三六

賢庭一派の作庭作法 重森 三玲 史迹と美 一五二

小堀遠州の藝術 西堀 一三 畫 論 二二

小堀遠州と日本庭園 森 蘊 同 同

南禪寺方丈庭園の造 營年代及作者 同 建築史 五ノ四

顯行幸庭園の石組美 重森 三玲 日本美術 二ノ二

吐玉泉(水戸偕樂園 內) 國 寶 六ノ五

工 藝 坂野 清夫 畫 論 二四

掌と工藝(一) 同 同 二七

日本工藝的特質 渡邊 素舟 美術新報 六九

陶 磁 工 反野 茂作 國民美術 二ノ一

日本、及支那の古陶 磁を語る 同 美術工藝 二九

名物井戸茶盤譜 井戸茶盤再檢討 同 同

豐臣氏の呂宋壺貿易 渡邊 基 史 學 二ノ二

正倉院藏の所謂三 梅原 末治 美術研究 一三七

彩釉器に就いて 小野 勝年 考古學雜誌 三三ノ七

永仁二年銘瀬戸瓶子 樂燒考 加藤義一郎 美術工藝 一七

續樂燒考 同 同 一八

修學院燒と野神燒 山口吉郎兵衛 同 同 二八

京焼法書(校刊) 樂之軒生 美術史學 八四



伊勢の萬古燒

美術工藝

二六

杉本 捷雄

陶 磁

一三ノ四

伊部燒通史

桂 又三郎

趣味

三ノ六

伊部神傳錄

宗田 克己

趣味

三ノ十二

伊部燒起原前後の考

正宗 敦夫

美術工藝

二四

古備前のよき

津下臣太郎

同

古備前棒の先考

同

海揚り古備前

同

出雲の諸窯

同

古唐津

同

高臺から見た古唐津

同

繪唐津草文皿(名品小解)

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

佐藤 進三

美術史學

七九

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

古唐津

同

屋根型天井を有する 齋藤 忠 考古學雜誌 三四ノ三  
石室墳に就いて 誌

箸墓古墳の考古學的 笠井 新也 同 三三ノ三  
考察

福島縣眞石貝塚の發 西村 正衛 史 觀 三〇  
掘並に遺物の考察

神奈川縣下組貝塚に 大給 尹 史 學 二二ノ一  
於ける自然遺物

沼尾池趾と發見遺物 大場 磐雄 史蹟名勝 一八ノ一  
に就いて 天然紀念物

須惠窯址考 石川恒太郎 考古學雜誌 三四ノ六  
誌

覆鉢形の小土製品に 藤澤 一夫 同 三四ノ三  
就いて

北九州出土の瓷製經筒 滿岡忠成 同 三三ノ五  
東京南多摩郡稻城大 原田 良雄 同 三四ノ六  
丸窯址

貝鏡と石鏡 齋藤 忠 同 三三ノ七  
埴輪論 小林 行雄 史迹と美 一六〇

埴輪の藝術的價值 野間 清六 美術工藝 二二  
甕棺出土の一銅劍 三木 文雄 考古學雜誌 三三ノ六  
誌

環頭柄頭雜紋—環頭 神林 淳雄 同 三三ノ一  
大刀とその文化— 福原潜次郎 同 三三ノ五  
穴模國・穴穂部につ 同

上代金石文雜考(上 藪田嘉一郎 同 三三ノ七  
中、下) 八、九

「上代金石文雜考」附記、同 同 三三ノ十

丹但淡三國金石拾遺 武藤 誠 史迹と美 一五九

アジヤ各地

朝鮮扶餘發見の藥研 藤澤 一夫 考古學雜誌 三三ノ一  
を含める括弧物—高麗時代の一遺物群—

朝鮮迎日海外海底發 有光 敦一 同 三三ノ四  
見の打製石器

熊岳城温泉附近の土 島田 正郎 同 三四ノ五  
中文化

勝城と勝城の遺蹟に 關野 龍雄 同 三三ノ六  
就いて

北京西郊石景山麓に 友野 武男 考古學雜誌 三四ノ五  
於ける漢代古墓の發見 小野 勝年 誌

獸形土器に關する二 澄田 正一 同 三四ノ一  
秦式瓦甍について 水野 清一 同 三三ノ八  
秦式瓦甍について 同 三四ノ三

銅鼓の製作年代に關 紹興出土の二三の飾壺 岡崎卯一 寶 雲 三三  
するカールグレン氏の 銅鼓の製作年代に關 同 三四ノ四  
説 東京及安南北部發見 梅原 末治 東方學報 一四ノ二  
(京都)

長慶天皇饗峨東陵に 今井 啓一 史迹と美 一六〇  
就いて 史蹟登神の文字岩と 大本 琢壽 同 一五〇  
その地方(一)

神社緣起の起源に就 大川 廣海 國學院雜誌 四六ノ二  
上下加茂神社とその 川勝政太郎 史迹と美 一五六  
崇敬 京都市賀茂の三手文 兒玉 幸多 史蹟名勝 一八ノ二  
庫に就いて上、下 川勝政太郎 史迹と美 一五七  
籠神社と古遺物 景山勝四郎 同 一五三

大山崎離宮八幡宮の 古圖 國寶武田本太子傳曆 藤谷 俊雄 同 一五八  
國寶武田本太子傳曆 藤谷 俊雄 同 一五八

春日神社文書第三を 相田 二郎 歴史地理 八二ノ三  
讀みて 新田義貞寄進狀 中村 直勝 國 寶 六ノ五  
天明二年坂平安人物誌 平安京の街路名古今 川勝政太郎 史迹と美 一四八  
對照索引 平安京の街路名と地 同 同

平安京街路名(追記) 同 同 一六一  
點指示 同 同 一六〇  
平安京街路名(追記) 同 同 一六二

押照る難波の海難 北島 霞江 同 一六二  
波の地名につきて

難波の語の冠せられ 北島 霞江 史迹と美 一六四  
たる諸地點

下野室ノ八島 渡邊 憲太 同 一六一  
佛舍利綺談 藪田嘉一郎 同 一五九

我國の托胎傳説につ 岡部 周三 史 觀 三〇  
いて

日本書紀佛傳來記 井上 薫 歴史地理 八一ノ二  
載考(上下) 奈良朝佛教師に於ける道慈の地位 四  
推古天皇廿年紀造須 藪田嘉一郎 史迹と美 一六三・  
彌山記考(上、下) 東伏見邦英 寶 雲 三三・五  
戒律傳來應説上・ 華嚴 清 水 公照 清 一八  
華嚴 經軸よりの發見 荻野三七彦 美術史學 七五  
九條兼實の春日社と 龜田 孜 國 寶 六ノ一〇  
南園堂信仰

座談會・五山の文藝 谷 信一 歴史地理 八一ノ四  
について上、下 田中 久夫 同 五  
室町中期に於ける一 赤星 直忠 考古學雜誌 三三ノ四  
葬法に就いて 佐々木利三 史迹と美 一五七  
奈良不退寺梵字柱の 眞言 多賀 宗準 史蹟雜誌 五四ノ八  
沙門定圓小傳 川勝政太郎 史迹と美 一五九  
岩船寺附近

王仁の後裔氏族と其 井上 光貞 史學雜誌 五四ノ九  
の佛敎 桃記の茶道に就いて 千 宗守 清 閑 一六・一  
一、二

渤海中京考 島山 喜一 考古學雜誌 三四ノ一  
金朝勃極烈制度考 三上 次男 東方學報 一四ノ三  
下—金初に於ける最高政治機關(東京)  
の—研究

薩爾汗戰に於ける尙 渡邊 三三 考古學雜誌 三三ノ五  
開闢古戰場踏査 海東金石苑を中心と 藤塚 鄰 東方學報 一四ノ一  
せる清鮮文化交流の研究 下ノ一 (東京)  
四十二章編成立年代 松本文三郎 東方學報 一四ノ一  
考 (京都)

玉燭寶典について	新美 寛	東方學報 (京都)	一三ノ三
唐宋曆法史	戴内 清	同	一三ノ四
清末より現在に至る支那の測量地圖	日比野丈夫	同	一三ノ三

## 西洋美術關係文獻 (定期刊行物所載)

石敢當の名義について	戴田嘉一郎	史述と美術	一五二
宋版藏經の諸版とそ	鈴木 宗忠	文 化	一〇ノ一
の組織及び内容	田村 實造	考古學雜	三四ノ七
契丹族の服飾について	田村 實造	考古學雜	三四ノ七
其二 國服と漢服	田村 實造	考古學雜	三四ノ七

## 總 說

藝術に對する偏見	ベネチイット	新 美	一一・一
ドラクロアの手紙	近藤 等譯	新 美 術	二四
技術の習練	岡 鹿之助	同	二五
聖マルコの奇蹟	大久保 泰	同	二七
タイスの木乃伊	E・ギメ記	同	二八
大森 啓助	同	同	二八
羅馬の畫家	成田 重郎	生活美術	一八
獨逸に於ける琥珀の文化性に就いて	山本 浩	同	二〇
畫家と文學	山口 寅夫	同	二一
畫家と故郷	三浦 逸雄	同	二二
イタリヤの造形政策	山本 浩	同	二三
山と海	山本 浩	同	二四
アルベン	山本 浩	同	二四
レオナルド・ダ・ヴィンチと山岳	山本 浩	同	二四
フランス兒童繪本の復興	山本 浩	同	二四
スキート及びサルマイト藝術様式	山本 浩	同	二四
美的照應	山本 浩	同	二四
ルネッサンス私觀	山本 浩	同	二四
シエナの歴史	山本 浩	同	二四
シエナの藝術	山本 浩	同	二四
伊太利亞文化の追想	山本 浩	同	二四
ルネッサンスと技術	山本 浩	同	二四

## 繪 畫

イタリヤの風土と造	板垣 鷹雄	日伊文化	一二
ルネッサンス精神の形成	荒川龍彦	研究	一二
ルネッサンス美術發達	新 規矩男	同	一四
の樣式的考察	森口 多里	同	一四
イタリヤ中世紀美術	川路 柳虹	美術新報	四七
の樣式的變遷	柳 亮	同	四七
ボッチェリと東邦	柳 亮	同	四七
樣式	柳 亮	同	四七
ボッチェリと反教	柳 亮	同	四七
思想	柳 亮	同	四七
アフリカと黒人藝術	M・R・K	同	五〇
ハーパー・リード	植村鷹千代	同	五〇
の藝術論	植村鷹千代	同	五〇
フランスの時代	内海 文夫	同	五一
ラファエロの綜合主義	同	同	五一
クルーベと寫實主義	幡谷 正義	同	五七
獨逸藝術家の保護	黒田 禮二	同	五九
人間及び藝術家とし	成田 重郎	同	六六
てのシャヴァンヌ	成田 重郎	同	六六
バロック藝術について	森田龜之助	同	六八
美術の建設とルネッ	田近 憲三	同	六九・七〇
サンス時代	田近 憲三	同	六九・七〇
デューラー作「四使徒」	嘉門安雄	畫 論	一七
ジョット「新しき福	マツクス・	同	一九
音書	ドヴォル	同	一九
「シャック	同	同	一九
「嘉門 安雄譯	同	同	一九
「ヴェニスに於けるモ	アルセリマ	畫 論	二五
ネの作品	アレクザデル	同	二五
中世スペイン繪畫の	後藤 續二	同	二五
様相	吉川 逸治	季刊美術	二ノ二
ゴッダの作品	須田國太郎	新美術	一八
レムブラント拾遺	嘉門 安雄	同	二〇
ロマンティックの獅	山田 邦祐	同	二四
子ドラクロア	同	同	二四
アノルト・ベック	青柳 正廣	同	二五
リン小傳	同	同	二五
美しきスザンナ	大久保 泰	同	二五
ボナールとヴィヤール	大森啓助	同	二六
ドラクロア畫房見學	西川 高次	同	二六
古代エジプトの肖像畫	大森啓助	同	二七
下方の藝術	村田 潔	同	二七
ビエトロ・ヴァヌチ	同	同	二七
「聖ベルンハルトの	同	同	二七
幻想」(解説)	同	同	二七
レオナルド・ダ・ヴ	同	同	二七
ンチ「ジョヴァン	同	同	二七
ニ「パティスタ・パ	同	同	二七
ツイ」	同	同	二七
ジャン・バプチスト	山田 邦祐	同	二七
の解説と藝術と生涯	同	同	二七
ドメニコ・ギラン	同	同	二七
ダイヨ「御見舞」(解説)	同	同	二七
モレット「信仰」(同)	同	同	二七
チアラ「信仰」(同)	同	同	二七
フラ・バルトロメオ	同	同	二七
「家族」	同	同	二七
ヤン・ファン・デル	同	同	二七
メイル「デルフト風	同	同	二七
景」(同)	同	同	二七
デューラー「自畫像」	八杉 博史譯	同	二七
(解説)	同	同	二七
ソラーリオ「聖母と	同	同	二七
幼兒キリスト」(同)	同	同	二七
ラファエル「聖母」	同	同	二七
ブルクマイル「バト	同	同	二七
モス島のヨハネ」(解説)	同	同	二七



ヴェロネーゼ「聖女 ヘレナの幻想」(解説)	生活美術	一八	アントニイ・ヴァン・ ダイクの肖像畫	山田 邦祐	生活美術	二一	レオナルド・ダ・ヴ リンチの大使ガブ リエル	兒島喜久雄	日伊文化	一〇
ホルバイン「青年像」 (同)	同	同	ジャヴァンヌ「ヨハ ネの斬首」(解説)	同	同	同	石竹の聖母	同	同	一一
ティウイアーノ「基 督戴冠」	同	同	ブーシエ「水車小 屋」(同)	同	同	同	イタリヤ・ルネサ ンス繪畫の自然觀	森口 多里	同	一二
ラファエル「デオ ヅアンナ・ガラボー ナ像」(解説)	同	同	ウエノビウスの奇蹟	同	同	同	ヴェロッキオの「聖 母子像」	兒島喜久雄	同	同
ビエール・ドウ・ホ ー「田舎の家」(同)	同	同	ゴヤ「葡萄摘み」(解説)	同	同	二二	レダの饗宴	同	同	一三
レンブラント「天使 を襲撃するアブラハ ム」	同	同	ゴヤ「陶器商人」(同)	同	同	同	繪畫的對象に於ける 「群」の成立と發展	山本 正男	同	一四
大原美術館案内記	同	同	フアン・デルト「赤 い帽子の娘」(同)	同	同	二四	マドンナ・デレ・ア ルビエ	兒島喜久雄	同	同
ドイツの森の畫家	同	同	市長に選ばれたバン 屋バキウス・ブロッ ルスと其妻の肖像(同)	同	同	同	歐洲中世藝術にあら われたる「最後の審 判」の圖像	吉川 逸治	日本諸學 研究報告	二一
ユルレツヂオ「聖母 子」(解説)	同	同	マサッチオ「エヅア の顔」(同)	同	同	同	イタリヤ文藝復興期 の繪畫	荒城 季夫	日本美術	二ノ二
ニコラ・ランクレー 「踊子カマルゴ」(同)	同	一九	近代の山岳畫家	勝見 勝	同	同	藝術大使としてのル イ・ベンス	成田 重郎	同	同
ヤン・ステーン「主 顯節」(同)	同	同	レムブラントの所謂 「浴後のバートゥエバ」(解説)	同	同	二五	羅馬の繪畫	荒城 季夫	同	二ノ三
ヴィルギリオ・ディ アス「ジブシー」(同)	同	同	ドラクロア「メデー」(同)	同	同	同	ベラスケス	伊藤 廉	同	同
フロマンタン「アル ジェリアに於ける鷹 狩」	同	同	ティウイアーノ「ヴ エーメス」(同)	同	同	同	市井の浪漫派	青柳 正廣	同	二ノ八
ナサレ派	同	同	ヴェラスケス「ヴイ ラ・メデイチの一隅」(同)	同	同	二六	カナの婚筵	大久保 泰	同	同
ウオーター・シッカ ー「一つの會話」	同	同	ボルセーナ「聖祭畫 室」(同)	兒島喜久雄	同	同	ドラクロアについて	富永 惣一	同	同
チシアン「ヴィー ナスとキューピッド」(解説)	同	二〇	タールベール「畫室」(同)	同	同	同	カタリナの結婚	吉川 逸治	同	同
バオロ・ヴェロネー ゼ「ピエタ」(同)	同	同	デリオドーロ「ボル セーナの聖祭」(同)	同	同	同	ドイツ初期の繪畫	大久保 泰	同	同
ウエノビウスの奇蹟	同	同	西洋繪畫に於ける表 情の種々相	嘉門 安雄	同	同	ビエル・ボナアル	大久保 泰	同	同
ル・ベンス「畫家の 第二の妻」(同)	同	同	メント(解説)	同	同	二七	日本公子の像(一)	大久保 泰	同	一〇、一
ゴヤ「水汲み女」(同)	同	同	マネ「フオリ・ボル ベルジェルの酒場」	兒島喜久雄	同	同	マサッチオ	摩壽意善郎	同	同
ル・ベンス「畫家と 最初の妻」(同)	同	同	ネヴァス・グリユー	同	同	同	ゴヤとフランス美術	大久保 泰	同	一二
ニコラ・ブーサンそ の生涯とその作品	同	同	ペラスケスと近代繪 畫	山田智三郎	同	同	ゴヤとフランス美術	大久保 泰	同	同
	同	同	ジョット	吉川逸治	同	同	最後の晩餐	大久保 泰	同	二ノ二
	同	同	美の照應	柳 亮	同	同	再びフアン・アイク ン	嘉門 安雄	同	二ノ五
	同	同		片山 敏彦	同	同	ウエロネーゼの事ど も(上)	大久保 泰	同	二ノ六

ボッティチエリ點描	摩壽意善郎	美術新報	四七
サンドロ・ボッティチエリ	ウオター・ベーター	同	同
ドラクロアの藝術	古澤 岩美	同	四八
シオの虐殺	川路 柳虹	同	同
ギムスター・モロ	同	同	四九
オの神秘主義	同	同	同
ギムスター・モロ	ギヤヴリエル・ムウレ	同	同
ル・ベンスの藝術と生涯	古澤 岩美	同	五一
花の畫家オディロン・ルドン	成田 重郎	同	五二
東洋的畫人コロ・コロ點描	内田 巖	同	五四
ヴァン・ゴッホの生涯	川路 柳虹	同	同
ゴッホ藝術の展開	式場隆三郎	同	五五
ゴッホ拾ひ書き	成田 重郎	同	同
ラファエル・サンチ	S・S・M	同	同
ギムスター・ヴ・ク	森田龜之助	同	五六
ルベ	木下 孝則	同	五七
シャルダン	田近 憲三	同	六〇
市民生活の畫家シャルダン	川路 柳虹	同	同
フラゴナールの藝術	川路 柳虹	同	六一
現代文化を見棄てたボール・ゴッガン	幡谷 正義	同	六二
ル・カス・クラナー	黒田 禮二	同	同
ハ翁	同	同	同
ヴェラスケス	古澤 岩美	同	六三
デオットの生涯と作品	摩壽意善郎	同	六五
セガンチーニとアル	川路 柳虹	同	六七
ブスの牧歌	同	同	同
近代フランス繪畫の特質	荒城 季夫	同	同
ヴェネツィア派とテ	成田 重郎	同	七四、七
ドナテロ小惑	高村光太郎	畫 論 二一	同

昭和十八・十九・二十年度美術文獻目錄

ロダンの素描について	本郷 新	畫 論 二三
ベルヴェデーレの胸體と躍めるヴィーナス	中原 考	新美術 二二
假面の世界	同	生活美術 二六
中世の顔	イルゼ・レ	同
カロマー・マ女王像	木村 章平	同
(解説)	兒島喜久雄	同 二七
勝利の女神	田近 憲三	美術 一
エトルリアの彫刻	清水 政二	同 二
力の象徴として、ミケルアンデロについて	田近 憲三	同
低ドイツ地方の聖母像	藤城昌雄	同 六
ロダンの日本藝術	麻田 直	美術新報 五九
ロダンの名作	成田 重郎	同
建築	同	同
ナチス獨逸の都市計畫	伊東五郎	建築雜誌 六九四
古代ヒッチ・トの浮彫	荒城季夫	日本美術 二ノ一
英國都市計畫の檢討	トーマス・ジャブ	建築世界 三七ノ二
大獨逸都市建設	田中 誠譯	六、一二
獨逸定住事業の精神と臨戰勞動對策抄	アルベルト・シムペルト	同 三七ノ四
將來の歐洲都市建築	鮎井幸次郎	同 三七ノ七
獨逸陸軍(陸軍大學)の計畫案	ドクトル・カルル・ケ	同 三七ノ八
グリシア墓碑の斷片	Hans Hermann Klaye	新建築 一九ノ一
アルブレヒト・デュレルの「築城法」に就て	中原 考	新美術 二二
タイスの木乃伊	青山 民吉	同 二八
獨逸に於ける琥珀の文化性に就いて	E・ギメ記	同
ドイツの建築總監	大森 啓助	同
バルテノンについて	山本 浩	生活美術 二〇
	谷口 吉郎	同 二三
	村田 潔	同 二七

新しいドイツの建築藝術	アルベルト・シムペルト・造形教育	九ノ一
現代の建築と伊太利亞	井坂 行男譯	二
キムネ發掘と主要なる碑文について	生田 勉	日伊文化 一〇
ミケルアンデロのサンピエトロ寺に對する設計	栗野頼之祐	同 一一、一二
	相内武千雄	日本諸學 二一
	研究報告	二一

現代美術關係單行圖書

總說

油繪論

繪畫の美

鈴木清方隨筆選集

畫人東西

機械藝術

巨匠の手紙

近代繪畫

近代挿繪考

藝術觀想

藝術學

藝術幻想

藝術小論集

藝術の哲學

藝術史の哲學

藝術の歴史 第二

藝術人體解剖圖譜

藝術教育論

藝術文化論

現代美術家總覽

現代美術の構想

航空美術

國畫の形成

古代美と近代美

寫實

宿命的藝術

新生活美の方向

コンラッド・東京  
メイリ

内田 巖 富山房

鈴木 清方 雙雅堂

石井 柏亭 大雅堂

長谷川 七郎 アールス

三輪 福松 不二書房

黒田 重太郎 一條書房

本村 莊八 雙雅堂

板垣 應穂 青葉書房

鼓 常良 三笠書院

ワッケンロ 七文書院

江川 英一 譯

谷川 徹三 生活社

藤野 勉 弘文堂

井島 勉 弘文堂

ヱアールン 鮎書房

玉城 肇 鮎書房

大下 正男 鮎書房

信と美  
銃と畫筆と

隨筆美術帖

生活の中の藝術

生活の美

聖戰

大東亞戰美術

彫刻の美

秩父山塊

手と造形

天心閣倉疊三

天心全集 第六卷

東洋藝術の諸相

東洋美と西洋美

東洋美術論集

南畫論萃

南方スケッチブック

日本繪畫史(明・大・昭)

日本畫總成

日本美術院史

柳 宗悅 生活文化研究會

野間 仁根 雙雅堂

内海 徹 雙雅堂

笹岡 了一 雙雅堂

木村 莊八 雙雅堂

古谷 綱武 雙雅堂

金原 省吾 朝日新聞社

山本 地榮 朝日新聞社

同 富山房

本郷 新 富山房

福澤 一郎 アトリエ

勝見 勝 教育美術振興會

清見 陸郎 筑摩書房

岡倉 覺三 創元書局

長與 善郎 矢貴書店

鼓 常良 文藝館

大口 理夫 創藝社

古川 修 地文社

鶴田 吾郎 崇文社

美術  
美術解剖學論攷  
美術五十年史  
美術と史學  
美術の戰  
美術を語る  
美と教養  
美と眞實  
美と生活  
美と精神の秩序  
美の思索  
美の表現について  
描線美學  
水繪技法と隨想

森口 多里 白揚社  
西田 正秋 聖紀書房  
森口 多里 繪畫社  
石井 柏亭 寶雲舍  
武者小路實篤 文藝春秋社  
木村 重夫 綜合美術研究所  
高木 紀重 翼書房  
森口 多里 翼書房  
中井 駿二 生書房  
堀 秀彦 教文社  
金原 省吾 青磁社  
川路 柳虹 淡海堂  
中西 利雄 綜合美術研究所

畫集及評傳

安宅安五郎油繪作品集

梅原龍三郎 近作畫集

勤勞増産素描集

畫人栖鳳

畫聖芋錢

藝術解剖圖集

現代水彩畫選集

皇紀二千六百年度傑作

水彩畫集

小村雪信畫集

產業戰士贈畫展

昭和十七年秋文展の日本

昭和十八年秋季美術展畫集

青甲社

栖鳳遺作展畫集

栖鳳回顧

青鸞集(青鸞社第三回展)

栖鳳遺作展畫集

栖鳳回顧

栖鳳遺作展畫集

栖鳳回顧

栖鳳回顧

安宅安五郎 美術工藝會

眞船 豐 石原求龍堂

梅原龍三郎 同

石井 柏亭 藝術學院出版部

沖長 璋彦 青年書房

津川 公治 宮越太陽堂書房

鶴丸 昭彦 藝術學院出版部

大下 正男 藝能文化協會

山本武夫編 高見澤木版社

森 守明 西山畫塾青甲社

國民美術研究所 國民美術研究所

朝日新聞社 朝日新聞社

芳川 起 美術春秋社

櫻井 翁司編 大雅堂

高島屋美術部 同

村雲 毅一 青鸞社



素明作品集

建昌大夢

第五回文部省美術展覽會

原色畫帖

第五回文部省美術展覽會

圖錄(日、洋、彫、工)

第六回文部省美術展覽會

圖錄(日、洋、彫、工)

第六回文部省美術展覽會

原色畫帖

大東亞戰爭畫集(比島)

大東亞戰爭美術第二輯

圖畫辭典

富岡鐵齋

富岡鐵齋と南畫

富岡鐵齋の研究

富岡鐵齋筆近古賢哲像傳繪

柏亭自傳

裕伊之助近作畫集

爆下に描く(ソロモン畫信)

奉戴日記念畫丹心揮影

北齋の研究

正宗得三郎畫集

「宮本武藏」挿繪集

明治美術名作集

日本美術圖譜

日本畫傑作年鑑

萬葉畫集

安井曾太郎

日本出版畫

日本版畫的美

版畫の新技法—エツチン

版

畫

旭 泰宏 大 雅 堂

檜崎 宗重 不二 書 房

今 純三 三 國 書 房

日本出版畫

日本版畫的美

版畫の新技法—エツチン

版

畫

旭 泰宏 大 雅 堂

檜崎 宗重 不二 書 房

今 純三 三 國 書 房

日本出版畫

工藝及圖案

板勁

紙障子

紙漉村旅日記

現代工藝論

清親と安治

支那の民藝

白木黒木

實踐彩色工藝

陶器圖錄

陶心集

南方共榮園の民藝

日本人と陶器

日本の工藝

美術と工藝

びざんの窯藝

布久路(上)—名物裂—

滿洲の民藝

民藝と生活

窯邊陶話

建築

樺太アイヌの住居

建築構要覽上

建築工匠史

建築史

建築新書 第一四

建築的美

日本の民家

日本農民建築

長谷部竹腰作品集

建築新書 第一四

建築的美

日本の民家

日本農民建築

長谷部竹腰作品集

建築新書 第一四

建築的美

日本の民家

日本農民建築

長谷部竹腰作品集

建築新書 第一四

建築的美

日本の民家

日本農民建築

長谷部竹腰作品集

建築新書 第一四

教育

エト工作の教育

繪本の研究

クレバス畫の描き方

藝能科圖畫工作大系

兒童畫の心理

世界の名畫

大東亞文化と兒童畫

東洋藝術と大東亞教育

やさしい繪の描き方

赤と綠

一月櫻

美しい季節

繪心

歌舞伎限取圖說

清方隨筆選集(第二卷)

同(第三卷)

草・虫・旅

行旅

郷土玩具の研究

國境の地形芝居

こけし撰記

翠雲隨筆

青眉抄

大日本魚類畫集

點線

西四のおぼけ

南方繪筆紀行

はぎやき

三島刷毛目

點線

西四のおぼけ

南方繪筆紀行

はぎやき

三島刷毛目

點線

西四のおぼけ

南方繪筆紀行

はぎやき

三島刷毛目

點線

西四のおぼけ

南方繪筆紀行

はぎやき

三島刷毛目

點線

羽生 憲 帝國出版協會

牛島 義友 協同公社

中村 善策 教育美術振興會

三吉 正雄 圖畫工作株式會

松田 義之 國際書房

ヘルガ・エ 國際書房

大友 一三譯

石井 柏亭 精成社

西澤 笛吹 崇文堂

金原 省吾 第一出版協會

小野 寺秋風 大京堂書店

里見 勝藏 昭森社

中川 一政 錦城出版社

同 櫻井書店

鍋井 克之 小山書店

上野 忠雅 國書房

鍋本 清方 同

恩地孝四郎 龍星閣

石井 柏亭 啓德社

中村美佐雄 旅行文化社

渡邊 渡 育英書院

廣間 廣卓 弘文堂書房

於保 博 丹青書房

上村 松園 六合書院

大野 夢風 大日本魚類畫集

伊藤 廉 書物展覽會

石井 鶴三 二見書房

明石 哲三 鶴書房

檜崎 鐵香 盛運堂

山田萬吉郎 寶雲舍

見つゝ思ふ  
水の構圖  
南を翔ける  
長興 善郎 北方文化出版社  
北原 白秋 アールス  
田中 善徳 朝日新聞社  
橋本 關雪 朝日新聞社

古美術關係單行圖書

總說

様式の美學  
美の典型  
美の表現について  
美の思索(思索叢書)  
美と精神の秩序  
信と美  
生活の美(生活科學新書)  
古代美と近代美  
古代發見  
藝術教育論  
美術と史學  
藝術の歴史(一)  
民族の藝術  
東洋藝術の諸相  
東洋の道と美  
東洋藝術と大東亞教育  
(大東亞教育叢書)  
東洋美と西洋美(黎明選書)  
美術を語る  
隨筆美術帖  
藝術殿  
天心全集 第六卷  
藝苑聚芳 五一〇  
青山莊清賞  
日本美の精神  
日本美の再建  
矢崎 美盛 創元社  
川路 柳虹 淡海堂  
金原 省吾 青林社  
堀 秀彦 教養社  
中井 駿二 生活社  
長谷川如是閑 一條書房  
柳 宗悅 生活文化研究會  
金原 省吾 羽田書店  
荒城 季夫 青磁社  
秋山 大 道統社  
角南 元一 教育美術振興會  
檜崎 宗重 有光社  
玉城 肇 鮎書房  
岡田 清 星野書店  
長興 善郎 矢野書店  
同 聖紀書房  
金原 省吾 第一出版協會  
武者小路實篤 文藝春秋社  
木村 莊八 雙雅堂  
野口米次郎 春陽堂  
齋藤 隆三 創元社  
源 豐宗 芸艸堂  
根津美術館 根津美術館  
松原 晁 牧書房  
佐藤 一英 湯川弘文堂

柳小紋  
屋根と窓  
夕ばえ  
日本美術の特質  
日本美術論  
日本美術史物語  
日本美術論攷  
古美術見學  
Art Guide of Nippon  
Kara Wakayama and nine Prefectures  
ゴントールと日本美術  
タウト全集二、日本美術  
三、美術と工藝  
日本に遺る印度系文物の研究  
秘佛開扉  
斑鳩雜記  
茶の美學(日本叢書)  
飛鳥文化(日本文化新書)  
飛鳥誌  
奈良の上代文化  
奈良文化の傳流  
藥師寺 彫刻と建築  
天平の文化 上、下  
東大寺と天平文化  
東大寺  
東大寺美術讀本  
東大寺戒壇院  
唐招提寺  
唐招提寺  
東山文化の研究  
鑑木 清方 畝傍書房  
中澤 弘光 有光社  
曾宮 一倉 石原求龍堂  
南蠻美術集  
大東亞への回想  
豊公大展覽會目錄  
大雅堂書畫帖  
京の寺々(趣味の京阪叢書)  
神根 慈生  
別章 京都佛像圖說  
古陶古佛  
日本美術圖譜  
世界美術圖譜 日本篇  
第八、九編  
中國・滿鮮  
支那美術史 上卷  
支那美術史 續第二  
支那文化史蹟 續第二  
支那文化史蹟 續第二  
滿蒙北支の宗教美術 三  
滿蒙北支の宗教美術 第九  
十卷  
滿蒙の喇嘛教美術  
旅順博物館圖錄  
朝鮮の古美術  
朝鮮古代文化の研究  
アジア各地  
南方古代文化と藝術  
アンコール・ワット  
アンコール遺蹟  
アンコール遺址群  
アンコールヴァットの景觀  
アンコール遺跡寫真集  
アンコールワットの彫刻  
アンコールワット拓本集  
フィリッピン原住民の土俗と藝術  
タイ民族の造型文化  
デエリグ著  
藤見 藤認  
矢代 幸雄 岩波書店  
金原 省吾 旺文社  
尾田 龍 文化協會  
秋山 光夫 第一書房  
源 豐宗 星野書店  
東洋美術國際研究會  
後藤 末雄 北光書房  
篠田英雄 育生社弘道閣  
田中 重久 東光堂  
北川 桃雄 矢野書店  
同 文藝春秋社  
谷川 徹三 生活社  
遠藤 元男 新太陽社  
佐藤 小吉 天理時報社  
橋本 凝胤 全國書房  
永島福太郎 中央公論社  
藤本 四八 日本美術出版社  
北川 桃雄 朝日新聞社  
井川 定慶 盛運堂  
上 海雲 全國書房  
廣瀬 直彦 故郷舍  
東大寺 清閑舍  
森 暢編 桑名文星堂  
北川 桃雄 日本美術出版  
芳賀幸四郎 河出書房  
永見徳太郎 大雅堂  
毎日新聞社編 便利堂  
青山民吉編 日下部書店  
株式會社 京阪電氣鐵道  
美術史學會 白井書店  
山口 諭助 寶雲舍  
井島 勉編 弘文堂書店  
谷 信一編 東京堂  
一氏 等良 大阪屋號書店  
逸見 梅榮 法藏館  
仲野半四郎 丸善株式會社  
逸見 梅榮 同  
關東局編纂 座右寶刊行會  
高木 紀重 翼書房  
齋藤 忠 地人書館  
川路 柳虹 大八洲出版  
土橋 通夫 株式會社  
藤岡 通一 彰國社  
グロスリエ 新紀元社  
三宅 一郎 育生社弘道館  
アンマンティエ 永田逸郎譯  
富田正二 立命館出版部  
藤岡 通夫 三省堂  
富田 龜郎 日進社  
高崎 光哲 京都印書館  
辰夫 羽田書店  
俗と藝術

爪哇の古代藝術

ニユーギニアの藝術

太田 三郎 崇文堂  
R・フアラース 天理時報社  
鈴木 治 繪圖

印度及南海の佛教美術

高田 修 創藝社

印度及び東南亞細亞美術史

クマラスワミイ 北海出版社  
山本智教 譯

インド・セイロン・ジャバの佛教美術

フオーヘル著 同

印度藝術

エルンスト・ディーツ 土方定一譯 アトリエ社

印度美術の主調と表現

岡本 貫堂 叢書房

イラン藝術遺蹟

和田 新 美術書院

繪畫

東洋畫題綜覽 第十一冊

金井紫雲 芸艸堂

東洋花鳥圖攷

同 大 藝艸堂

東洋畫の見方と技法

下店 靜市 藝艸堂

東洋畫論

荒木 十畝 小 藝艸堂

南畫論萃

古川 修 地 藝艸堂

日本

日本繪畫史の研究

澤村專太郎 星野書店

江戸已前日本繪畫史 (日本文化名著選)

笹川 種郎 創元社

日本繪畫近世史

藤田秀太郎 敏文書院

日本近世繪畫攷

土居 次義 桑名文星堂

名畫新拾

野口 駿尾 容美書院

日本の名畫 (信成社少年少女文庫)

笹川 臨風 信成社

日本名畫家物語

片岡 環 教養書院

本朝畫人傳 五卷

村松 梢風 中央公論社

唐繪と大和繪

下店 靜市 藝艸堂

大和繪史研究

同 富 山 房

日本繪卷物集成 正編

長坂 金雄 雄山閣

續日本繪卷物集成 第六卷

櫻井秀 他 雄山閣

日本繪卷物集成 續編

溝口禎次郎 同

粉河寺緣起繪卷 一

粉河寺編 大塚巧藝社

書蹟

華嚴緣起繪卷 六

勅修御傳 法然上人行狀

將軍塚繪卷

桃山障壁畫の鑑賞

狩野山樂派畫集

山樂と山雪

乾山遺芳

近世風俗畫史

日本初期洋畫の研究

長崎繪畫全史

蜀山人の研究

浮世繪の研究 上・中・下

浮世繪美談

浮世繪談記

北齋の研究 上卷

北齋の研究 上卷

日本風景版畫史論

日本風景版畫史論

高山寺編 大塚巧藝社

惠谷 隆成 平樂寺書店

高山寺 大塚巧藝社

土居 次義 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

同 桑名文星堂

書の美

書と美の鑑賞 古筆篇

日本書道の生ひ立ち

日本書道隨攷

日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

書の美

書と美の鑑賞 古筆篇

日本書道の生ひ立ち

日本書道隨攷

日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

書の美

書と美の鑑賞 古筆篇

日本書道の生ひ立ち

日本書道隨攷

日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

書の美

書と美の鑑賞 古筆篇

日本書道の生ひ立ち

日本書道隨攷

日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論

同 日本書道史論



西出 宗雄 丸善株式會社

杉山壽榮男雄山閣

上村六郎 甲鳥書林

蜚川第一大雅堂

田中於菟彌生  
活社

海原  
末台  
桑名  
文星  
堂

成田 潔英  
丸善株式會社

內藤 政恒 甲 鳥 書 林

上田 金吉 金尾文淵堂

115

岡田 哲郎 富山 房

藤島亥治郎 力書房

田邊 泰編 彰 國 社

11

福山 敏男 桑名文星堂

太田	原澤
淨六	東吾
寶	富
震	山
合	房

藤原義一桑名文星堂

作  
人  
集  
上  
卷  
五

天沼 俊一 星野書店

岸田日出乃生  
藤原義一弘  
文堂書房  
社

根岸 榮隆 ア ル ス

式會社

鳥居の研究	根岸 榮隆	厚生 閣
法隆寺建築	太田博太郎	彰 國 社
日本の城	大類 伸	ア 國 ス 社
名古屋城	城戸 久	同 國 社
日光廟建築	田邊 泰	同 國 社
徳川家靈廟	同	同 國 社
桂離宮	藤島亥治郎	同 國 社
桂御山莊(東亞建築撰書九卷)	澤島英太郎	彰 國 社
日本庭園	重森 三玲	一條 書 房
日本庭園歴史	同	是 文 社
日本庭園史話	龍居松之助	大東出版 社
日本庭園の傳統	森 繭	一條 書 房
源氏物語の自然描寫と庭園(日本學藝叢書)	外山英策	丁字屋 書 店
大和の庭園	重森 三玲	天理時報 社
茶席茶庭考	同	是 文 社
アジア各地		
支那建築裝飾(第四卷)	伊東 忠太	東方文化學院
滿洲碑記考	鷺淵 一	目 黑 書 店
支那庭園論	岡 大路	彰 國 社
朝鮮上代建築の研究	米田美代治著 村田治郎編	秋 田 屋 社
朝鮮の石塔	杉山 信三	秋 田 屋 社
印度佛塔巡禮 上	天沼 俊一	秋 田 屋 社
考 古 學		
考古學入門	濱田 青陵	創 元 社
東亞考古學論攷 第一	梅原 末治	星 野 書 店
古代日韓鐵文化	穴戸 儀一	帝國教育圖書株 式會社
日 本		
日本考古學研究	森本 六爾	桑 名 文 星 堂
日本古文化序說	大場 磐雄	明 世 堂
近畿古代文化攷考	直良 信夫	葦 牙 書 房
改訂日本石器時代提要	中谷治宇二郎	甲 鳥 書 林
彌生式繩文式 接觸文化の研究	田中 國男	大塚巧藝 社

大和唐古彌生式遺跡の研究	京都帝大文學部考古學教室
古墳研究	石井 周作
日古矢上古墳	柴田 常惠
信濃諏訪地方古墳の地域的研究(考古學上よりみたる古墳基立地の觀方)	藤森 榮一
アジア各地	
支那考古學論攷	梅原 末治
滿洲考古學	八木英三郎
滿洲の史蹟	村田 治郎
羊頭窪(東方考古學叢刊)	東亞考古學會
蒙古高原 前篇	東亞考古學會
(東亞考古學叢書乙種)	座右寶刊行會
印度支那の原始文明	彌津 正志
インドネシアの原始文化(東印度研究叢書)	野原 達夫
インダス文明(印度史前遺跡の研究)	阿・ネスト・マツケル
歴史以前の印度	龍山章眞譯
太平洋に於ける民族文化の交流	吉田富夫譯
アジアの古代文明	彌津 正志
アジア民族考	彌津 正志
大東亞の民族と宗教	東京帝大佛敎部
東亞古俗考(春陽選書)	藤原相之助
服飾民俗圖說	本山 桂川
古文書の話	吉村 茂樹
佛敎史叢考	松本文三郎
佛敎文化研究	望月 信享
佛敎教像講話	吉祥 眞雄

### 歴史・風俗・地誌・紀行其他

東亞交涉史論	秋山 謙藏
上代日支交通史の研究	藤田 元春
日支佛敎交涉史研究	塚本 善隆
ボルネオよりメッカへ	中西 秀男
坡西土から坡西土へ	天沼 俊一
成虫樓隨筆	同
日 本	
日本文庫史研究	小野 則秋
日本經濟史の研究(上)	内田 銀藏
服裝史概説	後藤 守一
寫眞日本風俗史 卷第二	吉川親方
日本風俗史圖録 上卷	江馬 務
日本佛敎史話	相葉 伸
修訂 日本文化と佛敎	辻 善之助
日向國史古代史	喜田 貞吉
職官考 上古篇	白鳥 清編
上代日本佛敎文化史	堀 一郎
寺院篇 僧尼篇	長尾 正憲
大和古寺上代史攷	笹川 種郎
(日本文化名著選)	東山時代の文化
聖德太子御聖蹟の研究	田中 重久
玄證阿闍梨の研究	土宜 成雄
大和古文書集英	永島福太郎
改訂大和志料上、中卷	奈良縣教育會編
寧樂遺文 上	斑鳩寺と峰想記
校本 日本靈異記	武田 祐吉
日本靈異記(續日本古典讀本)	杉浦 貞俊
箋注倭名類聚抄 古典案	澤瀉 久孝
舊事記(改造文庫)	溝口駒三訓註
御湯殿の上の日記一五	太田藤四郎

沙石集 上、下卷(岩 築土鈴寛校訂 岩 波 書 店  
波文庫)

新撰類林抄 卷第四 倉田 實 瑞 穂 會  
宜胤卿記(二) 笹川臨風編 日本電通出版部  
史料大成第四三卷 村上直次郎 拓 文 堂  
耶蘇會の日本年報 第二 東 洋 堂  
元和五、六年度の耶蘇會 浦川和三郎 東 洋 堂  
年報 大和古寺風物詩 辻本 好孝 天理時報社  
和州祭禮記 田畑修一郎 小山 書 店  
出雲・石見(新風土記叢 書)

日本説話文學索引 石山 治徳 日本出版社  
石山 四郎 國 民 社  
太田 亮 國 民 社  
姓氏家系大辭典 第五、 第六卷 國 民 社  
昭和十八年の國史學界 坂本 太郎 大八洲出版株式 會社

支那文學思想史 青木 正兒 岩 波 書 店  
支那典籍史談 大内 白月 昭 森 社  
支那上古代 内藤 湖南 弘文堂書店  
支那上代思想研究 出石 誠彦 藤 井 書 店  
長安波古 石田幹之助 生 活 社  
制度通(上) 岩波文庫 伊藤東涯著 岩 波 書 店  
吉川幸次郎校訂

支那旅行日記 海老原正雄譯 慶 應 書 房  
支那旅行記 中卷 リヒトホーフエン  
海老原正雄譯 慶 應 書 房  
西北支那紀行 池田 孝 博 文 館  
入蜀記 陸務觀、他 大阪屋號書店  
米内山庸夫譯

山西學術紀行 宮本 敏行 新 紀 元 社  
山西省大觀 第六卷總論 參謀本部監生 活 社  
修、山岡部除本部編  
華北の風物文化 加藤 將之 山 雅 房  
滿支印象記 藤本 實也 七 文 書 院

蒙古と西支那 蒙藏(生活選書) 緒方一夫譯 大 藏 書 社  
蒙古及蒙古人 保田與重郎 生 活 書 社  
蒙古の文化地帶 米内山庸夫 日 黑 書 店  
蒙古橫斷 室川 米次 春 陽 堂  
熱河 宮崎 武夫 朋 文 堂  
朝鮮新地誌(大日本郷土 地誌) スウエン・ヘディン 平 社  
朝鮮風土記 下卷 日本地歴研 究會編 恒 春 閣  
朝鮮風土記 下卷 難波專太郎 建 設 社  
アジヤ各地 東洋學の話 石濱純太郎 創 元 社  
東西交涉史 東 亞 史 研 究 會 譯  
支那及び支那への道 H・ユール著 帝 國 書 院  
東西交涉史の研究 藤田 豊八 荻 原 星 文 館  
西域篇及附篇 白鳥 庫吉 岩 波 書 店  
西域史研究(下) 前嶋 信次 博 文 館  
中央アジアの過去と現在 寺嶋 信男 藏 書 館  
大唐山域記の研究 下 足立 喜六 法 藏 館  
古代絹街道 安武 納譯 霞ヶ關書房  
新疆紀遊 ヘルマン 霞ヶ關書房  
楊井克己譯 興 亞 書 局

西洋美術關係單行圖書 總 說  
イタリヤとドイツ イタリヤ文化政策  
イタリヤ藝術遺蹟  
イラン藝術  
印度藝術  
グアザリ美術家傳  
畫商の想出  
カラムシエフ  
緒方一夫譯 大 藏 書 社  
保田與重郎 生 活 書 社  
米内山庸夫 日 黑 書 店  
室川 米次 春 陽 堂  
宮崎 武夫 朋 文 堂  
スウエン・ヘディン 平 社  
黒川武敏譯(ディン  
日本地歴研 究會編 恒 春 閣  
難波專太郎 建 設 社  
東 亞 史 研 究 會 譯  
藤田 豊八 荻 原 星 文 館  
白鳥 庫吉 岩 波 書 店  
前嶋 信次 博 文 館  
寺嶋 信男 藏 書 館  
足立 喜六 法 藏 館  
安武 納譯 霞ヶ關書房  
ヘルマン 霞ヶ關書房  
楊井克己譯 興 亞 書 局

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

印度支那民族誌 印度支那民族誌  
佛印紀行 シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記 西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

彷彿へる湖

禁斷秘密の國 秘境を征く  
西藏紀行 甘肅西藏・邊疆の民族  
印度(南方民俗叢書)  
印度史  
印度文化史  
印度の歴史と文化  
古代印度の研究  
インド紀行(上)(岩波 文庫)  
印度支那民族誌  
佛印紀行  
シベリヤの自然と文化  
黒龍江と北樺太  
アフガン記  
西亞細亞民族(民族叢書)  
内藤誠太郎 岡島誠太郎 三島 安精

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館

スウエン・ヘディン 岩村・矢崎譯 筑 摩 書 房  
スウエン・ヘディン 田中隆泰譯 青 葉 書 房  
廣野道太郎 六 合 書 房  
妹尾詔夫譯 西 東 社  
蓮井一雄譯 帝 國 書 院  
辻直四郎 僧 成 社  
他三氏 ハンター 室 戸 書 房  
茂垣長作譯 A・マクドネル  
大澤貞藏譯 地 平 社  
山澤 種樹 彰 考 書 院  
佐保田鶴治 立命館出版部  
ボンゼルス 岩 波 書 店  
實吉捷郎譯 實 吉 捷 郎 譯  
滿鐵東亞經濟調查局  
川島順平譯 鱗 書 房  
尾瀨 敬止 山 雅 房  
鳥居 龍藏 生活文化研究會  
近藤 正造 相 模 書 房  
岡島誠太郎 六 盟 館



藝術について

藝術の歴史(上)

ゴシック美術形式論

西洋美術史論攷

世界美術圖譜(西洋篇)

ゾラとセザンヌ

タイの造形文化

東西藝術論

ドラクロアの日記

南方古代文化と藝術

巴里の藝術家たち

美の復興(イタリヤルネ

ツサンスの藝術)

風景畫論

フランドルの畫家論抄

文學と繪畫の交渉

滿洲畫觀

ミケランジェロ傳

ルネッサンス文化の潮流

レオナルド・ダ・ヴィンチ

レオナルド・ダ・ヴィンチ

偉業と生涯

繪畫

アンリ・ルッソー(藝術

と生活)

イタリヤ繪畫史

印象派時代

ゲオルゲ 三笠書房

上村 清延譯 鮎書房

玉城 肇譯 鮎書房

中野 勇 座右寶刊行會

澤木四方吉 慶應出版

今泉篤男編 東京堂

太田咲太郎 三田文學出版部

カール・デ 寶雲舍

エリッゲ著 寶雲舍

勝見 勝譯

R・W・ウオ 祥三譯

牧 祥三譯

中井 愛譯 石原求龍堂

川路 柳虹 大八洲出版株式

土橋 醇一 會社

シズク・ハ 昭森社

益田 道三譯

荒城 季夫 青磁社

ライナ・マ三笠書房

谷 友幸譯

宇田川嘉彦 洗林堂

國分 敬治譯 敬文館

本間 國生畫

ヴァザリ 寶雲舍

石 進譯

大類 仲文 藝春秋社

板垣 應穂 新潮社

木村 重夫 綜合美術出版部

ヴァン・ゴッホ

ヴァン・ゴッホ畫集と評

ヴァン・ゴッホ

ヴァン・ゴッホの生涯

ヴァン・ゴッホ畫集と評傳

グエラスケス

エドワール・マネ

エル・グレコ

グレコとベラスケス

コロの生涯とその作品

ゴッホの素描

ゴッホ

シエナ及ウムブリアの畫

家

十九世紀佛國繪畫史

セザンヌ

セザンヌとその時代

デューラー

デューラーとその生涯その

作品

足立源一郎 アトリエ社

マリウス・創 藝社

グレイヤー 著

郡山 千冬

式場隆三郎譯 東京堂

石井 柏亭譯 藝社

郡山 千冬

古澤 岩美編 桐書院

ユリウス・創 藝社

グレイヤー 著

郡山 千冬

モリス・

關口 俊吾譯

三輪 啓三譯

ウジエス・三田文學出版部

吉川 逸治譯

M・ネラト日本公論社

後藤 碩二譯

式場隆三郎 アトリエ社

古澤 岩美 桐書院

グレイヤー 著

高橋 廣江譯

B・ベレン アトリエ社

菅原 芳郎譯

茂田 茂譯

リヒャルト・

木下奎太郎譯

ジョン・リ 青磁社

森 満二郎譯

郡山 千冬譯

グレイヤー 著

郡山 千冬譯

デューラー素描

ドラクロア

ドラクロアの素描

目曜日のセザンヌ

ボオドレエル素描集

ポール・ゴーガン

ラファエルの素描

ルノワールの追憶

ルーベンス

レオナルド・ダ・ヴィンチ

我が回想

彫刻

ロダン傳

ロダンの言葉

ロダンの大聖堂

其他

カミイユ・梁塵社

モクレル 昭譯

ボイル・ゲ

古川 達雄譯

新庄 嘉章

二見書房

土方 定一 創藝社

小野 健夫譯

鈴木 健夫譯

古澤 岩美編 桐書院

富永 惣一 創藝社

古川 達夫

ジャック・昭森社

クレベ編

佐藤 朔譯

ベリル・ベ 淡海堂

柳 亮 創藝社

高山 章 伯心社

梅原龍三郎 甲鳥書林

久保 守

古澤 岩美編 桐書院

茂田 茂 伊協會

ルオ・

武者小路實篤譯

ロダン傳

カミイユ・梁塵社

モクレル 昭譯

ボイル・ゲ

古川 達雄譯

新庄 嘉章

二見書房

土方 定一 創藝社

小野 健夫譯

鈴木 健夫譯

古澤 岩美編 桐書院

富永 惣一 創藝社

古川 達夫

ジャック・昭森社

クレベ編

佐藤 朔譯

ベリル・ベ 淡海堂

柳 亮 創藝社

高山 章 伯心社

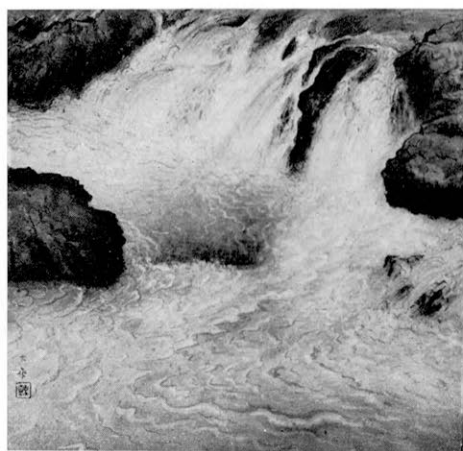
梅原龍三郎 甲鳥書林

久保 守

古澤 岩美編 桐書院

茂田 茂 伊協會

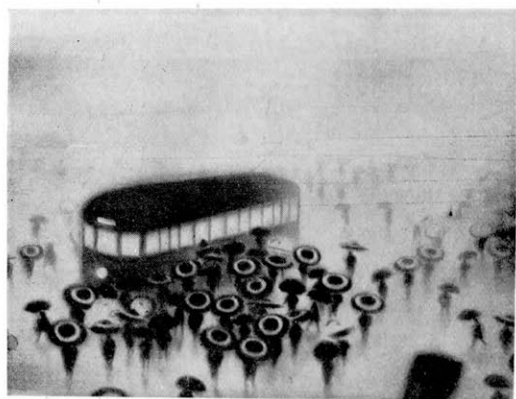
ルオ・



2 奔流 青木大乘 第21回新燈社



1 霜上 安西啓明 第11回春の青龍展



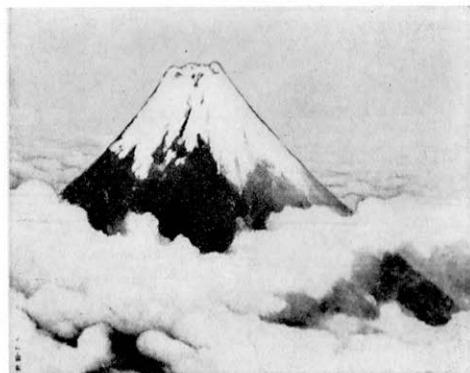
4 暮雨 穴山勝堂 第5回日本画院



3 薙刀 伊東深水 文部省戦時特別展

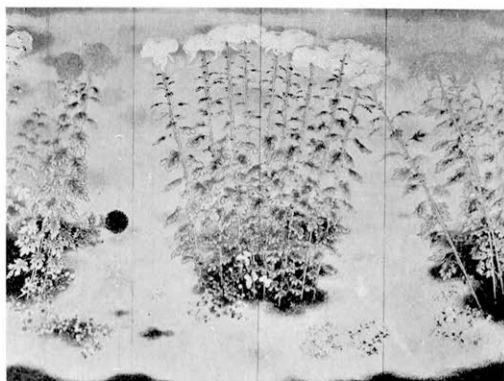


6 童女 秋野不矩 第6回文展

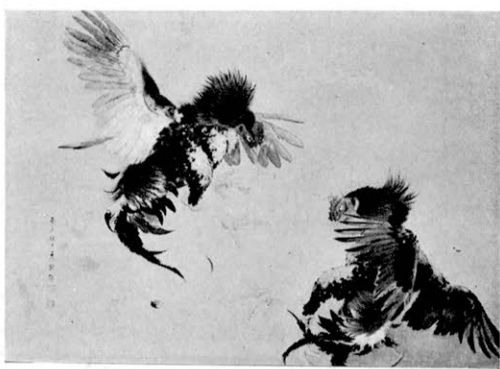


5 靈峯 荒木十畝 戦艦献納展

## 日本画



8 聖苑 石崎光瑤 關西邦画展



7 決闘 池上秀歆 第6回文展



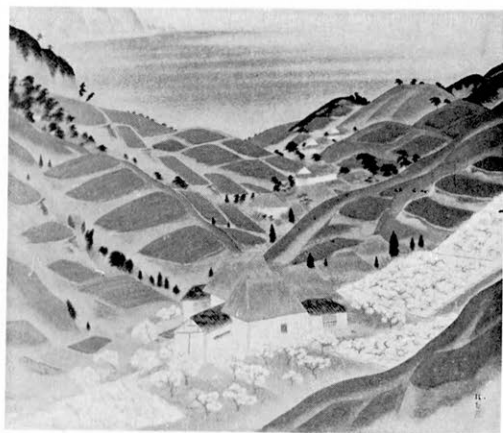
11 晩秋 上村松園 關西邦画展



10 鷹 市野亨 第11回春の青龍展



9 吉野拾遺 池田遙邨 第6回文展



13 瀬戸喧春 大智勝観 文部省戦時特別展

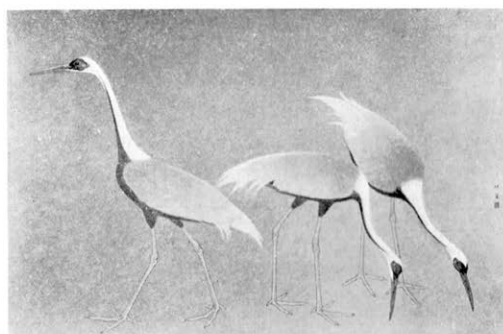


12 海大養同應 江崎孝坪 文部省戦時特別展

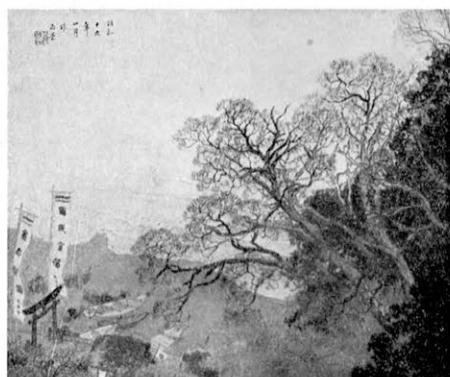




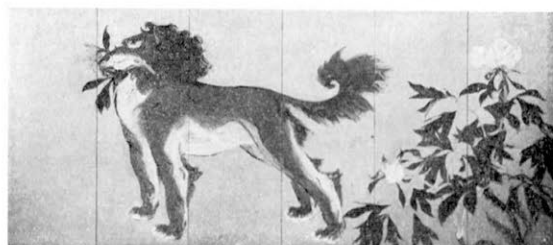
15 信濃の山 奥村土牛 文部省戦時特別展



17 野鶴 金鳥桂華 関西邦画展



18 旗日 川合王堂 戦艦献納展



20 牡丹獅子(右半双) 川端龍子 第17回青龍社



14 西郷先生 習作 太田聽雨 第30回院展



16 寒釣 加納三樂 第11回春の青龍展



19 竹女大日如來 錦木清方 第6回女展



22 稚兒文珠 菊池契月 戦艦献納展



21 雨鯉 木村鹿之介 第11回春の青龍展



24 馬郎婦 小林古徑 戦艦献納展



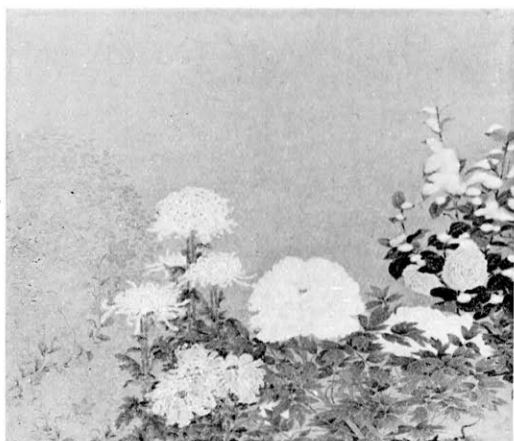
23 夜櫻 北野恒富 關西邦画展



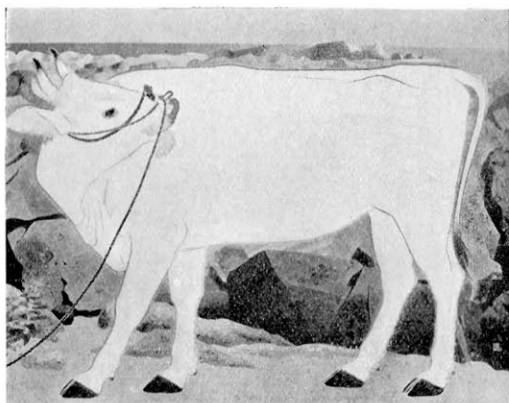
26 朝寒 酒井三良子 文部省戦時特別展



25 洪波万里 坂口一草 第17回青龍社



28 花園春秋 白倉嘉入 文部省戦時特別展



27 夕映 澤 宏靱 第6回文展



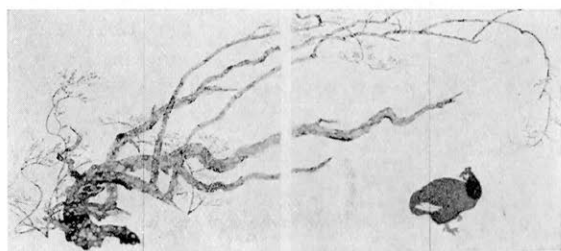
31 山本元帥 中村大三郎 關西邦画展



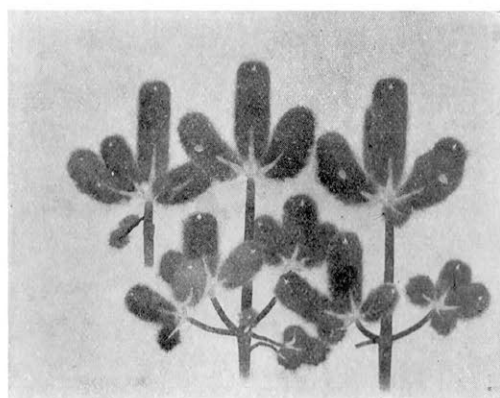
30 北條時宗 堂本印象 第6回文展



29 大同靈巖 杉山 寧 第6回文展



33 三彩櫻 瀧 秋方 第4回園外美術展



32 松 徳岡神泉 關西邦画展





35 山嶺 西山翠嶂 關西邦画展



34 大空へ 中村貞以 文部省戦時特別展



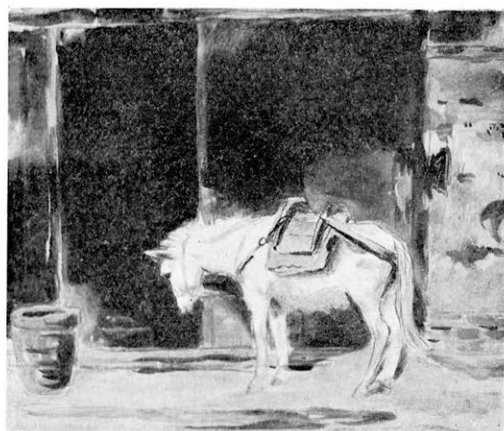
38 繪師良秀 (双幅右) 福岡青嵐 第17回青龍社



37 香妃戎装 橋本關雪 文部省戦時特別展



36 鍛刀 野田九浦 第6回文展



40 驢馬 東山魁夷 第6回大日美術院



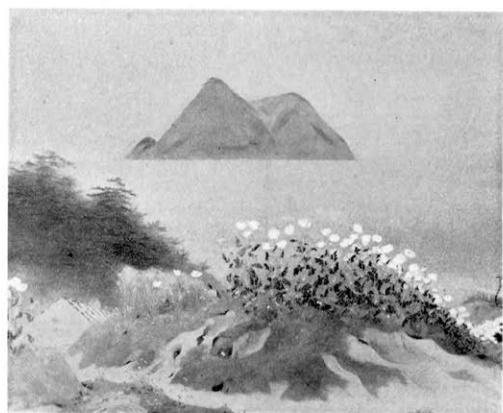
39 振威八荒 飛田周山 文部省戦時特別展



42 ばこ(魚名) 前田青邨 戦艦献納展



41 若櫻 福田平八郎 文部省戦時特別展



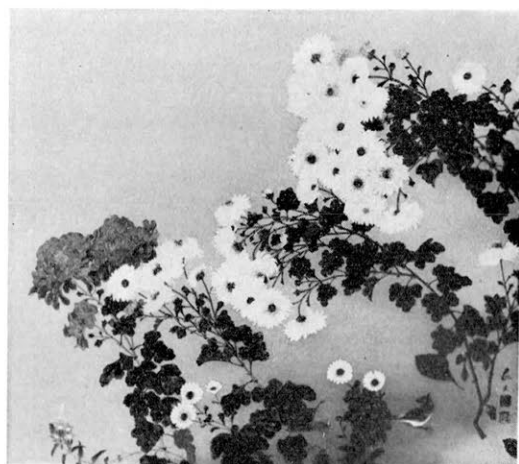
44 朝風 案本一洋 第6回文展



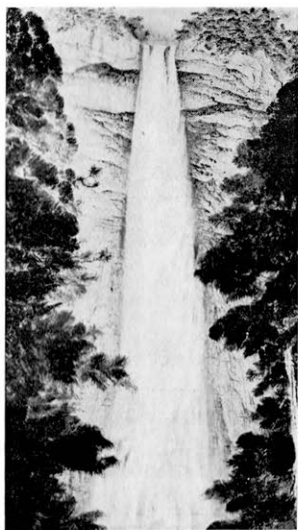
43 秋声 松林桂月 戦艦献納展



46 峰樂師 村嶋西一 文部省戦時特別展



45 國華凌霜 水上泰生 文部省戦時特別展



49 那智奉拜 矢野知道人 關西邦画展



48 上古 森田沙伊 文部省戦時特別展



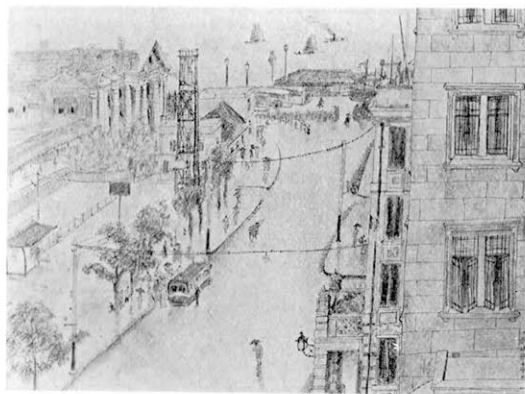
47 紙漉き 向井久萬 第6回文展



51 豊太閤 安田毅彦 戦艦献納展



50 朝鮮ヲ憶フ 矢澤弦月 第5回日本画院

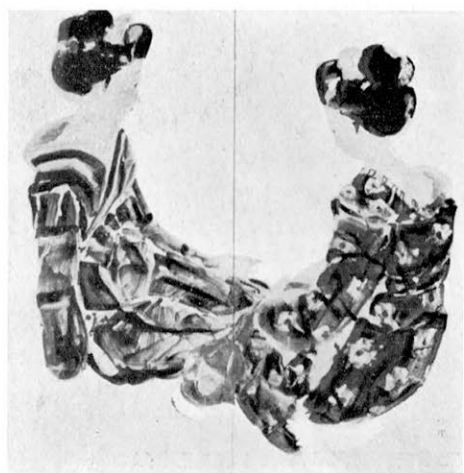


53 九龍碼頭 山口蓬春 陸軍美術展



52 靜 山川秀峰 第四回青衿會展





55 待機 山崎 豊 第11回春の青龍展



54 或日の太乙(右半双) 矢野知道人 第5回乾坤社展



56 基地ニ於ケル整備作業 山口華楊 第2回大東亞戦美術展



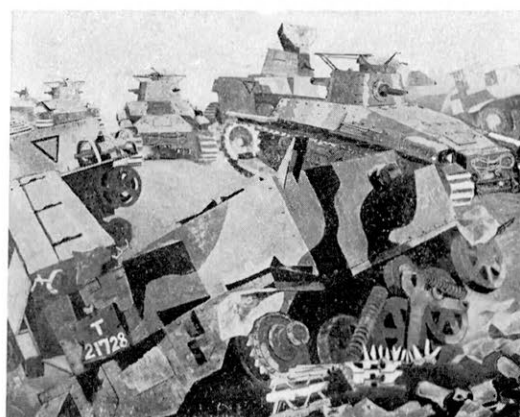
58 収穫 結城素明 第6回大日美術院



57 中秋無月 横山大観 第30回院展



60 南溟の夜 横山大観 戦艦献納展



59 猛追 吉岡堅二 陸軍美術展



2 哈爾濱風景 赤城泰紓 滿30周年記念日本水彩展



1 寂しき磯 青山義雄 第18回国畫会展



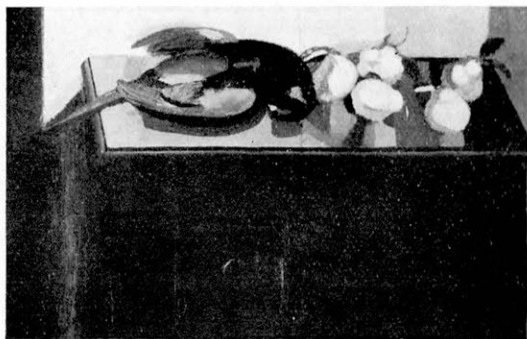
4 朝の配給 伊藤繼郎 第8回新制作派展



3 ミモザ咲く 有島生馬 一水会々員春季展



6 カイユの花 猪熊弦一郎 新制作派春季展

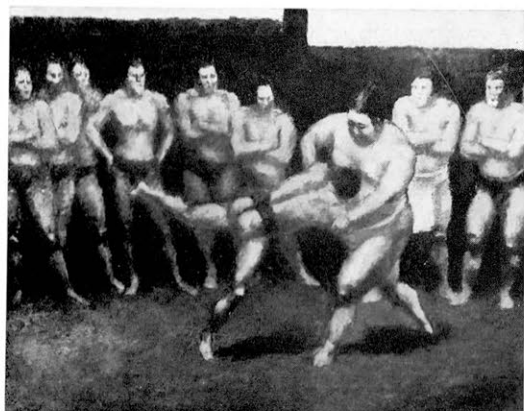


5 雄子 伊藤 廉 第18回国画会展

## 洋 画



8 鳥御晴雪 石井柏亭 第39回太平洋画会展



7 相撲稽古 石井鶴三 第21回春陽会展



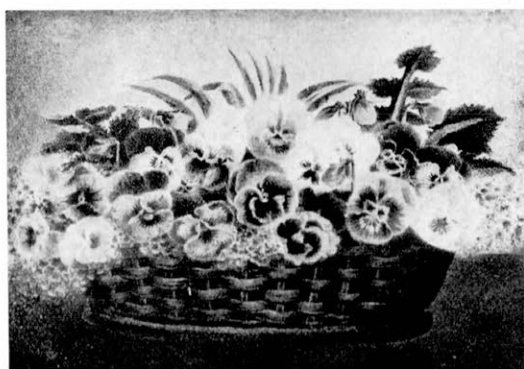
11 姑娘図 梅原龍三郎 戦艦献納展



10 母の像 内田 巖 第8回新制作派展



9 花 岩井彌一郎 第12回旺玄社展



13 三色草 岡鹿之助 第22回春陽会展



12 春温 牛島憲之 第4回創元会展





15 砂漠 萩野康児 満30周年記念日本水彩展



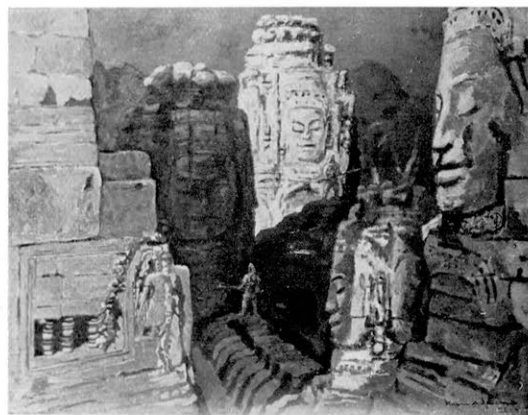
14 仕立屋 (ハルビン) 萩須高徳 第8回新制作派展



17 青島 (一) 春日部たすく 満30周年記念日本水彩展



16 秋庭 加山四郎 第22回春陽全展



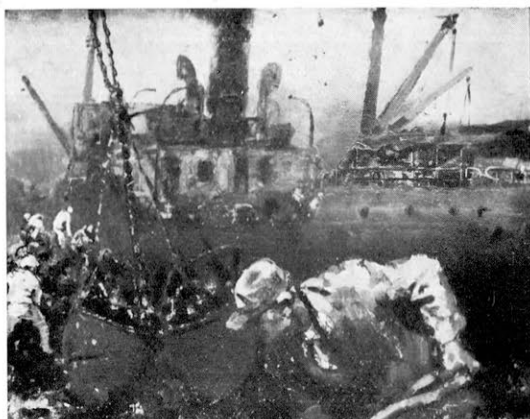
19 アンコールトム夜警 川島理一郎 陸軍美術展



18 ヒマワリ 川口軌外 第13回独立展



21 大鷲神社祭礼 木村莊八 第22回春陽会展



20 石炭荷揚 川端 實 文部省戦時特別展



23 香取神宮 熊谷登久平 第14回独立展



22 少女像 熊岡美彦 第11回東光会展



25 肖像 小磯良平 第8回新制作派展



24 松林 庫田 翠 第18回国画会展



27 朝鮮扶餘浮山景 小島善太郎 第13回独立展



26 山村春閑 小絲源太郎 第30回光風会展



29 浦灣の春色 小林萬吾 文部省戦時特別展



28 金太郎 小杉放庵 第21回春陽会展



31 巖冬 兒島善三郎 第13回独立展



32 秋(收穫) 齊藤長三 第14回独立展



30 鳩 小林和作 第13回独立展





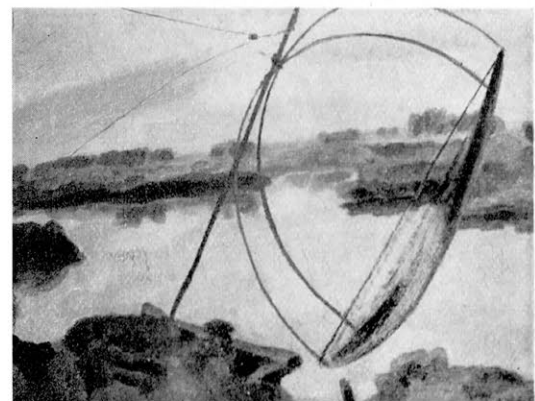
34 南方地下資源 清水登之 第13回独立展



36 石組(保國寺) 須田國太郎 第14回独立展



38 黎明 鈴木千久馬 第3回創元会展



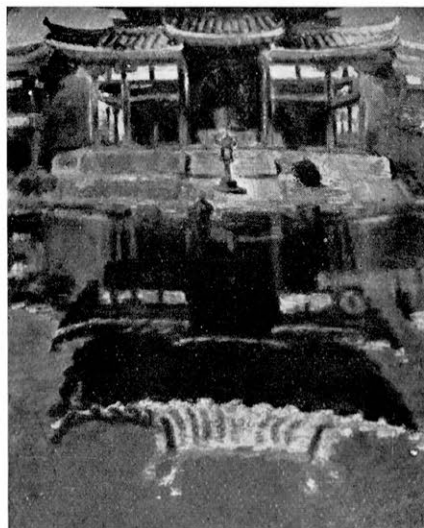
39 南白亀(ナバキ)川 曾宮一念 第3回源辰会展



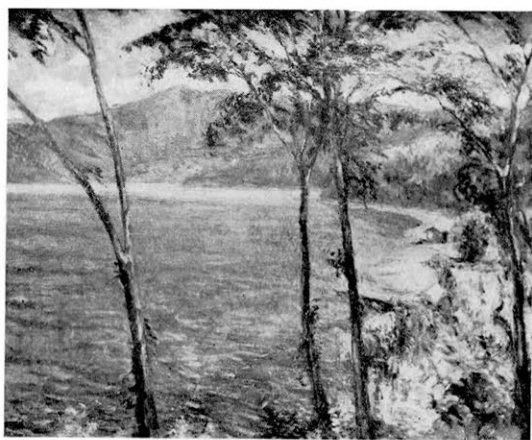
33 初夏の富士 齋藤與里 第11回東光会展



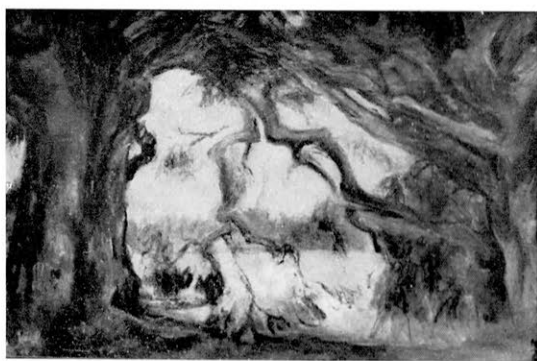
35 罫索 白川一郎 文部省戦時特別展



37 平等院 杉本健吉 第18回国画会展



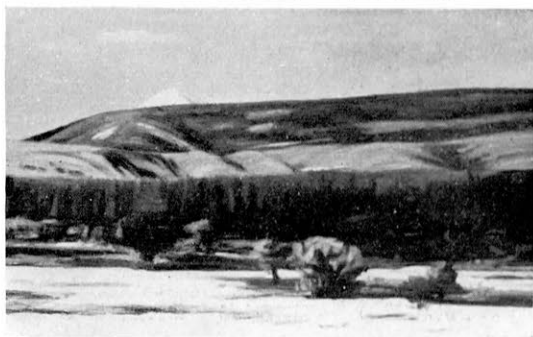
41 朝映える芙蓉湖 田邊 至 文部省戦時特別展



40 シュエダゴン塔 田中佐一郎 第14回独立展



43 印度少年 田村孝之介 第6回女展



42 晴日の山麓 田村一男 第30回光風会展



44 祭礼(玉垂神社鬼会祭) 高田力藏 第22回春陽会展



46 国境の少年達 高井貞二 第6回文展



45 山峡の秋 辻 永 第30回光風会展



49 鏡 中澤弘光 満30周年記念日本水彩展



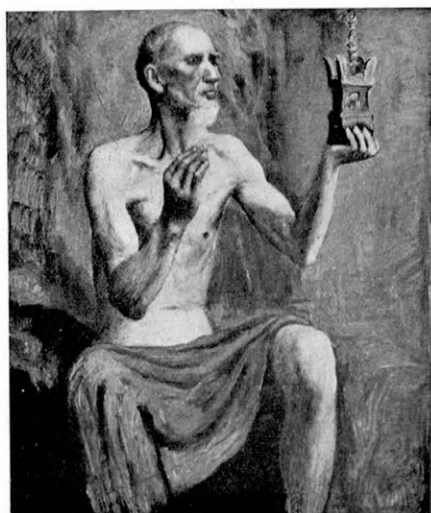
47 香紀 東郷青児 第6回文展



50 佐原風景 中西利雄 昭和19年新制作派春季展



48 雪 中川一政 第22回春陽会展



52 捧塔尊者 中村不折 第39回太平洋画会展

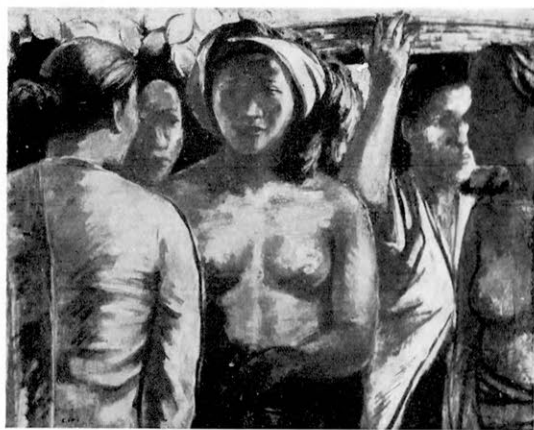


51 雪嶺先生 中村研一 第6回文展

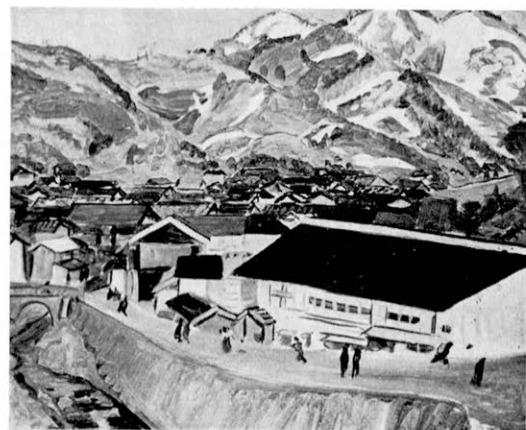




54 春日神苑の朝 鍋井克之 第6回文展



53 女人群 (バリー島) 中山 魏 第13回独立展



56 北越魚村 野口彌太郎 第13回独立展



55 餌をやる 南城一夫 第22回春陽会展



59 アネモネ 林 武 第14回独立展



58 椿 林 重義 第18回国画会展



57 椿 曙三彩亭 一水会々員春季展



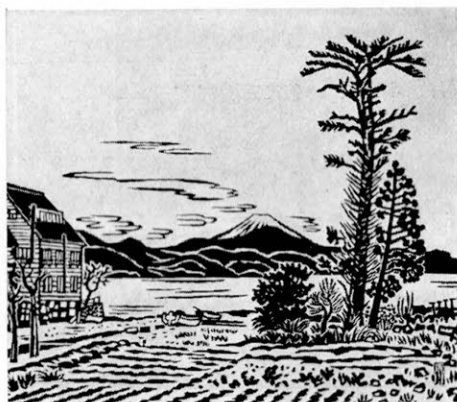
61 支那 藤岡 一 第14回独立展



60 あふぎ 長谷川昇 第6回文展



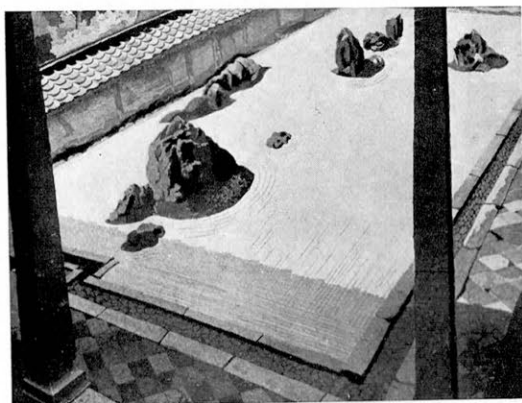
63 キャンボチャ風景 藤田嗣治 戦艦献納展



62 芦の湖畔 平塚運一 第18回国画会展



65 妙義山 前田政雄 第18回国画会展



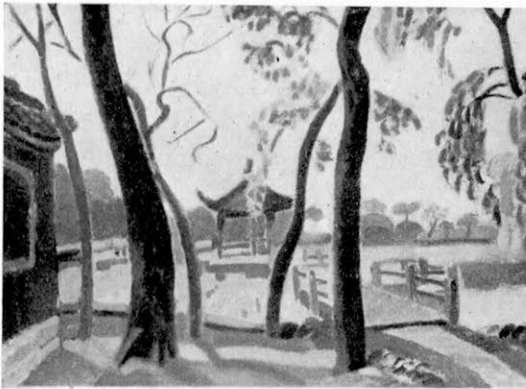
64 龍安寺の庭 前田藤四郎 第21回春陽会展



67 蘇洲城 三宅克己 第6回文展



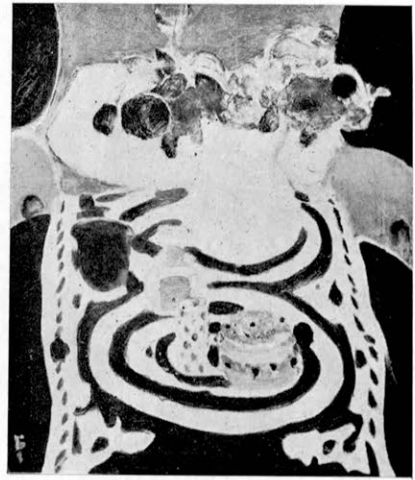
69 歸郷 水谷 清 第21回春陽会展



70 中支風景 水船三洋 第11回東光会展



72 大陸の民家 山本敬輔 個展



66 靜物 三岸節子 第8回新制作派展



68 手袋 安井曾太郎 戦艦献納展

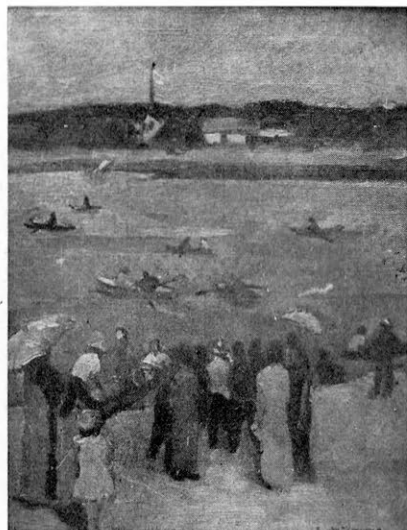


71 山麓の春 和田英作 戦艦献納展

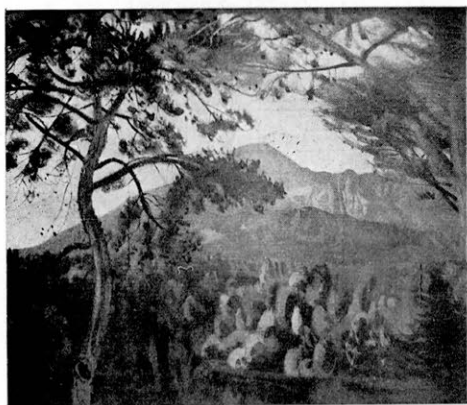




74 春蔭 宮田重雄 第18回国画会展



73 渡し 三雲祥之助 第22回春陽会展



76 磐梯山 山本 鼎 第22回春陽会展



75 薔薇 山下新太郎 一水会々員春季展



78 画室の子供 脇田 和 第8回新制作派展



77 垣の雪 南 薫造 第30回光風会展



3 鎌田氏像 今里龍生 第39回太平洋画会展



2 少年航空兵 明田川孝 第8回新制作派展



1 顔 安藤 照 第12回塊人社展



6 夕焼け 北村西望 第6回文展



5 ますらを 内藤 伸 第6回文展



4 監視員 大須賀力 決戦美術展



9 少女 佐藤忠良 新制作派協会展



8 首 菊池一雄 新制作派協会展



7 天彦 澤田晴廣 文部省戦時特別展

彫 刻



11 仔馬 本郷 新 新制作派展



10 共榮 齋藤素嵐 戦艦献納展



14 コレヒドールの朝 中村直人 陸軍美術展



13 毘沙門天王 關野聖雲 文部省戦時特別展



12 植樹 清水多嘉示 第4回文展



17 胸像 舟越保武 新制作派展



16 崔氏菩薩 藤井浩祐 戦艦献納展

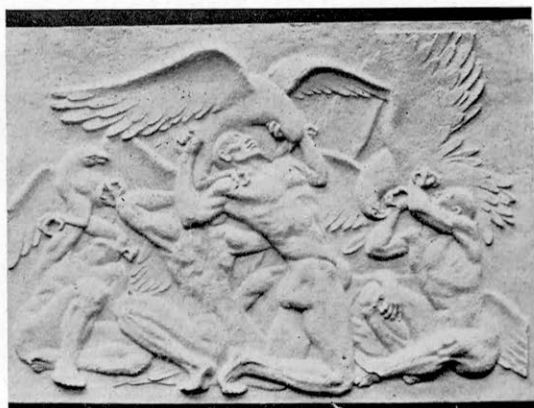


15 永寿清頌 平櫛田中 戦艦献納展





19 首 柳原義達 第8回新制作派展



18 浮彫習作 森本清水 第16回構造社展



22 迎へる父 横江嘉純 第8回海洋美術展



21 厥折かむ 山崎朝雲 戦艦歌納展



30 愛国行進曲 矢野秀徳 文部省戦時特別展



24 羊を飼ふ老人 吉田三郎 第6回文展



23 少女頭部 山内壯夫 新制作派春季展



3 獅子文香爐 清水龜藏 戦艦献納展



2 花瓶 板谷波山 戦艦献納展



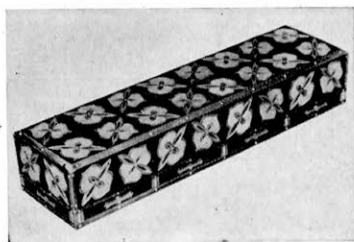
1 白銅釜 香取秀真 戦艦献納展



6 獅子吼号額盆 六角紫水 戦艦献納展



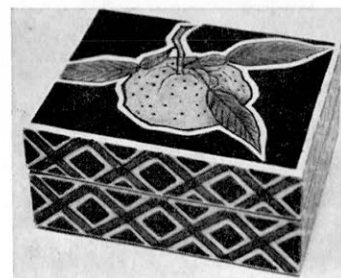
4 辰砂菱花食籠 河井寛次郎 第6回文展



8 金工花文笥 鈴木勝平 第6回文展



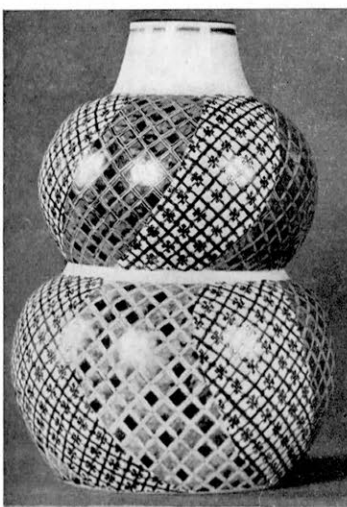
5 色繪花籠花瓶 清水六兵衛 戦艦献納展



7 橙果図 福田力三 第18回国画会展



11 猫 津田信夫 第6回文展



10 金襴手大德利 富本憲吉 第6回文展



9 柿釉丸紋花壺 濱田庄司 第6回文展

## 工 藝



3 村越道守 昭和18年4月8日逝去



2 平木政次 昭和18年4月7日逝去



1 藤島武二 昭和18年3月19日逝去



6 中村不折 昭和18年6月6日逝去



5 高木背水 昭和18年5月12日逝去



4 不二木阿古 昭和18年4月23日逝去



9 澤岩太 昭和18年10月12日逝去



8 跡見玉枝 昭和18年8月7日逝去



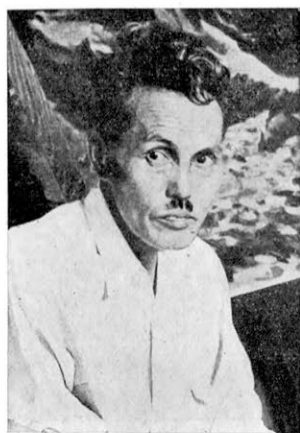
7 島田墨仙 昭和18年7月9日逝去

物故者





12 林 重義 昭和19年3月16日逝去



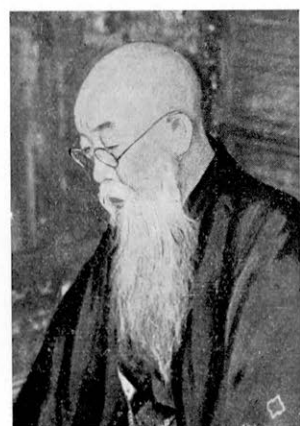
11 國枝金三 昭和18年11月20日逝去



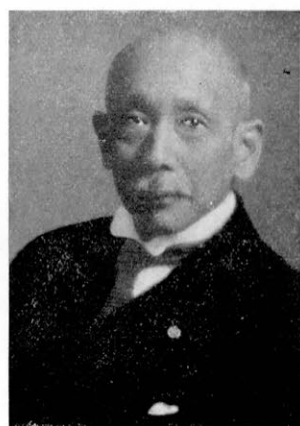
10 平井武雄 昭和18年10月26日逝去



15 野口謙藏 昭和19年7月5日逝去



14 池上秀畝 昭和19年5月26日逝去



13 松岡 壽 昭和19年4月28日逝去



18 長谷川榮作 昭和19年10月6日逝去



17 熊岡美彦 昭和19年10月1日逝去



16 荒木十畝 昭和19年9月11日逝去



21 橋本關雪 昭和20年2月27日逝去



20 林 俊衛 昭和20年1月26日逝去



19 島崎鶴二 昭和19年10月12日逝去



24 日名子實三 昭和20年4月25日逝去



23 荒井寛方 昭和20年4月21日逝去



22 小室翠雲 昭和20年3月30日逝去



27 清水登之 昭和20年12月7日逝去



26 飛田周山 昭和20年11月22日逝去



25 瀧 精一 昭和20年5月17日逝去

附

錄



## 附 錄 目 次

### 美術行政機關

國寶保存會

重要美術品等調查委員會

史蹟名勝天然紀念物調查會

帝室技藝員

日本藝術院

日本美術展覽會

國立博物館

文部省社會教育局文化課及藝術課

### 美術研究施設

國立博物館附屬美術研究所

東洋文化研究所

東方文化研究所

工藝指導所

陶磁器試驗所

### 美術教育施設

美術學校及研究所

### 美術觀覽施設

### 美術團體一覽

### 美術商一覽

### 美術家及美術關係者名簿

### 美術關係定期刊行物一覽

# 美術行政機關

## 國寶保存會

### 國寶保存法

昭和四年三月二十八日  
法律第十七號

第一條 建造物、寶物其ノ他ノ物件ニシテ特ニ歴史ノ證據又ハ美術ノ模範ト爲ルベキモノハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ヲ國寶トシテ指定スルコトヲ得

第二條 主務大臣前條ノ規定ニ依リ指定ヲ爲シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知ス

第三條 國寶ハ之ヲ輸出又ハ移出スルトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第四條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ主務大臣ノ許可ヲ受クベシ但シ維持修理ヲ爲スハ此ノ限ニ在ラズ

第五條 主務大臣前二條ノ規定ニ依リ許可ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮問スベシ

第六條 國寶ノ所有者ニ付變更アリタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ所有者ヨリ主務大臣ニ届出ヲ爲スベシ國寶滅失又ハ毀損シタルトキ亦同ジ

第七條 國寶ノ所有者ハ主務大臣ノ命令ニ依リ一年ノ期間ヲ限リ帝室、官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ其ノ國寶ヲ出陳スル義務アルモノトス但シ祭祀法要又ハ公務執行ノ爲必要アルトキ其ノ他已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ此ノ限ニ在ラズ

前項ノ命令ニ對シテ不服アル者ハ訴願

ヲ爲スコトヲ得  
第八條 前條ノ規定ニ依リテ國寶ヲ出陳シタル者ニ對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ補給金ヲ交付ス

第九條 第七條ノ規定ニ依リテ出陳シタル國寶其ノ出陳中滅失又ハ毀損シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ國庫ヨリ其ノ所有者ニ對シ通常生ズベキ損害ヲ補償ス但シ不可抗力ニ因リタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第十條 損害補償額ハ主務大臣之ヲ決定ス其ノ決定ニ對シテ不服アル者ハ決定通知ノ日ヨリ三月内ニ通常裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第十一條 公益上其ノ他特殊ノ事由ニ依リ必要アルトキハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ國寶ノ指定解除ヲ爲スコトヲ得

第十二條 神社又ハ寺院(佛堂ヲ含ム以下同ジ)ノ所有ニ屬スル國寶ハ神社ニ在リテハ神職(官國幣社ニ在リテハ宮司、府縣郷社ニ在リテハ社司、村社以下ニ在リテハ社掌)、寺院ニ在リテハ住職(佛堂ニ在リテハ受持僧侶)之ヲ管理ス但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ別ニ管

理者ヲ定ムルコトヲ得  
第十三條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ハ之ヲ處分シ、擔保ニ供シ又ハ差押フルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ處分シ又ハ擔保ニ供スルハ此ノ限ニ在ラズ

第十四條 主務大臣ノ許可ヲ受ケズシテ神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分シ又ハ擔保ニ供シタルトキハ之ヲ無効トス

第十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ維持修理スルコト能ハザルトキハ主務大臣國寶保存會ニ諮問シ之ニ對シ補助金ヲ交付スルコトヲ得

第十六條 補助金ハ豫算額ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得此ノ場合ニ於テ精算ノ上剩餘アルトキハ之ヲ還付セシムルコトヲ得

第十七條 補助金及補給金トシテ國庫ヨリ支出スベキ金額ハ毎年度十五萬圓以上二十萬圓以下トス

第十八條 前項ノ金額ノ外特ニ必要アルトキハ豫算ノ定ムル所ニ依リ臨時ニ補助金又ハ補給金ヲ支出スルコトヲ得

第十九條 國寶保存會ノ組織及權限ニ關スル事項ハ本法ニ規定スルモノノ外勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ハ之ヲ處分シ、擔保ニ供シ又ハ差押フルコトヲ得ズ但シ主務大臣ノ許可ヲ受ケ處分シ又ハ擔保ニ供スルハ此ノ限ニ在ラズ

第二十一條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十五條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十七條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十八條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十一條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十二條 國寶ヲ毀損、毀棄又ハ隱匿シタル者ハ五年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

(昭和四年勅令第二百九號ヲ以テ同年七月一日ヨリ施行)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第二十五條 非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ本法ニ規定スル科料ニ付之ヲ準用ス

古社寺保存法ハ之ヲ廢止ス  
古社寺保存法ニ依リテ特別保護建造物又ハ國寶ノ資格アルモノト定メラレタル物件ハ之ヲ本法ニ依リテ國寶トシテ指定セラレタル物件ト看做ス古社寺保存法ニ依

リテ下付シタル保存金ハ之ヲ本法ニ依リテ交付シタル補助金ト看做ス

國寶保存法施行令

昭和四年六月二十九日  
勅令 第二百十號

第一條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ

テ國寶ヲ官立又ハ公立ノ博物館又ハ美術館ニ出陳セシメタルトキハ當該博物館又ハ美術館ノ長、當該博物館又ハ美術館ノ長故障アルトキハ當該職制ノ定ムル所ニ依リ其ノ職務ヲ代理スル者ニ於テ出陳國寶ヲ管理ス

第二條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ

テ博物館又ハ美術館ニ出陳シタル國寶ノ出陳ニ要スル荷造運搬費等ハ當該博物館又ハ美術館ニ於テ負擔スルモノト返送ニ要スル荷造運搬費等亦同ジ

第三條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依

リテ補助金ノ交付ヲ受ケタル國寶ノ維持修理ニ關シテハ文部大臣之ヲ監督ス文部大臣ハ前項ニ規定スル權限ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得

第四條 文部大臣國ノ所有ニ屬スル物件

ヲ國寶トシテ指定シタルトキハ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所管大臣ニ通知スベシ國ノ所有ニ屬スル國寶ノ指定解除ヲ爲シタルトキ亦同ジ

第五條 國ガ其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處

分シ、輸出若ハ移出シ又ハ其ノ現狀ヲ變更セントスルトキハ所管大臣ニ於テ文部大臣ノ同意ヲ得ベシ

第六條 文部大臣前條ノ規定ニ依リ同意

ヲ爲サントスルトキハ國寶保存會ニ諮

問スベシ  
第七條 國ノ所有ニ屬スル國寶ニ付滅失、毀損又ハ管理換アリタルトキハ其ノ旨ヲ所管大臣ヨリ文部大臣ニ通知スベシ國方國寶ヲ取得シタルトキ亦同ジ

附則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス（昭和四年七月一日ヨリ施行）  
明治三十年勅令第四百四十六號ハ之ヲ廢止ス

國寶保存法施行規則

昭和四年六月二十九日  
文部省令第三十七號

第一條 文部省ニ國寶臺帳ヲ備ヘ國寶ヲ

登錄ス  
第二條 國寶臺帳ニハ左ノ事項ヲ記載シ

寫眞ヲ添付ス  
建造物ノ類ニ付テハ

一 名稱及所在地  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 員數  
四 構造及形式  
五 大サ  
六 創建及沿革

七 其ノ他參考トナルベキ事項  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

一 名稱  
二 所有者ノ氏名（名稱）及住所  
三 種類  
四 員數  
五 品質  
六 形狀  
七 法量  
八 作者及傳來  
九 其ノ他參考トナルベキ事項

第三條 國寶ヲ輸出又ハ移出セントスル

トキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 輸出又ハ移出ノ期間  
三 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地  
四 荷造運搬ノ方法  
五 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法  
六 模寫模造等ニ關スル約束アラバ之ニ關スル事項

第四條 國寶ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受

ケタル者當該國寶ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第五條 國寶ノ現狀ヲ變更セントスルト

キハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 現狀ノ變更ニ關スル設計仕様、計畫圖並ニ工事擔當者ノ氏名（名稱）  
三 建造物ノ類ニシテ位置ノ變更ヲ生ズル場合ニ在リテハ其ノ移轉先  
四 著手ノ時期及竣成期限

第六條 國寶ノ現狀變更ヲ許可ヲ受ケタ

ル者當該國寶ノ現狀變更ヲ竣リタルトキハ實施仕様書、寫眞並ニ圖面ヲ添ヘ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第七條 國寶ノ所有者ノ氏名（名稱）又

ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

國寶ヲ取得シタル者ハ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ

足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

國寶滅失又ハ毀損シタルトキハ國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ出陳中ニ係ル場合ヲ除クノ外所有者ヨリ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ滅失又ハ毀損ノ事實ヲ知リタル日ヨリ五日內ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

第八條 國寶保存法第七條ノ規定ニ依リ

テ出陳シタル國寶ヲ受領シタルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ所有者ニ受領證書ヲ交付シ返付スルトキハ之ヲ引換フベシ

第九條 前條ノ國寶ヲ受領又ハ返付シタ

ルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ都度文部大臣ニ報告スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十條 第八條ノ國寶滅失又ハ毀損シタ

ルトキハ當該博物館又ハ美術館ハ其ノ事由、實況並ニ當該國寶ノ名稱及員數ヲ具シ直ニ文部大臣ニ報告シ且所有者ニ通知スベシ神社、寺院又ハ公共團體ノ所有ニ屬スル國寶ナルトキハ尙當該地方長官ニ報告スベシ

第十一條 國寶保存法第八條ノ規定ニ依

リテ支給スベキ補助金ハ國寶一件ニ付一年六圓以上百圓以下トシ文部大臣ニ於テ出陳ヲ命ズル都度之ヲ定ム

前項ノ補助金ノ支給ニ付テハ月割ヲ以テ計算シ一月ニ滿タザル日數ハ之ヲ一月ト看做ス

第十二條 國寶保存法第九條ノ規定ニ依

ル補償ヲ受ケントスルトキ滅失又ハ毀損シタル國寶ノ所有者ニ於テ左ノ事項ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ申請スベシ



一 國寶ノ名稱及員數  
二 國寶ヲ出陳シタル博物館又ハ美術館ノ名稱及所在地

三 滅失又ハ毀損スルニ至リタル事由並ニ毀損ニ付テハ其ノ程度

第十三條 國寶ノ指定解除アリタルトキハ國寶臺帳ヨリ當該國寶ノ登錄ヲ抹消ス

第十四條 國寶保存法第十二條但書ノ規定ニ依リテ別ニ管理者ヲ定メントスルトキハ當該神職又ハ住職(佛堂ニ在リテハ受持僧侶)ニ於テ其ノ事由ヲ具シ新ニ管理者ト爲ルベキ者ト連署ノ上文部大臣ニ申請スベシ

第十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ處分セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 處分ノ方法  
三 對價、報酬又ハ之ニ準ズベキモノ  
四 處分ノ相手方ノ氏名(名稱)及住所  
五 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十六條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ擔保ニ供セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 擔保ノ期間  
三 擔保權者ノ氏名(名稱)及住所  
四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十七條 國寶ヲ擔保ニ供スル許可ヲ受

美術行政機關

ケタル神社又ハ寺院當該國寶ヲ擔保ニ供シ又ハ擔保契約ヲ解除シタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第十八條 國寶保存法第十四條ノ規定ニ依リテ補助金ノ交付ヲ受ケントスル者ハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ

一 維持修理スベキ國寶ノ名稱及員數  
二 維持修理ニ要スル工費豫算、設計仕樣並ニ計畫圖及寫眞  
三 著手ノ時期及竣成期限  
四 出願者ノ資力ヲ證スルニ足ルベキ事項

第十九條 國寶ノ維持修理費ニ對シ國庫ヨリ補助金ヲ交付スル場合ニ於テハ當該國寶ノ所有者ハ少クモ維持修理費總額ノ百分ノ五十ヲ負擔スベキモノトス但シ特別ノ事情アルモノニ限り其ノ負擔ヲ輕減スルコトヲ得

第二十條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ管理方法ヲ定メ地方長官ノ許可ヲ受ケベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

第二十一條 補助金ノ交付後ニ於テ設計仕樣又ハ著手ノ時期若ハ竣成期限ノ變更ヲ要スルトキハ其ノ事由及變更設計仕樣並ニ計畫圖ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受ケベシ

文部大臣必要ト認ムルトキハ前項ノ規定ニ拘ラズ設計仕樣ノ變更ヲ命ズル事ヲ得

第二十二條 補助金ノ交付ヲ受ケタル者ハ其ノ國寶ノ維持修理竣リタルトキヨリ二月内ニ實施仕樣書、寫眞、圖面並ニ精算書ヲ添ヘ文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十三條 本令ノ規定若ハ補助金交付ノ條件ニ違反シ又ハ補助金交付ノ目的ヲ遂行スルコト能ハズト認ムルトキハ文部大臣ハ補助金ノ全部又ハ一部ノ返還ヲ命ズルコトヲ得

第二十四條 神社又ハ寺院ノ所有ニ屬スル國寶ノ管理不適當ニシテ滅失又ハ毀損ノ虞アリト認ムルトキハ文部大臣ハ其ノ管理方法ヲ指定スルコトヲ得

第二十五條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ博物館、美術館又ハ之ニ準ズベキ場所ニ出陳シ其ノ他當該神社又ハ寺院外ニ搬出セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受ケベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 搬出ノ期間  
三 搬出先ノ場所及其ノ所在地  
四 荷造運搬ノ方法  
五 搬出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第二十六條 前條ノ規定ニ依リテ許可ヲ受ケタル神社又ハ寺院當該國寶再ビ當該神社又ハ寺院内ニ搬入セタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十七條 神社又ハ寺院其ノ所有ニ屬スル國寶ヲ模寫模造シ又ハ模寫模造ヲ承認セントスルトキハ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ノ許可ヲ受ケベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 國寶ノ名稱及員數  
二 模寫模造ノ期間  
三 模寫模造ノ方法  
四 模寫模造ニ從事スル者ノ氏名及住所

第二十八條 國寶ノ維持修理、現狀變更等ノ場合ニ於テ佛像、經文、器物、銘

文、棟札、埋藏物ノ類ヲ發見シタルトキハ當該國寶ノ所有者ヨリ其ノ實況ヲ具シ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第二十九條 本令ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體ヨリ文部大臣ニ差出ス書類ハ地方長官ヲ經由スベシ第十八條、第二十一條及第二十二條ノ規定ニ依リテ神社、寺院又ハ公共團體以外ノモノヨリ文部大臣ニ差出ス書類ニ付亦同ジ

附 則  
本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)  
古社寺保存法施行細則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會官制  
昭和四年六月二十九日  
勅令第二百一十一號

第一條 國寶保存會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ國寶保存法第一條、第五條、第十一條、第十三條及第十四條ニ規定スル事項其ノ他國寶保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス

國寶保存會ハ國寶保存ニ關スル事項ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 國寶保存會ハ會長一人、副會長一人及委員三十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、副會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議ヲ文部大臣ニ具申ス  
副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルト

キハ其ノ職務ヲ代理ス

會長及副會長共ニ事故アルトキハ文部大臣ノ指名シタル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長及副會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 國寶保存會ニ常務委員會ヲ置ク

國寶保存會ノ一部ヲ處理ス常務委員會ハ國寶保存會ノ會長及副會長並ニ國寶保存會ノ委員ニシテ文部大臣ノ指名シタル者十人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第七條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ國寶保存會ノ要求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第八條 國寶保存會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 國寶保存會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ內閣ニ於テ之ヲ命ズ

第十條 國寶保存會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

附則

本令ハ國寶保存法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス(昭和四年七月一日ヨリ施行)

古社寺保存會規則ハ之ヲ廢止ス

國寶保存會職員

(昭和二二、一一、一三現在)

會長 細川 護立

委員 ○田中 豐藏 福井利吉郎

○奥田 誠一 ○伊東 忠太

○香取秀治郎 藤懸 靜也

神津 伯 ○藤島亥治郎

武内 義雄 新納忠之介

○芝 葛盛 ○辻 善之助

古宇田 實 原田 淑人

新村 出 ○上野 直昭

梅原 末治 安倍 能成

兒島喜久雄 安田新三郎

田中慶太郎 脇本十九郎

柴沼 直

臨時委員 岸 熊吉

幹事 小林 行雄 大岡 實

書記 新居 孝行

(○印は常務委員)

重要美術品等調査委員會

重要美術品等ノ保存ニ關スル法律

昭和八年四月一日 法律第四十三號

第一條 歷史上又ハ美術上特ニ重要ナル價值アリト認メラレル物件(國寶ヲ除ク)ヲ輸出又ハ移出セントスル者ハ主務大臣ノ許可ヲ受クベシ但シ現存者ノ製作ニ係ルモノ、製作後五十年ヲ經ザルモノ及輸入後一年ヲ經ザルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第二條 前條ノ規定ニ依リ其ノ輸出又ハ移出ニ付許可ヲ要スル物件ハ主務大臣之ヲ認定シ其ノ旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該物件ノ所有者ニ通知スベシ

前項ノ規定ニ依リ認定ノ告示アリタルトキハ賣買、交換又ハ贈與ノ目的ヲ以テ當該物件ノ寄託ヲ受ケタル占有者ハ其ノ認定アリタルコトヲ知リタルモノト推定ス

可ノ申請アリタル場合ニ於テ許可ヲ爲サザルトキハ許可申請ノ日ヨリ一年ヨリ長カラザル期間内ニ當該物件ヲ國寶保存法第一條ノ規定ニ依リテ國寶トシテ指定シ又ハ前條ノ規定ニ依リ認定ヲ取消スベシ

第四條 認定、其ノ取消及第二條ノ規定ニ依リ認定物件ノ所有者ニ付變更アリタル場合ノ届出ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 主務大臣ノ許可ナクシテ第二條ノ規定ニ依リ認定物件ヲ輸出又ハ移出シタル者ハ三年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

重要美術品等ノ保存ニ關スル法律施行規則

昭和八年四月一日 文部省令第十號

第一條 昭和八年法律第四十三號(以下單ニ法ト稱ス)第二條ノ規定ニ依リ認定ヲ爲ス物件概ネ左ノ如シ

一 繪畫 二 彫刻 三 建造物 四 文書 五 典籍 六 書蹟 七 刀劍 八 工藝品 九 考古學資料

第二條 重要美術品等ノ所有者、管理者又ハ占有者ハ當該吏員ノ請求アリタルトキハ法第二條ノ規定ニ依リ認定(以下單ニ認定ト稱ス)ノ前後ヲ問ハズ當該物件及其ノ調査ニ付必要ナル資料ヲ提示ヲ拒ムコトヲ得ズ但シ正當ノ事由アル場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第三條 重要美術品等ニ付認定ヲ受ケン

トスル者ハ左ノ事項ヲ具シ現狀ノ寫眞ヲ添付シテ文部大臣ニ申請スベシ

一 名稱 二 所有者ノ氏名(名稱)及住所

三 種類 四 員數

五 品質 六 形狀

七 法量 八 作者及傳來

前項ノ申請アリタル場合ニ於テ必要アルトキハ文部大臣ハ當該物件ヲ文部省ニ提出セシムルコトヲ得

第四條 法第二條ノ規定ニ依リ認定物件(以下單ニ認定物件ト稱ス)ヲ輸出又ハ移出セントスルトキハ所有者ニ於テ其ノ事由並ニ左ノ事項ヲ具シ文部大臣ニ申請スベシ其ノ之ヲ變更セントスルトキ亦同ジ

一 認定物件ノ名稱及員數

二 輸出又ハ移出ノ期間

三 輸出又ハ移出港

四 輸出先又ハ移出先ノ場所及其ノ所在地

五 荷造運搬ノ方法

六 輸出又ハ移出期間中ニ於ケル保管ノ方法

第五條 認定物件ノ輸出又ハ移出ノ許可ヲ受ケタル者當該物件ヲ持還リ又ハ其ノ返還ヲ受ケタルトキハ遲滞ナク文部大臣ニ届出ヅベシ

第六條 認定物件ノ所有者其ノ氏名(名稱)又ハ住所ヲ變更シタルトキハ變更ノ日ヨリ十四日以内ニ文部大臣ニ届出ヅベシ

認定物件ヲ取得シタル者ハ當該物件ノ名稱及員數ヲ具シ取得ノ事實ヲ證明スルニ足ル書面ヲ添ヘ取得ノ日ヨリ十四

日內ニ文部大臣ニ届出ツベシ  
認定物件減失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シ  
キ現狀變更アリタルトキハ所有者ヨリ  
其ノ事由、實況並ニ認定物件ノ名稱及  
員數ヲ具シ減失、毀損又ハ現狀變更ノ  
事實ヲ知リタル日ヨリ五日內ニ文部大  
臣ニ届出ツベシ

第七條 認定物件ガ國寶保存法第一條ノ  
規定ニ依リ國寶トシテ指定セラレタル  
トキハ其ノ認定ハ取消サレタルモノト  
看做ス

法第三條ノ規定ニ依リ認定取消ノ外認  
定物件減失若ハ毀損シ又ハ之ニ著シキ  
現狀變更アリタルトキ其ノ他正當ノ事  
由アルトキハ文部大臣其ノ認定ヲ取消  
スコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ認定取消アリタル  
トキハ其旨ヲ官報ヲ以テ告示シ且當該  
物件ノ所有者ニ通知ス

第八條 第二條ノ規定ニ違反シ當該物件  
及其ノ調査ニ付必要ナル資料ノ提示ヲ  
拒ミタル者ハ拘留又ハ五十圓以下ノ罰  
金若ハ科料ニ處ス

第九條 第六條ノ規定ニ違反シ届出ヲ爲  
サザル者ハ五十圓以下ノ罰金若ハ科料  
ニ處ス

### 附 則

本令ハ昭和八年法律第四十三號施行ノ日  
ヨリ之ヲ施行ス

### 重要美術品等調査委員會規程

昭和八年四月十一日  
文部省訓令第九號  
改正 昭和十七年三月十九日  
文部省訓令第六號  
第一條 重要美術品等調査委員會ハ文部

### 美術行政機關

大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ重  
要美術品等ノ保存ニ關スル法律(以下  
單ニ法ト稱ス)第一條ノ規定ニ依ル輸  
出及移出ノ許可並ニ法第二條ノ規定ニ  
依リ認定(以下單ニ認定ト稱ス)及其  
ノ取消ニ關スル事項ヲ調査審議ス

第二條 重要美術品等調査委員會ハ會長  
一人及委員二十五人以内ヲ以テ之ヲ組  
織ス

特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アル  
トキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大  
臣之ヲ依嘱シ又ハ之ヲ命ズ

第四條 會長ハ會務ヲ統理シ會議ノ決議  
ヲ文部大臣ニ具申ス

會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名シ  
タル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ  
可否ノ數ニ加ハルコトヲ得

第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ文部省高  
等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議  
ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得

第七條 重要美術品等調査委員會ノ議事  
ニ關スル規則ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 重要美術品等調査委員會ニ幹事  
若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

第九條 重要美術品等調査委員會ニ書記  
若干名ヲ置キ文部大臣之ヲ命ズ

第十條 文部大臣ニ於テ必要ト認ムルト  
キハ會長、委員、臨時委員又ハ其ノ他  
ノ者ヲシテ認定及其ノ取消其ノ他重要  
美術品等ニ關スル調査ヲ爲サシムルコ  
トヲ得

### 重要美術品等調査委員職員

(昭和二・四・一現在)

委員長 淺野 長武  
委員 岩崎小彌太 辻 善之助  
神津 伯 原田 淑人  
天沼 俊一 角南 隆

柴田 常惠 伊東 忠太  
大熊 喜邦 中村 直勝  
尾崎 洵盛 秋山 光夫

香取秀治郎 脇本十九郎  
奥田 誠一 佐々木信綱  
藤懸 靜也 梅原 末治

石渡信太郎 工藤 壯平  
矢代 幸雄 柴沼 直  
吉野 富雄 北原 大輔

臨時委員 小林 行雄 大岡 實  
幹 事

### 史蹟名勝天然紀念物調査委員會

史蹟名勝天然紀念物保存法  
大正八年四月十日  
法律第四十四號

第一條 本法ヲ適用スヘキ史蹟名勝天然  
紀念物ハ內務大臣之ヲ指定ス

前項ノ指定以前ニ於テ必要アルトキハ  
地方長官ハ假ニ之ヲ指定スルコトヲ得

第二條 史蹟名勝天然紀念物ノ調査ニ關  
シ必要アルトキハ指定ノ前後ヲ問ハス

當該吏員ハ其ノ土地又ハ隣接地ニ立入  
リ土地ノ發掘障礙物ノ撤去其ノ他調査  
ニ必要ナル行爲ヲ爲スコトヲ得

第三條 史蹟名勝天然紀念物ニ關シ其ノ  
現狀ヲ變更シ又ハ其ノ保存ニ影響ヲ及  
ホスヘキ行爲ヲ爲サシムルコトヲ得

方長官ノ許可ヲ受クヘシ

ノ保存ニ關シ地域ヲ定メテ一定ノ行爲  
ヲ禁止若ハ制限シ又ハ必要ナル施設ヲ  
命スルコトヲ得  
前項ノ命令若ハ處分又ハ第二條ノ規定  
ニ依リ行爲ノ爲損害ヲ被リタル私人ニ  
對シテハ命令ノ定ムル所ニ依リ政府之  
ヲ補償ス  
第五條 內務大臣ハ地方公共團體ヲ指定  
シテ史蹟名勝天然紀念物ノ管理ヲ爲サ  
シムルコトヲ得  
前項ノ管理ニ要スル費用ハ當該公共團  
體ノ負擔トス  
國庫ハ前項ノ費用ニ對シ其ノ一部ヲ補  
助スルコトヲ得  
第六條 第三條ノ規定ニ違反シ又ハ第四  
條第一項ノ規定ニ依リ命令ニ違反シタ  
ル者ハ六月以下ノ禁錮若ハ拘留又ハ百  
圓以下ノ罰金若ハ科料ニ處ス

### 附 則

本法施行ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以  
テ之ヲ定ム  
本法施行ノ期日ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム  
(大正八年五月勅令第二百六十一號ヲ以テ同年六  
月一日ヨリ施行)

古社寺保存法第十九條ハ本法施行ノ日ヨ  
リ之ヲ廢止ス

### 史蹟名勝天然紀念物保存 法施行令

大正八年十二月二十九日  
勅令第四百九十九號  
(改正 大正十三年二月二八號、昭和三年二六九號、  
六年二四〇號)

第一條 當該吏員史蹟名勝天然紀念物保  
存法第二條ノ規定ニ依リ行爲ヲ爲サシ  
ムルコトヲ得  
トスルコトハ少クモ三日前ニ關係土  
地物件ノ所有者及占有者ニ其ノ旨ヲ通  
知スヘシ



史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依リ行爲ヲ爲ス當該吏員ハ其ノ證票ヲ携帶シ關係者ノ請求アリタルトキハ之ヲ示スヘシ

日出前又ハ日没後ニ於テハ占有者ノ承諾アルニ非サレハ史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依リ即ニ立入ルコトヲ得ス

第二條 行政廳史蹟名勝天然紀念物保存法第三條ニ規定スル行爲ヲ爲サムトスルトキハ地方長官ノ承認ヲ受クヘシ

第三條 史蹟名勝天然紀念物保存法第二條ノ規定ニ依リ古墳ヲ發掘スル場合ニ於テハ當該吏員ハ地方長官ヲ經由シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

史蹟名勝天然紀念物保存法第三條又ハ前條ノ規定ニ依リ古墳ヲ發掘セムトスル場合ニ於テ地方長官許可又ハ承認ヲ與フルトキハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

前二項ノ規定ニ依リ文部大臣認可ヲ爲ス場合ニ於テハ豫メ宮内大臣ニ協議スヘシ

第四條 史蹟名勝天然紀念物保存法第四條第二項ノ規定ニ依リ補償ハ通常生スヘキ損害ニ限リ之ヲ爲ス

前項ノ補償ノ額ハ地方長官ト損害ヲ被リタル私人トノ協議ニ依リ之ヲ定ム協議調ハサルトキハ文部大臣鑑定人ノ意見ヲ徴シ之ヲ決定スヘシ

第五條 史蹟名勝天然紀念物ニシテ國有地ニ屬スルモノハ文部大臣之ヲ管理ス但シ官用地又ハ國有林ニ屬スルモノニ付テハ主管ノ大臣ト文部大臣ト協議シ

テ其ノ管理大臣ヲ定ム  
第六條 文部大臣ハ史蹟名勝天然紀念物ニシテ國有ニ屬スルモノヨリ生スル收益ヲ管理ノ費用ヲ負擔スル地方公共團體ノ所得ト爲スコトヲ得

第七條 史蹟名勝天然紀念物ノ管理ノ費用ヲ負擔スル地方公共團體ハ其ノ管理スル史蹟名勝天然紀念物ニ付觀覽料ヲ徵收スルコトヲ得

附 則  
本令ハ大正九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物保存法施行規則  
大正八年十二月二十九日  
內務省令第二十七號

(改正 昭和三年文部省令一七號)  
第一條 文部大臣史蹟名勝天然紀念物ノ指定ヲ爲シ又ハ其ノ指定ヲ解除シタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ告示ス地方長官假指定ヲ爲シ又ハ其ノ假指定ヲ解除シタルトキ亦同シ但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認メタルトキハ告示セサルコトヲ得

第二條 史蹟名勝天然紀念物保存法第四條第一項ノ禁止若ハ制限ヲ爲シタルトキハ官報ヲ以テ之ヲ告示ス但シ指定セラレタル物ノ保存上必要ト認メタルトキハ告示セサルコトヲ得

第三條 史蹟名勝天然紀念物ノ所有者、管理者又ハ占有者ニ變更アリタルトキハ十日以内ニ新ナル所有者、管理者又ハ占有者ヨリ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ  
史蹟名勝天然紀念物ノ所有者、管理者又ハ占有者其ノ住所氏名ヲ變更シタルトキハ十日以内ニ之ヲ地方長官ニ申告スヘシ  
第四條 土地ノ所有者、管理者又ハ占有者古墳又ハ舊蹟ト認ムヘキモノヲ發見シタルトキハ其ノ現狀ヲ變更スルコトヲナク發見ノ日ヨリ十日以内ニ左ノ事項ヲ具シテ地方長官ニ申告スヘシ  
一 發見ノ年月日  
二 所在地  
三 現狀  
第五條 文部省ニ史蹟名勝天然紀念物ノ臺帳ヲ備フ  
第六條 第三條及第四條ノ規定ニ違反シタル者ハ二十圓以下ノ科料ニ處ス  
附 則  
本令ハ大正九年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物調查會官制

昭和十一年十一月十二日  
勅令第三百九十七號

第一條 史蹟名勝天然紀念物調查會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ其ノ諮問ニ應ジテ史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス  
調査會ハ前項ノ事項ニ付關係各大臣ニ建議スルコトヲ得

第二條 調査會ハ會長一人及委員二十人以内ヲ以テ之ヲ組織ス  
特別ノ事項ヲ調査審議スル爲必要アルトキハ臨時委員ヲ置クコトヲ得

第三條 會長、委員及臨時委員ハ文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ  
第四條 會長ハ會務ヲ總理ス  
會長事故アルトキハ文部大臣ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス

第五條 會長ハ會議ニ於テ意見ヲ陳述シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得  
第六條 文部大臣ハ必要ニ依リ又ハ會長ノ請求アルトキハ文部省高等官其ノ他適當ト認ムル者ヲシテ會議ニ出席シ意見ヲ陳述セシムルコトヲ得  
第七條 調査會ノ議事ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム  
第八條 調査會ニ幹事ヲ置ク文部大臣ノ奏請ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ  
第九條 調査會ニ書記ヲ置ク文部大臣之ヲ命ズ  
書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス  
附 則  
本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

史蹟名勝天然紀念物調查會職員

(昭和二一、一一、一三現在)

- |      |       |       |
|------|-------|-------|
| 會長   | 筑波 藤麿 | 宮地 直一 |
| 委員   | 籾木外岐雄 | 内田清之助 |
|      | 和田 英作 | 國府 種德 |
|      | 辻村 太郎 | 中井猛之進 |
|      | 龍居松之助 | 芝 葛盛  |
|      | 辻 善之助 | 加藤 武夫 |
|      | 本田 正次 | 吉永 義信 |
|      | 柴沼 直  | 上田 三平 |
| 臨時委員 | 大熊 喜邦 | 黑板 昌夫 |
| 幹事   | 小林 行雄 |       |
| 書記   | 新居 孝行 |       |

帝室技藝員

帝室技藝員ノ制度は明治二十三年十月我が皇室におかれられて、明治維新以來藝術的に衰退し經濟的に困窮していた當時の我が美術界振興の思召しから制定せ

られたもので、帝室技藝員には人格藝術  
共に後進の師表と仰がべき大家を、特  
にその爲に選ばれたる委員をして銓衡せ  
しめ任命せられるものである。  
(帝室技藝員銓衡委員) 清水澄、大谷正  
男、瀧精一、廣幡忠隆、細川護立

### 帝室技藝員名簿

日本畫

川合 玉堂

横山 大觀

安田 叙彦

菊池 契月

西山 翠嶂

堂本 印象

鐘木 清方

上村 松園

前田 青邨

松林 桂月

小林 古徑

和田 英作

金山 平三

中澤 弘光

梅原龍三郎

安井曾太郎

南 薰造

山崎 朝雲

淺倉 文夫

平櫛 田中

板谷 波山

香取 秀眞

清水 龜藏

拜命年月

大正六年六月

昭和六年六月

昭和九年十二月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

昭和九年七月

(昭和二十二年十二月四日改正)  
政令 第二百五十四號

第一條 日本藝術院ハ文部大臣ノ管理ニ  
屬シ藝術ノ發達ヲ圖リ文化ノ向上ニ資  
スルヲ以テ目的トス

第二條 日本藝術院ハ藝術ニ關スル重要  
ノ事項ヲ審議ス

日本藝術院ハ藝術ノ發達ニ資スル爲必  
要ナル事業ヲ行フコトヲ得

日本藝術院ハ藝術ニ關スル重要ノ事項  
ニ付文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第三條 文部大臣ハ藝術ニ關スル重要ノ  
事項ニ付日本藝術院ニ諮問スルコトヲ  
得

第四條 日本藝術院ハ院長一人及會員百  
人以內ヲ以テ之ヲ組織ス

第五條 院長及會員ハ藝術ニ關シ識見闊  
歷卓越スル者ノ中ヨリ文部大臣ノ申出  
ニ依リ内閣ニ於テ之ヲ命ズ

院長及會員ハ一級官ノ待遇ヲ受ク

第六條 院長ハ院務ヲ總理ス

院長事故アルトキハ文部大臣ノ指名ス  
ル會員其ノ職務ヲ代理ス

第七條 日本藝術院ニ主事ヲ置ク文部部  
内ノ二級官ノ中ヨリ文部大臣ノ申出ニ  
依リ内閣總理大臣之ヲ命ズ

主事ハ院長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第八條 日本藝術院ニ書記ヲ置ク文部部  
内ノ三級官ノ中ヨリ文部大臣之ヲ命ズ

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ従事ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

帝國美術院官制ハ之ヲ廢止ス

本令施行ノ際現ニ帝國美術院長又ハ帝國  
美術院會員タル者別ニ辭令ヲ發セラレザ  
ルトキハ夫々帝國美術院長又ハ帝國美術

院會員ヲ命ゼラレタルモノトス

### 日本藝術院會則

(昭和十六年五月五日制定)

(昭和二十一年九月十日改正)

(帝國藝術院會則の一部改正)

第一條 日本藝術院ニ左ノ三部ヲ置ク

第一部 美術 (繪畫、彫刻、工藝  
書道、建築)

第二部 文藝

第三部 音樂、雅樂、能樂、演劇  
舞蹈

各部ノ定員ハ第一部五十名、第二部三  
十名及第三部二十名トス

第二條 各部ニ分科ヲ置クコトヲ得

分科ノ種類及其ノ定員ハ各部ニ於テ之  
ヲ定メ院長ノ承認ヲ經ベシ

第三條 各部ニ於テ他ノ部ニ屬スル會員  
ヲ兼屬セシメントスルトキハ關係兩部  
合議ノ上院長ノ承認ヲ經ベシ

第四條 會員ノ推薦ハ所屬ノ部會ニ於テ  
候補者ヲ選定シ院長之ヲナスモノトス

但シ部會ニ於テ選出シ難キ場合ハ院長  
ニ於テ之ヲナスモノトス

第五條 總會及部會ハ院長之ヲ招集ス

第六條 院長ハ會議ノ議長トナリ議事ヲ  
整理ス

第七條 總會ハ現在會員ノ半數以上、部  
會ハ現在所屬會員ノ半數以上出席スル  
ニアラザレバ議決ヲ爲スコトヲ得ズ

可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ  
依ル

第八條 會議ハ之ヲ公開セズ

### 日本藝術院授賞規則

(昭和十六年五月五日制定)

第一條 日本藝術院ハ卓越セル藝術作品  
ニ對シテ賞ヲ授ク

前項ノ外藝術ノ進歩ニ貢獻スベキ顯著  
ナル業績アリト認ムル者ニ對シテ賞ヲ  
授クコトヲ得

第二條 賞ハ賞狀及賞金トス

第三條 賞ハ日本藝術院會員ニ非ザル者  
ニ之ヲ授ク

第四條 賞ヲ授ケントスルトキハ部會ノ  
推薦ニ依リ理由ヲ附シテ總會ノ承認ヲ  
經ベシ

### 藝術院會員

院長 高橋誠一郎

第一部會員

上村 津彌(松園) 鐘木 健一(清方)

川合 芳三郎(玉堂) 菊池 完爾(契月)

小林 茂(古徑) 西山 卯三郎(翠嶂)

前田 廉造(青邨) 松林 篤(桂月)

結城 貞松(素明) 安田 新三郎(叙彦)

橫山 秀麿(大觀) 福田 平八郎

奧村 義三(土牛) 野田 道三(九浦)

小野 英吉(竹喬) 中村 恒吉(岳陵)

有島 壬生馬(生馬) 石井 滿吉(柏亭)

梅原 龍三郎 小杉 國太郎(放庵)

中澤 弘光 藤田 嗣治

南 薰造 安井 曾太郎

山下 新太郎 和田 英作

和 田 三造 辻 永

須田 國太郎 朝倉 文夫

北村 西望 齋藤 知雄(素巖)

佐藤 清藏 內藤 伸

平櫛 傳太郎(田中) 藤井 浩祐

山崎 朝雲 板谷 嘉七(波山)

香取 秀治郎(秀眞) 清水 六和

清水 龜藏(南山) 六角 注多良(紫水)

七

松田 權六 海野 清  
伊東 忠太 大熊 喜邦  
尾上 八郎(柴舟) 豊道 慶中

第二部會員

志賀 直哉 谷崎潤一郎  
正宗 忠夫(白鳥) 山本 勇造(有三)  
河井 又平(匿名) 佐々木信綱  
齋藤 茂吉 千葉 胤明  
窪田 通治(空穂) 高濱 清(虚子)  
眞山 彬(青果) 土井 林吉(晩翠)  
柳田 國男 長谷川万次郎(如是閑)  
蒲原 隼雄(有明) 山内英夫(里見驛)  
久保田万太郎

第三部會員

豊 時義 山田 耕作  
安藤 時 信時 潔  
金杉彌太郎(豊竹山城小操)  
喜多六平太  
藤間勘右衛門(松本幸四郎)  
寺島 幸三(尾上菊五郎)  
波野辰次郎(中村吉右衛門)

文部省美術展覧會

文部省美術展覧會は、明治四十年制定された美術審査委員會官制に基き同年第一回を開催、爾來毎年開催して十二回に及んだが、大正八年同官制を廢止して帝國美術院規程を制定、同年以後帝國美術院美術展覧會を開催し來り昭和九年第十五回に至つた。昭和十年帝國美術院を改組し新に帝國美術院官制を制定、同十一年春第一回帝國美術展覧會を開催したが繼續されず、同年秋臨時に昭和十一年文部省美術展覧會を開催、同十二年六月帝國美術院を廢止して帝國美術院官制が公布されるに及び、展覧會は舊の如く文

部省の主催として同年第一回展覧會を開催、以後繼續することとなつた。しかるに昭和十九年戰時情勢のため一應中止の上、戰時特別美術展覧會がひらかれたが終戦後直に復活の議がおこり、昭和二十一年名稱を日本美術展覧會と改め、同年春第一回展覧會をひらいた。以後二十二年第三回まで既にひらかれてゐる。

日本美術展覧會規則

第一章 總 則

第一條 文部省ノ主催ヲ以テ行フ美術展覧會ハ日本美術展覧會ト稱シ本規則ノ定ムル所ニ依リ之ヲ開催シ其ノ會場、會期及事務所ハ其ノ都度之ヲ公告ス

第二條 本會ハ作品ノ種別ニ依リ之ヲ左ノ四部ニ分ツ

第一部 繪 畫

第二部 繪 畫 (油畫、水彩畫、パステル畫、素描、創作版畫等)

第三部 彫 刻

第四部 美術工藝

第三條 陳列スベキ作品ハ鑑査ヲ經ベキモノトス

前項ノ規定ニ拘ラズ出品人ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ其ノ専門技術ニ依ル作品ニ限リ無鑑査ニテ陳列スルモノトス、但シ第四部ニ於ケル綜合製作ニ依ル作品ハ總テ鑑査ヲ經ベキモノトス

帝國美術院會員

二 當該年度ノ審査員

三 當該年度ノ出品招待者

第四條 本會ハ各部ノ綜合展覧會トシ鑑査作品及無鑑査作品ヲ同時ニ陳列ス、審査員ヲ銓衡スル爲展覧會委員長及展

覽會委員ヲ置ク  
展覧會委員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ

展覧會委員ハ帝國美術院美術展覧會、文部省美術展覧會又ハ日本美術展覧會ニ於テ無鑑査者タリシ者(帝國美術院會員ヲ除ク)、授賞サレタル者及其ノ他ノ有力ナル作家ニ文部大臣之ヲ依嘱ス

展覧會委員ハ當該年度ノ審査員ヲ各部毎ニ十名選記ノ記名投票ニ依リ互選ス但シ第二部及第三部ニ於テ同一團體ノ會員ヲ記載スル場合ハ三名ヲ超ユルコトヲ得ズ

展覧會委員ノ任期ハ一箇年トス、但シ重任ヲ妨ゲズ

第五條 鑑査審査、及陳列ノ事務ヲ處理スル爲審査員長及審査員ヲ置ク

審査員長ハ文部次官ヲ以テ之ニ充ツ、審査員ハ帝國美術院會員ノ中ヨリ互選セラレタル者及展覧會委員ノ中ヨリ互選セラレタル者ニ文部大臣之ヲ依嘱ス

審査員ノ各部定員ハ第一部二十名、第二部二十名、第三部十五名、第四部二十名トシ就任ヲ辭退スル者アルトキハ次點者ヲ以テ之ニ充ツ

審査員選舉ノ結果人選不適ト認メラレタル場合ハ文部省ニ於テ帝國美術院會員ト協議ノ上適宜ノ處置ヲ爲スコトアルベシ

審査員ノ任期ハ一箇年トス、但シ重任ヲ妨ゲズ

第五條ノ二 審査員ハ當該年度ノ展覧會委員ノ中ヨリ翌年度ノ出品招待者タルベキ者ヲ各部毎ニ第二部ニ於テハ三十名選記、其ノ他ノ部ニ於テハ二十名選記ノ記名投票ニヨリ選舉シ審査員長之

ヲ翌年度ノ出品招待者トシテ指名ス  
展覧會委員ノ中ヨリ互選セラレタル當該年度ノ審査員及當該年度ノ受賞者ハ前項ノ選舉ニ依ラズシテ審査員長ヨリ翌年度ノ出品招待者トシテ指名ヲ受クルモノトス

出品招待者ノ各部定數ハ第一部五十名、第二部八十名、第三部五十名、第四部五十名トシ缺員ヲ生ジタル場合ト雖モ之ヲ補充セズ

出品招待者ノ指名ハ毎年之ヲ更新ス第六條 鑑査ハ提出セル作品ニ付陳列スベキモノヲ定メ審査ハ陳列品ニ付優秀ナルモノヲ選定ス

第七條 審査員ハ審査員長ノ定ムル所ニ依リ第一部乃至第四部ノ各部ニ分屬ス各部ノ審査主任ハ各部審査員ノ互選ニ基キ審査員長之ヲ指名ス

審査員ハ各部ニ付鑑査及審査ヲ行フ第二章 出 品

第八條 出品スベキ作品ハ自己ノ製作シタルモノニ限ル  
故人ノ製作ニ依ルモノハ其ノ相續人ニ於テ之ヲ出品スルコトヲ得

第九條 第三部ノ作品ニシテ原型製作者ト實材製作者ト其ノ人ヲ異ニスルトキハ原型製作者ヲ以テ其ノ出品人ト爲ス

第四部ノ作品ニシテ綜合製作ナルトキハ其ノ代表製作者一名ヲ以テ出品人ト爲ス但シ代表製作者ハ共同製作者ノ氏名ヲ附記スルコトヲ得

第十條 出品スベキ作品ハ各部共一人一點トス

第十一條 出品スベキ作品ノ大サハ左ノ各號ニ依ル

一 第一部 制限セズ



二 第二部 五十號以內  
三 第三部 制限セズ  
四 第四部

屏 六尺角以內

(裝飾設備ヲ含ム)

壁掛類 横五尺、縦七尺以內

棚及机類 正面三尺以內、奥

行二尺以內

衝立類 六尺角以內 (梓、

足共)

額面類 三尺五寸角以內

(裝飾設備ヲ含ム)

第十二條 作品ノ搬入受付期間ハ展覽會

開催ノ都度之ヲ公告ス

第十三條 左ニ掲グルモノハ之ヲ出品ス

ルコトヲ得ズ

一 製作五年以上ヲ經タルモノ

二 既に文部省主催ノ美術展覽會ニ

陳列シタルコトアルモノ

三 風教ニ害アリト認ムルモノ

第十四條 鑑査ヲ受クベキ作品ヲ出品セ

ントスル者ハ金壹圓ノ手数料ヲ納付ス

ベシ

既納ノ手数料ハ如何ナル事由アルモ之

ヲ還付セズ

第十五條 出品セントスル者ハ所定書式

ノ申込書ト共ニ作品ヲ本會事務所ニ差

出スベシ

故人ノ作品ヲ出品セントスルトキハ申

込書中解説欄ニ製作者ノ氏名及履歷ヲ

記入スベシ

作品ニハ命題及出品人氏名ヲ記シタル

紙片ヲ裏面ニ貼付スベシ

第十六條 本會事務所ニ於テ作品ヲ受理

シタルトキハ直チニ受領證ヲ交付ス

第十七條 出品シタル作品ハ撤回スルコ

トヲ得ズ、但シ審査員長ノ許可ヲ得タ

ルトキハ此ノ限ニ在ラズ

第十八條 第一部及第二部ノ作品ハ額面

ト爲シ梓縁ヲ附ス等出品人ニ於テ適當

ノ裝飾設備ヲ爲スベシ

第十九條 出品人ハ陳列品ノ位置、配列

等ニ對シ異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第二十條 作品ノ荷造及運送費ハ總テ出

品人ノ負擔トス

第二十一條 文部省ハ作品ノ保管ニ關シ

充分ノ注意ヲ爲スルモ紛失、毀損、

其ノ他ノ損害ニ對シ一切責ニ任ゼズ

第二十二條 作品ノ撮影又ハ模寫ハ出品

人ノ承諾ヲ得且ツ文部省ノ許可ヲ受ク

ルニ非ザレバ之ヲ爲スコトヲ得ズ

前項ノ許可ヲ受ケタル者會場ニ於テ作

品ノ撮影又ハ模寫ヲ爲サントスルトキ

ハ許可證ヲ掛員ニ提示シ其ノ指揮ヲ受

クベシ

文部省ハ作品ヲ撮影若ハ模寫シ又ハ之

ヲ刊行スルコトアルベシ

第三章 鑑査及審査

第二十三條 鑑査及審査ノ方法ハ審査員

長及各部ノ審査員ニ於テ之ヲ定ム

鑑査及審査ハ之ヲ公開ス、但シ會場ノ

都合ニ依リ人員ヲ制限スルコトアルベ

シ

第二十四條 鑑査ヲ經タル陳列品ハ總テ

特選ノ査定ヲ受クルモノトス

第二十五條 鑑査及審査ノ結果ハ審査主

任ヨリ之ヲ審査員長ニ報告スベシ

第二十六條 出品人ハ鑑査及審査ニ對ス

異議ヲ申立ツルコトヲ得ズ

第四章 賣約及撤出

第二十七條 陳列品ハ本會事務所ニ於テ

其ノ賣買契約ヲ取扱フモノトス

第二十八條 陳列品ヲ購買セントスル者

ハ代金ヲ添ヘテ本會事務所ニ申出ヅベ

シ

第二十九條 即時ニ代金ヲ支拂ハザルト

キハ手附ヲ以テ賣買契約ヲ爲スコトヲ

得手附ノ金額ハ代價ノ三分ノ一以上ト

ス

前項ノ買主ガ會期中ニ殘餘代金ノ支拂

ヲ爲サザルトキハ手附ハ之ヲ抛棄シタ

ルモノト看做ス、但シ抛棄シタル手附

ハ當該出品人ノ所得トス

第三十條 第二十八條ニ依リ代金及第

二十九條第二項ニ依リ手附ハ展覽會終

了後拂渡ヲ爲スモノトス

第三十一條 賣買契約ヲ爲シタルトキハ

作品ニ其ノ旨ヲ貼紙ス

第三十二條 出品人ニ於テ陳列品ノ代價

ヲ變更セントスルトキハ本會事務所ニ

届出ヅベシ

第三十三條 出品人ニ於テ作品及代金受

領等ノ爲テ代理人ヲ置キタルトキハ

其ノ住所及氏名ヲ本會事務所ニ届出ヅ

ベシ

第三十四條 陳列品ハ展覽會終了後三日

以內ニ出品人ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ期間内ニ撤出セザルトキハ文部

省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スコトアルベ

シ

第三十五條 陳列スルコトニ決定シタル

作品以外ノモノハ展覽會開會後五日ヲ

經過シタル後十日間以內ニ出品人ニ於

テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ期間内ニ撤出セザルトキハ文部

省ニ於テ相當ノ處置ヲ爲スコトアルベ

シ

第三十六條 陳列品中賣約済ノモノハ展

覽會終了後買主ニ於テ之ヲ撤出スベシ

前項ノ場合ニ於テハ代金受領證ヲ提出

シ自己ノ買主タルコトヲ證スルヲ要ス

第五章 觀覽

第三十七條 觀覽時間ハ開會中毎日午前

九時ヨリ午後四時迄トス、但シ都合ニ

依リ之ヲ伸縮又ハ觀覽ヲ停止スルコト

アルベシ

第三十八條 觀覽人ハ陳列品ニ觸ルルコ

トヲ得ズ

觀覽人ハ靜肅ヲ旨トシ且掛員ノ指揮ニ

從フベシ

第三十九條 觀覽人ニシテ秩序風俗ヲ紊

ルノ虞アリト認ムルモノハ入場ヲ禁ジ

又ハ退場セシムルコトアルベシ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

國立博物館

(昭和二十三年四月現在)

東京都台東區上野公園

電下谷〇〇六、一八〇〇

同館の創立は明治五年正院に於ける博

覽會事務局の設置に始まり、其後同局を

博物館と改稱し、内務省の管轄に付した

が、同十四年農商務省へ移管となり、事

務所(當時博物館と稱す)を上野の舊寛

永寺本坊跡に移轉し翌十五年同所に新築

の本館を開いた。十九年宮内省管理とな

り、二十二年帝國博物館と改められ、歴

史、美術、美術工藝、工藝、天產の五部

を設け、三十三年帝室に改められた。天

產部は大正十四年文部省に移管された。

昭和十二年從來の歴史課、美術課を廢し

列品課に改め、別に學藝課を新設。昭和

二十二年五月帝室博物館、文部省國寶調査室、同保存修理室、美術研究所が合體して、文部省の管轄の下に國立博物館として新發足をした。從來の列品課、學藝課、經理課の三課制に代つて陳列課、事業課、調査課、保存修理課、資料課、監理課、附屬美術研究所の六課一所制をとり更に奈良帝室博物館は國立博物館奈良分館と稱する事となつた。

陳列本館は震災に大破し、其の後表慶館を列品陳列に充てたが、今上陛下の御即位記念の事業たる帝室博物館復興興贊會の復興大工事が七年を閲して昭和十二年に竣工し、同年獻上せられ、同十三年十一月開館された。建物は地上二階、地下二階、總面積六千五百二十二坪、鐵骨鐵筋コンクリート造りの東洋風大建築である。館内を約二十室に分ち陳列は概ね第一、二室考古、第三、四室染織、第五、六、七室金工、第八室陶磁、第九、十室彫刻、第十一、十二、十三、十四及十八室繪畫、第十五、十六、十七室漆工、第十九、二十室書蹟等に區分し、尙特別第一室に考古、特別第二、五室に彫刻を陳列する。以上の中繪畫、書蹟は毎月陳列替を行う。尙本館開館と共に從來の表慶館には明治以降の日本畫、洋畫、彫刻、工藝を陳列し、近代美術館の機能果すことになつた。

又構内には公傳九條道秀及益田孝より夫々寄贈され、昭和十一年開館された九條公傳記念館及應舉館がある。前者はもと東京赤坂なる九條公傳邸内の前公傳道實の居室で、昭和九年道秀が宮内省に前公傳の記念として獻納した。總坪凡そ四十四坪、二室、廻廊下附で一の間、二の

間を通じて床張付、襖、腰障子に傳山樂山雪筆の著色四季樓閣山水圖が描かれこれはもと京都御所内九條邸にあつたのを東京邸に應用したものである。後者はもと舊尾張國海部郡大治村明眼院の書院で寛保二年の建立、明治二十二年男爵益田孝により東京御殿山の邸内に移築され、昭和八年宮内省に獻納された。總坪凡四十三坪、書院造、二室、廻廊下附で一の間には松梅笹稚松が、二の間には蘆雁圖が共に墨畫で壁張付、襖、腰障子等に描かれ、何れも圓山應舉の筆である。

又構内の茶室六窓庵は金森宗和の建立にかかり、もと奈良興福寺の慈眼院に在つたものである。何れも毎週一回晴天の日に公開する。尙外に校倉があり、奈良十輪院から移した奈良時代の遺構で、屏に四天王を、内部壁板に般若十六善神を畫き、石臺には十六善神の彫刻がある。〔館長〕 安倍能成〔次長〕 谷川徹三〔監理課長〕 富士川金二〔陳列課長〕 石田茂作〔事業課長〕 藤田經世〔調査課長〕 本間順治〔保存修理課長〕 大岡實〔資料課長〕 田澤坦〔奈良分館長〕 黒田源次〔附屬美術研究所長〕 田中豐藏

〔觀覽日〕 一月三日より十二月廿五日迄 二月一日―三月三十一日、十月一日―十月三十一日（午前九時―午後四時）四月一日―九月三十日、十一月一日―一月三十一日（九時―三時三十分）〔料金〕 大人拾圓、小人五圓、團體二十人以上で引卒者ある者 小學兒童團體、二圓、中等學生團體、四圓、其他團體六圓、回数十回券 八〇圓

國立博物館官制

昭和二十二年五月三日  
政令 第八號

第一條 國立博物館は、文部大臣の所轄とし、美術品及び歴史資料を收集保存して公衆の觀覽に供し、併せてこれに關連する調査、研究及び事業を行うところとする。國立博物館は、これを東京に置く。

第二條 國立博物館に左の職員を置く。

館長、次長 一人  
文部事務官 一人

專任 一人 一級  
專任 三人 二級

專任 十八人 三級  
文部技官

專任 二人 一級  
專任 二十九人 二級

專任 十五人 三級  
第三條 館長は、一級の文部事務官又は文部技官を以てこれに充てる。館長は館務を掌理し、所屬職員を監督し三級官吏の進退についてはこれを專行する

第四條 次長は、一級の文部事務官又は文部技官を以てこれに充てる。次長は館長の職務を助ける。

第五條 國立博物館に奈良分館を置く。分館長は二級の文部事務官又は文部技官を以てこれに充てる。分館長は館長の命を受けて、分館に關することを掌る。

第六條 國立博物館に、附屬美術研究所を置く。

附屬美術研究所長は、一級の文部技官を以てこれに充てる。所長は館長の命を受けて、研究所に關することを掌る。

第七條 國立博物館に顧問を置く。顧問は、文部大臣の申出により、内閣總理大臣がこれを命ずる、顧問は館務に參與する。

第八條 國立博物館に評議員會を置く。評議員は三十人以内とし、關係各廳の官吏又學識經驗あるものの中から、文部大臣の申出により、内閣總理大臣がこれを命ずる。評議員會は、博物館の運営に關する重要事項を審議する。

附 則  
この政令は公布の日からこれを施行する。美術研究所官制は、これを廢止する。（以下略）

國立博物館評議員會規程  
昭和二十二年十月三十一日  
文 部 省 訓 令

第一條 國立博物館評議員會は左の者によつて、これを組織する。

一、左の官職に在る者  
内閣官房次長 現（瀧川 未二）  
大藏次官（池田 勇人）  
文部次官（有光 次郎）  
國立博物館長（安倍 能成）  
宮内府次長（加藤 進）  
東京都知事（安井誠一郎）  
帝國學士院長（長岡半太郎）  
帝國藝術院長（南原 繁）  
東京大學總長（上野 直昭）  
東京美術學校長（細川 護立）  
重要美術品等調査委員長（現）  
二、學識經驗者十八人以内  
梅原龍三郎 大原總一郎  
志賀 直哉 關口 泰

辻 善之助 長尾 欽彌

古垣 鐵郎 松方義三郎

松永安左衛門 矢代 幸雄

和辻 哲郎

第二條 前條第二號の評議員の任期は二年とする。但し重任することを妨げない。

第三條 評議員會に會長及び副會長を置く。會長及び副會長は、評議員の互選とする。

第四條 會長及び副會長の任期は一年とする。但し重任することを妨げない。

第五條 會長は會務を總理する。

第六條 副會長は、會長を輔佐し、會長に事故があるときは、その職務を代理する。

第七條 評議員會に、幹事若干人を置く。幹事は文部大臣がこれを命ずる。

第八條 評議員會に、書記若干人を置く。書記は、文部大臣がこれを命ずる。

第九條 書記は、庶務に従事する。

國立博物館社寺寶物受託規程

昭和十一年十一月三十日  
宮内省令第十二號

第一條 帝室博物館ニ於テ陳列ニ供スル爲社寺寶物ノ寄託ヲ受クルハ本規程ノ定ムル所ニ依ル

第二條 寺社其ノ寶物ヲ國立博物館ニ寄託セムトスルキハ寄託期間ヲ定メ書面ヲ以テ國立博物館々長又ハ奈良分館長ニ申出ツヘシ寄託期間ヲ更新セムトスルトキ亦同シ

第三條 國立博物館寄託ノ目的物ヲ受領シタルトキハ附録様式ノ受託證書ヲ交付シ返還スルトキハ之ヲ引換フヘシ

受託期間ヲ更新シタルトキハ受託證書ニ其ノ期間ヲ明記シ繼續ノ印ヲ押捺ス

美術行政機關

第四條 受託物ハ寄託期間内ト雖モ之ヲ返還スルコトアルヘシ

受託物ハ祭典法要修理其ノ他ノ事由ニ因リ寄託者ヨリ願出アリタルトキハ三十日ヲ限リ之ヲ返還スルコトアルヘシ

前項ノ期間ハ修理其ノ他已ムコトヲ得サル事由アルトキハ之ヲ延長スルコトヲ得

第五條 寄託社寺ニ對シテハ毎年十二月ニ社寺交附金ヲ交附ス

第六條 寄託又ハ受託物ノ返還ニ要スル荷造費及運搬費ハ國立博物館ニ於テ之ヲ負擔ス

第七條 寄託期間六年以上ニ亙ル受託物ニ付テハ特別ノ事情アル場合ニ限リ寄託者ノ申出ニ依リ國立博物館ニ於テ其ノ修繕費ノ全部又ハ一部ヲ負擔スルコトアルヘシ

第八條 前條ニ依リ費用ヲ負擔スル受託物ノ修繕ハ國立博物館内又ハ指定ノ場所ニ於テ之ヲ行フモノトシ國立博物館館長(奈良分館ニ在リテハ同館長)之ヲ監督ス

第九條 前項ノ修繕ノ方法及程度ニ付テハ當該社寺國立博物館々長(奈良分館ニ在リテハ同館長)ト協議スヘシ

第十條 受託物ハ國立博物館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災地變其ノ他不可抗力ニ因リ滅失紛失又ハ毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第十一條 本令施行ニ關スル細則ハ宮内大臣ノ認可ヲ經テ國立博物館々長之ヲ定ム

國立博物館出品規則

第一條 所藏ノ物品ヲ本館ニ分陳センコ

トヲ望ム者ハ口頭若ハ書面ヲ以テ申出ツヘシ、但シ書面ヲ以テ申出ツルトキハ其ノ品名形狀傳來等ヲ詳記シ且略圖ヲ添付スヘシ

第二條 物品ノ出陳ヲ承認シタルトキハ物品ト引換ニ預證書ヲ交付スヘシ

第三條 出品ハ本館ニ於テ保管ノ責ニ任ス但シ天災其ノ他不可抗力ニ因リ紛失毀損シタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第四條 出品ノ輸送費用ハ所有者ニ於テ辨スヘシ

第五條 出品ヲ模寫模造若ハ撮影センコトヲ請フ者アルトキハ所有者ノ承諾ヲ得タル後之ヲ許可スヘシ但シ各種列品集合全體ノ形狀ヲ撮影スルハ此ノ限ニアラス

第六條 出品ニシテ當時手入ヲ要スルモノハ本館ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ修繕ハ此ノ限ニアラス

第七條 出品ノ預期間ハ三箇年トス

第八條 預期間ノ計算法ハ現品ノ領收カ六月以前ナルトキハ其ノ年ノ一月ヨリ起算シ七月以後ナルトキハ其ノ年ノ七月ヨリ起算ス

第九條 預期間満了シタルトキハ書面ヲ以テ之ヲ所有者ニ通知ス 所有者前項ノ通知ヲ受領シタルトキハ速ニ物品ノ引渡ヲ受クヘシ

第十條 出陳ヲ繼續スル場合に於テハ本館書ノ表面ニ繼續ノ印ヲ押シ期限ヲ延長スルモノトス

第十一條 出品預期間内ト雖所有者ノ希望ニ因リ若ハ本館ノ都合ニ因リ物品ヲ返付スルコトアルヘシ

第十二條 返付スヘキ物品ハ執務時間中何時ニテモ預證書ト引換ニ之ヲ引渡ス

ヘシ 引渡ヲ受ケタルトキハ本人又ハ代理人ハ證書ノ裏面ニ受領ノ旨ヲ記載シ記名捺印スヘシ

第十三條 出品預期間満了ノ場合ニ於テ所有者ノ所在不明ナルトキハ官報及三種以上ノ新聞紙ニ五日間之ヲ廣告スヘシ此ノ場合ニ於テハ其ノ末日ニ於テ通知ヲ受ケタルモノト看做ス

第十四條 預期間満了ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ三ヶ年ヲ經過スルモ引渡ヲ申出サルトキハ預證書ハ無効トシ現品ハ本館ニ於テ隨意ニ之ヲ處分ス

第十五條 出品預證書ヲ紛失若ハ毀損シタルトキハ速ニ本館ニ届出證書ノ再交付ヲハ引換ヲ請求スヘシ但シ紛失シタルトキハ官報又ハ新聞紙ニ廣告シ三箇月ヲ經過スルモ發見セサル場合ニ於テ再ヒ證書ヲ交付スヘシ

第十六條 紛失若ハ毀損ニヨリ再ヒ預證書ヲ交付シ若ハ引換ヲ爲ストキハ其ノ理由ヲ證書ニ摘記ス

國立博物館奈良分館

奈良市奈良御料地

明治二十二年奈良帝國博物館設置せられ同二十八年四月開館。三十三官制の改革と共に奈良帝國博物館と改められ、更に昭和二十二年五月文部省の管轄となり新官制と共に現稱に改められた。陳列品は古社寺所有の國寶等にして政府の命令出陳に依るもの、及社寺、個人その他よりの寄託による古美術品を蒐めて居る。概して佛像、佛畫が多く、殊に彫刻は上古より鎌倉期に至る優秀品が多數陳列されている。出陳物を美術品、歴史品、美術



美術研究施設

工藝品及書蹟の四部門に分ち、彫刻繪畫等の美術品は各室別、時代參考順に陳列し歴史品及美術工藝品は箱別とし、類聚陳列をしてゐる。館内は十三室に分れ、第一室より第三室まで彫刻、第四室より第七室迄工藝品、第八室は歴史品、第九室より第十二室迄繪畫、第十三室書蹟の順に陳列し、此中第一室より第八室に至る彫刻歴史及工藝品は六月、十二月に定期の陳列替を行い、第九室以降の繪畫、書蹟は毎月陳列替を行う、官制、社寺寶物受託規程等は國立博物館の項参照。

〔分館長〕 黒田 源次  
〔觀覽日〕 國博ニ同シ  
〔料金〕 同

文部省社會教育局文化課及藝術課

文部省分課規程(昭和二十一年四月一日)抜萃

第五條 社會教育局ニ社會教育課、文化課、藝術課及調査課ヲ置ク

文化課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、國寶及重要美術品等ノ保存ニ關スルコト

二、史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ關スルコト

三、圖書館及ヒ讀書指導ニ關スルコト

四、博物館及ヒ各種觀覽施設ニ關スルコト

五、出版、放送、新聞及ヒ圖書ニ關スルコト

六、文化團體ニ關スルコト

七、國際文化事業ニ關スルコト

藝術課ニ於テハ左ノ事業ヲ掌ル

一、藝術ノ獎勵及ヒ調査ニ關スルコト

二、文學、音樂、美術ニ關スルコト

三、映畫演劇其ノ他國民娛樂ニ關スルコト

コト

四、映畫教育ニ關スルコト

五、日本藝術院ニ關スルコト

六、藝術團體ニ關スルコト

美術研究施設

國立博物館附屬美術研究所

東京都台東區上野公園  
電 下谷〇四八七

當所は故黒田清輝子爵の遺志に基きその遺産を以て開始されたもので、昭和五年開設の準備成ると共に同子爵遺言執行人より建物、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、同年六月政府は之を帝國美術院附屬として設置した。昭和十年六月帝國美術院改革に伴ひ新に美術研究所官制を制定、文部省所管、帝國美術院に附置され、次で昭和十二年六月官制改正を見、文部大臣直接監督の下に獨立することとなつたが、昭和二十二年國立博物館官制の成立と同時に、同館附屬の研究、明治大正美術の研究のほか、新に西洋美術、考古學、風俗史、史料等の研究室を設け、七研究室制として新發足をした。國立博物館刊行の「美術研究」「日本美術年鑑」は當所從來の業績を繼續するもので現在なおその編輯を擔當している。なお所内に黒田子爵記念室を設け、その遺作を陳列、隨時公開する。そのほか「美術研究資料」や「研究報告」の刊行、講演會、特別展觀等の開催、蒐集の圖書寫眞等の公開をなし、美術研究のため

めの着實な基礎を提供してゐる。

〔所長代理〕 福山敏男

東洋文化研究所

文部省大塚町五六

昭和十六年十一月創立、東京大學に附屬し東洋文化に關する綜合研究を掌り、その成果及資料の發表講演會等を行う。

昭和二十三年度より東京大學文化學院を併合した。〔所長〕 辻直四郎〔教授〕 仁井田陞、飯塚浩二、江上波夫、宮澤俊義、山田盛太郎〔助教〕 川野重任、橋本秀一、小口偉一、山本達郎、丸山眞男

〔助手〕 鈴木中正、坂野正高、築島謙三、荒松雄、花村芳樹、山口修〔事務官〕 長内太郎吉〔研究員〕 植田捷雄、松本善海、大木幹一、吉川逸治、磯田進、結城令聞、青山定雄、瀧邊一、横越慧日、三上次男、米澤嘉圃、稻葉誠一、永島榮一郎、周藤吉之、窪德忠、後藤基己、飯田須賀斯、島田正郎、西島定生

東洋文化研究所官制

昭和十六、十七、十八、勅令第十二號  
改正 昭二二、第二〇七號 昭二二  
改令二〇四號

第一條 東京大學ニ東洋文化研究所ヲ附屬ス

第二條 東洋文化研究所ハ東洋文化ニ關

一二

スル綜合研究ヲ掌ル

第三條 東洋文化研究所ニ左ノ職員ヲ置ク

所 長

文部教官 專任六人(一級又ハ二級)

文部事務官 專任二人

第四條 所長ハ東京大學教授タル文部教官ヲ以テ之ニ充ツ、所長ハ東京大學總長ノ監督ノ下ニ東洋文化研究所ノ事務ヲ掌理ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

東京市左區北白川小倉町五〇

電 上五〇五〇

東方文化研究所

昭和四年外務省の補助により事業開始昭和二十三年度より京都大學に統合吸收さる。東方文化に關する共同的研究調査を行い、報告書、學報を出版する。〔所長〕 羽田亨〔研究員〕 塚本善隆、能田忠亮、長廣敏雄、森鹿三、水野清一、貝塚茂樹、藪内清、長尾雅人、平岡武夫、入矢義高、日比野武夫、田中謙次、大島利一

商工省工藝指導所

本 所

川崎市久地津田山 電溝ノ口三二六

關西支所(假事務所)

大阪市東區内本町橋詰町大阪府貿易館内

東北支所

仙台市二十人町通一〇 仙台三七六〇

本所は中小工業特に本邦固有の木工、金工、塗工、漆工、編組其他各種の工藝技術に進步せる科學技術を導入し、製品の品質並技術の高度化を圖ると共に優秀

な意匠力を應用したる斬新卓拔な商品を作成せしが爲、必要な試験研究をなし其の成果を以て廣く關係業者を指導し、以て我國中小工業の進歩を促進し併せて輸出振興に寄與することを目的とする國立研究指導機關である。

昭和三年創設せられ仙台に於て事業を開始したが、其の後事業の進展に伴い昭和十四年大阪に關西支所が、又昭和十五年本所の東京移轉と同時に仙台に東北支所が設置せられた。

昭和二十年東京本所並關西支所相前後して戦災に罹り、建物及設備の殆んど全部を焼失したるを以て、直ちに夫々應急的假事務所を設け當面の事業を行うと共に將來に於ける本格的再建の準備を爲しつゝある。

## 業務一般

### 一、調査研究

イ、内外工藝事情の調査研究

ロ、工藝品の原材料に關する調査研究

ハ、工藝品の製造に要する工具、機械及技法に關する調査研究

ニ、參考圖書及資料の調査及蒐集

### 二、試験研究

イ、工藝品の基礎的改善の爲に必要な一切の技術的研究

ロ、工藝品に利用し得べき原材料並に成品の試験研究

### 三、試作研究

各種工藝品の設計及試作研究

### 四、指導

イ、工藝に關する講演、講習

ロ、工藝品及意匠圖案の審査及鑑定

ハ、申請による實地指導

五、製作並に調製應需

## 美術研究施設

依頼による工藝品及其の材料の製作加工又は意匠圖案の調製

六、貸與及配布

試験研究の爲製作したる工藝品並に設計圖案、原型、其他參考品の貸與又は配布

七、傳習生及研究生の養成

當業者及其の子弟並に工場從業者に對し工藝技術及知識の傳習を行い又研究生の養成をなす

八、質疑應答

工藝の各般に亘る質疑に對し口答又は文書を以て應答す

九、設備貸與

當業者の試験研究又は製品加工のため申請あるときは當所作業に支障なき限り設備を貸與し便宜を圖る

一〇、刊行物の頒布

本所の試験研究及調査に基き月刊「工藝ニュース」を編集その他不定期に調査研究資料を又年刊として年報を發行各關係方面に頒布す

一一、各方面との連絡

地方各研究指導機關其他關係諸方面との連絡を圖り研究、試験、指導の綜合効果の發揮に努む

一二、一般指導啓發

一般に對し工藝知識の普及、趣味の涵養を計り、一方我國工藝の特質、長所の海外宣傳、啓蒙を圖る

工藝指導所官制

第一條 工藝指導所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ工藝ノ指導ヲ爲ス爲左ノ業務ヲ掌ル

一、工藝品ニ關スル試験及研究

二、工藝品ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定

三、工藝品製作ニ關スル傳習及講話

四、試験研究ノ爲製作シタル工藝品並加工シタル其ノ材料、調製シタル其ノ意匠圖案及製作シタル其ノ原型ノ配付

第二條 工藝指導所ハ工藝ノ改善ニ必要アリト認ムル場合ニ限り工藝品ノ製作並其ノ意匠圖案ノ調製及其ノ原型ノ製作ノ依頼ニ應ズルコトヲ得

第三條 工藝指導所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長

商工技官

專任 十人 二級

專任 十三人 三級

商工事務官

專任 一人 二級

專任 三人 三級

所長ハ二級ノ商工技官ヲ以テ之ニ充ツ

第四條 所長ハ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス

第五條 商工大臣ハ必要ト認ムル地ニ工藝指導所ノ支所ヲ置キ本所ノ事務ヲ分掌セシムルコトヲ得

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

商工部内臨時職員設置制(拔萃)

第二條 臨時セシムル爲ニ關スル事務ニ從事セシムル爲ニ工藝指導所ニ左ノ職員ヲ増置ス

商工事務官又ハ商工技官

專任 三人 三級

工藝指導所處務規程

第一條 工藝指導所ニ左ノ部課ヲ部ク

一、設計部

一、試験部

一、工作部

一、指導部

二級技官(一級待遇)所長 齋藤 信治

二級事務官 庶務課長 小吹 善男

二級技官 東北支所長 松崎 福三郎

指導部長 兼設計部長 豊口 克平

一、庶務課

第二條 設計部ニ於テハ工藝品ノ設計ニ關スル事務ヲ掌ル

第三條 試験部ニ於テハ工藝品ノ原料及材料ノ試験及鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル

第四條 工作部ニ於テハ工藝品ノ工作ニ關スル試験及研究ニ關スル事務ヲ掌ル

第五條 指導部ニ於テハ工藝技術ノ改善ニ關スル企畫及指導ニ關スル事務ヲ掌ル

第六條 庶務課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一、官印ノ保管ニ關スル事項

二、所員ノ進退身分ニ關スル事項

三、所内取締ニ關スル事項

四、文書ノ接受發送及保管ニ關スル事項

五、豫算及決算並會計ニ關スル事項

六、國有財産及物品ニ關スル事項

七、他部ノ主掌ニ屬セサル事項

第七條 工藝指導所支所ニ支所長ヲ置ク

支所長ハ所長ノ指揮監督ヲ承ケ支所全般ノ事務ヲ處理ス

第八條 所長處務細則又ハ支所ノ處務規程ヲ設ケタルトキハ商工大臣ニ報告ス

ヘシ之ヲ變更シタルトキ亦同シ

第九條 所長試験又ハ鑑定ノ成績書ヲ作製スルトキハ其ノ擔任者ト共ニ之ニ署名又ハ記名捺印スヘシ

第十條 所長ハ毎年度事業ノ成績ヲ商工大臣ニ報告スヘシ

職員

二級技官(一級待遇)所長 齋藤 信治

二級事務官 庶務課長 小吹 善男

二級技官 東北支所長 松崎 福三郎

指導部長 兼設計部長 豊口 克平

美術研究施設

關西支所長 渡邊金三郎  
試驗部長 安倍 郁二  
八井 孝二  
鈴鹿清之介

工作部長

劍持 勇

三級事務官

福岡 和雄  
栗石 一男  
栗山 樹人  
熊谷 民王  
中西 俊介

三級技官

八木橋伊佐雄  
大場吉三郎  
芳武 茂介  
松下新三郎  
白井 正夫  
畑 正夫  
松倉 定雄  
猪狩 英一  
服部 茂夫  
野口 恒喜  
家弓 純夫  
鹽澤 永幸  
寺島祥五郎  
有吉 金太  
中村 秀哉  
小岩 峻  
松田 一雄  
松原 貞嗣  
大泉 政雄  
野口 重男  
松川 蒸二  
奥井長一郎  
關留 辰雄  
山脇 巖

陶磁器試驗所

京都市伏見區深草正覺町  
電 報 一四七八

當所は本邦陶磁器工業の改善進歩並にその輸出増進を圖る爲の國立研究指導機關である。大正八年京都より、元京都市立陶磁器試驗場の敷地、諸設備及事業の一切を政府に寄附移管し、時の農商務省所管としたもので後に商工省の所管となり現在に至つて居る。而して昭和八年度、政府に於て國策として工藝振興に關する經費を新に支出することになつたが、この際偶々瀬戸市に計畫された市立窯業試驗所の土地、建物その他諸設備一切を舉げて當所に移管し、同所を陶磁器試驗所瀬戸試驗場として當所に於て經營することになつた。

陶磁器試驗所官制

大正八年四月五日  
勅令第八十三號

第一條 陶磁器試驗所ハ商工大臣ノ管理ニ屬シ左ノ事務ヲ掌ル

- 一 陶磁器ニ關スル試驗及研究
- 二 陶磁器ノ原料及材料ノ品質ノ鑑定
- 三 陶磁器製作ニ關スル傳習及講話
- 四 試驗研究ノ爲製作シタル陶磁器及加工シタル其ノ材料ノ配付
- 第一條ノ二 陶磁器試驗所ハ試驗研究成績ノ普及促進ニ必要アリト認ムル場合ニ限り磁陶器ノ製作ノ依頼ニ應スルコトヲ得
- 第二條 陶磁器試驗所ニ左ノ職員ヲ置ク

二級技官 專任一〇人  
三級事務官 專任三人

三級技官 專任一人

第三條 所長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ商工大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理ス  
(第四條以下略)

同所處務規程拔萃

- 一、陶磁器試驗所ニ第一部、第二部、第三部、第四部、瀬戸試驗場及庶務課ヲ置ク
- 一、第一部ニ於テハ陶磁器ニ關スル基礎的研究並陶磁器ノ原料、材料ノ品質ノ鑑定ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、第二部ニ於テハ陶磁器製作ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、第三部ニ於テハ陶磁器ノ意匠及圖案ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、第四部ニ於テハ特殊陶磁器ノ研究ニ關スル事務ヲ掌ル
- 一、所長ハ必要ト認ムル地ニ試驗場ヲ置キ陶磁器試驗所ノ事務ノ一部ヲ分掌セシムルコトヲ得
- 一、同所製品配付及受託製作規則拔萃

- 一、陶磁器試驗所ノ試驗研究ニ依リ製作シタル陶磁器及加工シタル陶磁器材料ノ配付ヲ受ケントスル者又ハ陶磁器ノ製作ヲ依頼セントスル者ハ別記所定様式(中略)ニ依リ陶磁器試驗所長ニ出願スヘシ
- 一、前條ノ出願ヲ許可セントスル場合ニ於テハ陶磁器試驗所長ハ左ニ掲クル事項ヲ定メ之ヲ出願人ニ通知スヘシ
- 一 品種及數量
- 二 代金又ハ製作費及其ノ納付期限
- 三 引渡豫定期日
- 出願人前項ノ通知ヲ受ケタル日ヨリ五

一四

日以内ニ配付ヲ受クヘキ旨又ハ製作ノ依頼ヲ爲スヘキ旨ヲ申出テサルトキハ出願ハ其ノ效力ヲ失フ  
一、陶磁器試驗所長必要アリト認ムルトキハ道府縣市立商品陳列所規程ニ依ル商品陳列所又ハ學校ニ對シ無償ヲ以テ製品ヲ配付スルコトヲ得

同所傳習生規程拔萃

- 一、陶磁器試驗所ハ陶磁器ノ製作ニ關スル技術ヲ修得セントスル者ノ爲傳習ヲ行フ
- 一、傳習生ノ傳習期間ハ五箇月トシ傳習開始ノ期日ハ毎年四月一日及十月一日トス 前項ノ期間及期日ハ陶磁器試驗所ノ都合ニ依リ之ヲ變更スルコトアルヘシ
- 一、傳習事項、傳習生ノ定員、傳習期間及傳習開始ノ期日ハ豫メ官報ヲ以テ之ヲ公告ス
- 一、傳習生ハ陶磁器ノ製作ニ經驗アル十八歳以上三十五歳以下ノ男子ニシテ官公署、學校、組合其ノ他ノ團體又ハ工場主ノ推薦ニ係ルモノタルコトヲ要ス
- 一、傳習料及傳習ニ要スル費用ハ之ヲ徴セス

附 瀬戸試驗場

瀬戸市西茨町  
電 報 瀬戸二四五六

京都本所の基礎的研究よりなる中間試験の結果を更に進んで實地的製作に移し以て陶業者と相互に聯絡を保ち、益々事業の發展を圖らんとするものであつて、當場には技術科、圖案科、及び庶務係を置く。



陶磁器試驗所職員

〔技師〕所長・秋月透、瀬戸試驗場長・中根俊雄、磯松横造、水町和三郎、藤井

美術教育施設

美術學校

東京美術學校

東京都台東區上野公園  
電話 二八〇—二  
下谷二八〇—二

東京美術學校は明治二十年十月勅令を以て設置せられ、文部省専門學務局長濱尾新が學校長事務取扱を命ぜられ、同十二年二月授業を開始した。同二十三年濱尾新に代つて岡倉覺三學校長となつたが同三十一年退官し、彼と共に教授橋本雅邦以下多數の教授、助教が辭職した。高嶺秀夫、久保田鼎に次いで同三十四年正木直彦學校長となり昭和七年和田英作これに代り、次いで同十一年芝田徹心學校長に、同十五年澤田源一學校長、同十九年六月上野直昭、大阪美術館長より轉じて學校長に任ぜられ現在に至る。本校の學科は、本科と師範科に分かれる。尚從來あつた研究科、選科は昭和二十二年二月十八日官制を以て廢止された。

〔本科〕日本畫科、油畫科、彫刻科（塑造部、木彫部）工藝科（圖案部、彫金部、鍍金、鑄金、漆工）建築科の各部に分ける。修業年限三年乃至六年、入學資格豫科修了者。授業料年額二百圓。在學中特定の學科目を修了したる者に中等教員無試験檢定の特典あり。

〔豫科〕修業年限一年、入學資格中學校四年修了者、高等學校尋常科修了者、高

美術教育施設

兼壽、澤村滋郎、梶崎千代利、三津木力保野福田郎（屬）滑川正雄、渡邊嘉昭

等學校高等科入學資格試驗合格者、授業料年額二百圓。入學試験を行う。

〔師範科〕修業年限三年—六年。入學資格中學卒業程度、授業料二百圓、入學試験を行う。

〔聽講生〕生徒以外の者にして本校に於て教授する學科科目中一科若くは數科を選び學習せんとする者は教授上差支なき場合に限り考查の上出席許可す。聽講料未定。

昭和二十二年四月一日に於ける各料生徒數は左の如くである。

〔日本畫科〕男九二名、女一四名

〔油畫科〕男一六四名、女二五名

〔彫刻科〕男三四名、女五名

木彫部 男六〇名

〔工藝科〕圖案部 男八二名、女五名

彫金部 男二七名、女二名、鍍金部

男一八名、鑄金部 三九名、漆工部

男四九名、女一名

〔建築科〕男八〇名、女一〇名

〔師範科〕男八〇名、女一〇名

又本校には文庫があつて圖書標本を收藏し、陳列館及正木記念館があつて諸種の展覧を試み、何れも生徒學習の參考に資する。

〔學校長兼教授〕上野直昭〔名譽教授〕和田英作、結城貞松〔教授〕石田英一、海野清、平橋倬太郎、小林茂、安田新三郎、石井鶴三、安井曾太郎、梅原龍三郎

廣川松五郎、松田義之、松田繼六、村田良策、岡田捷五郎、内藤春治、西田正秋、日下嘉一郎、西本順、吉田五十八、磯矢陽、丸山義男、小場恒吉、吉川逸治、新規短男、脇本十九郎〔助教〕山本正義、田中文雄、菅原安男、碓伊之助、久保守、吉村順三、前田泰次、寺田春一、笹村良紀、山脇洋二、入谷昇、小池岩太郎、大友春松、瀨谷義廣、大山倍〔講師〕蒔田宗次、關野克、加藤鬼頭太、石澤正男、石橋啓十郎、中村傳治、尾上八郎、鈴木清、寺内万治郎、鬼澤義濃作、品田慎一、瀧澤俊郎、關秀光、奥村義三、明石弘志、村田茂男、川合清、山崎三郎、兒島喜久雄、水谷武彦、鈴木信一、田中芳郎、伊藤廉、吉野富雄、兼子秀賢、後藤年彦、麻生磯次、高田正二郎、中村登一、櫻林仁、六角顯雄、菊池一雄、山本豐一、丸山金藏、石川榮耀

工業技術講習所

東京美術學校内

昭和十五年十一月十四日勅令第七百六十九號を以て官制を公布、差當り東京美術學校に於て授業を行う。

工藝技術講習所官制

第一條 工藝技術講習所ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ工藝ニ關スル技術ノ教授ヲ掌ル

第二條 工藝技術講習所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 專任二人  
教授 專任三人  
助教授 專任二人  
助手 專任一人  
書記 專任一人

第三條 所長ハ文部部内ノ高等官ヲ以テ之ニ充ツ文部大臣ノ指揮監督ヲ承ケ所務ヲ掌理シ所屬職員ヲ監督ス

第四條 教授及助教授ハ生徒ノ教育ヲ掌ル

第五條 助手ハ教授又ハ助教授ノ指揮ヲ承ケ授業及實習ノ補助ニ従事ス

第六條 書記ハ上官ノ命ヲ承ケ庶務會計ニ従事ス

第七條 所長ハ文部大臣ノ許可ヲ得テ講師ヲ囑託シ授業ヲ擔任セシムルコトヲ得

〔所長〕上野直昭〔教授〕内藤四郎、磯矢陽、淺野陽

東京工業專門學校

（東京高等工藝學校）改名

本校及附屬電機工業學校  
千葉縣松戸市岩淵  
電話 六六六、三六一六  
第二部及附屬工業修練學校  
東京都港區西芝浦一丁目  
電話 三三三、一一五六

本校は大正十年十二月の設立に係り、松岡壽初代校長に任ぜられ翌十一年東京市芝區新芝町に於て開校された。同十二年吉武榮之進代つて校長となる。同十三年東京高等工業學校附屬職工徒弟學校を本校に移管、附屬工藝實修學校として設置した。同十四年松岡壽再び校長となり翌年東京美術學校寫真科を本校に移管し寫真部として設置した。昭和三年安田祿造、同十六年鈴木京平が校長に任ぜられ現在に及ぶ。昭和十七年四月第二部精密機械科を設置し同十八年十月電氣通信專修科を、同十九年四月第二部機械科を設置す。同十九年四月二十四日東京高等工

藝學校を「東京工藝專門學校」と改稱。

昭和二十二年三月に於ける各科課程は左の如くである。

「本科」第一部

建築科、印刷工業科、機械科（第一、第二）寫真工業科、電氣通信科、木材工業科、化學工業科（新設豫定）

「別科」

機械科

「附屬專修學校」

木材工業別科

「附屬電波工業學校」

本科、專攻科

「校長」鈴木京平

「教授」

「機械科」林則行、六崎賢亮、長谷川一郎、岩浪繁藏、木下壤一、「木材工業科」野村茂治、西海幸一郎、橋本喜代太、「印刷工業科」伊東亮次、星野幸衛、「寫真工業科」岡利亮、吉村清、「電氣通信科」田邊隆治、藤澤義男、「第二部機械科」馬場秋次郎、林則行、「附屬工業專修學校」岡田楠次郎、「附屬電波工業學校」山口亮造、黒瀬澄夫、大野暖象、櫻井晴一、渡邊茂

京都工業專門學校

（京都高等工藝學校）改名

京都市左京區松ヶ崎御所海道町  
電上五七、五〇三、五七七〇

明治三十五年三月設置。中澤岩太初代校長となり、大正七年七月鶴巻鶴一之に代り更に大正十五年四月、村上宇一、昭和十八年十月三十日田中正三郎、昭和二十

十年十一月二十四日、坪井道三校長に任ぜられ現在に至る。同十九年四月一日、「京都高等工藝學校」を「京都工業專門學校」と改稱す。

「學科」第一部（畫）色彩科、紡織科、建築科、窯業科、機械科、精密機械科、化學工業科、電氣科 第二部（夜）機械科、化學工業科

（本科）修業年限三年。入學資格中學校卒、實業學校卒及其れと同程度。

（專修科）色彩科、紡織科

（研究生）本校若は他の專門學校卒業者又は之と同等以上の學力を有する者にし、工業に關する特殊事項に付更に研究せんとする者は詮議の上之を研究生として入學を許可する事あるべし。

（選科生）修業年限三年以内

「校長」坪井道三（名譽教授）村上宇一「教授」小島幸三郎、山上操、向井寛三郎、田中隆吉、荒木長治、湯淺南海男、山田隆、高辻幸之助、鳴智恵人、河村正義、藤田畔二、青木一郎、淺尾健次、鹿野治助、菊地武勝、脇村利一郎、立入明、實藤玄、町田誠之

本科生徒數

第一部（畫）

色彩科 一一〇名

紡織科 一二九名

建築科 一二八名

窯業科 一二三名

精密機械科 三四八名

化學工業科 三四名

電氣科 一九名

第二部（夜）

機械科 二〇八名

化學工業科 五八名  
專修科生徒數  
色彩科 二五名  
紡織科 三六名  
その他選科生二名

京都市立藝術專門學校

（京都市立繪畫專門學校）改名

京都市東山區今熊野日吉町  
電 話 一五八

明治四十二年三月創立。同校は「專門學校令」據り日本畫及圖案ヲ攻究セントスル者又ハ圖畫教員タラントスル者ニ必要ナル教育ヲ施スことを目的とする。初め京都市立美術工藝學校の西隣に校舎を營んだが大正十五年六月現地に移轉した。創立以來多數の日本畫家を輩出して今日に及ぶ。「京都市立繪畫專門學校」を昭和二十年「京都市立藝術專門學校」と改稱す。

（學科）日本畫科、圖案科に分ち各科に豫科及本科を置き、別に研究科及選科を置く。

（豫科）修業年限日本畫科二年。圖案科一年。入學資格中學校卒、專檢合格者。授業料年額（市内）一七〇圓

（本科）修業年限日本畫科、圖案科共三年。入學資格同校豫科修了者。授業料豫科に同じ。

（研究科）在學期間五年。入學資格同校各學科又は他の專門學校卒業者。授業料年額一三〇圓。

「校長」中井宗太郎「教授」宇田萩郷、案本一洋、棚原繁峰、宇都谷誠太郎、小野竹喬

京都市立美術工藝學校

京都市東山區今熊野日吉町  
電 話 一五八

明治十三年七月の創立で、元京都府畫學校と稱し本邦最初の畫學校である。初め普通畫學のみの教授をしたが、同二十一年應用畫學科を併置したのを初めに同二十七年には校則を改正、繪畫科、彫刻科、工藝圖案科を置くに至り、同三十四年には名稱を京都市立美術工藝學校と改めた。大正十五年現地に校舎を移轉した。同校は工業學校規程に據り、美術及び美術工藝に従事せんとする者に必要な技能を授くるを目的とし、學科を繪畫科、圖案科、彫刻科、漆工科の四科とし、修業年限を五箇年とす。入學資格は國民學校初等科卒とし、授業料は京都市内在住者は一箇年四十五圓其の他は六十圓五十錢である。

「校長」中井宗太郎（實習科受持）（繪畫科）勝田哲、西村卓三、多田敬一、小宮信一、辻宇佐雄、宇田萩郷、猪原大華（圖案科）田村春曉、片山行雄、丸毛又三郎、田ノ口青晃、太田喜二郎、（彫刻科）矢野判三、北村西望、太田喜二郎

岩手縣立美術工藝學校

岩手縣盛岡市内九六九

昭和二十二年五月開校式舉行、純粹美術、應用美術の兩域に亘つて専門作家、美術教育者及び市町村の工藝指導者を養成し、藝術を中心としての教養及技術によつて生産及文化に寄與するを目的とする。

本校に本科、選科及び專攻科を置き、

本科は純粹美術科と應用美術科に分れる。「純粹美術科」日本畫科、油繪科、彫刻科、「應用美術科」圖案科、木工科、金工科、漆工科、染色科、窯業科、印刷科

選科の課程は本科の規定に準ずる。

専攻科は實習課目の外に左の選擇課目を修める。教員志望の者には教育學、教授法、教育史、心理學を履修させ、岩手縣内新制中學校、小學校圖工科員免許狀を附。工場技手志望の者には工藝史、簿記、建築設計法、工場經營法、工場法規を修めさせる。

（本科）新制中學卒業生（男女を問わず）を入學させ、修業年限を三箇年とする。

（選科）本科と同じに分科し、入學資格を制限せず（學力、年令、男女を問わず）入學させ修業年限を三箇年とする。

（専攻科）は本科及選科の卒業生の中より入學させ修業年限を二箇年とする。

〔校長〕森口多里〔教授〕森口多里、高橋吉雄、深澤省三〔助教〕佐々木一郎〔講師〕橋本八百二、池田龍甫、深澤紅子、堀江起、舟越保武、小泉清一、藤田謙、梶田惠、舟越健二郎、村上秀久、芦野文雄、玉城芳男

### 金澤美術工藝專門學校

金澤市本多町三ノ九  
電 金澤 五二七一

昭和二十一年七月十三日創立認可となり、金澤市文化部長津澤正校長事務取扱、同年十二月森田龜之助初代校長となる。現在學生は予科生、本科一年生、二年生合計二七四名在籍。〔校長〕森田龜之助〔教授〕（日本畫）野田九浦、畠山

美術教育施設

錦成（洋畫）宮本三郎、遠田運雄、（工藝）吉田源十郎（一般學科）川合知文、板垣應雄

### 多摩造形藝術專門學校

予科 世田谷區玉川上野町三三六  
電 玉川五六 溝ノ口二五七  
本科 川崎市久本町一三五

昭和十年九月、元帝國美術學校校長北吟吉及評議員兼教授杉浦非水、牧野虎雄、井上忻治、吉田三郎等二十數名は同校を脱退、新に杉浦、牧野、北、近藤清吾等を設立者として多摩帝國美術學校を創立同年九月より澁谷區千駄谷町の假校舎にて授業を開始、同月設立認可を受け、同十二月玉川上野町の新築の校舎に於て開校式を舉行した。初代校長北吟吉、二代校長杉浦非水、昭和二十年五月戰災により大半を焼失、現在本科は溝口校舎にて授業中、三代校長井上忻治、多摩造形藝術專門學校と改稱、教職員四〇名、生徒數二五〇名。〔校長〕井上忻治〔日本畫主任〕中村岳陵〔西洋畫主任〕大久保作次郎〔彫刻科主任〕吉田三郎〔建築科主任〕今井兼次〔圖案科主任〕杉浦非水

### 女子美術專門學校

杉並區和田本町八六〇  
電 中野 九一〇

明治三十三年十月故佐藤靜子が本郷菊坂に女子に美術を教授する専門の學校として創立されたものである。大正六年以來財團法人女子美術學校の經營となり、昭和四年專門學校令に準據現在の如く改稱されたものである。向校舎は昭和十年本郷より現在の地に移されたものである。〔校長〕佐藤達次郎〔分科及修業年限〕

繪畫科四年、被服科、手藝科各三年（入學定員數）繪畫科一三〇、被服科二〇〇、手藝科四〇〔資格〕高等女學校卒業生（寄宿舎併置）

### 造型美術學園

北多摩郡武藏野市吉祥寺三二〇  
電 吉祥寺 二四七二

昭和四年三月木下成太郎に依り設立された帝國美術學校が二十二年三月造型美術學園と改稱されたもので純粹美術、實用美術の全域にわたり、獨創的な藝術家を出し新しい造型美術の時代を創つてゆくを目的とする。

入學資格は學歷、男女年令を問わず（但中等學校卒業程度の學力が必要とする）學科は全課程を第一學級より第四學級迄四つの段階に分け第一學級より第三學級までは各一年間同じ實習を行い、第四學級に於て各専門に分れて學習する。第四學級に於る専門部門は左の通りである。

繪畫 版畫 純粹美術 彫刻 實用美術 工芸美術 生産美術 室內設計

學科のみ聽講せんとする者にも入學を許す、授業料は各學期毎に六百円とする。

〔學園長〕山脇巖（指導者）岡田謙三、兒島善三郎、郡山三郎、清水多嘉示、野口彌太郎（以上油繪）片山敏彦、中島健藏（藝術學）金原省吾、田中一松、吉川逸治（美術史）金子德太郎、務台理作（哲學）名取堯（文化史佛語）濱德太郎（工藝史）原弘（印刷）廣川松五郎、山名文夫（圖案）水谷武彦（構成原理、材料學）三苦正光（製圖）山脇巖（建築）小津次郎

（英語）

### 朝倉彫塑塾

台東區谷中天王寺二〇  
電 下谷 五四九

明治四十年朝倉文夫の門弟數名を教育するに始まり爾來朝倉塾と呼ばれて多數の作家を輩出し來つたが、昭和十二年開塾二十五周年を迎える當りその記念に塾舎を改築し、十一年六月彫塑の專門學校としての認可を受け朝倉彫塑塾と改稱した。豫科 本科、研究科、特科を設置し修業年限は豫科三年、本科五年、特科二年、研究科は年限を定めない。入學資格は豫科は年令十六才以上、中學卒業及藝長に於て之と同等の學力ありと認めたる者、本科は豫科修了者、官公私立美術學校彫塑科卒業生にして豫科修了者と同等以上の學力ありと認めたる者、學年は十月一日に始り翌年九月三十日に終る。

### 研究所

アカデミー46美術研究所  
豊島區要町三ノ三三

昭和二十一年九月創立、繪畫の基礎を養うデッサンの指導を行う〔指導〕藤田嗣治、鶴田吾郎、中村直人、井上幸〔會務代表者〕豊島區要町二ノ三三 鶴田吾郎

### 阿佐ヶ谷洋畫研究所

杉並區阿佐ヶ谷五ノ八三

油繪、水彩、デッサン等初步よりの實技指導及美術解剖學、美術史の講義を行う。〔實技指導〕三輪孝、熊谷公〔學課指導〕上原之節



美術觀覽施設

岩國工藝美術研究所

山口縣岩國市中津

昭和二十一年七月創立、郷土美術の指導を目的とする。基礎教育として素描、寫生、圖案、專門教育として木工、竹工、紙工、染色、織物、彫刻等の課目あり。

大阪市立美術研究所

大阪市灘波新地  
大阪市立美術館内

昭和二十一年七月創立。洋畫、日本畫彫塑の實技及學術研究を行う。〔講師〕矢野橋村、中村貞以、生田花朝、鍋井克之、須田國太郎、赤松麟作、小磯良平、田村孝之介、保田龍門、伊藤正男、神田松之助、牧野寅三、加藤義雄〔所員〕望月信成、山本光雄、吉川直次、長谷正、藤井源一、片山喜之

九州美術研究所

久留米市白山町  
電 二三一四

昭和二十三年六月創立、美術に關する學術的調査研究、資料蒐集及び實技研究を行い、出版、講演會によつて研究結果を發表する。〔顧問〕矢崎美盛、坂本繁二郎〔所員〕豊田勝秋、富永朝堂、山村秀一、荒巻敏康、岸田勉

行動美術協會東京研究所

世田谷區登喜町一丁目二六ノ一  
電 世田谷 五五六一

行動美術協會の活動を徹底させるため昭和二十一年六月開所、第一部(石膏、靜物)第二部(人物)第三部(日曜日)

み。人物、寫生)に分れ堅實なる洋畫の基礎的研究を主とする。〔研究指導者〕向井潤吉、榎倉省吾、柏原覺太郎、三芳悌吉、高井貞二、浦久保義信、村田登史雄

春陽會教場

昭和十九年秋より毎月第三日曜日に開講。午前十時より正午まで作品評。午後一時より四時迄講義。希望者には臨時聽講の便を設く。委員長木村莊八、委員岡鹿之助、加山四郎、三雲祥之助、中川一政事務所 大田區山王一の二五六二 伊川 鷹治方

職場美術協議會中央美術研究所

新宿區戸塚町二ノ五四

昭和二十三年二月創立、職場美術協議會經營にして教育研究部が運営に担つてゐる。〔職場の中へ美術を、職場の中より美術を〕の線にそい、年一回都美術館に於て展覽會を行う。〔會務代表〕杉山應一〔實技指導〕安井曾太郎、裕伊之助、熊谷守一、内田巖、土方定一、藏原惟人他

多摩洋畫研究所

世田谷區玉川上野町三三六  
多摩造型藝術專門學校内  
電 玉川 五 六

昭和二十二年五月創立、初等、中等、専門の三部共、各午前、午後、夜間の三部制となつてゐる。

東京繪畫研究所

港區麻布本村町一四五  
電 三田 八八〇

同舟會研究所の改稱せるもので昭和二十一年十月創立、洋畫初步の課程を研究する。〔實技指導者〕牧野司郎、日川一郎、木下幹一

東京美術研究所

杉並區阿佐谷四ノ四八六

昭和二十年九月創立、個人的指導を以て初步より指導す。予科、本科各一ヶ年研究科は任意〔主任〕土味川獨市〔日〕大久保實雄〔洋〕玉村方久斗〔日〕小貫政之助〔指導〕狩野晃行、白井保春、濱田信次、川上尉平〔講師〕金原省吾、名取義、村川彌五郎〔所長〕松井基夫

二科會京都洋畫研究所

京都市左京區白川小倉町五〇  
電 上 五〇 六二

昭和二十一年十二月創立。油繪、水

美術觀覽施設

國立博物館

〔美術行政機關〕九頁參照

東京都美術館

台東區上野公園

大正十五年竣工。東京府主催平和紀念東京博覽會開催に當り、永久的美術館設立の議起り(大正一〇、三、一五)平和博覽會紀念事業期成實行會の名で、之が設立を東京府市に對し建議。佐藤慶太郎氏の百萬圓の寄附及び大正十三年一月皇太子殿下御慶事に際し宮内省より現敷地約四千坪の無償貸與の許可を得、大正十三年九月起工、同十五年四月竣工。

彩其他の實技指導を行う。指導者、二科會員、錦義一郎、伊庭傳治郎〔會務代表者〕左京區北白川小倉町五〇伊庭傳治郎

目黒洋畫研究所

品川區上大崎四ノ二四三  
電 大崎 二七七八

昭和二十二年創立。基礎學習としてのデッサンに力を入れ、自由寫生としてパステル、水彩、油彩に就ての實技指導を行う。午前、午後、夜間部の四部を設く〔指導、講評者〕小絲源太郎、牧野司郎

武藏野洋畫研究所

練馬區練馬町一ノ二五一〇

昭和二十二年四月創立。〔代表者〕安藤卯正次〔實技指導〕大久保作次郎、佐竹德〔理論指導〕今泉篤男

五月開館記念として聖德太子奉讃美術展覽會を開催した。昭和四年東京府より約四十萬圓を臨時支出して別館を増築。昭和十八年舊稱東京府美術館を東京都美術館と改めた。

〔館長〕

〔次長〕尾川藤十郎

〔主事〕早川治平、柿沼春治、友部隆治〔顧問〕川合玉堂、横山大觀、鍋木清方、松林桂月、川端龍子、北村西望、奥村土牛、結城素明、安田毅彦、小林古徑、野田九浦、前田青邨、中村岳波、平櫛田中、香取秀真、松田權六、板谷波山、豊道春海、海野清、清水龜藏、六角紫水、藤井浩祐、内藤伸、齋藤素巖、朝倉文夫、山

崎朝雲、佐藤清藏、小杉放庵、和田三造、藤田嗣治、安井曾太郎、山下新太郎、南薰三、和田英作、石井柏亭、中澤弘光、辻永、有馬生馬、梅原龍三郎、石井鶴三、安部能成、上野直昭、伊東忠太、齋藤隆三〔常任參與〕（二部三名）山口蓬春、吉岡堅二、郷倉千毅（二部三名）伊原宇三郎、木村莊八、中村研一（三部二名）吉田三郎（四部二名）高村豊周、吉田源十郎（批評家一名）今泉篤男〔參與〕

（一部）山口蓬春、矢澤弦月、望月春江、兒玉希望、森白甫、堅山南風、新井勝利、伊東深水、西澤笛畝、郷倉千毅、大智勝觀、吉村忠夫、山本丘人、吉岡堅二（二部）猪熊弦一郎、木村莊八、中山巖、向井潤吉、木下孝則、小絲源太郎、宮田重雄、石川寅治、伊原宇三郎、栗原信、東郷青兒、中村研一、齋藤與里、中野和高、大久保作次郎（三部）中村直人、藤野舜三、加藤顯清、橋本朝秀、菊池一雄、堀進二、廣江嘉純、吉田三郎、澤田晴宏、富永朝堂、山本豊市、雨宮治郎（四部）岩田藤七、加藤土師萌、内藤春治、高村豊周、廣川松五郎、大須賀喬、香取正彦、信田洋、吉田源十郎（批評家）遠山孝、宮川謙、今泉篤男、富永惣一郎、大口理夫、野間清六、小池新二、原四郎、黒田龍馬

#### 東京都美術館處務規程

東京都美術館處務規程を次のように定める。

昭和二十二年三月二十九日

東京都長官 安井誠一郎

第一條 東京都美術館（以下館という）

の掌理事項は左の通りである。

#### 美術觀覽施設

一 美術についての創作の展覧  
二 新古美術品の陳列  
三 その他美術及び藝術についての事業

四 前三號の目的のため館を使用しようとする者に對する館の貸與

第二條 館に左の職員を置く。

館長

次長

事務官

主事

主事

主事

技師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

師

三 職員の管内出張、除服出仕、旅行、缺勤、請假及び時間外勤務に關すること。

四 備員及び嘱託の探罷に關すること

五 處務細則、職員の仕事分掌、巡視の勤務心得、備員の勤務心得及び當直心得を定めること。

六 一口十萬圓未満の契約、起工及びその變更に關すること。

七 その他定例の事項にして輕易なもの。

前項第四號及び第五號の事項についてはその都度教育局長に報告しなければならぬ。

第六條 館長は毎年度の事業成績を翌年四月三十日までに教育局長に報告しなければならぬ。

第七條 この規程に定めるものを除いては都廳中處務細則を準用する。

附則

第八條 この規程は、昭和二十二年四月一日から、これを施行する。

第九條 この規程施行の際、現に東京都美術館に勤務する者で、別に辭令を發せられないときは、該美術館に勤務を命ぜられたものとする。

東京都規則第十一號

東京都美術館顧問及び參與規程を、次のように定める。

昭和二十二年三月二十九日

東京都長官 飯沼 一省

第一條 東京都美術館顧問（以下館という）に顧問及び參與各若干人を置く。都長官がこれを委嘱する。

第二條 參與の任期は二年とし、再任を妨げない。

第三條 顧問及び參與は館の運営について館長の諮問に應ずる。

第四條 館に常任參與若干人を置くことができる。參與の中から都長官がこれを委嘱する。

附則

この規則は、昭和二十二年四月一日からこれを施行する。

東京都令第二十一號

大正十五年三月東京「府」令第三十三號

東京「府」美術館職制はこれを廢止する

昭和二十二年四月一日

東京都長官 安井誠一郎

東京都美術館使用條例

昭和二十三年二月七日

東京都條例第十五號一部改正  
昭和二十一年十月八日  
東京都條例第四〇號

第一條 東京都美術館（以下館と稱する）は、次の目的を有する者にこの條例によつて使用せしめる。

一 美術についての創作の展覧

二 新古美術品の陳列

三 その他美術についての事業

四 前三號の目的のため館を使用しようとする者に對する館の貸與

館長は教育局長の命を受けて館務を總理する。

次長は二級事務官又は二級主事若しくは二級主事又は嘱託をこれに充てる都長官がこれを命ずる。

館長は二級事務官又は二級主事の中から都長官がこれを命ずる。館長の指揮を受けて館務を掌理し、所屬職員を指揮監督する。

職員は教育局員の中から教育局長がこれを配屬する。

職員は上司の命を受けてその職務に従事する。

第四條 館長に事故あるときは次長がその職務を代理する。

第五條 館長は別に定めるものを除いて左の事項を専決する。

一 館務に關し職名又は館名で文書の往復すること。

二 職員に進退に關し具申すること。

第一條 東京都美術館（以下館という）の掌理事項は左の通りである。

美術觀覽施設

昭和二十二年三月二十九日

東京都長官 安井誠一郎

第一條 東京都美術館（以下館という）の掌理事項は左の通りである。

美術觀覽施設

昭和二十二年三月二十九日

東京都長官 安井誠一郎

第一條 東京都美術館（以下館という）の掌理事項は左の通りである。

第十二條	館長において必要と認めるときは、使用者に對して臨機の指示をなすことができる。	一月、八月 十二月	二月、三月 六月、七月	四月、五月、九月 十月、十一月
第十二條	この條例施行に必要な細則は都長官が定めることができる。	一日につき		
附則		一七五〇圓	二二五〇圓	二七五〇圓
	全館（三十一室以上使用の場合）	九二五〇圓	一二五〇圓	一六二五〇圓
	一階全部（彫刻地階陳列室を除く）	七五〇圓	一〇七五圓	一四二五圓
	本館全館（地階室を除く）	二五〇圓	三七五圓	五二五圓
	彫刻室	五〇〇圓	七〇〇圓	九〇〇圓
第十三條	この條例は昭和二十三年一月			



同	三ヶ分區室	三七五円	五二五円	六七五円
同	二ヶ分區室	二五〇円	三五〇円	四五〇円
同	一ヶ分區室	一二五円	一七五円	二二五円
別館第一階全部	一ヶ分區室	三二五円	四二五円	六〇〇円
同	一ヶ分區室	一六五円	二一五円	三〇〇円
同	地階陳列室	二五〇円	三五〇円	四五〇円
同	分區室	一二五円	一七五円	二二五円

本館地階陳列室を使用する場合は次の使用料を徴収する。

全館 一日につき 二〇〇円  
分室 一日につき 一〇〇円

第一階分區室を使用する場合は、A室、B室、C室のいずれかを使用するときは一室について、四〇円を加えて徴収する彫刻室を分割して使用する場合は、全室との割合に應じて使用料を徴収する。

附 則

この規則は、昭和二十三年一月一日からこれを適用する。

(別記) 様式

東京都美術館使用申込書

一、名稱及び目的

二、期間

三、使用範圍

四、使用申込に際する責任者

五、納付期日(前納)

右の要項により使用承認願いたく申込ます。

昭和 年 月 日

會又は團體名

事務所所在地

美術觀覽施設

東京都美術館長

電話番號

顯出人

(代表者) 殿

恩賜京都博物館

京都市東山區大和大路通七條上ル 電話四四五四

明治廿二年五月宮内省達を以て圖書寮附屬博物館が廢止され、帝國博物館、帝國奈良博物館と同時に帝國京都博物館が設置された。廿五年工事に着手し廿八年竣功、三十年五月開館した。其の後官制改革により京都帝室博物館と改稱。大正十三年今上陛下の御成婚に際し思召を以て宮内省より京都市に下賜され、同年二月一日より恩賜京都博物館と改稱し、京都市の經營に屬する事となつた。

本館は京都其他各地社寺の國寶什寶及び個人所藏の優品を蒐集して之を受託陳列し、一般の觀覽に供している。陳列品を大別して歴史部、美術部、美術工藝部の三部とし、更に之を細分して左の如く部門を別けて居る。歴史部(一、圖書二古代遺品 三、祭祀宗教關係品 四、武器 五、禮式風俗關係品 六、貨幣、度量衡、信印) 美術部(一、繪畫 二、書

蹟 三、彫刻 四、建築) 美術工藝部(一、金屬品 二、窯製品 三、漆製品 四、織繡品 五、玉石甲角竹木品 六、紙革品 七、寫眞並圖繪。現在の列品點數三千三百三十四點。繪畫、文書、書蹟は毎月陳列替を行い、又年に數度特別展覽會又講演會等を開催する。

陳列館は九百十二坪、敷地總坪一萬六千二百坪、館内は十六の陳列室に區分され、他に中央室あり、講演會場に充ててゐる。

〔館長〕土居次義〔學藝委員〕加藤修、源豐宗、水町和三郎、明石國助、植中直右郎、上野照夫、神田松之助〔主事〕山田一江〔鑑査員〕梅津次郎、景山耕四郎、山根有三、松田恒次郎

(觀覽日) 一月五日より十二月二十五日迄。(觀覽料) 大人二圓、小人一圓(特別觀覽料) 一人一點三圓、團體(二十人以上) 大人一圓、小人五十錢

大禮記念京都美術館

京都市 左京區岡崎公園 電話六七〇〇、七〇二〇

今上陛下の御即位の大禮を慶祝記念し奉るため京都市に於て建設せるもので、昭和六年起工し、八年竣功、爾來同市並に同館主催の美術展覽會を開催する他一般美術團體に陳列室を貸與する。尙十五年七月より明治以降の新美術品の陳列を開始し、毎月陳列品替を行う。本館は二階建鐵筋混泥土造にして建坪千四百八坪延坪二千八百三十二坪。

〔評議員〕(日本畫) 石峰光瑤、福田平八郎、宇田荻郎、小野竹齋、堂本印象、中村大三郎、德岡神泉、水田竹園、金島桂華(洋畫) 須田國太郎、黒田重太郎、(彫塑) 松田尚之、工藝、清水六兵衛、楠部綱式、山鹿清華、番清省吾、岸本景春〔主事〕川村泰敏〔囑託〕岡部三郎

同館規則拔萃

第一條 本館ハ美術品及美術工藝品ヲ陳列シテ一般ノ觀覽に供シ其ノ他斯道奨ノ用ニ供スルヲ以テ目的トス

第一項 新美術品及美術工藝品ノ常設陳列ヲナス(茲ニ新美術品及美術工藝品トハ明治四十年以後ノ製作品トス)

第二項 臨時ニ特別美術展覽會ヲ開催シ美術品及美術工藝品ノ陳列ヲナス

第三項 一定ノ期間ニ限リ團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館陳列室ノ使用ヲ許可ス

第四項 右ノ外美術獎勵ノタメ美術品及美術工藝品ニ關スル參考資料ノ展觀ヲ爲シ美術關係圖書ノ閱讀機關ヲ設ケ又講演會映寫會等ヲ開ク

第二條 本館ハ前條ノ目的ヲ達スル爲本館ノ所藏ニ係ルモノ及官廳團體又ハ個人等ヨリ出品アリタルモノヲ陳列シテ一般ノ觀覽ニ供ス本館ハ一定ノ期間ヲ限リ團體又ハ個人ニ對シ美術品及美術工藝品陳列ノ爲本館ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ許可スルコトアルヘシ

第七條 本館ニ評議員若干人ヲ置ク、評議員ハ議見アル者ノ中ヨリ市長之ヲ委囑ス

第八條 評議員ハ重要ナル館務ニ關シ館長ノ諮問ニ應ジ又ハ意見ヲ開陳スルモ

ノトス

第十條 本館ハ一月五日ヨリ十二月二十  
五日迄毎日左ノ時間中間館スル但シ時  
宜ニ依リ之ヲ伸縮シ又ハ閉館スルコト  
アルヘシ

一月、二月、三月、十月、十一月、  
十二月、午前九時ヨリ午後四時マデ  
四月、五月、午前八時ヨリ午後四時  
マデ、六月、七月、八月、九月、午  
前八時ヨリ午後五時三十分マデ  
(目下、本館ハ進駐軍ニ接收セラレタル  
タメ閉館中)

## 大阪市立美術館

大阪市天王寺區茶臼山町天王寺公園内  
電 天王寺 六一〇〇・六一〇一

古美術品の常設展覧と一般美術展の展  
觀場としての設備を兼ね、昭和十一年五  
月落成。同月帝展作品の陳列を以て開館  
し、古美術の常設展覧は同年九月より正  
式に開館した。建物は鐵筋混凝土造、三  
階建て地階を加え、建坪一二二坪、延  
坪三八五坪。陳列室、展覽會室、講堂  
圖書閱覽室等より成り、陳列室は同館の  
蒐集保存に係る古美術品—繪畫、彫刻、  
美術工藝、書蹟、考古學資料等を常設展  
觀し、展覽會室及講堂は一般美術展並美  
術講演會、講習會等の開催希望者に貸館  
し、又圖書閱覽室に於て同館所蔵の圖書  
を規定に従ひ一般の閱覽に供する。昭和  
二十年三月以來閉館。終戦後は連合軍に  
接收されていたが昭和二十二年十月解除  
となり昭和二十三年一月十一日より再開

## 〔其他〕

池長美術館 神戸市葦合區熊内町一丁  
電葦合二四七二(現在不通) 昭和十

五年三月創立、南蠻美術展覧を趣旨とす  
るが現在ハ進駐軍接收のため開館不能。

〔館長〕池長孟〔開館期日〕四月、五月  
嚴島神社寶物館 廣島縣佐伯郡嚴島町  
國寶、寶物、貴重品等の保管並に展覧を  
主旨とする。〔館長〕野坂元定〔觀覽期  
日〕年中無休〔觀覽〕有料

茨城縣立美術館 茨城縣東茨城郡磯濱  
町八二三一 昭和二十二年五月開館。新  
憲法施行を記念し、大洗の常陽明治記念  
館の建物を美術館となし、蒐集品には、  
大觀、芋錢、僞僞、中村黎などの作品約  
六十點の他版畫工藝品等があり、常設陳  
列の外縣内の國寶、重美の特別展覧、等  
を催す。〔館長〕菊地五郎〔觀覽〕有料

演劇博物館 新宿區戸塚町一ノ六四七  
早稻田大學構内、電九段七七二、七七三  
明治二十八年五月十五日創立、本館は  
坪内逍遙博士を記念して作られたもので  
早稻田大學がその經營にあたり、現在研  
究資料の常設展と同時に演劇圖書館、又  
廣く社會文化機關として公開されている  
〔館長〕河竹繁俊〔事務主任〕印南高一  
〔開館〕毎月曜日、祭日の翌日を除く日  
の午前九時—午後四時迄(日曜、祭日連  
續の場合は第二日を休館とし、暑休、  
冬休は學校の校規に準ずる)〔公開料〕  
無料

大倉集古館 港區赤坂葵町三 電赤坂  
七八一 同館は大正六年大倉喜八郎の特  
志によつて成り、同氏集蔵の東洋及西歐  
の美術品を収めたものである。〔職員〕  
諸岡利雄、今村龍一〔觀覽期日〕四月一  
日—九月三十日(午前九時—四時)十月  
一日—翌三月卅一日(午前九時—午後三

時)月曜、祭日を除く。〔觀覽〕無料

大原美術館 岡山縣倉敷市新川町三一  
二ノ一 電倉敷五 昭和五年十一月五日  
創立、大原孫三郎の後援をうけた故洋畫  
家兒島虎次郎の記念として美術の研究發  
達に資するため、虎次郎作品並に其の蒐  
集に係る西洋繪畫、美術品等の保管陳列  
をなす。

〔理事長兼館長〕武内潔眞〔觀覽期日〕  
午前九時—午後四時迄毎日、但日曜、祭  
日を除く。〔觀覽料〕有料

橿原道場大和國史館 奈良縣畝傍町橿  
原神宮外苑、昭和十五年十一月十八日創  
立。電大和橿原四七八 大和を中心とす  
る上代の遺品(出土品遺物)文獻、圖表  
寫眞、模型等を蒐集展覧する。

〔館長〕甲佐知定〔主事〕小島貞三〔觀  
覽日〕四月一日—十月三十一日(午前八  
時—午後四時)十一月一日—翌三月三千  
一日(午前九時—四時)月曜、祭日、月  
末を除く。〔觀覽料〕有料

春日神社寶物館 奈良市春日町野町大字  
春日野一六〇 電奈良二三四 昭和九  
年九月創立。同社の寶物、文書等を昭和  
十年より一般の觀覽に供している。〔職  
員〕官司水谷川忠磨以下〔觀覽期日〕四  
月—十月(午前八時—四時)十一月—翌  
三月(午前九時—四時)〔觀覽料〕有料

金澤文庫 橫濱市磯子區金澤町二一七  
電金澤六九甲 昭和五年八月八日創立。  
史蹟金澤文庫に收蔵せる典籍、寶物を襲  
繼したもので、現在縣立金澤文庫として  
開館、中世文化史研究所として圖書、記  
錄館を公開している。〔文庫長〕熊原政  
男〔開庫期日〕四月—九月(午前八時—  
午後四時)十月—翌三月(午前九時—午

後四時)〔入庫料〕有料

鎌倉國寶館 鎌倉市雪ノ下一〇三四  
電鎌倉七五三 昭和三年四月創立。鎌倉  
附近社寺及個人の寄託を受け保管陳列し  
て一般に公開している。〔館長〕磯部利  
右衛門〔主事〕澁江二郎〔觀覽期日〕四  
月—九月(午前八時—午後五時)十月—  
翌三月(午前九時—午後四時)〔觀覽料〕  
有料

高野山靈寶館 和歌山縣伊都郡高野町  
電高野三二 大正九年九月創立。一山の  
寶物を保管し公衆に拜觀させている。  
〔館長〕堀田眞快〔拜觀〕春、夏、秋に  
於て一定時特別拜觀日を置く。五月十五  
日—廿一日、八月十五日—廿一日、十一  
月一日—七日〔拜觀料〕有料

聖德記念繪畫館 新宿區大番町明治神  
宮外苑、大正四年明治神宮御造營に際し  
廣く國民の獻金を募り外苑及び同繪畫館  
を建設し、之を神宮に獻納せんとする計  
畫が成り、明治神宮奉讃會に依つて大正  
十五年設立、明治天皇、昭憲皇太后御一代  
の主要なる御事蹟を表はした繪畫が陳列  
されている。昭和十九年十二月閉鎖され  
終戦後連合軍に接收されていたが解除さ  
れ昭和二十三年一月十日より再開。〔觀  
覽〕有料

## 東京美術學校陳列館

台東區上野公園  
東京美術學校内

同校は參考品を豊富に收蔵するをもつ  
て陳列館(本館、別館及び正木記念館)  
にその一部を常置陳列して公衆の參觀に  
供していたが、終戦後諸般の事情により  
休館している。但年數回本館に於て學校

主催の展覽會を開催しているほか一般にも本館を貸與して展覽會を行つてゐる。何れも入場無料である。

### 東京美術學校文庫

台東區上野公園  
東京美術學校内

文庫の閲覧施設は同校教職員並に生徒の爲に設けられたものであるから一般には公開されていない。但し特殊の研究に従事するもので同校教職員の紹介ある場合圖書を校長宛提出すれば閲覧を許可される。開館時間は日曜、祝祭日を除くの外毎日午前八時より午後四時迄。

### 東洋民族博物館

奈良縣生駒郡伏見村  
萬蒲池畔 電富雄六九 昭和三年十一月七日創立。世界各地各民族の原始藝術品の展覧をなす。〔職員〕九十九萬樹等

### 徳川美術館

名古屋市中區徳川町二丁目  
昭和六年十二月三日創立。財団法人尾張徳川黎明會經營にして古美術品の保存及び展覧をなす。

### 〔主任〕熊澤五六〔目下戰災修理中〕

### 財団法人 長尾美術館

〔本館〕鎌倉市鎌倉山 電鎌倉二〇三九  
〔分館〕世田谷區深澤町四ノ一三三  
電世田谷二四六・〇三三  
〔分館事務所〕千代田區丸の内九七九  
六階六四六・六四七號室  
電丸の内二九一・二九二

紀元二千六百年記念奉祀事業として長尾欽彌により計畫され、昭和二十一年五月設立認可された。同年七月第一回展覧會を行つ、其後連合軍に接收され一時休館したが、二十二年解除となつて二十三年四月再開した。春秋二季展覧を行つ。  
〔館長〕兒島喜久雄〔理事長〕長尾欽彌

〔理事〕柳宗悦、上野直昭、矢代幸雄  
〔參與〕本間順治、田澤坦、藤田經世、田山信郎、小山富士夫〔職員〕町田甲一  
南紀美術館 和歌山市小松原通三ノ一  
四 電和歌山一一九五 昭和十五年八月十四日 紀伊國に關する什寶及び美術品の蒐集、保存、陳列をなす。〔理事長〕三尾邦三〔主事〕依田太郎、小池良吉  
日本文藝館 目黒區駒場八六一、電池谷五九一 民藝品の蒐集並に當置陳列を行ひ、地方民藝の指導と開發に當るを目的とす。蒐集の事業は大正十五年に始められたが、昭和十一年十月大原孫三郎の寄附によりて建物完成し、一般公開となつた。〔常務理事〕柳宗悦、〔理事〕河井寛次郎、濱田庄司、武内潔眞〔監事〕山本爲三郎  
根津美術館 港區赤坂青山町六ノ一  
一五 電赤坂二五三六、二五八七、昭和十五年一月創立。根津嘉一郎の遺志により生前の蒐集になる東洋美術品を陳列展

## 美術家團體一覽 (五十音順)

### 〔ア行〕

青丹會 奈良市西ノ京町 藥師寺内  
電都跡二六  
昭和十五年創立、佛教文化を中心にして一般文化の智識涵養を計る。〔代表者〕藥師寺管主橋本凝胤。

秋田美術會〔綜合〕世田谷區代田一ノ七六六 福田豊四郎方  
昭和三年故平福百穂を中心として秋田縣出身の美術家により組織され年一回東京及び秋田市に於て展覽會を開催する。

芦屋市美術協會 芦屋市精道町九三、

觀している。〔館長〕河西豊太郎〔主事〕依田太郎  
白鶴美術館 兵庫縣武庫郡住吉村  
宇山田落合一五四五 電御影六〇〇一  
昭和九月五月創立。嘉納治兵衛多年の蒐集品を一般に公開されたものである。  
〔理事長〕嘉納治兵衛〔理事〕嘉納純  
〔開館〕昭和九年五月第一回公開以後隨時。

北方文化博物館 新潟縣中蒲原郡横越村澤海 電龜田一〇一 昭和二十年十月一日創立。越路伊藤家に傳世する什寶、典籍を文化博物館として一般に公開してゐるものである。〔理事會長〕伊藤文吉  
〔館長〕齋藤秀平〔觀覽〕有料  
本間美術館 山形縣酒田市濱畑町  
昭和二十二年六月一日創立、舊本間家別邸を使用せるもので東洋並に西美術品の展覧を行ふ。冬期は休館。〔館長〕本間順治〔副館長〕本間祐介〔觀覽料〕有料

芦屋市役所内  
芦屋市の美術文化昂揚のために美術運動を展開する事を目的とす。〔正會員〕伊藤繼郎、井上覺造、花屋勘兵衛、吉原治良、吉田博一、福山眉山、他十九名  
石崎光瑤畫塾〔日〕京都市左京區鹿ヶ谷寺ノ前町七八  
石崎光瑤を教主とし日本畫研究團體として昭和四年創立。〔會員〕今村豊信他十一名  
一水會〔洋〕練馬區豊玉北四ノ一五 田崎廣助方  
昭和十一年舊二科會員八名は「會場藝

術を非とし、技術を重んじ、高雅なる藝術を尊重することに於て一致」同會を創立した。同十二年十二月東京府美術館に第一回公募展を開催し、爾後毎年繼續〔會員〕石井柏亭、池部鈞、碓伊之助、田崎廣助、中村善策、中村琢二、山下新太郎、安井會馬、安宅虎雄、木下孝則、男、有島生馬、安宅虎雄、木下孝則、木下義謙、石川眞五郎、池谷寅一、一本萬壽三、池邊一郎、萩原實、林鶴雄、日塔笑子、二宮雪夫、本郷惇、堀忠義、富樫正雄、等々力己吉、富田通雄、千ヶ崎梯六、近岡善次郎 岡田行一、生沼文子、奥田郁太郎、大月源二、小野末、小野藤一郎、大兼實、尾澤勝朗、岡崎祇容、小栗精、大館健三、渡邊正一、河上一也、金子博信、狩野壽一、加藤一豊、片山芳樹、吉原義彦、高田誠、高橋庸男、瀧川太郎、田坂乾吉郎、谷内俊夫、高橋卯八、田邊朋子、田代光、高見耿太郎、多和與三、當岡卯三郎、鍋谷傳一郎、中川郷一郎、仲田菊代、名取明德、永井潔中如幸夫、野崎利喜雄、野村光司、能勢眞美、納富進、黒田外喜男、久野昌康、山中仁太郎、矢崎重信、矢野雄藏、眞下慶治、松村三冬、松田文雄、松田忠一、松田晃八、深澤紅子、福田新生、不破章小平、小竹義夫、近藤吾郎、出開美千子、荒谷直之介、朝倉力男、荒井一郎、坂本正春、齋藤大太郎、佐藤功茂、酒見恒平、木村辰彦、木下壽々子、源川雪、三角嘉壽男、三浦俊輔、新海覺雄、島あふひ、森寅雄、須山計一、鈴木良三、末松勇、菅沼金六、菅野矢一  
一審會〔洋〕富山縣東礪波郡東野尻村 苗加 川邊外治方



昭和十七年川邊外治他五名により創立  
會員相互の親睦、研究、地方美術の振興  
を計り、展覽會を催す。〔會員〕川邊外  
治、手塚義郎、丸山豊一他九名  
有象社（日）秋田市橋山虎ノ口新町、  
辻百壹方

日本畫を主とする研究團體として昭和  
二十一年創立、あわせて地方美術文化の  
昂揚を企圖す。〔委員〕高橋萬年、辻百  
壹、三浦完曜、勝平得之、佐々木素雲、  
信太金昌

越後工藝美術會 新潟縣中蒲原郡龜田  
町高山三三八 高井白陽方

新潟縣工藝美術の全面的指導育成及び  
會員の研究制作を目的として昭和十五年  
創立、年一回展覽會を開催。〔委員〕原  
直樹、小川英風、小野爲郎、龜倉蒲舟、  
吉田醇一郎、高井白陽、鶴卷三郎、佐藤  
陽雲、廣川松五郎、森三樹

大分縣美術協會（綜合）大分市荷揚町  
キムラ屋方 電大分一四九

大分縣美術界の向上發展を圖り昭和十  
二年創立された同會を二十一年改組再發  
足したもの。〔會長〕權藤種男〔委員〕  
武藤完一、他二十二名

大阪陶磁文化研究所 大阪市阿倍野區  
阿倍野筋ハノ一 保田憲三方

陶磁文化の研究、發展のため昭和十五  
年組織されたもの。講演會及び機關誌に  
「古陶磁」がある。〔所長〕保田憲三

大阪古文化會 大阪市西成區千本通三  
ノ三一 林野全孝方

古文化の啓蒙と研究を期し昭和二十二  
年、川勝政太郎等數名が同好の士を糾合  
し、大阪に於て發會された。〔主幹〕川  
勝政太郎〔會員〕六十名

旺玄會（洋）大田區市之倉二三七 沖  
田稔方

昭和十九年解散した牧野虎雄を主宰者  
とする旺玄社が廿一年新たに發足したも  
の。〔常任委員〕岩井彌一郎他十名〔委員〕  
千木良富士他二十一名。

岡山建築家協會 岡山市復興局建築課  
原田倫道方 電四二三五、四二三二

昭和二十一年創立。縣下在住の建築家  
を中心とした集り、建築文化研究と昂  
揚のため諸種の事業を行ふ。〔會長〕橋  
本富三郎〔會員〕四十五名。

〔方 行〕

攝原考古學研究所 奈良縣高市郡畝傍  
町大和國史館内

奈良縣文化課に屬し、考古學研究を目  
的とするため昭和十三年創立された。

〔會員〕末永雅雄他二十七名。

華敵美術協會 京都市上京區烏丸通上  
立賣 太田喜二郎方 電西陣五九六〇

昭和十一年創立した爾步會が十五年改  
稱されたもの。〔會員〕赤松麟作、太田  
喜二郎、新井完、吉田苞、角野判治郎、  
安藤義茂、伴庄兵衛、霜島之彦、他二十  
九名。

財團 翰林工藝研究所（工）中央區日本  
橋橫山町一〇ノ三、兩國ビル内

昭和二十年十月設立、筆紙墨硯の他一  
般文房具に關する文化的並に技術的研究  
を行い、その改善を圖り優等な工匠を養  
成し、以て翰林工藝の進歩發達に資する  
を以て目的とする。〔會長〕高村豐周

〔理事長〕清水孝平〔常務理事〕小野磐  
彦〔理事〕小池新二、福岡龍太郎、他三  
名。

菊池畫塾 京都市上京區平野島居前町

四二 電西陣一五二六

菊池聖月を臺主とする日本畫研究團體

〔臺頭〕宇田萩郎〔幹事〕山口玲燕  
京都櫻楓會（日）京都市左京區吉田下  
大路町六六 小田碧洋方

昭和二十年創立。日本畫研究所會〔會  
員〕富田容士等六名。

京都染織繡美術協會 京都市左京區岡  
崎北御所町三七 山鹿清華方 電上八一二

昭和二年五月染織繡美術工藝研究會  
（綵工會）を創立、昭和十五舊綵工會を  
解消新たに改名して發足、染織繡藝術の  
昂揚を目的とし、製作研究のため諸種の  
事業、展覽會等催す。〔會員〕山鹿清  
華、稻垣稔次郎、岩崎眞也、今西良夫、  
伊藤達平他三十七名。

京都獨立美術クラブ（洋）京都市中京  
區西ノ京中御門町四二 今井憲一方

昭和二十一年三月創立。京都在住の獨  
立展關係者の集つた會で、舊獨立美術京  
都研究所が發展的解消せるもの。〔顧問〕  
須田國太郎〔會員〕竹中三郎、今井憲一  
等二十六名。

熊本縣美術協會（綜合）熊本市出町一  
二〇 岡周末方

昭和廿一年六月創立。地方美術の發展  
と啓發を目的とした會。〔會員〕二十三名

現代工藝巨匠作品鑑賞會（工）台東區  
上野松坂屋内

藝術院會員の作品展示會にして毎年六  
月中旬開催〔會員〕香取秀眞、板谷波山  
清水龜藏、六角紫水、清水六和、海野清  
松田權六〔富本憲吉〕

現代彫塑院（彫）練馬區練馬南町二ノ  
三六三六 高澤七郎方 電練馬三一七（呼）  
レアリズムを根底に彫刻の純粹性を確

立しよう昭和二十二年六月創立。〔會  
員〕後藤一彦、井手則雄、瀧川美一、山  
本民二、林勘五郎、久保孝雄、高澤七郎  
佐藤義重、綿引弘、石川岩雄、須田進吉  
現代美術作家協會（洋・工）大田區田  
園調布四ノ三三三 小林方 電田園調布  
三三八三

昭和二十一年十月創立。昭和十五年に  
發足せる扶桑會及十七年に開かれた新油  
繪協會の兩會を合同し創られたもの。

〔會員〕角浩他二十八名。

現實會（洋）練馬區練馬南町三ノ五四  
九七 岡本唐貴方

昭和二十一年五月創立。アクション、  
三科會、造型、日本フレンチリア美術作  
家同盟と進んできたメンバーが東西美術  
文化の全面交流による綜合レアリズムの  
確立を目指して結成したもの。〔會員〕  
岡本唐貴、市村三三三、高森捷三、山上  
嘉吉、矢部友衛、金野新一等。

財團 工藝學會（工）港區麻布三河台町  
二四 電赤坂一〇三四

昭和二十年九月設立、工藝の振興發達  
に寄與するを以て目的とし、工藝に關す  
る調査研究、出版、技術指導、試作研究  
機關の設置、展覽會、講演會、講習會の  
開催、その他の事業を行ふ。工藝學會誌  
工藝年鑑刊行、附屬工藝技術研究所を設  
置す。〔會長〕瀧澤秀雄〔専務理事〕西  
川友武

工藝鑲嵌會作品展（工）台東區上野松  
坂屋内

現代工藝家の作品展示會 毎年十一月  
開催〔會員〕高村豐周、河村靖山、内藤  
春治、加藤士郎、香取正彦、楠部彌式  
北原千鹿、北出塔次郎、大須賀喬、各務

鏡三、山脇洋二、廣川松五郎、山崎覺太郎、山鹿清華、堆朱楊成、飯塚環玕齊、吉田源十郎、高井白陽、番浦省吾

行動美術協會(洋) 世田谷區弦卷町一ノ二六ノ一 向井潤吉方 電世田谷五五六一

新生日本美術樹立のため論議よりも逞しい行動を、舊二科會の一派が昭和二十年十一月に創立したもの。〔會員〕

原覺太郎、榎倉省吾、向井潤吉、高井貞二、三芳梯吉、村田養史雄、田邊三重松田中忠雄、古塚新、小田卓二、田川寛一、伊藤久三郎、伊谷賢三、飯田清毅、坪内節太郎、難波香久三、福井勇

光風會(洋) 中野區江古田一ノ二三七 田村一男方

明治四十五年白馬會解散後、中澤弘光山本森之助、三宅克己、杉浦非水、岡野榮、小林鑑吉、跡見泰の七氏發起して創立、第一回展を同年六月上野竹之台陳列館に開催した。舊帝室系洋畫家の團體。

春季公募展を開く。〔會員〕石橋武治、井手宣通、伊藤應久、池上浩、伊藤梯三、伊藤四郎、岩船修三、伊藤鑑一、井上武服部亮英、橋口康雄、西山眞一、西村愿定、西尾善積、西村菊子、星野正三、遠山清、土佐林豊夫、土橋醇一、戸塚孝三郎、中條茂、岡田又三郎、小川智、大澤海藏、太田三郎、大河内信敬、緒方亮平

小田忠、斧山万次郎、小川博史、奥山堤渡邊武夫、和田香苗、和田清、河井清一、川端實、川合修二、梶原貫五、花嚴巖、栢森義、角野判治郎、笠井忠郎、金子德衛、吉田苞、米本一郎、田村一男、高木春太郎、高宮一榮、武内鶴之助、田中實一、反町博彦、高橋道雄、田邊穰、高光

一也、谷澤一郎、竹岡良太郎、相馬其一辻永、長原坦、中村研一、中澤弘光、中谷ミキ、中尾達、永田精二、名渡山愛順、内藤隼、村岡平藏、黒田頼綱、黒田久美子、熊澤欽三、山中清一郎、山下忠平、山口猛彦、山喜多二郎太、山崎伸象

山村孝太郎、山本彪一、柳濱俊雄、牧野司郎、松尾正己、益山雅樹、藤彦右衛門、藤本東一良、古屋浩藏、藤井芳子、藤江理三郎、小糸源太郎、小林眞二、小寺健吉、江藤純平、寺内万治郎、赤城泰舒、朝井閑右衛門、安達眞太郎、跡見泰、足立眞一郎、足代義郎、朝比奈文雄、有馬さとし、秋元松子、鮫島利久、符岡了一

阪倉宜陽、佐藤彪、櫻井悦、里見明正、櫻田精一、齊藤齊、清原重以知、鬼頭鍋三郎、木村八郎、幸島重雄、三宅克己、耳野卯三郎、南政善、水上信雄、南藤造三輪孝、溝江勘二、宮本恒平、清水良雄、白石隆一、市ノ木慶治、新道繁、白川一郎、島野重之、神保和幸、新保兵次郎、森山肇、森田元子、妹尾壽信、瀬戸千代三、須田勉太、鈴木榮二郎、杉村惇、鈴木三五郎、菅谷邦敏(工藝)大富隼男、巽勇、高田正二郎、田中芳郎、中上川蝶子、中田滿雄、染川鐵之助、辻光典、上野正之輔、山形駒太郎、坂本芙蓉、篠井欽治、森棟澄子、杉浦非水、中村俊介、中村肇一、上野誠郎、夏井清

國畫會(洋、工、寫眞) 杉並區清水町七三 宮田重雄方

大正七年一月設立された國畫創作協會の第五回展に於て、梅原龍三郎、川島理一郎の兩名、及び富本憲吉、金子九平次を迎えて第二部と彫刻・工藝部を置いた。その後昭和三年第一部解消となり、

第二部及び彫刻・工藝部は國畫會と改稱舊會員に高村光太郎、椿貞雄、河野通勢の三名が加わり翌四年「第四回國畫會展」として公募の上開催し、現在に至つたもの。〔會員〕(洋)梅原龍三郎、青山義雄、伊藤藤、池部貞喜、宇部山哲平、仰木ゲルト、大森啓助、大谷房吉、大淵武夫、香月泰男、柏木俊一、川口軌外、河野通勢、喜多村知、國松登、熊谷九壽、久保守、庫田登、小松邦報、澤野岩太郎、佐藤哲三、瀧川榮志、鳥ゆきこ、杉本健吉、曾宮一念、立石鐵二、辻愛造、椿貞雄、土田文雄、中村博、中村好安、橋本三郎、長谷川春子、原精一、平塚運一、二貝利郎、益田義信、馬越耕太郎、眞垣武勝、松木滿史、宮坂勝、宮田重雄、村上巖、山村誠、山脇信徳、山崎隆夫、養田つや子、(版)畦地梅太郎、恩地孝四郎、川上澄生、川西英、下澤木鉢郎、關野準一郎、平塚運一、ブブノ、前田政雄、棟方忠功、(寫)北角玄三、木村伊兵衛、中山岩太、長濱慶三、上田恒次、及川全三、(工)河井寛次郎、川上澄生、若澤鍾介、鈴木繁男、外村吉之介、濱田庄司、廣木長子、船木道忠、柳宗悦、柳悦孝、吉田璋也

國際觀光美術協會 新宿區下落合一ノ五四〇 大久保作次郎方 電落合長崎四三九二

昭和二十一年九月創立、觀光地に對し美術家として研究すると同時に新しい觀光地の發見紹介に努め、地方觀光地協會と協力し風景、風俗などの美觀助長に努める。〔會員〕古嶋松之助、石井柏亭、石川寅治、三上知治、三宅克己、中澤弘光、大久保作次郎、奥瀬英三、鶴田吾郎、和田英作、和田香苗

國立博物館談話會 台東區上野公園國立博物館事業課内 電下谷〇〇六、一八〇〇、一九九〇

昭和二十一年九月創立、美術の鑑賞と研究を通じ、美術普及を目的とする。毎月一回例会、春秋二回に大會を開き、美術講演會、講習會、鑑賞會、懇談會、社寺などにおいて現地講演、個人蒐集品の特別展覧等を行う。

黑羊會(洋) 世田谷區玉川上野毛町三五六 多摩造形藝術專門學校内 電玉川五六

昭和二十二年五月創立。洋畫研究團體〔會員〕内山孝、澤田孝平、反町博彦、村上洋一、山岡一哉

古美術談話會 鎌倉市雪ノ下、鎌倉國寶館内 電鎌倉七五三

昭和二十一年十一月創立。古美術に關する智識と趣味の普及をはかる。〔會員〕村田良策、香取任平、小山富士天、松下隆章、中村岳陵、瀧江二郎等

彩交會(日) 中央區日本橋三越内 三越主催になる日本畫展示會。〔會員〕奥村土牛、中村岳陵、山口蓬春、徳岡神泉、小野竹喬、福田平八郎

朔日會(綜合) 台東區谷中眞島町一ノ一 羽藤馬佐夫方

昭和十三年四月創立。〔會員〕羽藤馬佐夫、野地正記、木内廣、佐保武志、長坂陽雄、山本甚作、田邊竹次、鈴木監司、五月會(日) 中央區日本橋高島屋内、毎年五月展覽會開催。〔會員〕小林古徑、安田毅彦、前田青郎、奥村土牛、鎗木清方、福田平八郎、神原紫峰、菊池契

佐渡鑄金會(工・金) 新潟縣佐渡郡澤根町 本間琢齋方 電澤根二九

明治四十年五月創立。「會員」佐々木象堂、本間琢齋、眞藤玉眞、宮田藍堂、土屋宗益、市橋鷺山、池田逸堂、三浦研齋

珊々會(日) 中央區日本橋高島屋內 每年十二月開催。「會員」菊池契月、西山翠璋、上村松園、小杉放庵、結城素明、錦木清方

山南畫塾(日) 山形縣酒田市寺町一二 鈴木重藏方

昭和二十一年九月創立。「會員」菊池彰信、鈴木惣七、根上清助

七弦會(日) 中央區日本橋三越內 三越主催にて展覽會を開く。「會員」小林古徑、前田青邨、錦木清方、安田肇彦、菊池契月

七松會日本畫展(日) 台東區上野松坂屋內、每年三月下旬開催。「會員」上村松園、西山翠璋、堂本印象、菊池契月、小野竹齋、福田平八郎、宇田萩邨

霜月會(日) 中央區日本橋高島屋內 每年十一月開催。「會員」徳岡神泉、奥村土牛、中村岳陵、金島桂華、山口蓬春、福田平八郎、矢野橋村、宇田萩邨、伊東深水

手工藝協會(工) 文京區關口町一 岡登貞治方

手工藝の普及發達をはかる。又「手工藝叢書」を發行。「會員」岡登貞治他

朱葉會(洋) 新宿區下落合二ノ六六七 吉田ふじを方 電落合長崎四三三七

大正七年九月創立。「會員」吉田ふじを、平岩夏子、秋元松子、土肥正枝、大久保爲世子、小川信子、龜高文子、瀨尾

みよ子、友田みね子、荒木政江、山田文子、木村光江、村井靜江、藤江志津、遠山陽子、小寺明子、青木純子、尾關梅子、三根孝子、榎本ゆり子

自由美術家協會(洋) 澁谷區代々木西原町九九四 森芳雄方

昭和十二年創立。純粹藝術精神と自由な發表形式の下に廣く藝術の場を開放しようとする在野畫家の團體。「會員」荒井龍男、江波戸一郎、堀内規次、井上長三郎、池田榮、小谷傳貞、小林良曹、村井正誠、松本志義、難波田龍起、長野誠之助、周襄吉、谷澤秀晃、田中健二、寺田球根、矢橋六郎、山田光春、朝妻治郎、長谷川三郎、林田重正、今村寅士、小松義雄、勝田寛一、小山田二郎、森芳雄、松本竣介、中村眞、小川孝子、末松正樹、鶴岡政男、富山妙子、植木茂、山口薫、吉井忠、麻生三郎、濱口陽三、今井繁三郎、糸園和三郎、北尾淳一郎、北垣正樹、川島千鶴子、三井滋夫、森啓、中山次郎、藏、清水七太郎、鈴木重太郎、登崎太三郎、富成忠夫、和田喜一、山口正城、岡田猛

春光會(日) 中央區銀座、松阪屋主催 每年三月展覽會開催。「會員」横山大觀、川合玉堂、小林古徑、安田肇彦、前田青邨、奥村土牛、其の他

春光會(日) 山形市鐵砲町實光院內 高島祥光方

昭和廿一年四月創立。「會員」高島祥光、村山紅果、伊藤玉潔、今田青安、浦山蘭石、渡邊觀鳳、武田延龍、島村竹園、佐藤風山

春草會(日・洋) 名古屋市中區長坂町五ノ一 田中稔方

昭和二十一年十一月創立。女性のみによる繪畫研究團體。「會員」横山余福、横山萬里子、田中八重子、古内徑子、魚津澄子、栗田英子、加藤雪子、三根孝子、藤田靜子、中村紀子

春陽會(洋) 杉並區和田本町八三二、木村莊八方 電中野二二四七

大正九年秋日本美術院元洋畫部を脱退した小杉未醒、山本鼎、倉田白洋、森田恒友、長谷川昇、足立源一郎の六名は同年十一月、新歸朝の梅原龍三郎を加え更に九名の客員を迎えて同會を創立「春陽會は從來屢々見たる如き既成會への社會的對抗として興らず、單なる藝術家の心を以て因縁相熟したるものです」と聲明した。翌年五月上野竹之台陣列館に第一回展を開き、爾後毎年春季に公募展を開催し、又東京開催後大阪、名古屋等に地方展を催している。昭和二十三年第二十六回展開催。尙春陽會研究所は昭和四十年開設、同十二年迄続いた。「會員」石井鶴三、岩田榮之助、伊藤慶之助、伊川鷹治、長谷川潔、新沼杏一、岡鹿之助、小穴隆一、小栗哲郎、鬼塚金華、若山爲三、加山四郎、川端彌之助、横堀角次郎、吉田達磨、高田力藏、田中壽太郎、田川勤次、土屋義郎、中谷泰、南城一夫、上野春香、國盛義篤、倉田三郎、栗田雄、前田藤四郎、藤野龍、小杉放庵、小林德三郎、遠藤典太、足立源一郎、木村莊八、水谷清、南大路一、三雲祥之助、角南松生

職場美術協議會(綜) 千代田區有樂町三ノ一 東京都廳文化會館內 電丸の内五一―五二一

昭和二十二年三月創立。東京地方の會社、工場、官公署、市民團體、農民團體居住地等につくられた勤勞者の美術發展を目的とした團體で第一回展を二十二年六月東京都美術館で行った。「參加團體」東芝小向勞組、日立製作所龜有工場、東洋通信、日立龜戸工場、沖電氣品川分會、石川島勞組、日本電氣玉川工場、東寶攝影所、國鐵東京支部本局、小西六澁橋工場、全電工、明電舎、日映演東寶丸の内東芝堀川町、第一生命、日本化學、王子製藥、小西六日野工場、東京都廳、日本交通交社、全國車輛汽車會社、關東配電木挽町、三菱重工東京機器、全印刷局、日本電氣三田分會、日立戸塚、日本ビクタ1、富士電氣東京從組、日立本店、富士産業三鷹工場、わかもと勞組、橋本鐵工日本車輛廠支部、日本マンガ映畫、新協劇團、産別會議、全逓芝支部各美術サークル

女流畫家協會(洋) 目黒區中根町一七二 河村俊子方

昭和二十二年創立された女流畫家の集り「會員」三岸節子、桂ユキ子、仲田菊代、遠山陽子、中谷ミキ、藤川榮子、櫻井濱江、櫻井悦、佐伯米子、森田元子

新橋造社(綜合) 北多摩郡小金井町四西八 三村英一方

昭和十年六月構造社有志幹事會は繪畫部の解消を決議したが同部は翌月構造社總會を招集彫刻部會員を退會者なりとして決議し、同年十一月第九回構造社繪畫展を公募の上開催した。十一年七月彫塑團體十七會の加盟により名を新構造社と改稱、更に工藝部を新設した。昭和十九年一時解消、昭和二十一年四月復活。「會員」市川兼治、石崎勝三郎、本目勇



市、徳山魏、岡田洋采、大野元明、寺中靖直、スエタケタツ、三村英一、改井徳寛、深澤四郎、多比羅榮一、高野直一、内島親晴、宇佐美弘業、山本好信、北澤博生、島太郎、三枝惣太郎、清浦清風、小口一郎、小祝嘉一郎

**新興美術院**(日・工) 世田谷區世田谷四ノ六八二 小林三季方 電世田谷四四六七(呼)

青年日本畫家及工藝家の啓發指導を目的とし昭和十二年九月創立された。「會員」小林三季、岡田魚降森、並木瑞穂、吉田欽之助、眞島元枝、樋口英雄、三好光志、重松謙吉、櫻井霞洞、宮坂房衛

**新梢會**(日) 中央區銀座、松坂屋主催「會員」羽石光志、小谷津任牛、江崎孝坪、須田珙中、眞野滿、加藤海綾、鈴木島心、上垣候島、岩橋永遠、片岡球子、岡本彌壽子、横田仙草、木下春、吉川朝衣花岡朝生、南摩朱鳥、山島一鶴、中島深守屋正

**新匠美術工藝會**(工) 北區中里町三三六 矢部方 電駒込九一九

舊國畫會工藝部全會員に會友及山脇、小合の二新會員を加え昭和二十二年一月新たに獨自なる立場により發足せるもの

「會員」稻垣稔次郎、北出塔次郎、鈴木清、富本憲吉、徳力孫三郎、内藤四郎、平野利太郎、福田力三郎、古山英司、増田三男、森一正、山永光甫、山脇洋二、山田詰、矢部連光、小合友之助

**新樹會**(洋) 台東區谷中清水町三 大河内信敬方 電下谷一八八七

朝井閑右衛門、南政善、鈴木榮二郎、須田勉太

**新樹社**(日) 大阪市旭區森小路町六ノ六九 竹内方

昭和十六年創立、自由な研究團體にして會員は新樹社以外の展覽會にも出品は自由である。昭和二十三年六月心齋橋大丸に於て第四回展を開催。「顧問」福岡青嵐「委員」是永學秀、福富雷章「社人」入江臥水、竹内赤明、五十澄子元、水野繁、木田白遠、白屋ヨキ、近藤青樹、塩谷兵之助、木田双樹、山岡湖岳外「主幹」竹内無憂樹

**新生會**(日) 山形縣最上郡新庄町十日町二六六 加藤幸次郎方 電新庄四五五

昭和二十年十月創立。山形縣在住の日本畫家を以て組織、地方文化の昂揚につとむ。「名譽會長」檜岡徹「會長」小早川清「委員」石山太柏、湯原柳畝、栗原天眞、戸耕耕古、伊藤王淡、加藤幸次郎五十嵐十郎

**新作派協會**(洋) 世田谷區赤堤町一ノ二三四 柳原義達方

昭和十一年七月、第二部會が文展に參加するに及び、從來「帝院」の獨立、帝展の解消を主張し來れる猪熊弦一郎、内田巖、佐藤敏、中西利雄、小磯良平、三田康の六名は同會を離脱、脇田和、伊勢正義、鈴木誠の三名とともに同會を設立

同十四年七月國畫會の彫刻部と合同した。二十二年第十回展を東京都美術館に於て開催す。「會員」伊勢正義、佐藤敬本郷新、猪熊弦一郎、坂井範一、早川魏一郎、荻須高德、三田康、舟越保武、脇田和、三岸節子、柳原義達、竹谷富士雄鈴木誠、明田川孝、中西利雄、伊藤繼郎

菊池一雄、内田巖、今村俊大、山内壯天小磯良平、小松益喜、吉田芳夫、佐藤忠良

**新生派藝術家協會**(洋) 杉並區西荻窪二ノ七七 龍一之介方

中島飛行機内部の畫家によりつくりだした生産藝術家協會が終戦後改名發會したもの。「會員」齋藤森重、廣田勝夫、牧島省三、院田繁、龍一之介以下十名

**新泉會** 市川市大字市川四一三 藤野舜正方

昭和二十三年六月結成。「會員」富取風堂、加藤榮三、東山勉夷、新保兵太郎大須賀力、藤野舜正、信田洋、佐藤陽雲

**晨泉社**(日) 浦和市岸町三ノ二〇 宮正

昭和二十三年春創立、伊東深水、兒玉希望、野田九市の門人による日本畫研究團體。「會員」伊東萬燦、濱田台兒、奥田元宋、村松乙彦、植草實、開富正、朝倉攝

**晨島社**(日) 京都市上京區北野紅梅町三三ノ一 山口華楊方 電西陣一一一

昭和三年創立。西村五雲遺弟により組織する日本畫研究團體。「總務」山口華楊、西村卓三「幹事」河合健二「役員」奥村厚一、梶喜一、天野大虹、猪田青以麻田辨次、谷野圭一「會計」田之口青晃

**新東亞美術院**(綜合) 品川區二葉町二ノ四六七 牧野省三方

堀喜孝、古川枝旺

**新東北美術會**(綜合) 宮城縣仙台市土樋八五 宇野松仙方 電仙台九一四(呼)

昭和二十一年九月創立。「會長」長一力次郎「會員」七十四名

**新日本美術家協會**(綜合) 大田區蓮沼町一〇七 昭和二十一年十二月創立。

「評議員兼審查員」矢澤鼓月、寺内萬治郎、清水多嘉示、堅山南風、吉村忠夫、西澤笛歌、望月春江、吉岡堅二、江崎孝坪、橋田永芳、東郷青兒、木下孝則、中山巖、福澤一綱、内田巖、向井潤吉、青山義雄、村井正誠、西本白鳥、中村直人古賀忠雄、圓錫勝二、長坂孝三

**水彩聯盟**(水) 葛飾區新宿三ノ八四一 小堀方

水彩畫の向上と發達を旨指して昭和十五年四月創立。「會員」荒谷直之介、春日部たすく、小堀進、長澤昇、荻野康兒上田哲農、古川弘、海老原省象、山本彪一

**水明會**(日) 中央區日本橋三越内、三越主催にて展覽會を開く。「會員」在關西諸家

**青甲會**(洋) 和歌山市和歌浦町七二〇 楠本峻土方

昭和二十一年三月創立「會員」中村善種、齋田武夫、木下克己、楠本俊士

**青甲社**(日) 京都市東山區東大路西入西山翠嶂方 電祇園一六八四

青美會、洋 富山縣高岡市桐ノ木町八二 高倉一二方 電高岡一五八八

昭和二十一年十一月創立。〔會長〕堀健治〔副會長〕上野久哉、銀島豊朝〔會員〕八名

西部美術協會(綜合) 福岡市西日本新聞社内 電西四〇〇一

昭和二十一年十月創立。〔會員〕坂本繁二郎、池上丁一、吉田達磨、吉井淳二、藤崎貞、海老原喜之助、赤星孝、青木壽高、田力藏、安部治郎吉、宗像逸郎、宇治山哲平、山村秀一、山田榮二、光安浩行、木下邦子、石田耕古、上田宇三郎、松尾晃華、岸田勉、松永冠山、富永朝堂、豊田勝秋、松本佩山、龜井未樂

青龍社(日) 大田區新井宿四ノ一〇五三 電大森三二一

昭和三年川端龍子日本美術院を退するに及び龍子及び其職員の制作發表機關として翌四年六月創立、その年の秋第一回展を東京府美術館に於て開催し、趣意として健剛なる會場藝術の樹立を唱える。尙同會は戰時中も都心に於て展覽會を開催在野の主旨を明瞭にすべく官展には參加しない。〔社人〕川端龍子、坂口一草、加納三樂、福岡青嵐、山崎豊、市野享、安西啓明

攝河泉文化研究會 大阪府泉北郡取石村綾井 專稱寺内

昭和二十一年七月創立。〔會員〕井川定慶等三百五十名

前衛美術會(綜) 杉並區荏荏二ノ一八七

勤勞大衆の文化的向上を基調として昭和二十二年四月創立する。〔會員〕(彫刻)鈴木賢二、入江弘、井手則雄(油繪)

山下菊二、赤松俊子、糸園和三郎、本島宏一、菅野暢、大塚睦、新居廣治、尾藤豊、小川廣、箕田源二郎(日本畫) 丸木位里、菊地美之助、濱崎左愛子(其他六〇名)

全日本圖案保護連盟(工・圖) 中央區木挽町六ノ三、日本貿易館内

昭和二十二年六月設立。生産に必要な圖案並に圖案家の登録及びその管理を行つて工藝圖案の保護指導を爲し、會員相互の利益を擁護すると共に我國工藝産業並に圖案の發展に資し、輸出の振興に寄與することを目的とする。〔會長〕松村光啓〔副會長〕國井喜太郎

創元會(洋) 澁谷區伊達町八一、中野方

昭和十五年十二月創立。〔美術本來の精神に徹し、我國文化の向上發展に寄する〕主として日展系作家を會員とする。〔會員〕洗春海、飯島一、石塚三郎、牛島憲之、白井きよ子、内田一郎、榎戸庄衛、圓城寺昇、岡田一馬、岡村三夫、大山崎太郎、小野彦三郎、恩田孝徳、金澤重治、川口雄男、柏木治子、金田新治郎、川口四郎、河本一男、倉橋英男、慶松左武郎、小林邦二、坂本幹男、島崎政太郎、東海林廣、白井秀二、鈴木千久馬須田壽、田中繁吉、玉置弘三、高橋北修館慶一、手島貢、戸谷賀一、戸田郁郎、中野和高、西村計雄、西村保史郎、樋口一郎、廣本幸與九、福岡繁樹、深谷徹、藤橋正枝、古川昌一、三橋兄弟治、龍之助、山下大五郎、山野正、李石樵

創造美術(日) 都下小金井貫井二四三 山本丘人方 京都市中京區問町竹屋町上村松篁方

清新にして眞實なる作品を生み出さうと、日本畫壇の有力な中堅作家十三名が集まつて昭和二十三年一月結成した團體日展その他の既成團體と關係を斷ち、純在野精神で新しい日本畫の在り方を探る公募展を催す。〔同人〕橋本明治、奥村厚一、加藤榮三、吉岡堅二、高橋周榮、向井久萬、上村松篁、山本丘人、福田豊四郎、秋野不矩、澤宏毅、菊池隆志、廣田多津

双台社(洋) 杉並區阿佐ヶ谷四ノ三八七 岡田行一方

昭和十六年四月創立。石井柏亭に師事する畫家を以て組織する。〔會長〕石井柏亭〔會員〕赤城泰舒、荒谷直之介、岡田行一、下澤木鉢郎、龍川太郎、近岡善次郎、中川紀元、平塚運一、望月省三等百五名

〔文 行〕

第一美術協會(洋) 文京區高田豊川町六〇 石川重信方 電九段一二〇一

昭和四年二月創立。〔會員〕横山群、三國久、吉澤康三郎、石川重信、里越正二、松見吉彦、鈴木慶、松坂康、小島三郎、高橋亮、竹野谷仁重、佐野忠吉、長谷川富二郎、山田篤太郎、三室美晴、今井伴次郎、谷井喜三郎、宇田川榮三郎、高橋賢一郎、山口美勇

第二紀會(洋) 武藏野市吉祥寺二四〇五 栗原信方

舊二科會々員熊谷、黒田(重)、鍋井、正宗、宮本等が昭和二十年新な發足をした二科會とわかれ二十二年四月創立したもの。〔會員〕熊谷守一、黒田重太郎、栗原信、田村孝之介、鍋井克之、中川紀元、正宗得三郎、横井禮市、宮本三郎

大日美術院(日) 大阪府天王寺區勝山通一ノ二三九、青木大藥方

新日本畫創造のため昭和十三年五月創立。〔同人〕結城素明、青木大藥、常岡文龜

大同會(洋) 板橋區大谷口町七六五 電板橋二二〇一

昭和二十二年一月創立。〔會員〕岩間武平、市川晴丘、八角文一、新山草律、田邊莊鞠、上野良雄、宇津見正次、久保田魁、山本勘太郎、牧野大成、小林正路、遠藤國上、佐藤太清、坂倉半徑、據路經砂田直文、朝木良之助、大山忠作、大矢黃鶴、村松乙彦

太平洋畫會(洋) 練馬區練馬田柄町二ノ六三一 高橋虎之助方 電練馬北町三二

明治二十二年創立の明治美術會は同三十四年組織を一新し翌年一月太平洋畫展と改稱、第一回展を上野公園第五號館に開催した。同三十七年後進指導養成のため洋畫研究所を開設、昭和四年に太平洋美術學校と改稱したが、二十年戰災で焼失した。昭和二十三年第四十四回展開催〔會員〕淺井眞、相曾秀之助、青木純子、安西恒夫、江崎寛友、藤坂太郎、布施信太郎、布施佛次郎、堀進二、平尾良秀、平澤定治、早川芳彦、原本虎雄、堀淵、星野二彦、石川寅治、石川雅雄、石井柏亭、池田永一治、飯田實、井口勇、石井明、伊藤源右衛門、今里龍生、小泉秀松、小宮惣太郎、北島吾二平、木原二二、川村信雄、三上知治、松村巽、光安浩行、前田眞一、水戸敬之助、中谷健次、長島菊次郎、中野桂樹、能見三次、中田信、中田



恭一、橋原健三、奈良岡正夫、奥瀬英三、大沼靜藏、奥森太可志、佐々貴義雄、澤田晴廣、齋藤俊雄、澁谷榮太郎、佐藤三郎、清水敦次郎、鈴木隆、鈴木満、杉本宗一、鈴木寛司、關口文雄、高村眞夫、高橋虎之助、多々羅義雄、土橋忠義、田原輝夫、田所滿雄、佃武昭、玉井力三、戸津文雄、田村玄一郎、吉田博、吉田ふじを、吉田遠志、安田豊、吉原甲藏、大夢會(彫) 文京區音羽町六ノ二三、三木方

昭和十九年直土會解散後舊直土會のメンバーが相寄り新に昭和二十一年九月大夢會を作る。「會員」安達貫一、荒木琥子、石渡清三郎、石場清四郎、伊藤芳雄、今村輝久晃、江川治、大須賀力、片岡環木内五郎、北地莞爾、木下繁、木村石骨、倉澤興世、黒田嘉治、小松彌方、小林南龍、酒見恒、佐野文夫、杉浦藤太郎、白井謙二郎、建昌豊造、建昌惣彌、建昌嘉門、富岡泰、長島利雄、等

大輪藝院(日) 大田區田圃調布二ノ七〇九 弘中方 電田圃調布三九〇七 昭和十三年六月創立日本畫研究團體。「同人」小林彦三郎、楠泰白光、立脇泰山、佐々木順、諸永青晃  
高岡美術工藝協會(工) 富山縣高岡市商工獎勵館内 電高岡五四三  
昭和十九年七月創立。地方美術工藝の振興を圖る。「理事長」武田儀八郎、「幹事」柳澤浩、中條豊治、穴藏俊雄、彼谷芳水、須賀松園、島芳春  
竹枝會(日) 京都市左京區北白川小倉町五〇 竹内四郎方  
明治二十三年故竹内栖鳳門下生を以て創立さる。「會員」西山翠峰、上村松園

三木翠山、小野竹喬、森月城、金島桂華、池田虹影、東原方僊、徳岡神泉、他二十四名  
鑄金家協會(工) 台東區谷中眞島町一 明治三十一年創立以來繼續せる東京鑄金會を解消昭和二十二年四月改めて鑄金家協會と改稱。鑄金藝術の振興を圖り展示會及び研究會の開催を行う。「委員長」高村豊周(常務委員)香取正彦、杉田禾堂、内藤春治、丸谷端堂、清水辰雄、外委員八名

梅會洋齋展(洋) 中央區西銀座七丁目三ノ五、資生堂美術部主催、責任者白川慶三、電話銀座七六四一—六  
「會員」和田英作、金山平三、川島理一郎、曾宮一念、梅原龍三郎、安井會太郎、藤田嗣治、須田國太郎  
梅會日本畫展(日) 中央區西銀座七丁目三ノ五 電話銀座七六四一—六 資生堂美術部主催、責任者、白川慶三  
「會員」徳岡神泉、川合玉堂、橋本清方、横山大觀、安田毅彦、前田青邨、福田平八郎、小林古徑、杉山寧  
丁亥會(日) 台東區上野松坂屋內 日本美術同人に依る日本畫展示會、毎年十一月中旬展覽會開催。「會員」横山大觀、小林古徑、安田毅彦、前田青邨、奥村土牛、中村岳陵、堅山南風、郷倉千靱、大智勝觀、富取風堂、中村貞以、太田聰雨、小倉遊龜、田中青坪、酒井三良、長野草風、筆谷等觀、新井勝利、北澤映月、小松均、小谷津任牛、眞道黎明

出羽美術俱樂部(日) 山形縣東村山郡出羽村大字漆山 加藤松溪方  
繪畫の研究を中心に地方文化の向上發

展を企圖す。昭和二十一年十月創立。  
「會員」十四名  
天童美術會(綜) 山形縣東村山郡天童町大字天童甲六四 川崎省三方  
郷土在住の美術家及愛好者により作られたもので、郷土における美術の向上と普及を目的とする。昭和二十一年八月創立。「會長」西澤芥山「委員」菅野圭文、新關白黎、秋葉鳥次郎、加藤松溪、佐藤正己、相澤兵助、川崎省三、工藤美彦、天平會 大阪市南區難波驛前大坂市立文化會館三階美術協會內  
佛教美術を中心とした日本美術愛好家の集り。昭和十八年五月創立。「會員」百名

東亞美術院(日) 北多摩郡小金井町前原一六五九 今福武雄方  
昭和十二年七月創立。主として邦畫の國內國外紹介、美術書の出版を企圖す。  
東丘社(日) 京都市東山區八坂東大路西八、電祇園一〇八八  
堂本印象主宰の畫塾で毎年展覽會及小品展を開催す。「代表者」三輪晃勢  
東光會(洋) 豊島區椎名町一ノ一八七 三 森田茂方  
昭和七年十月創立。「會員」齋藤與里、小早川篤四郎、佐藤一草、渡邊清三、岩下三四、園部晋生、小貫綾子、胡桃澤源人、平通武男、森田茂等五十五名  
陶交會(工) 中央區日本橋三越內  
關東諸窯の作家に依る發表會  
東西大家新作日本畫展(日) 中央區日本橋三越內  
「會員」横山大觀、川合玉堂外  
鑄々會(日) 世田谷區北澤三ノ一、大智方

昭和十七年七月創立。日本畫研究團體「會員」大智經之、加藤和夫、武田良三、山中雪人、近藤敬太郎、藤茂勇、毛利武彦、月岡榮吉  
童林社(洋・彫) 杉並區西高井戸一ノ一三三 赤津實方  
昭和六年六月創立。昭和六年度東京美術學校油繪科及彫刻科に入学の同期生によりて結成。昭和二十三年七月第十二回展を開催。會員三十九名  
讀畫會(日) 板橋區常盤台一ノ二九、西澤笛畝方 電板橋一二〇一  
荒木寛畝及十畝の門下を中心として組織す。明治四十一年三月創立。月次研究會、年一回公募展を開く。昭和二十三年六月第四十一回展開催。「委員」西澤笛畝、永田春水、木本大果、松久休光、龜割隆志、森白甫、朝井觀波、湯原柳畝、田口黃葵「會員」九八名  
獨立美術協會(洋) 台東區谷中初音町四ノ一七 島村三雄方 電駒込一二六二  
昭和六年一月二科會の兒島善三郎、里見勝藏、林重義等十一名及び三岸好太郎、福澤一郎、高島達四郎を發起人として創立。毎年春一回都美術館にて公募展を開催す。二十二年第十五回展開催。「會員」島村三雄、鈴木亞夫、居串佳一、熊谷登久平、菅野圭介、中村節也、樋口加六、林武、高島達四郎、野口彌太郎、富樫寅平、海老原喜之助、兒島善三郎、島海青見、小林和作、須田國太郎、中間册夫、青柳暢夫、鈴木保徳、菊地精一、藤岡一、小島善太郎、中山鏡、齋藤長三、石原眞一、松島一郎、島居敏文、田中佐一郎、今西中通、松島正人、山田榮二、齋藤求、小



出三郎

富山縣 術文化協會 富山市西中野三六六

昭和二十一年知事を會長として創立。美術藝能文化の研究指導並に普及獎勵を圖る。〔會員〕五十七名

〔ナ行〕

名古屋 術人アソシエーション 名古屋市中區長坂町五ノ一

美術と生活の一致、美術家の生活向上を趣旨として昭和二十一年一月創立。〔會員〕横山苑生、横山よね、野村榮、横井禮市、中野安治郎、市野長之介、魚津良吉、高井壽三郎、瀬尾退、加藤唐九郎、大江文象、高藤鎮夫、一之瀬廣太、野水信吉、伊奈重孝、濱一郎

奈良縣 國寶協會 奈良市登大路町奈良縣廳文化課古社寺技術室

奈良縣下に於ける國寶及び重要美術品の保存顯彰の徹底を期するため昭和二十二年一月創立されたもの。〔理事長〕關信太郎〔理事〕大東延篤、田中眞毅、松村實照、三崎良泉〔會員〕西大寺、藥師寺他五十五社寺

奈良縣 美術協會 奈良市春日野町、奈良縣立商工館内 電奈良二〇二八

昭和十五年十二月創立。〔委員〕〔日本畫〕乾勝二、西本壽城、立野雪齋、福島敏之、栗津魏三郎〔洋畫〕小野藤一郎、河上一也、中村義夫、間瀬謹平、坂元一男〔彫塑〕吉川政治、谷澤是樂、竹林薰

中西弘馨、寺瀬信一〔工藝〕井上清一、吉田包春、幸王好太郎、北村大通、朱北

蕉

南壽院〔日〕杉並區高圓寺一ノ三五、

荻田東嶺方 電中野三四三七

京都市上京區烏丸通上御靈前下ル 河野秋邨方 電西陣二七五五

南畫本然の精神に徹し新南畫の創造を企圖する。昭和二十一年五月創立。〔連絡委員〕荻田東嶺、戸田浩堂、隆旗篁岳、於保有明、橋田永芳、田岡春徑、福田浩湖〔以上東京〕奥本高子、渡瀬凌雲、河野秋邨、諸藤英世、橋徹州、里見米庵、

〔以上京都〕西岡都久路、稻村虹亭〔以上大阪〕河村孝軒〔九州〕片桐白登〔長野〕青木虹興〔和歌山〕〔同人〕八十九名

新潟縣 工藝協會〔工〕新潟市東中通一

新潟日報文化局 電新潟三七七〇

地方文化向上を企圖して昭和二十一年八月創立。〔會員〕高井白陽、小川英風、原直樹、鶴卷三郎、小野爲江、森三樹、龜倉清舟他九十名

新潟縣 彫塑家聯盟〔彫〕新潟市東中通一、新潟日報文化局内、電新潟三七七〇

昭和二十一年創立。〔會員〕羽下修二、渡邊徹、山内倉藏、山内敏雄、井口喜夫、柳澤清他三十五名

新潟縣 洋畫協會〔洋〕新潟市東中通一

新潟日報文化局内 電新潟三七七〇

昭和二十二年五月創立。〔會員〕安宅安五郎、高村眞夫、佐藤哲三郎、佐藤三郎、竹谷富士雄、佐藤吉五郎、丸山正三、岩瀬富士雄他百二十二名

新潟縣 畫協會〔洋〕新潟市秋川岸一

畫廊ラ・セーヌ内 電新潟二六七八

新潟出身及び在住の新進洋畫家を主として昭和二十二年三月發足したもの。〔會員〕竹谷富士雄、鳥居敏文、本間正三、丸山正三、井坂禮三、小杉義夫、藤卷盛邦、柳澤文雄、富樫寅平、佐藤吉五

郎、金子弦通、田中道久、遠藤保、關屋俊彦、宇佐美勝介

新潟縣 日本畫協會〔日〕新潟市東中通一

新潟日報文化局内 電新潟三七七〇

昭和二十二年十二月創立。〔幹事〕岩淵芳華、小島丹溪、中島万木、長井亮之、濱倉清光、長谷川秋一郎、齋藤千涯、片桐子衡、星野榮吉

日本 アヴァンギャルド美術家クラブ

中野區住吉町五八 モナミ内〔假〕純粹美術の製作、研究及び普及に専念する美術家をもつて組織され、各國アヴァンギャルド美術家との聯絡、交誼をはかる。昭和二十二年九月創立。〔代表員〕

植村鷹千代、江川和彦〔幹事〕阿部展久、江川和彦、古澤岩美、長谷川三郎、小松義雄、桂ユキ子、村井正誠、岡本太郎、瀧口修造、土屋幸夫、植村鷹千代、吉原治良、山口長男

日本 浮世繪協會 港區麻布市兵衛町二ノ一、國華社内 電赤坂一七五二

昭和十年九月浮世繪同好會として創立、爾後浮世繪及び日本版畫研究團體として發展、昭和十六年末機關誌浮世繪界を大和繪研究、會名を浮世繪協會と改めて現在に至る。〔會長〕淺野長武〔幹事長〕藤懸靜也〔幹事〕嵯峨宗重、近藤市太郎、吉田映二、築比地仲助

日本 建築學會 中央區銀座西三ノ一、二 電京橋一三三二、一三三八

建築學會として明治十九年四月創立され、同三十年七月建築學會、更に昭和二十一年十二月日本建築學會と改稱、建築技術者の發達をはかり建築に關する學術技術の進歩と建築事業の健全な發達を促すと共に廣く建築の面に於て社會の向上に

寄與せんとする。機關誌建築雜誌を出している。〔會長〕岸田日出刀〔副會長〕伊藤滋、坂靜雄〔會員〕一萬五千名

日本 工藝協會〔工〕目黒區富士見台一五六一 文展第四部の審査員及無鑑査級有志により海外紹介を目的として昭和二十一年三月創立された。〔會員〕北原千鹿、香取正彦、野口光彦、大須賀喬、内藤春治、堀柳女、信田洋、高村豐圓、廣川松五郎、鹿島壽藏、吉田源十郎、岸本景春、河村靖山、吉田醇一郎、木村雨山、楠野彌式、山崎登太郎、前大峰、磯井如眞、岩田藤七、番浦省吾、北出塔治郎、河村喜太郎

日本 工藝協會〔工〕中央區木挽町五ノ二、エタニツビル内

昭和二十一年九月設立。工藝關係者の和親協同研鑽相互扶助の下に、藝術と科學と良心的生産との相關融合により工藝の振興と新生面の開拓とに寄與するを以て目的とする。〔世話人〕水谷川忠磨、長谷川一、高井邦丸、杉本豊治、沼田一夫

日本 作家協會〔綜合〕杉並區井荻二ノ一、玉村方久斗方

昭和十八年一月創立。歷程美術協會、明朗美術聯盟、美術新協の三團體合流、在野畫壇の相互發展を圖つたもの。〔會員〕玉村方久斗、山岡良文、狩野晃行、芦川和光、東條光高、大久保實雄、石井玲一、野澤武美、圓山信一、白井保春、大野明山、高橋文雲、淺川藤治、武石壯美、五十嵐幸男、川村秀治、田中良、遠山靜雄、他四十一名

日本 手工業染織技術聯盟〔工・染・織〕中央區日本橋高島屋二階

昭和二十二年六月設立。技術保存のため染織の作家並に關係者の團體。  
〔會長〕團伊能〔專務理事〕野口眞造、廣部一郎〔常務理事〕松本喜久治、他四名〔監事〕廣川松五郎、山鹿清華、野口功造

**日本水彩畫會（水）** 世田谷區宇奈根町七九一、小山周次方

故天下藤次郎、故丸山晚霞、故河合新藏の三人の經營せる日本水彩畫會研究を大正二年四月、石井柏亭、石川欽一郎、故戸張孤雁等三十七名の發起に依り、改稱擴張して新に各派水彩畫家の綜合團體として設立せるもの。〔會員〕赤塚泰舒、荒木芳男、赤塚忠一、相澤光朗、荒木茂喜、別車博資、五島甚之助、平澤大暉、早川昇、不破章、橋口竹夫、星野正三、細島昇、藤江志津、林義勇、荻原實、本多信彦、平島武夫、藤田薫、石井柏亭、板倉賛治、石井鶴三、井上安男、石川達三、石川新一、飯島幹、板倉國臣、小山周次、小山良修、河上大二、草野米子、甲斐榮一郎、南薰造、眞野紀太郎、水野以文、望月省三、三宅克己、水木伸一、森寅雄、牧野正吉、水谷景、松本慎三、水平讓、村上鐵太郎、三上信次、三橋兄弟治、中澤弘光、中西利雄、野澤潤三郎

内藤秀因、野口健司、野村英夫、小原博司、恩田孝徳、岡田正二、岡崎祇容、大内察匠、白瀧幾之助、篠原新三、關晴風、十龜廣太郎、白山卓吉、齋藤大、繁野三郎、坂江重雄、齋藤求、瀧澤邦行、富田温一郎、富田通雄、佃政道、高山長一郎、竹内梅治郎、瀧澤清、千ヶ崎悌六、高木重雄、額谷繁夫、鳥井三郎、牛尾弘、漆畑廣作、渡邊義一、渡部百合子、渡邊文雄、渡邊隼、吉田豊、八木峻羊、山中仁太郎、山中不二夫、山崎政太郎、吉松眞司、山森元七

**日本染織美術協會（工・染）** 世田谷區上馬町一ノ六〇七、野口方

昭和二十一年九月設立。染織文化の發展及傳統染織技術の保存を目的とする。〔會長〕野口眞造〔幹事〕松本喜久治、比留間謙吾、野口功造、中村勝馬、道明新兵衛

**日本彫金會** 台東區谷中清水町五一五、飯田喜代鏡方

大正十年創立、日本全國の彫金作家を以て組織し、彫金作家の向上發展をはかる。〔會長〕清水龜藏〔委員長〕飯田喜代鏡、會員約二百名

**日本陶磁協會（工・陶）** 目黒區三谷町九六、佐藤進三方 電在原則二〇一八

昭和二十一年創立、陶磁研究及創作に專ら意を注ぎ、之を國際的に發揚する運動をなさんとする會である。尙陶磁に關する出版物及び機關誌「やきもの」が發行されている。〔會長〕團伊能〔理事長〕磯野信成〔常務理事〕伊東祐淳、滿岡忠成、佐藤進三、田邊加多丸

**日本版畫協會（版）** 杉並區東荻町八八電荻窪一四

大正七年六月創立の日本創作版畫協會が改組、昭和六年日本版畫協會として會長岡田三郎助の下に成立したもの。創作版畫の振興普及に努めている。昭和二十二年四月第十五回展開催。〔會長〕石井鶴三〔會員〕畦地梅太郎、稻垣知雄、恩地孝四郎、柿原俊男、齋藤清、佐々木孔下澤木鉢郎、關野準一郎、塚本哲、根本霞外、橋本興家、初山滋、平塚運一、前

田政雄、若山八十氏、渡邊省三、牛島健山田新一、棟方末華、代田恒夫、ブノワ、大田耕士、旭正秀、北岡文雄、清宮彬、加地春彦、山口源、石井了介、大岩義汪、小川龍彦、勝平得之、笠木實、川上澄生、岩島勉、川西英、川西祐三郎、笠松一夫、黒木貞雄、武田由平、武田新太郎、徳力富吉郎、中川雄太郎、中村仲藏、荻原吉二、根井良三、山林文子、守洞泰、前川千帆、武井武雄、朝井清、山口進、北澤收治、石崎重利、佐藤米次郎、古川龍生、伊藤一郎、井上豊久、大城貞夫、永盛資郎

**日本美術院（日・彫）** 台東區谷中上三崎町五二 電下谷二五一〇

明治三十一年十月、當時東京美術學校長を退いた岡倉覺三を盟主とし、橋本雅邦以下二十六名を正員として結成。「新時代に於ける東洋美術の維持並開發が創立に際しての主張であつた。同年十月第一回展を開催、研究所を下谷中初音町に設置して後進の養成に努め雑誌「日本美術」を發刊。同三十九年十二月に至り一時東京の研究所を撤廢、同人四名は岡倉覺三と共に常陸の五浦に退去し專念研鑽に努めたが、大正二年岡倉覺三病歿するに及び、直に院の再興を劃し新に院舎を谷中上三崎町に起し翌三年九月開院式を舉行、十月再興第一回展を開催した。再興に當つたのは横山久、下村觀山、木村武山、安田靉軒、今村紫紅、小杉未醒、辰澤延次郎、笹川種郎、齋藤隆三等で其の中實技者六名を以て同人とした。再興美術院には彫刻部並に洋畫部を設けたが洋畫部は大正九年小杉未醒、山本鼎、倉田白羊等の脱退と共に消滅し

た。毎年秋季に公募展を開き、又春季には内部の試作展を開く。大正十年米國クリブランド美術館の要請に應じ、同國主要都市六ヶ所に巡回展を開き、以降日本美術の海外紹介にも努めている。昭和十年帝院改組に際して、同人合議の上新帝院への参加を聲明し、横山大觀、安田靉軒、小林古徑、前田青邨、富田溪仙、平櫛田中、佐藤朝山、藤井浩祐が會員に就任した。現在藝術院會員としてこの他中村岳陵、石井鶴三を送っている。

〔同人〕横山大觀、安田靉軒、齋藤隆三、小林古徑、前田青邨、大智勝觀、平櫛田中、佐藤清藏、中村岳陵、筆谷等谷、長野草風、石井鶴三、保田龍門、眞道黎明、郷倉千靉、堅山南風、酒井三良、富取風堂、喜多武四郎、新海竹藏、大内青圃、奥村土牛、小倉遊龜、田中青坪、山本豊市、太田聰雨、中村貞以、中村直人、宮本重良、松原松造、村田徳次郎、關谷充新井勝利、北澤映月、辻晉堂、小谷津任牛、小松均

**日本美術會（綜合）** 世田谷區松原町四ノ一八六 永井潔方

民主的な美術文化の創造と普及を目的として昭和二十一年四月創立された。

〔常任委員〕内田巖、上野省策、本郷新、永井潔、入江弘、松山文雄、木村重夫、永見讓治、後藤禎二、杉本博、堀田清治、村雲大揆子、難波田龍起、村井正誠、井手則雄、田中義三、朝本良之助、岡本唐貴、高森捷三、佐田勝、大塚睦、江川和彦

**日本藝協會** 目黒區駒場八六一

電澁谷五九一 大正一五年四月設立、日本工藝文化の健全な發展を圖り、併せて世界文化に貢獻するを以て目的とし、調



査、研究、技術指導、出版、展覽會開催等の事業を行う。〔會長〕柳宗悅〔理事長〕大原總一郎〔理事〕河井寛次郎、濱田庄司、芹澤銑介、外村吉之介、柳悦孝、武内潔、壽岳文章、村岡景夫

日本民主美術協會 名古屋瑞穂區雁道町六ノ二 安藤方

昭和廿一年五月創立。愛知縣在住の作家を以て組織、年一回展覽會開催、昭和廿三年一月第三回展（會員展）を開催。

〔會員〕北川民次、山口光春、加藤秋夫、安藤幹衛、眞島建三、鈴木幸雄、坂野鐵一、伊藤十一、水野正信、伊藤且美、廣野白陵、堀江萬壽男、末永一夫、鳥居正之、杉山新樹、豊島行雄、中村春來、大口登、安部長昭、加藤孝一、高木紀賀、鈴木清、瀧本正男、石川新一

〔八行〕

柏舟社（日）京都市右京區御室小松野町二五

京都市立繪專校の同期出身者で故土田麥運に師事した者を以て組織する研究並に發表機關。昭和十三年十月設立。〔同人〕梅原藤坡、要樹平、林司馬、新貝盧舟、伊藤仁三郎

白日會（洋・刻）台東區谷中清水町六富田温一郎方

大正十三年春組織、毎年東京都美術館に於て春季展を開催。〔會員〕（繪畫部）中澤弘光、富田温一郎、大久保喜一、間部時雄、篠原薫、伊藤清永、荻野康兒、小堀進、渡部菊二、灰野文一郎、川村精一郎、島村三七雄、廣本了、山道榮助、古川弘、島田四郎、松平齊光、佐藤功、大石七風、川口榮、川島實、小島眞佐吉、福田義之助、渡部百合子、栗林丈、古郷

八郎、平松讓、内山又輔、岩月光金、内田豊、東理仁朗、大崎善生、佐野久、前林章司、松岡次賀、谷部正、五井開一、（彫刻部）吉田三郎、木村圭二、笹野惠三、岩崎良平、星野直弘、兒島正典、富田匠美、伊藤五百龜、坂本讓、坂本良武、坂上政美、伊奈重孝

白洋畫會（綜）富山縣高岡市中川

昭和二十一年十二月設立。高岡中學校卒業生其他關係者の作品發表機關。

〔會員〕有澤正義、池上洋吉、遠藤安雄、江守次郎、楠本繁、米谷綠郎、高長久俊、長井正一、西田武男、福井敏雄、藤田達弘、松井清保、和田利雄、山本直久

汎美術家協會（洋）大阪市阿倍野區萬代西一ノ二七 前田藤四郎方

昭和二十二年十一月第一回公募展開催〔會員〕藤井二郎、原精一、井口覺造、川西英、小田三郎、國盛義篤、前田藤四郎、松井正、田川勤次、山本敬輔、吉原治良

美術記者クラブ 千代田區日比谷、市政會館、共同通信社特信部内 電銀座二二二

昭和二十一年十一月創立。美術記者相互の親睦と連絡、美術界の向上發展に寄與するを目的とし美術關係ニュースの取材提供機關として日刊新聞通信放送關係美術擔當記者により組織されている。

〔幹事〕大村主計。平川富太郎、植村鷹千代、大竹正巳、牧田茂、高松喜八郎 美術教育會 板橋區常盤台一ノ二九 電板橋一〇一（事務局上野分室）台東區神吉町二 電淺草四九六四（大阪分室）大阪府布施市下小坂七〇九 電布施九〇一

昭和二十一年十一月、學校家庭一般社會に對する美術教育の普及徹底を目的として發足。〔理事長〕寺内万治郎〔理事〕奥村土牛、鍋井克之、清水多喜示、西澤笛、田近憲三、上田儀一〔監事〕末吉菊麿、中村正義

美術文化協會（綜合）豊島區長崎六ノ四一 米倉壽仁方

獨立、二科の前衛作家四十一名により昭和十四年五月創立。昭和二十二年内部の左翼作家を主體とする集團が思想上の意見の相違により分離し、前衛美術會となつた。我が國美術文化の在り方を構想し、具現することを以て目的とする。昭和二十二年五月第七回公募展開催。〔會員〕阿部展久、福澤一郎、古澤岩美、藤沼朝保、原田隆、北脇昇、小牧源太郎、國光興、内藤律一、小川原脩、大口登、杉全直、寺田政明、土屋常夫、多賀谷伊德、篠内正直、米倉壽仁、山本新藏、吉田幸雄、幸壽

美術エネスコ俱樂部（日）千代田區神田須田町一ノ一七、電神田三二七五

美術家相互の親睦と後進の指導育成を目的として昭和二十三年一月日本畫家により結成された團體である。〔役員〕伊東深水、野田九清、川崎小虎、兒玉希望、森白市〔相談役〕望月春江、矢澤鼓月、吉村忠夫、西澤笛、〔常任〕田岡春徑、木本大果、岩田正巳、服部有恒、荻田東嶺、岸浪百輝居、松本泰水、森村宜永、吉田登毅〔地方連絡幹事〕穴山勝堂、岩淵芳華、奥田元末、大貫鐵心、戸田浩清、根上富治、松浦滿

姫路美術協會（綜）姫路市鍛冶町一平田秀穂方 電姫路一〇六六

昭和二十一年九月創立。會員相互の研究、親睦を目的とする。〔委員〕平田秀穂、飯塚周悅、森崎伯靈、木村道治（日）飯田勇、尾田龍（洋）野村正（影）内海正三（工）上田勝信（寫）他會員七十名

廣島縣福山文化俱樂部 福山市東小學校内 電福山二二

美術藝能を主とする文化運動を目的として昭和十八年十一月設立。〔代表者〕田中卓志

廣島美術家聯盟 廣島市八丁堀福屋ビル五階

昭和二十一年三月設立。廣島縣下在住の若手美術家を以て組織し、會員の向上と郷土美術文化の昂揚發展を期し、展覽會、研究會等の事業を行う。〔代表者〕福井芳郎〔幹事〕大木茂他十名〔會員〕五十四名

福島美術院（日）郡山市清水台一二四 安藤重春方（電二一九）

昭和二十二年十月三十日福島縣在住の日本畫家を以て組織、春秋二期に展覽會を開催其他研究會、講演會を行う。〔顧問〕結城葉明、勝田蕉琴、藤懸靜也、中目元治〔委員〕佐藤金一郎、高坂青彩、阿部廣洲、飯塚栖園、大久保東洲、永山十志夫、猪卷清明、小野塚馨宇、安藤重春、〔幹事〕安藤重春

佛教美術研究會 大阪府中河内郡八尾町佐堂二四 香山次郎助方 昭和三十一年一月同好會員にて設立。古美術主として佛教美術の研究、遺品の調査、研究發表、講演會を行う。〔會長〕香山次郎助 平安美術院 京都市中京區四條柳馬場



上ル。

大正十年東京に創立。元美術日報社と稱した。各種美術展覧、講演、奨励、出版等を行ふ。機關誌「内外美工通信」旬刊發行〔會長〕白川朋吉〔副會長〕安藤正純〔顧問〕有馬忠三郎他四名〔理事長〕藤井石堂〔會員〕約一千名

碧朱會〔洋〕京都市中京區九太町通小川東入南側

昭和十四年十月井垣嘉平を中心として「フレンジュ會」を結成、昭和十九年二月改稱。毎年一乃至二回發表展開催。

〔會員〕井垣嘉平、入江信四郎、岡村米藏、奥山藤一、吉田晴彦、吉倉三郎、田上準雄、中村ユキ、中村三郎、楠見文雄、小西誠一郎、端野末吉、八木勇、鈴木昶、牧敬治郎、原野一衛

實樹社〔日〕山形縣東村郡天童町大字久野本五

働く人を中心とする日本畫研究會。昭和八年五月創立毎年秋季展を開く。

〔會員〕菅野圭文他十六名

黒心會日本畫展覽會〔日〕台東區上野松坂屋内

洋畫家による日本畫作品展示會にして毎年五月中旬開催〔會員〕石井鶴三、藤田嗣治、近藤浩一、中川一政、小杉放庵

### 〔マ行〕

眞赤土工藝會〔工〕江戸川區上一色六五三 長濱重太郎方

昭和十八年結成。工藝作家の啓蒙運動と一般大衆生活の美化を目的とす。〔會員〕岩澤庸徳、祝三郎、上野斌郎、中村妙子、長濱重太郎〔染色〕西村英夫、西村純一〔金工〕逸見良之助〔木彫〕織田

美 術 園 體 一 覽

慎一、竹内元之助〔彫金〕樗村大六〔刺繡〕唐杉榮四〔陶器〕山浦不俊、三木義榮、藤田喬平、三田村秀雄、村上久〔漆〕

明朗美術聯盟〔日〕練馬區練馬南町一ノ三四八九 狩野晃行方

昭和九年一月青龍社舊同人落合朗風、川口春波により結成。一八年二月歷程美術協會、美術新協と協力新發足す。二二年九月秋季展開催。〔同人〕狩野晃行、渡邊朗敬、東條光高、山下昌風、吉田錦穂

萌木會〔染〕港區芝二本榎西町三 小島直次郎方〔假事務所〕

染色の研究、製作、發表。〔會員〕芹澤銑介、岡村吉右衛門、大熊武男、渡邊禎夫、吉田悌三、高橋盛光、増田邦太郎、山川悦路、小山保家、小島惠次郎、五味幸雄、後藤清吉郎、坂和正春、廣本長子、森義利、關口信男

〔ヤ・ラ・ワ行〕

八幡市美術協會 八幡市役所公民課 電八幡八〇〇

昭和廿一年十二月創立。會員相互の親睦と美術文化の昂揚を圖る。〔會長〕山路肅大〔會員〕三十八名

山梨美術協會〔日・洋・工〕甲府市百石町、山梨日日新聞社内 電甲府四八三二

昭和四年甲斐美術會創立、昭和十二年一月改稱、山梨縣出身者及縣在住の美術人を以て組織し會員相互の研鑽と山梨美術文化の向上に資す。〔代表者〕河野良朝〔會員〕〔日本畫部〕大河内夜江、大河内山郷、渡邊綱雄、川手青郷、近藤浩一路、外十數名〔洋畫部〕高野眞美、土屋義郎、米倉壽仁、河野良朝、田中常太

郎、外十數名〔工藝部〕金田豊、雨宮靜軒

綠卷會〔洋〕杉並區東荻町六九 電荻窪四四三

昭和十四年二月創立、研究及其作品發表。毎年春期公募展を東京都美術館に於て開催。昭和二十三年七月第九回展開催。〔會員〕荒井一夫、内堀一男、荻原孝一、荻原晴雄、神津港人、小林三郎、後藤禎三、佐藤利平、田島長齡、中村博英、花摘幹夫、平井爲成、久光茂、水沼兼雄、村上誠

美術商一覽

東京美術商商業協同組合

京都美術俱樂部

東京都港區芝浦橋七ノ一二 株式會社 東京美術會館內（電話〇九八九、〇九九〇、〇九九一）  
京都市東山區新門前通梅本町

畫商一覽

東京美術商々業協同組合名簿（日本畫關係）

同組合名簿  
による

中央區寶町三ノ四（電橋一三三六） 合資會社三御堂代表社員	東京區同心町二五（電下谷二五〇〇）	中央區銀座五ノ一（電銀座〇七四四）	港區赤坂新町一ノ二（電赤坂〇七三八）	千代田區神田末廣町三九	台東區西馬門五六（電下谷〇五六九、〇七〇九）	港區芝西久保巴町四七（電芝〇九九六）	北區瀧野川中里町三八五 福岡聰夫方	港區芝神谷町二八	埼玉縣北足立郡戸田町下戸田一二三九 武田廣吉方 推古堂	中野區江古田四ノ一九四九 天寶堂	中央區銀座西六ノ四（電銀座七二六七）	世田區松原町三ノ一〇三四（電松澤三七二九）	港區芝西久保巴町八〇（電芝〇六五四）	同 芝西久保八幡町二五	江戶川區小岩町四ノ二〇一二（電九ノ内〇九二四） 合資會社萬恭堂代表	港區芝西久保巴町二一 道正方	文京區音羽町五ノ三（電九段三一八）	世田區區新町一ノ二三三 萬藤	中央區銀座西五ノ五（電銀座四九六七、七六一七） サクラ美術	台東區西馬門町三六（電下谷〇五七五、二五五八） 相澤	同 同（電同） 相澤	
石井 柳助	石田 貞吉	若上 虎吉	若島 春治	岩崎 彦亮	飯田 國太郎	飯田 勝郎	飯岡 正次	伊藤 一男	伊藤 信藏	伊藤 繁太	伊藤 喜代志	伊藤 臣一	伊波 富次郎	伊波 三代吉	稻垣 利恭	稻垣 一六	今川 長次郎	原 久	原 慶次郎	原田 吉藏	原田 正德	
澁谷區澁谷分町二九	新宿區諏訪町八二（電九段〇七四九）	品川區西戸越一ノ五八一（電在原三〇七二呼）	港區芝西久保巴町三八（電芝〇八二六）	中央區銀座六ノ二（電銀座〇八七八、二九二七） はまの屋	同 築地四ノ一（電築地一九六八） 丸八	杉並區上荻窪二ノ一一一	同 西田町一ノ四五八	台東區谷中三崎町四〇	港區芝西久保巴町一四	同 麻布市兵衛町三ノ四六二	中央區日本橋寄町三ノ四	文京區水川町四三三（電大塚二〇七六）	台東區池ノ端七軒町三七	熱海市和光園	葛飾區柴又町二ノ三三一	台東區西馬門町四一（電下谷三〇八八） 鎌倉市雪ノ下三四九（電鎌倉〇一四〇）	文京區駒込坂下町一四（電駒込一三八五） 丸五	山形縣西田川郡湯田川村駒大字藤澤 尾形空滿方	品川區上大崎二ノ五六八	港區芝公園五ノ一三（電芝〇六二〇）合資會社川分 代表社員	同 藤布森元町一ノ二七（電赤坂二〇四八） 清真堂	
林田 等	服部 榮治	八田 二郎	畑中 榮	濱野 觀	萩原 銀彌	大平 吉藏	橋本 俊男	二本木 松男	丹羽 忠一	西田 義男	堀口 磯吉	本多 薰	本田 一平	本阿彌 誠之	邊見 芳夫	戶田 豐次郎	近江 豐	大野 馨	大沼 政吉	大庭 己之	大久保 健二	大田 清造
千代田區神田駿河台二ノ五（電神田〇二六二）	品川區大井金子町五九一六	文京區龍岡町三三	板木市萬町三ノ四九九	中央區銀座西七ノ三（電銀座〇〇四一）	目黒區中根町二七四	文京區湯島天神町三ノ四（電下谷一八三四） 尚德堂	港區芝南佐久間町一ノ五〇（電銀座一九六九） 琴平屋	港區芝公園五號地一三（電芝一〇七五） 株式會社川部商會 取締役社長	大田區田園調布町二ノ二五一	台東區谷中清水町一九（電下谷〇九四七）	同 上野町二ノ一四（電下谷四八〇九）	港區芝公園五號地一三（芝一〇六七）	市川市平田五七	台東區田原町一ノ八	港區芝西久保巴町二〇	靜岡縣比方郡伊豆長岡町字長岡一三〇八 （電長岡一〇七二）	港區赤坂仲ノ町三（電吉祥寺二八〇一） 赤坂水戸幸	品川區北品川四ノ七八（電大崎四〇五一）	新宿區四谷一ノ一〇	熱海市田原町一四五（藤前）（電熱海〇二五三）	世田區區間本町五七三（電玉川一〇六六） 香風園	新宿區失來町八〇
萩原 安之助	荻野 宅敏	若林 惠	渡邊 政四郎	渡邊 正三	加藤 源助	加藤 德次	加賀澤 邦寧	川部 利郎	川邊 元	桂 進	茅野 福二	金森 三郎	片山 清彦	勝倉 源三郎	笠原 太藏	吉田 吉之助	吉田 孝太郎	吉田 泰次	吉田 武雄	吉川 久太郎	吉村 銳治	横井 勉

台東區北新町五九	採古堂	橫井 周三	世田谷區玉川泉澤町三ノ四(電田園調布三二六)	青泉堂	中川 清壽	日原區中根町二九〇(電幸場町四六六)	松永 善三郎
大田區北千束町六九三	松留	余田 喜一	中央區日本橋人形町一ノ七(電幸場町三七八)	長 島 清	長 島 清	千代田區神田須田町二ノ六(電浪花一〇三三)	松本 松之助
港區芝西久保巴町四二(電芝〇七二五)	米田 留治	米田 留治	神奈川縣二ノ宮七四六	長尾 文太郎	長尾 文太郎	文京區湯島天神町一ノ四五	松本 萬次郎
桐生市高砂町二四二	田山 利重	田山 利重	千代田區九段三ノ七	夏目 勝	夏目 勝	中央區京橋二ノ一(電京橋三〇五)	藤山 順吉
港區高輪南町五九 鈴木方	田村 善一	田村 善一	新宿區下落合四ノ二〇三八	永島 八月	永島 八月	同 銀座六ノ二ノ六	松井 英一
中野區上高田一ノ二四四	田村 善次	田村 善次	横濱市戸塚區戸塚町三八二	永堀 政利	永堀 政利	港區芝西久保巴町四一(電芝〇六四五)	牧野 清吉
港區芝西久保巴町四一(電芝〇六三三)	近善 秀秀	近善 秀秀	港區芝西久保巴町二〇(電芝〇〇一一)	永山 賢四郎	永山 賢四郎	中央區銀座五ノ一(電銀座二〇八〇)	檜野 辰藏
中央區寶町一ノ六	竹内 秀太郎	竹内 秀太郎	芝西久保巴町二〇(電芝二二五五)	南條 鐵四郎	南條 鐵四郎	豐島區長崎町五ノ一〇(電落合長崎二二一五)	古川 伊三郎
板木市地町三ノ五八〇(電板木〇三〇四)	竹内 高次郎	竹内 高次郎	世田谷區玉川泉澤町三ノ一六八	村瀬 勇次郎	村瀬 勇次郎	文京區湯島天神町二ノ三七(電下谷三三九)	藤城 銀太郎
港區芝公園五號地一三(電芝〇三三四)	高橋 清作	高橋 清作	港區芝西久保巴町一九(電芝〇七四八)	村上 寛治	村上 寛治	中央區京橋一ノ一	藤木 源次郎
千代田區區田町二ノ五七(電京橋七七〇四)	高野 友吉	高野 友吉	同 麻布今井町二	村田 憲司	村田 憲司	中野區橋場町四三	藤林 次郎
豐島區千早町一ノ四五	玉井 德造	玉井 德造	中央區日本橋江戶橋一ノ七	村松 兼雄	村松 兼雄	世田谷區馬山町三七三(電日本橋一五二四)	文 藏
港區芝西久保巴町二八(電芝〇二二四)	篠崎 好	篠崎 好	同 鎌倉市大町七四九(電鎌倉二六〇)	牛木 公平	牛木 公平	目黒區下目黒四ノ九八	小松 邦芳
中央區日本橋室町四ノ一(電日本橋一〇三七)	巽 忠春	巽 忠春	世田谷區代田一ノ三六四	浦田 喜市郎	浦田 喜市郎	文京區湯島天神町二ノ二七(電下谷一四〇七)	小林 一哉
同 京橋一ノ一	莊 英達	莊 英達	新宿區牛込區神戶町一六(電九段二二三)	野田 喜代一	野田 喜代一	同 合資會社一哉堂代表社員	小林 信次郎
千代田區神田須田町一ノ三	曾根 恒五郎	曾根 恒五郎	鎌倉區鎌倉町二五	組田 利之助	組田 利之助	同 豐島區椎名町四ノ二〇六九	小菅 秀雄
埼玉縣北足立郡藤町四ノ四九六六	塚田 友康	塚田 友康	千葉縣野田町中野台四〇五	工藤 勝衛	工藤 勝衛	同 中根岸町三三(電溝草〇五五九秋元方)	越谷 政七
港區芝公園五號地一三(電芝〇〇二〇)	塚田 虎勝	塚田 虎勝	港區芝西久保巴町四	久保 富義	久保 富義	同 中央區銀座二ノ一(電銀座〇八七〇)	江藤 清雄
中央區銀座西三ノ三	拓植 三郎	拓植 三郎	鎌倉市上高井戸一ノ五九	九十步 京一	九十步 京一	同 中央區銀座二ノ一(電銀座〇八七〇)	相川 貞三
太田區上池町二三(電荏原一五八八)	土屋 衛	土屋 衛	港區芝西久保巴町四四	黒田 精二	黒田 精二	同 杉並區天沼二ノ四六三(電秋葉西八四七井口方)	青山 義高
文京區三軒町七	中村 謙一	中村 謙一	港區芝西久保巴町四二	栗原 芳太郎	栗原 芳太郎	同 上秋葉一ノ三三ノ五	青山 泰藏
台東區西馬町一五(電下谷〇七二七太田方)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	阿部 文吉
文京區駒込千駄木町五〇(駒込〇九〇五)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 湯島天神町一ノ九一	荒木 三二
千代田區神田須田町三ノ三(電神田三三四)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
熱海市熱海二〇(電熱海〇五五四)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
北多摩郡三鷹町幸八七〇(電吉祥寺二八〇)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
港區芝西久保巴町四一(電芝〇七〇六)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
中央區銀座二ノ一(電京橋四二六〇)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
同 日本橋本町一ノ五	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
台東區池ノ端町二二(電下谷二五八八)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
文京區小石川香羽町五ノ二	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
中央區日本橋通三ノ五	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
台東區御徒町三ノ一九(電荏原〇六九三)	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二
港區赤坂福吉町二	中村 謙一	中村 謙一	熱海市東山原町一七〇〇	山口 富郎	山口 富郎	同 文京區湯島天神町二ノ五	荒木 三二



中央區日本橋區三ノ二(電茅場町〇八三三)	喜多勝二	港區芝二本橋一ノ一七	森下章治	中央區銀座西六ノ六
中央區池ノ端七軒町一六	君塚亮	中央區銀座西五ノ一日動ビル二階(電銀座七九三)	瀨津伊之助	(新通縣長岡市神田町二)
大田區入新井四ノ六七	目黒武次郎	台東區淺草公園五區三號(電淺草〇四一七)	關根信義	神奈川縣鎌倉市坂ノ下一〇九
中央區日本橋區三ノ一(電日本橋一五四)	三宅利右衛門	港區芝公園五號地一二(電芝〇九九〇呼)	關口定次	
中央區銀座四ノ四五	三宅久之助	同 芝草平町一三	鈴木榮之亮	【關西】
文京區駒込林町二六(電駒込〇四九、一〇五〇)	三輪豐照	千代田區神田龜住町一七	鈴木松太郎	大坂市東區北濱二ノ一七(電新町一三三九)
浦和市岸町五ノ一二六	三村和三郎	港區銀座布飯倉町一ノ一	鈴木正雄	大坂市東區東區中野町七三
中央區銀座八ノ四(電銀座三三五)三村商店	三村能雄	千葉縣津郡馬來田村戸國	鈴木謙一	同 北區豊島船大工町八
同 株式會社三村商店取組役社長	三村敬三	台東區上野町二ノ二	鈴木政三	同 北區豊島市伊勢町三四
同 日本橋區四ノ一(電日本橋一〇〇三)三溪洞	三谷幸造	中央區京橋三ノ四	杉江喜作	同 東區豊島市六號莊町一六五
同 (電同)	宮下嚴		諏訪喜之松	同 北區豊島市上二ノ二
世田谷區松原町二ノ五九四(電丸ノ内〇九二四)	水溪直吉	大田區調布堀町二ノ五九	伊井兼美	同 同甘根崎上二ノ二
台東區上根岸町八二	宮長八	港區芝田村町二ノ一五(電銀座二八二七)	石原龍一	同 兵庫縣西宮市灘地谷五二
港區銀座布飯倉町五三	義敬	(靜岡縣伊東市須美 暖春園前)	荻原安之助	同 東區銀座區柳御堂(電銀座二四二五)
千代田區三番町三	水崎信太郎	千代田區神田駿河台二ノ五ノ四	小高武	同 同院屋橋美津濱内
港區芝白金三光町二七三(電丸ノ内一八一〇)	篠田實識	中央區日本橋江橋一ノ一七	加藤潤二	同 大坂市阿倍野區曙町通二ノ四四
千代田區平河町二ノ二七	篠田永之助	(杉並區下町井戸一ノ六)	川邊敏哉	同 京都市伏見區京町北八ノ七五(電伏見〇三〇二)
文京區湯島天神町二ノ一七(電小石川〇二〇九)	篠田正雄	世田谷區上馬町一ノ八二	後藤眞太郎	同 中京區先斗町五條下二ノ一五
同 湯島切通坂町一	紫田兼秋	中央區銀座六ノ四交詢ビル一階	杉田敏一	同 西宮市產所町五〇
中央區銀座八ノ四	清水孝祐	(西多摩郡古里村白丸)	高橋信之助	同 西宮市市中區榮町 丸豐百貨店美術部
台東區淺草公園五區六號(電淺草五九五〇)	清水八郎	新宿區下落合四ノ一九九五	高橋太郎	同 西宮市御茶家所町一
相生市末廣町二ノ一三三	神通傳二郎	文京區湯島天神町一ノ一〇〇	中村鐵	同 三重縣一志郡大三村八知山
大田區新井宿六ノ六六〇	島本德兵衛	世田谷區新町二ノ三七〇	西川武郎	京都美術商業組合名簿
南多摩郡日野町東大助七〇五五	堀入義治	中央區銀座西六ノ六	長谷川仁	下京區四條通柳馬場西入
杉並區高円寺三ノ二八九(電中野三三一六)	白石宇三	中央區銀座西六ノ三(電銀座六三三三)兜屋畫廊	原田利春	同 若宮通橋下上
新宿區四ツ谷一ノ二	橋本竹治	(世田谷區世田谷一ノ七五〇)世田谷三三三三	日笠賢	同 中京區深町通錦樂師上ル
杉並區高円寺一ノ四一 有限會社仲光辰辰役代表	廣田松繁	同 銀座西五ノ一(電銀座四四一八、二五五三)日動畫廊	廣瀬操吉	同 問之町通姉小路上ル
中央區日本橋通三ノ一(電日本橋四五七四)不孤齋	平尾榮	(品川區上大崎長者九二五五)	堀越震六	同 御幸町通御池南入
同 日本橋通三ノ五(電日本橋四五七三)藤中居 合資會社藤中居代表社員	守尾和	文京區駒込三ノ五(電銀座四九〇七)	松田隆文	同 東區淺草區通船小路上ル
品川區東中延二ノ四一七	森田時春	中央區銀座西六ノ一(電銀座二六三四)	三保義一	同 御幸町通船小路上ル
中央區寶町一ノ二(電京橋五三三三)	森岩吉	中央區銀座八ノ二(電銀座一八〇八)		同 御池通鳥丸東入
大田區久ヶ原町一七五	安太郎	(江東區深川佐賀町一ノ一〇)電深川〇四四一三味堂		同 御池通鳥丸東入
台東區谷中清水町一七		中野區上野宮一ノ四三八		同 御池通鳥丸東入
大田區南千束町二八一		同 上高田一ノ六六		同 東區淺草區通船小路上ル

同組合名簿による

中京區寺町通二條上ル  
下京區四條通小橋一四八  
東山區祇園町北側二四四  
中京區婦小路通御幸町西入  
下京區萬壽寺馬九東入  
中京區懸屋町通三條下ル  
同 櫻町通三條上ル  
下京區高辻通柳馬場西入  
中京區婦小路通寺町東入  
下京區懸屋町通四條南入  
中京區押小路通懸屋町東入  
東山區大和大路通新橋上ル  
中京區萬壽寺馬九町下ル  
同 柳馬場通三條南入  
同 寶小路通六角下ル  
同 鳥丸通四條上ル  
同 寶小路通押小路下ル  
同 御幸町通三條下ル  
同 新町通二條下ル  
同 新鳥丸通二條上ル  
東山區粟田口三條坊町一四  
中京區婦小路通寶小路西入  
東山區石門通大和大路東入  
同 祇園町南側  
中京區御幸町婦小路下ル  
東山區新門大和大路東中之町  
中京區東川通高倉東入  
同 三條通河原町東中島町  
同 婦小路通東洞院西入  
東山區新東門前東大路西柳本町  
右京區嵯峨小倉町  
中京區錦樂師通寶小路西入  
東山區新門前通梅本町  
中京區御馬場通六角上ル  
同 車屋町通御池上ル  
東山區古町前通大和大路東入

畫商一覽

高木彌三郎 中京區柳馬場通押小路上ル  
中井與之助 同 押小路通柳馬場東入  
奧田忠次郎 上京區衣櫛通丸太町上ル  
久保田福太郎 中京區東川道新町角  
服部多一郎 東山區 岡町南側五六七  
津田清太郎 中京區河原町通錦樂師下ル  
里見忠三郎 東山區東大路松原上ル三丁目  
武田信雄 中京區二條通寺町東入  
森壽美子 同 東洞院通押小路下ル  
三上榮次郎 東山區祇園町南側五七三  
林明之 中京區二條通御幸町東入  
橫山小八郎 同 六角通櫻町角  
中川重太郎 東山區四條通大和大路西入  
伊藤二郎 中京區懸屋町通押小路上ル  
竹內定助 同 柳馬場通三條上ル  
佐藤桂造 同 高倉通三條上ル  
柿谷勘造 東山區清水四ノ一四一  
藪本宗四郎 中京區懸屋町通三條上ル  
松岡丈吉 同 押小路通懸屋町西入  
梅田己之助 同 六角通室町西入  
山中合名會社 同 新鳥丸通東川上ル  
中西鶴之助 上京區衣笠金閣寺町六  
林俊一 中京區櫻町通押小路上ル  
西田善三 同 婦小路通木屋町西惠比須町  
奧山秀雄 同 東川通寶小路西入  
谷口秀雄 同 木屋町通御池上ル  
室信藏 同 寺町通二條上ル  
喜多虎雄 左京區下鴨西本町三一  
今井嘉市 中京區懸屋町通御池上ル  
今井健二 左京區淨土寺南田町七七  
橋村三次郎 同 下鴨本町二六  
竹內米造 中京區二條通御幸町西入  
鶴來美松 下京區新町通四條南入  
中尾育三 伏見區東大寺町七七三  
梅原喜一郎 中京區寶小路通婦小路下ル  
楠七兵衛 同 三條通寺町東入

山本成一 中京區懸屋町通押小路上ル  
齋藤万次郎 下京區四條通小橋東入  
北村三郎 中京區寺町通二條上ル  
林政次郎 東山區大和大路通古門前上ル  
河村源三郎 中京區櫻町通六角上ル  
水島善平 同 河原町通三條上ル  
平塚薰 上京區出水通堀川東入  
田中修 左京區三條通北裏白川筋東入  
增田豐三郎 中京區懸屋町通三條上ル  
井內源之助 同 寺町通御池下ル  
池田利一 左京區錦樂師山王町一八  
大森欣治郎 東山區山科西野今屋敷八六  
岡田太郎 中京區押小路通岡町東入  
奧山光雄 同 四條通西洞院東入  
高木恒造 下京區御幸町通松原下ル  
辻坂正一 中京區東洞院通二條下ル  
國井良雄 東山區大和大路四條上ル辨財天町  
山本友三郎 同 安井北通東大路西入  
山本正雄 中京區南營町通丸太町下ル  
松川龍 東山區祇園町南側五六二  
出途幸市 中京區懸屋町通三條北入  
平野久義 東山區今懸野南日吉町二  
守山寛一郎 中京區六角通新町西入  
中村忠教 同 寺町通二條上ル  
七里政之助 東山區三條通北裏白川筋東入  
白井凌三 同 清水三ノ三四六  
速水庄太郎 中京區寶小路通竹屋町下ル  
奧村金治 同 櫻町通御池上ル  
梅原久藏 同 新町通綾小路南入  
藪本新太郎 東山區古門前通大和大路東入  
前田薰 上京區平野島居前町四二  
小泉爲一 下京區六條通若宮西入  
小賀定次郎 東山區新門前大和大路東入  
淺野佳祐 中京區寺町通二條上ル  
三野恒吉 下京區松原通鳥丸東入  
西村春吉 左京區岡崎北御所町三三

神谷茂次郎  
矢野三藏  
川島卯一  
中村富一  
山本實  
今井金市  
服部兼次郎  
小川金三  
神山金治郎  
橫田正治郎  
吉澤宇之助  
瀧川久藏  
中川清之助  
桑田九郎  
山下達雄  
安田耕之助  
藤井秀雄  
小山菊太郎  
樋口源治  
長田哲造  
中野利助  
橋本重太郎  
久保田實  
熊谷友次郎  
山中貞夫  
山本松太郎  
宮前一二三  
今堀彦一  
原田康之助  
林新助商店  
林森太郎  
鳥居周次郎  
奧村誠一  
渡邊朗  
川上孝男  
高橋謙一

上京區一條通御前西入大東町	高津 梅次郎	中京區室町通錦師下九山伏山町	大 安 堂	東區伏見町高二ノ二四(電南三二四六)	琴竹堂	治村 竹次郎
東山區本町廿二丁目四九九	高野 義夫	下京區室町通錦師下九山伏山町	村田 孫太郎	同 三ノ一六	谷松屋	戸田 彌七
左京區仁王門通川端東入	竹內 富三郎	中京區室町通錦師下九山伏山町	福田 元永堂	同 伏見町三ノ二二(電南四九八、一九〇)	谷松屋	小田 榮作
同 淨土寺西田町一〇〇	津島 宗太郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	春 芳 堂	同 同 二六(電南一五五六)	谷松屋	太田 佐七
東山區東大路通七條上九	津島 宗太郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	坂口 德次郎	同 同 五ノ一	谷松屋	齋藤 熊春
同 下河原八坂鳥居前下九	中村 福三郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	水島 芳太郎	同 同 四	谷松屋	小田 昌男
同 東川區通南小路西下九	村川 三郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	水島 善太郎	同 同 一〇	谷松屋	井口 藤兵衛
上京區西三木本荒神口下九	山田 竹三郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	宮本 時雄	同 同 四ノ五五(電南三九四)	谷松屋	辻 梅 吉
中京區寺町通竹屋上九	山田 万五郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	善田 昌運堂	同 同 同 五五(電南〇五〇九)	谷松屋	曾羽 龜太郎
東山區新門前通大和路東松原町	山本 重助	下京區室町通錦師下九山伏山町	奧村 武三	同 同 同 五五(電南〇五〇九)	谷松屋	山中 盛夫
中京區寺町通丸太町下九	福丸 正太郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	植谷 昌三	同 同 同 五五(電南二八五四)	谷松屋	秋田 盛太郎
同 錦小路通油小路東入	藤林 東三郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	原田 益造	同 同 同 一三	谷松屋	田中 彦一
同 御通寺町西入	藤田 熊藏	下京區室町通錦師下九山伏山町	松井 治三郎	同 同 同 一八(電南二二七)	谷松屋	中野 政吉
上京區衣笠大橋町一ノ三	小賀 保三郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	松井 彌太郎	同 同 同 一八(電南二二七)	谷松屋	森本 良作
東山區三條通白川橋東三丁目東町	小池 重作	下京區室町通錦師下九山伏山町	島田 健二	同 同 同 一三	谷松屋	丸金園盛堂
中京區二條通豐町西入	淺田 嘉一郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	同組合名簿による	同 同 同 一三	谷松屋	瀧川 信一
東山區紙町北側二八一	淺田 三郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	水原 商店	同 同 同 一三	谷松屋	川口 弘
中京區馬場通四條上九	齋道 勝太郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	伊藤 榮三郎	同 同 同 一三	谷松屋	前田 源六
東山區紙町下河原上耕天町	澤村 茂	下京區室町通錦師下九山伏山町	岡田 文雄	同 同 同 一三	谷松屋	篠原 宇一
中京區三條通寺町西入	木村 榮吉	下京區室町通錦師下九山伏山町	砂 元 吉	同 同 同 一三	谷松屋	篠原 文二
同 夷川通櫻町東入	木村 治兵衛	下京區室町通錦師下九山伏山町	後藤 俊比古	同 同 同 一三	谷松屋	森口 秀雄
左京區北白川小倉町五〇の二三	南 啓三郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	小澤 龜三郎	同 同 同 一三	谷松屋	米田 邦造
下京區萬壽寺通同ノ町西入	柴田 又商店	下京區室町通錦師下九山伏山町	山中 吉太郎	同 同 同 一三	谷松屋	泉岡 善三郎
左京區東大路通三條上九	島田 佐七	下京區室町通錦師下九山伏山町	坂田 作治郎	同 同 同 一三	谷松屋	吉川 孝三
下京區南小路通高辻上九	久野 政夫	下京區室町通錦師下九山伏山町	井上 熊太郎	同 同 同 一三	谷松屋	飯堂 生太郎
中京區錦小路室町西入	炭永喜一郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	眞鍋 操四郎	同 同 同 一三	谷松屋	北村 清次
上京區小山下總町一六ノ三	小林 英二	下京區室町通錦師下九山伏山町	西村 吉次郎	同 同 同 一三	谷松屋	横内 定
東山區三條通北裏白川橋東入	井上 康弘	下京區室町通錦師下九山伏山町	白井 吉松	同 同 同 一三	谷松屋	青山 松太郎
中京區錦小路通櫻町東入	中澤 源之助	下京區室町通錦師下九山伏山町	同 同 同 一三	同 同 同 一三	谷松屋	田中 源之助
同 寺町通夷川下九	松尾 松之助	下京區室町通錦師下九山伏山町	同 同 同 一三	同 同 同 一三	谷松屋	福島 新一
下京區若宮通北小路上九	藤原 敏一	下京區室町通錦師下九山伏山町	同 同 同 一三	同 同 同 一三	谷松屋	
東山區古町前通大和路東入	佐海 喜一郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	同 同 同 一三	同 同 同 一三	谷松屋	
同 今般野南日吉町一八九	澤島 太助	下京區室町通錦師下九山伏山町	同 同 同 一三	同 同 同 一三	谷松屋	
下京區南小路通高辻上九	山本 理一郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	同 同 同 一三	同 同 同 一三	谷松屋	
同 標町通五條上九	岩越 勇太郎	下京區室町通錦師下九山伏山町	同 同 同 一三	同 同 同 一三	谷松屋	
左京區岡崎町靜寺町九ノ五七	太田 貞造	下京區室町通錦師下九山伏山町	同 同 同 一三	同 同 同 一三	谷松屋	



西成區天下基屋二ノ五三(電天下基屋二四四六) 百歐堂

同 旭北通八ノ六(電新町二〇六)

同 御通三ノ一五 新田帶蓋野內

同 阿倍野區阿倍野三ノ四八(電天王寺五〇四九)

同 阪南町西一ノ五九(電天王寺四二九)

同 相生通三ノ一

同 天王寺町二九二

同 松澤堂

同 昭和中一ノ二八

同 東四ノ三六

同 共立通二ノ六四

同 同 一〇九 中島福良方

同 北島東一ノ三八

同 天王寺區菜白山町七九(電天王寺一〇三二)とりのや

同 同 八〇(電天王寺一〇五一) 昭和堂

同 細工谷町一

同 同 七〇

同 同 北山町

同 同 二二

同 同 上砂町三ノ三

同 同 南玉造町二

同 東住吉區田邊東ノ町五ノ二〇

同 同 中野町三四七

同 同 平野通八ノ一四(電住吉四四三)

同 東成區大成通三ノ七(電南三七七五)

同 同 片江町二ノ六七

同 北區信保町一ノ三七(電堀川三五五)

同 同 河内町一ノ三〇

同 同 菅原町八九

同 同 老松町三ノ八

同 同 眞砂町一六

同 同 旭區森小路二ノ九二

同 同 新森小路中一ノ三〇

同 同 福島區玉川町二ノ四九

同 同 同上 福島南二ノ六〇

岡田新助

尾河源三

羽河治助

上田喜八郎

鳥居秀男

入江熊吉

高橋計一

大橋清次郎

堀川保太郎

山田直三郎

松浪敏治

北村長治郎

山下房次

松宮文明

三野道夫

細川秀次郎

樋口幾三郎

安田溢太郎

坪内市藏

磯橋勇

高橋源次

有村忠雄

藤井實

廣瀨治三郎

岸田光治

安井憲三

平岡英二

萬木芳之助

平野龍治

辻本謙二

尾崎彌太郎

藤原宗十郎

藤澤義廣

下和佐隆平

【大阪府之部】

堺市宿屋町東一ノ一

同 南旗籠町東三ノ三六

同 宿院町東一ノ一二

同 同 二九(電堺一三七六)

同 泉大津市南曾根四一 藤原マサ方

同 田中町一〇(電泉大津四八五)

同 旭町八三

同 岸和田市北町一五(電岸和田二一四)

同 作町七〇

同 堺町四四

同 貝塚市海堤町新四三〇

同 布師市荻屋一六八

同 吹田市東町一四三六 汽車會社吹田寄宿舍第二寮内

同 豐中市青通二ノ一一

同 森田二九三

同 櫻塚元町一ノ四八

同 同 二ノ六四

同 本通二ノ二三

同 池田市清壽美町六八〇ノ九

同 室町七番丁一〇一七ノ三三

【連絡所】

大阪市東區高麗橋五丁目倉田方(電土佐堀二二二)

同 泉南郡佐野町市邊段原八八

同 同 市場九四

同 信達町牧野

同 中河内郡天美町大字堀三三五

同 八尾町山本七四ノ一

同 同 大字東堀一六七

同 柏原町森脇町三九九

同 豐郡寶面村半町四三六

同 同 大字新堀七三三ノ一六

【兵庫縣之部】

神戶市垂水區西垂水町高丸九五二

同 玉津田中四四八

同 尼崎市生津字武庫莊二ノ三〇

秋月清

山中吉三郎

梅塚米三郎

荒木啓治郎

大谷昇太郎

松谷保

谷龜三

泉本徳三郎

氏原元一郎

沼川福松

北川松太郎

池島源次郎

田中淺一

金澤治三郎

角間直吉

岩崎幸次郎

林圭一郎

堀川重雄

河津政之助

圓井徳太郎

圓井徳太郎

淺野萬藏

泉藤吉

梶本尙美

淺野梅吉

津川義隆

植木昌三郎

伊東豊造

市田晴三郎

篠原秀三

半田三郎

筒井末吉

數本莊五郎

尼崎 市生津字武庫莊二ノ四七

同 西川字八幡二九

同 西ノ宮市甲子園口一八五ノ一

同 下新田甲子園口前二三八

同 下瓦林辨田四四二

同 高木稗田九

同 岸屋市松ノ内町一ノ一

同 同 二三

同 西岸屋町一九 南一郎方

同 伊勢町七四

同 三條南町九二

同 伊丹市忠田町三九

同 新伊丹(電伊丹二)

同 伊丹町二四二

同 武庫郡太山村岡本榮田八

同 同 野寄畑ケ田八七(電御影六二〇五)

同 住吉村反高區一八七六ノ二七

同 川邊郡川西町小花懸(電池田六二〇) 戸田政商店

同 長尾村中山寺字山ノ内五電寶塚七〇二

同 多田村矢間上ノ山

同 小濱村川面五反田一七ノ一

同 同 西向二ノ一

同 明石郡大久保町大窪一七九三

同 樺保郡龍野町北龍野四〇四

同 同 立野

同 有馬郡三田町三四(電三田三四四)

同 同 二九四

同 多額郡榎山町河原町一八九ノ一(電榎山二四九)

同 同 二九四

同 中京區真川通新町角(電上五〇二二)

同 二條通新町下ル(電上三一四八)

同 同 御幸町東入(電上二八五七)

同 同 寺町北入(電上五六五二)

同 同 東洞院南入

同 同 堀小路通難屋町東入(電上三四四七)

同 同 角(電上三三六六)

金澤福屋堂

池田商店

荻古堂

菅松治郎

西尾龍雄

片谷貞吉

古賀勝夫

福井悦三郎

福佳信吉

加藤小三郎

加賀隆一

西村龜太郎

松本與一

守口一義

藤井益次郎

淺野泰弘

砂壽治

戸田政之助

山下安次郎

北川正重

佐藤治郎兵衛

北貫二

福井正雄

今榮虎次郎

平松正司

小林定二郎

隅野忠雄

中西幸一

三光

林政次郎

松岡丈吉

池田利一

高木彌三郎

安田耕之助

林朋之

山本正雄



金澤市十間町四四 (電金澤四七八)

同 中町三四 (同同 四八五)

同 下松原町二六 (同同 二五六七)

同 下近江町五 (電同 八二二)

同 上松原町二九

石川縣江沼郡大聖寺町一本橋町一六

長岡市大手通二丁目 (電長岡九一〇)

同 城町四六五

【滋賀・東海地方之部】

滋賀縣蒲生郡八幡町大字般若屋町二八

岐阜市中竹屋町三三 (電岐阜五九七)

高山市神明町三ノ八二

同 本町一ノ三六 (電高山五一五)

名古屋市中區朝日町三ノ一〇

同 主税町二ノ二七 (電東八〇一七) 雅友堂

同 愛知縣和泉町一ノ一六 合名會社橫山商會代表

同 瑞穂區下山町二ノ三三 宇治久合名會社代表者

同 中區老松町一ノ一九

同 千種區坂下町一ノ一六

同 千種區田代町藤子殿七八

愛知縣愛知郡天日村八事寺岡山三五

同 (電名古屋瑞穂三三二九) 壽陽堂

同 知多郡旭村大字九之坪字西坂口三七

同 西春日井郡西春日大字九之坪字西坂口三七

同 合名會社 竹内百華堂代表

津市西町一八

桑名市西橋屋町一九八ノ一一

同 殿町九四四

【關東地方其他之部】

東京府港區赤坂町二ノ三

同 同 西久保巴町四一 (電芝〇六三三) 赤坂水戸幸

同 同 赤坂福吉町二

同 同 芝公園五號地二三 (電芝〇六二〇) 川分

同 同 同 株式會社川部商會 社長

同 同 同 株式會社川部商會 (電芝一〇七五)

同 同 同 合名會社本山商會代表者

同 同 同 同 淺谷區豐澤町二五

谷村 庄平

同 內山 豐男

同 窪田 興作

同 平澤 喜六

同 岡田 龜太郎

同 中越 與吉

同 堀井 誠作

同 堀井 征治

同 田中 慶一

同 橫山 得之助

同 村上 喜一郎

同 船坂 小次郎

同 伊藤 稔

同 石黒 勘一

同 橫山 五郎

同 野崎 久兵衛

同 近藤 鐵治

同 橫井 万太郎

同 味岡 由兵衛

同 三輪 藤十郎

同 伊藤 直三

同 竹內 義長

同 久住 恒三

同 水谷 勉

同 水谷 好木

同 吉田 孝太郎

同 竹內 善次

同 中島 文吾

同 大久保 健二

同 川部 利郎

同 平野 太郎

同 組田 賴之助

東京府中央區日本橋通三ノ一

同 杉並區下高井戸四ノ八四七

同 大田區田園調布二ノ八一七

同 大田區新井宿六ノ六六〇

同 世田谷區玉川奥澤町三ノ四

同 神奈川縣葉山町下山口

同 大船町山之内一三三〇 (電鎌倉三九七)

同 株式會社平山堂 代表者

東京府中央區銀座六ノ六 (電銀座三〇一三)

同 靜岡縣田方郡伊豆長岡町長岡一三〇一

同 (電伊豆長岡一七二) 水戸幸商店

同 同組合名簿による

名古屋美術商組合名簿

第一組

愛知縣知多郡旭村大字日長字地王谷一ノ七〇 萬喜

同 名古屋市中區東區一ノ二

同 瑞穂區下山町二ノ三三

同 中區坂下町五ノ六

同 三重縣鈴鹿市南若松町五四一 (電伊勢若松一)

同 名古屋市中區區坂下町一ノ一六

同 東區赤塚町二ノ二四

第二組

名古屋市中區朝日町三ノ一〇

同 愛知縣西春日井郡西春日大字九之坪字西坂口三七

同 名古屋市中區東區二ノ八

同 昭和區廣福町一ノ二二 (電瑞穂一四四) 饒屋

同 中區坂下町五ノ一四

第三組

岐阜市中區東區二ノ二八

同 上茶屋町一

同 新橋町二

同 名古屋市中區和泉町一ノ一六 (電本三三〇)

同 岐阜市中區中區三

同 第四組

一宮市上本町通五ノ四八

同 名古屋市中區區六町二ノ一 (電西二二二)

不孤齋 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

同 廣田 松繁

名古屋市中區區六町二ノ一

同 愛知縣中島郡祖父江町大字祖父江善光寺別院方

同 三重縣鈴鹿郡龜山町益倉三六

同 一宮市神山町三ノ一二

第五組

岐阜縣本巢郡文殊村字法林寺

同 山縣郡高宮町本町三丁目

同 端詰町二

同 高見町三 (電岐阜四四一)

同 同 同

第六組

名古屋市中區區田代町鹿子殿七八

同 中村區上飯島町一ノ四九

同 大垣市岐阜町一〇一六

同 岐阜市中區區一ノ一七

同 愛知縣中島郡都都町小信中島 寛方

同 名古屋市中區針屋町二ノ二三

同 愛知縣海部郡江町大字今字連下五二

同 名古屋市中區南大津通六ノ二〇

同 岡崎市井田町一ノ五六

同 名古屋市中區梅ヶ枝町三ノ一〇 (電東四四九四)

同 昭和區廣福通五ノ二五 山田別莊內

同 東區宮田町六七

同 岐阜縣瑞穂郡瑞穂村瑞和町

第八組

愛知縣東春日井郡味岡村字岩崎栗本富政方

同 名古屋市中區區下日置町三ノ一九

同 愛知縣愛知郡天日村大白村天白濱

同 大字八事寺岡山三五 (電瑞穂三三二九)

同 半田市朝日町名切一七

同 名古屋市中區區川澄町一ノ四

同 愛知縣中島郡祖父江町大字祖父江字松山一五五

同 岐阜市中區區松前町二ノ三五

同 名古屋市中區區矢島町一ノ三〇 (電岐阜七二二)

同 同 同

同 同 同

丸吉 前田 吉次郎

同 三輪 秀一

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀

同 森 秀



愛知縣中島郡森町花井方一〇〇一

岐阜縣羽島郡竹ノ島町川町二六七三

愛知縣春日井郡高森寺町字高森林一九二八

第十組

岐阜市長森細畑四二六柳原茂樹方(電岐阜三二一)

同 玉井町二 服部方

愛知縣羽島郡大瀬町十部

岐阜市大宮町一〇二三

同 敬明町二〇二

同 下芝屋町二七

愛知縣海部郡大瀬町字西赤土二

第十一組

桑名市出屋敷

三重縣四日市一富由一色本町五〇三

同 鈴鹿郡龜山町大字東町九七八

桑名市隈町三三

同 西矢田町一一九一

三重縣三重郡朝日村字小向七三一〇一

第十二組

愛知縣西春日井郡新川町須ヶ口三二〇早川別邸内

名古屋市中區東區主税町二〇一七

同 七小町七二

愛知縣西春日井郡新川町字旗本二二六二

名古屋市中區東區馬場町一〇五

同 東區手代町二〇一九

大垣市高橋町三〇一一

岐阜縣養老郡養老村大字白石

愛知縣西春日井郡桶村大字如意九一八

名古屋市中區岩井通三丁目

名古屋市中區東區片端町一〇四(電東四四四六)

半田市本町八

名古屋市中區日比津町一三五 近藤方

同 昭和區川原通八〇一

愛知縣知多郡富貴村大字富貴字北側二八

第十四組

河島 森 義 春

渡邊 儀三郎

廣瀬 一男

淺野 幾三郎

木頭 清一

杉浦 定彦

武藤 親光

山口 信雄

桂井 信助

鈴木 吉松

磯川 富三郎

梅本 服部 章三

仙 服部 仙松

水谷 好木

山中 與二郎

米田 長兵衛

雨森 宣彦

石黒 勘一

岩田 格太郎

前田 益夫

若山 直忠

宮田 一郎

村上 辨二

杉山 晋三郎

高島 三治

中川 宰平

新美 秋雄

柳田 晋次

安田 平兵衛

龜井 四四一

名古屋市中區中山町四〇五

愛知縣春日井郡守山町二軒家一三三

同 知多郡地村新獅子松園三三

三重縣鈴鹿市神戶石橋町五一二(電伊勢神戶三〇)

愛知縣西春日井郡學母町字天神二〇一

名古屋市中區區堂寺町字市場 安藤初太郎方

同 扇田町五

同 中區老松町一〇一九

同 西區柳切町八六九(電三八〇六)

同 昭和區村田町四〇七 四谷方

同 電見町三〇一八

第十六組

名古屋市中區東區東町二〇六

同 中區住吉町一〇二七

岐阜縣羽島郡笠松町新町四〇

名古屋市中區千種區山邊町一〇九八

岐阜市小瀬町一一

津島市後場町(電津島三一六)

金澤美術商組合名簿

【市内】

金澤市上今町八

同 中町三四

下近江町三

上今町一八

博愛町三二

上今町四七

十間町四四

安江町八五

下松原町二六

上松原町二七

尾張町一七

西町四番丁三

萬壽 牛田 最男

三正堂 岡田 正一

北島 北島 正三郎

西村 正夫

岡田 喜太郎

米市 安藤 鉦朗

山本 稻熊 太郎

米近 近藤 鎮治

中清 中村 定一

米英 横井 英一

北原 鎮一

石田 繁一

長谷繁 長谷川 祐之

長宜堂 三谷 一清

學治武 峯澤 武夫

若喜 若山 喜一郎

加藤 善之助

同組合名簿による

同 並木町一四

同 下石引町六五〇二

同 尾張町二

同 越中町八

同 十間町一九

乾 益次郎

内山 豊男

平澤 喜六

加藤 松太郎

松林 理助

松平 吉太郎

谷村 庄平

松澤 直作

窪田 與三

隅田 益次

伊藤 勝榮

宮腰 強次

金澤市十間町五三

同 産三四番丁通り

同 上松原町三八

同 上松原町三九

同 上今町一三

同 堀込町八

同 上新町八一

同 田丸町四

同 裏古寺町一三

同 博愛町五九〇一

同 木町三番丁一六

同 産三六番丁一〇八

同 産三一番丁一七

同 上傳馬町四〇二

同 上傳馬町四七

同 上松原町一〇

同 堅町四四

同 岩根町四〇

同 長町川岸七五〇一

同 象眼町七七

同 並木町一四

同 下石引町六五〇二

同 尾張町二

同 越中町八

同 十間町一九

同 小松市八日市町五〇

同 大文字町二三

同 大聖寺町一本橋一六

同 高岡市源平町二八

同 富山市三番町二九

同 小松市觀助町一八

同 松任町四日市町三五

同 大聖寺町寛町六四

石黒 久次郎

平澤 好榮

中山 榮三郎

坂井 銅昌

猪俣 直二

池内 宏二

岡本 嘉兵衛

岡田 外吉

岡部 良介

小川 忠治

和布浦 與市

大聖 吉宜

高橋 外吉

高辻 繁時

竹村 吉彦

中村 勝二

中川 與三郎

直江 七太郎

野村 利吉

松島 新太郎

松崎 外茂次

越田 他喜男

越田 他喜男

紺谷 憲太郎

神納 榮松

岩本 伊之松

岩谷 源二

中越 與吉

山田 榮次郎

神通 傳一郎

森岡 文次郎

西尾 一信

保賀 又次郎

高岡市上河原町一四  
 石川郡石川村字水島丁九四  
 大聖寺本町三三  
 山中町二一四  
 小松市西町  
 美川町九七一  
 富山市砂町  
 小松市八日市町七〇  
 美川町九五四ノ一  
 高岡市守山町四五  
 富山市中町二七  
 高岡市横田町二〇  
 小松市大文字町三七  
 高岡市鷺島町二三

岡本 外司  
 渡邊 一郎  
 梶 豊幸  
 角谷 榮次郎  
 魚谷 源一  
 山下 榮次郎  
 八川 善藏  
 松村 源二  
 藤田 所司  
 駒榮 善助  
 結城 辰三  
 柴野 善助  
 廣岡 外次郎  
 一間 彌三吉

美術家及美術關係者名簿

(昭和廿四年三月現在)



## 凡 例

一、本名簿にのせた美術家及美術関係者の数は一四四六名である。我が國に於て美術家として社會的地位を有する人々を採録した。最近住所の移動が甚しいため總べて個人並に關係團體へ新に問合せの上、返信のあつたもののみを掲載した。従つて不備の點もあると思うがそれは次年度に補いたる。

一、本名簿は氏名の頭文字の發音により五十音順に記載した。發音の同じ場合は字劃の少いものを先にし、頭文字の同じものは二字目の發音によりその發音の同じ場合は字劃の少いものを先にした。但し同字は訓音の異なるものなるべく一箇所に集めた。安宅、安達、安西、安藤等を同一箇所に掲げた如くである。

一、本名簿に用いた略語は大體左の通りである。

(日)日本畫 (洋)西洋畫 (挿)挿畫 (版)版畫 (漫)漫畫 (彫)彫塑  
(工)工藝 (漆)漆工藝 (陶)陶磁 (金)金工藝 (染)染織 (織)織物  
(繡)刺繡 (木)木工藝 (竹)竹工藝 (硝)硝子工藝 (圖)圖案 (建)  
建築 (學)學者 (批)美術批評家 (記)美術記者 (日展)日本美術展

覽會 (藝術院會員) 日本藝術院會員 (國寶委員) 國寶保存會委員

(重要美術委員) 重要美術品等調査委員會委員 (史蹟名勝委員) 史蹟名

勝天然記念物調査委員會委員 (東美校) 東京美術學校 (日美校) 日本

美術學校 (女美校) 女子美術學校・女子美術專門學校 (東京高工藝

校) 東京高等工藝學校・東京工業專門學校 (東京高工校) 東京高等

工業學校 (美術院) 日本美術院或は同研究所 (太平洋) 太平洋畫會研

究所或は太平洋美術學校 (川端校) 川端畫學校 (本郷研) 本郷繪畫研

究所 (葵橋研) 葵橋研究所 (京都美工校) 京都市立美術工藝學校

(京都繪專校) 京都市立繪畫專門學校・京都市立美術專門學校 (京都

高工藝校) 京都高等工藝學校・京都工業專門學校 (大阪美校) 大阪美

術學校 (信濃橋研) 信濃橋洋畫研究所 等

一、住所中東京都のみは都名を略して區名を以て始めた。

一、日展委員は第三回日展委員のみを輯録した。

「美術家及美術関係者名簿」 ページ (47～73 ページ)

個人情報保護のため非公開

Pages of the list of Artists and Experts in Art (pp.47-73)

Cut for protection of the personal information

美術關係定期刊行物一覽

現代美術關係

ア トリ	工月刊、北原鐵雄編輯、株式會社アルス發行、千代田區神田保町三ノ一、電九段二五七五、六
三 彩	月刊、藤本三郎編輯、美術出版社發行、新宿區市谷本村町一五、電九段三三六、二〇四三
自 由 美 術	中村直編輯、自由美術家協會發行、世田谷區玉川中町一ノ九二九
制 作	月刊、藤本三郎編輯、美術出版社發行、新宿區市谷本村町一五、電三三六、二〇四三
世 界 美 術	月刊、森谷均編輯、昭森社發行、千代田區神田保町一ノ三、電神田二二六七
創 作	月刊、伊藤光敏編輯、株式會社創美書院發行、品川區五反田四ノ一〇、電大崎四六六九
中 央 美 術	月刊、郡山三郎編輯、中央美術學園發行、杉並區善福寺町四八
美 術 之 手 帖	月刊、神谷清太郎編輯、美之國社發行、豊島區池袋二ノ一六八八
美 術 探 求	月刊、大下正男編輯、美術出版社發行、新宿區市谷本村町一五、電九段二〇四三、三三六
美 術	月刊、右二同ジ
美 術	月刊、藤波孝太郎編輯、美術探求社發行、大田區石川町九八

古美術關係

浮 世 繪 草 紙	月刊、吉田勝二編輯、高見澤木版社發行、台東區今中清水町一、電下谷三三四一
國 華 美 術	隔月、宮入松雄編輯、國華社發行、港區市兵衛町二ノ一、電赤坂一七五二
古 蹟 と 美 術	月刊、小池又一郎編輯、寶雲舎發行、中央區銀座四ノ二、聖壽館七、電京橋六五一、一〇〇八、六六八一
史 迹 と 美 術	月刊、川勝政太郎編輯、史迹美術同友會、京都市上京區東野下柳町一四、電西陣五九五六
天 平	季刊、池田小菊編輯、全國書房發行、京都市中京區御池通小路、電本局五五七四、三九三五
美 術 研 究	隔月、國立博物館美術研究所編輯、國立博物館發行、台東區上野公園、電下谷三〇〇六、一八〇〇、一九九〇

佛 教 文 化	季刊、佛教藝術學會編輯、每日新聞社發行、大阪堂島、東京有樂町
密 教 文 化	季刊、佐和隆編輯、高野山大學出版部發行、和歌山縣伊都郡高野山大學内
考 古 學 雜 誌	月刊、堀江知彦編輯、日本考古學會發行、中央區京橋二ノ一、吉川弘文館内

工  
藝

翰 林 工 藝	月刊、小野磐彦編輯、翰林出版株式會社發行、中央區日本橋橫山町十ノ三、兩國ビ
工 藝 學 會 誌「工 藝」	月刊、荒木道子編輯、博文社發行、中央區築地一ノ二二
工 藝 學 會 誌「工 藝」	月刊、西川友武編輯、財團法人工藝學會發行、港區臨海三河臺町二四、電赤坂一〇三四
日 本 美 術 工 藝	月刊、加藤義一郎編輯、日本美術工藝社發行、大阪市北區梅田阪急ビル内、電橋島三六二六
美 術 及 工 藝	月刊、正木重三郎編輯、日本美術及工藝品株式會社發行、中央區日本橋室町三越本店五階
工 藝 ニ ユ ー ス	商工省工藝指導所編輯、技術資料刊行會發行、千代田區神田駿河台二ノ九

建  
築

建 築 雜 誌	月刊、北村正雄編輯、日本建築學會發行、中央區銀座西三丁目一、電京橋一二三三、一二三八
建 築 文 化	月刊、田邊泰、服部勝吉編輯、彰國社發行、千代田區平河町二ノ一、九段二九三、二八五一

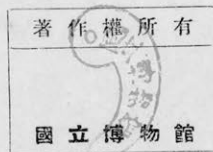
其  
の  
他

藝 藝 林 間	季刊、荻野修編輯、八雲書店發行、文京區森川町一一、電小石川一八五二
藝 藝 林 間	月刊、野口宇太郎編輯、東京出版株式會社發行、千代田區内幸町二ノ二、幸ビル内
藝 藝 林 間	月刊、後藤真太郎編輯、座右寶刊行會發行、港區山下落合四ノ一九九五
藝 藝 林 間	季刊、青山虎之助編輯、新生社發行、中央區江戶橋三ノ四、電日本橋三四七七
藝 藝 林 間	季刊、東洋協會學術調查部(文京區駒込上竇土前町四八、東洋文庫内和田清)編輯、國立書院發行、中央區銀座西五ノ五文壽堂ビル
藝 藝 林 間	月刊、藤田秀彌編輯、寶德社發行、奈良縣丹波市町川原城



昭和二十四年十二月二十五日印刷  
昭和二十四年十二月三十日發行

日本美術年鑑  
昭和十九、二十、二十一年版  
定價 一、五〇〇圓



編集者 國立博物館

代表者 高橋 誠一郎

發行者 大下 正男

印刷所 東京都千代田區神田錦町三ノ一  
大同印刷株式會社

發行所

東京都新宿區市谷本村町一五  
株式會社

美術出版社

電話九段三三六・二〇四三番